

原田第1・2・40・41号墓地 下巻

—— 原田駅前土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3 ——

筑紫野市文化財調査報告書

第90集



2006

筑紫野市教育委員会

原田第1・2・40・41号墓地 下卷

—— 原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3 ——

筑紫野市文化財調査報告書

第90集

2006

筑紫野市教育委員会

例 言

1. 本書は、筑紫野市施行原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和63年度から平成3年度にかけて筑紫野市教育委員会が実施した、原田第1・2・40・41号墓地の発掘調査報告書の第3弾であり、「原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3」にあたる。
2. 本書は、調査成果のうち出土遺物と人骨を主とした報告であり、書名を『原田1・2・40・41号墓地 下巻』とした。
3. 本書の内容は、既刊『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』・『同 中巻』と関連するものであり、一部重複する。
4. 本書の執筆は、第I～III章を森山栄一が、第IV章を中橋孝博氏・土肥直美氏が担当した。
5. 遺物のうち陶磁器については大橋康二氏の鑑定を受けた。
6. 義眼・眼鏡レンズについては鬼木信乃夫氏の鑑定を受けた。
7. 遺物の写真撮影は、主に（有）フォトハウスOKAが行い、一部森山が行った。
8. 遺物の実測は寺岡和子・中川真理子・森山および（有）遺跡整備計画が行い、その製図は（有）遺跡整備計画と森山が行った。
9. 人骨の鑑定は土肥・中橋両氏によるものであるが、頭髪については永田武明・林葉康彦両氏の鑑定を受けた。
10. 人骨の出土状態の写真撮影は森山が行った。
11. 人骨の出土状態の実測は、土肥・中橋両氏が大半を行い、両氏指導のもと一部森山が行った。また、その製図は、中橋氏指導のもと（株）EDCが行った。
12. 人骨出土状態の実測図で使用する方位は、磁北である。
13. 頁数は全体を通して付したが、第IV章の表・挿図・写真図版の番号は、第I～III章のものとは別に付した。
14. 第II・III章の挿図・表のタイトルには「原田」を省略しているが、目次には表記している。
15. 註釈および文献は、章毎でまとめた。
16. 本書の編集は、中橋・土肥両氏と協議のうえ、森山が行った。
17. 出土遺物は筑紫野市教育委員会に保管し、また出土人骨および頭髪は独立行政法人九州大学大学院比較社会文化研究院に保管されている。
18. 表紙の題字は田中範隆元市長（原田駅前土地区画整理事業施行代表者）によるものである。

序

筑紫野市教育委員会は、原田駅前土地区画整理事業に伴い、昭和63年度から平成12年度にかけて事業地内の埋蔵文化財発掘調査を実施して参りました。

本書は、そのうち昭和63年度から平成3年度にかけて実施した江戸・明治時代の墓地の調査成果の一部であり、「原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3」としてとりまとめたものです。

既に、「1」において原田第1・2・40・41号墓地の遺構とその『墓籍地図』・『墓籍』の報告を、また「2」においては同墓地の調査に伴って行った新たな調査（分析・考察）の報告を行っており、本書と併せて活用していただきたく存じます。

本書の作成にあたっては、専門的立場から多くの先生方より協力を賜りました。

一般的に敬遠されがちな江戸・明治時代の墓地出土の人骨と副葬品ではありますが、文化財の新たな視点として、専門的研究のみならず、広く市民の方々の学習の一助になれば幸いに存じます。

なお、人骨の調査にあたっては九州大学医学部の、また、陶磁器の調査では佐賀県立九州陶磁文化館の多大なるご指導とご協力をいただきました。ここに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

筑紫野市教育委員会

教育長 高 嶋 正 武

本文目次

第I章 調査の経過と組織	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の組織	2
第II章 遺物調査の内容	4
第1節 原田第1号墓地の遺物	4
1. 土葬墓の遺物	4
2. 蔵骨器	26
3. 胞衣容器	28
4. 表採遺物	31
第2節 原田第2号墓地の遺物	34
1. 土葬墓の遺物	34
2. 表採遺物	39
第3節 原田第40号墓地の遺物	41
1. 土葬墓の遺物	41
2. 火葬墓の遺物	71
3. 胞衣容器	72
4. 表採遺物	72
第4節 原田第41号墓地の遺物	82
1. 土葬墓の遺物	82
2. 蔵骨器	116
3. 胞衣容器	118
4. 表採遺物	125
第III章 原田第1・2・40・41号墓地の総括	165
第1節 陶磁器と漆器について	165
第2節 六道銭について	168
第3節 人骨調査について	172
第4節 墓の被葬者と年代について	175
第5節 墓形態の変遷について	190
第IV章 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨	195
第1節 遺跡と資料の概要	195
第2節 頭蓋骨の調査	197
第3節 四肢骨の調査	205

第 II・III 章 挿 図 目 次

第 1 図	原田第 1 号墓地第 1 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	4
第 2 図	原田第 1 号墓地第 2 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸) -----	5
第 3 図	原田第 1 号墓地第 4 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	6
第 4 図	原田第 1 号墓地第 5・6 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	7
第 5 図	原田第 1 号墓地第 7 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	7
第 6 図	原田第 1 号墓地第 7 号墓出土銭貨拓影図 (原寸) -----	8
第 7 図	原田第 1 号墓地第 9 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸) -----	9
第 8 図	原田第 1 号墓地第 11・12 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	10
第 9 図	原田第 1 号墓地第 18 号墓出土銭貨拓影図 (原寸)・第 21 号墓出土遺物実測図 (S=1/9) ---	12
第 10 図	原田第 1 号墓地第 22 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	13
第 11 図	原田第 1 号墓地第 23 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	14
第 12 図	原田第 1 号墓地第 27 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	15
第 13 図	原田第 1 号墓地第 27 号墓出土銭貨拓影図 (原寸) -----	16
第 14 図	原田第 1 号墓地第 31 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	17
第 15 図	原田第 1 号墓地第 32 号墓出土遺物実測図 (S=1/9) -----	18
第 16 図	原田第 1 号墓地第 33 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	19
第 17 図	原田第 1 号墓地第 33・34 号墓出土銭貨拓影図 (原寸) -----	20
第 18 図	原田第 1 号墓地第 35 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸) -----	20
第 19 図	原田第 1 号墓地第 38 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	21
第 20 図	原田第 1 号墓地第 39 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	22
第 21 図	原田第 1 号墓地第 41 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸) -----	23
第 22 図	原田第 1 号墓地第 55 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・原寸) -----	25
第 23 図	原田第 1 号墓地出土蔵骨器・墨書片実測図 (S=1/3) -----	27
第 24 図	原田第 1 号墓地出土袍衣容器実測図 (S=1/3) -----	30
第 25 図	原田第 1 号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3) -----	31
第 26 図	原田第 2 号墓地第 1 号墓出土遺物実測図 (S=1/9)・銭貨拓影図 (原寸) -----	34
第 27 図	原田第 2 号墓地第 2 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸) -----	35
第 28 図	原田第 2 号墓地第 3 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸) -----	36
第 29 図	原田第 2 号墓地第 4 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸) -----	37
第 30 図	原田第 2 号墓地第 5 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸) -----	38
第 31 図	原田第 2 号墓地第 6 号墓出土銭貨拓影図 (原寸) -----	39
第 32 図	原田第 2 号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3) -----	39
第 33 図	原田第 40 号墓地第 2 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	41
第 34 図	原田第 40 号墓地第 7 号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	42
第 35 図	原田第 40 号墓地第 15・17~19 号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸) -----	43
第 36 図	原田第 40 号墓地第 21 号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	44
第 37 図	原田第 40 号墓地第 22 号墓出土銭貨拓影図 (原寸)・遺物実測図 (S=1/3) -----	45
第 38 図	原田第 40 号墓地第 23 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	46
第 39 図	原田第 40 号墓地第 24 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	46
第 40 図	原田第 40 号墓地第 25 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	47
第 41 図	原田第 40 号墓地第 1 号壺棺出土遺物実測図 (S=1/6・1/3) -----	47
第 42 図	原田第 40 号墓地第 26 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	47
第 43 図	原田第 40 号墓地第 27 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	48
第 44 図	原田第 40 号墓地第 28 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	49
第 45 図	原田第 40 号墓地第 29 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	50
第 46 図	原田第 40 号墓地第 30・32 号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	50
第 47 図	原田第 40 号墓地第 34 号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	51
第 48 図	原田第 40 号墓地第 35 号墓出土銭貨拓影図 (原寸) -----	51
第 49 図	原田第 40 号墓地第 36 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	52
第 50 図	原田第 40 号墓地第 37 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	53
第 51 図	原田第 40 号墓地第 38 号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸) -----	53

第52図	原田第40号墓地第39号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	54
第53図	原田第40号墓地第40~42号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	55
第54図	原田第40号墓地第43号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	56
第55図	原田第40号墓地第44号墓出土遺物実測図 (S=1/3・1/9) -----	56
第56図	原田第40号墓地第46号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	57
第57図	原田第40号墓地第47・52・55号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	58
第58図	原田第40号墓地第56号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	59
第59図	原田第40号墓地第59・60号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	60
第60図	原田第40号墓地第61号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	61
第61図	原田第40号墓地第64号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	61
第62図	原田第40号墓地第67・69号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	62
第63図	原田第40号墓地第71号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	63
第64図	原田第40号墓地第72・73号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	64
第65図	原田第40号墓地第74号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	65
第66図	原田第40号墓地第75号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	66
第67図	原田第40号墓地第76号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	67
第68図	原田第40号墓地第77号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	67
第69図	原田第40号墓地第78・79号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	68
第70図	原田第40号墓地第81号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	69
第71図	原田第40号墓地第82・83号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	69
第72図	原田第40号墓地第84号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・錢貨拓影図 (原寸) -----	70
第73図	原田第40号墓地出土胎衣容器実測図 (S=1/3) -----	72
第74図	原田第40号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3)① -----	74
第75図	原田第40号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3)② -----	76
第76図	原田第40号墓地表面採集錢貨拓影図 (原寸) -----	77
第77図	原田第41号墓地第1号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	82
第78図	原田第41号墓地第3~5号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	84
第79図	原田第41号墓地第6号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	85
第80図	原田第41号墓地第7・8号墓出土遺物実測図 (S=1/9)・錢貨拓影図 (原寸) -----	86
第81図	原田第41号墓地第9・10号墓出土遺物実測図 (S=1/9)・錢貨拓影図 (原寸) -----	87
第82図	原田第41号墓地第11・12・16・17・19号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸) -----	89
第83図	原田第41号墓地第20号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	90
第84図	原田第41号墓地第22・23号墓出土遺物実測図 (S=1/3・1/9) -----	91
第85図	原田第41号墓地第24号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	91
第86図	原田第41号墓地第27号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3) -----	92
第87図	原田第41号墓地第28号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	93
第88図	原田第41号墓地第29~32号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸) -----	94
第89図	原田第41号墓地第36号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	95
第90図	原田第41号墓地第37号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	96
第91図	原田第41号墓地第40号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	97
第92図	原田第41号墓地第44号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	98
第93図	原田第41号墓地第45号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	98
第94図	原田第41号墓地第47・48号墓出土遺物実測図 (S=1/9) -----	99
第95図	原田第41号墓地第49号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	99
第96図	原田第41号墓地第51・52号墓出土遺物実測図 (S=1/9・原寸) -----	100
第97図	原田第41号墓地第53号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	101
第98図	原田第41号墓地第55号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	102
第99図	原田第41号墓地第56・57号墓出土遺物実測図 (S=1/9) -----	102
第100図	原田第41号墓地第58号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)・錢貨拓影図 (原寸) -----	103
第101図	原田第41号墓地第59号墓出土遺物実測図① (原寸・S=1/3) -----	105
第102図	原田第41号墓地第59号墓出土遺物実測図② (原寸) -----	107
第103図	原田第41号墓地第59号墓出土遺物実測図③ (原寸) -----	108

第104図	原田第41号墓地第59号墓出土遺物実測図④ (原寸) -----	109
第105図	原田第41号墓地第59号墓出土錢貨拓影図 (原寸) -----	110
第106図	原田第41号墓地第60号墓出土遺物実測図 (原寸) -----	110
第107図	原田第41号墓地第61号墓出土遺物実測図 (S=1/3) -----	110
第108図	原田第41号墓地第66号墓出土遺物実測図 (S=1/9) -----	111
第109図	原田第41号墓地第68号墓出土錢貨拓影図 (原寸) -----	112
第110図	原田第41号墓地第69号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・錢貨拓影図 (原寸) -----	112
第111図	原田第41号墓地第75・76号墓出土遺物実測図 (S=1/9) -----	113
第112図	原田第41号墓地第78号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・錢貨拓影図 (原寸) -----	115
第113図	原田第41号墓地出土蔵骨器実測図 (S=1/6・1/3) -----	117
第114図	原田第41号墓地出土朧衣容器実測図① (S=1/3) -----	118
第115図	原田第41号墓地出土朧衣容器実測図② (S=1/3) -----	121
第116図	原田第41号墓地出土朧衣容器実測図③ (S=1/3) -----	123
第117図	原田第41号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3) -----	127
第118図	副葬磁器器種別比率グラフ -----	166
第119図	六道銭の組合せと墓形態との対比図 -----	171
第120図	原田第40号墓地第25号墓・第1号壺棺実測図 (S=1/30)・第14号墓石実測図 (S=1/10) -----	174
第121図	死亡年・陶磁器・六道銭による棺形態消長図 -----	191
第122図	原田第1・2・40・41号墓地墓形態変遷図 (縮尺任意) -----	192

第 II・III 章 表 目 次

第 1 表	原田第 1 号墓地出土数珠玉一覧表 -----	32
第 2 表	原田第 1 号墓地出土錢貨一覧表 -----	33
第 3 表	原田第 2 号墓地出土数珠玉一覧表 -----	40
第 4 表	原田第 2 号墓地出土錢貨一覧表 -----	40
第 5 表	原田第40号墓地表面採集土師器皿寸法一覧表 -----	77
第 6 表	原田第40号墓地出土数珠玉一覧表① -----	77
第 7 表	原田第40号墓地出土数珠玉一覧表② -----	78
第 8 表	原田第40号墓地出土錢貨一覧表① -----	79
第 9 表	原田第40号墓地出土錢貨一覧表② -----	80
第10表	原田第40号墓地出土錢貨一覧表③ -----	81
第11表	原田第41号墓地第59号墓出土土製おはじき一覧表 -----	106
第12表	原田第41号墓地第60号墓出土植物実寸法一覧表 -----	110
第13表	原田第41号墓地出土数珠玉一覧表 -----	128
第14表	原田第41号墓地出土錢貨一覧表① -----	129
第15表	原田第41号墓地出土錢貨一覧表② -----	130
第16表	副葬陶磁器内訳表 -----	165
第17表	陶磁器副葬土葬墓内訳表 -----	167
第18表	墓形態別陶磁器副葬率一覧表 -----	167
第19表	漆膜出土土葬墓一覧表 -----	168
第20表	六道銭の内訳と墓形態 -----	169
第21表	頭髮残存人骨一覧表 -----	173
第22表	被葬者・埋葬年代一覧表① -----	175
第23表	被葬者・埋葬年代一覧表② -----	176
第24表	被葬者・埋葬年代組合せ内訳表 -----	177
第25表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表① -----	178~179
第26表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表② -----	180~181
第27表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表③ -----	182~183
第28表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表④ -----	184~185
第29表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表⑤ -----	186~187
第30表	墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表⑥ -----	188~189

第 II・III 章 写真図版目次

図版 1	原田第 1 号墓地	甕 -----	131
図版 2	原田第 1 号墓地	碗・小坏 -----	132
図版 3	原田第 1 号墓地	碗・蓋・小坏・皿 -----	133
図版 4	原田第 1 号墓地	蔵骨器・胞衣容器 -----	134
図版 5	原田第 2 号墓地	甕・碗・皿 -----	135
図版 6	原田第 2・40号墓地	皿・壺・甕・胞衣容器 -----	136
図版 7	原田第 40号墓地	碗・火入れ -----	137
図版 8	原田第 40号墓地	小坏・碗・猪口 -----	138
図版 9	原田第 40号墓地	碗・小坏 -----	139
図版 10	原田第 40号墓地	碗・小坏・猪口 -----	140
図版 11	原田第 40号墓地	皿・仏飯器 -----	141
図版 12	原田第 40号墓地	蓋・瓶 -----	142
図版 13	原田第 40号墓地	甕・皿 -----	143
図版 14	原田第 40号墓地	皿・灯火具 -----	144
図版 15	原田第 41号墓地	甕 -----	145
図版 16	原田第 41号墓地	甕 -----	146
図版 17	原田第 41号墓地	碗・鉢・猪口 -----	147
図版 18	原田第 41号墓地	小坏・蓋・皿 -----	148
図版 19	原田第 41号墓地	瓶・甕・壺・蔵骨器・胞衣容器 -----	149
図版 20	原田第 41号墓地	胞衣容器 -----	150
図版 21	原田第 1・2・40・41号墓地	玉類 -----	151
図版 22	原田第 1・40号墓地	煙管 -----	152
図版 23	原田第 1・40・41号墓地	煙管・櫛・柄 -----	153
図版 24	原田第 1・2・40・41号墓地	毛抜き・鋏・鈴 -----	154
図版 25	原田第 1・40・41号墓地	かんざし -----	155
図版 26	原田第 1・2号墓地	人形 -----	156
図版 27	原田第 1・41号墓地	人形・おはじき・釦・ハゼ -----	157
図版 28	原田第 1・40・41号墓地	青銅製品・皮革製品 -----	158
図版 29	原田第 1・41号墓地	皮革製品・青銅製品・ゴム製品 -----	159
図版 30	原田第 41号墓地	玩具・鉄製品 -----	160
図版 31	原田第 40号墓地	鉄製縁金具・青銅製縁金具 -----	161
図版 32	原田第 1・40・41号墓地	火打ち金・石・ローソク・義歯・義眼・眼鏡レンズ -----	162
図版 33	原田第 1・41号墓地	文字資料 -----	163
図版 34	原田第 41号墓地	文字資料 -----	164

第 IV 章 挿 図 目 次

第 1 図	頭長幅示数の比較 (男)	200
第 2 図	頭長幅示数の比較 (女)	200
第 3 図	上顔高 (M48) と頬骨弓幅 (M45) (男)	200
第 4 図	上顔高 (M48) と頬骨弓幅 (M45) (女)	200
第 5 図	頭蓋 9 項目による Q モード 相関係数 (男)	201
第 6 図	Penrose の形態距離 (男性頭蓋・9 項目)	201
第 7 図	Penrose の形態距離	202
第 8 図	現代西南日本人骨を基準にした偏差折線 (男性)	202
第 9 図	主成分分析 (男性・顔面 8 項目)	203
第 10 図	上顔高	203
第 11 図	主成分分析 (男性・頭蓋 9 項目)	203
第 12 図	ペンロースの距離でみた性差 (頭蓋 9 項目)	204
第 13 図	鼻骨平坦示数の時代変化	204
第 14 図	上腕骨計測値の比較 (男性)	206
第 15 図	上腕骨計測値の比較 (女性)	206
第 16 図	尺骨計測値の比較 (男性)	207
第 17 図	尺骨計測値の比較 (女性)	207
第 18 図	橈骨計測値の比較 (男性)	208
第 19 図	橈骨計測値の比較 (女性)	208
第 20 図	大腿骨計測値の比較 (男性)	210
第 21 図	大腿骨計測値の比較 (女性)	210
第 22 図	大腿骨体中央断面示数	211
第 23 図	脛骨計測値の比較 (男性)	212
第 24 図	脛骨計測値の比較 (女性)	212
第 25 図	脛骨栄養孔位断面示数	212
第 26 図	腓骨計測値の比較 (男性)	213
第 27 図	腓骨計測値の比較 (女性)	213
第 28 図	橈骨・上腕骨示数	214
第 29 図	脛骨・大腿骨示数	214
第 30 図	上腕骨最小周・大腿骨体周	214
第 31 図	身長の比較	215
第 32 図	主成分分析 (男性)	216
第 33 図	主成分分析 (女性)	216
第 34 図	原田第 1 号墓地第 2・4・7・8・11 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	221
第 35 図	原田第 1 号墓地第 13・14・23・24 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	222
第 36 図	原田第 1 号墓地第 25・26・27・28 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	223
第 37 図	原田第 1 号墓地第 29・30・31・33 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	224
第 38 図	原田第 1 号墓地第 34・35・36・39 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	225
第 39 図	原田第 1 号墓地第 40・41・43・44・46 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	226
第 40 図	原田第 1 号墓地第 49・50・54・55・58 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	227
第 41 図	原田第 2 号墓地第 2・3・4・5・10 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	228
第 42 図	原田第 40 号墓地第 1・2・4・5 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	229
第 43 図	原田第 40 号墓地第 6・8・9・10 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	230
第 44 図	原田第 40 号墓地第 11・13・14・16 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	231
第 45 図	原田第 40 号墓地第 17・18・19・21 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	232
第 46 図	原田第 40 号墓地第 22・23・25・27 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	233
第 47 図	原田第 40 号墓地第 26・28・29・30 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	234
第 48 図	原田第 40 号墓地第 33・34・35・36 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	235
第 49 図	原田第 40 号墓地第 37・38・39・41 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	236
第 50 図	原田第 40 号墓地第 44・49・52・59・61・64 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	237
第 51 図	原田第 40 号墓地第 71・72・73・74 号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)	238

第52図	原田第40号墓地第75・78・83・84号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	239
第53図	原田第41号墓地第1・2・3・6号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	240
第54図	原田第41号墓地第7・8・9・10号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	241
第55図	原田第41号墓地第11・12・16・17号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	242
第56図	原田第41号墓地第18・19・20・21号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	243
第57図	原田第41号墓地第22・23・24・26号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	244
第58図	原田第41号墓地第27・28・29・31号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	245
第59図	原田第41号墓地第33・34・35・36号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	246
第60図	原田第41号墓地第37・38・39・40号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	247
第61図	原田第41号墓地第41・42・43・44号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	248
第62図	原田第41号墓地第47・48・49・51号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	249
第63図	原田第41号墓地第52・53・54・55号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	250
第64図	原田第41号墓地第56・57・58・59号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	251
第65図	原田第41号墓地第60・61・62・63号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	252
第66図	原田第41号墓地第64・68・69・70号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	253
第67図	原田第41号墓地第73・74・75・76・78号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10) -----	254

第 IV 章 表 目 次

第 1 表	原田第 1・2・40・41号墓地出土人骨 -----	196
第 2 表	性・年齢構成 -----	197
第 3 表	原田第 1・2・40・41号墓地出土の近世人頭蓋骨の計測結果 -----	198
第 4 表	主要頭蓋計測値の比較 (男性) -----	199
第 5 表	主要頭蓋計測値の比較 (女性) -----	199
第 6 表	上肢骨計測値 -----	205
第 7 表	上腕骨計測値の比較 (男性) -----	206
第 8 表	上腕骨計測値の比較 (女性) -----	206
第 9 表	尺骨計測値の比較 (男性) -----	207
第10表	尺骨計測値の比較 (女性) -----	207
第11表	橈骨計測値の比較 (男性) -----	208
第12表	橈骨計測値の比較 (女性) -----	208
第13表	下肢骨計測値 -----	209
第14表	大腿骨計測値の比較 (男性) -----	210
第15表	大腿骨計測値の比較 (女性) -----	210
第16表	脛骨計測値の比較 (男性) -----	211
第17表	脛骨計測値の比較 (女性) -----	211
第18表	腓骨計測値の比較 (男性) -----	212
第19表	腓骨計測値の比較 (女性) -----	213
第20表	四肢骨示数の比較 (男性) -----	213
第21表	四肢骨示数の比較 (女性) -----	213
第22表	推定身長 -----	215
第23表	身長と比較 -----	215

第 IV 章 写 真 図 版 目 次

図版 1	原田第41号墓地 男性 頭蓋上・正・側面 -----	219
図版 2	原田第41号墓地 女性 頭蓋上・正・側面 -----	220
図版 3	原田第 1 号墓地 人骨出土状態① -----	255
図版 4	原田第 1 号墓地 人骨出土状態② -----	256
図版 5	原田第 1 号墓地 人骨出土状態③ -----	257
図版 6	原田第 1 号墓地 人骨出土状態④ -----	258
図版 7	原田第 1 号墓地 人骨出土状態⑤ -----	259

函版 8	原田第 1 号墓地	人骨出土状态⑥	-----	260
函版 9	原田第 1 号墓地	人骨出土状态⑦	-----	261
函版10	原田第 2 号墓地	人骨出土状态	-----	262
函版11	原田第40号墓地	人骨出土状态①	-----	263
函版12	原田第40号墓地	人骨出土状态②	-----	264
函版13	原田第40号墓地	人骨出土状态③	-----	265
函版14	原田第40号墓地	人骨出土状态④	-----	266
函版15	原田第40号墓地	人骨出土状态⑤	-----	267
函版16	原田第40号墓地	人骨出土状态⑥	-----	268
函版17	原田第40号墓地	人骨出土状态⑦	-----	269
函版18	原田第40号墓地	人骨出土状态⑧	-----	270
函版19	原田第41号墓地	人骨出土状态①	-----	271
函版20	原田第41号墓地	人骨出土状态②	-----	272
函版21	原田第41号墓地	人骨出土状态③	-----	273
函版22	原田第41号墓地	人骨出土状态④	-----	274
函版23	原田第41号墓地	人骨出土状态⑤	-----	275
函版24	原田第41号墓地	人骨出土状态⑥	-----	276
函版25	原田第41号墓地	人骨出土状态⑦	-----	277
函版26	原田第41号墓地	人骨出土状态⑧	-----	278
函版27	原田第41号墓地	人骨出土状态⑨	-----	279
函版28	原田第41号墓地	人骨出土状态⑩	-----	280
函版29	原田第41号墓地	人骨出土状态⑪	-----	281

第 I 章 調査の経過と組織

第 1 節 調査の経過

昭和63年度から平成3年度にかけて発掘調査した原田第1・2・40・41号墓地の調査成果は、平成15年度に『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』(文1)を、平成16年度に『同 中巻』(文2)として2冊の報告書を刊行した。

『上巻』の内容は遺構の調査成果を主とし、関連資料として4ヵ所の『墓籍地図』・『墓籍』の調査成果も併せて掲載した。

『中巻』では特殊資料として「墓石の法・戒名」・「墓石の石材」・「六道銭」・「六道銭の材質」・「義歯」・「墓籍の全て」についての分析・考察を主とした調査を外部の専門家に依頼し(註1)、その報告文6本を掲載した。

本書『下巻』は、これまで整理・分析が長引いていた出土遺物と人骨の調査成果を報告したものである。

出土遺物は多種多様であり、そのうち六道銭については櫻木晋一氏が、その材質については比佐陽一郎氏が、『中巻』で報告している(文3・4)。また、義歯についても長岡英一・伴清治・馬嶋秀行諸氏による鑑定結果を『中巻』に掲載している(文5)。

なお、陶磁器については、平成5年3月と平成17年11月の2回、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に鑑定を依頼し、その結果を本書にて報告している。

人骨は、その多くが改葬を受けていながらも、予想以上に良好な状態で残存していた。このため現場における形質人類学の調査・取り上げが必要となり、平成1年度に九州大学医学部に対し「原田地区における近世墓地群出土人骨の調査・研究」を委託した。検出した人骨は4箇所の墓地で計174体を数え、当時九州大学医学部第2解剖学講座の土肥・中橋両氏によって現地における人骨の出土状態の実測図(縮尺1/5)作成および取り上げ作業が下記の期間行われた。

原田第1号墓地 平成3年4～7月

原田第2号墓地 平成2年12月

原田第40号墓地 平成1年6～10月

原田第41号墓地 平成1年4～9月

取り上げた人骨は全て同教室に運ばれ、両氏を中心として整理・分析が行われた。その後学内の機構改革に伴い、人骨は同大学院比較社会文化研究院に移され中橋氏のもとで調査研究が行われた。なお、土肥氏は平成3年12月より琉球大学医学部へ異動されたが、引き続き当資料の調査研究に携ってもらった。

また、頭髪が伴っており、近縁関係検索のための血液検査、および遺族が自分の髻を断髪して死者に副葬する民俗例の検証のための毛根・断髪痕の精密検査を、九州大学医学部法医学教室永田武明氏および福岡県警察科学捜査研究所林葉康彦氏に依頼した。

第2節 調査の組織

本書の調査・報告に伴う調査組織は、下記の通りである。

発掘調査（昭和63年度～平成3年度）

総括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	永瀨正敏
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課長	川原孝之（～平成2年度） 竹田征治（平成3年度）
		文化財担当係長	山野洋一
		文化財担当技師	森山栄一
調査	筑紫野市教育委員会	文化財担当技師	森山栄一
	九州大学医学部法医学教室教授		永田武明
	解剖学第2講座		土肥直美 中橋孝博
	福岡県警察科学捜査研究所法医科		林葉康彦

報告書作成（平成17・18年度、平成18年度より文化振興課に改称）

総括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	高嶋正武
庶務	筑紫野市教育委員会	教育部長	香野国治（平成17年度） 松尾和幸（平成18年度）
		文化財課長	米元和夫（平成17年度）
		文化振興課長	高石俊幸（平成18年度）
		文化財課長補佐	満生裕亮（文化財担当係長）
		文化財課主任主査	野美山勝（～平成17年6月）
調査	筑紫野市教育委員会	文化財担当技師	森山栄一
	九州大学大学院比較社会文化研究院	教授	中橋孝博
	琉球大学医学部解剖学第1分野	助教授	土肥直美
	佐賀県立九州陶磁文化館	副館長	大橋康二
	太宰府市教育委員会文化財課	主任主査	山村信榮
	鬼木眼科医院		鬼木信乃夫
	下関市立大学経済学部	教授	櫻木晋一
	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科	教授	長岡英一

原田駅前文化財調査指導委員会（平成16年3月31日付で解散）

前委員	歴史学	近藤典二
前委員	考古学	小田富士雄
前委員	民俗学	佐々木哲哉
前委員	人類学	永井昌文（故人）
前委員	美術史学	西村強三
前委員	建築学	宮本雅明

調査関係者

室内補助員（遺物実測）

寺岡和子 中川真理子

室内作業員（報告書作成）

浅谷芳江 加藤美智子 榎原貴久子 松尾敦子 山内めぐみ 芳野和代（平成17年度）

浅谷芳江 金子江理子 西村真美 水戸明子 山崎洋子 山田朝恵（平成18年度）

民間（委託業務）

(株) EDC（人骨出土状態実測図の製図）

(有) 遺跡整備計画（遺物実測、遺物実測図の製図）

フォトハウスOKA（遺物の写真撮影・現像）

註 釈

1. 『墓籍』の全ての内容調査は当教育委員会が行った。

文 献

1. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 一原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告1ー』 筑紫野市文化財調査報告書第77集 2003
2. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 中巻 一原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2ー』 筑紫野市文化財調査報告書第79集 2004
3. 櫻木晋一 「原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭」 文献2 27～55頁
4. 比佐陽一郎 「原田第1・2・40・41号墓地出土銅銭の材質調査について」 文献2 56～69頁
5. 長岡英一・伴清治・馬嶋秀行 「原田第1・2・40・41号墓地出土義歯に関する報告」 文献2 70～82頁

第Ⅱ章 遺物調査の内容

第1節 原田第1号墓地の遺物

原田第1号墓地（以下「第1号墓地」という）においては、発掘調査した土葬墓52基（第3・15号墓は改葬壙の可能性有り）のうち48基から遺物が出土した。また、蔵骨器4点、胞衣容器あるいは胞衣容器と思われる容器7点が出土した。他に表採遺物9点を図化した。

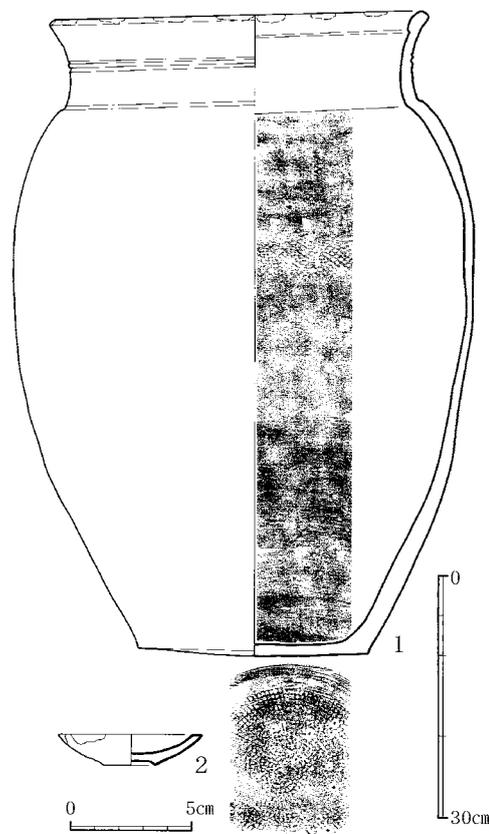
1. 土葬墓の遺物（第1～25図、第1・2表）

第1号墓（第1図、図版1・3）

墓壙内から棺甕1点・紅皿1点が出土した。

第1図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高77.8～79.0cm・口径46.4cm・頸径41.8cm・胴径56.2cm・底径28.0cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に2条の沈線を施している。明褐灰色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。

第1図2は、19世紀の肥前系白磁紅皿である。型押し成形で、裏文様は型による蛸唐草文である。完形品で、器高1.3cm・口径5.9cm・底径2.1cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。



第1図 第1号墓地第1号墓出土遺物実測図（S=1/9・1/3）

第2号墓（第2図、図版1・23・32）

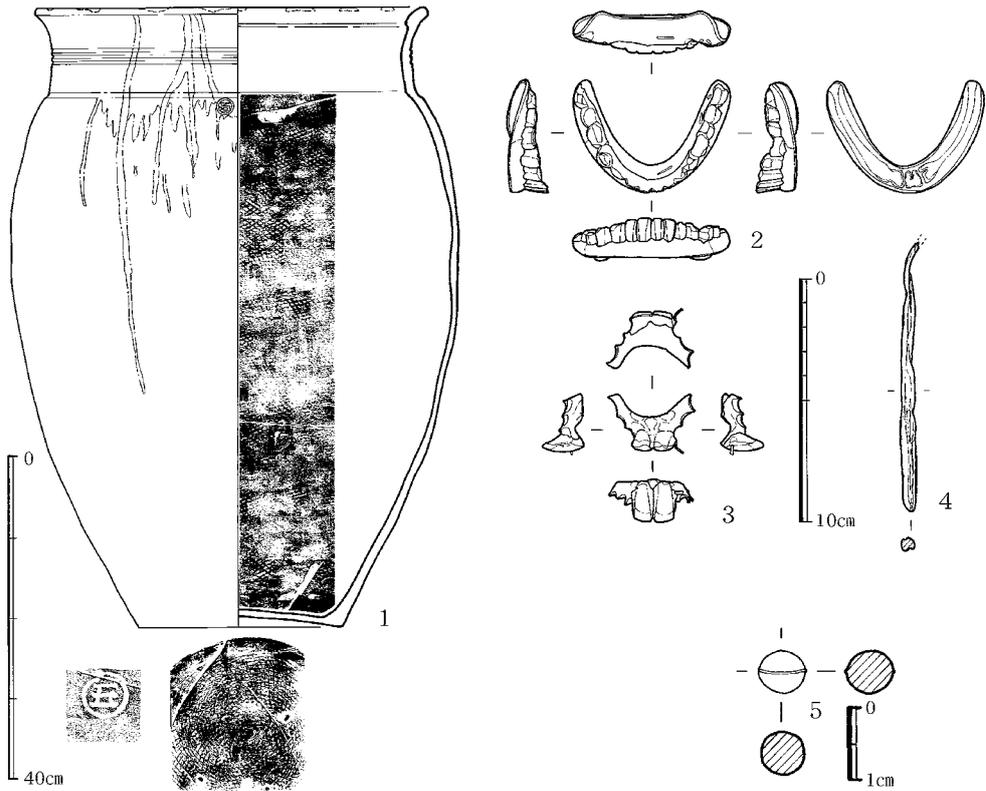
墓壙内から棺甕1点・釘5本が、棺内から義歯2点（註1）・木製柄1点・玉1点・筆入れ1点・皮革製品片1点が出土した。

第2図1は、17世紀後半～18世紀の肥前産陶器甕である。器高75.7cm・口径48.0cm・頸径43.9cm・胴径54.5cm・底径24.7cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。浅黄灰色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。胴部外面上位に「五」の刻印が施されている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。

第2図2は、明治時代以降のゴム製の下顎総義歯である。人工歯は15本分あり、お歯黒を模して全て黒色を呈している。義歯床部の左右幅約6.5cm・前後長約4.5cmを測る。総重量は、13.8gを計る。

第2図3は、明治時代以降のゴム製の上顎部分床義歯である。左右中切歯2本の部分床義歯であり、重さは2.38gを計る。2と同様、人工歯は黒色を呈している。

第2図4は、植物質の棒状品であるが、木か竹か不明である。萎縮して細くなっており、残存



第2図 第1号墓地第2号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸)

長11.0cm・最大径0.65cm・最小径0.22cmを測る。図化できなかったが共伴した断面楕円形の筒型容器から、筆の柄とも考えられるが、断定できない。

第2図5は、プラスチック製丸玉である。黒色を呈し、直径0.55～0.60cmを測る。

釘は、鉄製の丸釘である。長さ2.5cm程であり、細い。

第3号墓 (図無し)

墓壙内から釘が3本出土した。全て鉄製の丸釘であり、頭部は直径0.5cmの円形を呈している。長さは最長で3.5cmを測る。

第4号墓 (第3図、図版24)

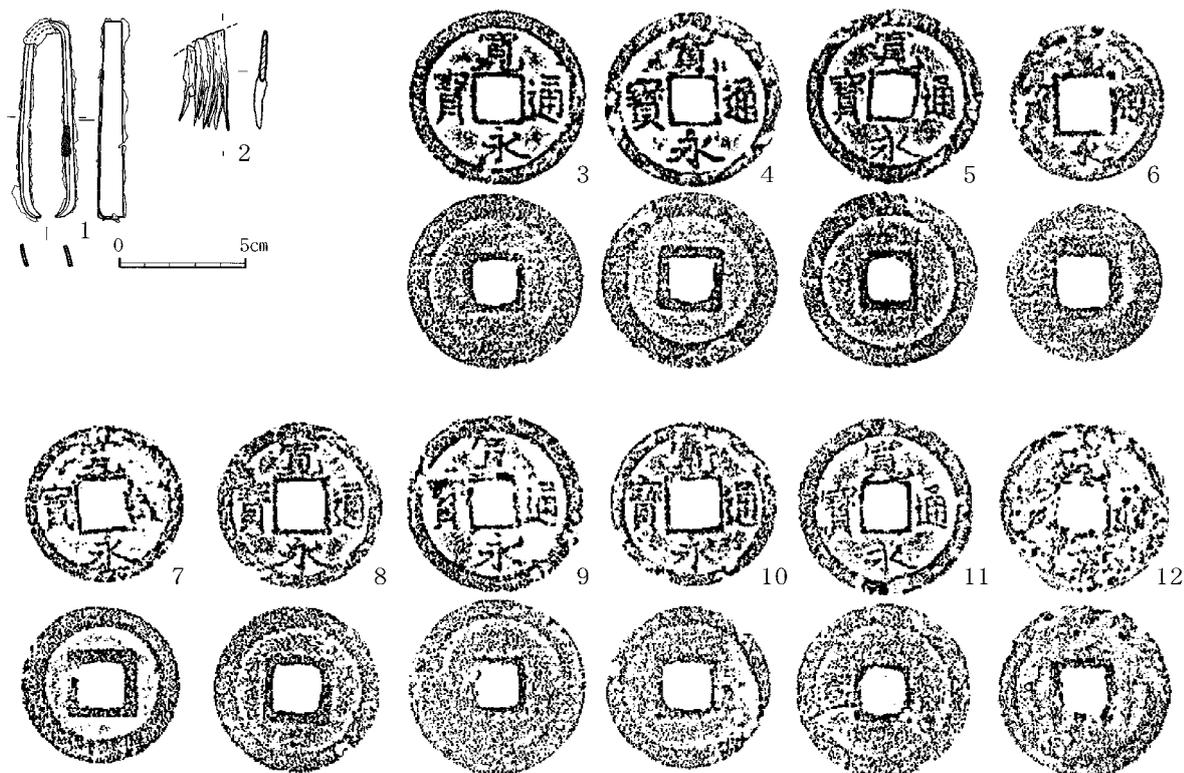
正方形縦棺と思われる棺内から毛抜き1点・銭10枚(註2)・漆膜2点が、墓壙内から櫛片1点・釘4本・木片数点が出土した。

第3図1は、鉄製毛抜きであり、全長7.8cm・幅0.75～0.95cm・厚さ0.1～0.15cmを測る。一部に布らしき痕跡が見られる。

第3図2は、木製横櫛の破片であり、萎縮している。残存長4.0cm・幅2.0cm・背幅0.2cmを測る。歯は、7本残っている。

第3図3～12は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、4は古寛永、5～12は新寛永である。

表面朱色の漆膜は棺内2個所に出土しており、木製漆器が2点以上副葬されていたと思われる



第3図 第1号墓地第4号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

る。

釘は、全て鉄製の丸釘であり、直径0.1～0.15cm・長さ2.5～3.5cmを測る。

第5号墓 (第4図1、図版1)

墓壇内から棺甕1点が、棺内から粉殻が出土した。

第4図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高77.1～77.8cm・口径46.7cm・頸径42.8cm・胴径54.3cm・底径25.1cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を(斜?)格子目文叩きの後ナデ、底部内面を(斜?)格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。明赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面18個所に目跡が残っている。

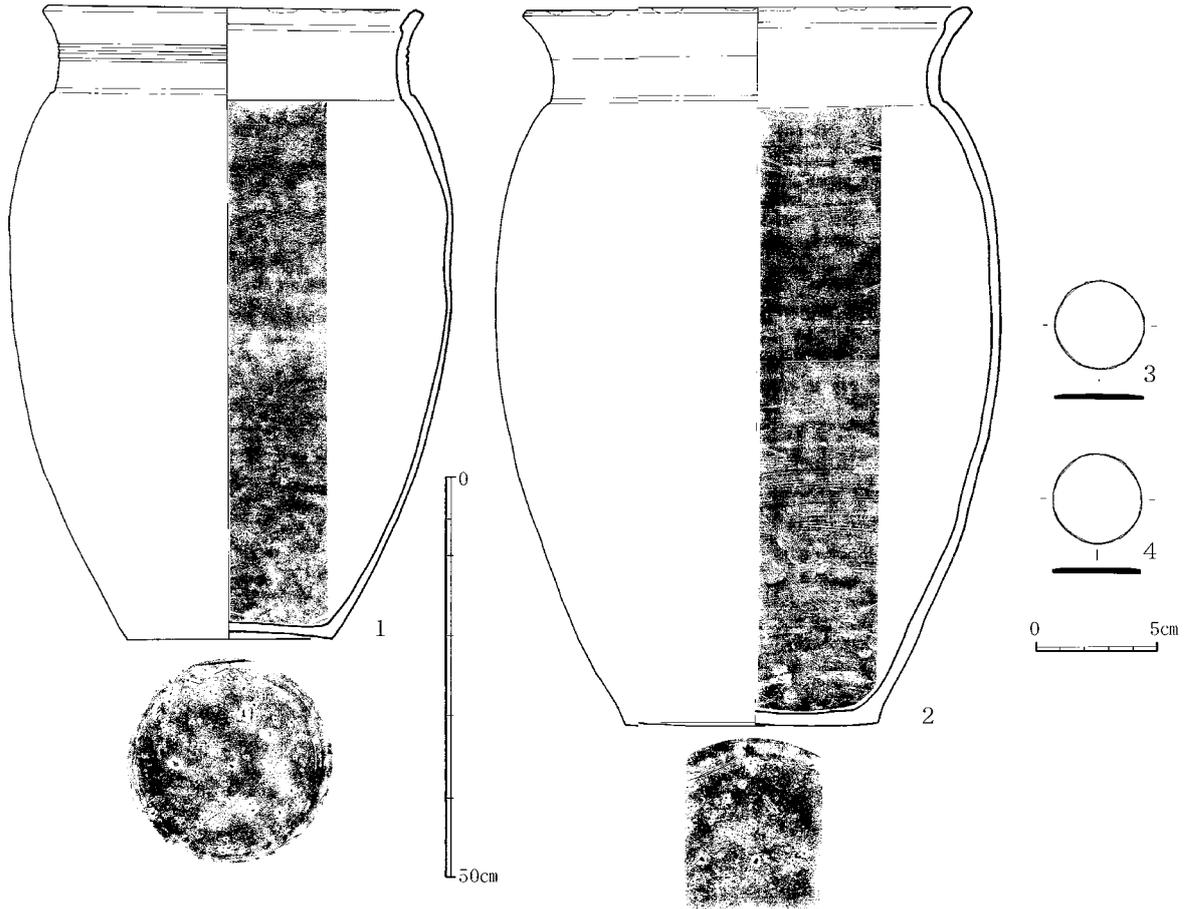
甕棺の中からやや灰化した粉殻が出土しており、おそらく被葬者の棺内での安定を計るために詰められたものと思われる。

第6号墓 (第4図2～4、図版1・32)

墓壇内から棺甕1点・釘4本が、棺内からレンズ2枚・皮革(?)片3点が出土した。

第4図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高88.1～88.5cm・口径54.0cm・頸径46.4cm・胴径61.2cm・底径30.6cmを測る。調整は、胴部内外面とも叩きの後ナデ仕上げ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段がある。赤灰色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面19個所に目跡が残っている。

第4図3・4は透明の眼鏡レンズで、セットと思われる。どちらも片面凸型である。3は直



第4図 第1号墓地第5・6号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

径3.7cm・最大厚0.27cmで、4は直径3.65~3.7cm・最大厚0.27cmを測る。どちらも度数は+3.25であり(註3)、遠視の近見用レンズである。

釘は、全て鉄製の丸釘である。

皮革片は確かなものではなく、やや厚手の布の可能性もある。

第7号墓 (第5・6図、図版24・28)

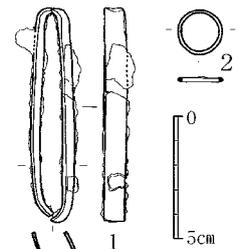
短い長方形横棺から毛抜き1点・リング1点・銭6枚・漆膜2点以上・木片1点が、墓壙内から釘13本が出土した。

第5図1は鉄製の毛抜きであり、全長8.2cm・幅0.8~0.9cm・厚さ0.15~0.2cmを測る。

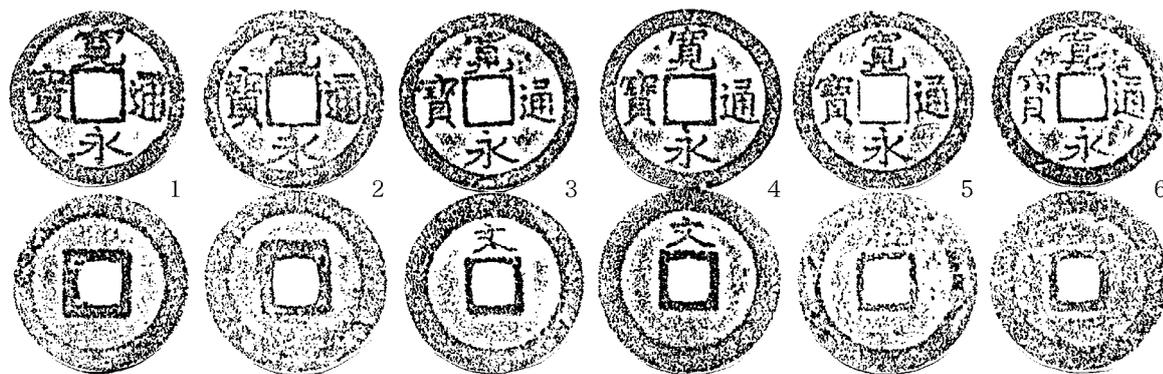
第5図2は銅製のリングであり、外径1.8~1.85cm・厚さ(直径)0.187cmを測る。全体に緑青が付着している。

第6図1~6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は古寛永、3・4は文銭、5・6は新寛永である。3・4の背面には「文」字が、5の背面には「左」字が鋳出している。

表面朱色の漆膜が被葬者の胸元付近2・3個所で出土している。そのうちの1個所のものは漆膜が複数重なっており、あるいは木製漆器を重ねて副葬



第5図 第1号墓地第7号墓出土遺物実測図 (S=1/3)



第6図 第1号墓地第7号墓出土銭貨拓影図（原寸）

していたものかもしれない。

釘は、鉄製であるが、角釘か丸釘かは不明である。

第8号墓（図無し）

墓壙内から釘が100本以上出土した。全て鉄製の角釘であり、長さは3.5～4.0cmである。

第9号墓（第7図、図版1・26・27・29・32）

墓壙内から棺襖1点・釘2本が、棺内から義眼1点・毬2点・靴1足・人形1点・足袋ハゼ2枚・植物質塊1点が出土した。

第7図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高57.2～57.4cm・口径37.3cm・頸径34.8cm・胴径40.8cm・底径23.8cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に沈線状の鈍い段がある。また、胴部上位に3条の沈線が、胴部中～下位に3～4条の螺旋状沈線が施されている。淡黄色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面14個所に目跡が残っている。

第7図2は、ガラス製の義眼である。長さ1.8cm・幅1.2cm・厚さ0.15cmを測る。凹面の内側に黒色で瞳が描かれている。周縁は打ち欠かれており、生身の眼球に装着するにはかなりの痛みが伴うと思われる、あるいは埋葬に際して装着されたものかもしれない。

第7図3・4はゴム製の毬であり、どちらも萎縮して変形・硬化している。

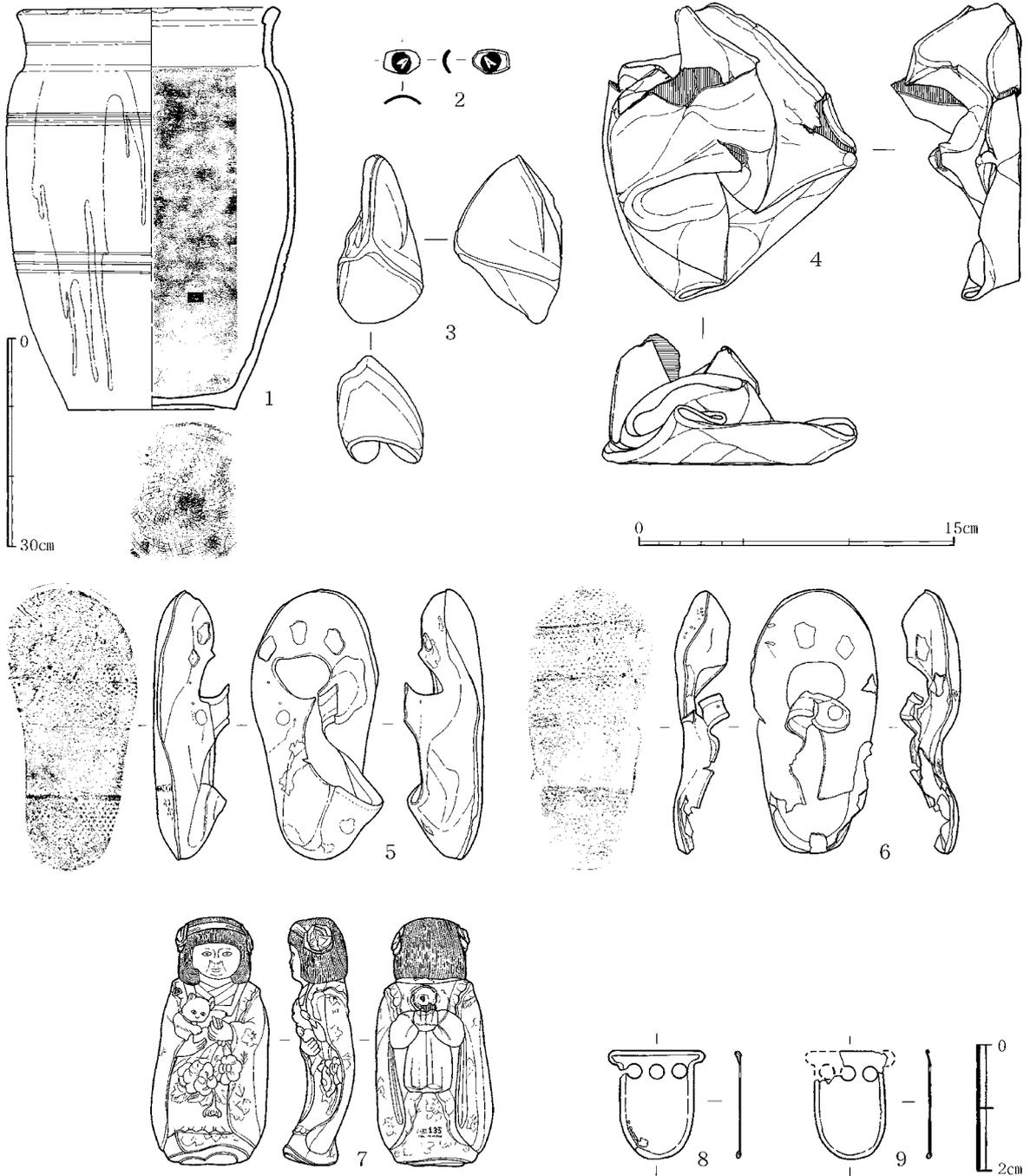
3は、現状長8.0cm・幅4.1cm・高さ5.1cmを測る。おそらくテニスボール程の大きさと思われる。

4は、現状長14.2cm・幅12.1cm・高さ6.2cmを測り、3よりはかなり大きいものである。

第7図5・6は、1足のゴム製の靴である。色は、赤色系統と思われる。どちらからも足の骨は検出されておらず、本靴は副葬品と考える。

5は、左足用で、全長12.9cm・最大幅6.0cm・踵部の高さ3.5cmを測る。甲部前方に方形枠が3つ並び、左側にはベルト留めの丸玉が1つ付いている。

6は、右足用で、全長12.6cm・最大幅6.0cmを測り、踵部は欠損している。甲部前方に方形枠が3つ並び、右側にはベルト留めの丸玉が1つ付いている。



第7図 第1号墓地第9号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸)

第7図7は、プラスチック製の人形である。猫を抱いた和服に前掛け姿の少女をかたどっているが、現状は萎縮して硬化している。背中に留め金具らしきものが付いているが、用途不明である。また、和服後ろの裾近くに、上段「□□□135」・下段「□ADEINJAPAN」(Mか)と刻印されている。

第7図8・9は、銅製と思われる足袋ハゼである。同一規格と思われる、上位に円形の穴を3つ設け、縁は折り重ねて肥厚させている。

8は、全長1.7cm・最大幅1.5cm・厚さ0.05cm以下である。

9は、全長1.7cm・残存幅1.15cm・厚さ0.05cm以下である。

釘は、全て鉄製の丸釘であり、直径約0.15cm・長さは3.0cm以上である。わずか2本だけの出土であり、棺が甕であることを考え合わせると、甕蓋に使用された釘と思われる。

棺内出土の植物質のものは詳細は不明であるが、被葬者の安定を図るための棺内の詰め物と考えるが、定かではない。

第10号墓（図無し）

正方形縦棺と思われる棺内から籾殻が、墓壙内から釘50本以上が出土した。

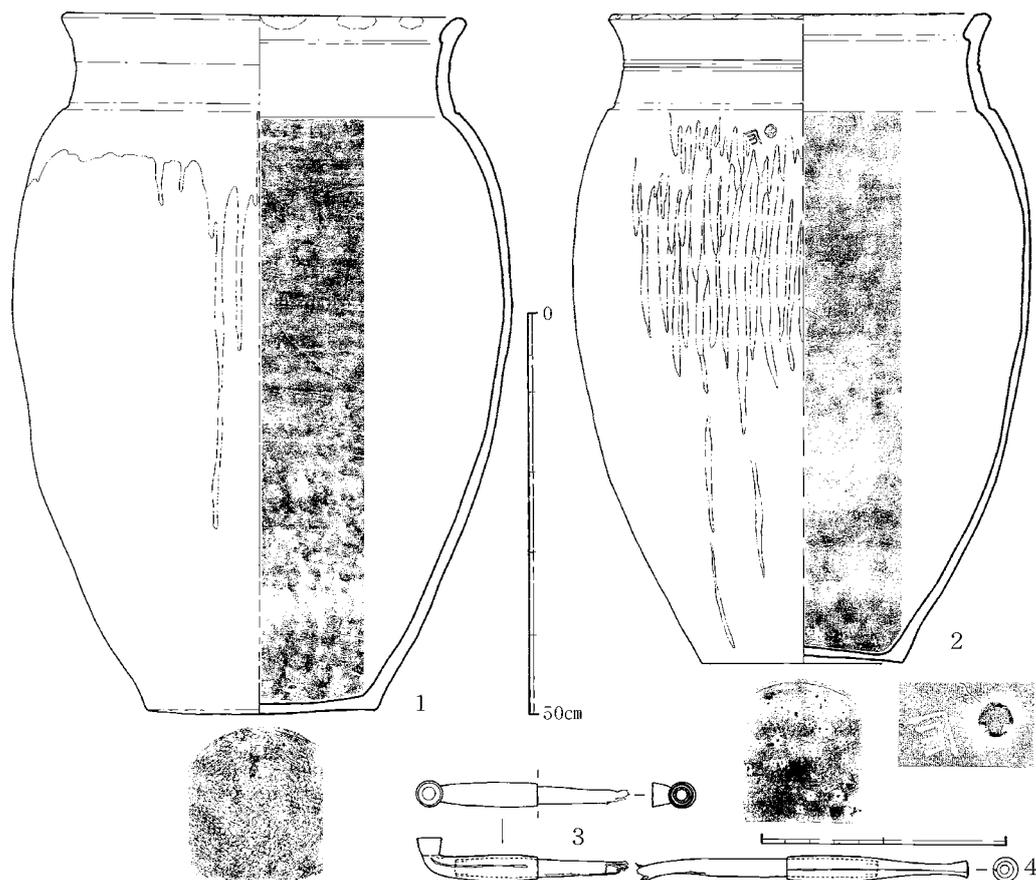
籾殻は、棺内の詰め物と思われる。

釘は、全て鉄製の角釘であり、最も長いもので長さ5.5cmを測る。

第11号墓（第8図1、図版1）

墓壙内から棺甕1点・釘11本が出土した。

第8図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高85.4～86.0cm口径49.6cm・頸径45.6cm・胴径61.2cm・底径27.9cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段がある。鈍い赤橙色～黄灰色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。



第8図 第1号墓地第11・12号墓出土遺物実測図（S=1/9・1/3）

釘は、全て鉄製の丸釘であり、直径0.2～0.3cmを測る。長さ4.0cm前後のものが多いが、7.0cmを超えるものもある。数量少なく、棺が甕であることを考え合わせると、甕蓋に使用されたものと思われる。

第12号墓（第8図2～4、図版1・22）

墓壙内から棺甕1点が、棺内から煙管1点・植物質のものが出土した。

第8図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高79.6cm・口径46.8cm・頸径43.6cm・胴径56.0cm・底径24.6cmを測る。調整は、胴部外面を（斜）格子目文叩きの後ナデ仕上げ、内面を叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中に2条の沈線を施している。胴部外面上位に「ヨ」の刻印と円形浮文が付されている。橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面19個所に目跡が残っている。

第8図3・4は、一对の羅宇煙管である。雁首と吸口は銅製と思われ、羅宇は竹製である。雁首と吸口には接合痕が見られる。

3は、雁首と羅宇の一部であり、残存長8.65cmを測る。雁首は、長さ4.9cm・小口径0.9cm・胴最大径1.05cmを測る。火皿は、直径1.05cm・高さ0.7cmを測る。羅宇は、最大径0.8cmで、雁首に3.4cm入っている。

4は、吸口と羅宇の一部であり、残存長13.5cmを測る。吸口は、長さ7.4cm・吸口径0.7cm・小口径0.9cm・胴最大径1.05cmを測る。羅宇は、最大径0.8cmで、吸口に3.7cm入っている。

3・4合わせた復原長は、21cm程であろう。

棺内から出土した植物質のものは詳細不明であるが、棺内の詰め物と思われる。

第13号墓（図無し）

墓壙内から釘10本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長いもので長さ6.5cmを測る。正方形縦棺に使用した釘にしては数量が少ない感がある。

第14号墓（図無し）

墓壙内から釘50本以上が出土した。全て鉄製の丸釘であり、直径0.1～0.2cmを測る。長さ4.0cmのものが多い。

第15号墓（図無し）

墓壙内からガラス製管が入ったガラス瓶1点・釘25本程が出土した。ガラス製管とガラス瓶は、所在不明となり、図化できなかった。

釘は、全て鉄製の丸釘である。直径0.1～0.2cm・長さ3.5～4.0cmを測る。本墓の棺形態は不明であるが、鉄釘の数量と墓壙規模からして、小型の木製箱棺と思われる。

第16号墓（図無し）

墓壙内から釘60本以上が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0～4.5cmのものが多いが、長いものでは長さ7.8cmのものもある。

第17号墓（図無し）

墓壙内から鉄製品1点・炭化木1点が出土した。

鉄製品は、断面長方形（0.9×0.4cm）を呈する小片であり、残存長2.7cmを測る。端部は尖った形態を呈し、中は空洞である。鉄器の茎に似るが、断定できない。

炭化木は、加工された木材が火を受けて炭化したものである。断面長方形（5.0×3.5cm）・残存長10.3cmの角材の一端部を直径3.3cm・厚さ1.0cmの円柱に削り出したものである。

第18号墓（第9図1～4）

正方形縦棺内から銭6枚が、墓壙内から釘3～5本が出土した。

第9図1～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、2は古寛永、1・3は新寛永、4は文銭である。4の背面には、「文」字が鑄出している。なお、図化できなかったが、鉄銭2枚も相伴している。

釘は、全て鉄製の角釘であり、最も長いもので長さ8.0cm以上を測る。正方形縦棺に使用された釘としては著しく少数である。

第21号墓（第9図5、図版1）

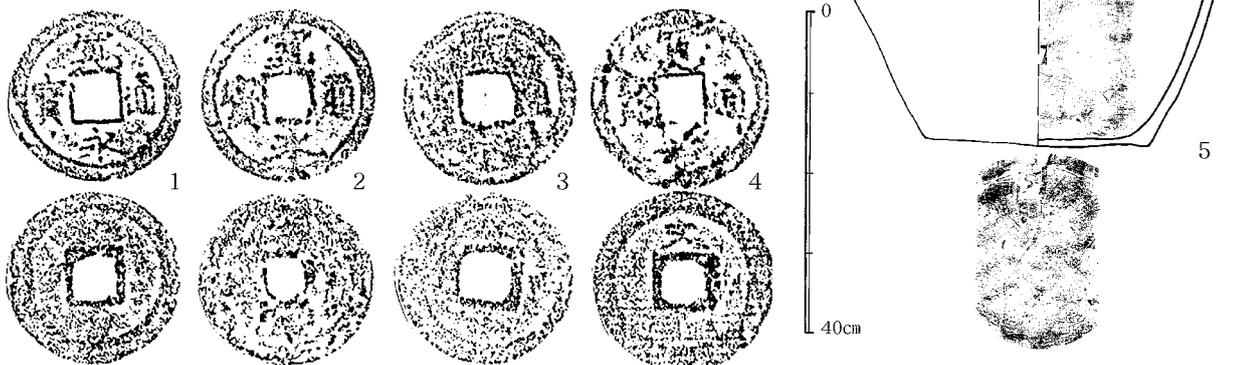
墓壙内から棺甕1点が、棺内から釘2～3本・多量の木葉・木片1点が出土した。

第9図5は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高73.5～75.2cm・口径45.6cm・頸径41.1cm・胴径54.2cm・底径27.5cmを測る。調整は、胴部内外面とも叩きの後ナデ仕上げ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段がある。黄灰色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さは4.0～7.0cmである。数量の少なさから、甕蓋に使用されたものと思われる。

多量の木葉は、棺内の詰め物と考える。

木片は、節の部分であり、楕円形の約1/4の形態を呈している。長さ4.0cm・幅3.5cm・厚さ0.2～0.5cmを測る。



第9図 第1号墓地第18号墓出土銭貨拓影図（原寸）・第21号墓出土遺物実測図（S=1/9）

第22号墓（第10図、図版2・3）

墓壙底面から碗1点・皿1点・銭6枚が、墓壙内から釘100本程が出土した。

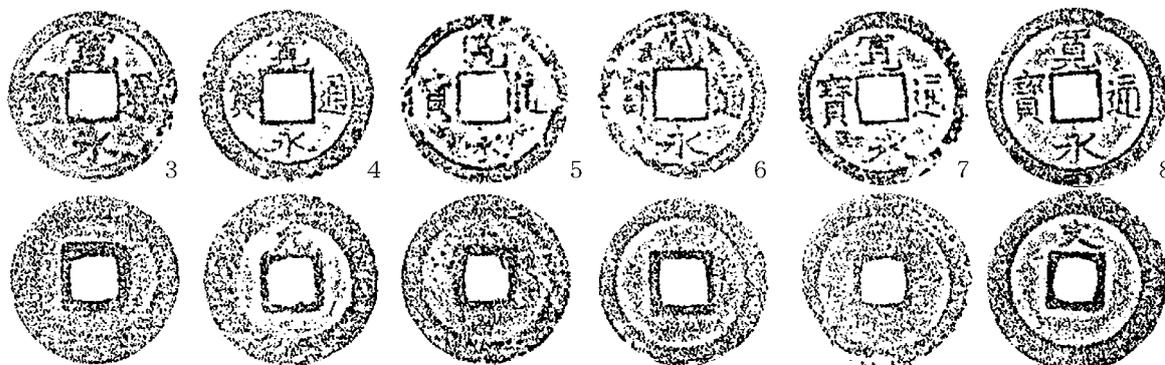
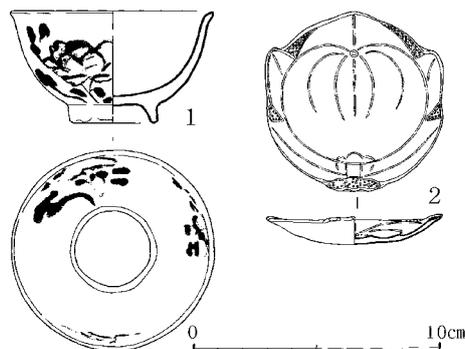
第10図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器小碗である。完形品である。器高4.6cm・口径8.2cmで、高台の径3.6cm・高さ0.75cmを測る。裏文様は、草花と昆虫である。畳み付きは無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。焼成不良のため、釉薬が溶けていない。

第10図2は、19世紀以降の陶器皿か蓋物である。産地は関西系か肥前系か不明である。完形品で、器高1.1cm・口径7.1～7.4cmを測る。見込みは型による陽刻橘文であり、全面に鉄泥の釉薬がかかっている。

出土状況から、1と2は棺内の副葬品と思われる。

第10図3～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、4～7は新寛永、8は文銭である。4の背面には「元」字を、8の背面には「文」字が鋳出ししている。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ4.5cm前後のものが多。



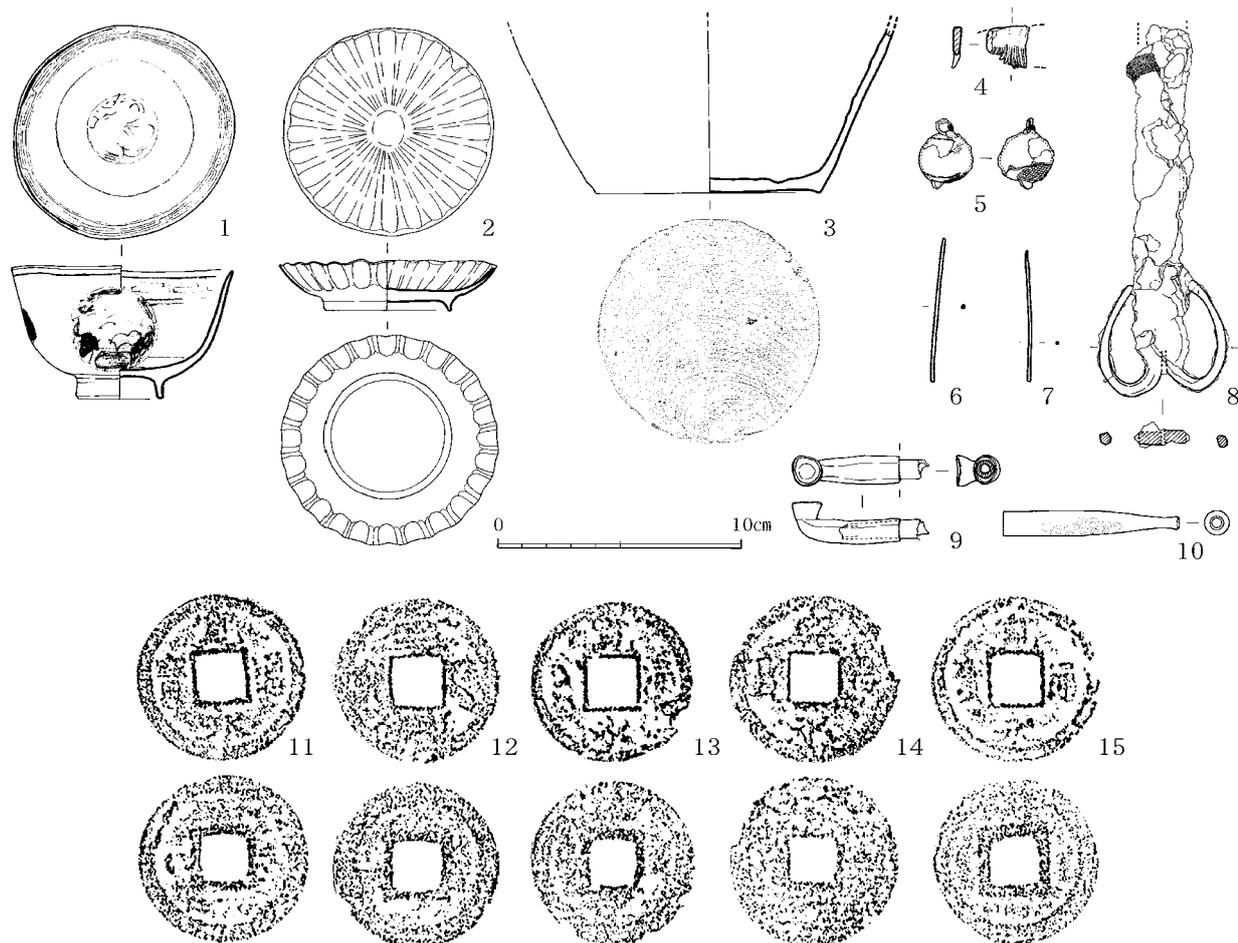
第10図 第1号墓地第22号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

第23号墓（第11図、図版2・3・22・24・28）

正方形縦棺内から碗1点・皿1点・櫛1点・鈴1点・金属棒2本・鋏1点・煙管1点・銭6枚が、墓壙内から釘50本程・壺1点が出土した。

第11図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器小碗である。棺内副葬の完形品である。器高5.5cm・口径9.0cmで、高台の径3.6cm・高さ0.8cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は松竹梅に口縁部雷文帯を配し、裏文様は丸文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。焼成不良のため、一部釉薬が溶けていない。

第11図2は、1800～60年代の肥前産あるいは肥前系の白磁手塩皿である。棺内副葬品であり、口唇部の3ヶ所がわずかに欠損しているが略完形である。器高2.1cm・口径8.8cmで、高台の径5.2cm・高さ0.4cmを測る。型打ち成形で、見込み・裏文様とも型による菊花文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。



第11図 第1号墓地第23号墓出土遺物実測図 (S=1/3) ・銭貨拓影図 (原寸)

第11図3は、18～19世紀の福岡産陶器壺であり、胴部中位以上を欠損している。残存高6.7cm・底径9.1cmを測る。底部外面と底部から1.2cm程の胴部下位は無釉であるが、他は内外面に鉄釉がかかっている。底部外面は、右回転の糸切り痕が残っている。

第11図4は、木製の横櫛の破片であり、腐食著しい。残存長1.7cm・幅1.8cm・背幅0.35cmを測る。歯は15本が確認できるが、うち6本は根元で折れている。

第11図5は、鉄製の鈴である。錆が著しいが、鈴本体の高さ2.1cm・直径2.2cmを測る。本体上部に外径約0.7cmのリングが付いている。下位には布の付着痕がある。

第11図6・7は、青銅製の棒状製品であり、本来同一個体と思われる。断面は直径0.15cmの円形を呈し、6は長さ5.4cm、7は長さ4.9cmを測る。

第11図8は、鉄製の洋剣である。錆による劣化著しく、刃部の形態は不明である。残存長15.35cmを測る。握りの部分は断面円形で、内径3.8×1.3cm程の略楕円形を呈している。刃部に布の付着痕がある。

第11図9・10は、一对の羅宇煙管である。雁首と吸口は銅製で、緑青が付着している。羅宇は竹製である。

9は、雁首と羅宇の一部であり、残存長5.6cmを測る。雁首の長さは、4.4cmである。胴の上部はやや平坦に近く、小口径は左右1.1cm・上下0.9cm、胴最大径は左右1.2cm・上下1.0cmを測

る。火皿も平面形がやや歪な三角形を呈しており、直径1.1～1.3cm・高さ0.7cmを測る。羅字は、最大径0.8cmで、雁首に2.45cm入っている。

10は、吸口のみで羅字は欠損している。全長7.15cm・吸口径0.55cm・小口径1.0cm・胴最大径1.0cmを測る。胴には連続渦巻き風の列点文が施されている。

第11図11～15は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、全て新寛永である。15には、布が付着している。なお、図化できなかつたが、鉄銭1枚も相伴している。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ4.0cm前後のものが多い。

第24号墓（図無し）

墓壙内から釘が100本程出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0～5.0cmのものが多い。

第25号墓（図無し）

墓壙内から釘が90本程出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0cm前後のものが多い。

第26号墓（図無し）

墓壙内から釘110本余り・焼き灰が出土した。

鉄釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ6.0cmのものもある。焼き灰の詳細は不明である。

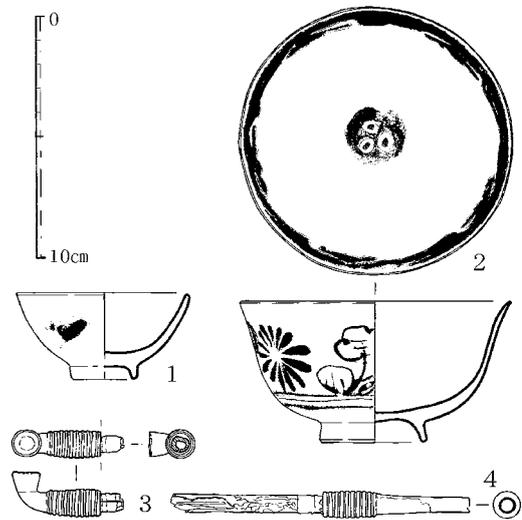
第27号墓（第12・13図、図版2・22・28）

正方形縦棺内から小杯1点・碗1点・煙管1点・銭7枚・焼き灰が、墓壙内から釘80本余りが出土した。

第12図1は、18世紀の肥前産染付磁器小杯である。棺内副葬品であり、口唇部の1ヶ所がわずかに欠損するが略完形品である。器高3.6cm口径7.1cmで、高台の径2.8cm・高さ0.5cmを測る。裏文様は、草花（梅？）である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

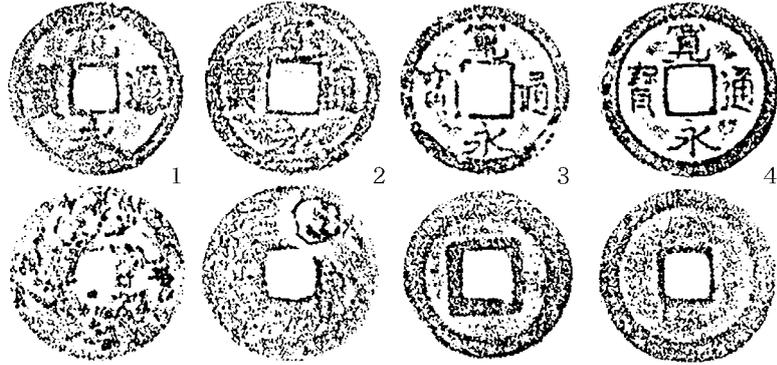
第12図2は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬品であり、高台をわずかに欠損するが略完形である。器高5.9cm・口径11.2cmで、高台の径4.4cm・高さ0.8cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は口縁部に墨弾きによる白抜き蝙蝠を配し、裏文様は菊流水文である。畳み付きは無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第12図3・4は、一对の羅字煙管である。雁首と吸口は銀メッキした銅製と思われ、緑青が付着している。羅字は、竹製である。雁首と吸口には接合痕が見られる。



第12図 第1号墓地第27号墓出土遺物実測図（S=1/3）

3は、雁首と羅字の一部であり、残存長4.6cmを測る。雁首は、長さ3.6cm・小口径1.05cm・胴最大径1.15cmを測る。胴には細い沈線9条が施されている。火皿はやや歪んでおり、直径1.1~1.2cm・高さ0.8cmを測る。羅字は、最大径0.8cmで、雁首に1.6cm入っている。



第13図 第1号墓地第27号墓出土銭貨拓影図(原寸)

4は、吸口と羅字の一部であり、残存長12.25cmを測る。吸口は、長さ6.0cm・吸口径0.64cm・小口径1.05cm・胴最大径1.1cmを測る。胴には細い沈線9条が施されている。羅字の最大径0.75cmであるが、吸口への挿入長さは不明である。吸口端が3箇所僅かに欠損している。

第13図1~4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1は古寛永、2~4は新寛永である。なお、図化できなかったが、鉄銭3枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0~5.0cmのものが多いが、長さ6.0cm強のものもある。焼き灰は、籾殻を焼いたものと思われるが、断定できない。

第28号墓(図無し)

墓壙内から釘25本余りが出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0cm前後のものが多い。

第29号墓(図無し)

正方形縦棺内から漆膜片数点が、墓壙内から釘40本程が出土した。

漆膜は、表面を朱色と黒色の2色に塗り分けられたものと思われるが、断定できない。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ4.0~5.0cmのものが多い。

第30号墓(図無し)

墓壙内から釘80本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0~5.0cmのものが多い。

第31号墓(第14図、図版1・22~24)

墓壙内から棺甕1点・釘20本余りが、棺内から皿2点・櫛1点・ガラス棒1点・鉄1点・煙管1点・布・木片が出土した。

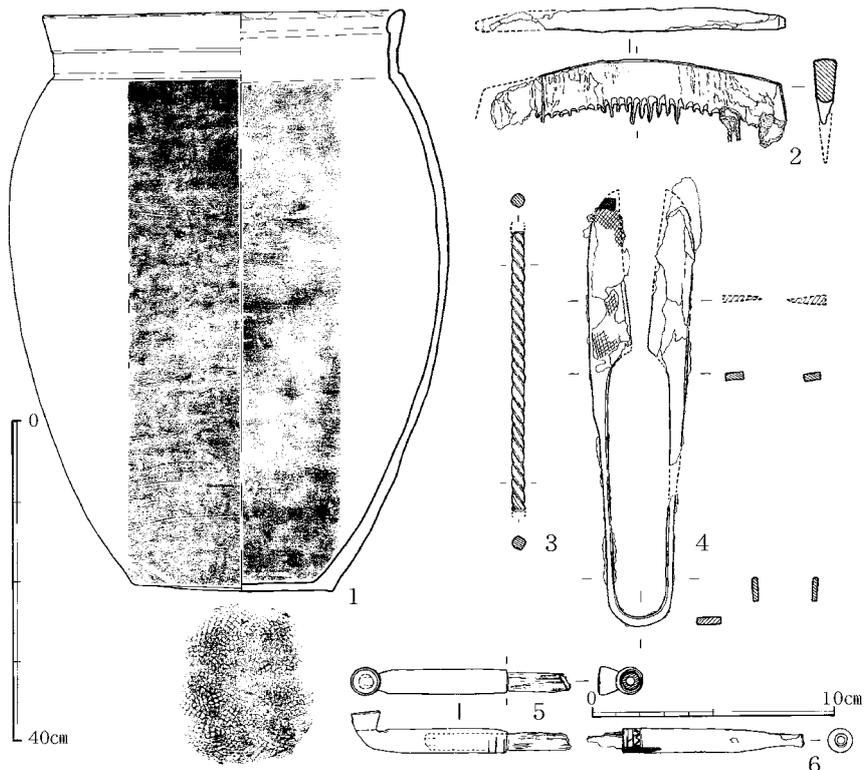
第14図1は、18~19世紀の肥前産陶器甕である。器高71.9cm・口径44.7cm・頸径42.4cm・胴径54.1cm・底径24.5cmを測る。調整は、胴部内外面とも格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段がある。灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面14個所に目跡が残っている。

第14図2は、木製の横櫛であり、片側の端部と歯が欠損している。残存長12.1cm・残存最

大幅2.9cm・背幅0.6～0.97cmを測る。歯は、27本確認できる。

第14図3は、ガラス製の棒であり、両端が欠損している。残存長11.55cm・直径0.52～0.58cmを測る。捻じりを加えて表面を波打たせて装飾にしておりかんざしの可能性もあるが断定できない。

第14図4は、鉄製の和鋏である。錆びて著しく脆く、刃部両切先と片方の柄の途中が欠損している。残存長



第14図 第1号墓地第31号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

18.6cm・刃部残存長6.1cm・刃部背幅約0.4cmを測る。柄の断面は、1.0×0.25cmの長方形を呈している。刃部に布の付着痕がある。

第14図5・6は、一对の羅字煙管である。雁首と吸口は銀メッキした銅製と思われ、羅字は竹製である。

5は、雁首と羅字の一部であり、残存長9.0cmを測る。雁首は、長さ6.45cm・小口径0.9～1.0cm・胴最大径1.05cmを測る。胴の小口近くに細い沈線3条が施されているが、明瞭ではない。火皿は、直径1.1～1.2cm・高さ0.8cmを測る。羅字は、最大径0.75cmで、雁首に3.45cm入っている。

6は、吸口と羅字の一部であり、残存長8.85cmを測る。吸口は、長さ7.35cm・吸口径0.55cm・小口径1.0cm・胴最大径1.05cmを測る。胴小口近くに細い沈線3条を巡らせ、その間に同じ細い沈線で山形の文様を施している。同じ個所に布の付着痕がある。羅字の最大径0.7cmであるが、吸口への挿入長さは不明である。

棺内出土の布の状態は良いが、詳細な調査は行っていない。死装束なのか副葬された着物なのか不明である。

棺内出土の木片は、大きいものであり、長さ26.0cm・幅6.0cmの長方形を呈している。襖蓋と思われる。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ4.0cm前後のものが多い。襖蓋に使用されたものと思われるが、数量的にやや多い感じがする。

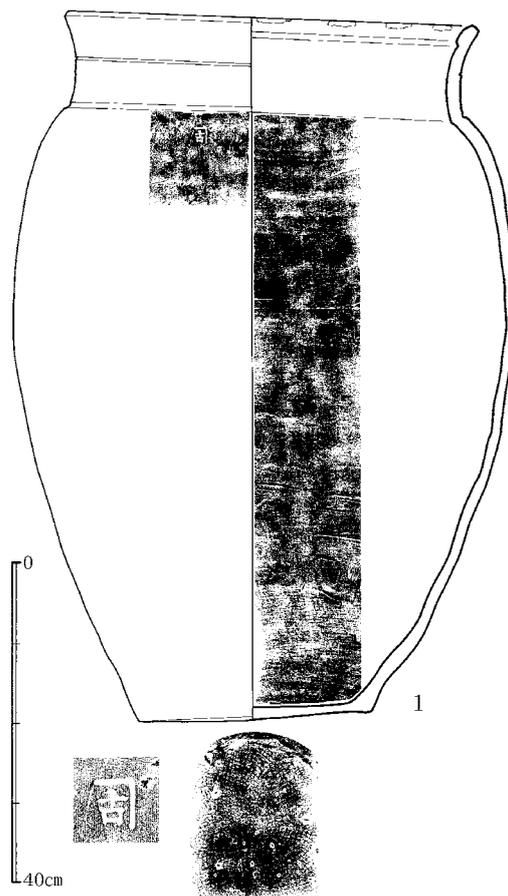
なお、棺内より土師器皿2枚が出土したが、所在不明となり、図化できなかった。

また、棺内より直径0.5cm・残存長6.3cmの棒状の木片が出土しており、筆柄の可能性もあるが断定できない。

第32号墓（第15図、図版1）

墓壙内から棺甕1点が出土した。

第15図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高87.5cm・口径51.3cm・頸径47.5cm・胴径61.7cm・底径28.6cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線を施している。胴部外面上位に「舌」の刻印がある。暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。



第15図 第1号墓地第32号墓出土遺物実測図（S=1/9）

第33号墓（第16図・第17図1、図版1～3・23）

墓壙内から棺甕1点が、棺内から碗1点・皿1点・櫛1点・箱1点・蓋1点・釘4片・木屑および銭1枚が出土した。

第16図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高68.0～68.3cm・口径45.7cm・頸径41.8cm・胴径53.3cm・底径25.8cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を斜格子目文叩きの後ナデ、底部内面を斜格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段がある。暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面16個所に目跡が残っている。

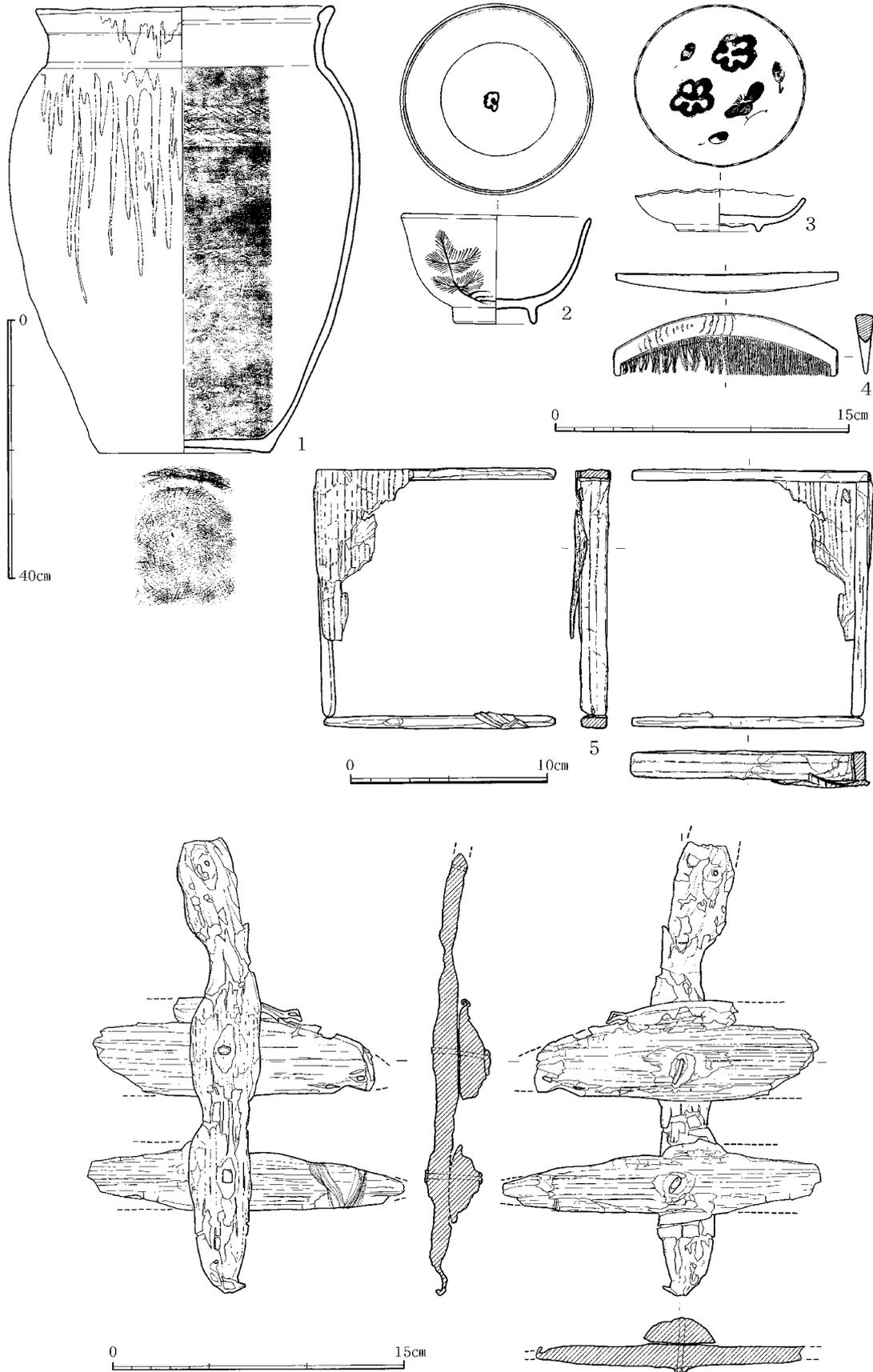
第16図2は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬の完形品である。器高5.5～5.6cm・口径9.65cmで、高台の径4.25cm・高さ0.85cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は岩と思われ、裏文様は根引きの松である。畳み付きは無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第16図3は、1800～60年代の肥前系染付磁器手塩皿である。棺内副葬であり、高台2ヶ所をわずかに欠損するが略完形である。歪んでおり、器高1.75～2.2cm・口径8.7cmで、高台の径4.3cm・高さ0.35cmを測る。口縁部はイエ縁を呈している。見込み文様は、梅花文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。高台内に窯道具の熔着痕がある。

第16図4は、木製の横櫛である。全長11.4cm・中央幅3.1cm・中央背幅0.9cmで、左右端部の長さ（側端幅）1.3cm・幅（厚さ）0.3～0.4cmを測る。歯は95本であり、半分ほどは振じれている。

第16図5は、木製の箱である。枠の1辺と底（天井？）板の大半が欠損している。枠板は、1辺の両端を他の2枚で挟み込む構造であり、小さな丸釘で固定している。枠板は、長さ12.5～12.6cm・幅1.4cm・厚さ0.6～0.7cmを測る。底板は、0.1～0.3cmと薄い。

第16図6は、木製の蓋の一部と考えるが、萎縮している。現状は、幅約2.5cmの板に幅4.0～



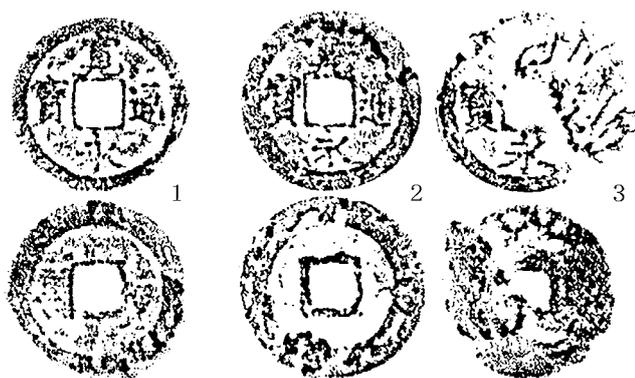
第16図 第1号墓地第33号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

5.0cmの板2枚を「井」字状に直交させて角釘で固定させているが、さらに離れたところに釘があるためここにも別板が並列していた可能性が強い。おそらく複数の板で組まれた木蓋であり、養蓋と思われる。

第17図1は、銭貨である。寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。

釘は、全て鉄製の角釘であり、第16図6の蓋に使用されていたものと思われる。

棺内出土の木屑は、鮑屑であり、棺内の詰め物と思われる。



第17図 第1号墓地第33・34号墓出土銭貨拓影図(原寸)

第34号墓 (第17図2・3)

正方形縦棺内から銭4枚・焼灰が、墓壙内から釘100本程が出土した。

第17図2・3は、銭貨である。どちらも寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、2は新寛永である。なお、図化できなかつたが、鉄銭2枚も共伴している。

焼灰は、粉殻とおもえるが、定かでない。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ3.0cm前後のものもある。

第35号墓 (第18図、図版22・28)

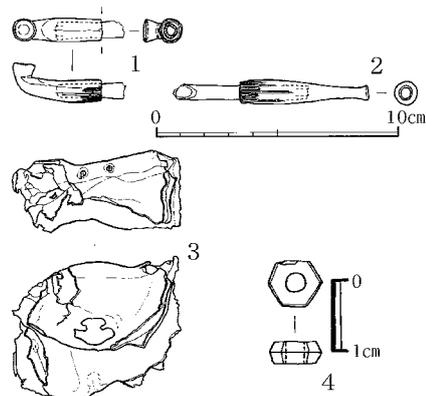
正方形縦棺内から煙管1点・袋1点・金具1点・木屑・焼灰が、墓壙内から釘100本程が出土した。

第18図1・2は、一对の羅字煙管である。雁首と吸口は銅製で、緑青が付着している。羅字は、竹製である。

1は、雁首と羅字の一部であり、残存長4.6cmを測る。雁首の胴は、上面を少し押圧されており断面正円形ではなく、左右に鈍い稜が形成されている。雁首は、長さ3.65cm・小口径8.5~9.0cm・胴最大径1.0cmを測る。胴の稜線から下位には極細い沈線が多く並んでいるが、明瞭ではない。胴上面に長さ2.0cmの接合痕がみられる。火皿は、直径0.9cm・高さ0.55cmを測る。羅字は、最大径0.7cmで、雁首に1.8cm入っている。

2は、吸口と羅字の一部であり、残存長8.0cmを測る。吸口は、長さ5.25cm・吸口径0.56cm・小口径0.8cm・胴最大径1.0cmを測る。胴には極細い沈線が多く並んでいるが、明瞭ではない。羅字は、最大径0.65cmで、吸口に2.8cm入っている。

第18図3は、皮革製の煙草入れ袋であり、かなり萎縮している。残存の横長6.9cm・縦長5.8cm・上面幅0.8cmを測る。蓋には青銅製の金具が付けられており、上面には提



第18図 第1号墓地第35号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)

げ紐を通す円形孔が2個所にある。

第18図4は、青銅製の六角形を呈したナット型の金具であり、一部欠損している。同型のものを2つ接合したものであり、中は空洞である。最大径0.7cm・厚さ0.3cmを測る。中央円形孔には螺旋状の刻みが無いことから、本品は第18図3の皮革製煙草入れ袋に伴う金具とも思われる。

棺内出土の木屑は、鉋屑であり、棺内の詰め物と思われる。

棺内出土の焼灰は、籾殻にも見えるが、定かではない。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5cm前後のものが多いが、長さ4.5～5.0cmのものもある。

第36号墓（図無し）

正方形縦棺内から布片が、墓壙内から釘100本程が出土した。

布片は、緑黒色を呈する細長いものとにぶい赤褐色を呈する布片の2種類があり、前者には結び目がある。詳細な調査はしていないが、着物とその帯とも考えられる。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～5.0cmのものが多いが、長さ6.0cmのものもある。

第37号墓（図無し）

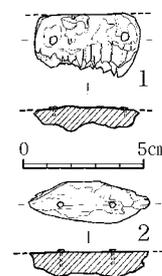
墓壙内から釘50本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第38号墓（第19図）

正方形縦棺内から木片2点が、墓壙内から釘25本程が出土した。

第19図1・2は、丸釘を2本ずつ打ち込んだ木片である。どちらも緑青が付着しているので、縁金具として銅板を貼っていた板材と思われる。あるいは正方形縦棺の棺材とも考えられる。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ4.5cmのものが多い。正方形縦棺に使用されていたものとしては数量的に少ない感がする。



第19図
第1号墓地第38号墓出土遺物実測図
(S=1/3)

第39号墓（第20図、図版2・3・24）

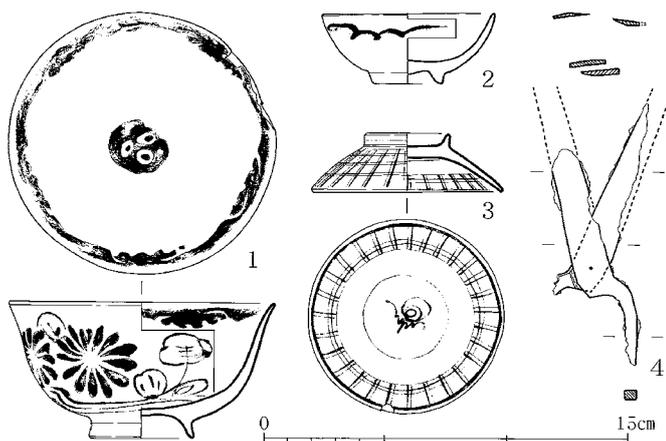
正方形縦棺内から碗1点・小杯1点・蓋1点・鉢1点・銭5枚が、墓壙内から釘80本程が出土した。

第20図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬品であり、口唇部4ヶ所と高台の2ヶ所をわずかに欠損するが、略完形である。器高5.7cm・口径10.8cmで、高台の径4.35cm・高さ0.7cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は口縁部に墨弾きによる白抜き蝙蝠を配し、裏文様は菊文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

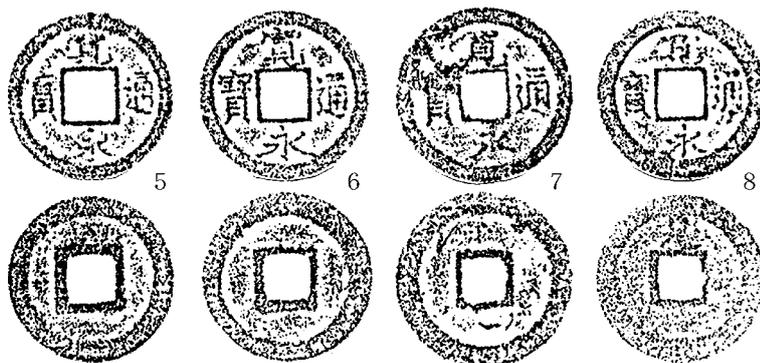
第20図2は、18世紀後半と思われる肥前産染付磁器小杯である。棺内副葬の完形品である。器高2.9cm・口径7.15cmで、高台の径2.9cm・高さ0.5cmを測る。裏文様は、笹文である。畳付

は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第20図3は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗蓋である。棺内副葬品であり、口唇部の1ヶ所をわずかに欠損するが略完形品である。輪状のつまみを有し、口縁部は端反形を呈している。器高2.5cm・口径8.0cmで、つまみの径3.6cm・高さ0.55cmを測る。見込み文様は火炎宝珠文と口縁部格子文で、裏文様は格子文である。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。



第20図4は、鉄製の洋鋏である。錆による劣化著しく、握り部・刃部とも約半分欠損している。残存長18.6cmを測る。握り部の断面は方形であり、輪の形は方形を呈すると思われる。



第20図 第1号墓地第39号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

第20図5～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、全て新寛永である。8の背面には、「足」字が鋳出している。なお、割れて図化できなかつたが、別に新寛永1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多いが、長さ5.5～6.0cmのものもある。

第40号墓 (図無し)

墓壙内から釘45本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.5cm前後のものが多い。

第41号墓 (第21図、図版3・21～23)

正方形縦棺内から碗1点・皿1点・煙管1点・玉41点・金属製品片が、墓壙内から釘80本程が出土した。

第21図1は、1790～1820年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬品の完形品である。器高6.3cm・口径11.05cmで、高台の径6.2cm・高さ1.25cmを測る。高台は高さ1.25cmと高く、広東形を呈している。見込み文様は波に千鳥と思われ、裏文様は秋草と虫である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込みに3足付ハマの熔着痕がある。

棺内には土師器皿1点も共伴していたが、所在不明のため図化できなかつた。

第21図2は、木製の横櫛である。中央部分のみの小片であり、残存の長さ2.6cm・幅3.1cm・背幅0.85cmを測る。歯は、19本確認できる。

第21図3・4は、一对の羅宇煙管である。雁首と吸口は銅製で、緑青が付着している。羅宇は、竹製である。

3は、雁首と羅宇の一部であり、残存長5.05cmを測る。雁首は、長さ3.75cm・小口径1.0～1.1cm・胴最大径1.15cmを測る。胴の上面は若干押圧されており、部分的に平坦な感じがする。火皿は、直径1.2～1.25cm・高さ0.6cmを測り、口径に比してやや低い（浅い）。羅宇の最大径は0.8cmであるが、雁首への挿入長は不明である。雁首小口には羅宇の固定のために布らしきものが詰めてある。

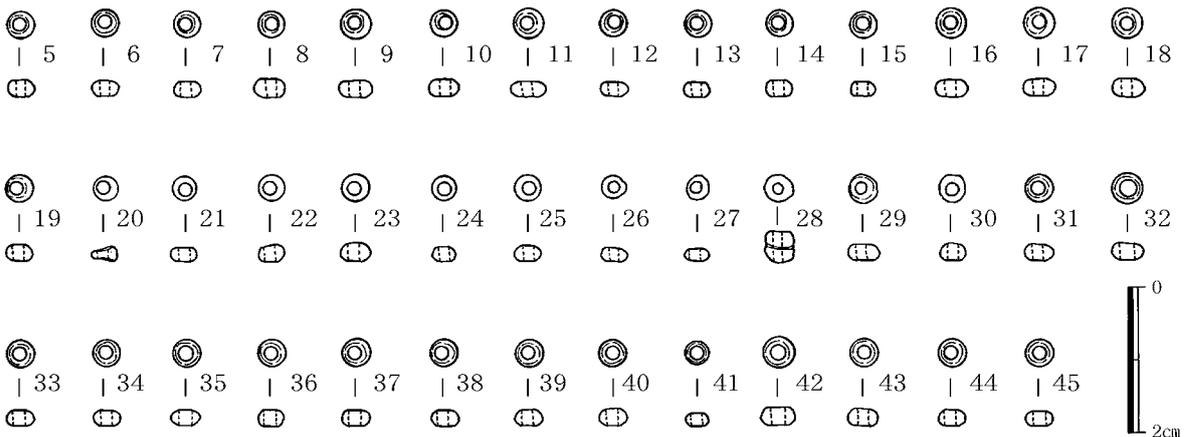
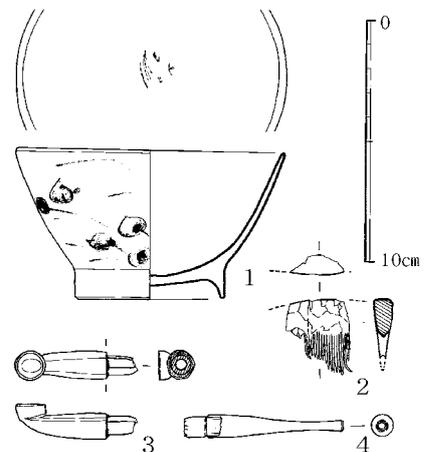
4は、吸口と羅宇の一部であり、残存長6.5cmを測る。吸口は、長さ5.6cm・吸口径0.44～0.49cm・小口径0.9cm・胴最大径0.97cmを測る。羅宇の最大径0.85cmで、吸口へ0.7cm入っている。

第21図5～45は、ガラス製の数珠玉である。20～30は白色透明であるが、他は濃緑色を呈している。

28以外は成珠（註5）であり、径0.33～0.43cm・厚さ0.185～0.27cmを測る。しかし、28は径0.43cmで他のものと同じ径であるが、厚さ（長さ）が0.385cmと厚く（長く）、成珠以外の玉と考えられる。ただ、28の中位には浅い沈線が巡らされており、これを切断線とすると、2点の成珠の未完成品とも考えられる。

他に図化しなかったが、青銅製金具を装着した木片1点と青銅製リング1点が出土している。木片は、長さ1.8cm・幅1.0cmの小片であり、中央に0.4×0.4cmの方形孔があり、その回りに青銅板が装着されている。リングは、厚径が約0.1cmで径1.1cmの輪を呈している。両者が組み合わさるかどうか不明であり、これらが棺の飾り金具なのか煙草入れの一部なのか不明である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5cm前後のものが多い。



第21図 第1号墓地第41号墓出土遺物実測図（S=1/3・原寸）

第42号墓 (図無し)

墓壙内から釘45本程が出土した。全て鉄製の角釘である。長さ3.3～4.0cmのものが多いが、長さ6.0cmを超えるものも1点ある。

第43号墓 (図無し)

墓壙内から釘5本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ3.0～3.5cmのものである。

第44号墓

遺物は出土しなかった。

第45号墓 (図無し)

墓壙内から釘20本程が出土した。全て鉄製の丸釘であり、長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第46号墓 (図無し)

墓壙内から釘20本程が出土した。全て鉄製の角釘である。長さ3.5cm前後のものが多いが、長さ5.0cmを超えるものもある。

第47号墓 (図無し)

墓壙内から釘10本程・ローソク(?) 5片が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘であり、長さ4.0～5.0cmである。

ローソクらしきものは、黒色を呈した糞状のものである。変形して断面1.0～1.5cmの楕円形を呈している。中央は細い空洞であり、糸状のものが残っているものもあり、ローソクと考えた。長さは1.4～4.5cmと様々であるが、本来同一個体と思われる。

第48号墓 (図無し)

墓壙内から釘35本程が出土した。全て鉄製で、角釘と思われる。長さ4.5～5.0cmのものが多い。

第49号墓 (図無し)

墓壙内から釘40本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第50号墓 (図無し)

墓壙内から釘40本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第52号墓

遺構編文3)で述べたように、本墓壙は改葬壙の可能性があり、遺物は出土しなかった。

第54号墓 (図無し)

墓壙内から釘40本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ4.0~4.5cmのものが多い。

第55号墓 (第22図、図版1・27)

墓壙内から棺襖1点が、棺内から足袋ハゼ6枚・釘2本程・焼灰が出土した。

第22図1は、18~19世紀の肥前産陶器甕である。器高79.9cm・口径53.6cm・頸径47.7cm・胴径60.0cm・底径29.7cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を(斜?)格子目文叩きの後ナデ、底部内面を斜格子目文叩きしている。頸部外面中位に2条の沈線を施している。灰白色~赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面19個所に目跡が残っている。胴部中位には外から穿たれた孔が1個ある。

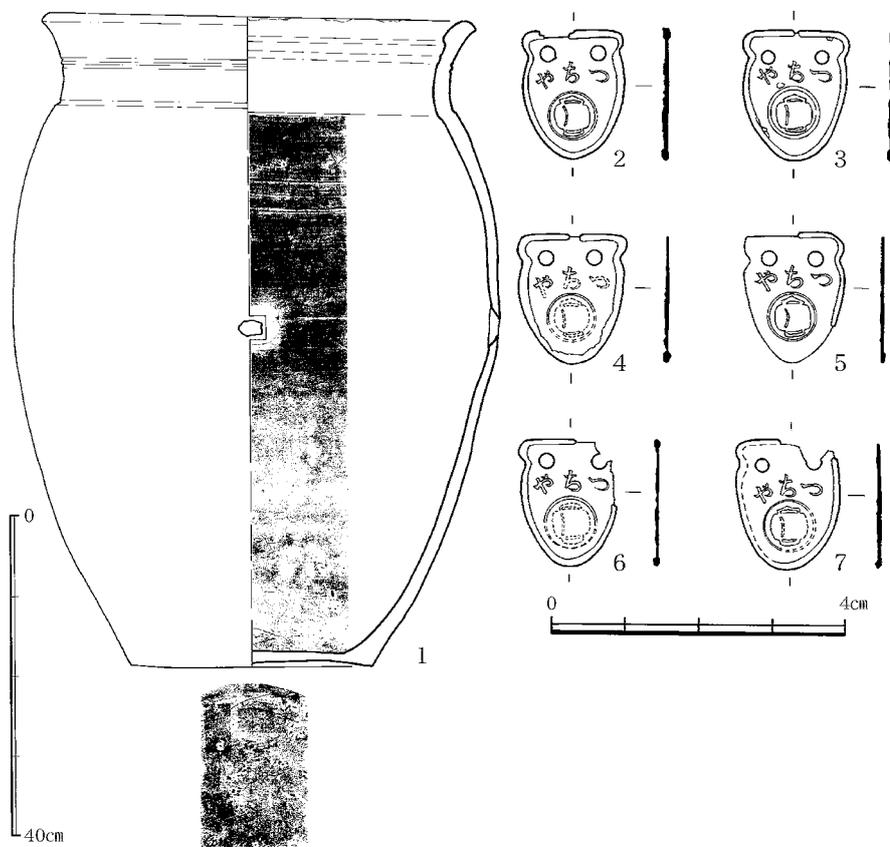
第22図2~7は、銅製の足袋ハゼである。2・4~7は一部欠損しているが、全て3と同じ規格である。長さ1.8cm・最大幅1.4cm・中央厚0.035cmを測る。上位左右にくびれを有し、同じ高さに径0.2cmの円形孔を2個設けている。周縁は折り返して肥厚させているが、上端中央の幅0.15cmだけは切れている。肥厚した縁の厚さは、0.03~0.05cmを測る。全ての片面(表面?)には中央に「つちや」、下位に○の中に槌の絵を描いた商標が打ち出されている。

釘は全て鉄釘であるが、1本は角釘であり、他のものは付着した木質の圧痕から丸釘と思われる。寸法は、不明である。

焼灰は、粉殻を焼いたものである。

第58号墓 (図無し)

墓壙内から釘85本程が出土した。このうち75本程が鉄製の角釘であり、長さ4.5cm前後のものが多い。残り10本程は丸釘であり、短いもの(長さ4.5cm)と長いもの(長さ10.0cm)とがある。同一



第22図 第1号墓地第55号墓出土遺物実測図 (S=1/9・原寸)

正方形縦棺に角・丸釘の両方を使用していたとは考えにくく、丸釘は本墓と重複する第55号墓のものと思われる。

2. 蔵骨器 (第23図、図版4・33)

第23図1・2は、第20号墓とした土壌から出土した蔵骨器であり、明治後半～大正時代の肥前産白磁の蓋付壺である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は白色を呈している。中には火葬骨と共に墨書片10点余りが入っていた。

1は、凹型の内側中央に頂部やや山形の円柱状つまみを有する蓋であり、口縁部は体部より外へ直角に折れて水平を成している。器高3.7cm・口径16.4cm・底径12.9cmで、つまみの高さ1.7cm・頂部径2.7cm・底径3.5cmを測る。凹型の内全面から体部外面中位まで透明釉がかかっているが、体部下位から底部外面は無釉である。

2は、球体の上下を切断したような形態を呈する壺である。口唇部付近は肥厚しているが、肩部付近は著しく薄い器壁である。器高19.05cm・口径14.6cmであり、胴部最大径はほぼ中位で25.8cmを測る。0.7～0.9cmの上げ底を呈する底径は14.1cmを測る。口唇部から肩部にかけての内面と畳付は無釉であるが、他は透明釉がかかっている。上げ底の外面には、型紙摺りによる「太治精製」の裏銘がある。

第23図3～8は、1・2の蔵骨器から出土した墨書片である(図版33)。厚さ0.15～0.3cmの波板状のものであり、灰白色を呈している。片面には0.15cm間隔に細い線が刻まれている。スレート板に似るが、不明である。当初は墓誌銘かと考えたが、墨書の内容から法・戒名の類と思われる。

3は、残存長7.6cm・最大幅5.2cmの破片で、両面に墨書がある。片面には、濃く「重」、その下には薄く「里」と読める2文字墨書されている。反対面には、「永」と思われる文字が墨書されている。

4は、残存長5.4cm・最大幅5.0cmの破片で、両面に墨書がある。片面に「善」の1文字が、反対面に不明瞭ながら1文字が墨書されている。

5は、残存長4.9cm・最大幅4.0cmの破片で、両面に墨書がある。片面に「光」の1文字が、反対面には不明瞭ながら2文字が墨書されている。

6は、残存長4.4cm・最大幅1.8cmの破片で、片面に墨書がある。墨書は1文字で、「誉」の旧字体である。

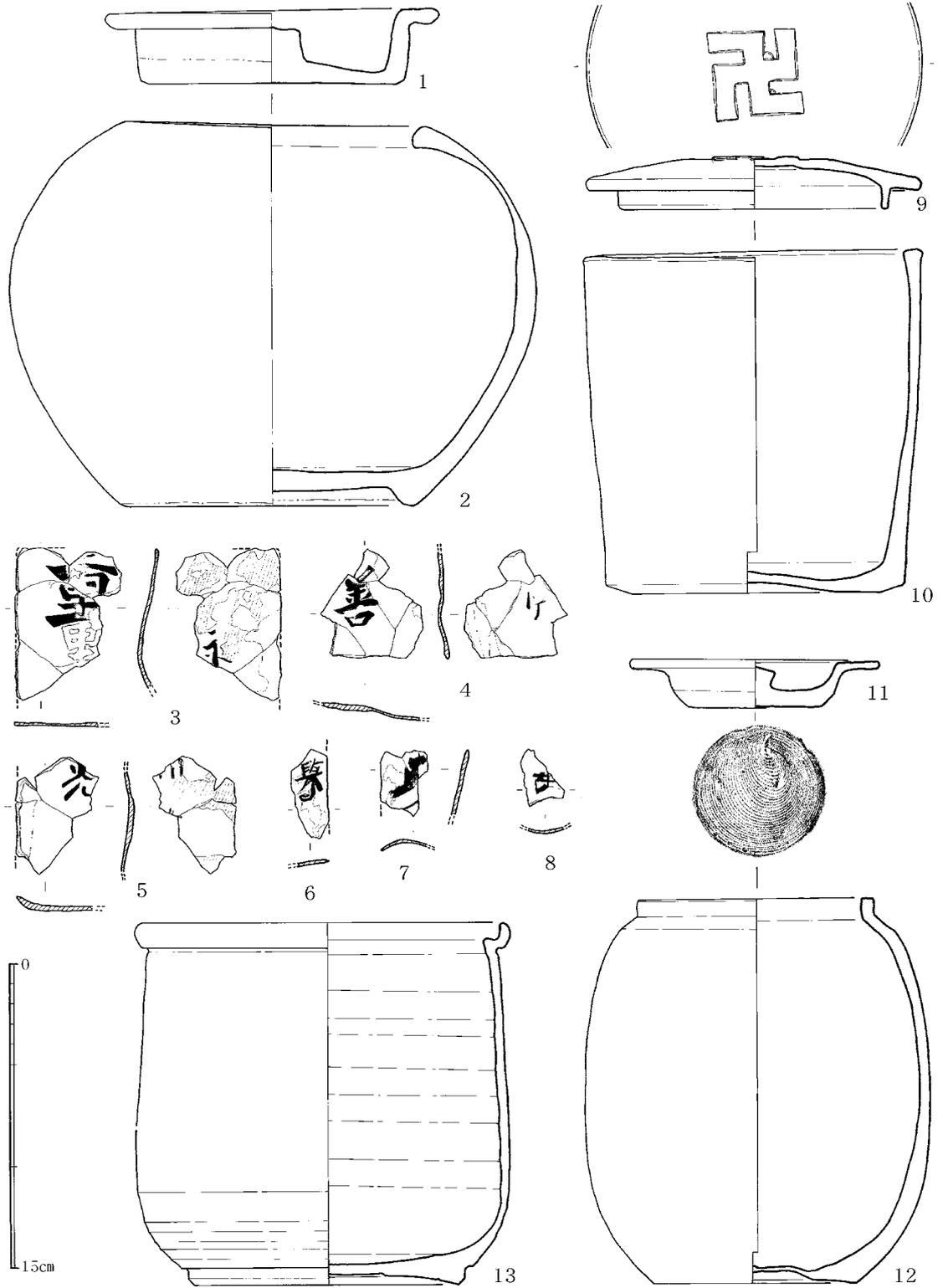
7は、残存長3.3cm・最大幅2.4cmの破片で、片面に墨書がある。字体はしっかりしているが、解読できない。

8は、残存長2.8cm・最大幅1.9cmの破片で、片面に墨書がある。墨書は1文字であるが、解読できない。

第23図9・10は、第47号墓の墓壇内から出土した蔵骨器であり、土師質の蓋付き壺である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は淡橙色を呈している。

9は、内側のかえりが口縁部より下に突出する平坦な蓋である。調整は、天井部外面を回転ヘラケズリの後ヨコナデ、他はヨコナデである。器高2.6cm・口径16.2cm・かえり径13.1cmを測る。天井外面中央に「卍」印を陽刻している。

10は、筒状の胴部でやや上げ底の壺である。調整は、底部外面を回転ヘラケズリ、他をヨコナデしている。器高16.8cm・口径16.4cm・底径14.5cmを測る。



第23図 第1号墓地出土蔵骨器・墨書片実測図 (S=1/3)

第23図11・12は、第59号墓とした小土壙から出土した蔵骨器であり、土師質の蓋付き壺である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は11が橙色を、12が浅黄橙色を呈している。

11は、凹型の内側中央に頂部山形の円柱状つまみを有する蓋であり、口縁部は体部から外へ直角に折れて水平を成している。調整は、底部外面を回転糸切り離し、他をヨコナデしている。器高2.3cm・口径12.15cm・底径6.6cmで、つまみの高さ1.0cm・最大径2.0cm・底径1.5cmを測る。

12は、中膨らみした胴部から頸部が短く直に立ち上がる壺である。上げ底の底部中央は著しく薄い。器高18.8cm・口径11.5cm・頸部高0.8cm・胴部最大径16.75cm・底径9.8cmを測る。調整は、胴部下位を回転ヘラケズリの後ヨコナデ、底部外面外周をヘラケズリし、他はヨコナデである。

第23図13は、第59号墓とした小土壙から出土した蔵骨器であり、土師質の無頸壺である。蓋を受けるために口縁部は一旦外に折れてから直ぐに立ち上がる形態を呈している。底部は削り出して高台風にしており、上げ底を呈している。器高17.7cm・口径18.2cm・胴部最大径18.1cm・底径13.4cmを測る。調整は、胴部下位を回転ヘラケズリの後ヨコナデ、底部外面をヘラケズリし、他はヨコナデである。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色～にぶい橙色を呈している。

3. 胞衣容器 (第24図、図版4)

胞衣容器あるいは胞衣容器と思われる容器が、6点出土した。その内訳は土瓶4点・鍋1点・その他1点である。

第24図1・2は、第1号胞衣容器に使用されていた、19世紀の肥前産陶器土瓶の蓋と身である。どちらも銅緑釉がかかっている。

1は、丸いつまみを有する蓋であり、内側のかえりが口縁部より下にまっすぐに突出する形態を呈している。器高4.2cm・口径10.5cmを測る。かえりの径6.9cm・長さ1.9cmで、つまみの径2.0cm・高さ0.95cmを測る。つまみと天井部外面に銅緑釉葉が、内面に鉄泥がかかっている。

2は、やや扁平な球体の上下を切断したような形態を呈する瓶であり、底部は上げ底である。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が直線的に付いている。注口先端が欠損している。注口接合部の体部には、3つの円形孔が外側から穿たれている。器高12.6cm・口径9.9cm・体部最大径17.5cm・底径9.15cmを測る。口縁部内外面から体部中位以上には銅緑釉が、内面には鉄泥がかかっている。口唇部平坦部と底部外面には白化粧が施されている。

第24図3・4は、第2号胞衣容器に使用されていた、19世紀の関西系軟質施釉陶器土瓶の蓋と身である。どちらも低火度の透明釉がかかっている。

3は、凹型の内側中央に頂部が丸い円柱状つまみを有する蓋であり、口縁部は外側斜め下方へ折れている。器高2.3cm・口径8.5cm・底径3.6cmで、つまみは高さ1.15cm・径0.9cmを測る。凹型の内全面から口唇部にかけて低火度の透明釉がかかっている。底部外面には右回転と思わ

れる回転糸切り痕が残っている。

4は、算盤玉形の体部に短く立ち上がる口縁が付く瓶である。底部は上げ底である。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が直線的に付いている。注口先端が欠損している。注口接合部の体部には、円形の孔が3つ穿たれている。器高11.9cm・口径7.7cm・体部最大径17.7cm・底径8.2cmを測る。体部外面上半に飛鈿文を、両耳の外面に縦方向の沈線を施している。頸部から体部中位にかけての外面に低火度の透明釉がかかっている。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

第24図5・6は、第3号胞衣容器に使用されていた、19世紀の関西系軟質施釉陶器土瓶の蓋と身である。どちらも低火度の透明釉がかかっている。

5は、凹型の内側中央に頂部が丸い円柱状つまみを有する蓋である。つまみは、水平な口縁部より上に出ている。器高2.05cm・口径9.15cm・底径3.3cmで、つまみは高さ1.4cm・径1.45cmを測る。つまみと凹型の内全面から口唇部にかけて低火度の透明釉がかかっている。底部外面には右回転の回転糸切り痕が残っている。

6は、やや扁平な球体を呈する瓶である。口縁部は短く立ち上がり、底部は上げ底である。体部上位に弦用の耳が前後に付いているが、注口は欠損している。注口接合部の体部には、円形の孔が3つ穿たれている。器高12.0cm・口径8.1cm・体部最大径17.0cm・底径8.1cmを測る。体部外面上半に鉄と銅で山水文を描き、前耳の外面に縦方向の沈線を、後耳の外面に波状文沈線を施している。体部中位以上の外面に透明釉がかかっている。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。底部中央には不定形な穴が焼成後穿たれている。

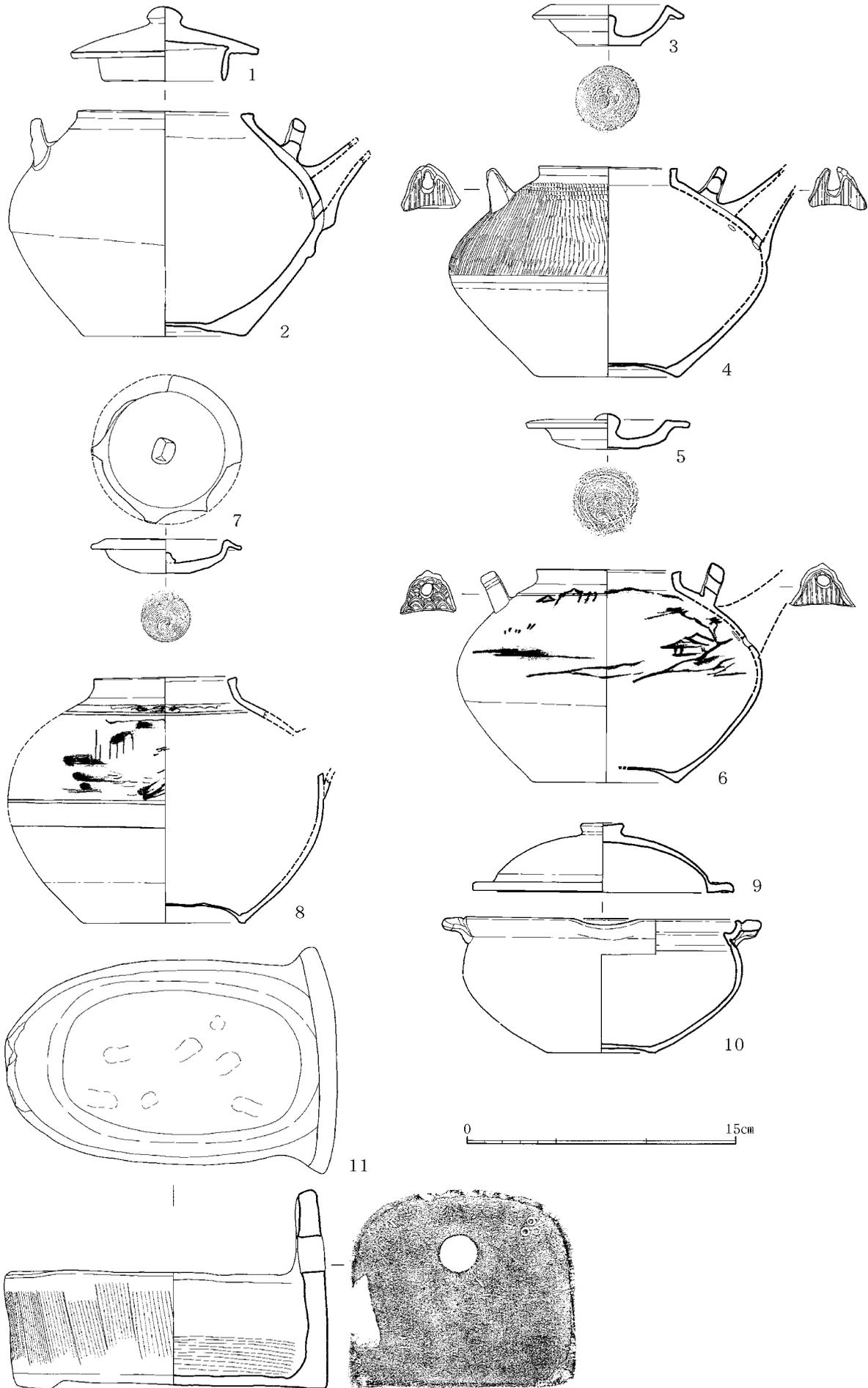
第24図7は、19世紀の関西系軟質施釉陶器土瓶の蓋である。表採遺物である。凹型の内側中央に平面方形・断面略三角形を呈するつまみを有する。口縁部は、外側斜め下方に折れている。器高2.0cm・口径8.45cm・底径2.8cmで、つまみは長さ1.4cm・幅1.2cm・高さ0.6cmを測る。つまみと凹型の内全面から口唇部にかけて低火度の透明釉がかかっている。底部外面には右回転の回転糸切り痕が残っている。

第24図8は、19世紀の関西系陶器土瓶である。表採遺物である。球形の体部に、やや内傾して立ち上がる口縁部が付いている。底部は上げ底である。弦用の耳と注口は欠損している。器高13.9cm・口径8.0cm・体部最大径17.55cm・底径9.1cmを測る。口縁部内面から体部下半途中までの外面は白化粧され、その上に鉄と銅で山水文を描いている。口縁部から体部下半途中までの外面には透明釉がかかっている。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

第24図9・10は、19世紀の関西系軟質施釉陶器鍋の蓋と身である。表採遺物である。どちらも低火度の透明釉がかかっている。

9は、丸い天井部の中央に中窪みの低い円柱状つまみが付く蓋である。口縁部は、天井部から直に外側に折れて水平に伸びている。器高3.85cm・口径14.5cm・口縁部内径11.6cmで、つまみは高さ0.7cm・径2.4cm・高さ0.7cmを測る。天井部内面のみに透明釉がかかっており、外面は無釉である。

10は、注口・把手付きの鍋である。器高7.6cm・口径15.5cm・底径6.0cmを測る。底部は上げ底である。口縁部は、蓋を受けるために一旦外側に折れてから直ぐに内弯しながら立ち上が



第24図 第1号墓地出土陶衣容器実測図 (S=1/3)

る形態をしている。口縁部の1箇所内側から外側に押圧して幅3.7cmの窪みをつけて、注口としている。把手は、対峙して2箇所に貼り付けており、長さ4.2cm・幅1.0cmの略長方形を呈している。把手の上面には方形重圏文の沈線が施されている。蓋受けから下へ1.0cmの所から底部にかけての内面のみに透明釉がかかっている。体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

第24図11は、第5号胞衣容器に使用された素焼きの器種不明容器である。平面形は略楕円形を呈し、長軸18.4cm・短軸11.5cmを測る。3方は高さ6.4~6.7cmであるが、1方だけには高さ11.2cmの高い壁を有している。壁は、上辺がやや丸みを呈しており、幅12.7cmを測る。壁の上位中央には径1.9cmの円形孔が穿たれており、上位片角の外面には3個の竹管文を三角形に配している。調整は、体部外面をタテハケ、体部下位内面をヨコハケし、他はナデである。特に、底部内面には指ナデ痕が残っている。胎土は密で、焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色を呈している。

4. 表採遺物 (第25図、図版3・23)

第25図1~3は、土師質の皿である。いずれも胎土は緻密で、焼成は良好であり、やや硬質である。色調は、灰白色を呈している。調整は、体部から底部にかけての外面を回転ヘラケズリの後にナデ、口縁部外面から内全面をヨコナデしている。

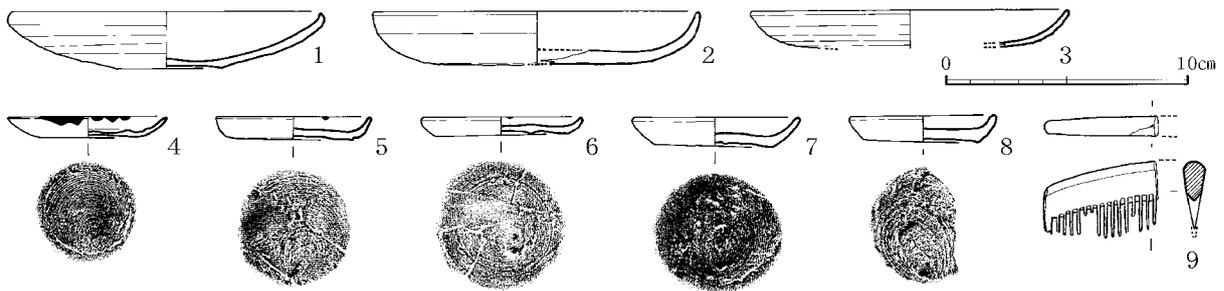
1は、完形である。口縁部は内側に摘み上げられ、底部は上げ底を呈している。器高2.35cm・口径13.1cm・底径4.4cmを測る。底部内外面に黒斑がある。

2は、口縁部から体部にかけての破片で、1/2強を欠損している。口縁部は直に外傾している。復原器高1.55cm・口径13.2cmを測る。

3は、口縁部から底部にかけての破片で、1/2強を欠損している。底部内面の中央は、欠落している。口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、底部は平底である。復原器高2.2cm・口径13.6cm・底径8.25cmを測る。底部内外面に黒斑がある。

第25図4~8は、小型の土師器皿である。底は、僅かに上げ底である。いずれも胎土は密で、焼成は良好であり、色調は橙色を呈している。調整は内外面ともヨコナデであり、底部外面は回転糸切り離しを行っている。4~6は、口唇部に煤が付着しており、灯明皿と思われる。

4は、口縁部が底部から大きく開く形態のものであり、器壁が薄い。口縁部約1/4を欠損している。口唇部2箇所に煤が付着している。器高0.85cm・口径6.6cm・底径4.2cmを測る。



第25図 第1号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3)

5は、口縁部が短くやや外傾する形態のものであり、約1/5を欠損している。口唇部1箇所
に煤が付着している。器高1.0cm・口径6.45cm・底径5.65cmを測る。

6は、口縁部が内弯気味短く外傾する浅いものである。口縁部約1/2を欠損している。口唇
部1箇所に煤が付着している。器高0.8cm・口径6.7cm・底径5.6cmを測る。

7は、口縁部がやや長めに外傾するものである。口縁部約1/4を欠損している。器高1.2cm・
口径7.0cm・底径5.0cmを測る。

8は、5と同様、口縁部が短くやや外傾する形態のものであるが、5に比して器壁が厚い。
口縁部約1/2を欠損している。器高1.15cm・口径6.1cm・底径2.7cmを測る。

第25図9は、木製の横櫛である。約1/2を欠損している。背は、丸みを有している。残存長
4.7cm・最大幅2.9cm・背幅0.9cmで、側端の長さ(幅)1.8cm・幅(厚)0.6cmを測る。
歯は、15本確認できる。

第1表 第1号墓地出土数珠玉一覧表

出土 遺構	材質	色調	寸法(単位cm)			備考	図番号		
			長さ	直径(幅)	厚み		挿図	遺物	
第 41 号 墓	ガラス	濃緑色	—	0.380	0.240	成珠	21	5	
	ガラス	濃緑色	—	0.380	0.230	成珠	"	6	
	ガラス	濃緑色	—	0.390	0.220	成珠	"	7	
	ガラス	濃緑色	—	0.400	0.250	成珠	"	8	
	ガラス	濃緑色	—	0.415	0.240	成珠	"	9	
	ガラス	濃緑色	—	0.400	0.250	成珠	"	10	
	ガラス	濃緑色	—	0.410	0.230	成珠	"	11	
	ガラス	濃緑色	—	0.380	0.200	成珠	"	12	
	ガラス	濃緑色	—	0.370	0.210	成珠	"	13	
	ガラス	濃緑色	—	0.390	0.240	成珠	"	14	
	ガラス	濃緑色	—	0.370	0.215	成珠	"	15	
	ガラス	濃緑色	—	0.405	0.240	成珠	"	16	
	ガラス	濃緑色	—	0.420	0.245	成珠	"	17	
	ガラス	濃緑色	—	0.425	0.270	成珠	"	18	
	ガラス	濃緑色	—	0.380	0.230	成珠	"	19	
	ガラス	無色透明	—	0.360	0.200	成珠	"	20	
	ガラス	無色透明	—	0.360	0.205	成珠	"	21	
	ガラス	無色透明	—	0.380	0.230	成珠	"	22	
	ガラス	無色透明	—	0.400	0.270	成珠	"	23	
	ガラス	無色透明	—	0.355	0.220	成珠	"	24	
	ガラス	無色透明	—	0.380	0.235	成珠	"	25	
	第 41 号 墓	ガラス	無色透明	—	0.345	0.200	成珠	21	26
		ガラス	無色透明	—	0.330	0.185	成珠	"	27
		ガラス	無色透明	—	0.430	0.385	成珠	"	28
		ガラス	無色透明	—	0.410	0.235	成珠	"	29
ガラス		無色透明	—	0.395	0.235	成珠	"	30	
ガラス		濃緑色	—	0.405	0.215	成珠	"	31	
ガラス		濃緑色	—	0.425	0.255	成珠	"	32	
ガラス		濃緑色	—	0.390	0.230	成珠	"	33	
ガラス		濃緑色	—	0.370	0.225	成珠	"	34	
ガラス		濃緑色	—	0.400	0.215	成珠	"	35	
ガラス		濃緑色	—	0.380	0.215	成珠	"	36	
ガラス		濃緑色	—	0.385	0.230	成珠	"	37	
ガラス		濃緑色	—	0.395	0.235	成珠	"	38	
ガラス		濃緑色	—	0.395	0.210	成珠	"	39	
ガラス		濃緑色	—	0.400	0.230	成珠	"	40	
ガラス		濃緑色	—	0.345	0.185	成珠	"	41	
ガラス		濃緑色	—	0.430	0.260	成珠	"	42	
ガラス		濃緑色	—	0.400	0.245	成珠	"	43	
ガラス		濃緑色	—	0.385	0.215	成珠	"	44	
ガラス		濃緑色	—	0.380	0.200	成珠	"	45	

原田第1号墓地の遺物

第2表 第1号墓地出土銭貨一覧表

出土構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号	
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物
4号墓	新寛永	24.35	1.20	6.10	0.90~0.95	3.4		3	3
	古寛永	24.55	0.80~1.25	5.65	0.85~0.95	2.7		"	4
	新寛永	24.55	1.05~1.15	5.95	0.85~1.00	2.7		"	5
	新寛永	21.75	0.65~0.75	7.00	0.75	1.8		"	6
	新寛永	21.95	1.25	6.05	1.20	2.1		"	7
	新寛永	22.95	0.80~0.85	6.55	0.80~0.85	2.4		"	8
	新寛永	24.65	1.05~1.15	5.45	0.85~0.95	2.9		"	9
	新寛永	22.65	0.70~0.95	6.55	0.60~0.85	1.6		"	10
	新寛永	24.55	0.95~1.05	5.95	0.70~0.85	2.7		"	11
	新寛永	24.15	1.10~1.15	5.85	0.95~1.15	2.9		"	12
7号墓	古寛永	24.55	1.25	5.95	1.25	4.0		6	1
	古寛永	25.45	1.25	6.05	1.15	3.9		"	2
	文銭	24.95	1.20	5.85	1.10~1.15	3.4	背「文」	"	3
	文銭	24.55	1.15~1.25	5.65	1.05	3.5	背「文」	"	4
	新寛永	25.15	1.05	6.15	0.85~0.95	3.2	背「佐」	"	5
	新寛永	24.85	1.05~1.15	5.75	0.95~1.05	3.2		"	6
18号墓	新寛永	23.55	0.95~1.05	6.05	0.85	2.7		9	1
	古寛永	24.75	1.05~1.20	5.55	1.05~1.35	3.3		"	2
	新寛永	24.45	0.75~0.85	7.05	0.65	2.3		"	3
	文銭	25.35	1.15~1.25	5.95	0.95~1.05	3.3	背「文」	"	4
	鉄銭	29.85	8.35	—	8.35	9.7	錆着	図無し	
	鉄銭								
22号墓	古寛永	23.55	1.05~1.10	5.95	1.05	3.3		10	3
	新寛永	24.05	0.85~0.95	6.35	0.85	2.2	背「元」	"	4
	新寛永	23.55	0.85~0.95	6.15	0.95	2.2		"	5
	新寛永	23.25	0.95	6.25	0.75	2.1		"	6
	新寛永	24.35	0.95~1.25	5.95	0.95~1.05	3.4		"	7
	文銭	25.15	1.30	5.75	1.05~1.15	4.0	背「文」	"	8
23号墓	新寛永	23.35	1.05~1.10	6.35	1.05	3.1		11	11
	新寛永	22.95	0.90~0.95	6.55	0.90	2.3		"	12
	新寛永	22.45	1.15~1.40	6.35	1.15	2.9		"	13
	新寛永	23.85	0.95~1.15	6.25	0.75~0.85	2.0		"	14
	新寛永	23.15	1.00~1.10	6.65	0.95	2.7		"	15
	鉄銭	—	—	—	—	3.5	破片、布付着	図無し	
27号墓	古寛永	24.55	1.35~1.55	4.65	1.35~1.65	3.9		13	1
	新寛永	24.65	0.95~1.45	6.75	0.75	2.5		"	2
	新寛永	23.45	1.15	6.55	1.05	2.7		"	3
	新寛永	24.35	1.05~1.10	5.95	0.75~0.85	2.7		"	4
	鉄銭	—	—	—	—	9.6	錆着	図無し	
	鉄銭								
33号墓	新寛永	24.05	0.75~0.85	6.45	0.55	1.7		17	1
34号墓	新寛永	25.25	1.25~1.35	6.15	0.85~0.95	3.3		"	2
	古寛永	24.05	1.15~1.70	4.35	1.05~1.30	4.3		"	3
	鉄銭	—	—	—	—	6.0	錆着	図無し	
	鉄銭								
39号墓	新寛永	22.95	1.05~1.10	6.55	0.95	2.5		20	5
	新寛永	23.45	0.95~1.05	6.25	0.85~0.95	2.6		"	6
	新寛永	24.35	1.15~1.25	5.95	1.00~1.05	3.2		"	7
	新寛永	23.35	0.95~1.05	5.85	0.95~1.05	2.7	背「足」	"	8
	新寛永	23.05	0.75~0.90	6.55	0.60~0.65	1.5	4片に割れ	図無し	

第2節 原田第2号墓地の遺物

原田第2号墓地（以下「第2号墓地」という）においては、発掘調査した土葬墓7基のうち6基から遺物が出土した。第2号墓地では、蔵骨器・胞衣容器の出土はなく、他に表採遺物3点を図化した。

1. 土葬墓の遺物（第26～32図、第3・4表）

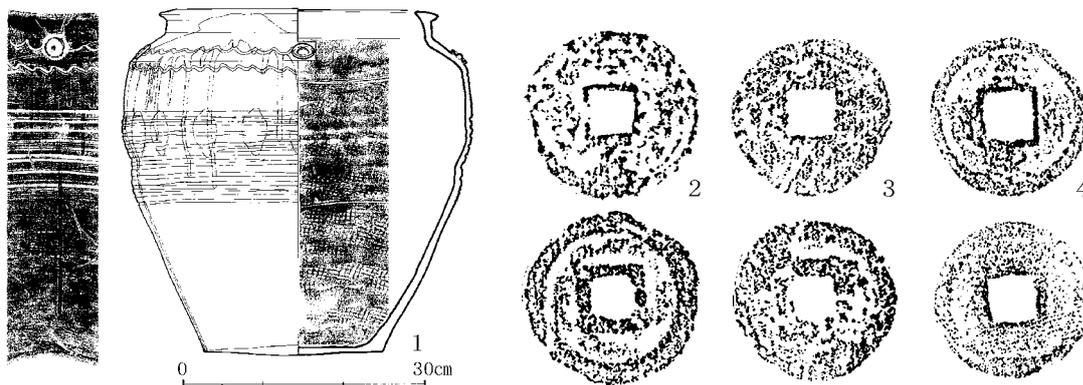
第1号墓（第26図、図版5）

墓壙内から棺甕1点・羽子板1点が、棺内から銭6枚が出土した。

第26図1は、1630年代～17世紀末の肥前産陶器甕である。強く張った肩から直に頸部が立ち上がり、口縁部は略「T」字型を呈している。器高43.0cm・口径34.2cm・頸径32.5cm・胴径42.9cm・底径21.8cmを測る。調整は、胴部内外面を叩きの後ナデ、底部内外面をナデ仕上げしている。肩部外面4ヶ所に円形浮文を配し、肩～胴部境の外面に2条の波状沈線を施している。胴部中位外面には、15～16条の螺旋状沈線を巡らせている。灰色～灰オリーブ色を呈する土灰釉がかけられ、肩から灰釉が流しかけられている。肥厚した口縁部上面19ヶ所に目跡が残っている。

第26図2～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、2は古寛永、3・4は新寛永である。なお、図化できなかつたが、別に古寛永1枚と判読不明の銅銭2枚も共伴している。

墓壙底から出土した羽子板は、木製である。取上げ後の処置が悪く、図化できなかつた。



第26図 第2号墓地第1号墓出土遺物実測図（S=1/9）・銭貨拓影図（原寸）

第2号墓（第27図、図版5・6・21）

短い長方形横棺内から碗2点・蓋1点・玉6点・銭6枚が、墓壙内から皿1点・釘1本が出土した。

第27図1・2は、1680～1730年代の肥前産白磁碗であり、口唇部に褐色の口紅を施している。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。いずれも棺内副葬の完形品である。

1は、器高6.5cm・口径10.6cmで、高台の径4.5cm・高さ0.95cmを測る。

2は、器高6.5cm・口径10.85cmで、高台の径4.8cm・高さ1.05cmを測る。

第27図3は、1680～1730年代の肥前産白磁蓋である。棺内副葬の完形品であり、1・2のいずれかの蓋である。輪状つまみを有し、口唇部には褐色の口紅を施している。器高2.95cm・口径9.6cmで、つまみの径3.5cm・高さ0.8cmを測る。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第27図4は、棺外（墓壙内）出土の土師器皿であり、口縁部約1/4を欠損している。口縁部が底部から大きく開く形態を呈している。器高1.5cm・口径8.55cm・底径5.2cmを測る。調整は、内外面ともヨコナデであり、底部外面には回転糸切り痕が残っている。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈している。

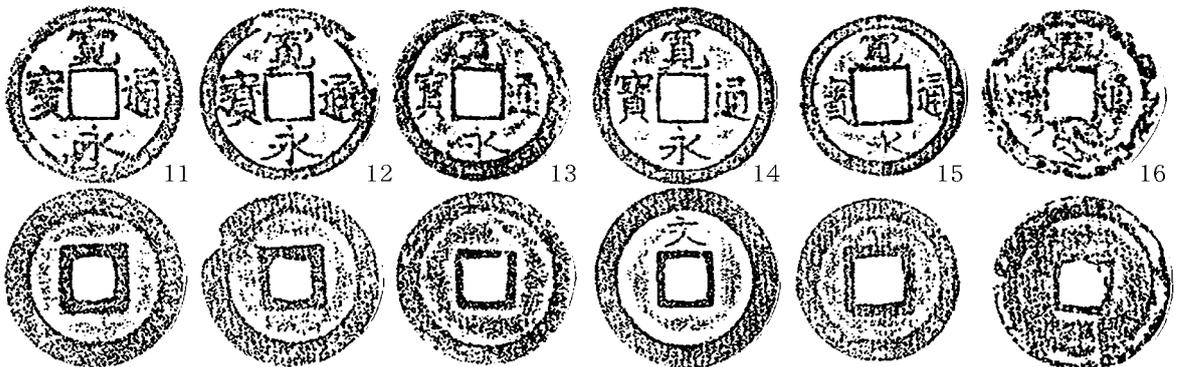
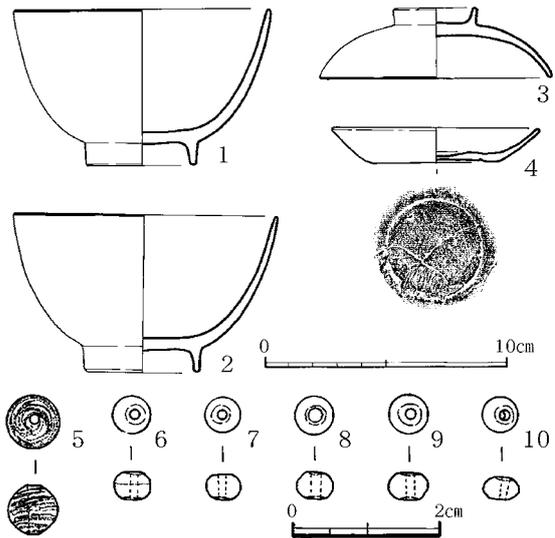
第27図5～10は、ガラス製の数珠玉である。

5は、白色と青色の2色がマーブル状に混ざり合った色調を呈している。寸法も径0.7cm・厚さ0.63cmであり、6～10に比して大きい。

6～10は、全て白色透明であり、寸法は径0.49～0.51cm・厚さ0.32～0.375cmとほぼ同じである。成珠と思われるが、数量的に少ない。

第27図11～16は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、11・12は古寛永、13・15・16は新寛永、14は文銭である。14の背面には、「文」字が鋳出している。

釘は、鉄製であるが、小片であり、詳細は不明である。



第27図 第2号墓地第2号墓出土遺物実測図（S=1/3・原寸）・銭貨拓影図（原寸）

第3号墓（第28図、図版5）

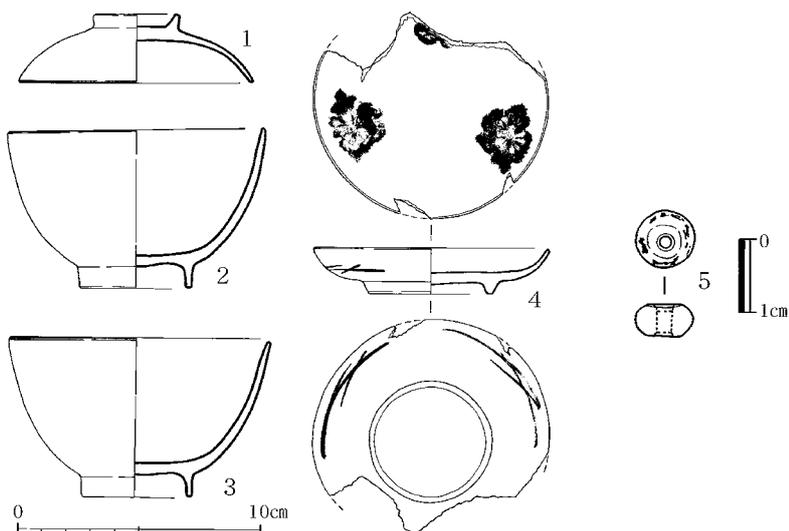
墓壙内から蓋1点・碗2点・皿1点・玉1点・銭6枚・釘10本程が出土した。うち、蓋・碗・玉・銭は、人骨の間からの出土であり棺内副葬と考えてよいが、皿は明確ではない。

第28図1は、1680～1730年代の肥前産白磁蓋である。完形品であり、2・3のいずれかの蓋である。輪状つまみを有し、口唇部には褐色の口紅を施している。器高2.85cm・口径9.6cmで、つまみの径3.55cm・高さ0.6cmを測る。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

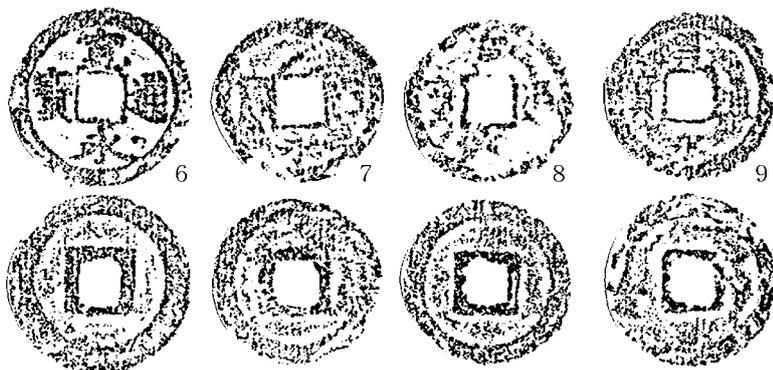
第28図2・3は、1680～1730年代の肥前産白磁碗であり、口唇部に褐色の口紅を施している。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。いずれも完形品である。

2は、器高6.6cm・口径10.6cmで、高台の径4.65cm・高さ0.9cmを測る。

3は、器高6.6cm・口径10.75cmで、高台の径4.55cm・高さ0.85cmを測る。



第28図4は、1690～1740年代の肥前産染付磁器手塩皿である。口縁部から底部にかけての約2/5を欠損している。器高1.9cm・口径9.7cmで、高台の径5.05cm・高さ0.5cmを測る。見込み文様はコンニャク印判による菊文で、裏文様は折れ松葉である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。



第28図 第2号墓地第3号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・
銭貨拓影図 (原寸)

第28図5は、ガラス製と思われる数珠玉である。濁った乳白色に紫色が少し混ざった色調を呈している。寸法は、径0.78cm・厚さ0.44cmを測る。

第28図6～9は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、6は古寛永、7～9は新寛永である。なお、図化できなかったが、別に新寛永2枚も共伴している。

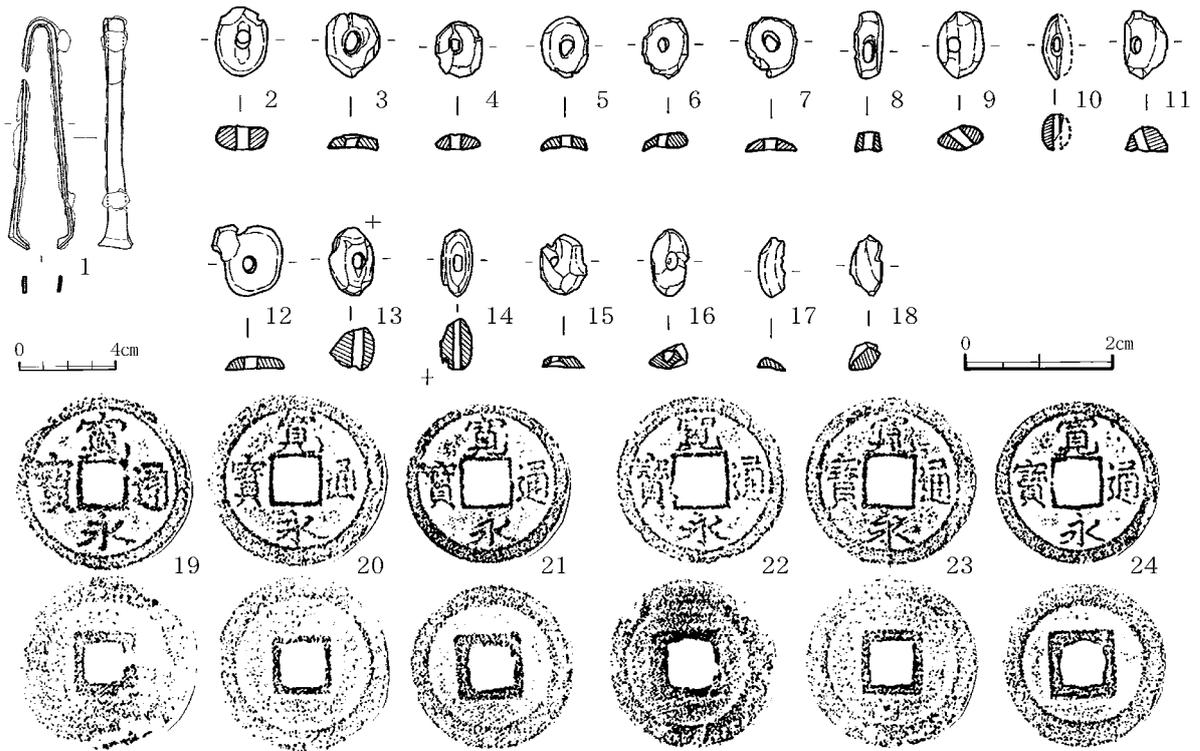
釘は、全て鉄製の角釘であり、長さ3.5～4.0cmである。

第4号墓 (第29図、図版21・24)

正方形縦棺内から毛抜き1点・玉17点・銭6枚・漆膜が、墓壙内から釘100本以上が出土した。

第29図1は、鉄製の毛抜きである。錆びて劣化しており、握り部の一部が欠損している。刃部は、撥形に広がっており、握り部より広い形態のものである。全長9.5cm・厚さ0.1～0.2cmで、握り部の幅0.6cm・刃部幅1.45cmを測る。

第29図2～18は、木製の数珠玉である。全て萎縮して平面楕円形を呈しているが、本来は円形と思われる。寸法は、長さ0.755～0.95cm・幅0.26～0.735cm・厚さ0.145～0.69cmであり、バラつきがある。全て黒色を呈しているが、本来の色かは不明である。



第29図 第2号墓地第4号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸)

第29図19～24は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、19は古寛永、20～24は新寛永である。

棺内出土の漆膜は、表面がにぶい赤褐色を呈している。器種不明であるが、漆器が副葬されていたものとする。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5cm前後のものが多い。

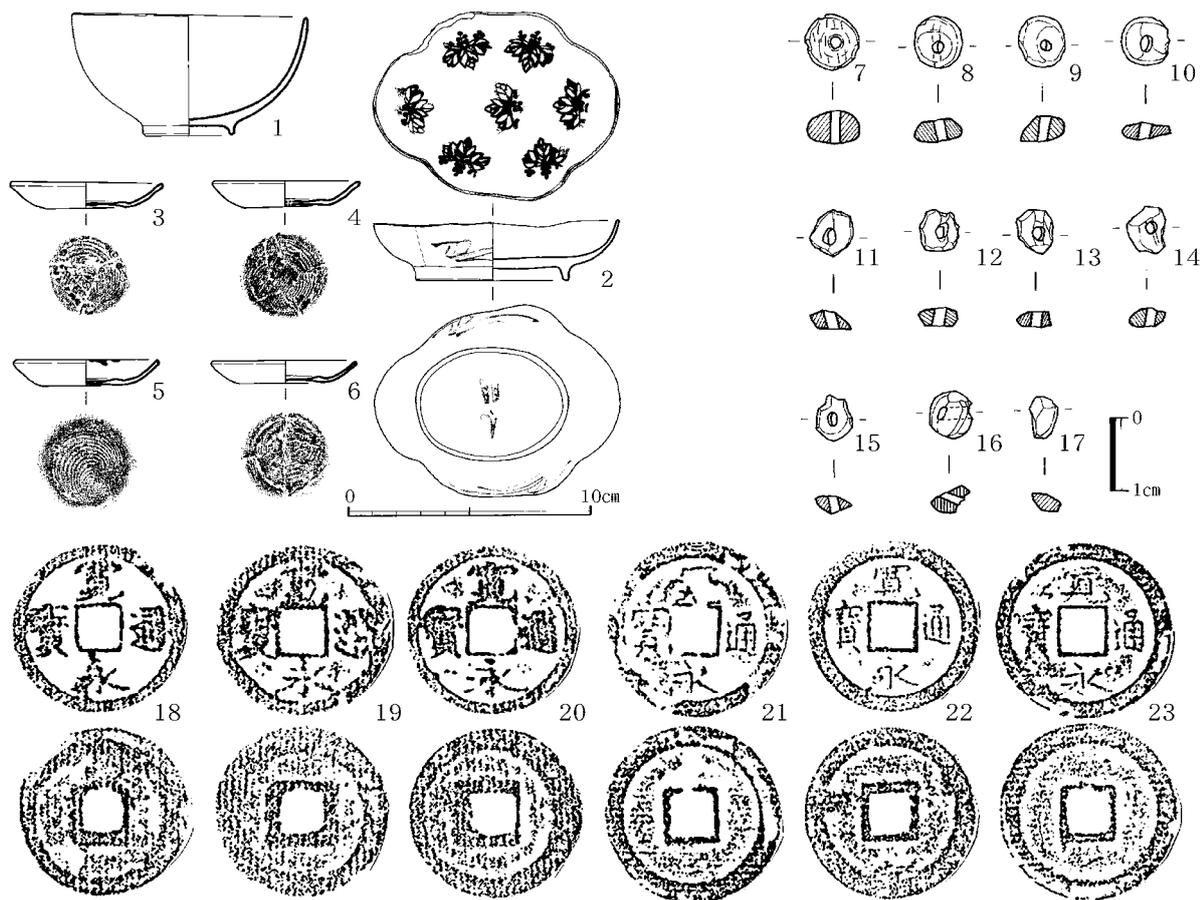
第5号墓 (第30図、図版5・6・21)

正方形縦棺内から碗1点・皿1点・玉11点・銭6枚が、墓壙内から皿4点・釘50本程が出土した。

第30図1は、18世紀前半の肥前産白磁碗である。棺内副葬の完形品である。器高5.1cm・口径9.7cmで、高台の径3.75cm・高さ0.45cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。高台畳み付きに窯傷がある。

第30図2は、1690～1700年代の肥前(有田)産の染付磁器手塩皿である。棺内副葬品であり、口唇部1ヶ所を欠損しているが略完形である。口唇部には、暗褐色の口紅を施している。楕円状の器形は、型打ち成形(糸切り細工)によるものである。器高2.5cmで、口縁部の長径10.1cm・短径7.6cmを、高台の長径6.3cm・短径4.7cm・高さ0.6cmを測る。見込み文様はコンニャク印判による桐文で、裏文様は草文である。高台内面には「太明」の銘款を施している。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第30図3～6は、土師器皿である。3～5は棺外・墓壙底から出土した完形品であるが、6は墓壙内出土で底部を約1/4を欠損している。いずれも口縁部が大きく開く形態を呈している。



第30図 第2号墓地第5号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸)

胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈している。調整は、内外面ともヨコナデであり、底部外面には回転糸切り痕が残っている。

3は、器高1.1cm・口径6.25cm・底径3.5cmを測る。

4は、器高1.1cm・口径6.05cm・底径3.5cmを測る。

5は、器高1.1cm・口径6.0cm・底径3.3cmを測る。口唇部に煤が付着しており、灯明皿と思われる。

6は、器高0.95cm・口径6.0cm・底径3.5cmを測る。

第30図7～17は、木製の数珠玉である。萎縮して平面楕円形を呈しているものもあるが、7～10は平面円形を呈している。寸法は、長径0.575～0.755cm・短径0.35～0.7cm・厚さ0.245～0.44cmであり、バラつきがある。7が本来の形に近いと思われ、径0.7～0.755cm・厚さ0.44cmを測る。全て黒色を呈しているが、本来の色かどうかは不明である。

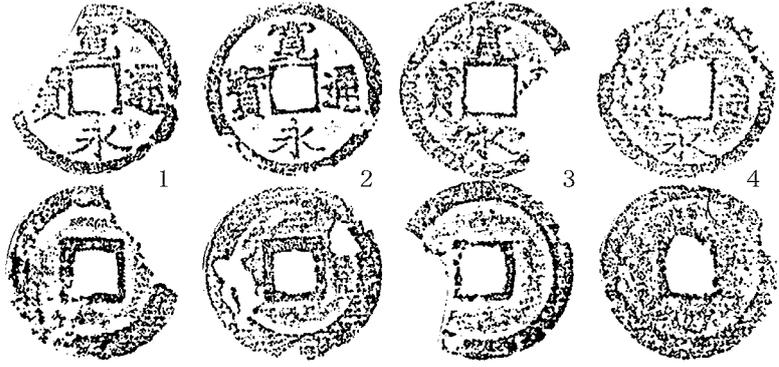
第30図18～23は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、18～20は古寛永、21～23は新寛永である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5～4.0cmのものが多いが、長さ6.5cm前後のものもある。

第6号墓 (第31図)

墓壙底面から銭5枚が出土した。

第31図1～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は古寛永、3・4は新寛永である。なお、割れて図化できなかったが、別に新寛永1枚も共伴している。



第31図 第2号墓地第6号墓出土銭貨拓影図 (原寸)

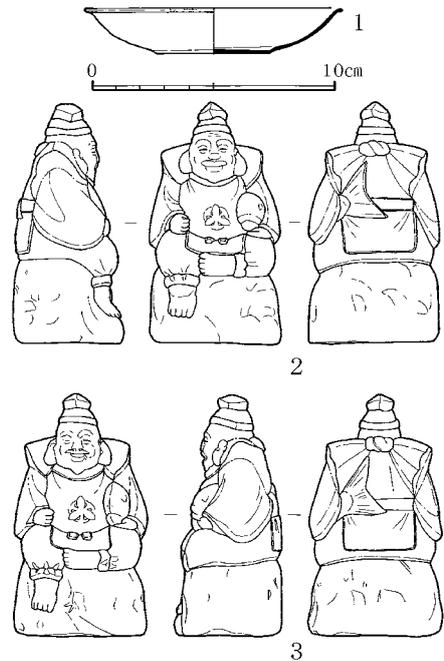
第7～10号墓

遺物は出土しなかった。

2. 表採遺物 (第32図、図版5・26)

第32図1は、金属製の皿か茶托と思われる。白銀色を呈する材質は錫とも考えられるが、不明である。型作りである。平底の底部は僅かに段を有し、内弯しながら開く体部から外反する口縁部は肥厚している。器高1.85cm・口径10.65cm・底径4.65cmを測る。

第32図2・3は、素焼きの陶器人形である。どちらも左腕に鯛を抱えて、左足を横に折って腰掛けた恵比寿神である。同一規格であり、器高10.0cm・最大幅5.4cm・最大厚4.4～4.5cmを測る。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は、2が浅黄橙色を、3が灰白色を呈している。



第32図 第2号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3)

第3表 第2号墓地出土数珠玉一覧表

出土遺構	材質	色調	寸法(単位cm)			備考	図番号		出土遺構	材質	色調	寸法(単位cm)			備考	図番号	
			長さ	直径(幅)	厚み		挿図	遺物				長さ	直径(幅)	厚み		挿図	遺物
第2号墓	ガラス	白・青色	—	0.700	0.630	四天珠	27	5	第4号墓	木	黒色	0.920	0.690	0.320	成珠	29	2
	ガラス	無色透明	—	0.510	0.340	成珠	"	6		木	黒色	0.815	0.735	0.200	成珠	"	3
	ガラス	無色透明	—	0.505	0.365	成珠	"	7		木	黒色	0.755	0.640	0.220	成珠	"	4
	ガラス	無色透明	—	0.505	0.375	成珠	"	8		木	黒色	0.810	0.620	0.200	成珠	"	5
	ガラス	無色透明	—	0.530	0.350	成珠	"	9		木	黒色	0.835	0.625	0.235	成珠	"	6
	ガラス	無色透明	—	0.490	0.320	成珠	"	10		木	黒色	0.820	0.670	0.145	成珠	"	7
3号墓	ガラス	乳白色	—	0.780	0.440		28	5		木	黒色	0.945	0.400	0.255	成珠	"	8
第5号墓	木	黒色	0.755	0.700	0.440	成珠	30	7		木	黒色	0.880	0.630	0.330	成珠	"	9
	木	黒色	0.720	0.685	0.325	成珠	"	8		木	黒色	0.880	0.260	0.475	成珠	"	10
	木	黒色	0.705	0.635	0.360	成珠	"	9		木	黒色	0.900	0.600	0.335	成珠	"	11
	木	黒色	0.690	0.670	0.250	成珠	"	10		木	黒色	0.950	0.800	0.180	成珠	"	12
	木	黒色	0.625	0.535	0.250	成珠	"	11		木	黒色	0.915	0.605	0.555	成珠	"	13
	木	黒色	0.600	0.565	0.260	成珠	"	12		木	黒色	0.895	0.435	0.690	成珠	"	14
	木	黒色	0.600	0.500	0.225	成珠	"	13		木	黒色	0.795	0.635	0.250	成珠	"	15
	木	黒色	0.650	0.545	0.250	成珠	"	14		木	黒色	0.890	0.510	0.320	成珠	"	16
	木	黒色	0.615	0.480	0.250	成珠	"	15		木	黒色	0.805	0.415	0.195	成珠	"	17
	木	黒色	0.670	0.595	0.395	成珠	"	16		木	黒色	0.765	0.395	0.385	成珠	"	18
	木	黒色	0.575	0.350	0.245	成珠	"	17									

第4表 第2号墓地出土銭貨一覧表

出土遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号		
		直径	輪厚	孔径	郭厚	重量		挿図	遺物	
1号墓	古寛永	23.85	0.85~1.15	5.45	1.05~1.25	2.2		26	2	
	新寛永	22.45	0.95	6.15	0.65~0.95	1.6		"	3	
	新寛永	22.25	1.15~1.25	6.45	0.95	2.0		"	4	
	判読不能	25.15	1.05~1.15	5.05	1.15~1.35	2.1	4片に割れ	図無し		
	古寛永	23.15	1.25	—	0.95~1.25	1.7	3片に割れ			
	判読不能	—	—	—	—	0.1	小片2片			
2号墓	古寛永	24.85	1.05	5.95	0.95	3.1		27	11	
	古寛永	24.55	1.25	5.45	1.25	3.6		"	12	
	新寛永	24.25	1.00	6.05	0.95	2.3		"	13	
	文銭	25.25	1.30	5.95	0.95~1.15	3.7	背「文」	"	14	
	新寛永	22.75	0.95	6.55	0.75~0.85	2.2		"	15	
	新寛永	24.25	0.95~1.25	5.95	0.65~0.85	2.6		"	16	
	新寛永	24.25	0.95~1.25	5.95	0.65~0.85	2.6		"	16	
3号墓	古寛永	25.05	0.85~1.15	5.95	0.85~0.95	2.9		28	6	
	新寛永	23.05	1.15~1.45	6.05	1.15~1.25	3.0		"	7	
	新寛永	23.15	1.25~1.75	5.65	0.75~1.15	2.5		"	8	
	新寛永	24.15	1.00~1.15	6.05	0.80~1.15	2.4		"	9	
	新寛永	24.65	0.85~1.30	8.75	0.80~0.85	1.6	2片に割れ	図無し		
	新寛永	—	1.00	—	0.80~0.90	1.6	5片に割れ			
4号墓	古寛永	24.15	1.15	5.45	0.95~1.15	3.3		29	19	
	新寛永	24.25	0.95	6.15	0.85	2.3		"	20	
	新寛永	22.35	1.30	5.95	1.05~1.15	2.9		"	21	
	新寛永	23.35	1.15~1.25	6.45	0.75~1.15	2.5		"	22	
	新寛永	23.45	1.10~1.15	5.85	1.05	3.1		"	23	
	新寛永	22.75	1.30	5.75	1.15	3.0		"	24	
5号墓	古寛永	23.85	1.15~1.25	5.45	0.95~1.15	2.6		30	18	
	古寛永	23.95	0.85	5.85	0.65	1.9		"	19	
	古寛永	23.55	1.00~1.20	5.75	1.05~1.15	2.9		"	20	
	新寛永	24.55	0.85~1.05	5.95	0.35~0.95	2.1		"	21	
	新寛永	23.85	1.25	5.85	1.15	3.3		"	22	
	新寛永	24.45	1.15~1.30	5.85	1.05~1.15	3.1		"	23	
6号墓	古寛永	24.45	0.95~1.05	5.95	0.90	1.8		31	1	
	古寛永	24.65	1.25	5.45	1.15	3.3		"	2	
	新寛永	24.95	1.05	6.15	0.90~1.05	2.0		"	3	
	新寛永	24.35	0.95	6.55	0.65~0.85	2.1		"	4	
	新寛永	—	0.95	—	0.85	1.5	5片に割れ	図無し		

第3節 原田第40号墓地の遺物

原田第40号墓地（以下「第40号墓地」という）においては、発掘調査した土葬墓87基のうち68基から遺物が出土した。また、包衣容器あるいは包衣容器と思われる容器2点が出土した。他に表採遺物49点を図化した。

1. 土葬墓の遺物（第33～76図、第5～10表）

第1号墓（図無し）

墓壙内から陶器片1点と鉄片1点が出土したが、詳細不明である。

第2号墓（第33図、図版24）

短い長方形横棺内から鉄片1点・銭6枚が出土した。

第33図1は、鉄製の和鉄である。錆で劣化し、握り部の一部が欠損している。全長14.65cmで、握り部は断面長方形で厚さ0.3cmを測る。握り部から刀部にかけての両面に布の付着痕がある。

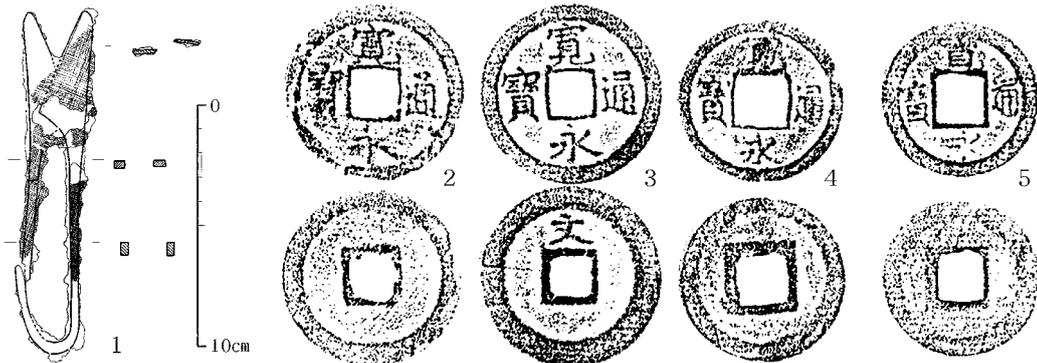
第33図2～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり2・4・5は新寛永、3は文銭である。2・3・4には布が付着している。なお、3の背面には「文」字が銭出している。なお、図化しなかったが、別に判読不能の銅銭2枚も共伴している。

第3号墓

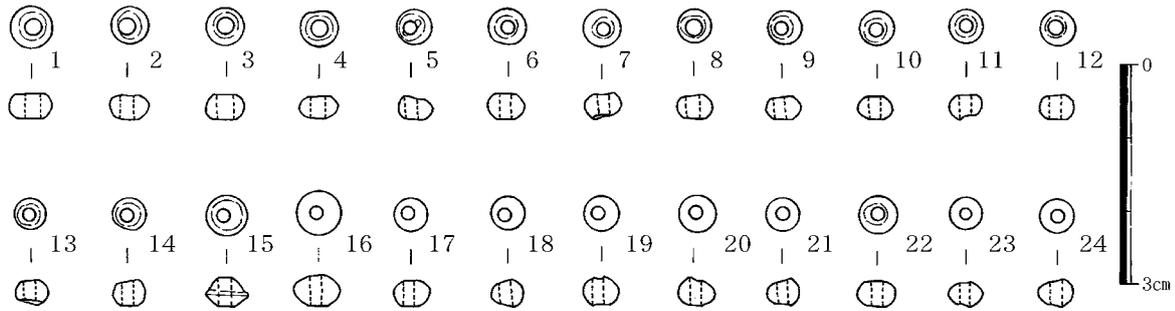
遺物は出土しなかった。

第4号墓（図無し）

墓壙内から釘2本が出土した。いずれも鉄製の角釘であり、長さ4.0cm前後である。数量的に少なく、桶棺の蓋に伴うものと思われる。



第33図 第40号墓地第2号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）



第34図 第40号墓地第7号墓出土遺物実測図（原寸）

第5号墓（図無し）

墓壙底面、桶棺底中心部の外から釘1本が出土した。鉄製の角釘であり、長さ8.0cmと大きいものである。出土位置から、棺材に伴うものと思われる。

第6号墓（図無し）

墓壙内から黒耀石片1点が出土したが、本墓に伴うものではない。

第7号墓（第34図、図版21）

短い長方形横棺内から玉24点が出土した。

第34図1～24は、全てガラス製の数珠玉である。

1～14は濃緑色を呈し、15～24は白色透明である。大半が断面が楕円形であるが、15だけは他と異なり断面形が算盤形を呈しており径0.575cm・厚さ0.40を測る。1・16はやや大きく、1の径0.585cm・厚さ0.34cm、16の径0.61cm・厚さ0.415cmを測る。他は径0.465～0.56cm・厚さ0.305cm～0.395cmである。

第8号墓

遺物は出土しなかった。

第9号墓（図無し）

墓壙内から釘10本程が出土した。全て鉄製の角釘であり、長さ3.5～4.0cmである。

第10号墓（図無し）

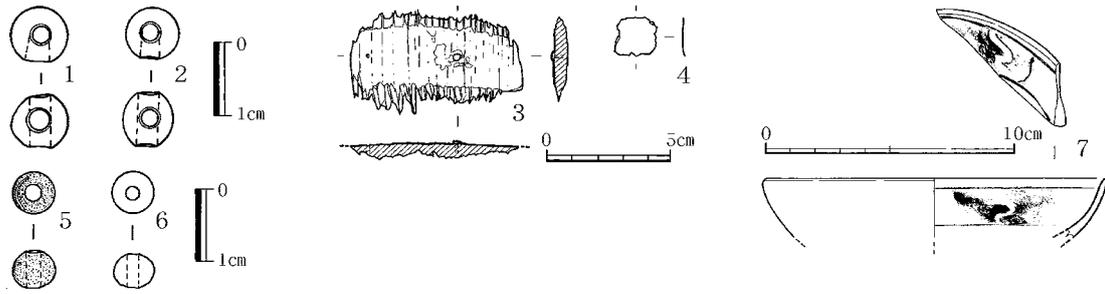
墓壙内から釘1本程が出土した。鉄製の角釘とおもわれるが、不明瞭である。

第11号墓（図無し）

墓壙内から木片1点が出土した。長さ3.5cm・幅0.8cm程の小片であり、詳細は不明である。

第12～14号墓

遺物は出土しなかった。



第35図 第40号墓地第15・17～19号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)

第15号墓 (第35図1・2、図版21)

墓壙内から玉2点が出土した。

第35図1・2は、ガラス製の数珠玉である。いずれも、T字状に孔が開いた母珠であり、濁った白色を呈している。1は径0.775cm・厚0.69cmを、2は径0.72cm・厚0.73cmを測る。

第16号墓 (図無し)

墓壙内から釘と思われる鉄片が四片出土したが詳細は不明である。

第17号墓 (第35図3・4、図版31)

墓壙内から板材片1点と金具片1点が出土した。

第35図3は、丸(?)釘2本が打たれた板材であり、片面のみ残っている。柁目方向の長さ4.2cm・幅6.9cm・残存厚0.7cmを測る。釘には緑青が付着しており、銅版を貼り付けた板材と思われる。

第35図4は、青銅製の薄い金属片である。残存形は略方形で縦1.59cm・横1.64cmを測り、厚さは0.028cmと著しく薄い。片(裏?)面には極く薄い膜が付いている。1と板材と関係するものと思われる。

第18号墓 (第35図5・6、図版21)

短い長方形横棺内から玉2点が、墓壙から坏1点が出土した。

第35図5・6は、ガラス製の数珠玉である。5は径0.60cm・厚0.52cmを測り、濃い青色を呈するが一部傷に白色が入っている。6は径0.585cm・厚0.47cmを測る、白色透明である。

墓壙内棺外出土坏は古墳時代の須恵器坏身であり、本墓には直接伴わないと考える。

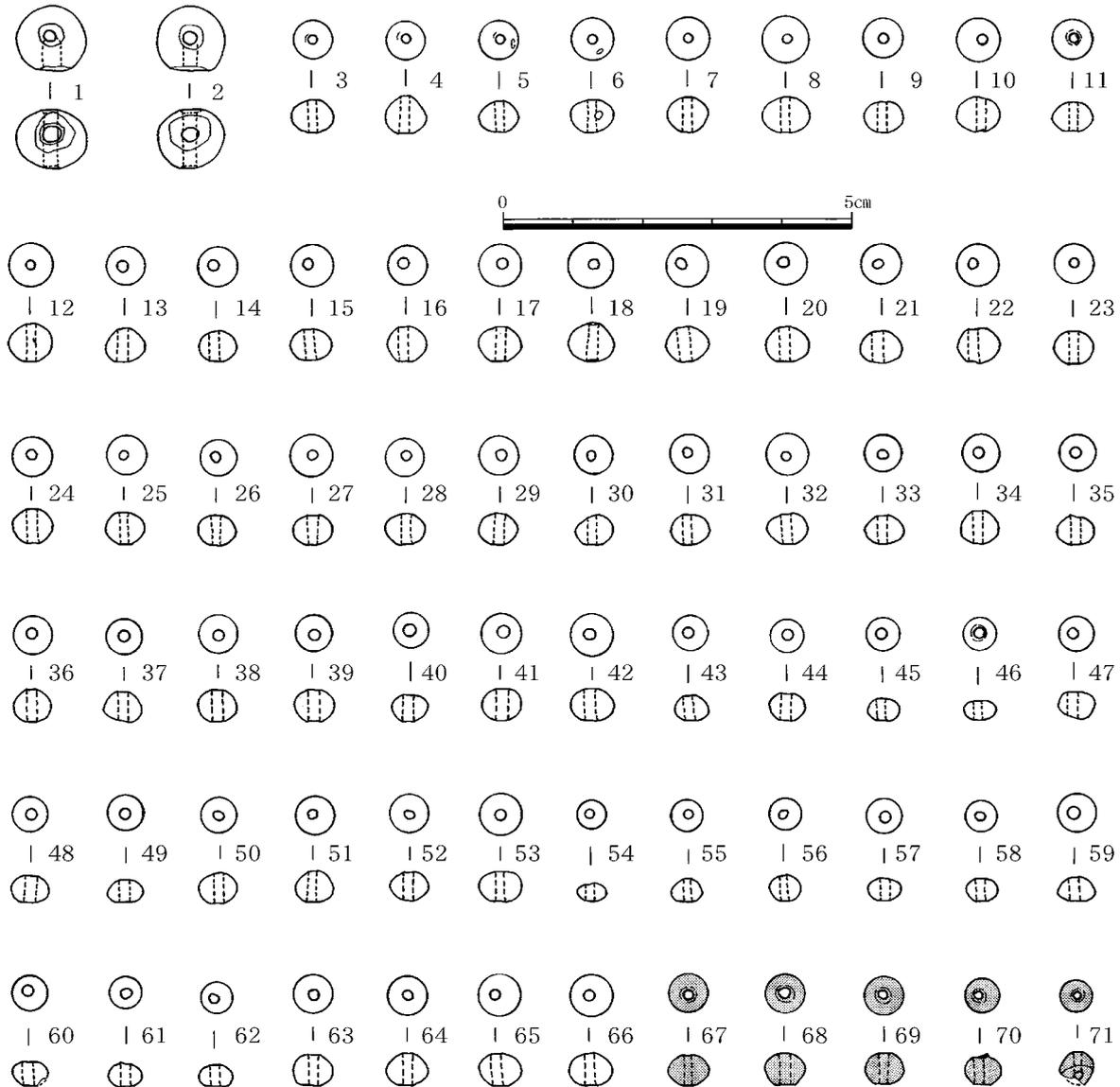
第19号墓 (第35図7)

墓壙内から皿片1点が出土した。

第35図7は、1690～1730年代の肥前産染付磁器皿である。口縁部から体部にかけての約1/8の破片であるが、復原口径13.8cmを測る。見込み文様は墨弾き振り花文である。

第20号墓

遺物は出土しなかった。



第36図 第40号墓地第21号墓出土遺物実測図（原寸）

第21号墓（第36図、図版21）

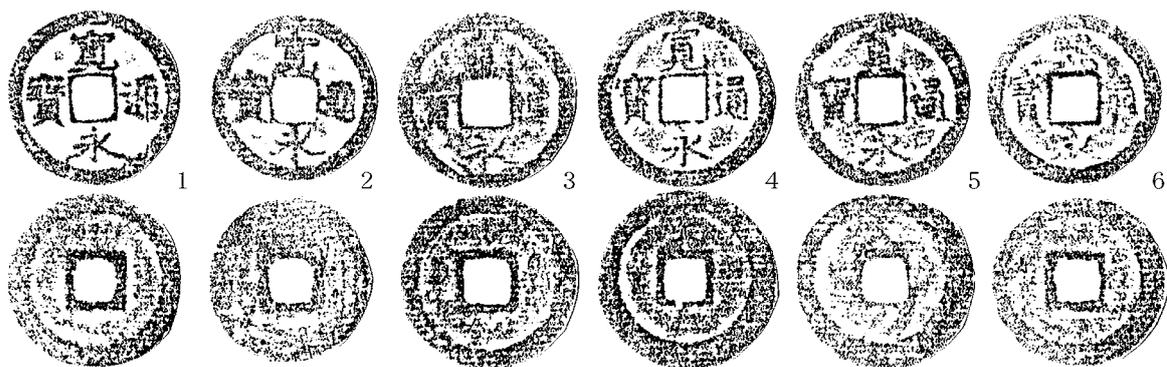
短い長方形横棺内から玉71点が出土した。人骨と玉との位置関係から、被葬者の腕に通された数珠と思われる。

第36図1～71は、数珠玉であり、1組の数珠と思われる。

1・2は、T字状に孔が開く母珠であり、白色透明の水晶製と思われる。寸法は、1が径1.02cm・厚0.83cm、2が径0.985cm・厚0.87cmを測る。

3～66は、やや濁った白色透明を呈するガラス製の玉である。大きさにバラつきがあるが、数量的に成珠と思われる。寸法は、径0.415～0.635cm・厚0.255～0.575cmである。

67～71は、色付きガラスの玉である。このうち水色を呈する67・68と茶色を呈する69・70は、大きさも径0.515～0.59cm・厚0.44～0.46cmと揃っており、四天珠と思われる。紺色を呈する71は、径0.47cm・厚0.455cmとやや小さい。



第37図 第40号墓地第22号墓出土銭貨拓影図（原寸）・遺物実測図（S=1/3）

第22号墓（第37図、図版31）

正方形縦棺内から銭6枚・漆膜が、墓壙内から金属付木片3点・木片2点余り、釘8本程が出土した。

第37図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は古寛永、4・5は文銭、3・6は、新寛永である。4・5の背面には「文」字が鑄出している。

棺内出土の漆膜は、表面朱色を呈している。器種不明であるが、副葬された漆器と思われる。

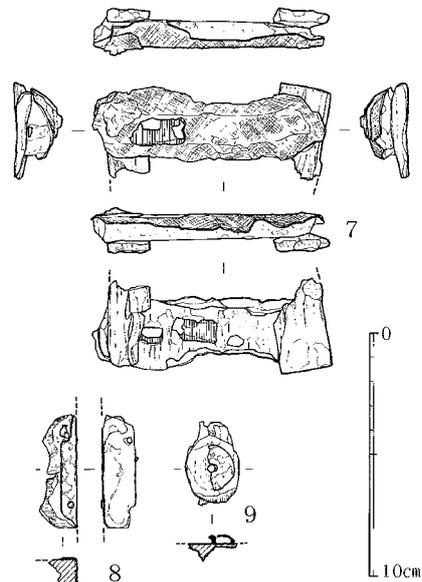
第37図7は、2枚の板に金属材が横渡しされた状態のものである。2枚の板は本来同一の厚0.4cm・幅8.9cm程の1枚板と思われる。平面図右上には角が残っており、裏面には緑青が付着している。金属材には布の付着痕が残っている。縁金具として銅版を貼った板材と思われる。

第37図8は、小口側に縁金具として銅版を装着した板材である。緑青が付着している装着には短い丸釘を使用している。銅版の残存長4.6cm・最大幅1.4cmで、端部から0.65cmで直角に折って板材角に当てている。

第37図9は、直径1.9cm程の円形の銅製金具を釘で固定した木片である。緑青が付着しており、残存の長3.3cm・幅2.2cm・厚0.75cmを測る。

他の木片2点にも、8・9同様の縁金具や円形金具の痕跡が残っており、7～9を含めて棺材と考える。

釘は、全て鉄製の角釘であり、長さは、6.0cm前後と長い。棺に使用されたものとしては、数量的に少ない。

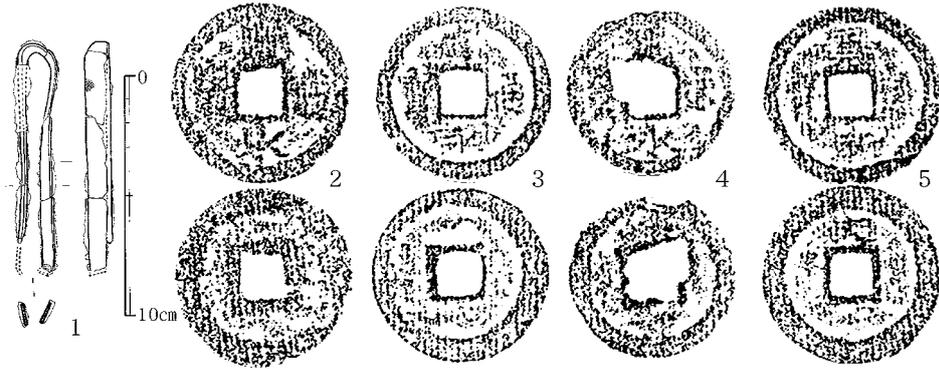


第23号墓（第38図、図版24）

正方形縦棺から毛抜き1点・銭6枚・漆膜が、墓壙内から釘15本程が出土した。

第38図1は、鉄製の毛抜きである。錆びて劣化著しく、両刀部は欠損している。握り部の断面は内側がやや窪む略長方形を呈している。残存長6.25cm・幅1.0cm・厚0.3～0.4cmを測る。

第38図2～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、2は古寛永、3・4は新寛永、5は文銭である。5の背面には「文」字が鑄出



第38図 第40号墓地第23号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

してある。なお、図化できなかったが、別に判読不明の銅銭1枚と鉄銭1枚も相伴している。

漆膜は、表面朱色を呈している。棺内底面の3箇所出土しており、少なくとも3点以上の漆器が副葬されていたと思われる。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5～5.0cmのものが多い。

第24号墓 (第39図、図版7・11・13)

墓壙内から碗1点・仏飯器1点・皿2点以上と釘10本程が出土した。

第39図1は、1730～60年代の肥前産染付磁器碗である。約1/2を欠損しており、復原器高4.6cm・口径10.4cmで、高台の径3.8cm・高さ0.4cmを測る。裏文様は、草花文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第39図2は、18世紀後半の肥前産染付磁器仏飯器である。身の約1/3を欠損しており、器高7.4cm・口径8.2cm・脚裾部径5.3cmを測る。見込み文様は五弁花文、裏文様は格座間文である。身の体部と底部の境に1条、底部と脚部との境に1条の線が描かれている。

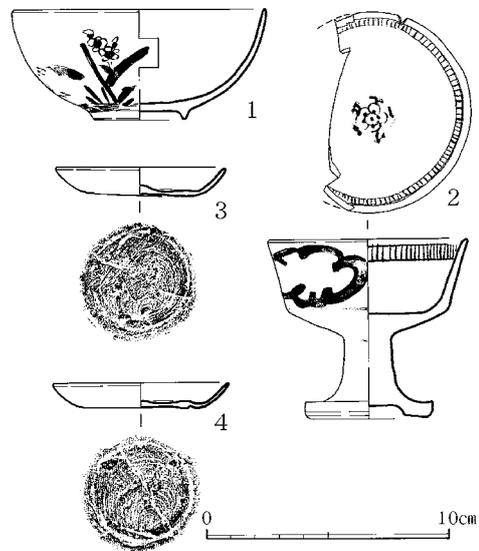
第39図3・4は、土師器皿である。いずれも口縁部の一部が欠損している。口縁部が大きく開く形態を呈している。胎土は、緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈している。調成は内外面ともヨコナデであり、底部外面には回転糸切り痕が残っている。

3は、器高1.2cm・口径6.95cm・底径4.35cmを測る。

4は、器高1.05cm・口径7.2cm・底径4.7cmを測る。

なお、図化できなかったが、別に煤が付着した土師器皿片が数片出土している。

釘は、全て鉄製の角釘である。破片が多いが、長さ3.5cm前後のものである。



第39図 第40号墓地第24号墓出土遺物実測図 (S=1/3)

第25号墓（第40図、
図版7）

正方形縦棺から
碗1点・銭6枚・
布片が、墓地内か
ら釘70本程が出土
した。

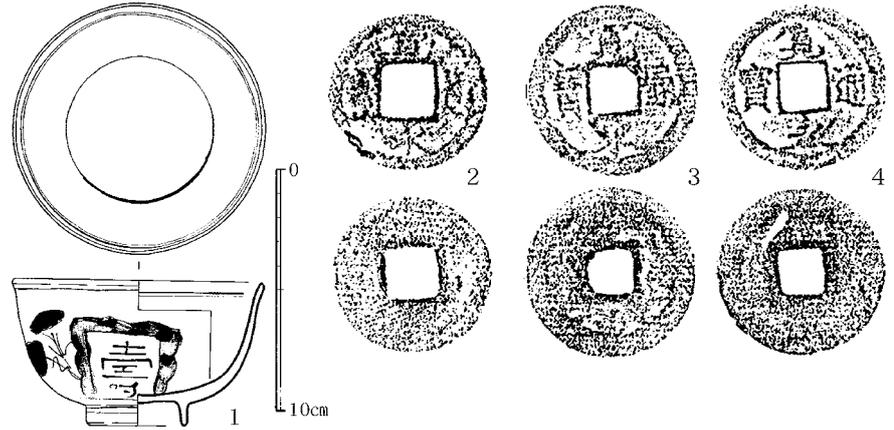
第40図1は、
1820～60年代の肥
前産染付磁器碗で

ある。完形品で、
器高6.0cm・口径10.4cmで、高台の径4.2cm・高さ0.85cmを測る。
口縁部は端反形を呈している。裏文様は朝顔文・蝶文と額文に
寿文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がか
かっている。

第40図2～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、
全て新寛永である。なお、銹着のため図化できなかったが、判
読不明の銅銭2枚と鉄銭1枚が共伴している。

布片は、2種類のもので出土した。1つはガーゼ状のもので、
眼帯のような形状をしており、やや炭化している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多い
が、長さ5.0cmのものもある。



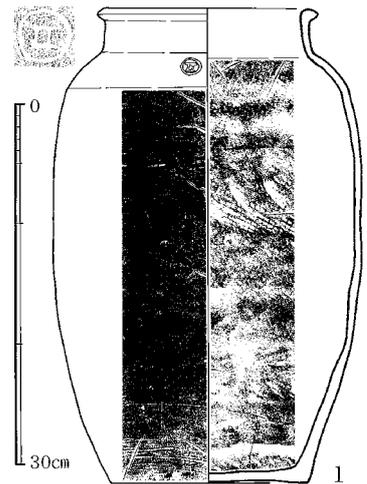
第40図 第40号墓地第25号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

第1号壺棺（第41図、図版6・11）

第25号墓の墓壙内から棺壺1点が、棺内から仏飯器1点が出
土した。

第41図1は、18世紀の肥前産陶器壺である。完形品で器高
39.3cm・口径18.0cm・頸径17.4cm・胴径25.3cm・底径16.2cmを測る。調
整は、胴部内面を格子目文叩きの後ナデ、外面を叩きの後ナデ仕上げ、
他はナデ仕上げしている。胴部内面には工具の圧痕が見られる。肩部外面
に「Ⅱ」の陰刻が押されている。

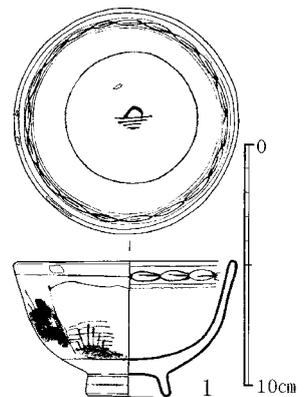
第41図2は、幕末～明治期の瀬戸・美濃系瑠璃釉陶器仏飯器である。
完形品で、器高5.2cm・口径5.5cmで、脚部裾径4.5cm・脚高2.8cmを測る。
口縁部から脚裾部までの外面は瑠璃釉を、坏身内面は透明釉がかかっ
ている。脚部内面から裾端部にかけては無釉である。



第41図 第40号墓地第1
号壺棺出土遺物実測図
(S=1/6・1/3)

第26号墓（第42図、図版7）

長い長方形横棺から碗1点が、墓壙内から釘10本余りが出土した。



第42図 第40号墓
地第26号墓出土遺
物実測図 (S=1/3)

第42図1は、1820～60年代の肥前系染付小碗である。完形品で、器高5.7cm・口径9.2cmで、高台の径3.5cm・高さ0.9cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は岩波文と口縁部に渦連続文、裏文様は花蝶文と扇面に山水文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。ただし、口唇部の一部の釉が剥がれている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm～4.5cmのものが多い。長い長方形横棺に使用された釘としては、数量的に少ない感がある。

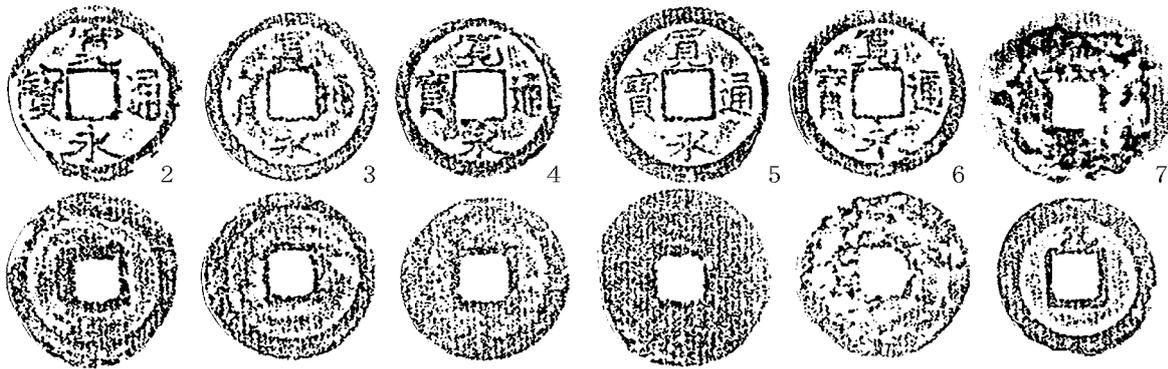
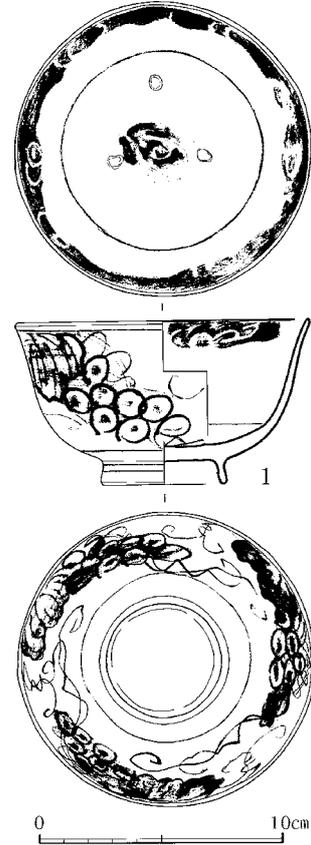
第27号墓（第43図、図版7）

正方形縦棺から碗1点、銭6枚が、墓壙内から釘50本程が出土した。

第43図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。完形品で、器高6.9cm・口径12.2cmで、高台の径5.2cm・高さ1.0cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は底面と口縁部に墨弾きによる雲文、裏文はぶどう文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込に三足付ハマの溶着痕がある。

第43図2～7は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、2は古寛永、3～7は新寛永である。7の背面には「元」字が鋳出している。全てに布が付着している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5～5.0cmのものが多い。



第43図 第40号墓地第27号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

第28号墓（第44図、図版7・13）

正方形縦棺から碗1点・銭6枚が、墓壙内から碗1点・猪口1点・火入れ1点・皿2点・漆膜と釘2本程が出土した。

第44図1は、1780～1820年代の肥前系染付磁器碗である。棺内からの出土である。口唇部4ヶ所が欠けているが略完形で、器高4.9cm・口径7.7cmで、高台の径3.65cm・高さ0.5cmを測る。底部から胴部にかけて丸みを有し、口縁部が直に立ち上がる器形を呈している。茶飲み

碗と思われる。見込み文様は蝶文と思われ、裏文様は草・蝶文と思われる。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第44図2～6は、墓壙内、棺外からの出土である。

2は、18世紀の肥前産染付磁器碗である。口縁部が約6/7欠損し、復原器高4.8cm・復原口径10.8cmで、高台の径4.0cm・高さ0.5cmを測る。裏文様は、梅文である。畳付は無釉で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。他の内外面とも透明釉がかかっている。見込に重ね焼きの溶着痕がある。

3は、17世紀末～18世紀第1四半期の肥前産染付磁器猪口である。口縁部から胴部は欠損しており、残存高3.4cm・胴部最大径5.6cm・底径3.4cmを測る。底部は、上げ底である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

4は、17世紀後半～18世紀前半の肥前産青磁火入れである。口縁部から胴部の1/4の破片であり残存高5.5cm・復原口径10.8cmを測る。口縁部内外面と胴部外面には青磁釉がかかっているが、胴部内面は無釉である。

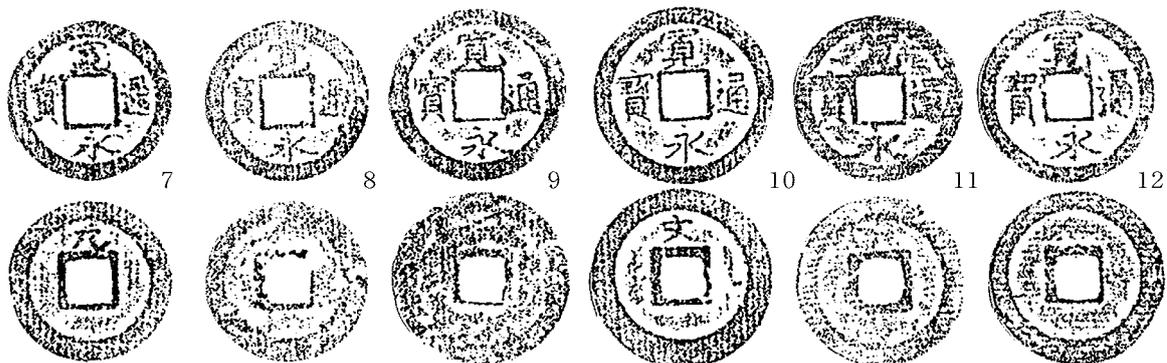
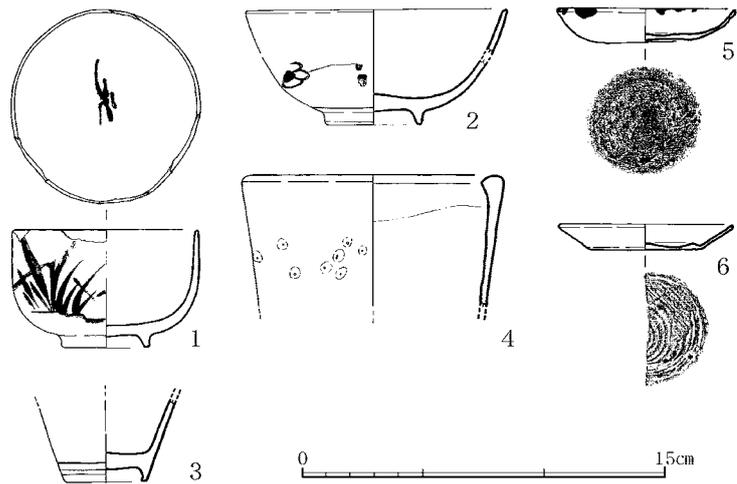
5・6は、土師器皿である。いずれの調整も、内外面ともヨコナデであり、底部外面は回転糸切り離しを行っている。

5は、内弯気味に開く形態を呈している。完形品で、器高1.4cm・口径7.35cm・底径4.5cmを測る。口唇部4ヶ所に煤が付着している。底部外面は糸切りの後ナデ仕上げされている。

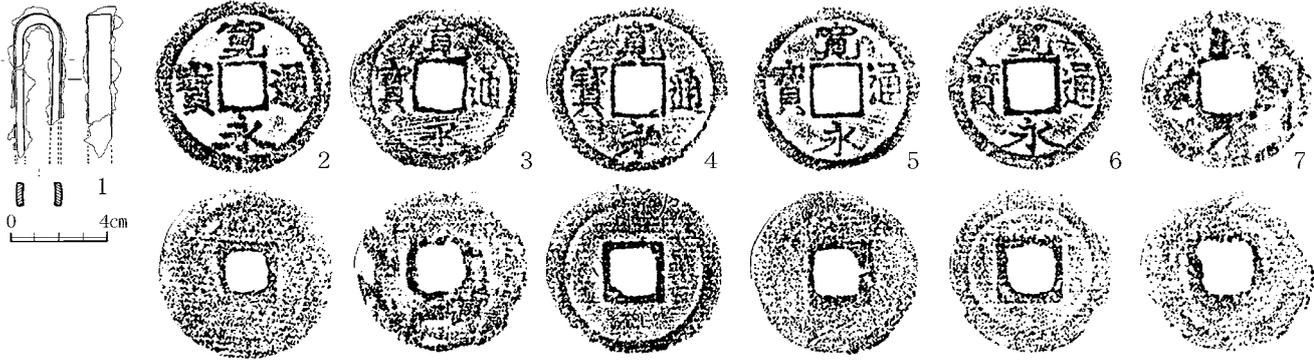
6は、直線的に開く形態を呈している。約1/2欠損しており、器高1.1cm・復原口径7.2cm・底径4.65cmを測る。

第44図7～12は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、10は文銭、7～9・11・12は新寛永である。7・8の背面に「元」字を、10の背面には「文」字を鑄出している。全てに漆が付着している。

漆膜片は、表面朱色を呈しており、中には、径3.3cm程の円形のものがある。椀形の漆器と思われる。



第44図 第40号墓地第28号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)



第45図 第40号墓地第29号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

釘は、全て鉄製の角釘である。いずれも折れており、明確ではないが、最長のもので長さ3.0cmを測る。

第29号墓 (第45図、図版24)

桶棺から毛抜き(?) 1点・銭6枚・漆膜片が、墓地内から釘10本余りが出土した。

第45図1は、鉄製の毛抜きと考える。先を欠損した握り部のみの破片であり、和鋏の可能性もある。握り部の断面は、やや内窪みの長方形を呈する。残存長6.25cm・幅1.0cm・厚さ0.3~0.4cmを測る。一部は、布付着痕がある。

第45図2~7は、銭貨である。全て銅銭であり、2~6は、寛永通宝であるが、7は判読不明である。1は古寛永、2~5は新寛永である。

棺内出土の漆膜は、表面朱色を呈しているが、形状は不明である。

棺内からは、別に布が付着したコールタール状のものが出土したが、詳細は不明である。

釘は、全て鉄製である。1本だけ丸釘であるが、他は全て角釘である。丸釘は、長さ7.0cmのものである。角釘は欠損品ばかりであり長さは不明であるが、残存長3.0cm前後のものが多い。

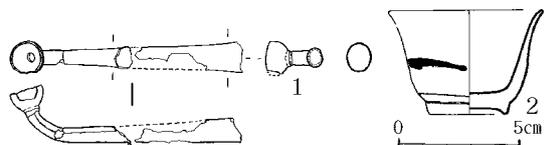
第30号墓 (第46図1、図版22)

墓壙内から煙管1点が出土した。

第46図1は、青銅製の羅宇煙管の雁首である。緑青が付着劣化著しく、胴・首・火皿の一部が欠損している。復原長は9.45cm以上・火皿径1.45cm・火皿高0.75cmを測る。首の断面は径0.6cmの円形を呈するが、胴の断面は楕円形を呈し、小口付近で1.0×1.2cmを測る。

第31号墓

遺物は出土しなかった。



第46図 第40号墓地第30・32号墓出土遺物実測図 (S=1/3)

第32号墓 (第46図2、図版8)

墓壙内から小坏1点が出土した。

第46図2は、18世紀前半の肥前産染付磁器小坏である。口縁部から胴部にかけての約4/5

が欠損しており、器高4.4cm・復原口径6.4cmで、高台の径3.2cm・高さ0.5cmを測る。裏文様は、山水文である。内外面とも透明釉がかかっているが、畳付は釉剥ぎされている。

第33号墓

遺物は出土しなかった。

第34号墓 (第47図、図版6・13)

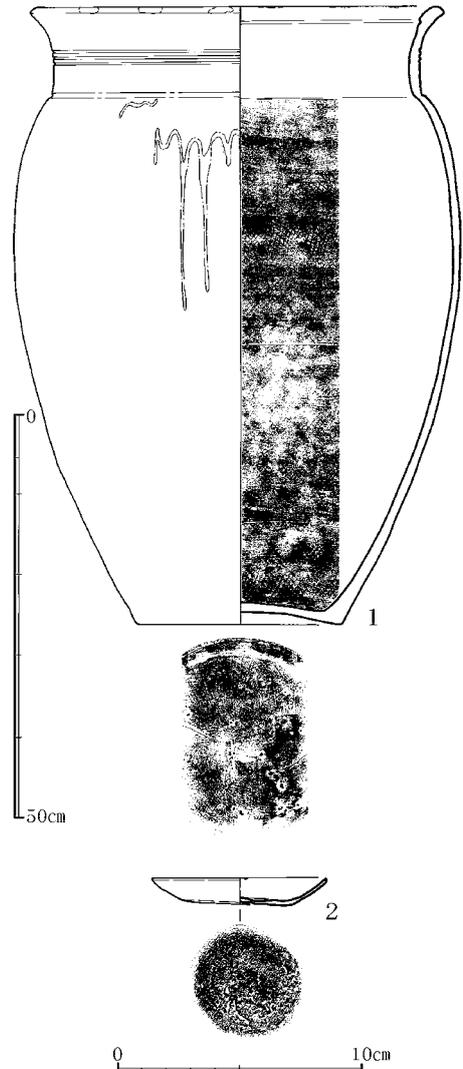
墓壙内から棺甕1点・皿1点が、棺内から木屑が出土した。

第47図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高75.5～75.8cm・口径50.6cm・頸径44.6cm・胴径54.5cm・底径24.9cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を(斜)格子目文叩きの後ナデ、底部外面を(斜)格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉を剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17個所に目跡が残っている。

第47図2は、土師器皿である。口縁部から胴部にかけて半分弱が欠損し、器高1.15cm・口径7.1cm・底径4.35cmを測る。口縁部が直に開く形態を呈している。調整は、内外面ともヨコナデで、底部外面は回転糸切り離しを行っているが切りムラがあり明瞭ではない。口唇部1ヶ所に髹が付着している。

棺内出土の木屑は、鈍屑である。棺内の詰め物として使用されたものと考えられる。

また、墓壙内より白色を呈した漆喰状の塊が出土した。部分的布目の付着が見られるが、詳細は不明である。



第47図 第40号墓地第34号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

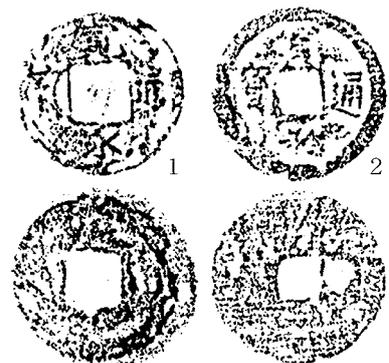
第35号墓 (第48図)

桶棺から銭6枚・木片1点が、墓壙内から釘3本程、土師器片が出土した。

第48図1・2は、銭貨である。いずれも寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。1の背面には「小」の字が記されている。なお、鏽着のため図化できなかったが、判読不明銅銭2枚と鉄銭1枚も相伴している。

棺内出土の木片は、厚さ0.5cmで、4.0×2.5cm程の小片である。桶材かと思われるが、定かではない。

釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品ばかりであるが、最



第48図 第40号墓地第35号墓出土銭貨拓影図 (原寸)

も長いもので長さ2.5cm前後ある。数量的に少なく、桶蓋に使用されたものとする。

第36号墓（第49図、図版13・23）

桶棺から櫛片2点・銭6枚・漆膜が、墓壙内から皿1点・釘5本ほどが出土した。

第49図1は、墓壙内、棺外出土の土師器皿である。口縁部が直に開く形態を呈している。口縁部から胴部にかけての半分弱が欠損しており、器高1.15cm・口径7.0cm・底部4.3cmを測る。調整は内外面ともヨコナデで、底部外面は回転糸切り離しを行っている。

第49図2・3は、木製の横櫛である。いずれも側端部の破片であり、同一個体かと思われる。2は、萎縮し劣化している。

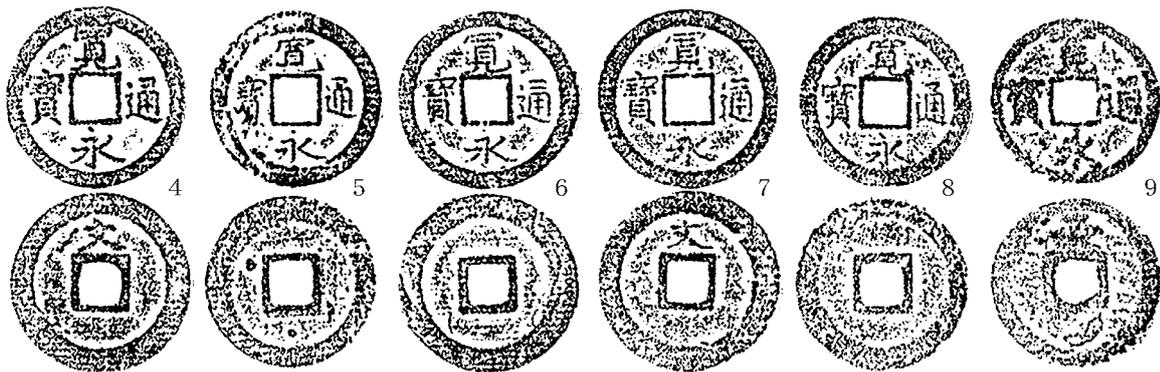
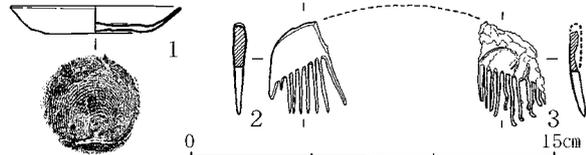
2は、残存長3.2cm・最大幅3.8cm・背幅（厚）0.5cmを測り、歯は8本を数える。

3は、残存長2.7cm・最大幅3.9cm・残存背幅（厚）0.35cmを測り、歯は10本を数える。片面に銅銭跡と思われる緑青が円形に付着している。

第49図4～9は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、4・7は文銭、5・6・8・9は新寛永である。4・7の背面には「文」字が、9の背面には「長」字が鋳出している。

漆膜は、棺内の3ヶ所で出土した。いずれも表面朱色を呈している。2個体以上の漆器が副葬されていたものと思われる。

釘は、全て鉄製の角釘である。1本だけ長さ10.0cmのものがあるが、他は長さ3.5cm前後のものと思われる。数量的に少なく、桶蓋に使用されたものとする。



第49図 第40号墓地第36号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

第37号墓（第50図、図版8）

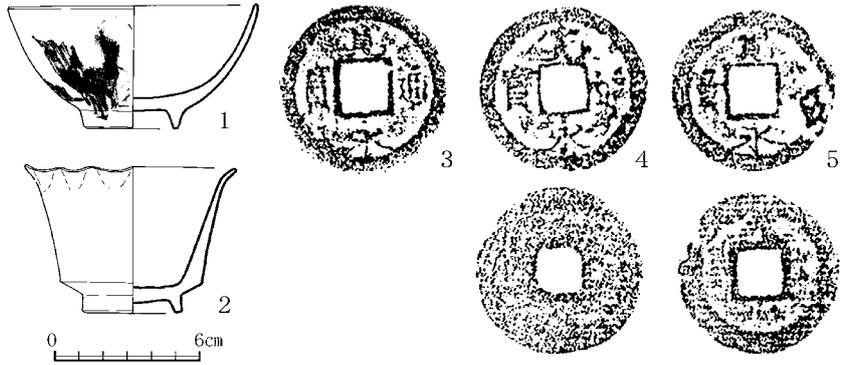
正方形縦棺から椀1点・銭4枚・漆膜が、墓壙内から猪口1点・釘40本程が出土した。

第50図1は、1770～1820年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬の完形品で、小広東形の碗である。器高5.2cm・口径10.3cm・高台径3.9cm・高台高0.7cmを測る。裏文様は花（アザミ？）と蝶文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第50図2は、18世紀の肥前産白磁猪口である。棺外出土で、口縁部から底部にかけての約1/2を欠損している。口縁部は波縁である。器高6.2cm・復原口径8.7cm・底径5.9cmで、

高台径4.15cm・高台高0.75cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第50図3～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、全て新寛永である。5の背面には「元」字が鑄出



第50図 第40号墓地第37号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

してある。なお、図化できなかったが、別に仙台通宝の鉄銭1枚が共伴している。

棺内出土の漆膜は、表面朱色を呈している。漆器が副葬されていたと思われる。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5～5.0cmのものが大半であるが、長さ10.0cm程のものが1本だけある。

第38号墓 (第51図、図版8)

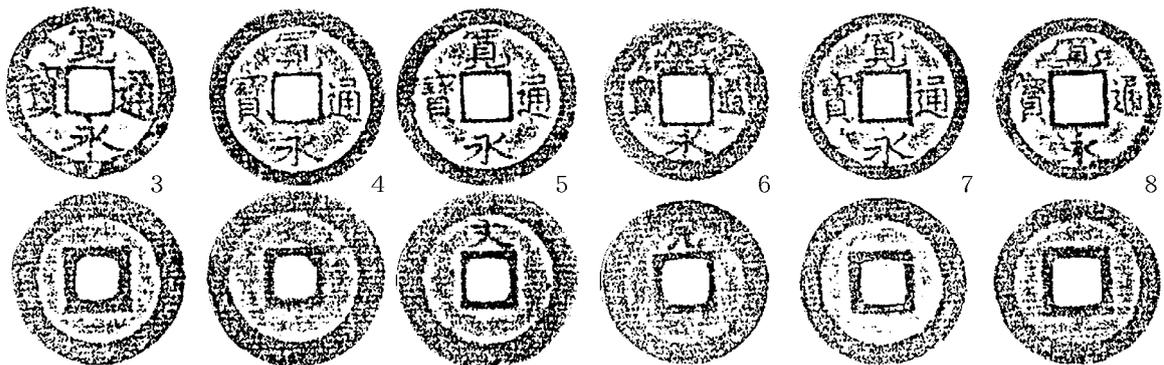
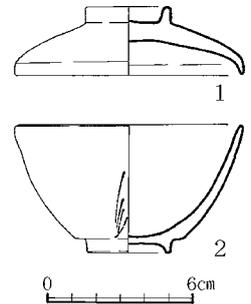
正方形縦棺から蓋1点・碗1点・銭6枚が、墓壙内から釘40本程が出土した。

第51図1は、18世紀前半の肥前産白磁蓋である。棺内副葬であるが、口縁部約1/3を欠損する。器高2.85cm・口径9.4cmで、つまみ径3.55cm・つまみ高0.65cmを測る。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第51図2は、18世紀後半の関西系錆絵陶器碗である。棺内副葬であるが、口縁部2ヶ所が少し欠損している。器高5.35cm・口径9.4cm・底径4.45cmで、高台径3.5cm・高台高0.6cmを測る。裏文様は若杉文と思われる。高台を含めた底部外面は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第51図3～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、4・5は文銭、6～8は新寛永である。4・5の背面に「文」字が、6の背面には「元」が鑄出してある。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、なかには長さ8.0～10.1cmのものが3本程ある。

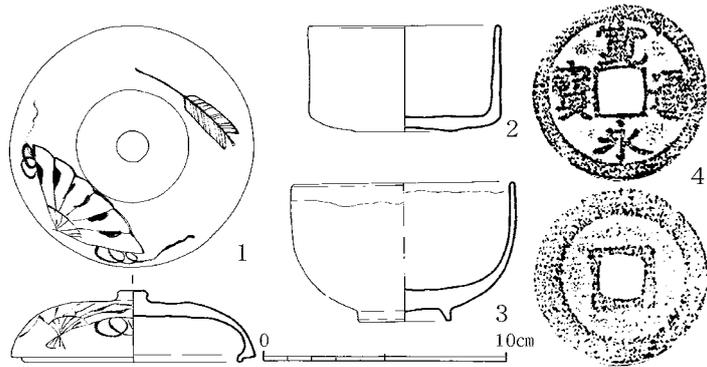


第51図 第40号墓地第38号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

第39号墓（第52図、図版8・12）

正方形縦棺から蓋1点・鉢1点・銭1枚が、墓壙内から碗1点・釘55本程が出土した。

第52図1は、1770～1810年代の肥前系染付磁器蓋である。棺内副葬の完形品で、内面に短いかえりを有する蓋である。器高3.0cm・かえり径9.0cm・口径10.0cmで、つまみ径1.25cm・つまみ高0.5cmを測る。裏（天井部外面）文様は



第52図 第40号墓地第39号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

扇と矢文である。かえり内面から口縁部平坦面にかけては無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第52図2は、19世紀の肥前系青磁鉢である。棺内副葬の完形品で、本来蓋が付くものであろう。器高4.4cm・口径7.9cm・底径8.0cmを測る。口唇部と底部外面中央の径5.3cm程は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第52図3は、1780～1820年代の肥前系磁器碗である。墓壙内・棺外出土で、口縁部から胴部の約5/6を欠損している。器高5.8cm・口径9.2cmで、高台径3.85cm・高台高0.5cmを測る。底部から胴部にかけて丸味を有し、口縁部が直に立ち上がる器形を呈している。茶飲み碗と思われる。内外面に透明釉を、さらに口縁部内外に鉄釉を施しているが、焼成不良で透明釉は乳白色を呈している。高台内外面と畳付にも釉は薄いがかかっている。

第52図4は、銭貨である。寛永通宝の銅銭で、古寛永である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～5.0cmのものが多い。

第40号墓（第53図1、図版8）

正方形縦棺から碗1点・銭6枚が、墓壙内から漆膜片・木片4点・釘45本程が出土した。

第53図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬品で、口唇部が1ヶ所欠けているが略完形品である。器高5.5cm・口径9.8cmで、高台径4.0cm・高台高0.75cmを測る。口縁部は端反形を呈している。見込み文様は岩波文、裏文様は雲と鶴文である。内外面に透明釉がかかっており、畳付とその周辺にアルミナサが塗られている。

銭6枚は、全て寛永通宝の鉄銭と思われる。全て錆着して図化できなかった。

木片は、4点とも小片であり、詳細は不明である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。

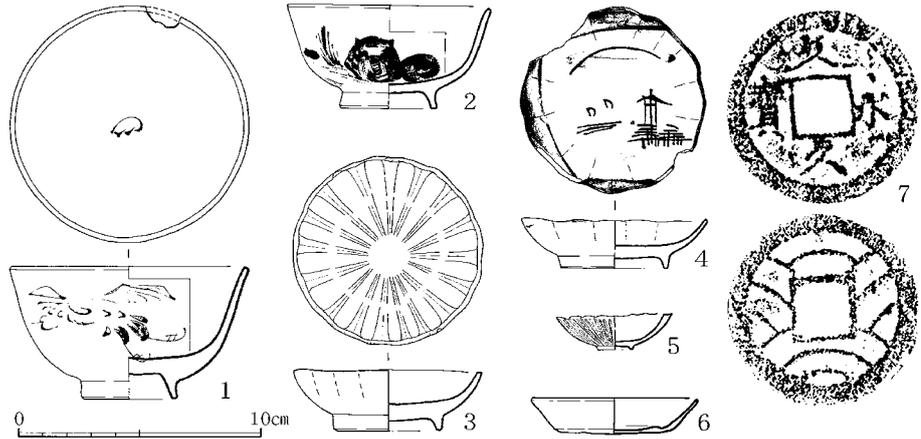
第41号墓（第53図2・3、図版8・11）

正方形縦棺から碗1点・皿1点が、墓壙内から漆膜・釘5本程が出土した。

第53図2は、1820～60年代の肥前系染付磁器小碗である。棺内副葬の完形品である。器高4.3cm・口径8.4cmで、高台径4.0cm・高台高0.65cmを測る。裏文様は、山水文である。畳付

は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第53図3は、1800~60年代の肥前系白磁手塩皿である。棺内副葬の完形品である。器高2.5cm・口径7.7cmで、高台径4.45cm・



第53図 第40号墓地第40~42号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

高台高0.7cmを測る。型打ち成形によるもので、口唇部には暗赤褐色の口紅が施されている。見込み文様は、型による菊花文である。釉付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

漆膜は、表面暗赤褐色を呈している。漆器1点分と思われる。

釘は、全て鉄製の角釘である。1本だけ長さ5.0cmのものがあるが、他は長さ3.3cm前後のものと思われる。

第42号墓 (第53図4~7、図版11・13)

桶棺から皿1点・紅皿1点・銭1枚が、墓壙内から皿1点・釘1本が出土した。

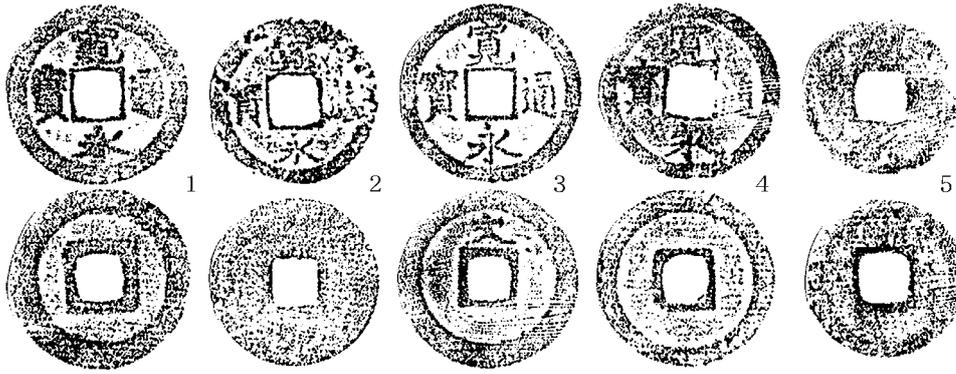
第53図4は、1820~60年代の肥前産染付磁器手塩皿である。棺内副葬品であるが、口縁部の3ヶ所が欠けている。器高2.1cm・口径7.65cmで高台径4.45cm・高台高0.5cmを測る。型打ち成形によるものであり、口唇部に染付と同色の口紅が施されている。見込み文様は山水文である。釉付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第53図5は、1800~60年代の肥前産白磁紅皿である。棺内副葬の完形品である。器高1.5cm・口径4.8cmで、高台径1.45cm・高台高0.2cmを測る。型押しによる成形であり、裏文様は型による貝の放射脈を呈している。内面から胴部外面の一部まで透明釉がかかっているが、底部から胴部にかけての外面の大半は無釉である。

第53図6は、土師器皿である。墓壙内・棺外出土で、口縁部約1/2を欠損している。口縁部が直に開く形態を呈している。調整は、内外面ともヨコナデで仕上げられており、底部外面には板状圧痕と思われる痕跡があるが不明瞭である。胎土は緻密で、焼成良好であり、色調は灰白色~にぶい黄橙色を呈している。内外面に煤らしき黒色の付着が見られる。器高1.5cm・復原口径6.85cm・復原底径4.95cmを測る。

釘は、鉄製の角釘であるが、小片のため寸法は不明である。

第53図7は、銭貨である。文久永宝の銅銭であり、背面に波文を鋳出している。



第54図 第40号墓地第43号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第43号墓（第54図）

墓壙内から銭6枚・釘15本程が出土した。

第54図1～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1は古寛永、3は文銭、2・4・5は新寛永である。3の背面には「文」字を鑄出してある。なお、図化できなかったが、別に鉄銭1枚も共伴している。5と鉄銭には布が付着している。

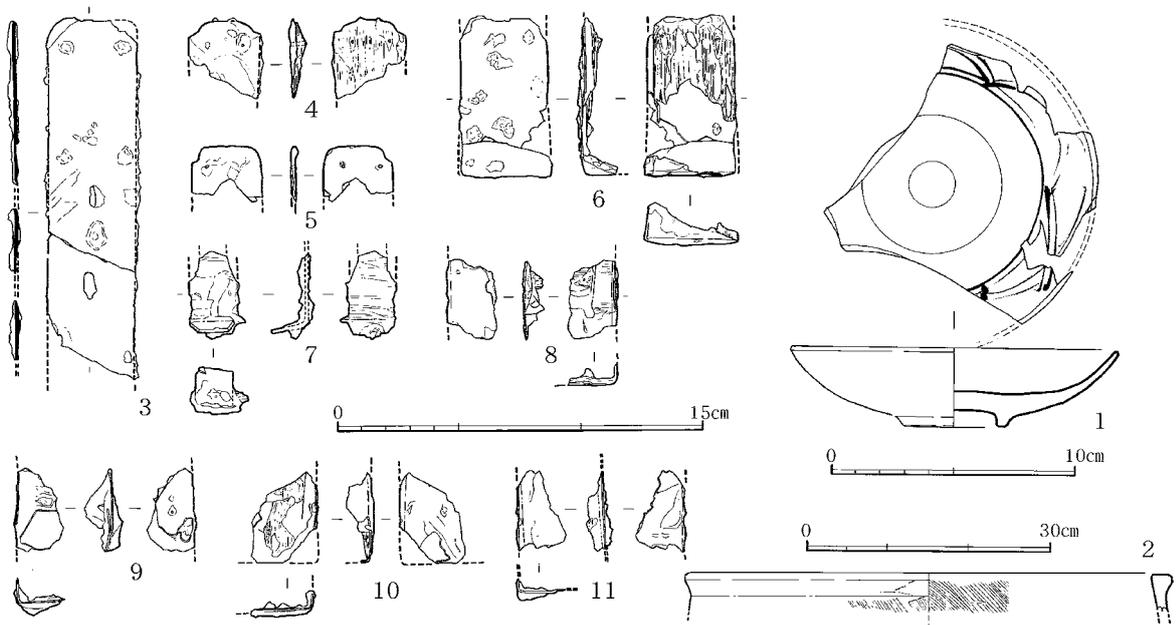
釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。

第44号墓（第55図、図版11・31）

墓壙内から皿1点・甕片1点・鉄板片11点・釘7本程が出土した。

第55図1は、18世紀後半の肥前（波佐見）産染付磁器皿である。約1/3の残りであり、器高3.3cm・口径13.4cmで、高台径4.2cm・高台高0.4cmを測る。見込文様は、側面斜格子目文である。畳付は無釉で、見込は蛇ノ目釉剥ぎされているが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第55図2は、土師質の大甕である。口縁部約1/10の破片で、復原残存高4.8cm・復原口径



第55図 第40号墓地第44号墓出土遺物実測図（S=1/3・1/9）

60.4cm・復原頸径59.0cmを測る。胎土密で、焼成良好であり、色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は、胴部内外面はナナメハケ、口頸部はナデである。

第55図3～11は、鉄製の縁金具である。全てに木質が付着している。3～5は直すぐであるが、6～11は直角な角を有しており、角に装着するものであろう。厚さは、3だけは0.15cm程あるが、他は全て0.1cm以下と薄い。幅は、3・6は3.6～3.7cmであるが、4・5は2.9～3.0cmである。他の幅は不明である。3～6には明瞭に釘の跡が確認できる。3～11はいずれも、正方形縦棺の縁金具と考えてよい。

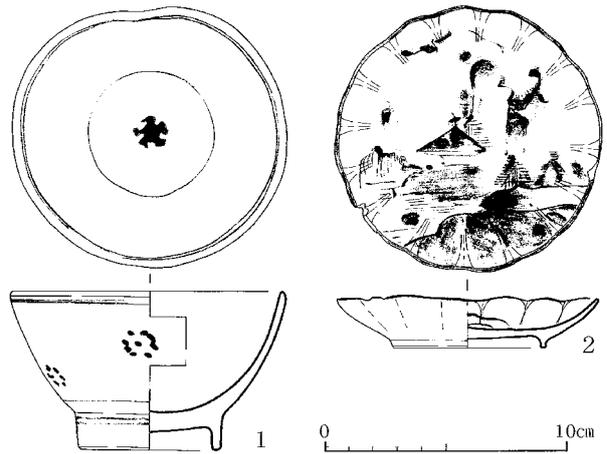
釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5cm前後のものが1本あるが、長さ5.5～8.0cmと長いものが3本ある。数量的にも少なく、本墓の正方形縦棺は、縁金具によって棺材を組んでいたと思われる。

第45号墓（図無し）

墓壙内から皿片・漆膜片が出土した。

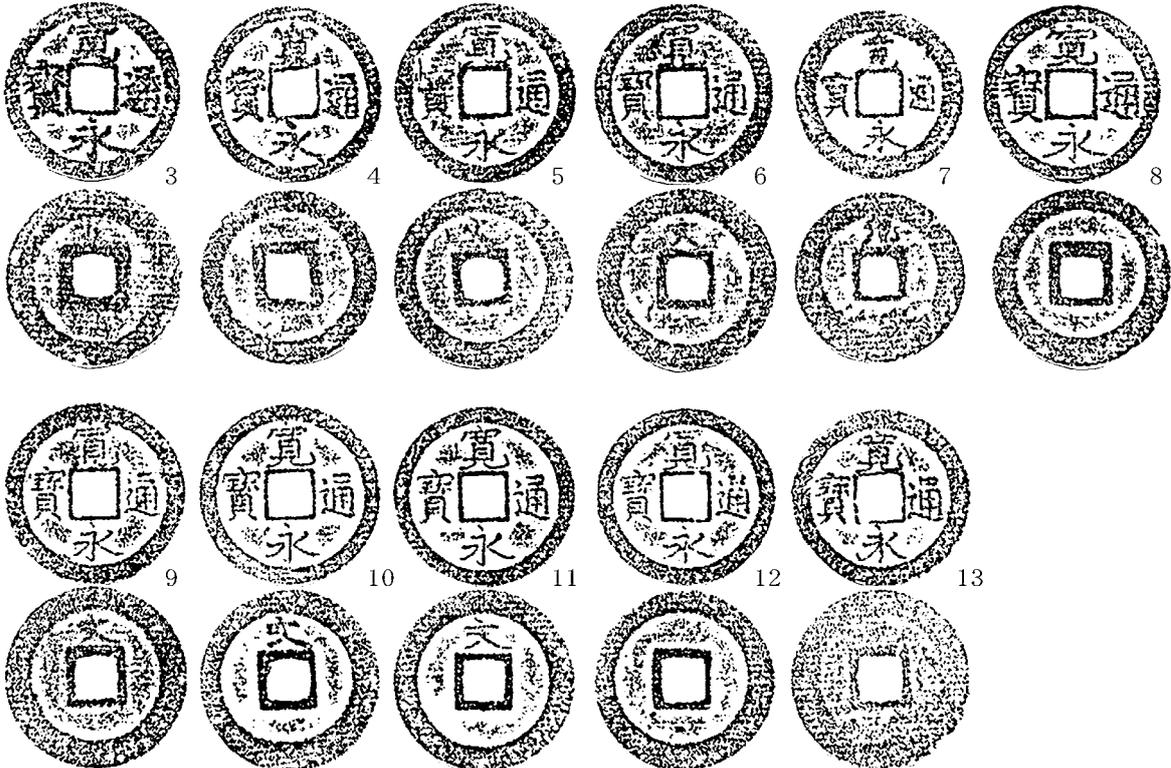
皿片は、土師器皿であるが、小片のみであり図化しなかった。

漆膜片は、表面朱色を呈している。小片ばかりである。



第46号墓（第56図、図版8・11）

正方形縦棺から碗1点・皿1点・漆膜片が、墓壙内から釘7本程が出土した。



第56図 第40号墓地第46号墓出土遺物実測図（S=1/3）・錢貨拓影図（原寸）

第56図1は、1780～1800年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬の完形品で、広東形の碗である。口縁部の一部が変形している。器高6.6cm・口径11.35cmで、高台径5.85cm・高台高1.5cmを測る。見込み文様はコンニャク印伴による五弁花文、裏文様は九曜文散しである。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第56図2は、1800～40年代の肥前産染付磁器手塩皿である。口唇部の2ヶ所が若干欠けているが、棺内副葬の略完形品である。器高2.1cm・口径10.8cmで、高台径6.35cm・高台高0.3cmを測る。型打ち成形によるもので、口唇部には暗褐色の口紅が施されている。見込み文様は、山水文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

棺内出土の漆膜は、表面朱色を呈している。出土したものは小片で量的にも少ない。

第56図3～13は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3・4・8は古寛永、5・6・9～11は文銭、7・12・13は新寛永である。5・6・9～11は背面には「文」字を、7の背面には「元」字を鋳出している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5～5.0cmのものが多い。

第47号墓（第57図、図版8）

墓壙内から猪口1点・釘7本程が出土した。

第57図1は、1800～40年代の肥前系染付磁猪口である。口唇部2ヶ所が若干欠けているが、略完形品である。胴部筒形で、底部は蛇ノ目凹型高台である。器高5.8cm・口径7.85cmで、底径6.4cm・蛇の目高台凹部径2.7cmを測る。見込み文様は岩波文、裏文様は区画内に草文である。蛇ノ目高台面は釉剥ぎされているが、他は内外面とも透明釉がかかっている。畳付は蛇の目高台の凹端部に有り、そこにアルミナサが塗られている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～5.0cmのものが多い。

第48号墓

遺物は出土しなかった。

第49号墓（図無し）

墓壙内から釘4本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。全て欠損した小片であり、長いもので残存長4.0cmある。

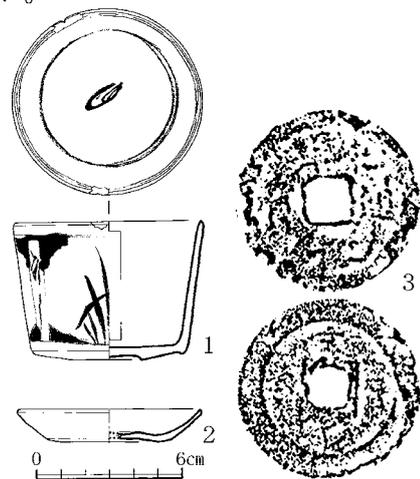
第50号墓

遺物は出土しなかった。

第52号墓（第57図2）

墓壙内から皿1点・釘4本程が出土した。

第57図2は、土師器皿である。口縁部から胴部にかけての6/7を欠損している。わずかに上げ底で、口縁部は直に開く形態を呈している。調整は、内外面ともヨコナデであるが、底部



第57図 第40号墓地第47・52・55号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

外面は回転糸切りと思われるが、摩耗して不明瞭である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は灰白色を呈している。寸法は、器高1.35cm・復原口径7.6cm・底径5.15cmを測る。内面から胴部外面にかけて広く煤が付着している。

釘は、全て鉄製の角釘である。完形のものが1本あり、その長さは7.5cmである。他の折れたものも太さからそれに近い長さのものとする。

第53・54号墓

遺物は出土しなかった。

第55号墓（第57図3）

正方形縦棺から銭1枚が、墓壙内から釘9本程が出土した。

第57図3は、銭貨である。寛永通宝の銅銭であり、背面に「文」字を鋳出した文銭である。

釘は、全て鉄製の角釘であるが大小2種のものがある。大きいものは厚さ0.5cm前後・長さ7.5～8.0cmで、2本ある。残りの小さいものは厚さ0.2cm前後・長さ2.5cm+ α のものである。

第56号墓（第58図、図版13）

桶棺から玉36点が、墓壙内から釘6本と土師器甕1点出土した。

第58図1～36は、ガラス製の数珠玉である。

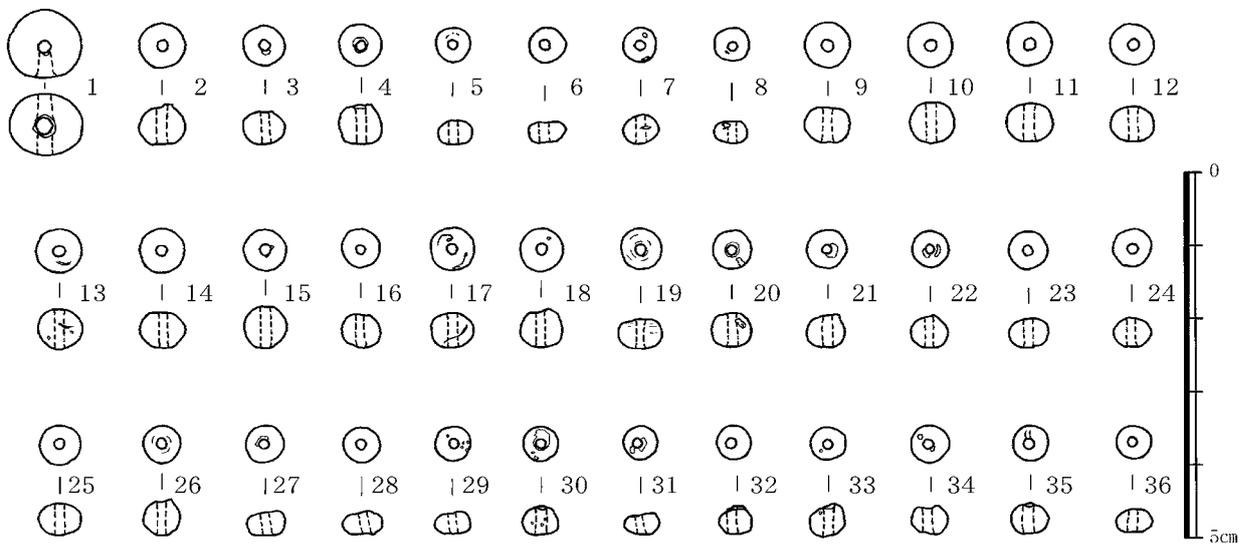
1は、T字状に孔が開いた母珠であり、濁った乳白色を呈している。径0.957cm・最大厚0.823cmを測る。

2は、半透明な黄褐色を呈し、径0.584cm・厚さ0.545cmを測る。

3は、不透明な黒色を呈し、径0.544cm・厚さ0.433cmを測る。

4は、不透明な白色を呈し、径0.580cm・厚さ0.519cmを測る。

5～8は、半透明を浅黄色を呈し、やや小振りで径0.454～0.582cm・厚さ0.308～0.382cmである。数量的に四天珠と思えないこともないが確かでない。



第58図 第40号墓地第56号墓出土遺物実測図（原寸）

9～18は、透明であり、寸法もやや大きく径0.558～0.682cm・厚さ0.500～0.633cmである。

19～26は、濁った乳白色を呈している。本来9～18のような白色透明のものが風化して白色化したものと思われる。寸法は、径0.499～0.594cm・厚さ0.371～0.512cmである。

27～36は、透明な薄い赤褐色を呈するが、もしかしたら、9～18のような透明のものが変色したものかもしれない。寸法は、径0.472～0.539cm・厚さ0.270～0.417cmである。

9～36を成珠と考える。

釘は、全て鉄製の角釘である。全て長さ5.0～5.5cmのものである。数量的に少なく、桶棺の蓋に使用されたものと思われる。

土師器甕は、凶化していないが、胴部から底部にかけての破片であり、残存高16.2cm・復原底径26.6cmを測る。内外面ともハケ目調整で、色調は浅黄色～橙色を呈する。(図版13)

第57号墓 (図無し)

桶棺から漆膜片が出土した。

漆膜は、表面朱色を呈している。量的に少なく漆器1点の副葬と思われる。

第58号墓 (図無し)

墓壙内から釘1本程が出土した。

釘は、鉄製の角釘であるが折れた小片であり長さは不明である。

第59号墓 (第59図1)

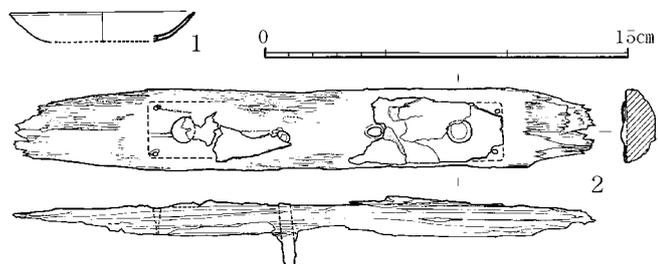
墓壙内から皿片1点・甕片1点・陶器片1点・鉄製品片が出土した。

第59図1は、土師器皿である。口縁部から胴部にかけての約1/6の小片であり、底部を欠損している。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈している。復原の残存器高1.20cm・口径7.60cmを測る。

甕片は、土師質大甕の胴部片であり、本墓には直接伴わない。

陶器片も小片であり、本墓とは直接関係ない。

鉄製品片は、欠損品ばかり10点である。角釘とも考えたが断面形が平たい長方形を呈しており通常の角釘とは考えにくい。中には平面形が半円状で欠損しているものもあり詳細は不明である。



第59図 第40号墓地第59・60号墓出土遺物実測図 (S=1/3)

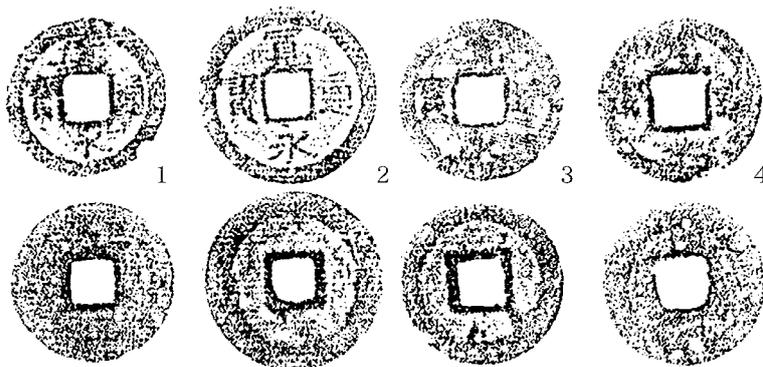
第60号墓 (第59図2、図版31)

墓壙内から金具の付いた木片1点と釘5本程が出土した。

第59図2は、銅版を装着した木片である。残存長23.9cm・最大幅3.35cm・最大厚1.2cmを測る。平坦な1面には薄い銅板が装着されており緑青が吹いている。その圧痕から、銅板は幅2.7cm・長さ14.5cmの隅丸長方形を呈している。4隅には細かい丸釘を打ち、長軸線上に3.5

～4.0cm間隔に径0.5cm前後の大きな鉄釘が打ち込まれている。正方形縦棺の棺材の一部と考える。

釘は、全て鉄製の角釘であり、大小2種がある。大きいものは幅0.35～0.4cm・長さ5.0cm以上のものが1本ある。小さいものは幅0.2～0.3cm・長さ3.0cm前後のもので、主体を占められる。



第60図 第40号墓地第61号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第61号墓（第60図）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘60本程・木片1点が出土した。

第60図1～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、全て新寛永である。1の背面には「元」字が鋳出されている。なお、図化できなかったが、別に鉄銭2枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。大部分が長さ4.0～4.5cmのものである。

木片は、残存長4.7cm・幅3.0cmの薄い小片である。木皮とも考えたが、径0.1cm程の丸い目釘穴らしき穴とわずかながらの緑青が見られるため、棺材の一部とも考えられる。

第62号墓（図無し）

墓壙内から釘1本が出土した。

釘は、鉄製の角釘と思われるが、断面は長方形を呈している。折れており、残存長は2.5cm程である。1本だけの出土であり、桶棺の蓋に使用されたものと考えられる。

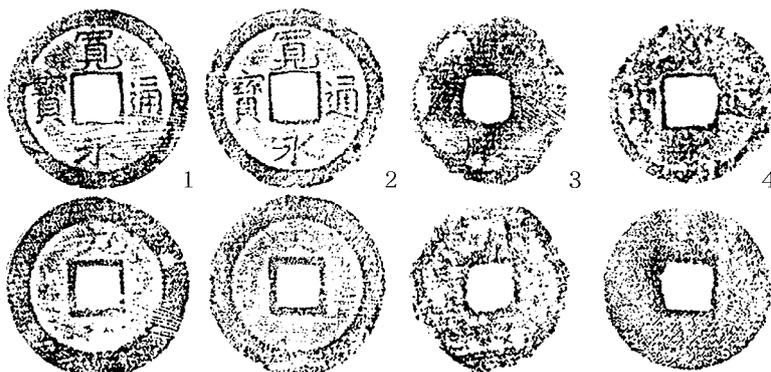
第63号墓

遺物は出土しなかった。

第64号墓（第61図）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘30本程が出土した。

第61図1～4は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は文銭、3・4は新寛永である。1・2の背面には「文」字が、4の背面には「小」字が、



第61図 第40号墓地第64号墓出土銭貨拓影図（原寸）

鑄出されている。なお、鏽着して図化できなかつたが、別に判読不明の銅銭1枚と鉄銭1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5cm前後のものが多い。

第65号墓（図無し）

墓壙内から釘15本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。折れたものばかりであるが、長さ4.0cm前後と思われる。

第66号墓（図無し）

墓壙内から釘2本程が出土した。

釘は、いずれも鉄製の角釘であるが、大小2種類がある。大きいものは幅0.2～0.3cm・長さ11.0cm余で、小さいものは幅0.2cm程・残存長2.0cmである。桶棺の蓋に使用されたものと思われる。

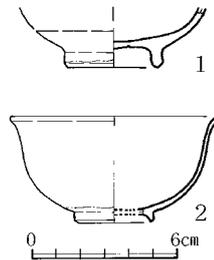
他に、棺内からサヌカイト製の剥片尖頭器1点が出土しているが、本墓とは直接関係ない。

第67号墓（第62図1、図版9）

墓壙内から碗1点・釘35点程が出土した。

第62図1は、18世紀代の肥前産陶器小碗である。墓壙内、正方形縦棺外の出土である。胴部下位から底部までの破片であり、残存高2.5cm・残存胴部復原最大径7.65cmで、高台径4.1cm・高台高6.5cmを測る。素地の色調は淡黄色を呈し、畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込みに3足付ハマの溶着痕が残っている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多い。



第62図 第40号
墓地第67・69号
墓出土遺物実測図
(S=1/3)

第68号墓

遺物は出土しなかつた。

第69号墓（第62図2、図版9）

墓壙内から碗1点が出土した。

第62図2は、19世紀前半の関西系陶器碗である。墓壙内出土の、口縁部から高台にかけての約1/5程の破片である。復原器高4.4cm・復原口径8.6cmで、復原高台径3.3cm・高台高0.45cmを測る。素地は、灰白色を呈している。高台を含めた底部外面は無釉であり、他は内外面とも透明釉がかかっている。その釉葉には貫入が走っている。

第71号墓（第63図、図版9）

桶棺から銭6枚・漆膜が、墓壙内から碗2点・皿2点程・釘7本程・焼灰が出土した。

第63図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器小碗である。口縁部2ヶ所を欠損しているが、略完形である。器高5.1cm・口径9.7cmで、高台径3.8cm・高台高0.75cmを測る。見込み文様

は岩波文で、裏文様は山水文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第63図2は、19世紀前半の肥前系染付磁器小碗である。口縁部2ヶ所と胴部1ヶ所高台3ヶ所が欠損しているが、略完形である。器高3.7cm・口径8.3cmで、高台径3.5cm・高台高0.55cmを測る。見込み文様は蝶で、裏文様は蝶と草である。無釉の畳付にはアルミナサが塗られており、他は内外面とも透明釉がかかっている。

1と2は棺外出土であるが、本来は棺内副葬品の可能性もある。

第63図3・4は、土師器皿である。いずれも胎土は緻密で、焼成良好であるが、色調が異なっている。他にも小片が複数出土しているが、色調から3・4の2個体と思われる。調整は、内外面ヨコナデで、底部外面は回転糸切り痕が残っている。

3は、底部を1/2弱・口縁部から胴部にかけての5/6を欠損する破片である。胴部から口縁部が大きく開くものであり、器高1.25cm・復原口径6.95cm・底径2.95cmを測る。色調は、橙色を呈している。

4は、約1/8程の小片である。胴部から口縁部がやや立ち上がり気味に開くものであり、器高1.30cm・復原口径6.80cm・底径4.0cmを測る。色調は、浅黄橙色を呈している。

漆膜は、棺内2ヶ所で出土した。いずれも表面朱色を呈している。漆器2点以上が副葬されていたと考える。

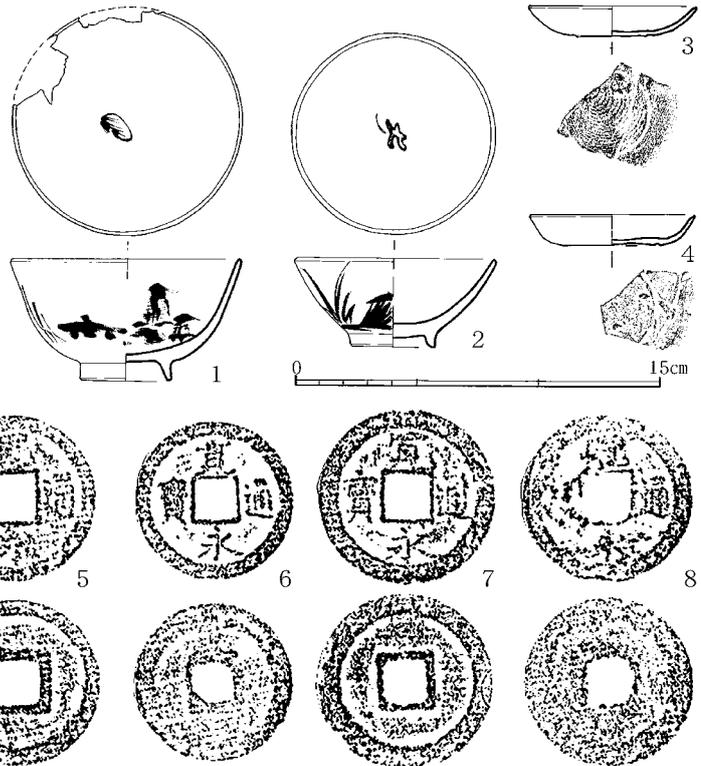
第63図5～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭で、新寛永である。6は、背面に「元」字を鋳出している。なお、図化できなかったが、別に新寛永1枚と鉄銭1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘であり、大小2種類がある。大きいものは、幅0.4cm程・長さ9.5cmと11.0cmを測る。小さいものは、幅0.3cm以下・長さ4.0cm前後を測る。桶棺の蓋に使用されたものとする。

墓壙内出土の焼灰は、丸木が焼得たものと思われ、木の状態で灰化している。どういう性格のものか不明である。

第72号墓（第64図1・2、図版9）

墓壙内から坏1点・鈴1点・銭6枚・木片1点が出土した。



第63図 第40号墓地第71号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

第64図1は、1840～60年代の肥前産色絵磁器小坏であり、完形品である。器高3.4cm・口径7.0cmで、高台径2.75cm・高台高0.45cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面透明釉がかかっている。見込みには青絵にて「月月二 月見る 月山 口けれど 月見二 月ハ 此月の 月」という詩句文が釉の上に書かれている。(有カ)

第64図2は、銅製の鈴である。一部欠損しているが、略完形である。全面に緑青が吹き、約1/4に布か皮革が付着している。鏝を持つ半球形を合わせたものであり、球形の高さ2.0cm・鏝の径2.8cmを測る。球形頂部には潰れたリングが付き、下位にはハート形の孔が開けられている。

銭は、錆びによる劣化のため図化できなかったが、6枚出土した。1枚は寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。他の5枚は鉄銭である。

木片は、釘が抜けた木片であり、T字形を呈している。横1.5cm・縦1.9cmを残している。

釘は、鉄製であるが、角か丸か不明瞭である。

第73号墓 (第64図3～8、図版9・13)

正方形縦棺から碗1点・漆膜・銭6枚が、墓壙内から皿2点・釘25本程が出土した。

第64図3は、18世紀前半の肥前産陶胎染付碗である。口唇部1ヶ所がわずかに欠けるが、棺内副葬の完形品である。器高6.7cm・口径10.1cmで、高台径4.6cm・高台高0.7cmを測る。畳付以外の内外面に白化粧し、その上から裏面には山水文と口縁部に四方禪文を描いている。畳付は無釉であるが、他の内外面には透明釉がかかっている。

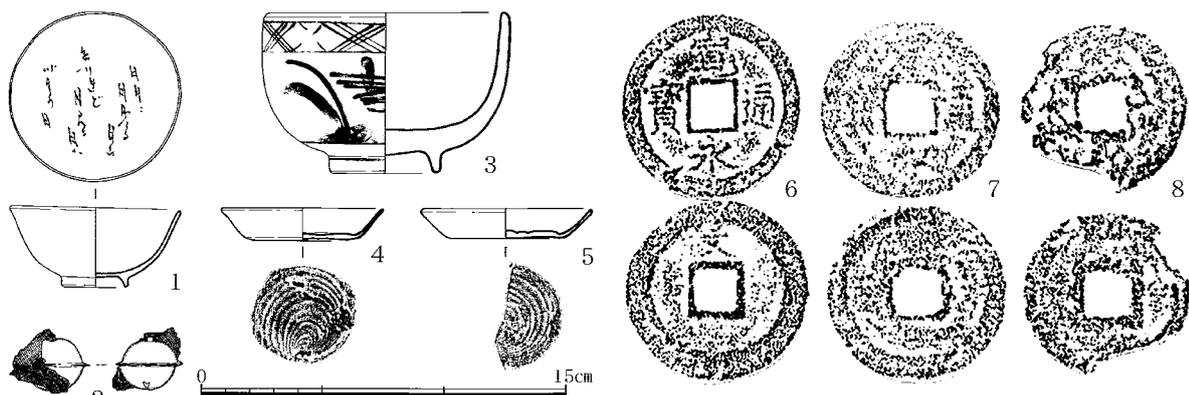
第64図4・5は、土師器皿であり、墓壙内、棺外出土である。いずれも胴部から口縁部が大きく開く形態をしている。胎土は緻密で、焼成良好であり、色調は浅黄橙色を呈している。調整は、内外面ヨコナデで、底部外面には回転糸切り痕が残っている。

4は、器高1.3cm・復原口径6.7cm・復原底径4.8cmを測る。

5は、器高1.3cm・復原口径7.0cm・復原底径4.8cmを測る。

漆膜は、小片ばかりであるが、表面朱色を呈している。量的に少なく、漆器1点分かと考える。

第64図6～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、6は文銭、7・8は新寛永である。6の背面には「文」字が鋳出している。なお、図化できなかったが、別に新寛永1枚・判読不明の銅銭1枚・鉄銭1枚も共伴している。



第64図 第40号墓地第72・73号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

釘は、全て鉄製の角釘であり、大小2種類がある。大きいものは、長さ5.5cm前後のもので、2本ある。小さいものは、長さ3.5～4.0cmのものである。

第74号墓（第65図、図版13）

桶棺から銭6枚が、墓壙内から皿片3点・陶器片・釘片・炭化物が出土した。

第65図1～3は、土師器皿であり、棺外出土の破片である。いずれも胴部から口縁部が大きく開く形態のものである。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈している。調整は、内外面ともヨコナデである。

1は、約1/2の破片で、器高1.15cm・復原口径6.9cm・復原底径4.45cmを測る。底部外面の回転糸切り痕の間隔が広い。

2は、約1/4の破片で、器高1.1cm・復原口径6.6cm・復原底径3.9cmを測る。底部外面の回転糸切り痕の間隔は、1に比べて狭く密である。

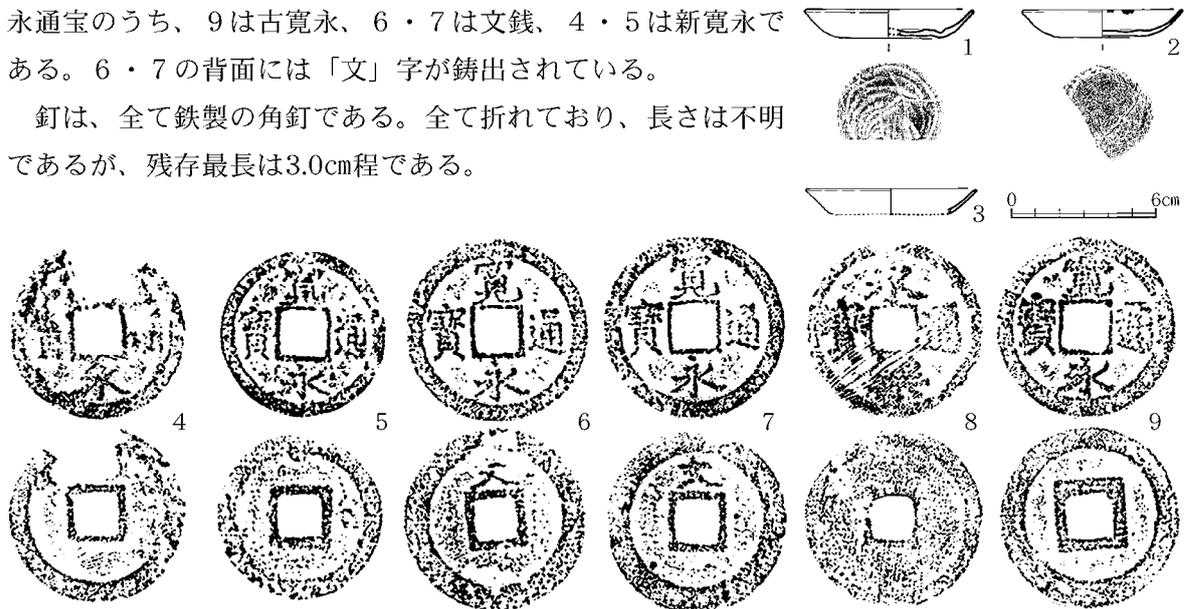
3は、口縁部から胴部の約1/6の小片である。復原残存高1.10cm・復原口径7.05cmを測る。

陶器片は、軟質施釉陶器の小片である。内面に施釉されているが、器種は不明である。

炭化物は、薄い膜状の小片である。当初漆膜かと考えたが、内外面黒色に炭化しており不明である。

第65図4～9は、銭貨である。全て銅銭であり、8は、永楽通宝、他は寛永通宝である。寛永通宝のうち、9は古寛永、6・7は文銭、4・5は新寛永である。6・7の背面には「文」字が鋳出されている。

釘は、全て鉄製の角釘である。全て折れており、長さは不明であるが、残存最長は3.0cm程である。



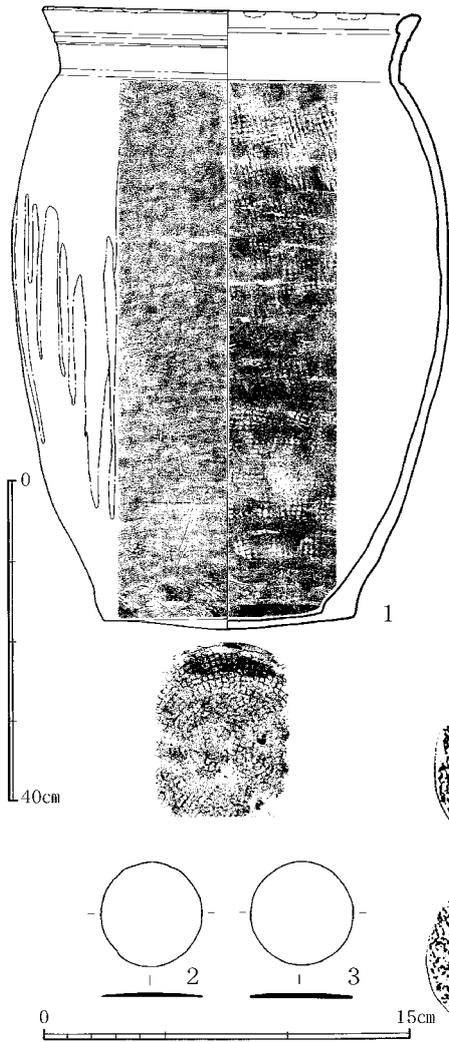
第65図 第40号墓地第74号墓出土遺物実測図(S=1/3)・銭貨拓影図(原寸)

第75号墓（第66図、図版6・32）

墓壙内から棺嚢1点・釘4本程・不明物質1点が、嚢棺からレンズ2点・銭6枚が出土した。

第66図1は、18～19世紀の肥前産陶器嚢である。器高76.4cm・口径46.7cm・頸径41.9cm・胴径53.8cm・底径30.7cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線と鈍い段を施している。鈍い黄橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面16ヶ所に目跡が残っている。

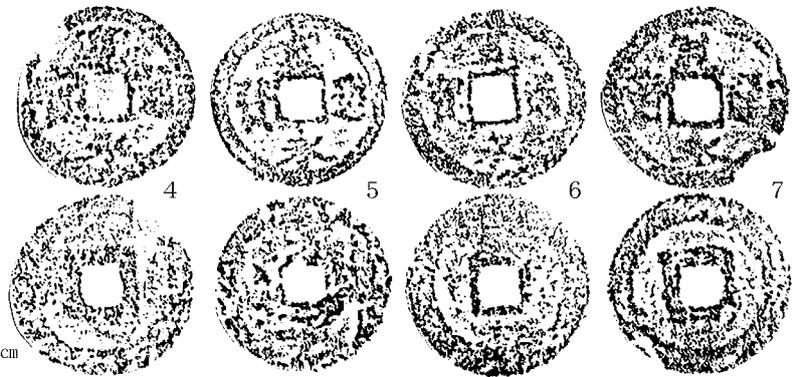
第66図2・3は、透明のレンズであり、セットと思われる。どちらも片面凸型であるが、度数は無い。2は直径4.4cm・最大厚0.2cmで、3は直径4.3cm・最大厚0.2cmを測る。



第66図4～7は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、4・5・7は古寛永、6は文銭である。6の背面には「文」字が鋳出されている。なお、凶化できなかったが、別に古寛永1枚と判読不能の銅銭1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。大半が欠損品であるが、長さ3.5cm前後のものと思われる。甕蓋に使用されたものとする。

棺外出土の不明物質は、直径2.7～2.8cm・残存長3.5cmを測る。円柱状のもので、灰白色の粉が凝縮したようなものである。当初ローソクとも考えたが、芯が見当たらず、断定できなかった。



第66図 第40号墓地第75号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

第76号墓 (第67図、図版6・9・11)

墓壙内から棺甕1点・碗1点・皿1点・釘2本程が、棺内から銭1枚が出土した。

第67図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高76.6～76.9cm・口径48.5cm・頸径43.1cm・胴径53.8cm・底径25.9cmを測る。調整は、胴部外面をナデ仕上げ、胴部内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。鈍い黄橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面24ヶ所に目跡が残っている。

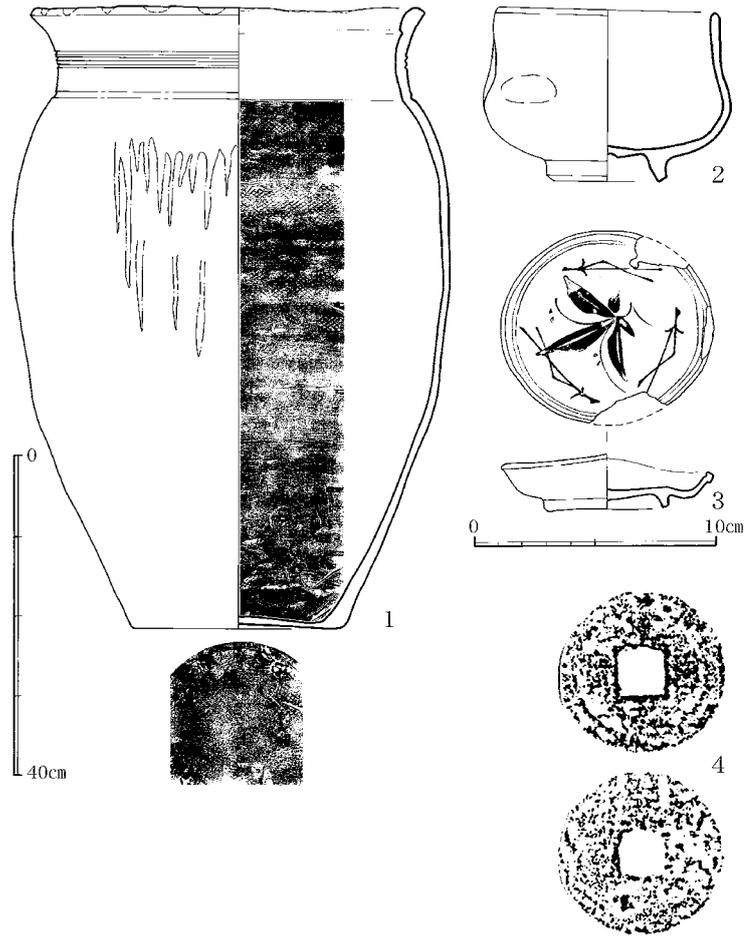
第67図2は、18世紀末～幕末の熊本(小代)産陶器碗である。棺外出土の完形品である。器高7.2cm・口径9.2cmで、高台径4.95cm・高台高0.85cmを測る。胴部の中位6ヶ所を外表面より浅く押しつけて笑窪を施している。高台内面と畳付きは無釉であるが、他は内外面とも鉄釉がかかっている。

第67図3は、1800～60年代の肥前系染付磁器手塩皿である。焼き歪みがあり、口縁部が2ヶ所欠損しているが、略完形品である。器高1.6～2.3cm・口径8.75cmで、高台径8.75cm・高台高0.5cmを測る。見込み文様は、紅葉に折れ松葉である。無釉の畳付にはアルミナサが塗られており、他の内外面は透明釉がかかっている。

2・3は、棺外出土であるが、本来は棺内副葬品の可能性もある。

第67図4は、銭貨である。寛永通宝の銅銭であり、背面に「元」字を鋳出した新寛永である。

釘は、鉄製の角釘である。1本のみ完形で、長さ4.5cmを測る。



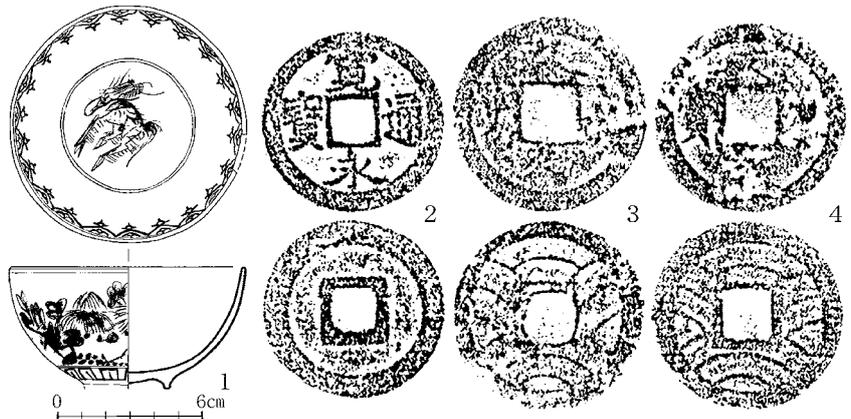
第67図 第40号墓地第76号墓出土遺物実測図(S=1/9・1/3)・銭貨拓影図(原寸)

第77号墓 (第68図、図版9)

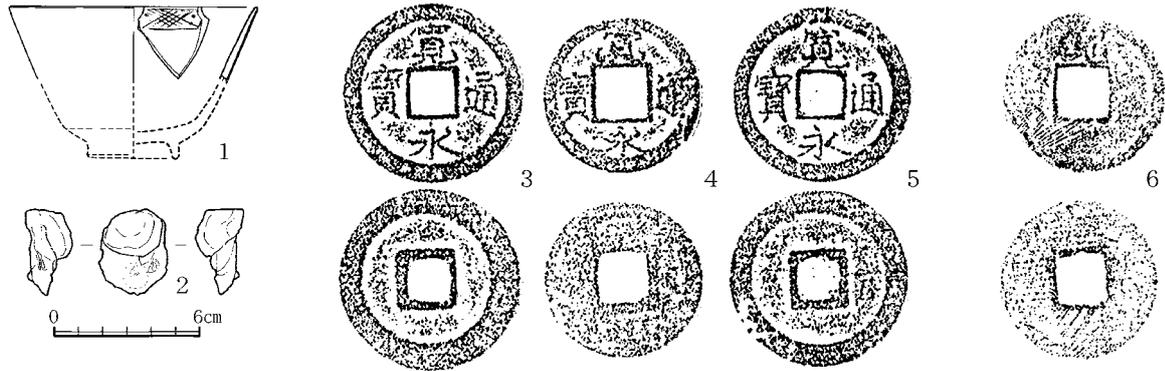
墓壙内から碗1点・銭3枚・釘9本程が出土した。

第68図1は、明治時代の肥前産染付磁器碗である。口縁部と高台の1ヶ所ずつが欠損しているが略完形品である。器高5.1cm・口径9.75cmで、高台径3.5cm・高台高0.2cmを測る。見込み文様は麒麟と口縁部に輪宝文、裏文様は岩に草花と腰部連弁文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第68図2～4は、銭貨である。全て銅銭であり、2は寛永通宝の古寛永であり、3・4は背



第68図 第40号墓地第77号墓出土遺物実測図(S=1/3)・銭貨拓影図(原寸)



第69図 第40号墓地第78・79号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

面に波紋を鋳出した文久永宝である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものである。数量的に少なく、桶と考える棺の蓋に使用されたものと思われる。

第78号墓 (第69図1～5)

桶棺から櫛片・鉄塊1点・木片2点・銭3枚が、墓壙内から碗1点・陶器片1点・土器片1点・釘10本程が出土した。

第69図1は、18世紀後半の肥前産染付青磁碗である。墓壙内、棺外出土である。口縁部約1/11の小片であり、復原口径10.2cmを測る。見込み文様は、口縁部に四方禪文である。内外面とも青磁釉がかかっている。

第69図2は、棺底の中央から出土した鉄塊である。錆膨れ著しく、形状不明瞭であるが、薄い部分が本来円盤状のものと思われ、厚いコブ状の部分は錆膨れであると思われる。残存長は3.6cmであり、円盤状の厚0.8cm・径2.5cm程と思われる。鉄銭の可能性もあるが、断定できない。

第69図3～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。

棺内出土の櫛は、横櫛の歯の部分13本だけである。最も大きいもので長さ2.9cm・幅0.5cmを測る。全てバラバラであり図化できなかった。

棺内出土の木片は、2本の角釘を打ち込んだ長さ4.75cm・最大幅1.0cmの木片と、表面に銅板の緑青が付着した長さ4.2cm・直径1.0cmの円筒状の木片である。あるいは、両者は同一個体の可能性がある。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.7cm前後のものである。

墓壙内からは他に陶器小片・土器片が出土したが詳細不明である。

第79号墓 (第69図6)

正方形縦棺から銭1枚が、墓壙内から釘20本ほどが出土した。

第69図6は、銭貨である。寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5～4.0cmのものが多い。

第80号墓（図無し）

墓壙内から釘70本程が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.5cmのものである。

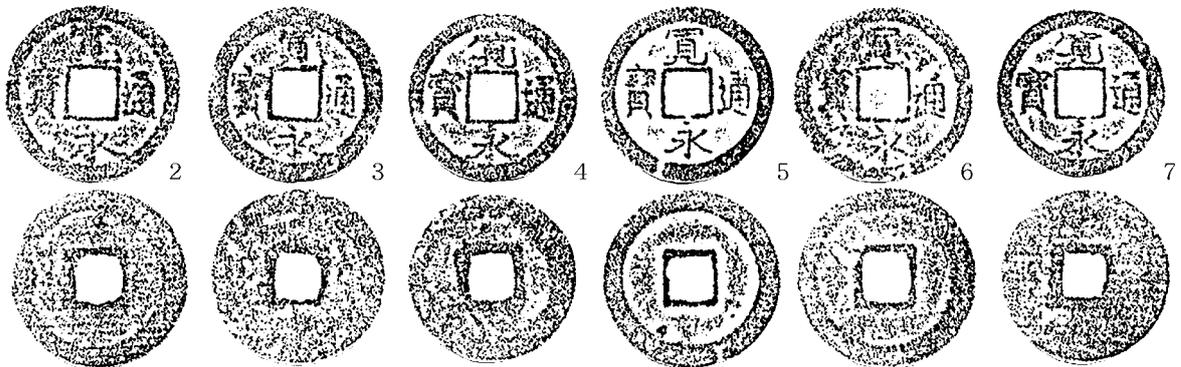
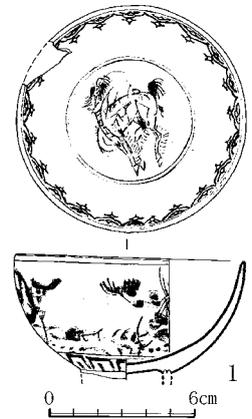
第81号墓（第70図、図版9）

墓壙内から碗1点・銭6枚・釘5本程が出土した。

第70図1は、明治時代の肥前産染付磁器碗である。口縁部の1ヶ所と高台が欠損している。残存器高5.2cm・口径9.5cmで、高台根元径3.8cmを測る。見込み文様は麒麟と口縁部に輪宝文、裏文様は岩に草花と腰部連弁文である。高台は不明であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第70図2～7は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ5.2cm前後のものが多い。



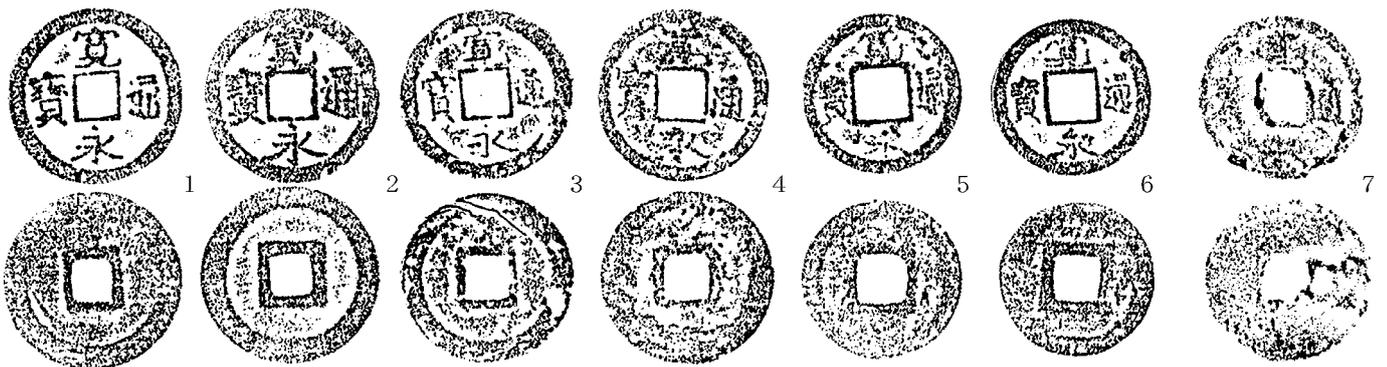
第70図 第40号墓地第81号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

第82号墓（第71図1～6）

墓壙内から銭6枚・釘4本程が出土した。

第71図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は古寛永、3～6は新寛永である。1には布が付着している。

釘は、全て鉄製の角釘である。全て途中で折れており、残存最長は2.9cmである。



第71図 第40号墓地第82・83号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第83号墓（第71図7）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘5本程が出土した。

第71図7は、銭貨である。寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。なお、錆着のため図化できなかったが、別に新寛永1枚と鉄銭4枚も相伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものである。

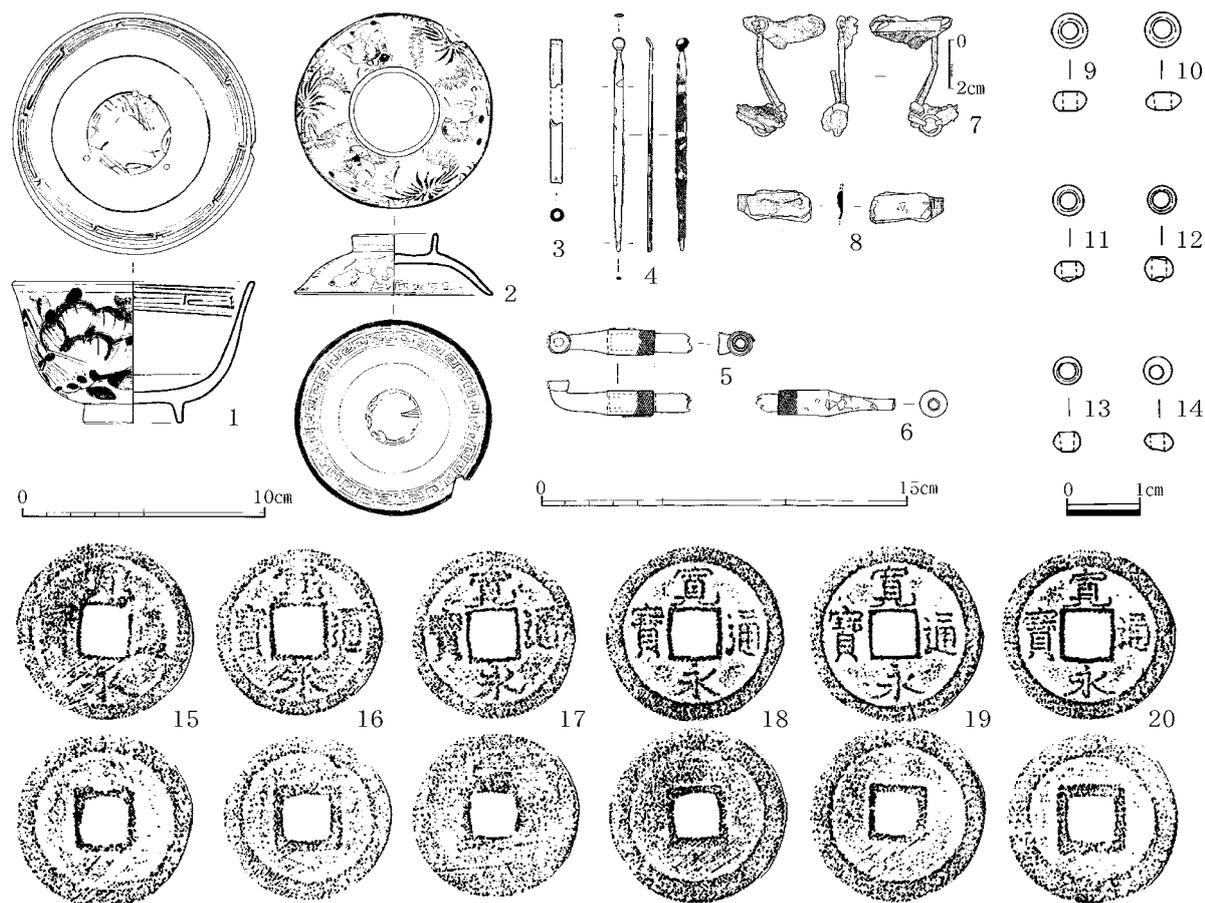
第84号墓（第72図、図版10・12・21・22・25・28）

正方形縦棺から碗1点・蓋1点・竹製品1点・かんざし1点・金具2点・煙管1点・玉6点・銭6枚が、墓壙内から釘50本程が出土した。

第72図1は、明治時代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬であり、口唇部1ヶ所を若干欠損するが、完形品である。器高5.95cm・口径10.0cmで高台径4.2cm・高さ0.8cmを測る。見込み文様は環状の松竹梅と口縁部に雷文帯であり、裏文様は牡丹に蝶である。豊付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込みに3足付きハマの溶着痕が残っている。

第72図2は、明治時代の肥前産染付磁器蓋である。棺内副葬であり、口唇部1ヶ所を若干欠損するが、略完形品である。器高2.6cm・口径8.2cmで、輪状つまみの径3.6cm・高さ0.7cmを測る。見込み文様は環状の松竹梅と口縁部に雷文帯であり、裏文様は唐子である。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第72図3は、竹製の筒状製品である。断面は外径0.5cmの円形で、厚さ0.15cm程の空洞で



第72図 第40号墓地第84号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸)

ある。残存長は4.5cmであり、筆柄と思われるが断定できない。

第72図4は、銅製のかんざしである。全面に緑青が吹いているが完形品である。長さ8.85cmで、断面は最大幅0.43cm・最大厚0.15cmの略楕円を呈している。耳かきの部分は径0.5cmの円形を呈している。片面には布が付着している。

第72図5・6は、一对の羅宇煙管である。雁首と吸口は銅製と思われ、羅宇は竹製である。雁首と吸口の胴部小口側には、細かい沈線による細かい斜格子目文が施されている。

5は、雁首と羅宇の一部であり、残存長5.9cmを測る。雁首は、火皿の約1/3が欠損しており、残存長4.35cm・小口径1.0cm・胴最大径1.1cmを測る。火皿は、直径0.9cm・高さ0.45cmを測る。羅宇は、最大径0.85cmで、雁首に1.9cm入っている。

6は、吸口と羅宇の一部であり、残存長5.75cmを測る。吸口は、長さ4.8cm・吸口径0.5cm・小口径1.0cm・胴部最大径1.1cmを測る。羅宇は、最大径0.75cmで、吸口に2.7cm入っている。

第72図7・8は、たばこの袋物に付属する金具と思われる。

7は、青銅製である。バネ状の棒の両側には、リングが付き、リングは布を挟んだ長方形の銅板の留金具につながっている。バネ状のものの長さは3.5cmで、板状の長さは3.2cm・幅0.4cmを測る。

8は、鉄製の板の中央に細かい銅線が付いたものである。布らしき痕跡があり、鉄製の留金具と布を銅線で固定したものと考える。鉄製留金具は、長さ2.3cm・幅1.1cmを測る。

第72図9～14は、ガラス製の数珠玉である。色調は、9～13は青色であるが、14は無色透明である。平面形は径0.375～0.48cmの正円形であるが、断面形はまちまちである。厚さは、0.225～0.325cmである。

第72図15～20は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。全てに布が付着している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第85～89号墓

遺物は出土しなかった。

2. 火葬墓の遺物

第70号墓（図無し）

火葬骨を埋納した墓壙内から釘7本程が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ3.5～4.0cmのものが多い。

火葬骨と釘の共伴から、本墓は木製の蔵骨器を埋納したものである。

3. 胞衣容器 (第73図、図版6)

胞衣容器あるいは胞衣容器と思われる容器が2点出土した。いずれも土瓶である。

第73図1・2は、第3号胞衣容器に使用されていた、19世紀の関西系軟質施釉陶器土瓶の蓋と身である。どちらも低火度の透明釉がかかっている。

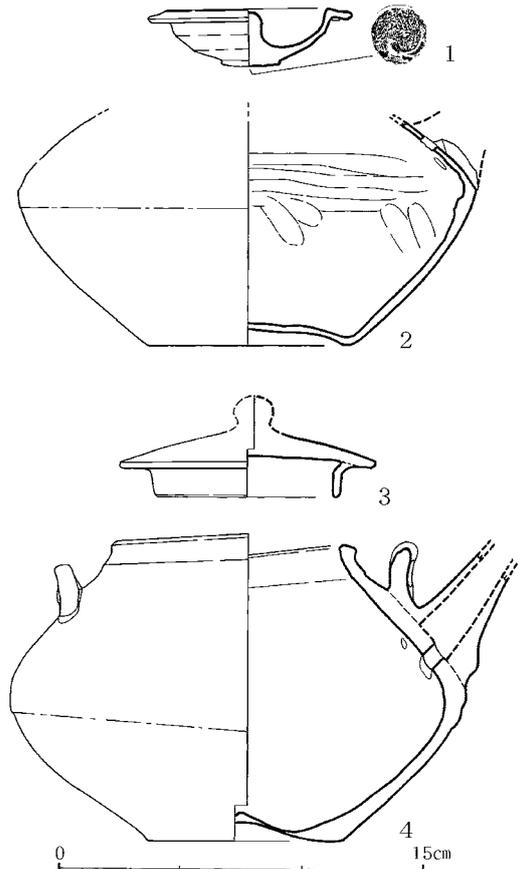
1は、凹型の内側中央に頂部が丸い円柱状つまみを有する蓋であり、口縁部は外側やや斜め下方へ折れている。口縁部から胴部にかけての約1/3を欠損している。器高2.4cm・口径8.45cm・底径2.4cmで、つまみは高さ1.2cm・径1.1cmを測る。凹型の内全面から口唇部にかけて透明釉がかかっている。底部外面には回転糸切り痕が残っている。

2は、体部が算盤玉形を呈し、底部が上げ底の瓶である。口縁部から胴部上位と弦用耳及び注口が欠損している。注口接合部の体部には、円形の孔が3ヶ穿たれている。残存高9.4cm・体部最大径18.9cm・底径8.5cmを測る。体部内面には指ナデ痕が顕著に残っている。体部最大径の中位以上の外面に低火度の透明釉がかかっている。体部下位から底部の外面には煤が付着している。

第73図3・4は、胞衣容器と思われる表採遺物である。いずれも19世紀の肥前産陶器土瓶の蓋と身である。どちらも胴緑釉がかかっている。

3は、つまみを有する蓋と思われるが、つまみを欠損している。内側のかえりが口縁部より下にまっすぐに突出する形態である。残存高2.8cm・口径10.55cmで、かえりの径7.6cm・長さ1.45cmを測る。内面は無釉で、外面のみ胴緑釉がかかっている。

4は、やや扁平な球体の上下を切断したような形態の瓶であり、底部は上げ底である。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が直線的に付いている。注口の先端を欠損している。注口と接合する体部には円形の孔3ヶを外側から穿たれている。体部と頸部との境近くの外面にはわずかな段を有している。器高12.8cm・口径10.1cm・体部最大径18.7cm・底径8.1cmを測る。口縁部内外面から体部中位以上には胴緑釉がかかっている。また、口唇部平坦部と体部中位から底部までの外面には白化粧が施されている。



第73図 第40号墓地出土胞衣容器実測図 (S=1/3)

4. 表採遺物 (第74~76図、第5・11表、図版10~12・14)

第40号墓地では、陶磁器・ガラス製品・土器・銭貨など多くの遺物が表面採集された。

第74図1は、1780～1810年代の肥前系染付磁器碗である。第39号墓の地表で採集した、約1/4の破片である。底部から胴部にかけての腰が丸く、口縁部が直すぐに立ち上がる形態であり、深小丸の茶飲み碗である。復原器高5.3cm・口径8.0cmで、高台の径3.0cm・高さ0.45cmを測る。見込み文様は蝶文と思われ、裏文様は若松文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第74図2は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。第26号墓の地表で採集したものである。やや歪みがあり、口縁部から胴部にかけて1ヶ所欠損しているが略完形である。やや小振りであるが、1と同様の深小丸の茶飲み碗である。器高5.1cm・口径6.6～7.2cmで、高台の径3.05cm・高さ0.65cmを測る。裏文様は、竹文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。口縁部外面に窯道具の熔着がみられる。

第74図3は、18世紀後半～幕末の福岡（小石原？）産陶器小碗である。第54号墓の地表で採集したものであり、口縁部から底部にかけての1/2弱を欠損している。器高4.4cm・口径7.6cmで、高台の径3.4cm・高さ0.8cmを測る。高台を含めた底部外面は無釉であり、他は内外面とも鉄釉の上に灰釉を流しかけられている。

第74図4は、18世紀前半の肥前（有田）産白磁小碗である。約2/5の破片である。器高4.8cm・復原口径8.8cmで、高台の復原径3.7cm・高さ0.6cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

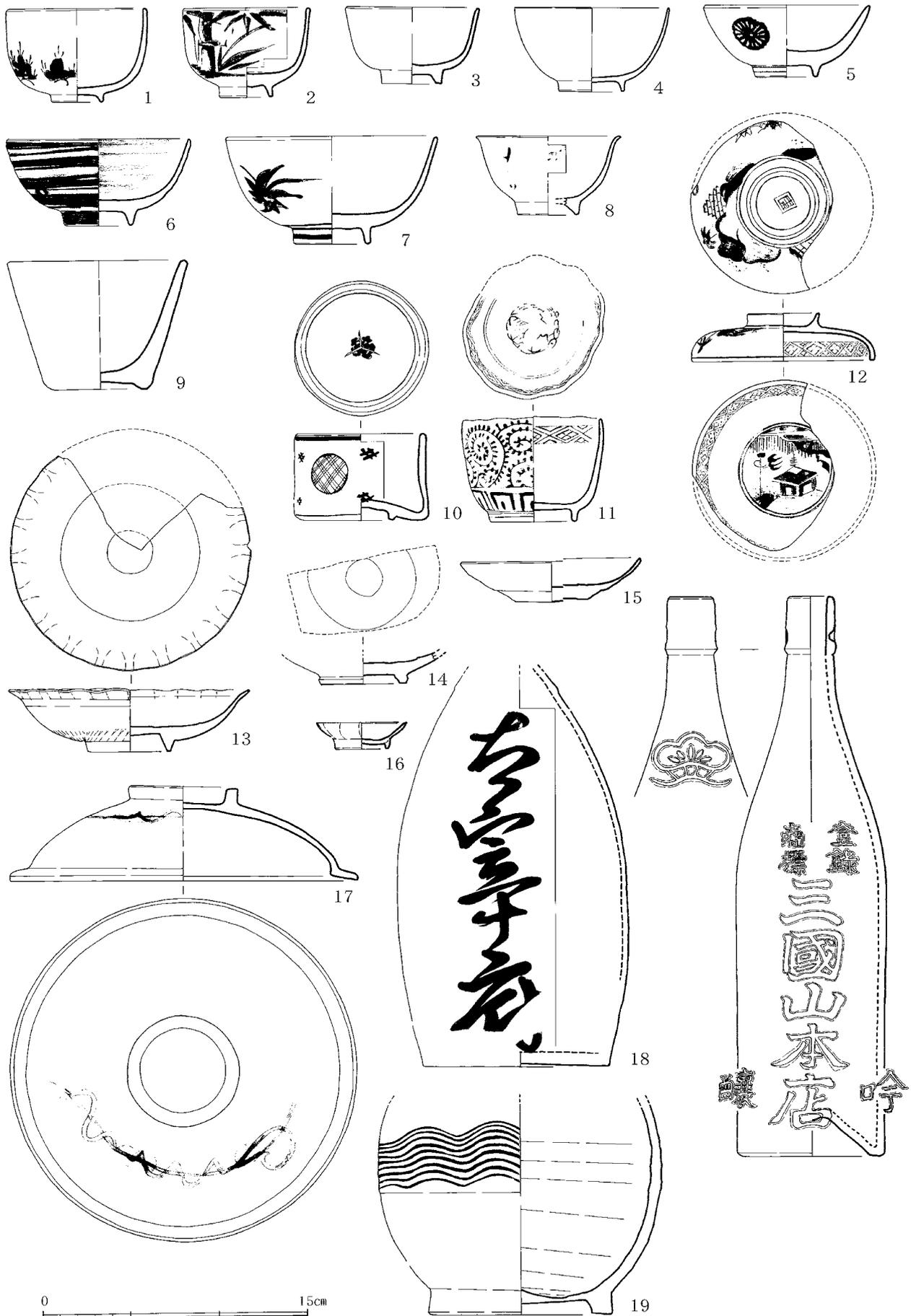
第74図5は、18世紀後半の肥前（波佐見系）産染付磁器小碗である。高台の大半を欠損する、1/2弱の破片である。器高4.15cm・復原口径9.4cmで、高台の復原径3.55cm・高さ0.7cmを測る。裏文様はコンニャク印判による菊化文であり、高台内面には、渦「福」字の銘款が施されている。わずかに残っている畳付は無釉であり、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第74図6は、18世紀前半の肥前産陶器碗である。口縁部から胴部にかけての約4/5を欠損している。器高5.0cm・復原口径10.4cmで、高台の径3.9cm・高さ0.85cmを測る。見込み・裏面とも白化粧土による刷毛目文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかけられ、見込み蛇ノ目釉剥ぎしている。

第74図7は、18世紀後半の肥前産染付磁器碗である。第17号墓の地表で採集したものであり、底部約1/2・口縁部～胴部約1/7の破片である。器高5.9cm・復原口径12.0cmで、高台の復原径4.4cm・高さ0.9cmを測る。裏文様は紅葉折枝文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第74図8は、18世紀末～19世紀前半の中国福建省（徳化窯）系色絵磁器小碗である。約1/6の破片である。型作りによるものである。器高4.5cm・復原口径8.2cmで、高台の復原径3.45cm・高さ0.75cmを測る。内外面とも透明釉がかけられ、後に畳付と口唇部を釉剥ぎしている。いわゆる口ハゲである。裏文様は釉の上に赤色で描かれているが、内容は不明である。

第74図9は、明治時代～昭和戦前の肥前系白磁猪口と思われるが、かなり厚手でありあるいはゴム汁を採集する容器ゴム碗の可能性もある。口縁部2ヶ所が若干欠損しているが、略完形品である。型作りによるものであり、やや上げ底を呈している。器高7.4cm・口径10.2cm・底径5.3cmを測る。上げ底の畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。口縁部内面と畳付に熔着痕が残っている。



第74図 第40号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3) ①

第74図10は、1780～1810年代の肥前系染付磁器碗である。第17号墓の地表で採集したもので、口縁部から胴部の1/2強が欠損している。焼き歪みのため底部がやや上底になっており、高台が地に接していない。器高5.0cm・口径7.5cm・底径7.6cmで、高台の径3.4～3.6cm・高さ0.2cmを測る。見込み文様はコンニャク印判による五弁花文、裏文様は丸文と井桁文である。高台豊付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。底部外面に窯傷が残っている。

第74図11は、1820～60年代の肥前系染付磁器猪口である。約1/3を欠損している。型打ち成形によるものであり、口縁部は波縁である。器高6.0cm・口径7.3～8.3cmで、高台の径4.9cm・高さ0.6cmを測る。見込み文様は環状松竹梅と口縁部に四方襷文であり、裏文様は蛸唐草文と腰部に連弁文である。豊付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第74図12は、1760～90年代の肥前産染付磁器蓋であり、輪状つまみを有している。口縁部約2/3を欠損している。器高2.8cm・復原口径10.4cmで、つまみの径4.15cm・高さ0.7cmを測る。見込み文様は山水文と口縁部に四方襷文であり、裏文様は山水文である。つまみ内面中央には、二重方形枠内に変形字の銘款が施されている。つまみ端部は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第74図13は、1800～60年代の肥前系白磁皿である。約1/4を欠損している。口縁部は波縁である。器高3.6cm・口径13.6cmで、高台は径4.7cm・高さ0.6cmを測る。豊付と見込みは釉剥ぎされており、特に見込みの蛇ノ目釉剥の部分にはアルミナサが塗られている。

第74図14は、17世紀第4四半期～18世紀前半の肥前（内野山窯）産陶器皿である。底部から胴部にかけての約1/2の破片である。残存高1.75cmで、高台の径4.9cm・高さ0.45cmを測る。高台の内外面は無釉であるが、胴部外面には透明釉がかかっている。内面は銅緑釉がかかっているが、見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。

第74図15は、18世紀～19世紀の福岡産陶器灯火具である。口縁部の約2/3が欠損している。器高2.35cm・口径10.3cm・底径4.05cmを測る。内面は鉄釉がかかっているが、外面は無釉である。見込み中央には、幅0.3～0.4cm・外径3.6～3.7cmの環状の重ね焼きと思われる痕跡が残っている。しかし、環の1ヶ所が長さ0.7cmに渡って切れており、受皿を有する灯火具の上皿との接合痕とも考えられる。

第74図16は、17世紀後半～18世紀前半の肥前産白磁紅皿である。第44号墓の地表から採集したもので、口縁部から胴部にかけての約1/2を欠損する。糸切り細工による成形である。器高1.55cm・復原口径5.1cmで、高台の径3.05cm・高さ0.55cmを測る。内外面とも透明釉がかかっているが、豊付の一部は無釉である。全面に細かい貫入が走っている。

第74図17は、19世紀の関西系軟質施釉陶器の蓋である。胞衣容器として使用されたと思われる鍋の蓋であり、略完形である。天井部は浅いドーム状を呈し、その中央には輪状つまみがついている。口縁部はほぼ水平に外へ開いている。器高5.5cm・口径19.7cm・口縁部幅1.6cmで、つまみの径6.2cm・高さ0.8cmを測る。裏文様は銅緑と鉄で蔓草文が描かれている。天井部内面のみ到低火度の透明釉がかかっているが、他は無釉である。天井部外面には煤が付着している。

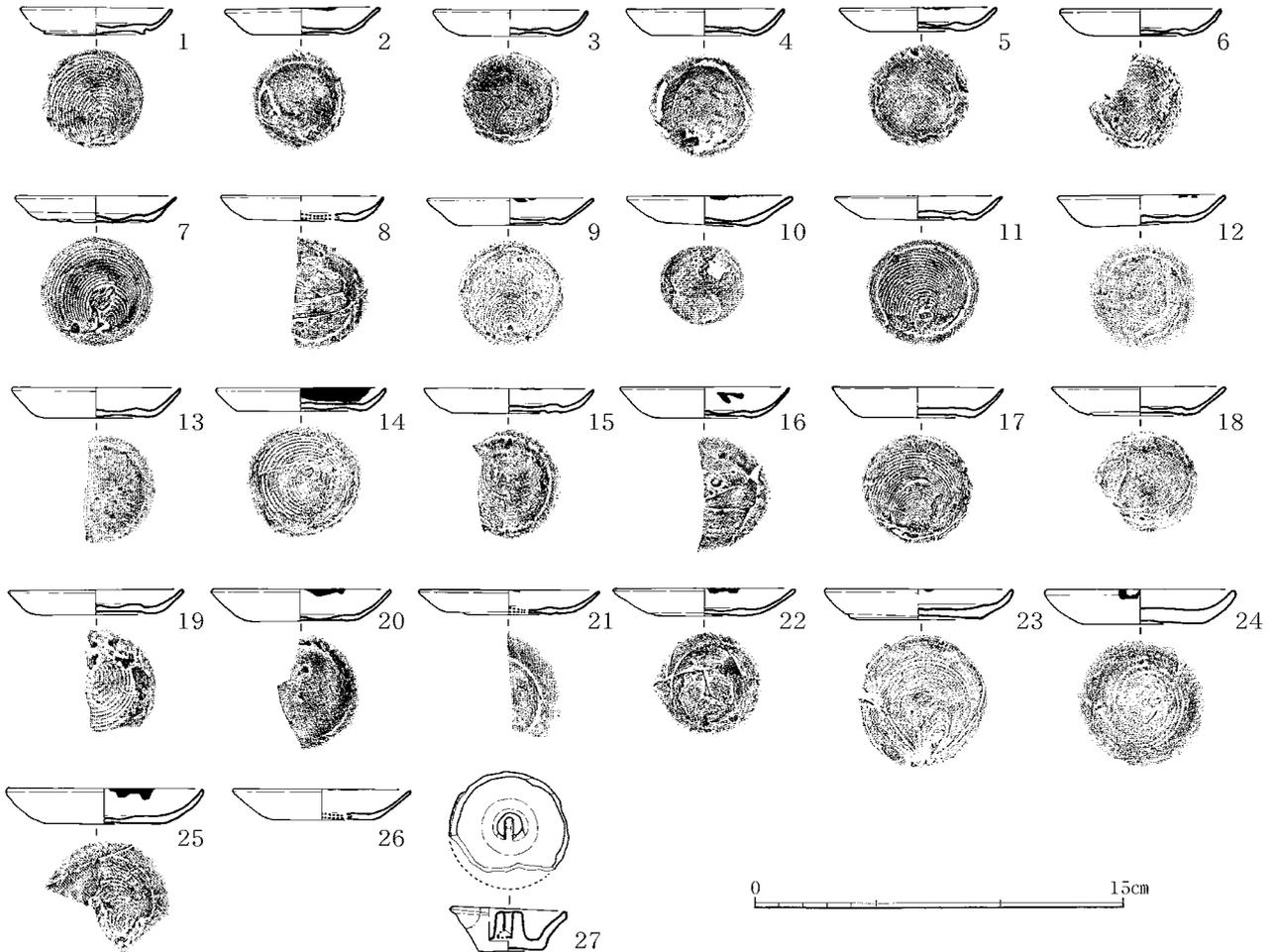
第74図18は、19世紀の福岡（小石原系？）産陶器瓶である。胴部上位の2ヶ所と胴部下

位から底部の約1/2を欠損している。残存高22.5cm・胴部最大径13.0cm・底径10.6cmを測る。頸部外面にて鉄釉を、胴部外面には灰釉をかけ分けており、底部外面と胴部内面は無釉である。底部外面には回転糸切り痕がわずかに残っている。胴部外面には、鉄釉で「太宰府」と「口屋」(濱カ)と縦書きされている。

第74図19は、17世紀後半の肥前産陶器瓶である。底部と、胴部下半の1/2弱の破片である。残存長12.0cm・復原胴部最大径16.0cmで、高台の径10.4cm・高さ1.5cmを測る。胴部外面上半は、二彩手の刷毛目文の上に透明釉が、下半には鉄泥がかかっている。高台の内面も鉄釉がかかっているが、畳付は無釉である。内全面も無釉である。

第74図20は、ガラス製瓶である。第51号墓の地表で採集した、完形品である。透明な青緑色を呈している。口縁部には蓋を固定するフックが入る穴が2ヶ所あり、底部は上げ底を呈している。器高31.9cm・口径2.5cm・胴径8.4cm・底径8.3cmを測る。器壁の厚さは、口縁部で最大0.6cmを測る。肩部に松文を、胴部に「登録商標 三国山本店 吟醸」と鋳出されている。

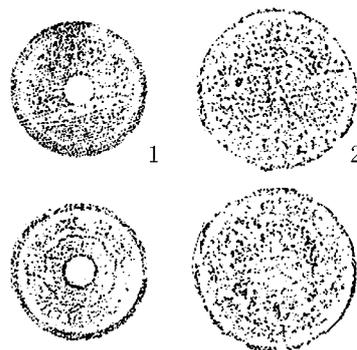
第75図1～26は、土師器皿である。9・11・23は略完形品であるが、他は破片からの復元である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調はおおむね浅黄橙色を呈している。調整は、内外面ともヨコナデである。大半の底部外面には、回転糸切り痕が残っているが2・20・21のようにナデ仕上げされて残っていないものもある。2・5・9・10・12・14～16・20～26の



第75図 第40号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3) ①

口縁部内外面には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。寸法は、器高0.95～1.45cm・口径6.3～8.0cm・底径4.0～5.3cmの範囲である。(第5表)

第75図27は、土師器の灯火具である。口縁部から胴部の約1/3が欠損している。底部内面の中央に灯芯を立てる切れ込みの入った筒状の突出物が付いている。器高1.85cm・口径4.8cm・底径2.7cmで内面突出物の高さ1.2cm・径1.1～1.4cm・切れ込み幅0.2～0.4cmを測る。内外面に銀色に発光する粒子が多くあり、胎土中の岩石粒というよりも、高温焼成での自然変化によるものと考ええる。胎土は緻密で、焼成良好で硬く、色調は浅黄橙色～橙色を呈している。調整は、手捏ね様のナデである。



第76図 第40号墓地表面採集
銭貨拓影図(原寸)

第76図1・2は、銭貨である。いずれも近代銭であり、1は大正9年製造の五銭白銅貨、2は大正12年製造の一銭青銅貨である。

第5表 第40号墓地表面採集土師器皿寸法一覧表(単位cm)

挿図	遺物	器高	口径	底径	煤	備考
75	1	1.05	6.30	4.15		反転復元
"	2	1.10	6.35	4.00	有	
"	3	1.05	6.35	4.00		反転復元
"	4	1.10	6.40	4.40		反転復元
"	5	0.95	6.40	4.00	有	
"	6	1.10	6.60	4.40		反転復元
"	7	1.10	6.65	4.50		
"	8	1.00	6.65	4.35		
"	9	1.10	6.80	4.60	有	完形
"	10	1.25	6.80	3.60	有	
"	11	1.00	6.80	4.40		略完形
"	12	1.25	6.90	4.60	有	
"	13	1.25	6.85	4.10		反転復元

第6表 第40号墓地出土数珠玉一覧表①

出土遺構	材質	色調	寸法(単位cm)		備考	図番号		
			直径	厚み		挿図	遺物	
第7号墓	ガラス	濃緑色	0.585	0.340	成珠	34	1	
	ガラス	濃緑色	0.560	0.350	成珠	"	2	
	ガラス	濃緑色	0.545	0.360	成珠	"	3	
	ガラス	濃緑色	0.540	0.325	成珠	"	4	
	ガラス	濃緑色	0.505	0.315	成珠	"	5	
	ガラス	濃緑色	0.515	0.375	成珠	"	6	
	ガラス	濃緑色	0.520	0.370	成珠	"	7	
	ガラス	濃緑色	0.500	0.350	成珠	"	8	
	ガラス	濃緑色	0.490	0.330	成珠	"	9	
	ガラス	濃緑色	0.500	0.305	成珠	"	10	
	ガラス	濃緑色	0.465	0.345	成珠	"	11	
	ガラス	濃緑色	0.495	0.315	成珠	"	12	
	ガラス	濃緑色	0.465	0.325	成珠	"	13	
	ガラス	濃緑色	0.490	0.385	成珠	"	14	
第7号墓	ガラス	無色透明	0.575	0.400	成珠	34	15	
	ガラス	無色透明	0.610	0.415	成珠	"	16	
	ガラス	無色透明	0.495	0.355	成珠	"	17	
	ガラス	無色透明	0.500	0.370	成珠	"	18	
第7号墓	ガラス	無色透明	0.505	0.410	成珠	"	19	
	ガラス	無色透明	0.510	0.395	成珠	"	20	
	ガラス	無色透明	0.495	0.365	成珠	"	21	
	ガラス	無色透明	0.515	0.370	成珠	"	22	
	ガラス	無色透明	0.470	0.325	成珠	"	23	
	ガラス	無色透明	0.490	0.385	成珠	"	24	
	15号	ガラス	白色	0.775	0.690	母珠	35	1
	15号	ガラス	白色	0.720	0.730	母珠	"	2
18号	ガラス	青色	0.600	0.520		35	5	
	ガラス	白色	0.585	0.470		"	6	

第7表 第40号墓地出土数珠玉一覧表②

出土遺構	材質	色調	寸法(単位cm)		備考	図番号		出土遺構	材質	色調	寸法(単位cm)		備考	図番号	
			直径	厚み		挿図	遺物				直径	厚み		挿図	遺物
第21号墓	ガラス	無色透明	1.002	0.830	母珠	36	1	第21号墓	ガラス	無色透明	0.460	0.335	成珠	36	58
	ガラス	無色透明	0.985	0.870	母珠	"	2		ガラス	無色透明	0.545	0.355	成珠	"	59
	ガラス	無色透明	0.595	0.475	成珠	"	3		ガラス	無色透明	0.520	0.370	成珠	"	60
	ガラス	無色透明	0.600	0.540	成珠	"	4		ガラス	無色透明	0.490	0.320	成珠	"	61
	ガラス	無色透明	0.605	0.455	成珠	"	5		ガラス	無色透明	0.475	0.305	成珠	"	62
	ガラス	無色透明	0.610	0.490	成珠	"	6		ガラス	無色透明	0.570	0.465	成珠	"	63
	ガラス	無色透明	0.605	0.525	成珠	"	7		ガラス	無色透明	0.600	0.480	成珠	"	64
	ガラス	無色透明	0.630	0.505	成珠	"	8		ガラス	無色透明	0.605	0.470	成珠	"	65
	ガラス	無色透明	0.565	0.465	成珠	"	9		ガラス	無色透明	0.615	0.470	成珠	"	66
	ガラス	無色透明	0.630	0.505	成珠	"	10		ガラス	水色	0.570	0.445	四天珠?	"	67
	ガラス	無色透明	0.585	0.420	成珠	"	11		ガラス	水色	0.555	0.445	四天珠?	"	68
	ガラス	無色透明	0.615	0.530	成珠	"	12		ガラス	茶色	0.590	0.460	四天珠?	"	69
	ガラス	無色透明	0.550	0.495	成珠	"	13		ガラス	茶色	0.515	0.440	四天珠?	"	70
	ガラス	無色透明	0.570	0.455	成珠	"	14		ガラス	紺色	0.470	0.445		"	71
	ガラス	無色透明	0.605	0.480	成珠	"	15		ガラス	乳白色	0.957	0.882	母珠	58	1
	ガラス	無色透明	0.585	0.505	成珠	"	16		ガラス	黄褐色	0.584	0.545		"	2
	ガラス	無色透明	0.610	0.500	成珠	"	17		ガラス	黒色	0.544	0.433		"	3
	ガラス	無色透明	0.635	0.575	成珠	"	18		ガラス	白色	0.580	0.519		"	4
	ガラス	無色透明	0.600	0.510	成珠	"	19		ガラス	浅黄色	0.458	0.327		"	5
	ガラス	無色透明	0.610	0.510	成珠	"	20		ガラス	浅黄色	0.582	0.317		"	6
	ガラス	無色透明	0.595	0.480	成珠	"	21		ガラス	浅黄色	0.529	0.382		"	7
	ガラス	無色透明	0.605	0.525	成珠	"	22	ガラス	浅黄色	0.454	0.308		"	8	
	ガラス	無色透明	0.585	0.485	成珠	"	23	ガラス	無色透明	0.623	0.512	成珠	"	9	
	ガラス	無色透明	0.575	0.510	成珠	"	24	ガラス	無色透明	0.586	0.576	成珠	"	10	
	ガラス	無色透明	0.555	0.485	成珠	"	25	ガラス	無色透明	0.571	0.528	成珠	"	11	
	ガラス	無色透明	0.535	0.430	成珠	"	26	ガラス	無色透明	0.570	0.512	成珠	"	12	
	ガラス	無色透明	0.585	0.455	成珠	"	27	ガラス	無色透明	0.631	0.633	成珠	"	13	
	ガラス	無色透明	0.560	0.450	成珠	"	28	ガラス	無色透明	0.682	0.517	成珠	"	14	
	ガラス	無色透明	0.570	0.490	成珠	"	29	ガラス	無色透明	0.569	0.576	成珠	"	15	
	ガラス	無色透明	0.555	0.425	成珠	"	30	ガラス	無色透明	0.558	0.500	成珠	"	16	
	ガラス	無色透明	0.570	0.425	成珠	"	31	ガラス	無色透明	0.605	0.517	成珠	"	17	
	ガラス	無色透明	0.605	0.455	成珠	"	32	ガラス	無色透明	0.584	0.583	成珠	"	18	
	ガラス	無色透明	0.550	0.415	成珠	"	33	ガラス	乳白色	0.562	0.458	成珠	"	19	
	ガラス	無色透明	0.550	0.485	成珠	"	34	ガラス	乳白色	0.522	0.457	成珠	"	20	
	ガラス	無色透明	0.520	0.410	成珠	"	35	ガラス	乳白色	0.499	0.469	成珠	"	21	
	ガラス	無色透明	0.575	0.485	成珠	"	36	ガラス	乳白色	0.506	0.423	成珠	"	22	
	ガラス	無色透明	0.520	0.410	成珠	"	37	ガラス	乳白色	0.578	0.417	成珠	"	23	
	ガラス	無色透明	0.575	0.440	成珠	"	38	ガラス	乳白色	0.594	0.416	成珠	"	24	
	ガラス	無色透明	0.540	0.440	成珠	"	39	ガラス	乳白色	0.544	0.439	成珠	"	25	
	ガラス	無色透明	0.515	0.395	成珠	"	40	ガラス	乳白色	0.520	0.512	成珠	"	26	
	ガラス	無色透明	0.595	0.460	成珠	"	41	ガラス	赤褐色	0.539	0.368	成珠	"	27	
	ガラス	無色透明	0.610	0.480	成珠	"	42	ガラス	赤褐色	0.516	0.376	成珠	"	28	
	ガラス	無色透明	0.505	0.340	成珠	"	43	ガラス	赤褐色	0.516	0.395	成珠	"	29	
	ガラス	無色透明	0.495	0.405	成珠	"	44	ガラス	赤褐色	0.491	0.360	成珠	"	30	
	ガラス	無色透明	0.490	0.330	成珠	"	45	ガラス	赤褐色	0.487	0.342	成珠	"	31	
	ガラス	無色透明	0.480	0.300	成珠	"	46	ガラス	赤褐色	0.472	0.376	成珠	"	32	
	ガラス	無色透明	0.535	0.420	成珠	"	47	ガラス	赤褐色	0.482	0.385	成珠	"	33	
	ガラス	無色透明	0.520	0.395	成珠	"	48	ガラス	赤褐色	0.525	0.417	成珠	"	34	
	ガラス	無色透明	0.510	0.310	成珠	"	49	ガラス	赤褐色	0.479	0.407	成珠	"	35	
	ガラス	無色透明	0.530	0.415	成珠	"	50	ガラス	赤褐色	0.479	0.303	成珠	"	36	
	ガラス	無色透明	0.535	0.440	成珠	"	51	ガラス	青色	0.480	0.280	成珠?	72	9	
	ガラス	無色透明	0.545	0.410	成珠	"	52	ガラス	青色	0.475	0.255	成珠?	"	10	
	ガラス	無色透明	0.600	0.445	成珠	"	53	ガラス	青色	0.400	0.285	成珠?	"	11	
	ガラス	無色透明	0.415	0.255	成珠	"	54	ガラス	青色	0.380	0.325	成珠?	"	12	
	ガラス	無色透明	0.460	0.320	成珠	"	55	ガラス	青色	0.375	0.280	成珠?	"	13	
	ガラス	無色透明	0.450	0.380	成珠	"	56	ガラス	無色透明	0.405	0.225	成珠?	"	14	
	ガラス	無色透明	0.485	0.325	成珠	"	57								

原田第40号墓地の遺物

第8表 第40号墓地出土銭貨一覧表①

出土遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号		
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物	
2号墓	新寛永	24.75	0.85~1.05	6.45	0.65~0.95	2.7	布付着	33	2	
	文銭	25.25	1.25~1.35	5.65	1.15	3.9	背「文」、布付着	"	3	
	新寛永	22.95	1.25	6.65	1.15	3.3	布付着	"	4	
	新寛永	21.55	0.85	6.35	0.75	1.8		"	5	
	判読不能 判読不能	—	—	—	—	6.9	錆着	図無し		
22号墓	古寛永	24.55	1.15	5.65	0.95~1.15	3.1		37	1	
	古寛永	23.05	0.85~0.95	5.75	0.75	2.3		"	2	
	新寛永	24.55	0.75	6.35	0.65	2.0		"	3	
	文銭	25.15	1.05~1.15	5.75	0.85	2.9	背「文」	"	4	
	文銭	24.85	1.15~1.25	6.15	0.55~0.75	3.2	背「文」	"	5	
	新寛永	23.85	0.85~0.95	5.95	0.65~0.85	2.2		"	6	
23号墓	古寛永	24.85	1.25	5.85	1.15	3.6		38	2	
	新寛永	24.55	1.35~1.45	5.85	1.15~1.25	4.0		"	3	
	新寛永	22.65	0.85	6.55	0.65~0.85	1.9		"	4	
	文銭	24.65	1.00~1.15	5.65	0.65~0.75	3.1	背「文」	"	5	
	鉄銭 判読不能	—	—	—	—	4.7	錆着	図無し		
25号墓	新寛永	22.05	0.75~0.85	6.95	0.75	1.9		40	2	
	新寛永	23.65	0.95	6.05	0.85	2.7		"	3	
	新寛永	23.15	0.75	6.15	0.75	1.8		"	4	
	鉄銭 判読不能 判読不能	—	—	—	—	9.6	錆着	図無し		
	27号墓	古寛永	24.95	1.15~1.25	5.65	1.05~1.15	3.1	布付着	43	2
新寛永		24.15	1.05~1.15	6.05	0.95	2.5	布付着	"	3	
新寛永		23.15	0.85~0.95	6.15	0.75	2.2	布付着	"	4	
新寛永		24.85	0.85	5.95	0.65~0.75	2.2	布付着	"	5	
新寛永		24.25	1.05~1.25	6.15	1.05	2.6	布付着	"	6	
新寛永		22.35	0.75~1.05	6.45	1.05~1.35	1.5	背「元」、布付着	"	7	
28号墓	新寛永	22.65	1.15	6.35	1.15	2.4	背「元」、漆付着	44	7	
	新寛永	22.55	1.00	5.95	0.90~1.15	2.2	背「元」、漆付着	"	8	
	新寛永	24.15	1.05	6.15	0.85	2.6	漆付着	"	9	
	文銭	25.15	1.25~1.35	5.75	1.15~1.35	3.9	背「文」、漆付着	"	10	
	新寛永	23.65	1.15	6.15	1.05~1.15	3.3	漆付着	"	11	
	新寛永	24.45	1.15	5.95	1.05~1.15	3.4	漆付着	"	12	
29号墓	古寛永	24.15	0.85~1.15	5.35	0.85~0.95	2.6		45	2	
	新寛永	22.35~23.65	0.85	6.15	0.65~0.85	1.8		"	3	
	新寛永	23.05~24.55	0.85	6.55	0.80~0.85	2.3		"	4	
	新寛永	22.55	0.85~0.95	6.15	0.65~0.85	2.1		"	5	
	新寛永	22.85	0.85~1.05	6.25	0.95	2.6		"	6	
	判読不能	22.65~23.05	0.65~1.05	7.95	0.85~1.05	2.3		"	7	
35号墓	新寛永	22.75	0.65~1.15	7.75	0.75~0.85	2.0	背「小」	48	1	
	新寛永	24.55	1.35~1.45	5.75	1.15	2.8		"	2	
	鉄銭 判読不能 判読不能 判読不能	—	—	—	—	13.0	錆着	図無し		
	36号墓	文銭	25.25	1.10~1.15	5.95	1.05	3.4	背「文」	49	4
		新寛永	23.75	1.00~1.20	6.00	1.00	2.0		"	5
新寛永		25.00	1.30~1.40	5.45	1.10~1.20	3.7		"	6	
文銭		25.15	1.15~1.25	5.65	1.05	3.4	背「文」	"	7	
新寛永		23.95	1.05~1.15	5.95	1.05	2.9		"	8	
新寛永		23.35	0.95~1.05	5.65	0.75~0.95	2.0	背「長」	"	9	
37号墓	新寛永	22.95	0.85~0.95	6.55	—	2.9		50	3	
	新寛永	23.15	0.75~0.85	6.15	0.65~0.75	2.2		"	4	
	新寛永	21.75~22.45	0.95~1.05	6.15	0.85	1.7	背「元」	"	5	
	仙台通寶	—	—	—	—	2.8	割れ	図無し		

原田第40号墓地の遺物

第9表 第40号墓地出土銭貨一覧表②

出土 遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号		
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物	
38号墓	古寛永	24.15	1.20~1.25	6.65	0.95	3.2		51	3	
	文銭	25.05	1.15	5.95	0.95	3.4	背「文」	〃	4	
	文銭	25.15	1.05~1.15	5.95	0.95	3.3	背「文」	〃	5	
	新寛永	22.75	0.85	6.45	0.85	2.0	背「元」	〃	6	
	新寛永	23.25	1.05~1.10	6.05	0.95	2.7		〃	7	
	新寛永	22.85	0.95~1.05	6.65	0.95	2.1		〃	8	
39号墓	古寛永	24.35	1.15	5.75	1.15	3.5		52	4	
40号墓	鉄銭	—	—	—	—	22.1	錆着		図無し	
	鉄銭									
	鉄銭									
	鉄銭									
	鉄銭									
42号墓	文久永寶	22.35	1.05~1.20	7.15	0.75~1.05	3.1		53	7	
43号墓	古寛永	25.25	0.95	6.35	0.85	3.1		54	1	
	新寛永	23.45	1.05~1.15	6.25	1.05~1.15	2.9		〃	2	
	文銭	24.95	1.20~1.25	5.95	0.95~1.05	3.4	背「文」	〃	3	
	新寛永	24.85	1.05~1.15	6.25	1.05	3.2		〃	4	
	新寛永	22.15	0.65~0.75	6.55	0.55~0.65	1.5	布付着	〃	5	
	鉄銭	—	—	—	—	1.3	布付着		図無し	
46号墓	古寛永	24.55	0.95~1.00	5.75	0.95~1.05	3.2		56	3	
	古寛永	24.25	0.85	5.85	0.65	2.3		〃	4	
	文銭	25.05	1.15	5.55	0.95	3.6	背「文」	〃	5	
	文銭	24.95	1.25	5.75	1.05	4.1	背「文」	〃	6	
	新寛永	23.25	1.15	5.35	0.95~1.05	2.8	背「元」	〃	7	
	古寛永	24.65	1.15~1.30	5.65	1.25	4.1		〃	8	
	文銭	25.25	1.10~1.25	5.95	0.95	3.6	背「文」	〃	9	
	文銭	25.25	1.25	5.95	1.05	3.6	背「文」	〃	10	
	文銭	25.25	1.15	5.85	0.85~0.95	3.3	背「文」	〃	11	
	新寛永	24.95	1.05~1.15	5.95	0.95	3.1		〃	12	
	新寛永	24.85	1.45	5.95	1.15~1.25	4.2		〃	13	
	55号墓	文銭	25.55	1.00~1.15	5.35	0.95~1.15	3.8	背「文」	57	3
	61号墓	新寛永	22.35	0.85	6.15	0.75~0.85	1.5	背「元」	60	1
新寛永		24.75	1.05	5.85	0.85	3.3		〃	2	
新寛永		22.65	0.85~0.95	6.25	0.65~0.75	1.9		〃	3	
新寛永		22.85	0.95~1.05	6.68	0.95~1.00	2.4		〃	4	
鉄銭		—	—	—	—	2.7	錆付着、割れ	図無し		
鉄銭		—	—	—	—	1.9	錆付着			
64号墓	文銭	25.05	1.25~1.30	5.95	1.15	3.8	背「文」	61	1	
	文銭	25.05	1.35	5.85	1.15	4.0	背「文」	〃	2	
	新寛永	22.85~23.15	0.45~0.75	6.15	0.55~0.65	1.6		〃	3	
	新寛永	23.05	0.95~1.15	6.45	1.05~1.15	2.6	背「小」	〃	4	
	鉄銭	—	—	—	—	5.0		図無し		
	判読不能	25.35	1.35	5.75			錆着			
71号墓	新寛永	23.15	0.95	6.25	0.95~1.05	2.6		63	5	
	新寛永	22.15	1.15	5.45	0.95~1.05	2.2	背「元」	〃	6	
	新寛永	24.45	1.00~1.05	6.15	0.85~0.95	2.6		〃	7	
	新寛永	23.65	0.95~1.05	6.05	0.75~0.85	2.8		〃	8	
	新寛永	23.65	1.05	6.15	0.90~1.05	3.5	鉄銭片付着	図無し		
	鉄銭	—	—	—	—	1.9	割れ			
72号墓	新寛永	—	—	—	—	1.4	破片	図無し		
	鉄銭	—	—	—	—	9.8	錆着			
	鉄銭									
	鉄銭									
	鉄銭									
鉄銭										

原田第40号墓地の遺物

第10表 第40号墓地出土銭貨一覧表③

出土遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号	
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物
73号墓	文銭	25.45	1.20~1.25	5.85	1.05~1.15	3.1	背「文」	64	6
	新寛永	24.65	0.95~1.05	6.35	0.85~1.05	2.6		"	7
	新寛永	20.85~22.65	1.25	6.15	1.05~1.15	2.0		"	8
	鉄銭	26.25	1.55~1.65	7.15	1.85	2.0	錆付着	図無し	
	新寛永	—	—	—	—	1.4	割れ		
判読不能	—	—	—	—	2.4	割れ			
74号墓	新寛永	23.25~24.55	1.25~1.35	6.05	1.15	2.2	背「佐」欠落	65	4
	新寛永	22.95	1.15	5.95	1.05	2.7		"	5
	文銭	25.45	1.25~1.35	5.75	1.15~1.25	3.8	背「文」	"	6
	文銭	25.55	1.25~1.35	6.05	1.05~1.25	3.3	背「文」	"	7
	永楽通寶	24.55	1.15	5.75	0.85~1.05	3.4		"	8
古寛永	25.05	1.35~1.45	5.85	1.35	4.1		"	9	
75号墓	古寛永	25.25	1.05~1.25	5.45	0.85~1.05	2.5		66	4
	古寛永	24.65	1.25~1.35	4.75	1.05~1.45	3.2		"	5
	文銭	25.45	1.25~1.35	5.55	1.15~1.35	3.5	背「文」	"	6
	古寛永	25.35	1.25~1.35	5.75	1.15~1.35	3.1		"	7
	古寛永	23.75~25.35	1.25~1.45	4.95	1.15~1.25	3.1	割れ	図無し	
判読不能	—	—	—	—	0.8	割れ			
76号墓	新寛永	22.65~22.75	1.15~1.40	6.20	1.00~1.15	2.3	背「元」	67	4
77号墓	古寛永	25.05	0.95~1.00	5.95	0.85	3.0		68	2
	文久永寶	27.25	1.25~1.35	7.15	0.95~1.25	4.5		"	3
	文久永寶	26.45	0.75~0.85	6.65	0.75~0.85	3.1		"	4
78号墓	新寛永	24.85	1.05	5.95	0.85	3.0		69	3
	新寛永	21.85	0.75~0.85	6.85	0.85	2.1		"	4
	新寛永	24.35	0.85	5.85	0.85~0.90	2.6		"	5
79号墓	新寛永	21.95	0.65~0.75	6.85	0.65~0.75	1.6		"	6
81号墓	新寛永	24.15	0.95	6.45	0.75	2.6		70	2
	新寛永	24.25	0.85~0.95	6.15	0.75	2.5		"	3
	新寛永	23.05	0.75~0.85	6.15	0.65~0.75	2.2		"	4
	新寛永	24.45	1.15	6.05	0.95	2.9		"	5
	新寛永	24.55	0.85~0.95	6.55	0.75	2.3		"	6
	新寛永	23.25	1.05~1.15	5.75	0.85~0.95	2.8		"	7
82号墓	古寛永	24.85	1.15	5.65	1.05	3.4	布付着	71	1
	古寛永	24.65	1.15~1.25	5.55	1.15	3.6		"	2
	新寛永	23.65	0.75~0.95	6.05	0.55~0.85	2.0		"	3
	新寛永	24.05	1.15	6.25	0.95	2.2		"	4
	新寛永	22.15	0.85~0.95	6.85	0.85	1.8		"	5
	新寛永	21.55	0.95~1.00	6.25	0.95	2.2		"	6
83号墓	新寛永	23.05	1.00~1.65	5.95	0.95~2.35	2.7		"	7
	新寛永								
	鉄銭								
	鉄銭	—	—	—	—	10.4	錆着	図無し	
	鉄銭								
84号墓	新寛永	24.35	1.05~1.15	6.15	1.00~1.05	2.9	布付着	72	15
	新寛永	22.95	0.95~1.05	6.35	0.95	2.8	布付着	"	16
	新寛永	23.05	0.95~1.00	6.25	0.85~0.95	2.5	布付着	"	17
	新寛永	24.35	1.00~1.15	6.15	0.85~0.90	3.0	布付着	"	18
	新寛永	24.55	1.05~1.10	5.85	0.95	2.8	布付着	"	19
	新寛永	23.55	1.05~1.15	6.25	1.05	2.7	布付着	"	20
表採	五銭	19.15	1.25~1.35	3.85	1.00	2.5	大正9年	76	1
	一銭	22.85	1.25	—	—	3.4	大正12年	"	2

第4節 原田第41号墓地の遺物

原田第41号墓地（以下「第41号墓地」という）においては、発掘調査した土葬墓75基のうち66基から遺物が出土した。また、蔵骨器3点、胞衣容器あるいは胞衣容器と思われる容器23点が出土した。他に表採遺物16点を図化した。

1. 土葬墓の遺物（第77～117図、第11～15表）

第1号墓（第77図、図版15・18・25）

墓壙内から棺甕1点・小坏1点が、棺内から小坏1点・かんざし4点・釘1本が出土した。

第77図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高72.3cm・口径48.6cm・頸径43.9cm・胴径53.7cm・底径26.0cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施し、胴部外面の上位に2条の、また下位に3条の沈線を巡らしている。黒褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部は、無釉であり、上面18ヶ所に目跡が残っている。

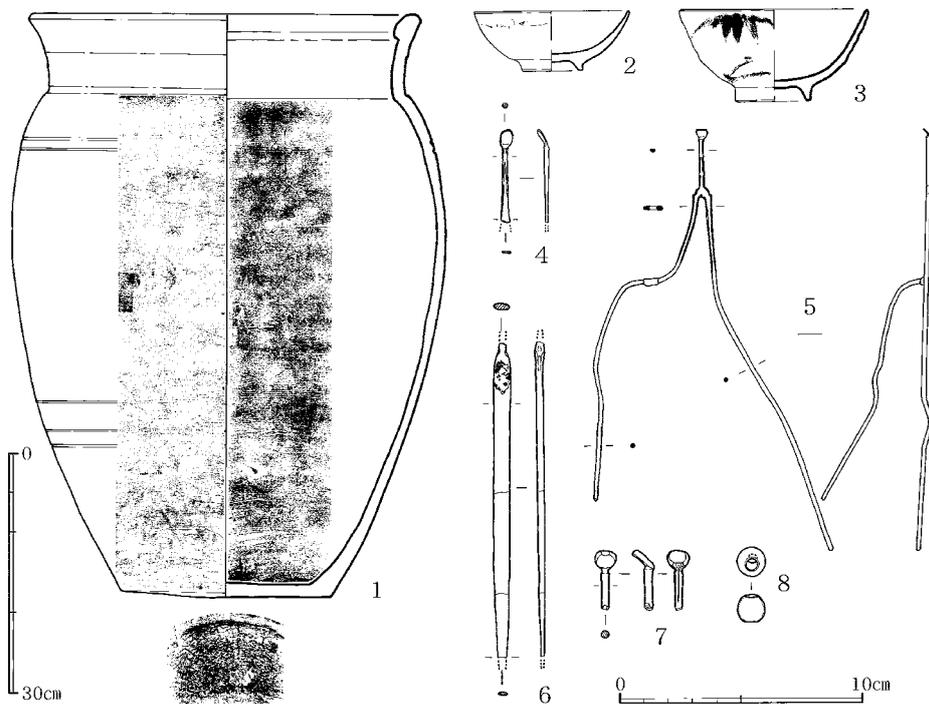
第77図2は、18世紀後半の肥前産染付磁器小坏である。棺内副葬の完形品である。器高2.5cm・口径6.45cmで、高台の径2.55cm・高さ0.5cmを測る。裏文様は、笹文である。内外面全て透明釉がかかっているが、畳付は釉剥ぎされていると思われる。小振りであり、紅皿の可能性もある。

第77図3は、18世紀末～19世紀前半の肥前系染付磁器小坏である。棺外出土で、口唇部・高台を若干欠損するが、略完形品である。器高3.85cm・口径7.8cmで、高台の径3.1cm・高さ0.6cmを測る。裏文様は、

柳文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。なお、外面では釉がかかっていない部分が散在している。

第77図4～8は、かんざしである。全て棺内出土であるが、欠損品である。

4は、銅製のかんざしで、全面に緑青が吹いている。



第77図 第41号墓地第1号墓出土遺物実測図（S=1/9・1/3）

残存長3.85cmを測る。柄は厚さ0.1cm程の断面長方形を呈するが耳付近では径0.22cmの円形を呈している。耳は縦長の楕円形を呈し、幅0.55cm・厚み0.06cmを測る。

5も、銅製のかんざしで、全面に緑青が吹いている。柄が2本に分かれるもので、図化していないが、図版25の垂れ飾りが付くものである。耳の先端がわずかに欠損し、2本の柄も大きく曲がっているが、本来は真っ直ぐのものと思われ、推定全長19.0cm前後と考える。柄の断面は径0.2cmの円形であるが、耳付近は幅0.2cm・厚0.1cmの楕円形を呈している。

6は、材質不明のかんざしである。柄の先端と耳を欠損し、2ヶ所で折れている。白色を呈し、耳付近の片面に金象眼風の飾りが貼付されている。残存長13.0cm・最大幅0.73cm・最大厚0.4cmを測る。

7・8は、ガラス製のかんざしである。

7は、耳付近の破片で、濃い青色を呈している。残存長2.5cmで、耳の長さ1.1cm・幅0.95cm・厚さ0.24～0.35cmを測る。柄の残存長は、1.5cmで、断面は径0.38cmの円形を呈している。

8は、中が空洞の球形の玉である。空洞の内壁を赤色に塗ってある。直径1.2cm・厚さ1.11cmで、上下2ヶ所に径0.43cmの円形孔が開いている。7と組み合わさるかんざしの飾り玉と考える。

棺内出土の釘は、鉄製の角釘である。途中で折れ曲がっているが、残存長3.0cmを測る。襖蓋に使用されたものとする。

第2号墓（図無し）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘35本程が出土した。

銭は、全て鉄銭であり、錆着して図化できなかった。

釘は、全て鉄製の角釘である。長5.5～6.0cmのものが多い。

第3号墓（第78図1、図版15・32）

墓壙内から棺襖1点・ローソク1点・棺材・釘11本程・竹片・炭化物1点が出土した。

第78図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高79.0～79.1cm・口径52.5cm・頸径46.0cm・胴径55.7cm・底径27.7cmを測る。調整は、胴部内外面を叩きの後ナデ仕上げ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施し、胴部外面の中位に2条の沈線を、下位に1条の沈線と1～2条の螺線状沈線を巡らしている。頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部は無釉であり、上面13ヶ所以上に目跡が残っている。

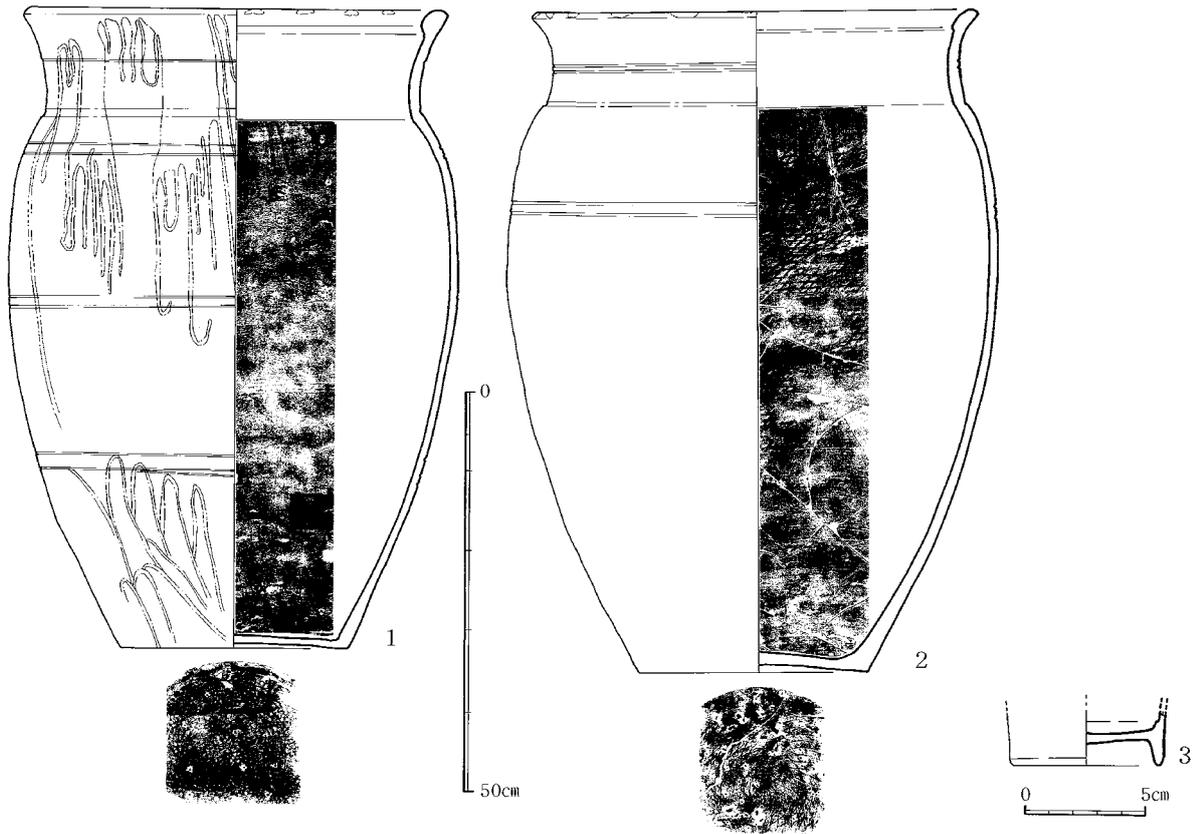
ローソクは、直径1.0cmのもので、残存長2.7cmを測る。

棺材としたものは、釘が打ち込まれた木片であり、9片出土した。打ち込まれた釘のうち、折り返されたものがあり、その釘の頭から折れた位置までの長さから、棺材の厚みは2.8cm程に復原できる。

釘は、棺材のものを含めて、全て鉄製の角釘である。欠損品が大半であるが、長さ4.0cm前後のものである。

竹片は、竹皮であり、棺内の詰め物と思われる。

炭化物は、木の炭化したものである。長さ6.7cm・幅4.0cm・厚さ2.0cm程の破片である。



第78図 第41号墓地第3～5号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

第4号墓 (第78図2、図版15)

墓壙内から棺嚢1点・釘1本が出土した。

第78図2は、18～19世紀の肥前産陶器嚢である。器高81.3～81.7cm・口径55.3cm・頸径50.4cm・胴径60.6cm・底径28.2cmを測る。調整は、胴部外面を格子目文叩きの後ナデ、内面を斜格子目文叩きの後ナデ、底部内面を斜格子目文叩きしている。頸部外面中位に2条の沈線を、胴部外面上位に2条の沈線を施している。鈍い灰赤色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面20ヶ所に目跡が残っている。

釘は、鉄製の角釘であり、小片である。嚢蓋に使用されたものと思われるが、切り合い関係を持つ第66号墓出土の釘の可能性もある。

第5号墓 (第78図3)

墓壙内から瓶3点が出土した。うち2点は、胞衣容器と思われる土瓶である。

第78図3は、1820～60年代の肥前系染付磁器瓶である。桶棺外出土の底部のみである。いわゆる銚子形であり、残存高2.3cmで、上げ底の底径は6.1cmを測る。内面は無釉であるが、外面は畳付を除いて全面透明釉がかかっている。釉剥ぎされた畳付にはアルミナサが塗られている。

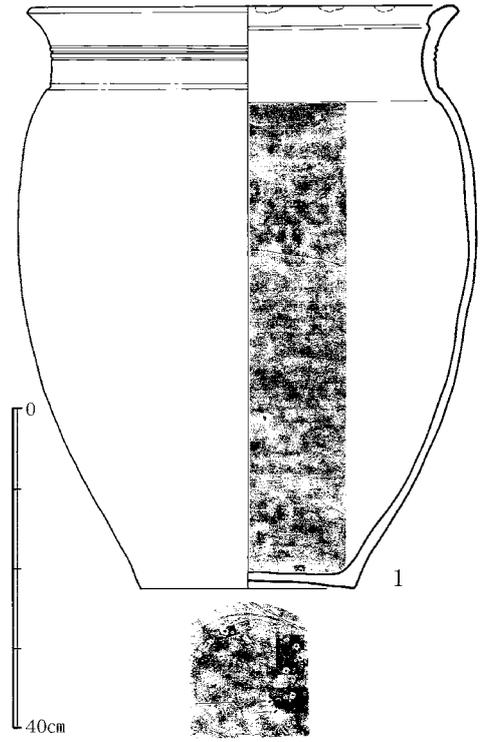
第6号墓 (第79図、図版15・32)

墓壙内から棺嚢1点・木片が、棺内から義歯1点が出土した。

第79図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高71.8～72.0cm・口径53.2cm・頸径47.4cm・胴径56.5cm・底径26.3cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。鈍い赤褐色・灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面18ヶ所に目跡が残っている。

第79図2は、明治時代以降のゴム製の下顎総義歯である。人工歯は、12本分あり、お歯黒を模して全て黒色を呈している。義歯床部の左右幅約6.1cm・前後長約3.9cmを測る。総重量は、9.3gを測る。

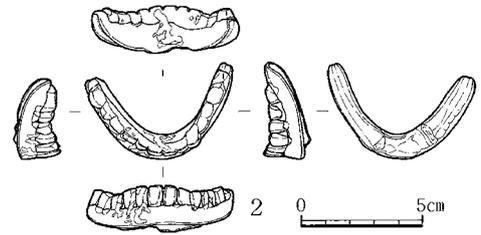
木片は、棺甕の下、墓壇底面から出土した。残存の長さ13.5cm・最大幅12.5cmの破片で、樹木の表皮に近い部分と思われ、厚さ2.0cm程である。自然木とも思えるが、棺甕の台座に使用されたものとも考えられる。



第7号墓 (第80図1・3～8、図版15)

墓壇内から棺甕1点が、棺内から銭6枚・釘13本程・木葉・植物質・木片が出土した。

第80図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高88.4cm・口径55.8cm・頸径51.6cm・胴径63.4cm・底径31.2cmを測る。調整は、胴部内外面格子目文叩きの後ナデ、底部内面格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施している。灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面には、不明瞭ながら16ヶ所に目跡が残っている。



第79図 第41号墓地第6号墓
出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

第80図3～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、4は文銭、5～8は新寛永である。4の背面には、「文」字が鋳出されている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5cm前後のものが多い。甕蓋に使用されたものとする。棺内出土の木葉・植物質は、棺内の詰め物と考える。なお、植物質としたものは当初藁束と考えていたが、不明である。

棺内出土の木片は、木の節の部分であり、長さ9.5cm・幅3.0cm・厚さ1.4cmを測る小片である。甕蓋と考えるが、あるいは詰め物の一部かもしれない。

第8号墓 (第80図2、図版15・33)

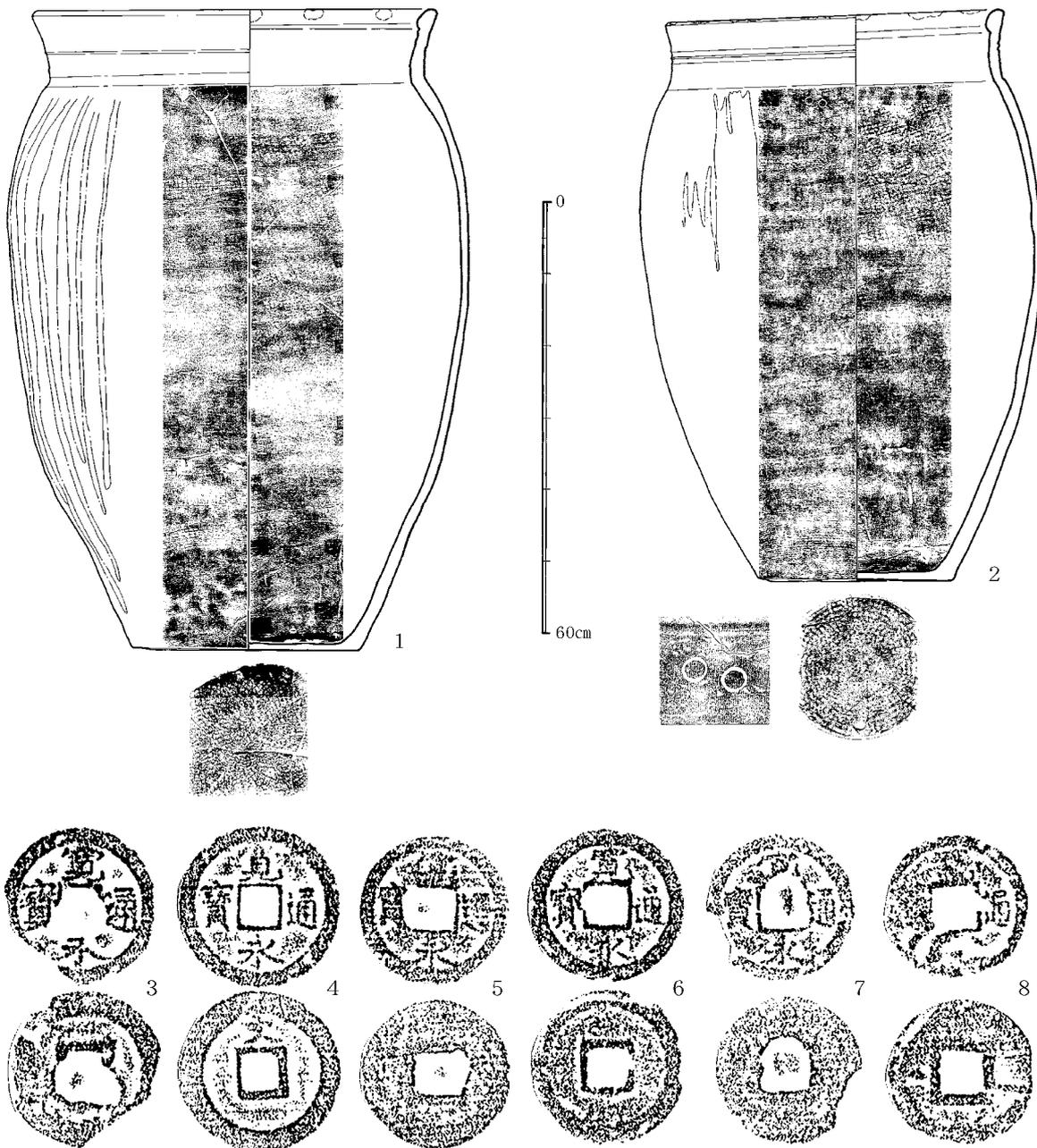
墓壇内から棺甕1点・墨書石1点が、棺内から釘1本・木葉が出土した。

第80図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高78.7cm・口径46.7cm・頸径45.3cm・

胴径55.0cm・底径26.7cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部外面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に2条の凹線を施している。また、胴部外面上位には、円形陰刻印を2ヶ押ししている。鈍い黄橙色を呈する土灰釉は、頸部全体を雑に釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面14ヶ所に目跡が残っている。

本墓棺蓋の蓋の押さえ石には「天保四年 巳八月廿七日 俗名喜七 行年卅三才」という墓碑の墨書が施されている。図化していないが、不整な七角形を呈した平べったい花崗岩である。長さ49.0cm・幅45.0cm・最大厚さ14.0cmを測る。(図版33)

釘は、鉄製の角釘であるが、小片のため長さは不明である。蓋に使用されたものとする。棺内出土の木葉は、棺内の詰め物と思われる。



第80図 第41号墓地第7・8号墓出土遺物実測図 (S=1/9)・錢貨拓影図 (原寸)

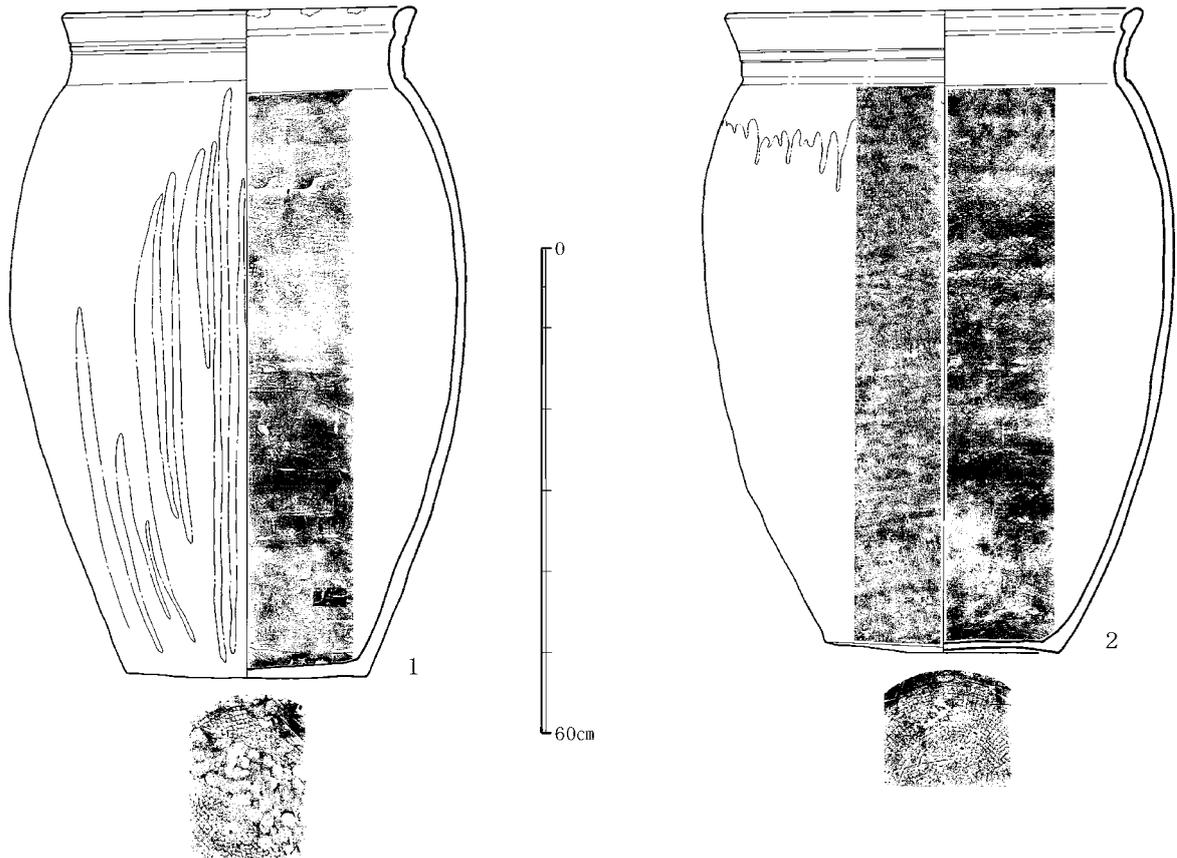
第9号墓 (第81図1・3～6、図版15)

墓壙内から、棺甕1点・釘4本程が、棺内から銭6枚・釘1本が出土した。

第81図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高81.8cm・口径43.3cm・頸径40.7cm・胴径55.6cm・底径29.4cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きの後指オサエしている。頸部外面中に2条の沈線を施している。鈍い赤橙色を呈する土灰釉の釉剥ぎはされていない。肥厚した口縁部上面14ヶ所に目跡が残っている。

第81図3～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、4は文銭、5・6は新寛永である。4の背面には「文」字が鑄出されている。銹着のため図化できなかったが、別に新寛永1枚と鉄銭1枚も相伴している。

釘は、棺内外のもの全て鉄製の角釘である。欠損品ばかりであり、唯一完形品の長さは4.5cmを



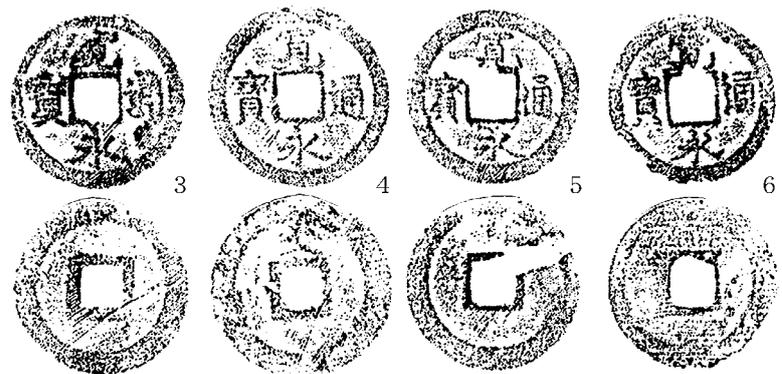
測る。甕蓋に使用されたもの
と考える。

第10号墓

(第81図2、図版15)

墓壙内から棺甕1点が、棺
内から釘7本程が出土した。

第81図2は、18～19世紀
の肥前産陶器甕である。器高
78.8cm・口径51.1cm・頸径



第81図 第41号墓地第9・10号墓出土遺物実測図 (S=1/9)・銭
貨拓影図 (原寸)

47.0cm・胴径57.6cm・底径28.5cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を2段施している。鈍い橙色・黄色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面16ヶ所に目跡が残っている。

釘は、全て鉄製の角釘である。折れ曲がったものが多く、長さ3.5cm前後のものが多いが、1本だけ長さ5.0cmのものがある。甕蓋に使用されたものとする。

第11号墓（第82図1・2、図版15・23）

墓壙内から、棺甕1点が、棺内から櫛1点・靱穀・木片が出土した。

第82図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高76.5cm・口径49.9cm・頸径45.0cm・胴径54.4cm・底径26.4cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17ヶ所に目跡が残っている。

第82図2は、木製の横櫛である。大半が欠損した破片であり、残存長5.95cm・最大厚0.55cmを測る。歯は全て折れているが、14本を確認できる。

靱穀は、棺内の詰め物とする。

木片は、自然木の表面や小枝片であり棺材とは考えにくい。

第12号墓（第82図3、図版27）

正方形縦棺から釘1点が、墓壙内から釘80本程が出土した。

第82図3は、ガラス製の釘である。光沢のある白色を呈している。径1.15cmの円形を呈し、中窪みの中央に4ヶの孔を開けている。最大厚は0.26cmを測る。何に伴うものか不明である。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。棺材に使用されたものであろう。

第13号墓

遺物は出土しなかった。

第14号墓（図無し）

墓壙内から金属片1点・ローソク14本程・釘5本程が出土した。

金属片は、鉄製品である。残存長6.0cm・幅1.4cm・厚さ0.5～0.7cmの、細い板状のものである。錆びて劣化著しく、図化しなかった。

ローソクとしたものは炭化物の様に黒色を呈している。灯芯を通す細い孔が中央にある。細いものは径0.4～0.5cm、太いものでも径0.6～0.8cmとローソクとしては細い。折れたものばかりであり、長いもので10cm程のものがある。

釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品ばかりで不明であるが、最も長いもので長さ4.0cmを測る。桶蓋に使用されたものとする。

第15号墓（図無し）

墓壙内からクレヨン1本が出土した。クレヨンは、黄色のものである。長さ3.8cm・径0.6～0.7

cmで、先を尖らせている。

第16号墓 (第82図4、図版18)

墓壙内から皿1点・釘15本が出土した。

第82図4は、1800～60年代の肥前系白磁紅皿である。型押し成形で、裏文様は型による蛸唐草文である。完形品である。器高1.65cm・口径5.9cmで、高台の径2.45cm・高さ0.2cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。墓壙内出土であるが、本来棺内副葬品と考える。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5～4.0cmのものが多い。桶蓋に使用されたものとする。

第17号墓 (第82図5、図版18)

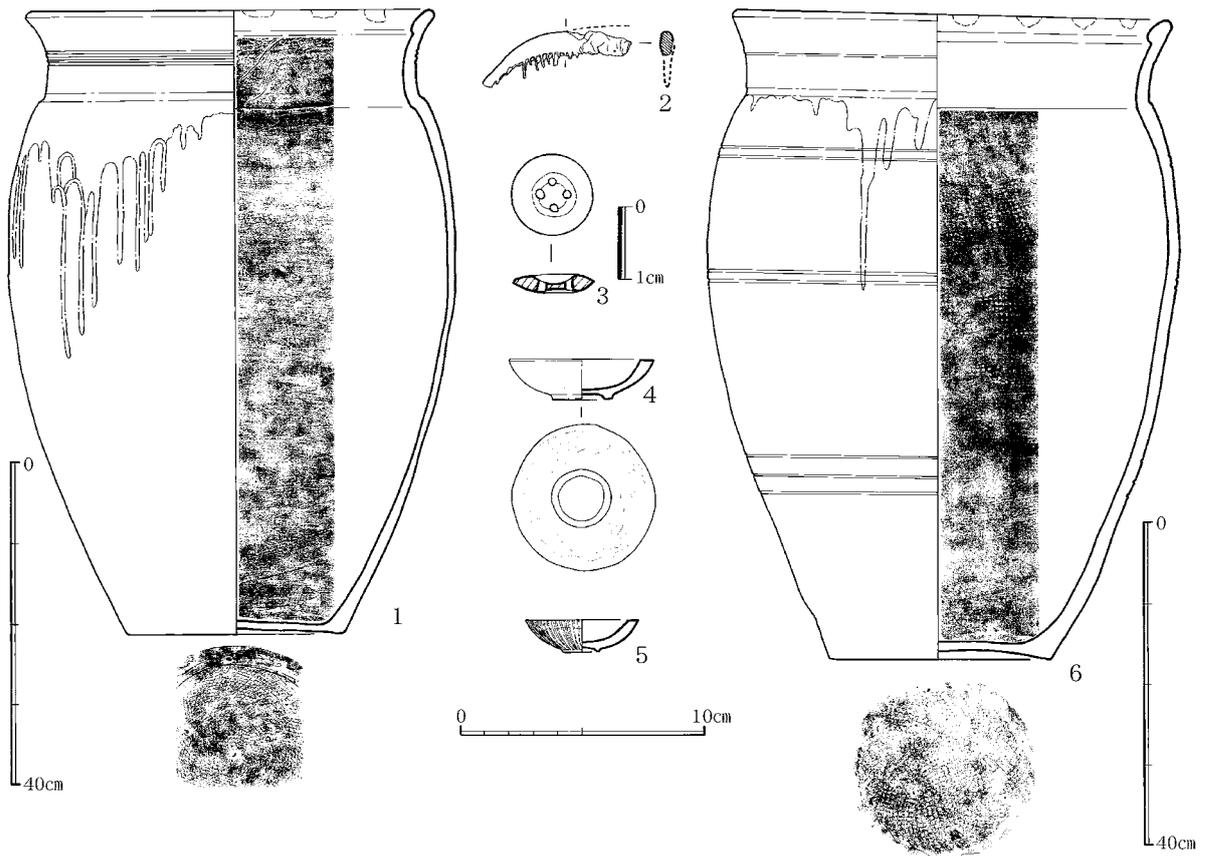
桶棺から皿1枚が出土した。

第82図5は、18世紀末～幕末の肥前系白磁紅皿である。棺内副葬の完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.3cm・口径4.6cmで、高台の径1.5cm・高さ0.1cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。

第18号墓 (図無し)

墓壙内から釘100本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cmのものが最も多いが、長さ5.0cmのものもある。



第82図 第41号墓地第11・12・16・17・19号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸)

第19号墓（第82図6、図版15）

墓壙内から棺甕1点・釘3本程が、棺内から板材1枚・釘付木片5点・布（？）塊・籾殻が出土した。

第82図6は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高79.4cm・口径53.6cm・頸径48.9cm・胴径57.4cm・底径26.8cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施している。暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面19ヶ所に目跡が残っている。

板材は、長さ36.0cm・幅8.5cm・厚さ0.9cmの破片である。棺内出土であるが、性格不明である。釘が付いた木片は、甕蓋の一部分と考える。

釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品が多く、残りの良いもので長さ4.0～4.5cmである。

籾殻は、棺内の詰め物と考える。

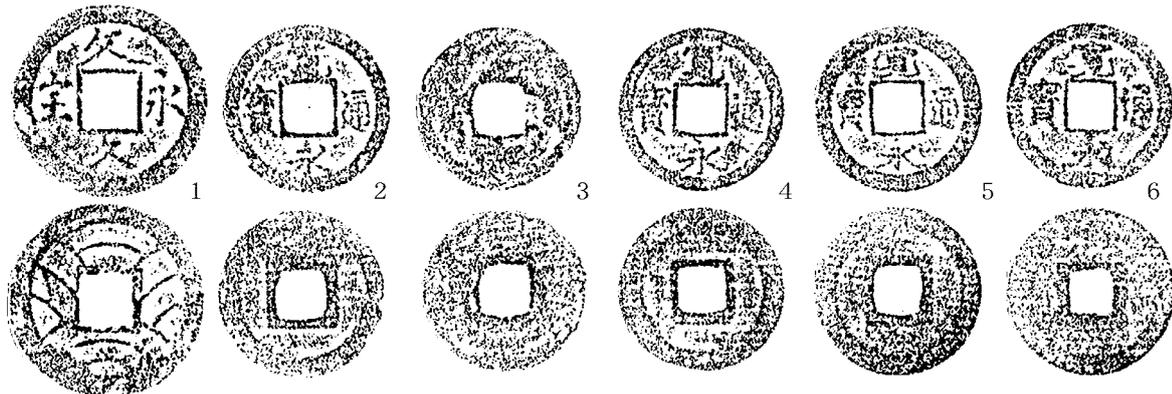
布と思われる塊は、死装束か副葬品か不明である。また、棺内の詰め物の可能性もある。

第20号墓（第83図）

墓壙内から銭6枚・釘50本程が出土した。

第83図1～6は、銭貨である。全て銅銭であり、1は背面に波文を銭出した文久永宝で、2～6は新寛永の寛永通宝である。棺は検出できていないが、人骨の間からの出土であり棺内副葬品と考える。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。



第83図 第41号墓地第20号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第21号墓（図無し）

墓壙内から釘50本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長短2種類があり、長さ4.0cm前後のものも多く、長さ4.5～5.0cmが4本程ある。正方形縦棺に使用されたものとする。

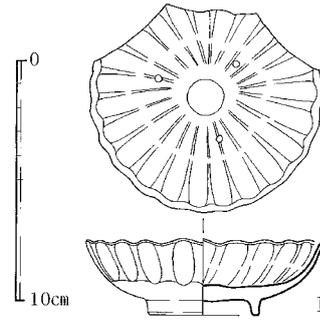
第22号墓（第84図1、図版18）

墓壙内から皿1点・釘65本程が出土した。

第84図1は、1800～60年代の肥前系白磁皿である。型押し成形で、見込み・裏文様は型による

菊花文である。口縁部から胴部にかけての約1/3を欠損する。器高3.2cm・口径9.7cm・高台の径4.6cm・高さ0.65cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込には、3足付ハマの溶着痕が残っている。

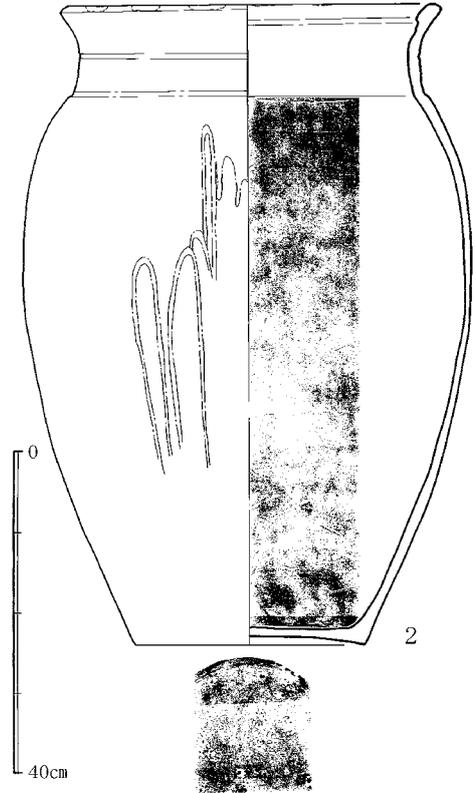
釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0~4.5cmのものが多い。



第23号墓 (第84図2、図版15)

墓壇内から棺嚢1点が出土した。

第84図2は、18~19世紀の肥前産陶器嚢である。器高78.9~79.1cm・口径47.1cm・頸径42.1cm・胴径55.2cm・底径28.4cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線を施している。極暗赤褐色・鈍い橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面20ヶ所に目跡が残っている。



第24号墓 (第85図、図版23)

正方形縦棺から煙管1点が、墓壇内から煙管吸口1点・釘が出土した。

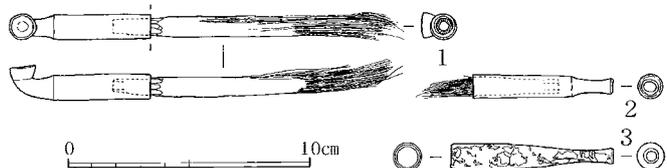
第85図1・2は、一对の羅字煙管である。雁首と吸口は銅製であり、羅字は竹製である。雁首と吸口は全面緑青が吹いている。

1は、雁首と羅字の一部であり、残存長16.2cmを測る。雁首は、長さ5.8cm・小口径1.0cm・胴最大径1.05cmを測る。火皿は、直径1.03~1.07cm・高さ0.5cmを測る。羅字は、最大径0.85cmで、雁首に1.55cm入っている。羅字の雁首挿入部分は削って太さを調整している。

2は、吸口と羅字の一部であり、残存長8.15cmを測る。吸口は、長さ5.8cm・吸口径0.69~0.72cm・小口径1.0cmを測る。羅字は、最大径0.8cmで、吸口に3.5cm入っている。

1・2合わせた復原長は21.0cm程であろう。

第85図3は、煙管の吸口である。銅製と思われ、緑青が吹いている。長さ6.7cm・吸口径0.675cm・小口径1.0cm・胴最大径1.1cmを測る。



墓壇内出土の多量の釘は、所在不明の

第85図 第41号墓地第24号墓出土遺物実測図 (S=1/3)

ため詳細不明であるが、正方形縦棺に使用されたものとする。

第26号墓 (図無し)

墓壙内から銭6枚・釘1本が出土した。

銭は、全て鉄製である。錆着のため図化できなかった。

棺は検出できなかったが、墓壙底中央で人骨と共伴しており、棺内副葬品とする。

釘は、鉄製の角釘であり、残存長3.5cmを測る。

第27号墓 (第86図、図版15・18)

墓壙内から棺甕1点・釘5本程が、棺内から小坏1点・皿1点・銭6枚・布片3片が出土した。

第86図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。焼き歪みがあり、全体に楕円形を呈している。器高57.3cm・口径33.3～39.8cm・頸径30.7～37.6cm・胴径39.5～42.5cm・底径21.4～22.3cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施している。胴部外面の上位には2～3条の螺旋状沈線を、中位には3条の沈線を巡らせている。橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面11ヶ所に目跡が残っている。

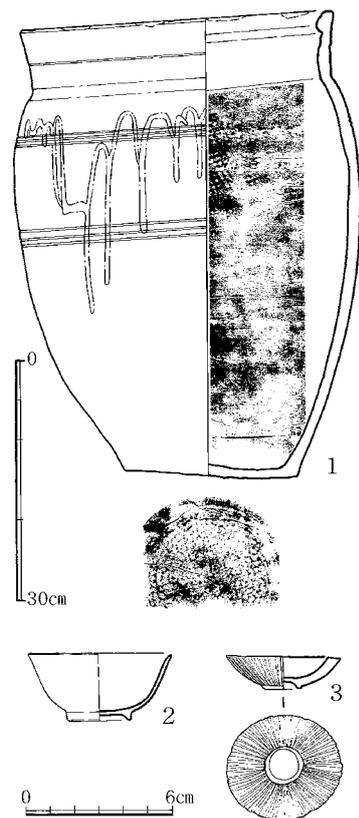
第86図2は、1840～60年代の肥前系白磁小坏である。棺内副葬の完形品である。器高2.85cm・口径5.9cmで、高台の径2.65cm・高さ0.4cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第86図3は、1800～60年代の肥前系白磁紅皿である。棺内副葬の完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.4cm・口径4.75cm・高台の径1.5cm・高さ0.15cmを測る。内全面から口縁部平坦面まで透明釉がかかっているが、外全面無釉である。

棺内出土の布片は、死装束か副葬品か不明である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものである。

銭は、6枚のうち3枚は判続不明の銅銭、3枚は鉄銭である。錆着しており、図化できなかった。

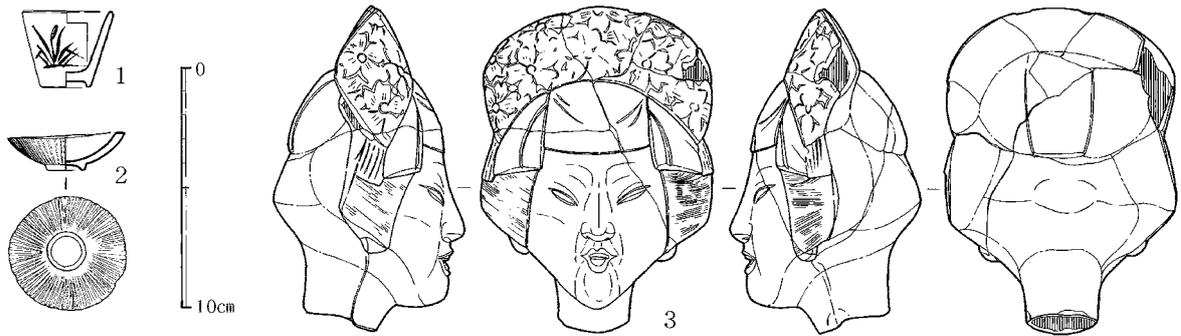


第86図 第41号墓地第27号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)

第28号墓 (第87図、図版18・27)

正方形縦棺から小猪口1点・皿1点・人形1点が、墓壙内から釘12本程が出土した。

第87図1は、1780～1860年代の肥前系染付磁器小猪口である。棺内副葬の完形品である。底部は、上げ底である。器高3.2cm・口径3.75cm・底径2.1cmを測る。裏文様は、草文である。内外面とも透明釉がかかっており、後に畳付を釉剥ぎしている。



第87図 第41号墓地第28号墓出土遺物実測図 (S=1/3)

第87図2は、1800～60年代の肥前系白磁紅皿である。棺内副葬の完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.55cm・口径4.8cmで、高台の径1.55cm・高さ0.25cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。

第87図3は、女性をかたどった陶製の人形頭顔部である。棺内副葬品であるが、胴体以下は不明である。高さ13.5cm・最大左右幅9.5cm・最大前後厚7.4cmを測る。焼成後に彩色されており、沈線に白色が残っている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cmのものである。

第29号墓 (第88図1～4、図版16・32)

墓壙内から棺甕1点・釘10本程が、棺内からガラス製品2点・ローソク1本・布片が出土した。

第88図1は、18世紀の肥前産陶器甕である。素地に空気が入っていたものと思われ、焼成時に内外面に膨張した部分が多くある。器高57.4～58.6cm・口径37.7cm・頸径33.4cm・胴径42.9cm・底径23.1cmを測る。調整は、胴部外面不明であるが、内面を斜格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線と鈍い段を施している。また、胴部外面上位に「全」の刻印を押している。極暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面14ヶ所に目跡が残っている。

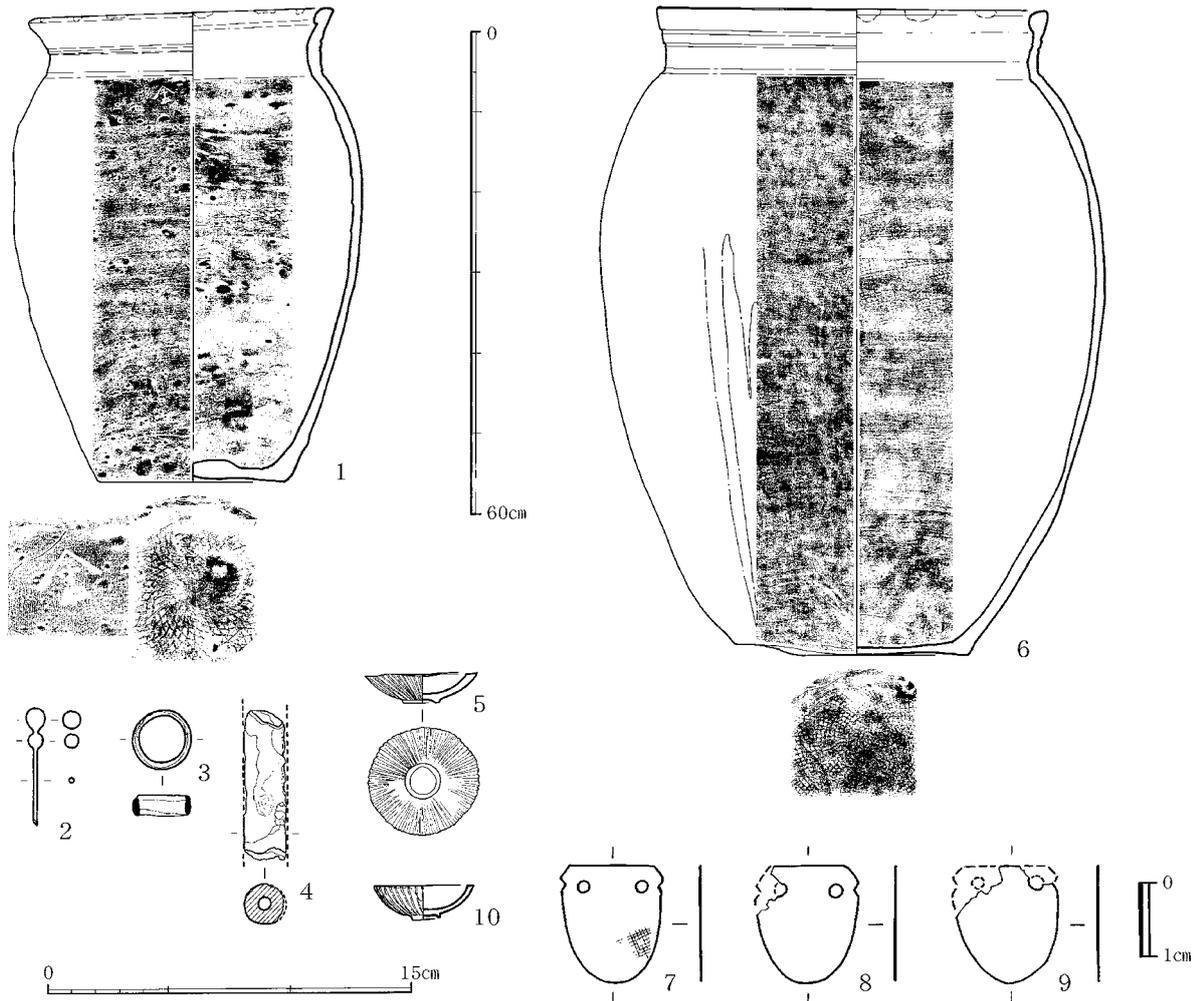
第88図2は、ガラス製の棒状製品である。欠損品である。空洞の先端は2個の球で瓢箪状を呈している。赤色の彩色は、内側から施している。残存長4.9cmで、筒部径0.23cm・小球径0.615cm・大球径0.794cmを測る。

第88図3は、ガラス製のリングである。青色を呈する完形品である。外径2.5cm・内径1.8～1.85cmの円形を呈し、幅0.75～0.9cmを測る。

第88図4は、ローソクである。両端を欠損し、残存長6.2cmを測る。灯芯は残っておらず中は空洞で、外径1.75cm・厚さ0.6cm程である。

布片は、詳細不明である。

釘は、全て鉄釘であるが、角釘と丸釘が共伴している。角釘の長さは4.5cm前後であるが、丸釘は全て折れており最長のもので2.7cmを測る。甕蓋に使用されたものと考えるが、角釘と丸釘が同時に使用されたものかどうかは不明である。



第88図 第41号墓地第29～32号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3・原寸)

第30号墓 (第88図5、図版18)

墓壙内から皿1点・ローソク1本・釘1本が出土した。

第88図5は、1800～60年代の肥前系白磁紅血である。完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.3cm・口径4.7cmで、高台の径1.5cm・高さ0.15cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。焼成不良のため、釉薬がきれいに溶けていない。

ローソクは、図化していない。両端を欠損し、残存長5.4cmを測る。灯芯は残っていない。両端で太さが異なり、太い方の径は1.4cmで、細い方は、1.0～1.2cmである。

釘は、鉄製の角釘である。残存長3.0cmの欠損品である。

第31号墓 (第88図6～9、図版16・27)

墓壙内から棺甕1点が、棺内から足袋はぜ3枚が出土した。

第88図6は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高79.8cm・口径48.3cm・頸径45.9cm・胴径62.2cm・底径28.4cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に2条の沈線 (もしくは鈍い段2段) を施している。鈍い褐色を呈

する土灰釉は、頸部と胴部の境で釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面に目跡らしきものが見られるが、不明確である。

第88図7～9は、真鍮製の足袋はぜである。7は、完形品であるが、8・9は一部を欠損している。上位の左右に径0.15cm程の孔を穿ち、その位の側辺に切れ込みを入れている。3点とも同一規格であり、長さ1.6cm・幅1.3cmを測る。

第32号墓（第88図10、図版18）

土葬墓とは考えにくいだが、皿1点が出土した。

第88図10は、18世紀の肥前産白磁紅皿である。完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.5cm・口径4.15cmで、高台の径1.2cm・高さ0.2cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。

第33号墓（図無し）

墓壙内から釘25本程が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0～4.5cmのものと長さ3.3～3.5cmのもの、大小2種がある。正方形縦棺に使用されたものとする。

第34号墓（図無し）

墓壙内から釘60本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。

第35号墓（図無し）

墓壙内から釘65本程が出土した。

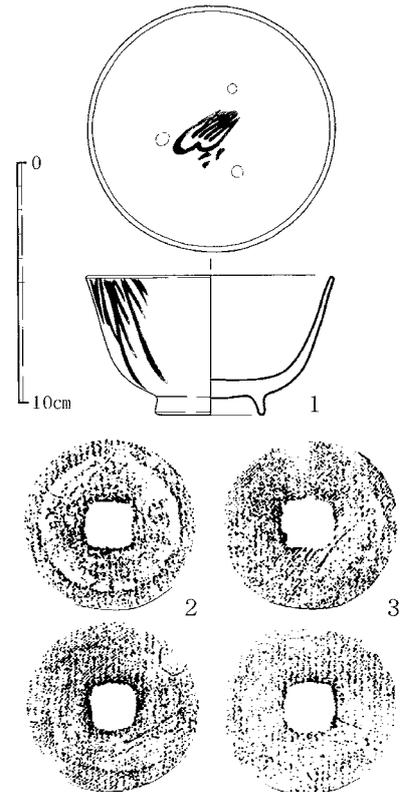
釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが最も多いが、長さ5.0cm前後のものもある。正方形縦棺に使用されたものとする。

第36号墓（第89図、図版17）

正方形縦棺から碗1点・銭5枚が、墓壙内から釘45本程が出土した。

第89図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。棺内副葬の完形品である。器高5.8cm・口径10.2cmで、高台の径4.5cm・高さ0.8cmを測る。口縁部は、端反形を呈している。見込み文様は岩波文で、裏文様は柳文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。見込みに3足付ハマの溶着痕がある。

第89図2・3は、銭貨である。いずれも寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。なお、欠損・錆着のため図化できなかつ



第89図 第41号墓地第36号墓出土遺物実測図（S=1/3）・銭貨拓影図（原寸）

たが、別に新寛永の銅銭1枚と鉄銭1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多い。

第37号墓 (第90図)

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘20本程が出土した。

第90図 1

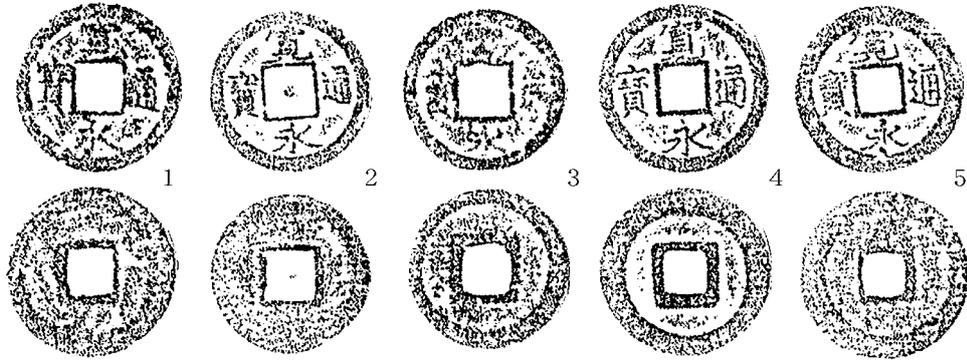
～5は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、新寛永である。

5の背面には「足」字が铸出されている。

なお、図化し

ていないが、別に鉄銭1枚も共伴している。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多いが、長さ2.5cm前後の短いものもある。



第90図 第41号墓地第37号墓出土銭貨拓影図 (原寸)

第38号墓 (図無し)

墓壙内から釘40本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。正方形縦棺に使用されたものと考えられる。

第39号墓 (図無し)

墓壙内から釘40本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5cm前後のものが多い。正方形縦棺に使用されたものと考えられる。

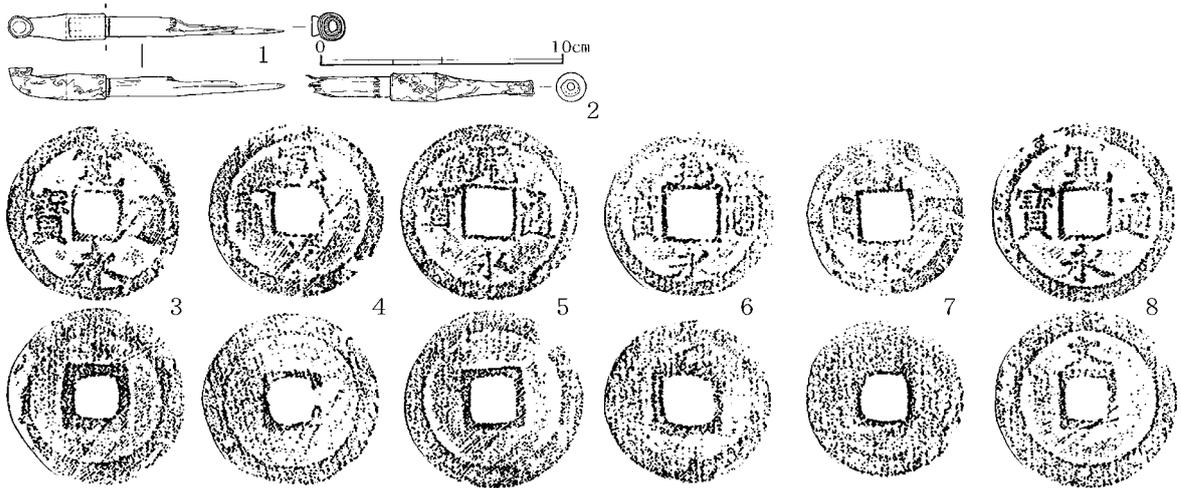
第40号墓 (第91図、図版23・28・34)

正方形縦棺から煙管1点・金具2点・銭6枚・文字付板片1点が、墓壙内から釘10本程が出土した。

第91図 1・2は、一対の羅字煙管である。雁首と吸口は銅製と思われ、緑青を吹いている。羅字は竹製である。

1は、雁首と羅字の一部であり、残存長11.35cmを測る。雁首は、長さ4.0cm・小口径1.0～1.1cm・胴最大径1.1cmを測る。火皿はやや歪んでおり、口唇部2ヶ所をわずかに欠損する。火皿の径0.88～0.985cm・高さ0.35cmを測る。羅字は、最大径0.85cmで、雁首に1.6cm入っている。

2は、吸口と羅字の一部であり、残存長9.4cmを測る。吸口は、長さ5.05cm・吸口径0.4cm・小



第91図 第41号墓地第40号墓出土遺物実測図 (S=1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

口径1.1cm・胴最大径1.2cmを測る。羅字は、最大径0.75cmで、吸口に2.6cm入っている。

金具は、銅製の小片である。図化していないが、喫煙具に使用された留め金具と考える。

第91図3～8は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、3は古寛永、4～7は新寛永、8は文銭である。7の背面には「元」字が、8の背面には「文」字が鑄出されている。

文字の付いた板片は、木製か竹製か判断できない。厚さ0.35mmと薄く、幅1.25～1.30cmの板状を呈し、残存長5.0cmを測る。片面に黒色の反転文字が写っている (図版34)。文字はカタカナと漢字で、「□□□明治十□□」(改行)「□□□□ラレ□□□□□□」と読める。おそらく新聞などが貼りついて黒インクの文字が反転写したものと考えられる。

釘は、全て鉄製の丸釘である。欠損品ばかりであるが、最も長いもので4.0cmある。正方形縦棺に使用された釘としたら、数量的に少ない感がある。

第41号墓 (図無し)

墓壙内から釘30本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものである。正方形縦棺に使用されたものと考えられる。

第42号墓 (図無し)

墓壙内から釘50本程が出土した。

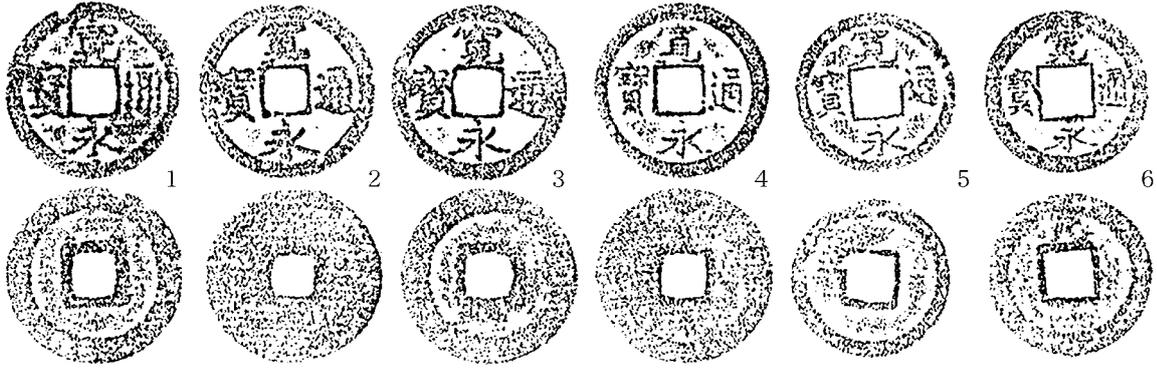
釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5～4.8cmのものと、長さ3.0～3.5cmのもの2種類がある。

第43号墓

遺物は出土しなかった。

第44号墓 (第92図)

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘65本程が出土した。



第92図 第41号墓地第44号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第92図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1～3は古寛永、4～6は新寛永である。6の背面には「元」字が鑄出されている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多い。

第45号墓（第93図、図版17・18）

墓壙内から碗1点・皿1点・漆膜片・釘10本程が出土した。

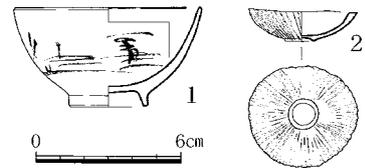
第93図1は、1780～1840年代の肥前系染付磁器碗である。口縁部から胴部上位にかけての約1/3が欠損している。器高4.1cm・口径7.75cmで、高台の径3.2cm・高さ0.45cmを測る。裏文様は、山水文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第93図2は、1780～1860年代の肥前系白磁紅皿である。完形品である。型押し成形で、裏文様は型による貝の放射脈を表している。器高1.4cm・口径4.5cmで、高台の径1.25cm・高さ0.1cmを測る。内全面から口縁部外面にかけて透明釉がかかっているが、底部外面は無釉である。焼成不良のため、釉薬はきれいに溶けていない。

漆膜片は、表面朱色を呈している。

碗・紅皿及び漆器は、棺内副葬品と考える。

釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品が多いが、長さ3.0cm前後のものである。形態不明であるが、棺に使用された釘と考える。



第93図 第41号墓地第45号墓出土遺物実測図（S=1/3）

第46号墓

遺物は出土しなかった。

第47号墓（第94図1、図版16）

墓壙内から棺襖1点が、棺内から布片・紐状植物繊維4本・木葉が出土した。

第94図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高62.9cm・口径42.0cm・頸径37.6cm・胴径51.4cm・底径26.4cmを測る。調整は、胴部外面を平行線文叩きの後ナデ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線を施している。灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面13ヶ所に目跡が残っている。

布片は、紐状の植物にからまっており、詳細不明である。

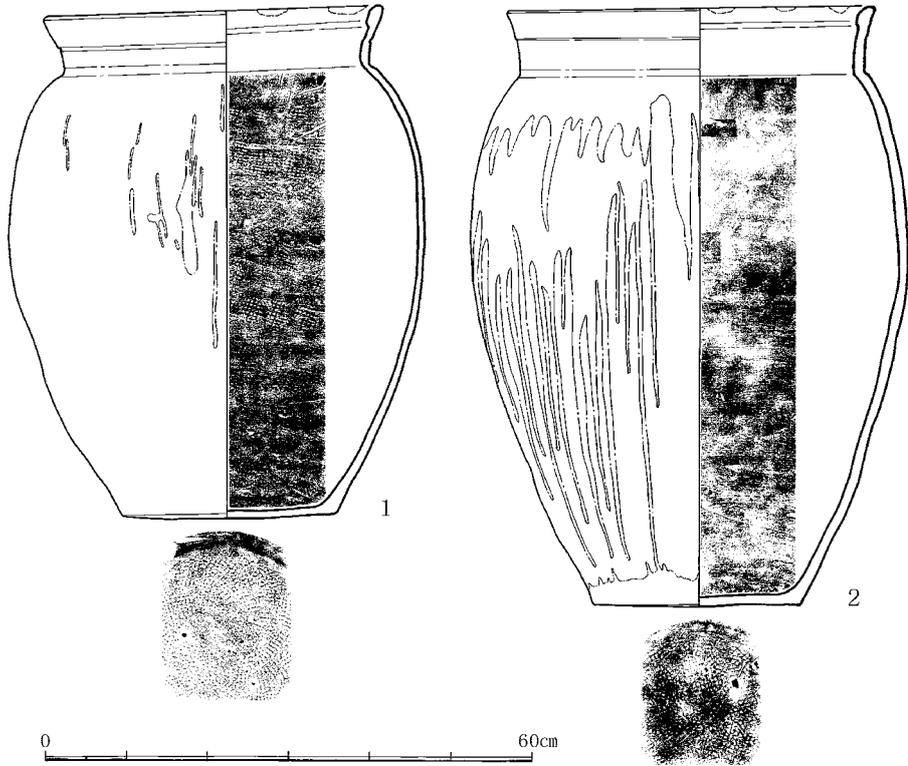
紐状の植物繊維は、それぞれ1ヶ所に結び目がある。先の布片に伴うものか、棺の詰め物かは定かではない。

木葉の種類は不明であるが、棺の詰め物と考える。鈹屑も少し混ざっている。

第48号墓 (第94図2、図版16)

墓壙内から棺襖1点が出土したが、棺内からは遺物は出土しなかった。

第94図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高73.9cm・口径45.4cm・頸径42.4cm・胴径53.9cm・底径25.4cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施している。浅黄橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面16ヶ所に目跡が残っている。

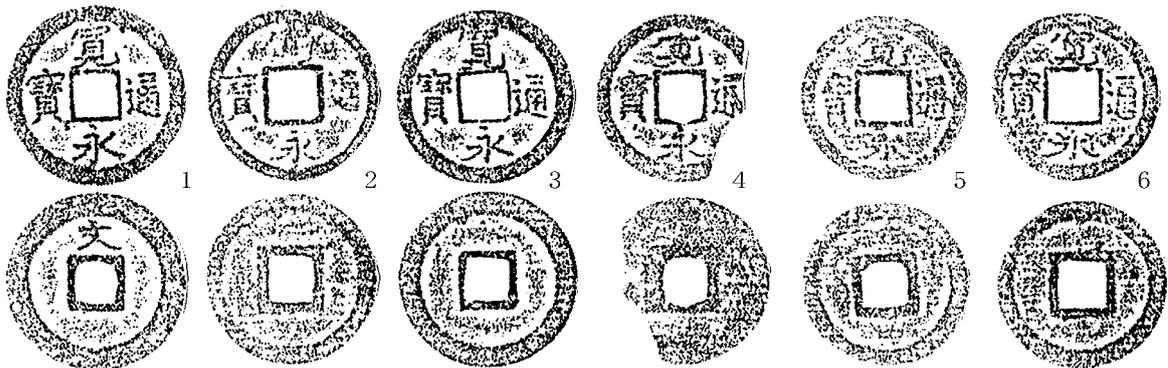


第94図 第41号墓地第47・48号墓出土遺物実測図 (S=1/9)

第49号墓 (第95図)

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘65本程が出土した。

第95図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1は文銭、2～6は新寛永である。



第95図 第41号墓地第49号墓出土銭貨拓影図 (原寸)

1の背面には「文」字が鋳出されている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.5cm前後のものが多い。

第50号墓

遺物は出土しなかった。

第51号墓 (第96図、図版16)

墓壙内から棺甕1点が、棺内から錢塊(6枚?)が出土した。

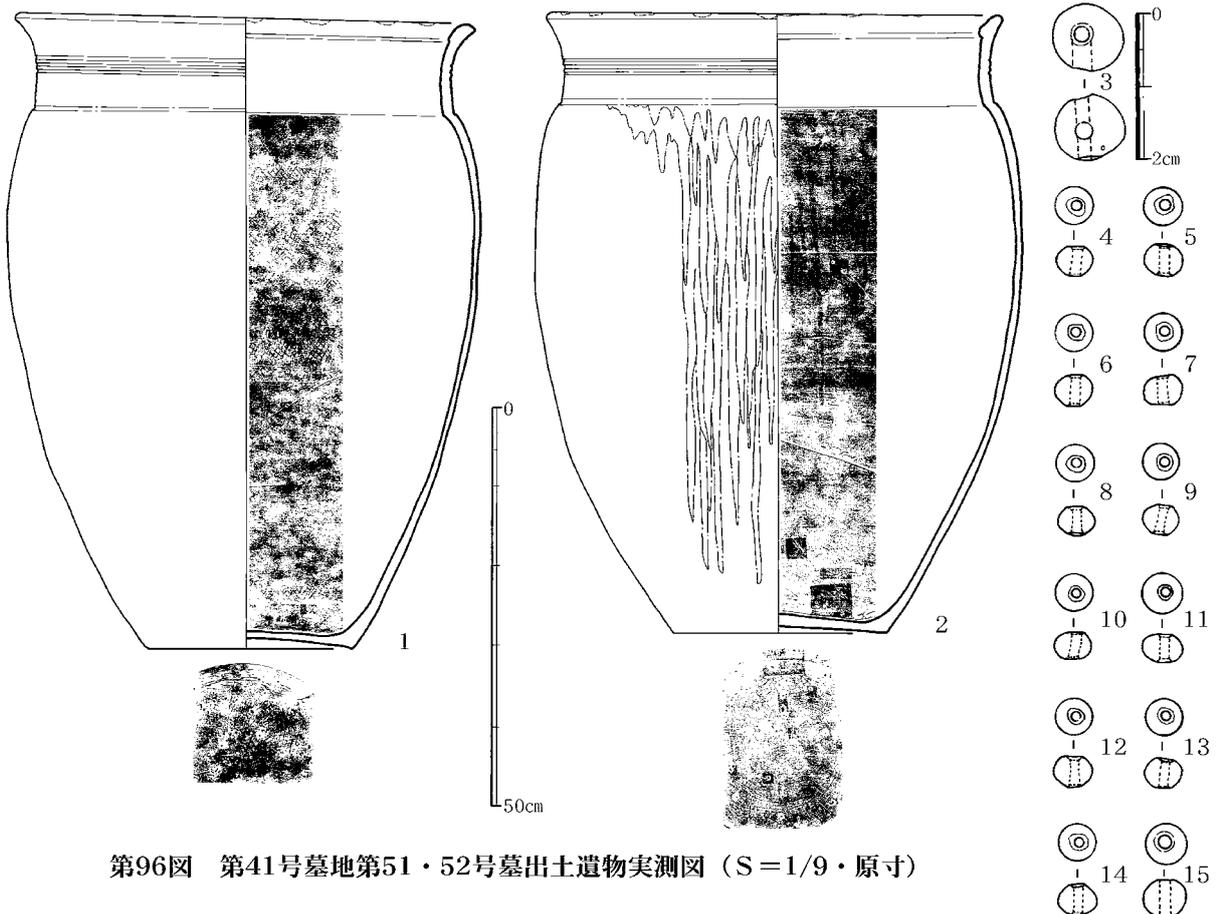
第96図1は、18~19世紀の肥前産陶器甕である。器高77.2~78.5cm・口径56.9cm・頸径51.1cm・胴径58.5cm・底径25.2cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。極暗赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面19ヶ所に目跡が残っている。

錢は、全て銅錢である。銹着して判読不可能であり、図化できなかった。

第52号墓 (第96図2~15、図版16・21)

墓壙内から棺甕1点が、棺内から玉13点出土した。

第96図2は、18~19世紀の肥前産陶器甕である。器高76.1~76.5cm・口径56.4cm・頸径52.5cm・胴径60.1cm・底径26.4cmを測る。調整は、胴部内外面を叩きの後ナデ仕上げ、底部内面を格



第96図 第41号墓地第51・52号墓出土遺物実測図 (S=1/9・原寸)

子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。淡黄色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面21ヶ所に目跡が残っている。

第96図3～15は、数珠玉である。

3は、磁器製の玉で、T字状に孔が開く母珠である。外全面に透明釉がかかっており、乳白色を呈している。寸法は、径0.945cm・厚さ0.88cmを測る。

4～15は、ガラス製の玉である。

4～14は、黒色を呈し、寸法は径0.505～0.550cm・厚さ0.375～0.425cmである。成珠と考える。

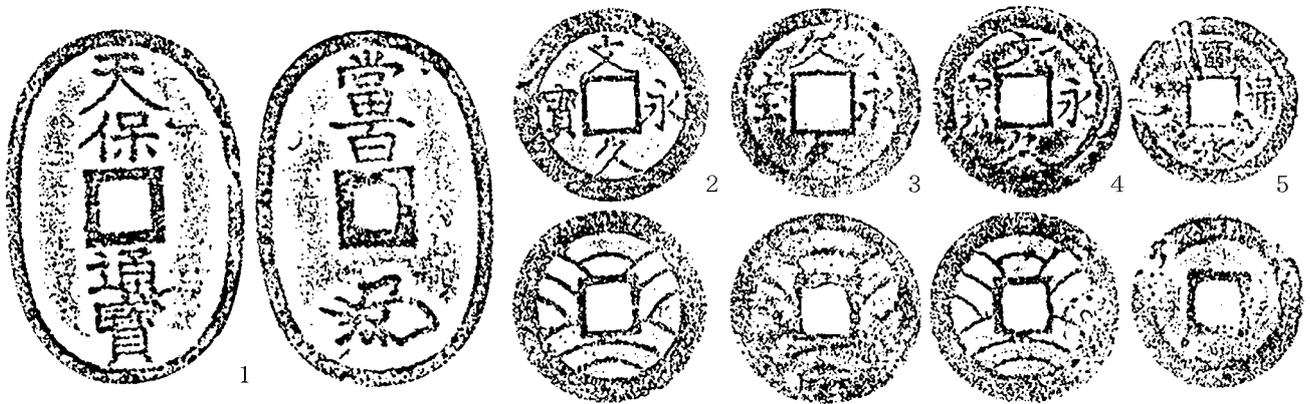
15は、白色を呈する。4～14よりやや大きく、径0.585cm・厚さ0.49cmを測る。

第53号墓（第97図）

正方形縦棺から銭5枚が、墓壙内から釘70本程が出土した。

第97図1～5は、銭貨である。全て銅銭であり、1は天保通宝、2～4は文久永宝、5は寛永通宝の新寛永である。1の背面には「當百」と、2～4の背面には波文が鑄出されている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ3.5～4.0cmのものが多いが長さ2.0～2.5cmのものもある。



第97図 第41号墓地第53号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第54号墓（図無し）

正方形縦棺から銭塊（6枚）が、墓壙から釘20本程が出土した。

銭は、全て鉄銭であり、錆着のため図化できなかった。孔に紐が通っている。

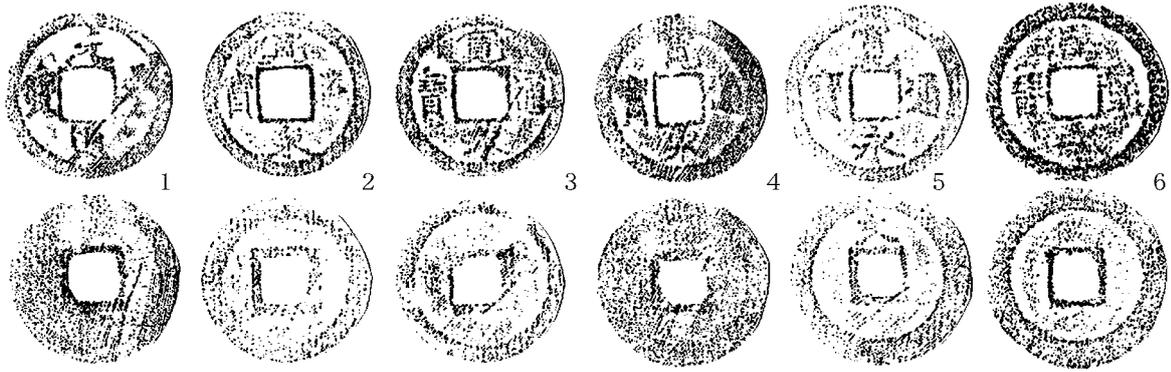
釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品が多いが、長さ3.5～4.0cmのものと、長さ2.0～3.0cmのものがある。

第55号墓（第98図）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘35本程が出土した。

第98図1～6は、銭貨である。全て銅銭であるが、1は元豊通宝、2～6は寛永通宝である。寛永通宝のうち2～4は新寛永、5・6は文銭である。5・6の背面には「文」字が鑄出されている。

釘は、全て鉄製である。1本だけ長さ約10.6cmの丸釘があり、他は全て角釘である。角釘は、長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.0～2.5cmのものもある。



第98図 第41号墓地第55号墓出土銭貨拓影図（原寸）

第56号墓（第99図1、図版16）

墓壇内から棺甕1点が出土した。

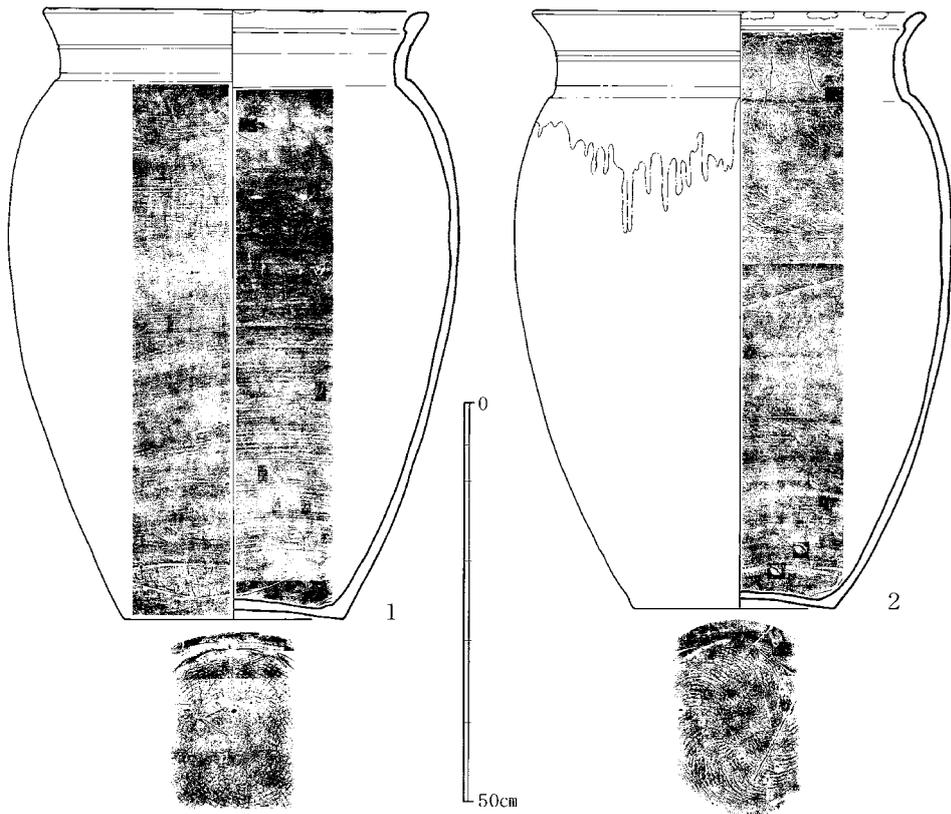
第99図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高74.9～75.4cm・口径47.6cm・頸径42.6cm・胴径55.5cm・底径26.8cmを測る。調整は、胴部内外面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線を施している。鈍い橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面15ヶ所に目跡が残っている。

第57号墓（第99図2、図版16）

墓壇内から棺甕1点が出土した。

第99図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高73.7～73.8cm・口径48.6cm・頸径42.9

cm・胴径53.9cm・底径24.6cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を同心円文叩きの後ナデ、底部内面を同心円文叩きしている。頸部外面中位に2条の凹線を施している。赤灰色～赤褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面17ヶ所程に目跡が残っている。



第99図 第41号墓地第56・57号墓出土遺物実測図（S=1/9）

第58号墓 (第100図、図版16・23)

墓壙内から棺襖1点が、棺内から櫛1点・布片2点・編物1点・木片3点・粉穀が出土した。

第100図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高75.2～75.7cm・口径52.4cm・頸径48.5cm・胴径58.1cm・底径25.7cmを測る。調整は、胴部内外面を叩きの後ナデ仕上げ、底部内面を(斜)格子目文叩きしている。頸部外面中位に3条の沈線を施している。肥厚した口縁部上面19ヶ所に目跡が残っている。

第100図2は、木製の横櫛である。片方の側端部を欠損するが、状態は良い。残存長13.8cmで、幅は側端で1.9cm・中央で3.7cmを測る。背幅(厚さ)は、側端で0.55cm・中央で1.0cmを測る。歯は、64本残っており、長さは側端で1.35cm・中央で2.65cmを測る。

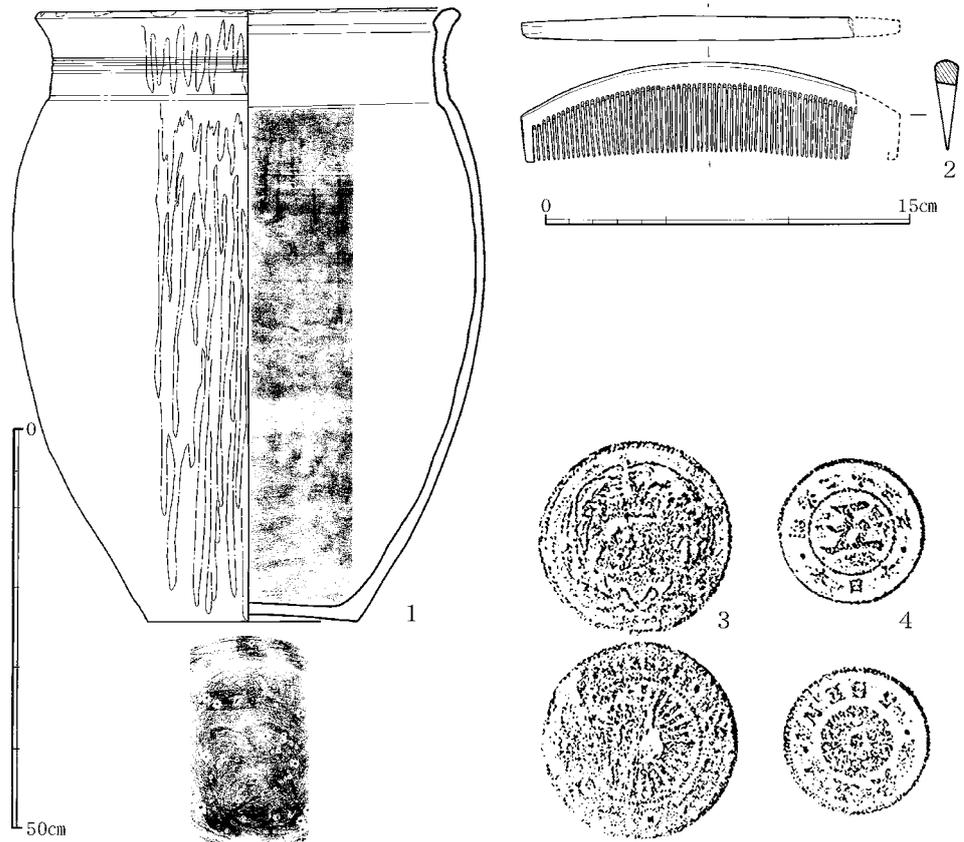
第100図3・4は、銭貨である。いずれも近代銭であり、3は大正期(年不明)鑄造の一銭青銅貨、4は明治23年鑄造の五銭白銅貨である。2枚だけの副葬品であるが、1銭+5銭=6銭と六道銭の6という数字にこだわっている。

布片は、黒色を呈するものと薄い灰色を呈するものの2種があるが、詳細は不明である。

編み物は、レース様のものがあるが、詳細は不明である。副葬品と考える。

木片は、板状の小片である。襖蓋に使用されたものと考えられる。

粉穀は、他に植物繊維と混じっており、棺の詰め物と考える。



第100図 第41号墓地第58号墓出土遺物実測図 (S=1/9・1/3)・銭貨拓影図 (原寸)

第59号墓 (第101～105図、第12表、図版19・21・24・27・30)

正方形縦棺から玉1点・瓶1点・鈴4点・玩具部品9点・おはじき44点・布片・銭6枚・木片7点が、墓壙内から鐺7点・玩具部品4点・金具1点・釘45本程が出土した。

第101図1は、ガラス製の数珠玉である。T字状に孔が開く母珠であり、無色透明である。寸法は、径0.895cm・厚さ0.85cmを測る。

第101図2は、無色透明のガラス製瓶である。扁平な胴部から一担くびれて楕円形の底部が付くものである。型による成形であり、両側辺に継ぎ目が残っている。口縁部には螺旋状の突帯が2条巡っている。器高10.0cm・口径2.1cmで、胴部の幅5.75cm・厚さ1.9cm・底部の長径4.55cm・短径1.65cmを測る。凶化しなかったが、蓋と考えられる金属片も出土している。

第101図3は、玩具の鐺である。鋳物であり、周縁に継ぎ目が残っている。薄い黒色を呈し、約1/2を欠損している。両面に松葉文が鋳出されており、片面には「既願」字が鋳出されている。寸法は、長径4.8cm・復原短径4.8cm・厚さ0.5cmで、中央の孔の長径1.45cmを測る。

第101図4～7は、銅製の鈴である。7は、下半を大きく欠損しているが、4～6の本体は完形品である。鐺を持つ半球形を合わせたものである。同一規格であり、球形の高さ1.15～1.2cm・鐺の径1.5～1.55cmを測る。球形頂部にはリングが付き、下位には鐺口状の孔が開けられている。4のリングには針金が結ばれており、4～7は別のものに付属する鈴と考えられる。

第101図8・9は、木材と金具を組み合わせた部品である。8は棺内副葬品であるが、9は棺内と棺外出土のものである。鉄製の丸釘状のものを木材に打ち込み、木材の反対側でその丸釘状のものを銅製の円筒に挿入したものである。丸釘状のものの径より円筒の径が大きいため、回転することが可能な可動式の部品と考える。

8は、残存長4.05cmで、丸釘状のものの残存長3.9cm・径0.35cm、円筒の長さ1.6cm・径0.6cmを測る。

9は、残存長5.2cmで、丸釘状のものの頸部径0.8cm・釘径0.35cm、円筒の長さ1.85cm・径0.6cmを測る。

第101図10・11は、同図12のように復原できる同一個体の玩具の部品である。棺内副葬品である。いずれも金属製であり、10は鉄製、11は銅製あるいはブリキ製と思われる。

10は、円錐の両端を切断した形状を呈しており、内側には針金を十字形に張っている。広端部は欠損するが11と接合し、狭端部は端から1.6cmの位置で段を成しており他の部品に挿入するものとする。寸法は、長さ13.6cm・復原広端部径2.3cm・狭端部径0.7cmを測る。筒の厚さは、0.1cmである。

11は、ラッパ状に大きく開く円形のものである。周縁は径0.7cm前後の半円形に切断して裏側に折り重ねており、現状で18箇の弧文が連なっている。中央孔の周辺には、10との接合痕が残っている。寸法は、外径5.0cm・高さ0.95cmで、中央孔の径1.4cmを測る。

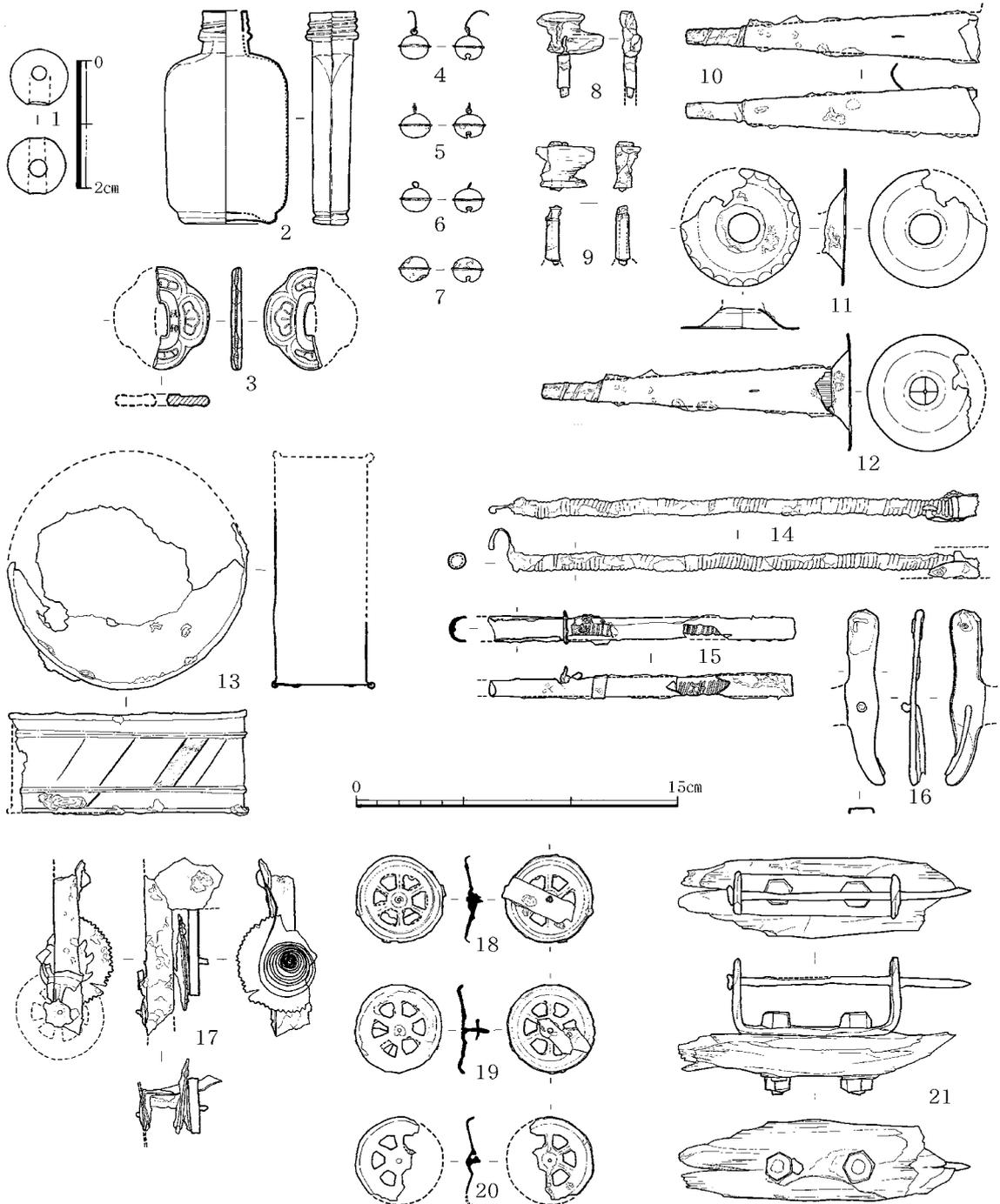
第101図13は、鉄製あるいはブリキ製の太鼓形玩具である。棺外出土である。円形面の周辺を丸く折り曲げ、筒部の長辺を両面縁で挟んで組み立てたものである。劣化著しく、復原径11.1cm・厚さ4.7～4.8cmを測る。筒部外面には上下2段の突帯が巡っており、その間2.3cmの区画内に1.0cm間隔に斜線が引かれている。斜線内には彩色されていたと思われるが、色調は不明である。器壁は、著しく薄く、0.1cm以下である。

第101図14・15は、鉄製のバネ仕掛けの玩具である。筒の中にバネを入れたものであり、バネの反発力で物（玉？）を飛ばす銃の様な玩具と考える。

14は、棺外出土である。バネの一方がフック状に曲がっており、片方は玉を受ける皿状のものが付いている。バネの中に棒状のものがある。残存長22.65cmで、バネの長さ21.25cm・径0.7cm、受皿の径1.0cm・厚さ0.25cmを測る。

15は、棺内副葬品である。筒の右側は端部を成しており、銃口と考える。筒の中央より左側に幅0.6cmの薄い鉄板が巻かれており、そこから右側が銃身であろう。それより左側の筒は半蔵されており下半分しかない。バネの左端部には鉄板が装着されており、半蔵された筒の上半に出ている。恐らくこの鉄板を持って半蔵された部分でバネを引きしぼったものとする。筒の残存長14.25cm・銃口径1.0cm・半蔵部径1.2cmを測る。バネの長さは不明であり、径0.7cmを測る。鉄板の幅は1.6cmで、T字形を呈すると考える。

第101図16は、金属製のレバーである。片側の曲線からして、銃の引き金と考えるが、断定できない。片面だけであり、本来は同形のを合わせて使用するものとする。上端には、固定す



第101図 第41号墓地第59号墓出土遺物実測図① (原寸・S=1/3)

るための孔と金鉾らしきものがある。中央には針金が通っており、恐らくバネに連動するものとする。

第101図17は、ゼンマイ仕掛けの玩具の部品である。ゼンマイは、銅製の幅0.5cmのものであり、11～12巻きである。ゼンマイの片側には、8歯と32歯以上の鉄製歯車が連なっている。ゼンマイと歯車を固定している鉄製の枠（フレーム）の1ヶ所に、18～20と同じ形状のものの一部が付いている。本品は、車輪を動かすためのゼンマイ仕掛け玩具であろう。

第101図18～20は、同図17に付属する鉄製の車輪である。20は1/2弱を欠損するが、いずれも車輪とホイールを区画する沈線を巡し、6本の放射状スポークを有する、同一規格品である。車輪径4.0～4.2cmで、スポーク幅0.3cmを測る。車輪の型は片面のみであり、裏面には無い。18・19の裏には鉄板が付いており、特に18の鉄板は17のフレームと同一規格のものである。

第101図21は、木材に固定された鉄製金具である。金具は、凹形を呈し、長さ7.7cm・高さ3.6cm・幅1.9cm・厚さ0.3cmを測る。厚さ2.0cmの木材に2本の六角形ボルト・ナットで固定し、両端近くに開けられた孔には長さ11.4cmの丸釘が通してある。棺外出土であり、その性格は不明である。

棺外から出土した9の一部・13・14・16の玩具は、本来棺内副葬品と考える。

第102～104図は、土製のおはじきである。寸法は、第11表の通りである。

第102図1～6は、人物であり、1～5は武人、6は日清戦争の日本兵である。

7・8は達磨であり、1は姫達磨である。

9～11は七福神であり、9は恵比須、10は大黒天、11は布袋である。

第102図12～16と第103図1～4は動物であり、第102図12は鳥、同図13～16は蝶、第103図1・2は亀（?）、同図3は鯛、同図4は金魚である。

第103図5・6は、野菜の南瓜である。

第103図7～16は花であり、7～10は菊花、11～13はしだれ藤、14は桜、15は梅、16は花卉である。

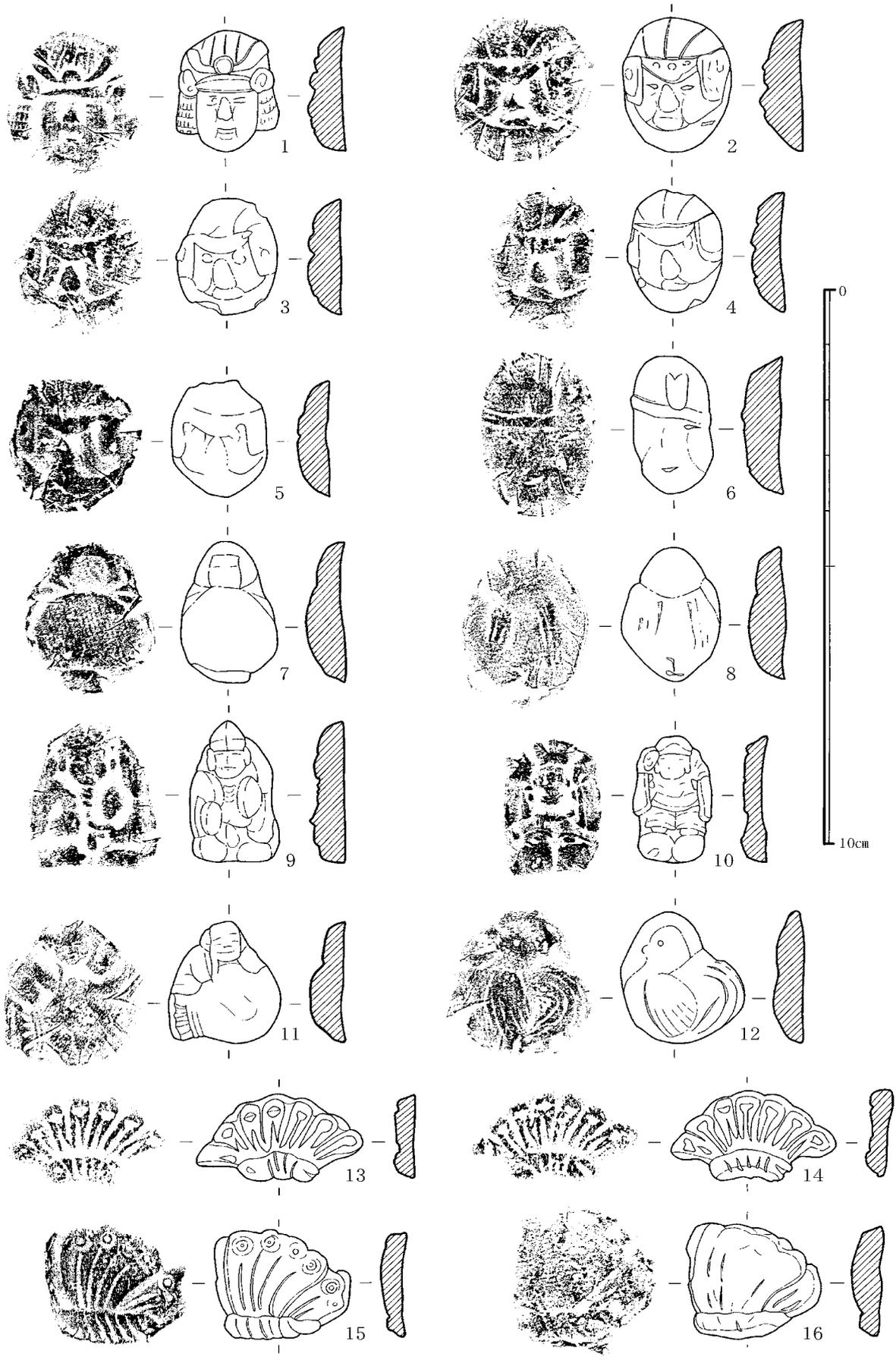
第104図1・2は、果実であり、1は桃と思われ、2は桃の入った果実籠である。

第104図3～5は、植木鉢と思われるが、詳細は不明である。

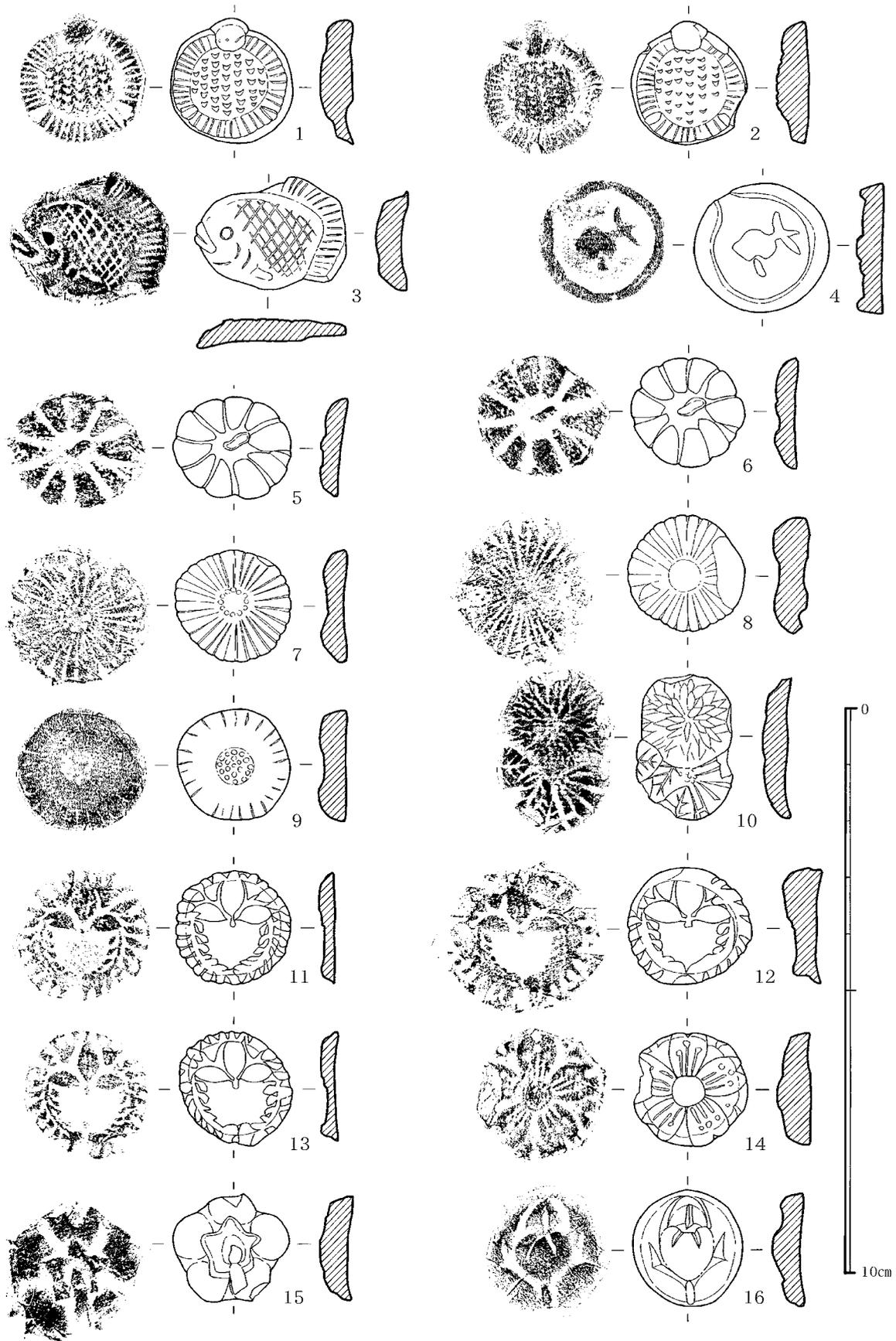
第104図6～12は、生活用具であり、6は七輪、7・8は提灯、9・10は時計、11は蓑、12は下駄である。

第11表 第41号墓地 第59号墓出土土製おはじき一覧表（単位cm）

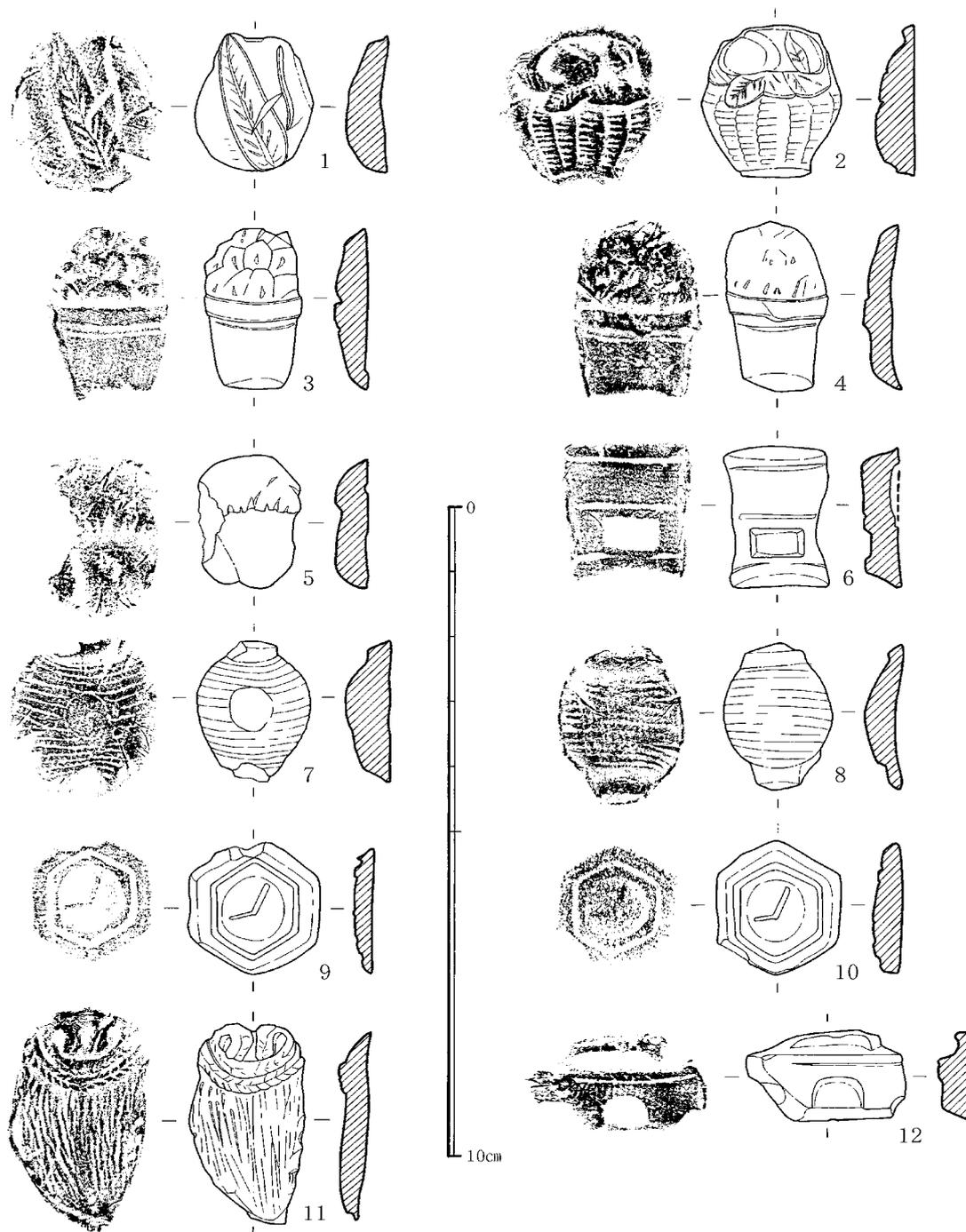
材質	遺物	種類	縦	横	厚み	材質	遺物	種類	縦	横	厚み	材質	遺物	種類	縦	横	厚み	
"	102	1	武人	2.15	1.85	0.60	"	16	蝶	2.05	2.35	0.55	"	15	梅	1.85	2.05	0.50
"	"	2	武人	2.40	1.90	0.75	103	1	亀?	2.20	2.10	0.55	"	16	花卉?	2.05	1.90	0.50
"	"	3	武人	2.10	1.80	0.60	"	2	亀?	2.15	2.00	0.55	104	1	桃?	2.10	1.75	0.55
"	"	4	武人	2.15	1.70	0.50	"	3	鯛	2.00	2.65	0.40	"	2	果物籠	2.30	2.10	0.55
"	"	5	武人	5.05	1.65	0.55	"	4	金魚	2.30	2.35	0.40	"	3	植木鉢	2.45	1.50	0.50
"	"	6	日本兵	2.50	1.40	0.65	"	5	南瓜	1.80	2.05	0.35	"	4	植木鉢	2.60	1.55	0.45
"	"	7	姫達磨	2.55	1.75	0.65	"	6	南瓜	1.95	1.95	0.35	"	5	植木鉢?	2.05	1.55	0.50
"	"	8	達磨	2.40	1.75	0.65	"	7	菊花	1.95	2.00	0.45	"	6	七輪	2.15	1.60	0.60
"	"	9	恵比寿	2.55	1.55	0.65	"	8	菊花	2.05	2.05	0.60	"	7	提灯	2.15	1.70	0.65
"	"	10	大黒天	2.25	1.40	0.45	"	9	菊花	1.95	1.95	0.45	"	8	提灯	2.25	1.65	0.45
"	"	11	布袋	2.20	2.00	0.60	"	10	菊花	2.55	1.65	0.45	"	9	時計	2.00	2.00	0.25
"	"	12	鳥	2.35	2.15	0.50	"	11	枝垂れ藤	2.00	2.00	0.30	"	10	時計	2.05	1.85	0.40
"	"	13	蝶	1.55	2.95	0.35	"	12	枝垂れ藤	2.05	2.15	0.60	"	11	蓑	3.05	1.75	0.40
"	"	14	蝶	1.65	2.95	0.40	"	13	枝垂れ藤	2.00	1.95	0.25	"	12	下駄	1.40	2.40	0.50
"	"	15	蝶	1.95	2.35	0.40	"	14	桜	2.00	1.90	0.55						



第102図 第41号墓地第59号墓出土遺物実測図② (原寸)



第103図 第41号墓地第59号墓出土遺物実測図③ (原寸)



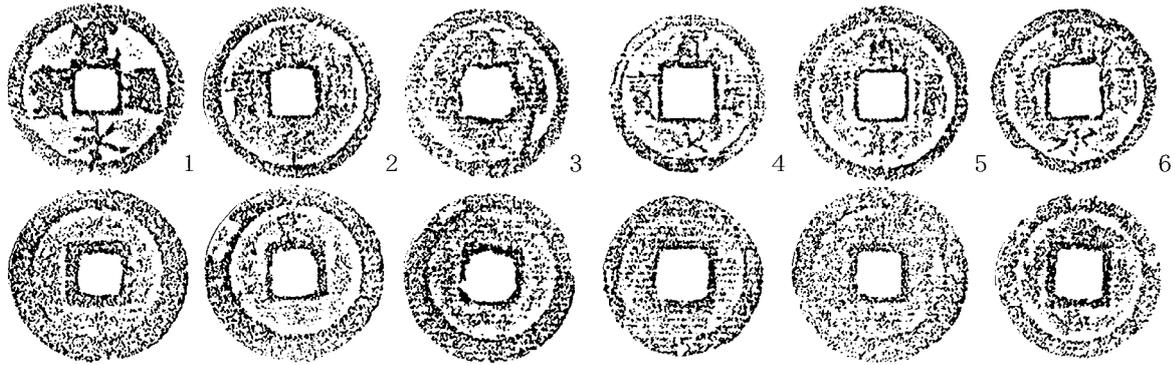
第104図 第41号墓地第59号墓出土遺物実測図④ (原寸)

第105図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1は古寛永、2は文銭、3～6は新寛永である。2の背面には、「文」字が鑄出されている。

布片は、帯紐の類と思われるが、詳細は不明である。

木片は、全て小片である。内4点に鉄製の丸釘が、1点に銅製のリングネジが打ち込まれており、棺材の一部と考える。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.5cm前後のものもある。正方形縦棺に使用されたものとする。



第105図 第41号墓地第59号墓出土銭貨拓影図(原寸)

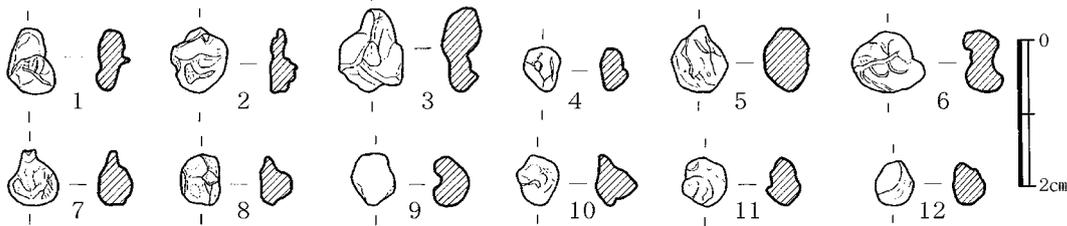
第60号墓(第106図、第13表、図版21)

正方形縦棺から植物実12個・籾殻が、墓壙内から釘55本程が出土した。

第106図1～12は、植物の実と思われる。当初木製の数珠玉と考えていたが、全て孔が無く、植物の実とした。現状は乾燥して萎縮し、黒褐色を呈している。大小様々であり、寸法は第12表の通りである。

籾殻は、棺の詰め物と考える。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.5cm前後のものもある。正方形縦棺に使用されたものとする。



第106図 第41号墓地第60号墓出土遺物実測図(原寸)

第12表 第41号墓地 第60号墓出土植物実寸法一覧表(単位cm)

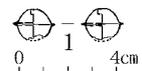
挿図	遺物	長さ	幅	厚み	挿図	遺物	長さ	幅	厚み
106	1	0.90	0.65	0.25~0.40	106	7	0.80	0.70	0.10~0.45
"	2	0.90	0.75	0.15~0.35	"	8	0.70	0.55	0.10~0.40
"	3	1.15	0.85	0.30~0.50	"	9	0.70	0.60	0.40~0.50
"	4	0.60	0.45	0.30~0.35	"	10	0.70	0.55	0.10~0.55
"	5	0.90	0.70	0.55~0.60	"	11	0.65	0.60	0.10~0.50
"	6	1.00	0.80	0.30~0.55	"	12	0.60	0.50	0.15~0.45

第61号墓(第107図、図版24)

桶棺から鈴1点が、墓壙内から釘16本程が出土した。

第107図1は、銅製の鈴である。鐃を持つ半球形を合わせたものであるが、下半を大きく欠損している。頂部には、長さ0.2cm・幅0.1cm弱の長方形孔が穿たれている。球形の残存高1.25cm・鐃の径1.75cm・器壁の厚さ0.15cmを測る。

釘は、全て鉄製の角釘である。欠損品が多く明確ではないが、長さ4.0cm前後のものも多く、最も長いものは長さ4.5cmを測る。桶蓋に使用されたものとする。



第107図 第41号墓地第61号墓出土遺物実測図(S=1/3)

第62号墓（図無し）

墓壙内から釘35本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。全て欠損品であるが、長さ4.0cm前後のものが主体と思われるが、中には、長さ4.5cm・6.0cmのものもある。正方形縦棺に使用されたものとする。

第63号墓（図無し）

墓壙内から木片が出土した。

木片は、人骨の下から出土しており、桶棺の底部に伴う棺材と考える。

第64号墓（図無し）

墓壙内から釘7本程が出土した。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ2.5cm・3.6cm・4.6cmの3種類がある。

第65号墓（図無し）

墓壙内から釘10本程が出土した。

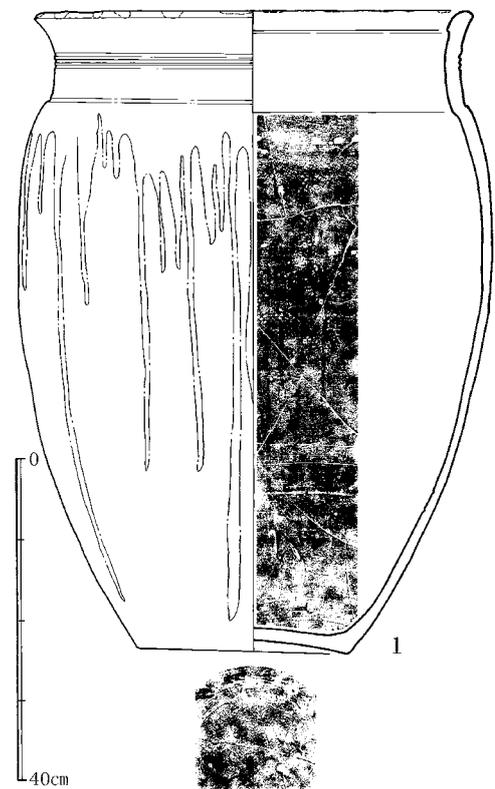
釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ2.0cm前後のものである。桶蓋に使用されたものとする。

第66号墓（第108図、図版16）

改葬に伴い、第4号墓の墓壙内に本墓の棺甕1個体が廃棄されていた。また、本墓の墓壙内から釘12本程が出土した。

第108図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高78.4～79.2cm・口径54.0cm・頸径49.9cm・胴径58.3cm・直径25.9cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中に3条の沈線を施している。明褐色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面21ヶ所程に目跡が残っている。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.5cm前後のものもある。甕蓋に使用されたものとする。

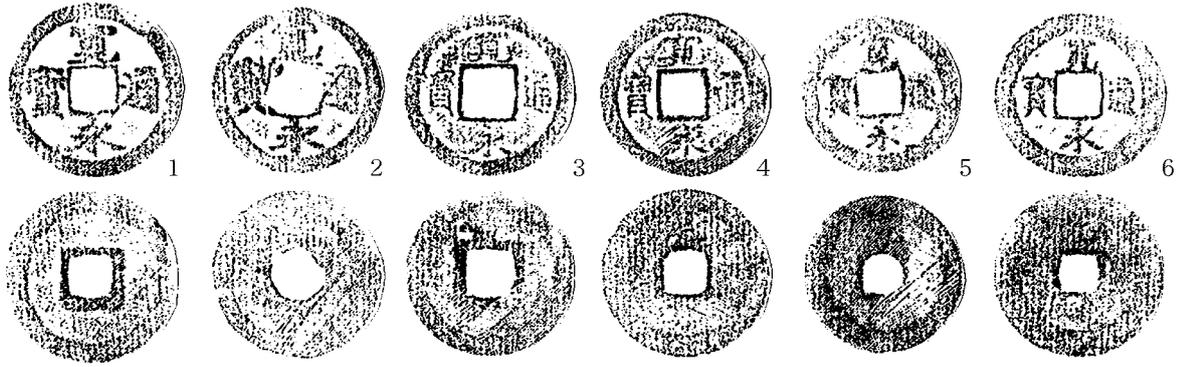


第108図 第41号墓地第66号墓出土遺物実測図（S=1/9）

第68号墓（第109図）

正方形縦棺から銭6枚が、墓壙内から釘83本程が出土した。

第109図1～6は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、1・2は古寛永、3～6は新寛永である。4の背面には「足」字が、5・6の背面には「元」が鋳出されている。



第109図 第41号墓地第68号墓出土銭貨拓影図（原寸）

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後と4.5cm前後のものが多い。正方形縦棺に使用されたものとする。

第69号墓（第110図、図版29）

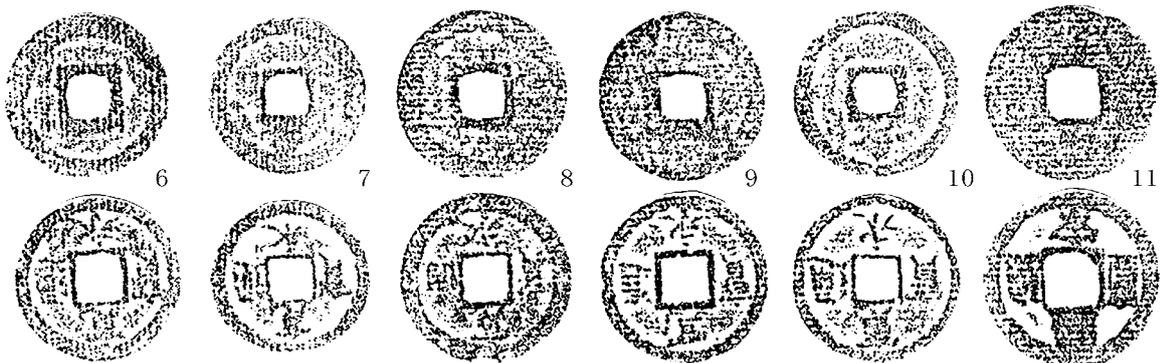
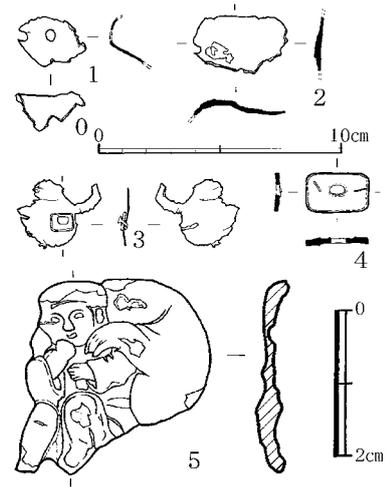
正方形縦棺から皮片3点・金属製品2点・銭6枚が、墓壙内から釘75本程が出土した。

第110図1～3は、皮製品の一部である。煙草入れなどの袋物とする。1は、背の部分に略円形の孔が開けられている。3は、縦0.9cm×横0.75cmの長方形の飾り金具を銅製の鉤で留めたものである。

第110図4は、飾り金具である。縦2.6cm×横1.65cmの長方形を呈し、厚さ0.2cmを測る。中央に長径0.7cm×短径0.4cmの楕円形の孔を有し、その左右には径0.1cm以下の孔があり細かい針金に通っている。表面の四周縁と中央孔の周縁は一段高く縁取られ、その内側に文様がありそうだが、不明瞭である。

第110図5は、銅製と思われる留め金具である。全体に緑青が吹いている。袋を担いだ帽子を被った人物像であり、あるいは七福神の大黒天とも考えられる。寸法は長さ2.6cm・幅2.45cmを測る。

第110図6～11は、銭貨である。全て銅銭であり、6は皇宋通宝、7～9は寛永通宝の新寛永である。7の背面には「長」字が、10の背面には「元」字が鋳出されている。



第110図 第41号墓地第69号墓出土遺物実測図（S=1/3・原寸）・銭貨拓影図（原寸）

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.5～3.0cmのものや長さ5.0cmを超えるものもある。正方形縦棺に使用されたものとする。

第70号墓（図無し）

墓壙内から釘25本程が出土した。

釘は、全て鉄製であり、角釘と丸釘がある。丸釘は1本だけであり、あるいは重複する第69号墓の丸釘が混入したものかもしれない。角釘の長さは、4.0cm前後のものである。正方形縦棺に使用されたものとする。

第71・72号墓

遺物は出土しなかった。

第73号墓（図無し）

墓壙内から釘5本程が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.5cm前後のものである。

第74号墓（図無し）

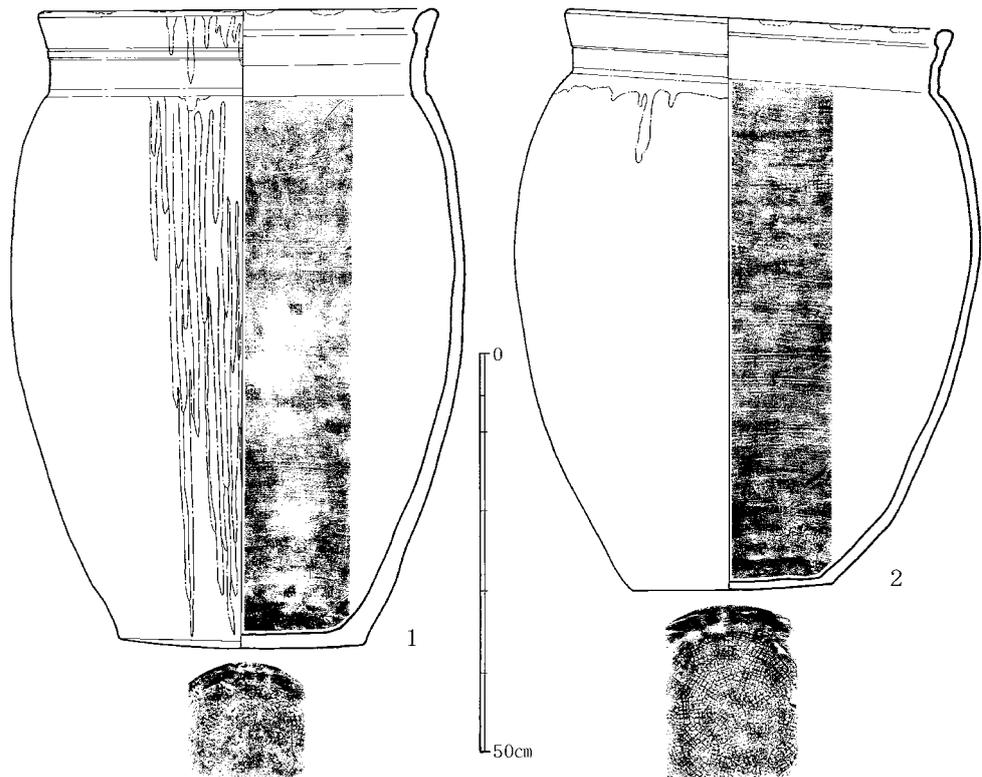
墓壙内から釘13本程が出土した。

釘は、全て鉄製の丸釘である。長さ4.0cm前後のものである。

第75号墓（第111図1、図版16）

墓壙内から棺甕1点・釘20本程が、棺内から布片・蓆片・木葉・木片が出土した。

第111図1は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高78.8cm・口径49.4cm・頸径46.2cm・胴径55.9cm・底径30.1cmを測る。調整は、



第111図 第41号墓地第75・76号墓出土遺物実測図（S=1/9）

胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に1条の沈線と鈍い段を施している。鈍い橙色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面15ヶ所に目跡が残っている。

布片は、詳細不明である。

席片は、死者を包んだものか、棺の詰め物か不明である。

木葉は、詳細不明だが、棺の詰め物と考える。

木片は、2種類の樹木と思われる。甕蓋に使用されたものと考え、釘は確認できない。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0cm前後のものが多いが、長さ2.0cm前後のものもある。甕蓋に使用されたものと考え。

第76号墓（第111図2、図版16）

墓壙内から棺甕1点が、棺内から木片1点が出土した。

第111図2は、18～19世紀の肥前産陶器甕である。器高71.2cm・口径48.0cm・頸径45.2cm・胴径57.4cm・底径24.6cmを測る。調整は、胴部外面を叩きの後ナデ仕上げ、内面を格子目文叩きの後ナデ、底部内面を格子目文叩きしている。頸部外面中位に鈍い段を施している。灰白色を呈する土灰釉は、頸部と胴部の境を釉剥ぎされている。肥厚した口縁部上面13ヶ所程に目跡が残っている。

木片は、板状のやや曲がったものである。残存長17.0cm・幅6.8cm・厚さ1.1cmを測る。甕蓋に使用されたものと考え。

第77号墓

遺物は出土しなかった。

第78号墓（第112図、図版23・28・32）

正方形縦棺から煙管1点・留め金具3点・発火具3点・銭8枚・木片1点が、墓壙内から釘34本程が出土した。

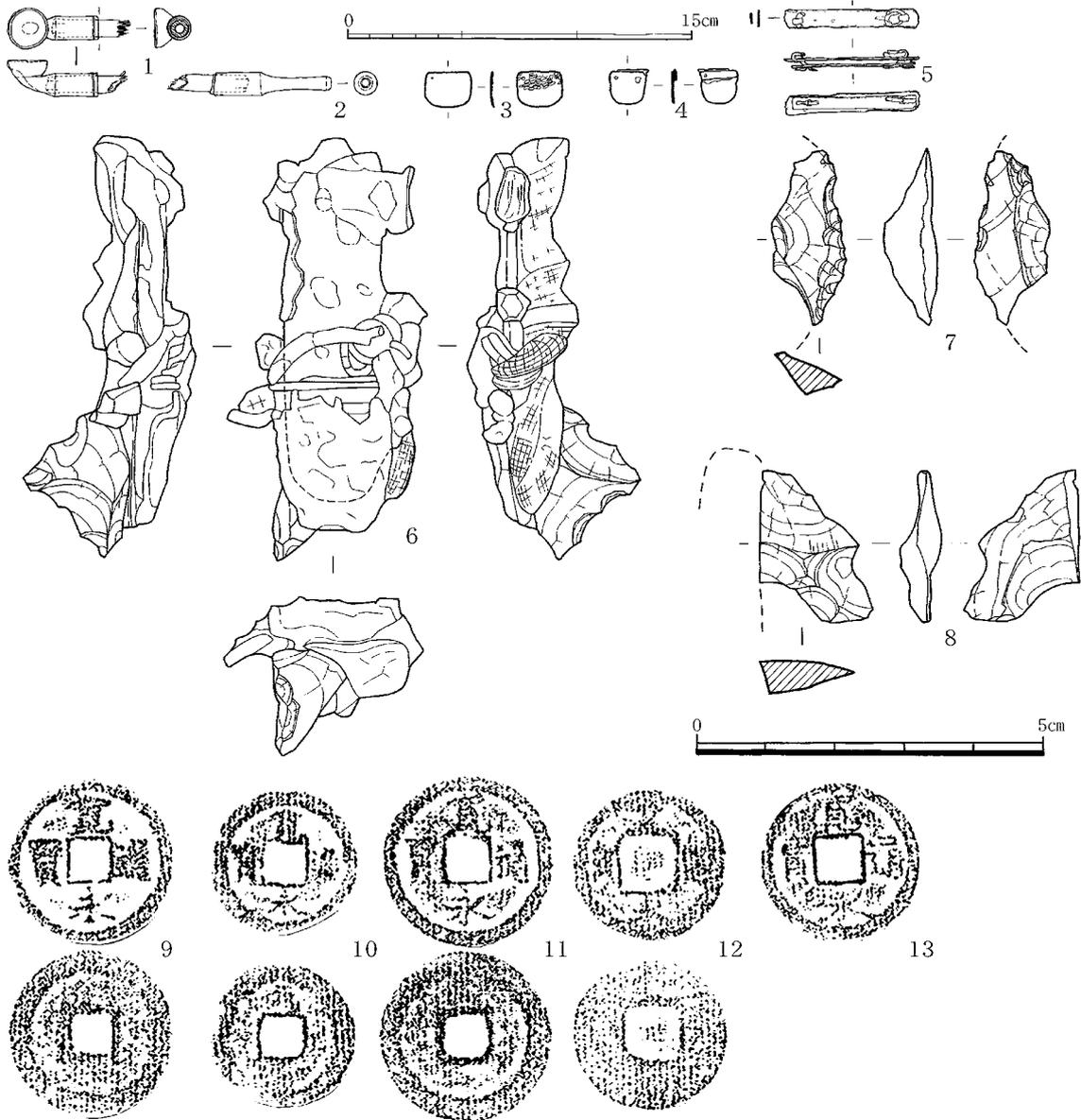
第112図1・2は、一対の羅宇煙管である。雁首と吸口は銅製であり、全面に緑青が吹いている。羅宇は竹製である。

1は、雁首と羅宇の一部であり、残存長5.4cmを測る。雁首は、長さ4.0cm・小口径1.0cm・胴最大径1.05cmを測る。胴の小口近くに1条の沈線が巡らされている。火皿は、大きく、直径1.75cm・高さ0.75cmを測る。羅宇は、最大径0.75cmで、雁首に2.0cm入っている。

2は、吸口と羅宇の一部であり、残存長7.1cmを測る。吸口は、長さ5.05cm・吸口径0.4cm・小口径1.0cm・胴最大径1.05cmを測る。羅宇は、最大径0.75cmで吸口に1.55cm入っている。吸口胴と羅宇の間には、薄い竹皮が巻かれている。

第112図3・4は、袋物の蓋に供う物と思われる銅製の留め金具である。いずれも、上辺は直線で、下辺が蒲鉾状に丸味を有する形態を呈し、上辺角に鋏留用の孔が2ヶ所開けられている。全面に緑青が吹いている。

3は、縦1.6cm・横2.0cm・厚さ0.15cmを測る。裏面の上半には格子状の編み目があり、恐らく



第112図 第41号墓地第78号墓出土遺物実測図 (S=1/3・原寸)・銭貨拓影図 (原寸)

装着された布 (皮?) の痕跡と考える。

4は、縦1.5cm・横1.5cm・厚さ0.1cmを測る。裏側は、幅0.4cmの銅板で布 (皮?) を挟んでおり、2ヶ所において鉤留めしている。

第112図5は、袋物の蓋の背に伴うと思われる銅製の留め金具である。全面に緑青が吹いている。2枚の銅板で布 (皮?) を挟み、2ヶ所を鉤で固定するものである。鉤にはリングが付き、提げ紐などが付けられていたと思われる。表側の銅板は長さ5.85cm・幅0.7~0.85cm、裏側の銅板は長さ5.35cm・幅0.5~0.6cmを測る。

第112図6~8は、発火具である。

6は、火打ち金と火打ち石が錆着したものである。火打ち金と火打ち石の間に布が錆着しており、火打ち金と布のまわりを紐状のものが巻かれている。恐らく、火打ち石を布袋に入れ、火打ち金と一緒に紐で巻かれていたものと思われる。火打ち金の幅1.35cm・厚さ0.2cm程を測り、長さは4.5cm

程と考える。

7・8は、チャート製の火打ち石である。7の長さ2.55cm・幅1.05cm・厚さ0.75cm、8の長さ2.55cm・幅1.3cm・厚さ0.55cmを測る。

以上1～8は、煙草入れとしてセットになるものと考え。

第112図9～13は、銭貨である。全て寛永通宝の銅銭であり、9は古寛永、11は文銭、10・12・13は新寛永である。10の背面には「元」字が、11の背面には「文」字が鋳出されている。なお、銹着・破損のため図化できなかったが、別に鉄銭3枚も共伴している。

木片は、銅銭の痕跡が残っているものである。長さ5.4cm・幅3.1cmを測る片面だけの小片である。副葬品を入れた木箱片か、棺底材か不明である。

釘は、全て鉄製の角釘である。長さ4.0～4.5cmのものが多い。正方形縦棺に使用されたものと考え。

2. 蔵骨器 (第113図、図版19)

第113図1～3は、同一土壌に埋納されていた蔵骨器である。

1は、第1号蔵骨器として取り上げた、明治～昭和(第2次世界大戦時中)の陶器甕である。産地は不明である。機械成形されたもので、底部から外傾していた胴部は下位から直立する形態を呈し、口縁部から胴部上位を欠損する。底部は上げ底で、内面中央付近に底径1.5cm・頂径0.65cm・高さ0.45cmの円形突起がある。残存器高43.0cm・胴部最大径33.6cm・底径18.9cmを測る。内全面と胴部外面から底部外面の周辺まで鉄釉がかかっているが、底部外面の大半は無釉である。鉄釉は、濃淡の斑があり、釉だまりもみられる。底部畳付は砂目が付いている。

2・3は、第2号蔵骨器として取り上げた、土師質の蓋と壺である。いずれも胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は橙色を呈している。

2は、頂部中窪みの円形つまみを有する蓋である。口縁部はほぼ水平に延びている。器高4.2cm・口径23.1cmで、つまみの径4.7cm・高さ1.9cmを測る。

3は、胴部上位が丸味を有する短頸の壺である。胴部外面の上位に「又」のヘラ記号がある。器高30.8cm・口径21.4cm・胴部31.1cm・底径21.1cmを測る。

第113図4・5は、第3号蔵骨器として取り上げられた、プラスチック製箱の蓋と身である。茶色を呈している。

4は、5の内側に納まる板状の蓋である。約1/3を欠損し、残存長16.0cm・幅13.15cm・厚さ0.4cmを測る。復原長は18.3cmと考える。4隅と各長辺中央の計6ヶ所に径0.4cmの円径孔が開けられている。外面には十字形の凸帯が施されており、交点は肥厚して厚さ0.6cmを測る。十字形はキリスト教の十字架を形取ったものと考え。

5は、長方体の箱である。側壁の3ヶ所に亀裂が入っているが、略完形である。外法は、縦18.5cm・横14.0cm・高さ13.7cmを測り、器壁の厚さは0.5cmである。底板・4側板は繋がっており、口縁部内側に4の蓋を受けるための幅0.2cm・深さ0.4cmの段が設けてある。また、4隅と各長辺中央の計6ヶ所に径0.3～0.4cm・深さ1.75cmの円形穴を有する方形柱が突出している。4の蓋の孔

と一致しており、蓋を固定するネジ穴である。片方の短側板外面には、幅1.5cm・深さ0.1cmの凹形の窪みが回っており、その内側中央に長方形の墓碑板が天地逆に装着されている。墓碑板は、無色透明のプラスチックプレートであり、長さ8.8cm・幅3.9cm・厚さ0.3cmの長方形を呈している。周縁を斜めに面取りし、短辺中央の計2ヶ所をネジで身に固定している。

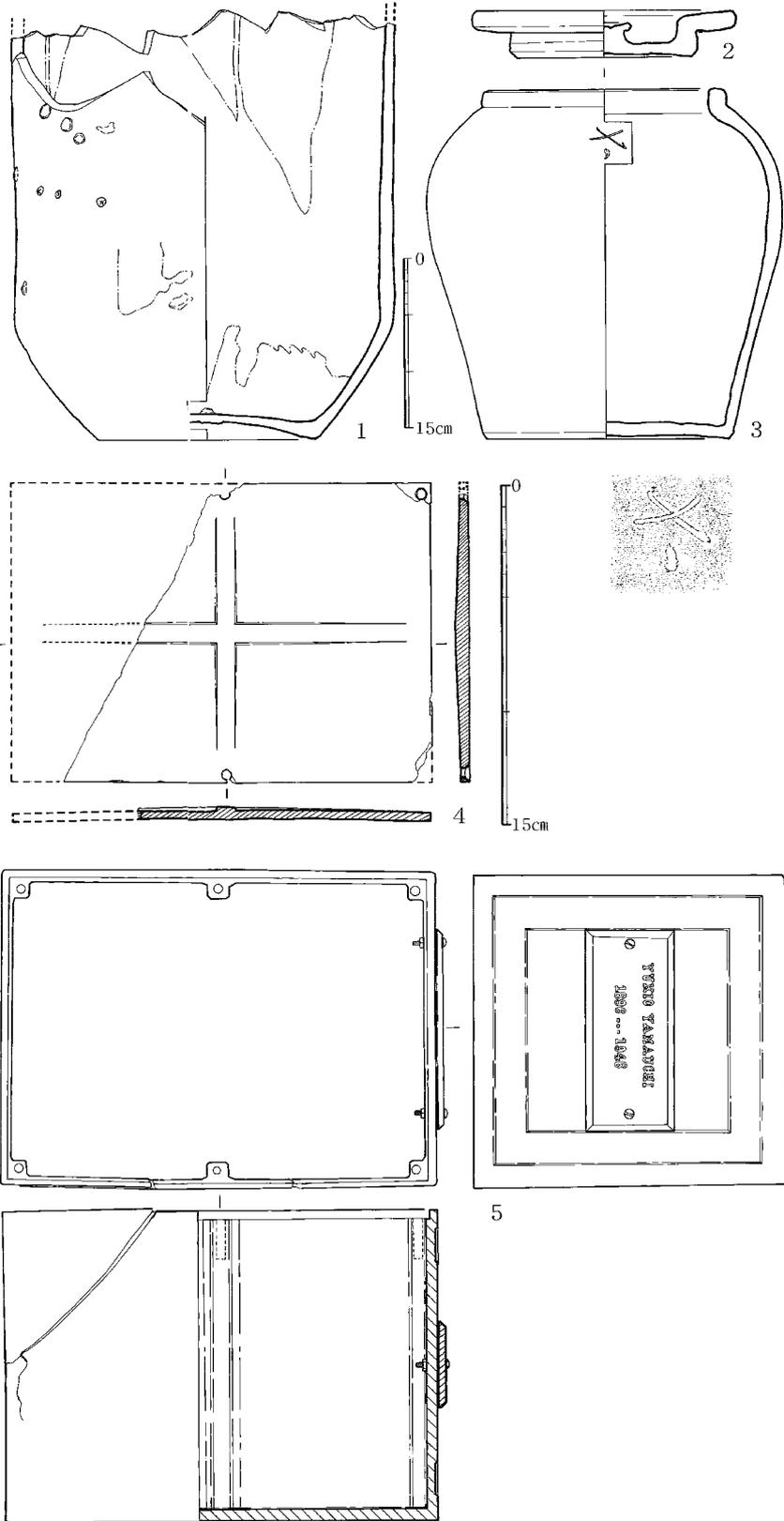
墓碑銘は、

YUKIO
YAMAUCHI
1896--1946

と記されている。

本被葬者については、地元伯東寺の過去帳に山内幸男のことを「昭和21年5月28日 米国ニテ病死」と記載されている。

以上の事から、4・5の蔵骨器は、アメリカで病死した山内幸男氏の火葬骨を納めたアメリカ製の蔵骨器と考える。



第113図 第41号墓地出土蔵骨器実測図 (S=1/6・1/3)

3. 胞衣容器 (第114~116図、図版19・20)

胞衣容器あるいは胞衣容器と思われる容器が23点出土した。その内訳は、短頸壺4点・無頸壺1点・壺1点・銚子1点・土瓶15点・鉄瓶1点である。

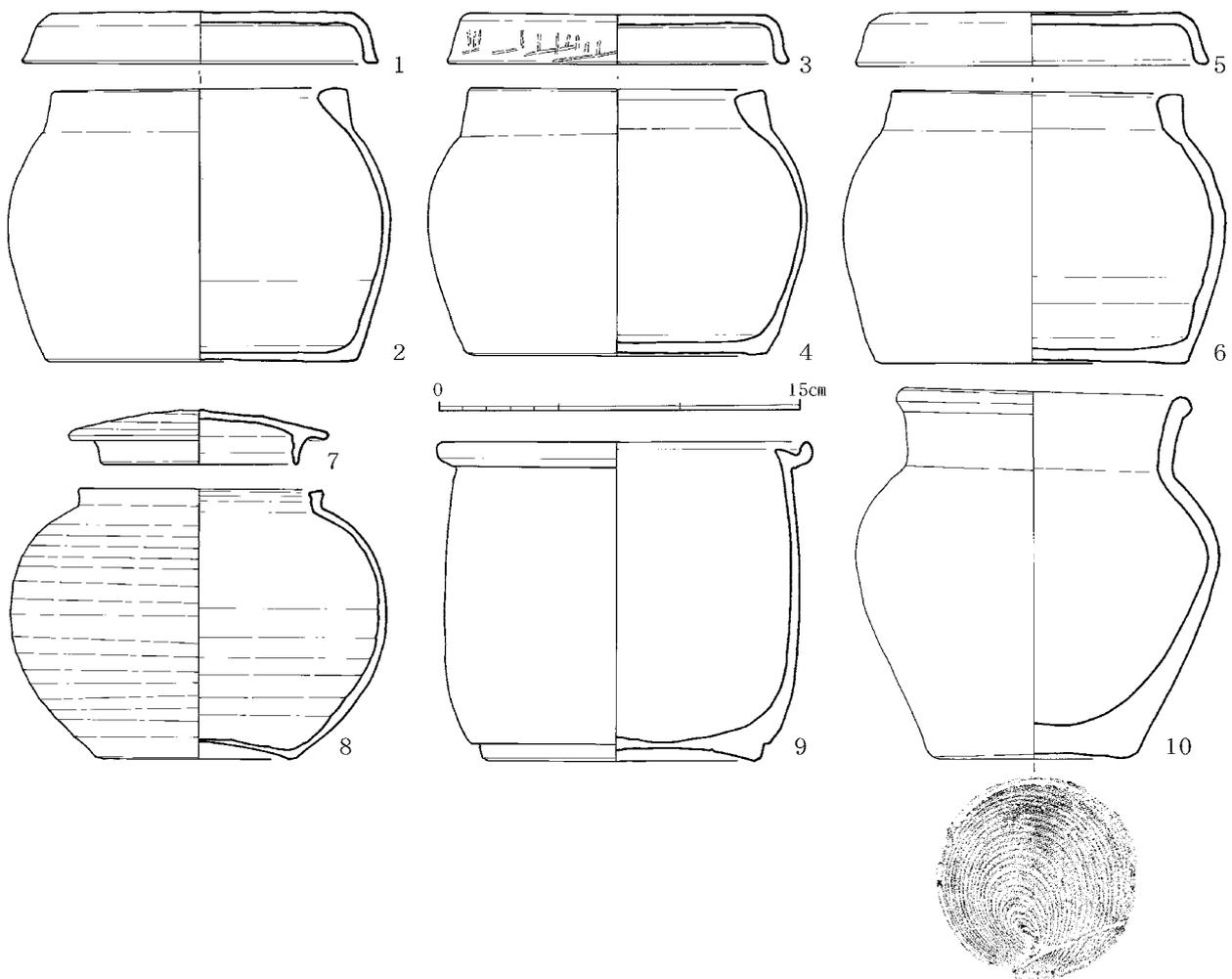
第114図1~9は、形態上蓋付きの蔵骨器(骨蓋)とみるべきであるが、火葬骨を伴っておらず、胞衣容器として扱った。

第114図1~6は、土師質の有蓋短頸壺の蓋と身である。いずれも同じ形態を呈し、胎土は金雲母を含む緻密なもので、焼成は良好、色調は橙色系統を呈している。調整は、ヨコナデとナデである。蓋は、平たい天井部から口縁部は若干外似して開き、身の短い頸部の外側に被るものである。身は、略平底に中位で最大径を有する胴部が続き、若干内傾する短い頸部と口縁部は著しく肥厚している。

1・2は、第2号胞衣容器に使用されていた蓋と身である。

1は、天井部と口縁部の一部が若干欠損しているが略完形である。器高2.15cm・天井径12.5cm・口径14.8cmを測り、色調は浅黄橙色~鈍い橙色を呈している。内面に薄く煤が付着している。

2は、完形品である。器高11.45cm・口径12.4cm・胴部最大径15.9cm・底径13.0cmを測り、色調は橙色~灰白色を呈している。胴部下位から底部にかけての外面に煤が付着し、底部内面には黒



第114図 第41号墓地出土胞衣容器実測図① (S=1/3)

色の漆状のものが塗布されている。

3・4、は第7号袍衣容器として取り上げた蓋と身である。

3は、完形品である。器高2.1cm・天井径12.3cmを測り、色調は外面淡橙色・内面橙色を呈している。口縁部外面には調整具の跡が残っている。

4は、完形品である。器高11.1cm・口径12.4cm・胴部最大径15.8cm・底径12.5cmを測り、色調は鈍い橙色をていしている。

5・6は、第6号墓の墓壇内から出土した蓋と身である。いずれの色調も、浅黄橙色～鈍い橙色を呈している。

5は、天井部から口縁部にかけての約3/5を欠損する。器高2.2cmで、復原の天井径12.5cm・口径14.7cmを測る。

6は、口縁部から胴部にかけての約1/4を欠損する。器高11.4cm・口径12.1cmで、胴部最大径15.9cm・底径13.1cmを測る。口縁部外面から内全面にかけて黒色の付着物が薄く残っている。

第114図7・8は、第15号袍衣容器として使用されていた、土師質の有蓋短頸壺の蓋と身である。いずれも、胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色～灰白色を呈している。

7は、内側のかえりが口縁部より下に突出する蓋である。完形品である。調整は、天井部外面を回転ヘラケズリの後ヨコナデ、他はヨコナデである。器高2.3cm・口径（天井径）10.8cmで、かえりの径8.25cm・深さ1.2cmを測る。

8は、球形の胴部に上げ底の底部と短頸が付く蓋身である。完形品である。口縁部は、幅0.5cmの平坦を呈している。調整は、胴部外面を回転ヘラケズリの後ヨコナデ、他はヨコナデである。器高11.3cm・口径10.2cmで、胴部最大径15.6cm・底径13.4cmを測る。

第114図9は、表採遺物で、土師質の無頸壺である。本来蓋が付くが、出土していない。口縁部から胴部にかけての約1/4が欠損している。蓋を受けるために口縁部は一旦外に折れてから直ぐに立ち上がる形態を呈している。底部は削り出して高台風にしており、上げ底を呈している。調整は、底部外面以外は全てヨコナデしている。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は浅黄橙色～橙色を呈している。器高13.4cm・口径12.5cm・受部径15.6cmで、胴部最大径14.7cm・高台径11.5cmを測る。胴部下位から底部にかけての内面には、黒色の付着物が残っている。

第114図10は、第24号墓の墓壇内から出土した、17世紀の肥前産鉄釉陶器壺である。口縁部から頸部にかけての約1/3と胴部上位の一部を欠損している。若干上げ底気味の底部は厚く胴部の中位よりやや上位に最大径を取り、口縁部は外に丸く肥厚している。器高15.6cm・口径12.3cm・頸径11.05cm・胴部径15.15cm・底径7.8cmを測る。口縁部から胴部上位にかけての内面に鉄釉がかかっているが、他は無釉である。底部外面には回転糸切り痕が残っている。

第115図1は、第5号袍衣容器として取り上げた、18世紀の肥前（有田）産の染付磁器銚子である。型成形である。球形状の体部に上げ底の底部が付き、やや張つた肩に短く直に立ち上がる頸部が付いている。口縁部は平坦を成している。弦用の耳はリング状であるが、前後とも途中で欠損している。注口先端も少し欠損している。注口と接する体部には逆三角形の孔が1ヶ開けられている。器高9.3cm・口径7.15cm・体部最大径13.2cm・底径8.15を測る。体部外面には、型による龍・波・宝珠文が施され、染付けされている。内外面に透明釉がかけられた後、畳付と口縁部から体部上位内面にかけて釉剥ぎされている。また、底部外面周縁に砂目が残っている。

第115図2～13は、19世紀の関西系軟質施釉陶器土瓶の蓋と身である。いずれも低火度の透明釉がかかっている。

3・5・7は、体部上半外面に飛鉋文を施したものである。やや扁平な球形の体部に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は上げ底を呈している。低火度の透明釉は、口唇部から体部上半の外面のみにかかっており、体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。2・4・6は、その蓋であり、いずれも凹型の内側中央に乳頭状のつまみを有しており、器高より低いものである。口縁部は外側斜め下方へ折れている。低火度の透明は、つまみと凹型の内全面から口唇部にかけてにかかっており、他は無釉である。底部外面には、回転糸切り痕が残っている。

第115図2・3は、第8号朧衣容器として取り上げたものでセットとなるが、いずれも破片である。蓋2は、器高2.1cm・口径9.45cm・底径3.6cmで、つまみの径1.0cm・高さ1.5cmを測る。身3は、底部・片方の耳・注口を欠損し、全体に歪みがある。残存高10.5cm・口径8.5～8.9cm・復原胴径19.6cmを測る。

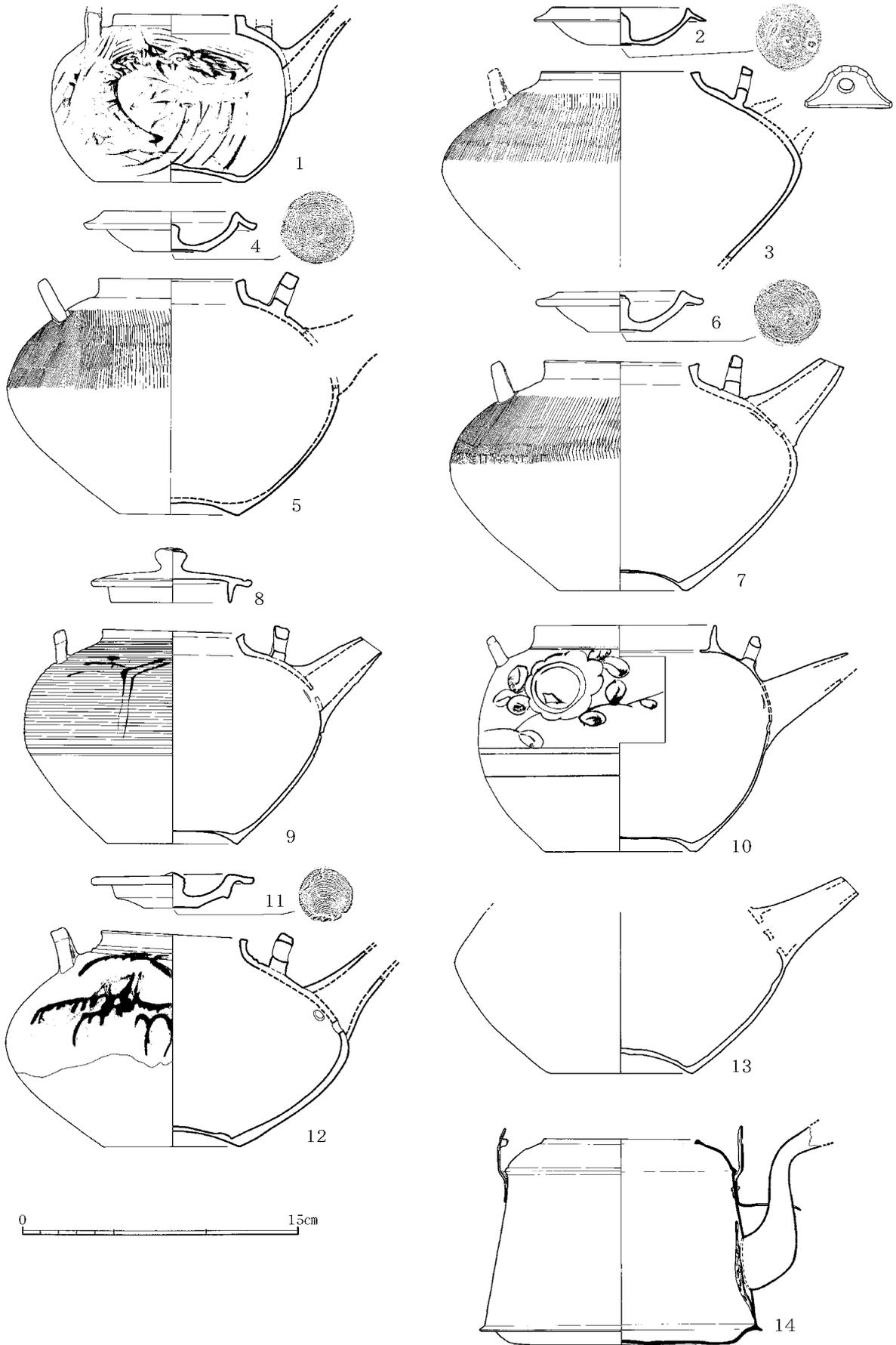
第115図4・5は、第5号墓の墓壇内から出土したものであるが、4は14と共に第6号朧衣容器として取り上げた。本来は4・5がセットと考える。蓋4は、口縁部が2ヶ所欠損している。器高2.2cm・口径9.5cm・底径4.05cmで、つまみの径1.0cm・高さ1.1cmを測る。身5は、胴部から底部の約1/2と片方の耳および注口を欠損している。器高13.0cm・口径8.05cm・胴径18.2cmで、復原底径6.6cmを測る。

第115図6・7は、第29号墓の墓壇内中位から出土したものであり、セットと考える。蓋6は、いずれの透明釉も著しく薄く、一見無釉にも見える。口縁部の約5/6とつまみの一部を欠損している。器高2.3cm・復原口径9.2cm・底径3.4cmで、つまみの径1.1cm・高さ1.55cmを測る。身7は、体部4ヶ所程を欠損するが、略完形品である。器高12.7cm・口径8.5cm・胴径18.9cm・底径7.1cmを測る。注口接合部の体部には、3ヶ所の円形孔が穿たれている。

第115図8は、第21号墓の墓壇内から出土した蓋である。口唇部2ヶ所が若干欠損しているが、略完形品である。やや平たい天井部の内側からかえりが口縁部より下に真っ直ぐに突出する形態を呈している。天井部の外周には1条の沈線を巡らし、中央には渦巻き文の沈線を施した円形のつまみが付いている。器高3.0cm・口径6.6cmで、つまみの径1.8cm・高さ1.2cmで、かえりの径6.55cm・長さ1.1cmを測る。裏文様として天井部外面には鉄絵が施されている。つまみと天井部から口唇部にかけての外面のみに透明釉がかかっている。

第115図9は、第24号墓の墓壇内から出土した土瓶身である。口・頸部の約1/2と体部の7ヶ所を欠損している。球形の体部に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は上げ底である。体部上位に弦用の略三角形を呈した耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が付いている。注口接合部の体部には、3つの円形孔が外側から穿たれている。器高11.8cm・口径7.8cm・体部最大径16.1cm・底径7.2cmを測る。体部中位から上位にかけて23条程の螺線状沈線を巡らせ、体部上半3ヶ所に銅緑釉による山水文を描いている。低火度の透明釉は、頸部から体部中位にかけての外面のみにかかっており、体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

第115図10は、第9号朧衣容器として取り上げた土瓶身である。第47号墓の墓壇内地表近くに出土したものである。体部の3ヶ所と注口の先端の一部が欠損している。球形の体部に真っ直ぐに立ち上がる口・頸部が付き、底部は上げ底である。頸部と体部のくびれ部内側には、幅0.4cmの蓋



第115図 第41号墓地出土胞衣容器実測図② (S=1/3)

受けが水平に突出している。体部上位の弦用の耳が前後に付き、体部上半に注口が付いている。注口接合の体部には、3つの円形孔が穿たれている。器高12.45cm・口径9.95cm・胴部最大径16.0cm・底径8.3cmを測る。頸部から体部下半中途までの外面に白化粧し、その上に文様を描いている。文様は、鉄釉で頸部との境付近に2条の線、体部中位に2条の線、体部下半に1条の線を巡らし、2条線と2条線の間である体部上半に鉄釉で椿文を描き、葉を銅緑釉で彩色している。また、前後の耳の頂部と注口の先端にも鉄釉で文様を描いている。低火度の透明釉は、ほぼ白化粧と同じ範囲にかかっている。体部下位から底部にかけての外面には煤が付着している。底部外面には、墨で「四五」と縦書きされている。

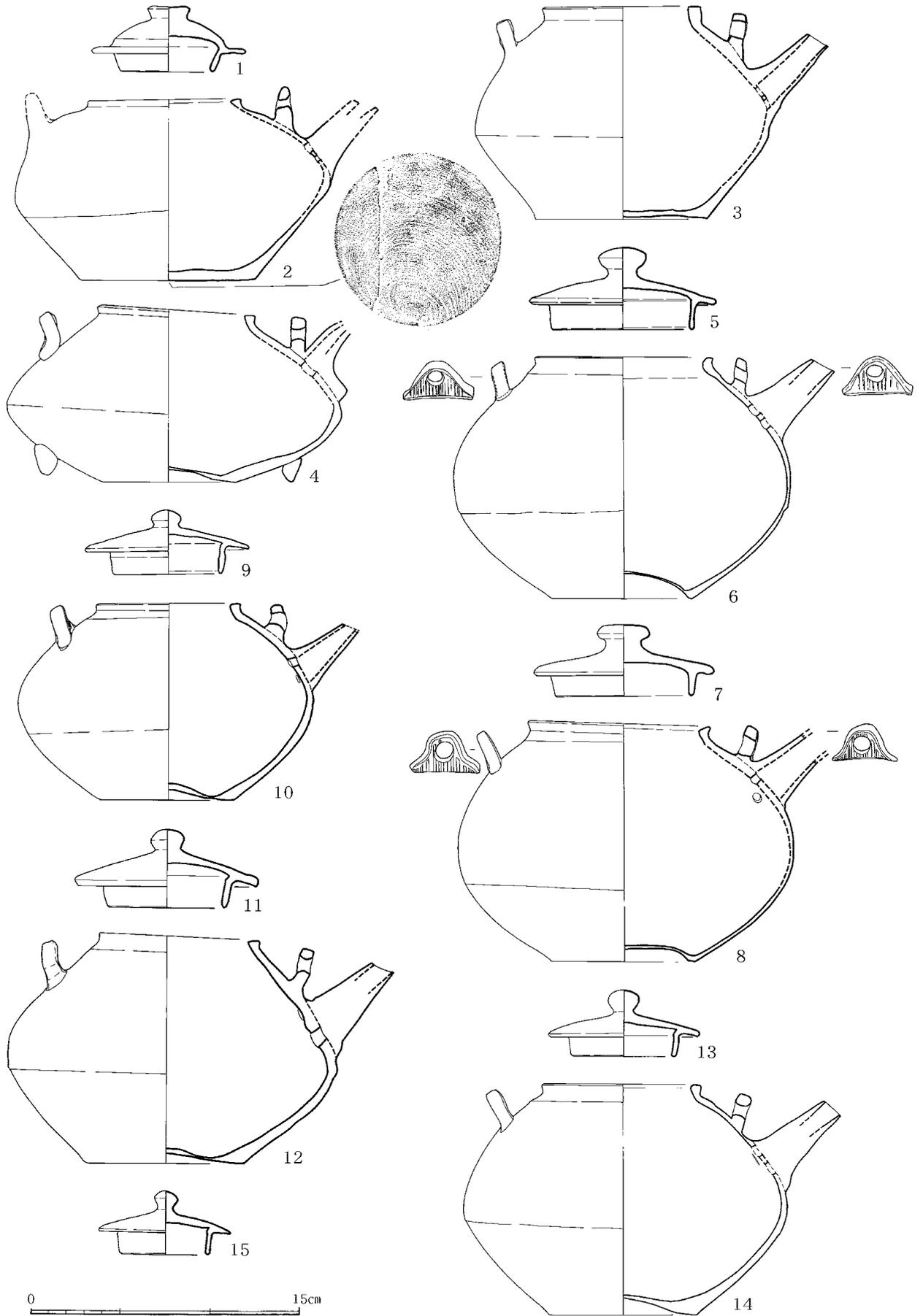
第115図11・12は、第14号胞衣容器として取り上げた蓋と身であり、セットである。蓋11は、凹型の内側中央に乳頭状のつまみを有する蓋であり、口縁部は外側やや斜め下方に短く折れた後水平な口縁部を呈している。口縁部の約2/5を欠損している。つまみは、口縁部よりわずかながら外（上）に出ている。器高1.9cm・口径8.9cm・底部2.9cmで、つまみの径1.3cm・高さ1.3cmを測る。低火度の透明釉は、つまみと凹型の内全面から口唇部にかけてかかっている。無釉の裏面には煤が付着している。底部外面には、右回転の回転糸切り痕が残っている。身には、扁平な球形の体部に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は上げ底である。口縁部2ヶ所・体部6ヶ所・注口部2ヶ所を欠損している。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が付いている。注口接合部の体部には、3つの円形孔が穿たれている。器高11.9cm・口径8.05cm・体部最大径18.8cm・底径7.4cmを測る。頸部と体部の境には2条の沈線が巡らされ、それより下位の体部上半に鉄釉と銅緑釉によって山水文が描かれている。低火度の透明釉は、頸部から体部中位にかけての外面にのみかかっている。体部下半から底部にかけての外面には、煤が付着している。

第115図13は、第3号墓の墓壇内から出土した土瓶身である。扁平な体部を呈し、底部はあげ底である。注口と体部上半から底部にかけての1/2弱の破片である。残存部分には文様はみられない。残存高8.9cm・復原体部最大径18.0cm・復原底径7.7cmを測る。注口接合部の体部には、3つの円形孔が穿たれている。低火度の透明釉は、体部中位以上の外面にかかっており、体部下半から底部にかけての外面には煤が付着している。

第115図14は、第6号胞衣容器として取り上げた鉄瓶の身である。第5号墓の墓壇内上位に出土した。著しい錆化で、表面は剥離しているが、黒色の被膜が残っており、鉄地の表面を防水加工したものと思われる。体部は、下位より上位の径が小さい円筒状を呈している。上端には突帯が巡り、そこから丸味を有する肩が付いている。下端には鰐が付き、底部に続いている。体部上位には頭部が丸い幅1.5cmの板状耳が前後に付き、うち前の耳板は注口につながっている。耳は各々2本の釘で体部に固定されている。注口は、体部下位から鶴首状（象鼻）の曲線を呈している。注口接合部の体部の内側には、11ヶ所以上の円形孔を穿った鉄板を貼付している。

第116図1～4は、福岡産もしくは福岡産と思われる鉄釉陶器の蓋と土瓶身である。

第116図1は、18～19世紀の福岡産鉄釉陶器の蓋である。壺の蓋と思われる。表採遺物であり、約2/5を欠損する。やや中窪みの平たいつまみを有する蓋である。丸い天井部から口縁部が水平に伸び、内側には口縁部より下に出る内傾したかえりが付いている。器高3.7cm・口径8.6cmで、つまみの径2.35cm・高さ0.8cm、かえりの径5.3cm・長さ1.1cmを測る。つまみから口唇部にかけての外面に鉄釉がかかっているが、内面は無釉である。外面の約半分程の釉葉が剥げている。



第116図 第41号墓地出土土衣容器実測図③ (S=1/3)

第116図2は、第1号胞衣容器として取り上げた、江戸後期の福岡産と思われる鉄釉陶器土瓶の身である。体部9ヶ所・口縁部3ヶ所・両耳と注口の一部を欠損する。やや扁平気味の球体に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は平底である。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位から上に注口が付いている。注口接合部の体部には、3ヶ所の円形孔が穿たれている。器高10.9cm・口径8.6cm・体部最大径17.1cm・底径9.8cmを測る。鉄釉は、口縁部から体部中位までの内外面にかかっているが、内面はムラがある。底部外面には右回転の回転糸切り痕が残っている。また、体部から底部にかけての内面には鉄分が付着しており、本品はお歯黒壺に転用されていた可能性がある。

第116図3は、第24号墓の墓壇内から出土した、江戸後期の福岡産鉄釉陶器土瓶の身である。やや深めの球形の体部に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は若干上げ底気味である。底部から体部下位にかけては、やや外反している。体部上位に弦用の耳が前後に付き、体部最大径の中位より上に注口が付いている。注口接合部の体部には、楕円形の孔が上下に2つ穿たれている。器高12.0cm・口径8.8cm・底径9.8cmを測る。鉄釉は、頸部の内外面と体部上半の外面にのみかかっているが、口縁部平坦面は釉剥ぎされている。底部外面には、静止糸切りと考えられる痕跡が残っているが、明確ではない。

第116図4は、第11号胞衣容器として取り上げた、19世紀の福岡産と思われる陶器土瓶の身である。算盤形の体部に短頸で平坦な口縁部が付き、底部は上げ底である。体部下半中位の3ヶ所に粘土塊を貼付して、3足付瓶としている。体部上半中位に前後に弦用の耳を付け、体部最大径の中位よりやや上位に平べったく短い注口が付いている。注口接合部の体部には、3つの円形孔が重複して穿たれている。器高10.0cm・口径8.8cm・体部最大径18.8cm・底径7.4cmを測る。底部内面・頸部内外面・体部上半外面に鉄泥を塗布し、その後に頸部内外面・体部上半外面のみに透明釉がかけられている。口縁部平坦面は釉剥ぎされている。体部下半から底部にかけての外面には、煤が付着している。

第116図5～15は、19世紀の緑釉陶器土瓶の蓋と身である。いずれも銅縁釉がかかっており、形態もほぼ同じである。蓋は、口縁部より下に真っ直ぐ突出するかえりを有し、天井外面中央に丸いつまみを有している。銅縁釉は、つまみを含めた天井部から口縁部にかけての外面のみにかかっており、かえりを含めた内側は無釉である。身は、球形の体部に短頸の口縁部が付き、底は上げ底である。体部上位に弦用の耳を前後に付け、体部最大径の中位より上に注口を付けている。注口接合部の体部には、3つの円形孔が穿たれている。銅縁釉は、頸部から体部ほぼ中位までの外面にのみかかっている。体部下半から底部にかけての外面には、煤が付着している。

しかしながら、産地についてみると関西系と肥前系の2種類が認められる。

第116図5～8は、関西系の緑釉陶器土瓶である。肥前系に比して大振りであり、素地は白っぽい色調を呈している。また、身に付けられた弦用の耳の外面に沈線による文様を施している。

第116図5・6は、第3号胞衣容器として取り上げた土瓶の蓋と身である。蓋5は、完形品である。器高4.65cm・口径10.4cmで、かえりの径8.0cm・長さ1.5cm・つまみの径2.65cm・高さ1.55cmを測る。身6も、完形品である。器高13.7cm・口径9.95cm・体部最大径17.75cm・底径7.8cmを測る。

第116図7・8は、第8号胞衣容器として取り上げた土瓶の蓋と身である。蓋7は、完形品で

あり、つまみが偏平なものである。器高4.1cm・口径10.1cmで、かえりの径7.75cm・高さ1.3cm・つまみの径2.95cm・高さ1.1cmを測る。身8は、注口の先端を欠損している。器高13.7cm・口径10.2cm・体部最大径18.65cm・底径7.9cmを測る。

第116図9～15は、肥前系の緑釉陶器土瓶である。関西系に比して小振りであり、素地はにぶい赤褐色を呈し、素地の上に白化粧が施されている。また、底部内面には透明釉がかけられている。蓋のつまみは概して乳頭状を呈し、身の口縁部は平坦面を有している。

第116図9・10は、第4号胞衣容器として取り上げた土瓶の蓋と身である。蓋9は、口縁部とかえりの一部を欠損し、外全面に白色の粒々が多く付着している。器高3.65cm・口径9.20cm・かえりの径6.10cm・長さ1.5cm・つまみの径1.70cm・高さ1.0cmを測る。身10は、口縁部と注口先端を若干欠損するが、略完形品である。口縁部平坦面から頸部内面にかけてと、体部下半から底部にかけての外面に白化粧が施されている。器高11.1cm・口径8.1cm・体部最大径16.45cm・底径7.4cmを測る。

第116図11は、表採した完形の蓋である。外面に少し白色の粒が付着している。器高4.4cm・口径10.3cmで、かえりの径6.6cm・長さ1.5cm・つまみの径1.9cm・高さ1.15cmを測る。

第116図12は、第10号胞衣容器として取り上げた土瓶の身である。体部の一部を欠損するが、略完形品である。口縁部平坦面から頸部内面にかけてと体部下半から底部にかけての外面に白化粧が施されている。器高13.0cm・口径9.0cm・体部最大径18.3cm・底径8.9cmを測る。

第116図13は、第1号蔵骨器として取り上げた蓋であり、第120図2の鉄釉陶器土瓶の身とセットになるものである。破碎された状態で出土したが、略完形品である。外面に白い粒がやや多く付着している。器高3.8cm・口径8.45cmで、かえりの径5.9cm・長さ1.3cm、つまみの径1.3cm・高さ1.2cmを測る。

第116図14は、第8号胞衣容器として取り上げた身であるが、第120図8と重複し、本品の出土地点は不明である。口縁部の大半と体部から底部にかけての約1/3を欠損している。口縁部平坦面に白化粧が施されている。器高13.05cm・口径8.9cm・体部最大径18.0cm・底径8.3cmを測る。

第116図15は、表採した蓋である。口縁部が1ヶ所欠損しているが、略完形品である。外面に白色の粒が少し付着している。器高3.6cm・口径7.4cmで、かえりの径5.0cm・長さ1.2cm・つまみの径1.3cm・高さ1.05cmを測る。

4. 表採遺物 (第117図、図版17～19)

第117図1は、1820～60年代の肥前系染付磁器碗である。口縁部から胴部にかけての約1/4と高台の約3/5を欠損している。器高5.85cm・口径10.4cm・高台の径4.1cm・高さ0.85cmを測る。口縁部は、端反形を呈している。見込み文様は岩波文、裏文様は草花と蝶である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第117図2は、1820～60年代の肥前産染付磁器小碗である。約1/3の破片である。器高4.5cm・復原口径9.0cmで、高台の復原径4.65cm・高さ0.9cmを測る。裏文様は区画間福寿字の窓絵内山水文である。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第117図3は、19世紀前半の関西系灰釉陶器小碗である。口縁部から胴部の約2/5が欠損している。器高4.6cm・口径8.7cmで、高台の径2.9cm・高さ0.5cmを測る。高台を含んだ底部外面は無釉であるが、他は内外面とも灰釉がかかっており、全面に貫入が走っている。

第117図4は、17世紀第4四半期～18世紀前半の肥前（内野山窯）産陶器碗である。口縁部から胴部の約3/4が欠損している。器高6.6cm・復原口径11.8cmで、高台の径4.85cm・高さ0.9cmを測る。高台を含んだ底部外面は無釉であるが、他の外面に緑釉が、内面には透明釉がかかっている。

第117図5は、明治期の肥前系染付磁器皿である。口縁部から胴部の約1/2を欠損する。器高2.45cm・復原口径11.35cmで、高台の径5.6cm・高さ0.35cmを測る。見込み文様は山水文、裏文様は山水文風のものである。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第117図6は、明治期以降の肥前系無釉磁器皿である。口唇部2ヶ所を若干欠損するが、略完形品である。底部上げ底を呈している。器高2.3cm・口径9.6cm・底径3.2cmを測る。

第117図7は、1780～1860年代の肥前系白磁紅皿である。完形品である。型押し成形であり、裏文様は型による貝の放射脈を表わしている。器高1.5cm・口径4.6cmで、高台の径1.45cm・高さ0.1cmを測る。内全面から胴部外面の一部まで透明釉がかかっているが、高台を含めた底部外面は無釉である。

第117図8は、1800～60年代の肥前系白磁紅皿である。口縁部から胴部の約2/5を欠損している。型押し成形であり、裏文様は型による蛸唐草文を表している。器高2.0cm・口径6.2cmで、高台の径2.8～3.1cm・高さ0.15cmを測る。内外面に透明釉がかけられ、後に畳付を釉剥ぎしている。

第117図9は、18世紀前半の肥前産染付磁器蓋である。つまみと口縁部から天井部にかけての約1/2を欠損している。内側に口縁部より下に突出するかえりが付く蓋である。天井部外面中央には、倒れたつまみの溶着痕が残っている。器高2.6cm・口径12.85cmで、かえりの径11.4cm・長さ0.5cmを測る。裏（天井部外面）文様は牡丹唐草文である。口縁部内面からかえり外面にかけては無釉で砂が付着しており、他は内外面とも透明釉がかかっている。また、かえりの端部内面は釉剥ぎされている。

第117図10は、昭和期の福岡（小石原）産陶器湯飲み碗である。完形品で、高台外面に「小石原」の押印がある。器高7.3cm・口径7.0cmで、高台の径4.8cm・高さ0.85cmを測る。高台を含む底部外面は無釉である。口唇部から胴部外面は、鉄釉の上に藁灰釉を掛け流している。胴部内面は白色を呈する釉を掛け流している。内外面とも透明釉がかかっている。

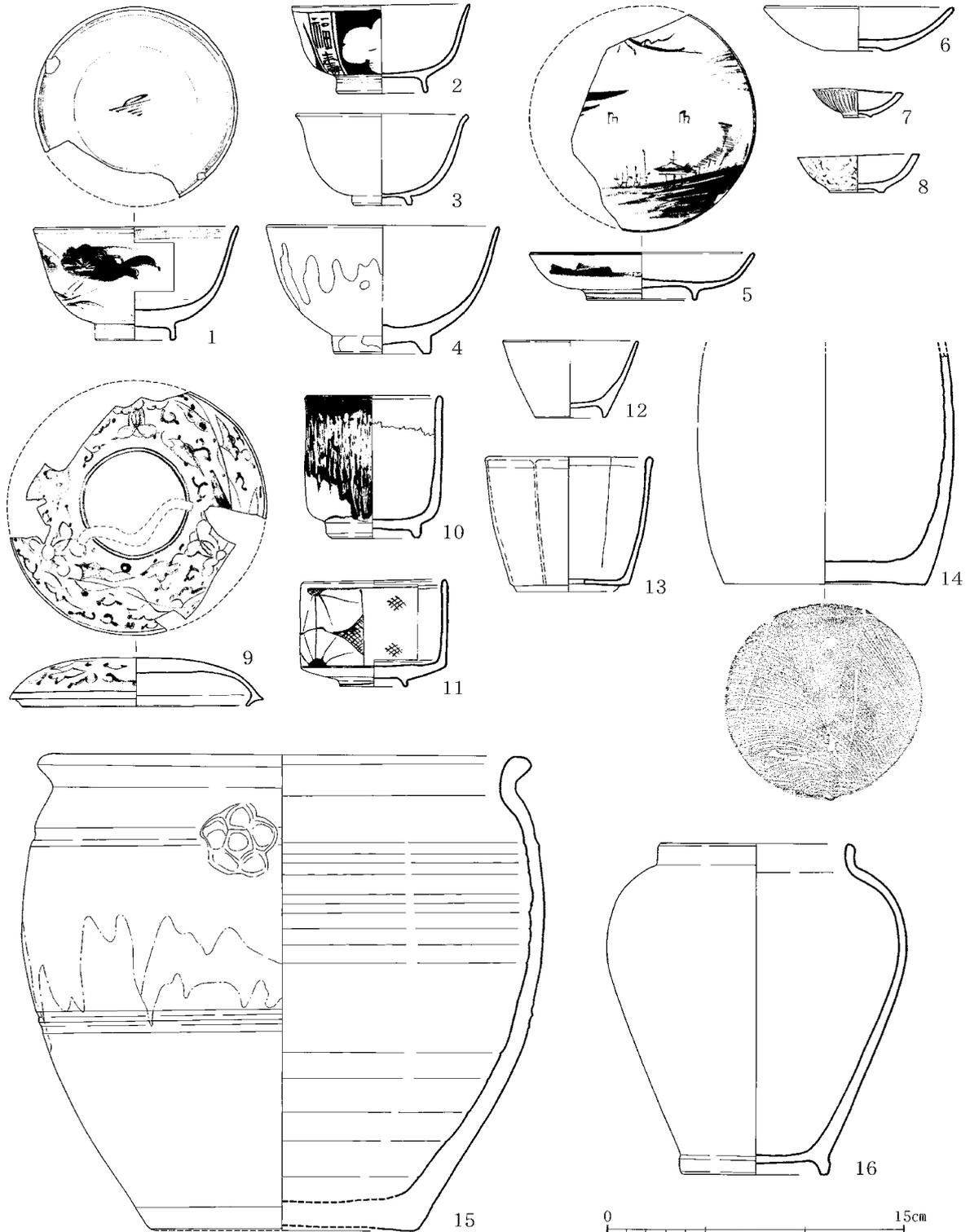
第117図11は、1780～1810年代の肥前系染付磁器茶飲み碗である。筒形を呈している。口縁部から底部にかけての約1/2を欠損している。器高5.45cm・口径7.4cm・底径7.3cmで、高台の径3.45cm・高さ0.3cmを測る。見込み文様は五弁花文、裏文様は区画内菊花散しである。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第117図12は、18世紀末～幕末の肥前系白磁小猪口である。口縁部から胴部の約2/3が欠損している。底部は上げ底である。器高3.95cm・口径6.9cm・底径4.4cmを測る。畳付は無釉であるが、他は内外面とも透明釉がかかっている。

第117図13は、第二次世界大戦中の陶器植木鉢である。鋳込み成形であり、平面形八角形を呈している。底部中央には、径1.6cmの円形孔が穿たれている。底部外面周縁には、八角形の1辺沿いに1ヶ所、角2ヶ所の計3ヶ所に断面台形の細長い足が付いている。畳付には白色を呈するもの

が塗布されている。口縁部内外面から胴部外全面に濃い青色の釉がかかっているが、他は無釉である。産地は不明であるが、底部外面に「(不三)」と「116」の刻印があり、「(不三)」は生産地を、「116」は窯番号を意味するものと思われる。

第117図14は、18世紀後半～19世紀の福岡（小石原）産鉄釉陶器瓶である。胴部下半から底部にかけての破片である。残存高11.7cm・胴部最大径12.95cm・底径10.1cmを測る。胴部下位から底



第117図 第41号墓地表面採集遺物実測図 (S=1/3)

部にかけての外表面は無釉であり、他の内外表面は鉄釉がかかっている。内面の釉薬は薄い。底部外表面には、糸切り痕が残っている。

第117図15は、18世紀の福岡（小石原）産鉄釉陶器甕である。口縁部から胴部中位にかけての約1/2と底部の中央部分を欠損している。器高24.4cm・口径25.0cm・頸径23.35cm・胴径26.4cm・底径13.5cmを測る。胴部外面上位に1条、中位に2条の浅い沈線を施している。また、上位沈線上に五弁花の浮文が貼付されており、反対側は欠損のため不明だが、一对のものと思われる。内外面に鉄釉がかかり、さらに頸部内面から胴部外全面に藁灰釉を掛け流している。底部外表面に環状の目跡が残っている。

第117図16は、18世紀～19世紀前半の肥前産白磁壺である。口縁部4ヶ所と胴部4ヶ所を欠損するが、略完形品である。最大径が上位にある胴部に短頸の口縁部が付き、高台を有している。器高16.9cm・口径9.95cm・胴部最大径15.2cmで、高台の径7.3cm・高さ1.0cmを測る。内外表面透明釉がかけられ、後に口唇部と頸部内面および壺付を釉剥ぎしている。

注 釈

1. 詳細は長岡英一氏報文（文献1）を参照。
2. 詳細は櫻木晋一氏報文（文献2）を参照。
3. 出土レンズの度数測定は、鬼木眼科医院鬼木信乃夫氏の協力を得た。
4. 上巻（文献3）では「足袋ハゼ2枚が出土した。」と報告したが、その後1枚は骨片、他の1枚は鉄片と思われる、足袋ハゼではないと断定した。
5. 数珠玉の名称については、文献4の第16図数珠玉模式図を参照した。

文 献

1. 長岡英一 「原田第1・41号墓地出土義歯に関する報告」『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』第5節 筑紫野市文化財調査報告書 第79集 2004
2. 櫻木晋一 「原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭」『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』第3節 筑紫野市文化財調査報告書 第79集 2004
3. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』 筑紫野市文化財調査報告書 第77集 2004
4. 福岡県教育委員会 「高松家墓地」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-16-』 1990

第13表 第41号墓地出土数珠玉一覧表

出土遺構	材 質	色 調			備 考	図 番 号	
			直 径	厚 み		挿 図	遺 物
第 52 号 墓	磁 器	白色	0.945	0.880	母珠	96	3
	ガラス	黒色	0.505	0.415	成珠?	"	4
	ガラス	黒色	0.545	0.415	成珠?	"	5
	ガラス	黒色	0.515	0.410	成珠?	"	6
	ガラス	黒色	0.520	0.405	成珠?	"	7
	ガラス	黒色	0.520	0.395	成珠?	"	8
	ガラス	黒色	0.510	0.395	成珠?	"	9
	ガラス	黒色	0.530	0.375	成珠?	"	10
	ガラス	黒色	0.550	0.385	成珠?	"	11
	ガラス	黒色	0.535	0.425	成珠?	"	12
	ガラス	黒色	0.510	0.405	成珠?	"	13
	ガラス	黒色	0.540	0.410	成珠?	"	14
	ガラス	白色	0.585	0.490	成珠?	"	15
第59号墓	ガラス	無色透明	0.895	0.850	母珠	101	1

原田第41号墓地の遺物

第14表 第41号墓地出土銭貨一覧表①

出土 遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号	
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物
2号墓	鉄銭	—	—	—	—	24.6	錆着	図無し	
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
7号墓	古寛永	21.45~24.35	0.75~0.85	7.55~10.15	0.80~0.90	1.9		80	3
	文銭	25.15	1.05~1.15	5.85	1.05	3.1	背「文」	〃	4
	新寛永	22.95	0.80	6.35~8.25	0.65	1.9		〃	5
	新寛永	23.85	0.95~1.05	6.65	0.85~0.95	2.7		〃	6
	新寛永	21.95~22.75	0.65	6.95~7.15	0.50~0.65	1.4		〃	7
	新寛永	22.05~22.45	0.65~0.85	6.95	0.45~0.75	1.7		〃	8
9号墓	古寛永	23.85	0.85	5.85	0.70~0.85	2.1		81	3
	文銭	24.85	1.10~1.15	5.55	0.85~1.00	3.2	背「文」	〃	4
	新寛永	24.05	1.05	5.95	0.90~0.95	2.6		〃	5
	新寛永	22.75~23.65	0.95	6.05~6.85	0.75~0.95	2.4		〃	6
		新寛永 鉄銭	—	—	—	—	4.5	錆着	図無し
20号墓	文久永宝	26.75	0.95~1.05	7.45	0.75~0.85	2.9		83	1
	新寛永	23.05	0.75~0.95	6.75	0.85	1.9		〃	2
	新寛永	22.45	0.85	6.95	0.85	2.1		〃	3
	新寛永	22.65	0.75~0.85	6.45	0.75~0.80	2.2		〃	4
	新寛永	23.25	1.00~1.05	6.65	0.65~0.90	2.6		〃	5
	新寛永	23.05	1.15~1.25	5.95	1.05~1.15	3.6		〃	6
26号墓	鉄銭	—	—	—	—	23.5	錆着	図無し	
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
27号墓	判読不能	—	—	—	—	12.9	錆着	図無し	
	判読不能								
	判読不能								
	鉄銭								
	鉄銭								
36号墓	新寛永	23.55	1.00~1.05	6.25	0.75~0.85	2.6		89	2
	新寛永	24.35	0.75~0.95	6.65	0.75~0.85	2.3		〃	3
	新寛永	22.95	0.75~0.85	7.55~8.25	0.50~0.60	1.6	2片に割れ	図無し	
	鉄銭	—	—	—	—	7.3	錆着		
	鉄銭	—	—	—	—	—	—		
37号墓	新寛永	23.45	1.05	6.35	0.85	2.6		90	1
	新寛永	22.05	0.70	6.65	0.65	1.5		〃	2
	新寛永	22.25	0.85~0.95	7.05	0.85	1.7		〃	3
	新寛永	23.35	1.10	5.95	1.05	3.0		〃	4
	新寛永	23.35	0.75	5.95	0.65	2.0	背「足」	〃	5
	鉄銭	—	—	—	—	3.3	割れ	図無し	
40号墓	古寛永	24.45	0.85~0.95	5.75	0.85~1.05	2.6		91	3
	新寛永	24.05	0.95	6.15	0.65~0.85	2.4		〃	4
	新寛永	24.65	0.85~1.00	6.35	1.05	3.0		〃	5
	新寛永	22.95	1.05	6.75	0.85~0.95	2.4		〃	6
	新寛永	22.05	0.95~1.05	6.35	1.05	2.3	背「元」	〃	7
	文銭	24.85	1.05~1.10	5.95	0.95	3.0	背「文」	〃	8
44号墓	古寛永	24.65	1.05	5.75	0.95	3.0		92	1
	古寛永	24.55	1.15	5.45	1.05~1.15	3.6		〃	2
	古寛永	24.45	0.95	6.15	0.65~0.75	2.7		〃	3
	新寛永	24.45	1.05	6.05	0.95	2.9		〃	4
	新寛永	22.05	0.85	6.55	0.65~0.75	1.6		〃	5
	新寛永	22.45	0.85~0.90	6.35	0.75~0.80	1.9	背「元」	〃	6

第15表 第41号墓地出土銭貨一覧表②

出土遺構	銭種	寸法(mm)・重量(g)					備考	図番号	
		直径	輪厚	孔経	郭厚	重量		挿図	遺物
49号墓	文銭	24.95	1.20	5.85	1.05~1.15	3.5	背「文」	95	1
	新寛永	23.55	0.95	6.45	0.95	2.5		〃	2
	新寛永	24.45	1.45	6.05	1.15~1.25	4.3		〃	3
	新寛永	20.05~23.25	0.95	6.65	0.75	2.0		〃	4
	新寛永	23.15	0.85	6.15	0.85	2.5		〃	5
	新寛永	23.15	0.95	6.65	0.85	2.6		〃	6
51号墓	判読不能	—	—	—	—	17.1	錆着		図無し
	判読不能								
	判読不能								
	判読不能								
	判読不能								
53号墓	天保通宝	49.35×32.80	2.40~2.50	5.90~6.05	2.20~2.30	18.9		97	1
	文久永宝	27.00	1.15~1.30	6.25	1.15~1.20	3.8		〃	2
	文久永宝	26.65~26.80	1.25~1.35	6.75	1.20~1.30	4.2		〃	3
	文久永宝	26.60~26.90	1.05~1.20	6.20~6.30	1.00	3.4		〃	4
	新寛永	23.30~23.45	1.05~1.20	5.90~6.05	0.85~1.10	2.6		〃	5
54号墓	鉄銭	—	—	—	—	22.6	錆着、孔に紐		図無し
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
	鉄銭								
55号墓	元豊通寶	23.35	1.05~1.15	6.65	0.95	2.9		98	1
	新寛永	22.85	1.15	6.45	1.05	2.6		〃	2
	新寛永	22.85	0.75~0.80	6.35	0.65	1.6		〃	3
	新寛永	23.65	0.95	6.15	0.95	2.6		〃	4
	文銭	24.75	0.85	5.75	1.05	3.7	背「文」	〃	5
	文銭	24.95	1.05~1.15	5.95	0.85	3.2	背「文」	〃	6
58号墓	一銭	27.75	1.05~1.45	—	—	5.8	大正?	100	3
	五銭	20.65	1.75	—	—	4.5	明治23年	〃	4
59号墓	古寛永	24.65	1.15	5.65	1.15	3.5		105	1
	文銭	24.55	0.95~1.05	6.05	0.85	3.3	背「文」	〃	2
	新寛永	23.85	0.85~0.90	6.65	0.75	2.2		〃	3
	新寛永	22.05	0.75	6.75	0.65~0.75	1.7		〃	4
	新寛永	24.65	1.05~1.15	5.95	0.85~0.95	3.4		〃	5
	新寛永	22.85	0.85	6.65	0.75	2.1		〃	6
68号墓	古寛永	24.25	1.05	5.95	0.95~1.00	2.9		109	1
	古寛永	23.45	0.85	7.05	0.75	2.4		〃	2
	新寛永	22.95	0.95~1.05	6.55	0.95	2.5		〃	3
	新寛永	23.05	0.85~0.90	5.95	0.80	2.4	背「足」	〃	4
	新寛永	21.75	1.05	5.55	0.75~0.85	2.1	背「元」	〃	5
	新寛永	23.15	1.15	5.25	0.85~1.05	2.9	背「元」	〃	6
69号墓	皇宋通寶	24.45	0.75~0.85	7.15	0.75~0.85	2.9		110	6
	新寛永	24.25	0.95~1.00	5.45	0.85	2.2	背「長」	〃	7
	新寛永	23.45	0.85~0.95	6.05	0.85~0.95	2.4		〃	8
	新寛永	23.85	0.95~1.00	6.15	0.85	2.8		〃	9
	新寛永	21.65	0.85~0.90	5.45	0.75	2.0	背「元」	〃	10
	新寛永	22.95	0.95	6.15	0.65~0.90	2.4		〃	11
78号墓	古寛永	23.95	0.90~1.05	5.15	0.75~0.90	2.5		112	9
	新寛永	20.25~21.25	0.65~0.80	5.95	0.35~0.65	1.1	背「元」	〃	10
	文銭	25.05	1.15	5.85	0.75~0.85	3.3	背「文」	〃	11
	新寛永	22.25	0.65~0.75	7.95	0.45~0.55	1.3		〃	12
	新寛永	23.75	1.15~2.15	5.25	1.15~1.95	3.3	錆着	〃	13
	鉄銭	—	—	—	—		錆着		
	鉄銭	—	—	—	—		割れ		
鉄銭	—	—	—	—	2.5	割れ		図無し	





第22号墓(10-1)

第23号墓(11-1)

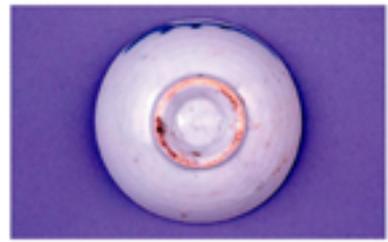
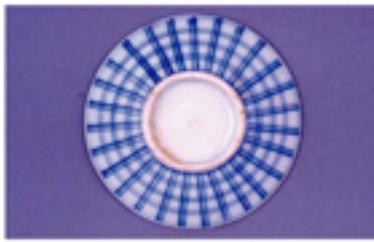
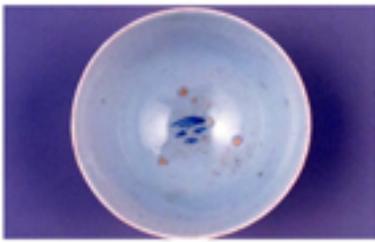
第27号墓(12-2)



第27号墓(12-1)

第33号墓(16-2)

第39号墓(20-1)



第39号墓(20-2)



第41号墓(21-1)



第39号墓(20-3)



第1号墓(1-2)



第22号墓(10-2)



第23号墓(11-2)



第33号墓(16-3)



(25-1)



(25-2)



(25-4)



(25-5)



(25-6)

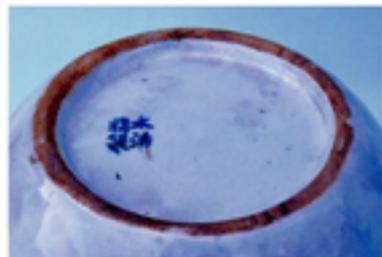


(25-7)



(25-8)

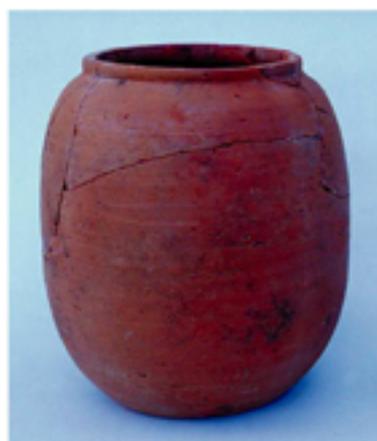
表採土師器皿



第20号墓出土藏骨器(23-1・2)



第47号墓出土藏骨器(23-9・10)



第59号墓出土藏骨器(23-11・12)



第59号墓出土藏骨器(23-13)

第1号胞衣容器



(24-1・2)

表 採 (24-7・8)



第2号胞衣容器



(24-3・4)



表 採(24-9・10)

第3号胞衣容器

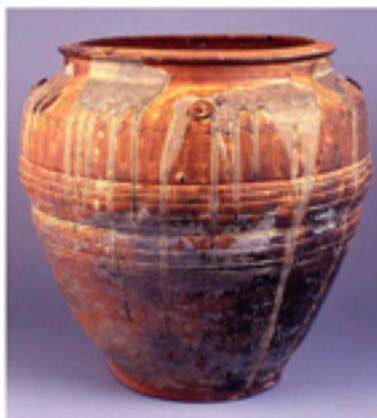


(24-5・6)



第5号胞衣容器

(24-11)



第1号墓(26-1)



第2号墓(27-1)



第2号墓(27-2)



第2号墓(27-3)



第3号墓(28-2)



第3号墓(28-3)



第3号墓(28-1)



第5号墓(30-1)



表 採(32-1)



第3号墓(28-4)



第5号墓(30-2)

図版6 原田第2・40号墓地 皿・壺・甕・胞衣容器 ()内数字は挿図番号
 原田第2号墓地



第2号墓(27-4)



第5号墓(30-3)



第5号墓(30-4)



第5号墓(30-5)



第5号墓(30-6)

原田第40号墓地



第1号壺棺 (41-1)



第34号墓 (47-1)



第75号墓 (66-1)



第76号墓 (67-1)



第3号胞衣容器(73-1・2)



表 採(73-3・4)



第25号墓(40-1)

第26号墓(42-1)

第27号墓(43-1)



第24号墓(39-1)



第28号墓(44-4)

第28号墓(44-1)

第28号墓(44-2)



第32号墓(46-2)



第37号墓(50-1)



第38号墓(51-2)



第39号墓(52-3)



第40号墓(53-1)



第41号墓(53-2)



第46号墓(56-1)



第47号墓(57-1)



第67号墓(62-1)



第69号墓(62-2)



第72号墓(64-1)



第71号墓(63-1)



第71号墓(63-2)



第73号墓(64-3)



第77号墓(68-1)



第81号墓(70-1)

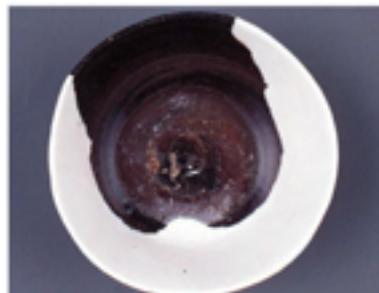


第76号墓(67-2)



表 採(74-1)

表 採(74-2)



第84号墓(72-1)

表 採(74-5)

表 採(74-6)



表 採(74-7)



表 採(74-8)

表 採(74-10)

表 採(74-11)



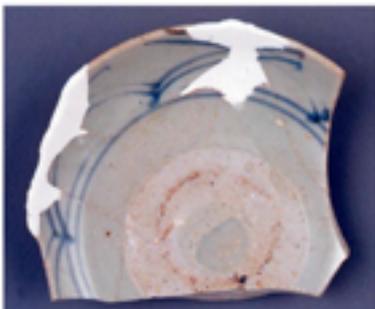
第41号墓(53-3)



第42号墓(53-4)



第46号墓(56-2)



第44号墓(55-1)



第42号墓(53-5)



第76号墓(67-3)



表 採(74-13)



表 採(74-14)



第24号墓(39-2)



第1号壺棺(41-2)



第39号墓(52-1)



第84号墓(72-2)



表 採(74-12)



表 採(74-17)



表 採(74-19)

表 採(74-18)



表 採 (74-20)



第56号墓(図無し)



第24号墓(39-3)



第24号墓(39-4)



第28号墓(44-5)



第28号墓(44-6)



第34号墓(47-2)



第36号墓(49-1)



第42号墓(53-6)



第73号墓(64-4)



第73号墓(64-5)



第74号墓(65-1)



第74号墓(65-2)



表 採(75-1)



表 採(75-2)



表 採(75-4)



表 採(75-5)



表 採(75-6)



表 採(75-7)



表 採(75-8)



表 採(75-9)



表 採(75-10)



表 採(75-12)



表 採(75-13)



表 採(75-14)



表 採(75-15)



表 採(75-16)



表 採(75-17)



表 採(75-18)



表 採(75-19)



表 採(75-20)



表 採(75-21)



表 採(75-23)



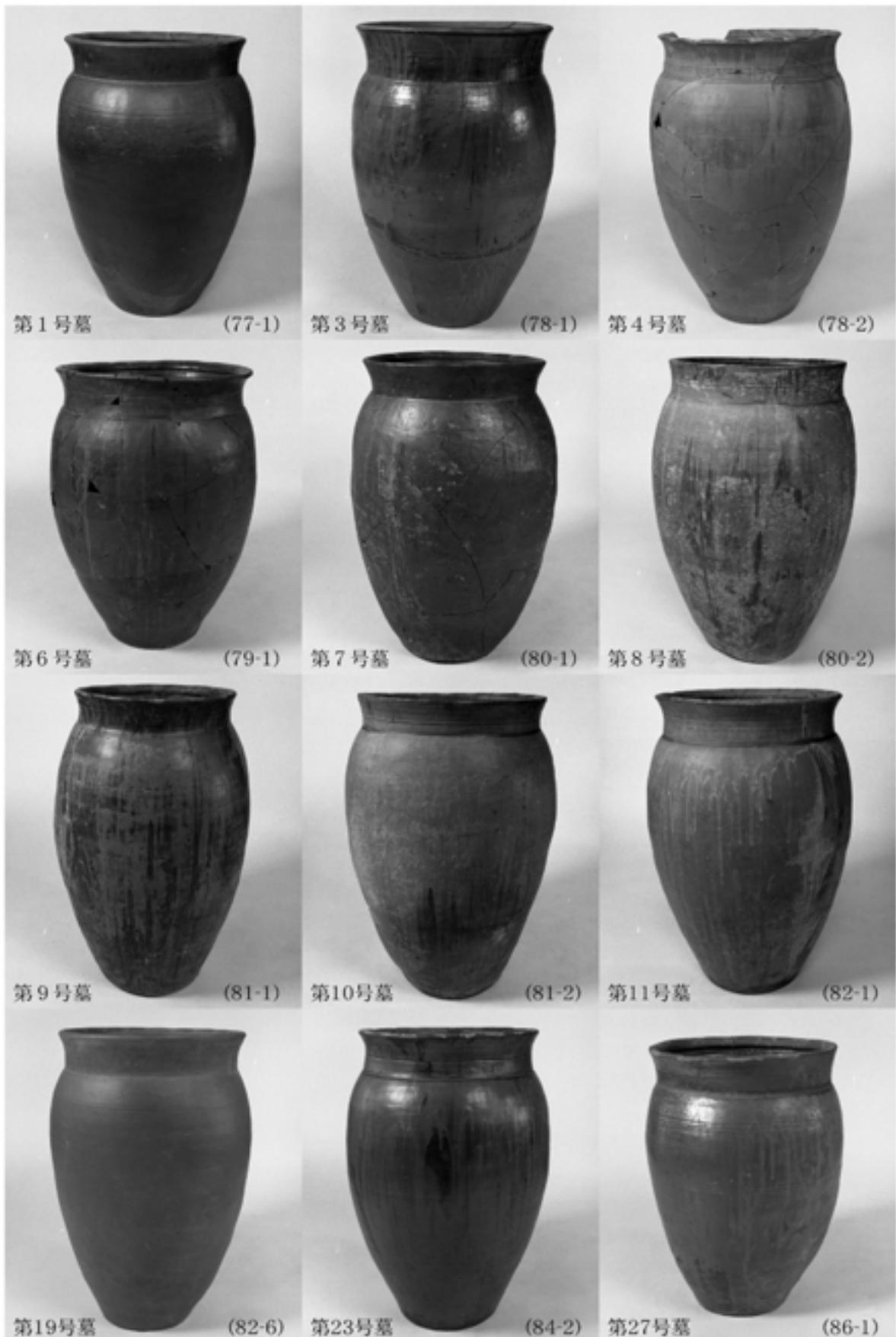
表 採(75-24)



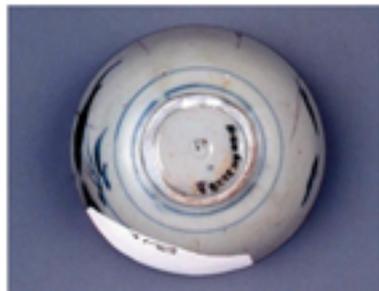
表 採(75-25)



表 採(75-27)







第36号墓(89-1)

第45号墓(93-1)

表 採(117-1)



表 採(117-2)

表 採(117-3)



表 採(117-4)

表 採(117-12)



表 採(117-10)

表 採(117-13)

表 採(117-11)



第1号墓(77-2)



第27号墓(86-2)



第28号墓(87-1)



表 採(117-9)



第1号墓(77-3)



第22号墓(84-1)



第16号墓(82-4)



表 採(117-6)



表 採(117-5)



第17号墓(82-5)



第27号墓(86-3)



第28号墓(87-2)



第30号墓(88-5)



第32号墓(88-10)



第45号墓(93-2)



表 採(117-8)



表 採(117-14)



表 採(117-15)



表 採(117-16)



第1号蔵骨器(113-1)



第2号蔵骨器(113-2・3)



第3号蔵骨器(113-4・5)



第2号胞衣容器(114-1・2)



第15号胞衣容器(114-7・8)



第7号胞衣容器(114-3・4)



表 採(114-9)



第6号墓(114-5・6)



第24号墓(114-10)



第59号墓(101-2)



第5号胞衣容器(115-1)



第8号胞衣容器(115-2・3)



第5号墓・第6号胞衣容器(115-4・5)



第29号墓(115-6・7)



第21・24号墓(115-8・9)



第9号胞衣容器(115-10)



第14号胞衣容器(115-11・12)



第3号墓(115-13)



第6号胞衣容器(115-14)



表 採(116-1)



第1号胞衣容器(116-2)



第24号墓((116-3)



第11号胞衣容器(116-4)



第3号胞衣容器(116-6)



第4号胞衣容器((116-9・10)



第8号胞衣容器(116-7・8)



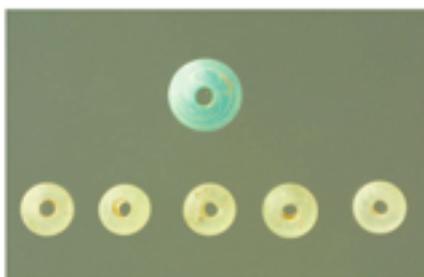
第10号胞衣容器(116-12)



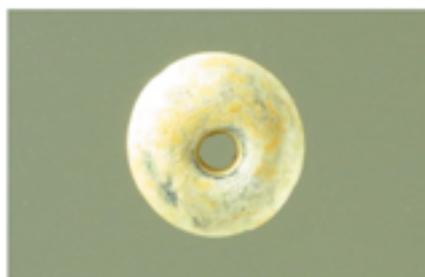
第1・8号胞衣容器((116-13・14)



第1号墓地 第41号墓
(21-5~45)



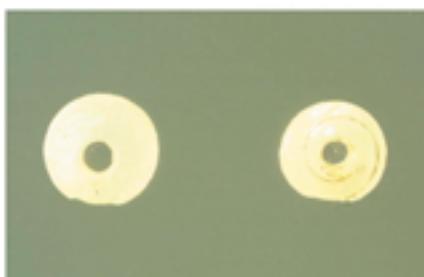
第2号墓地 第2号墓(27-5~10)



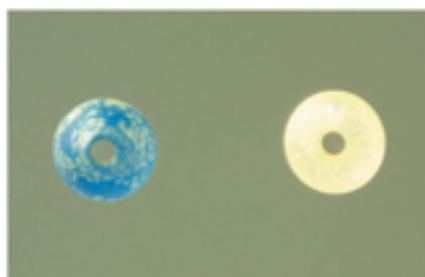
第2号墓地 第3号墓(28-5)



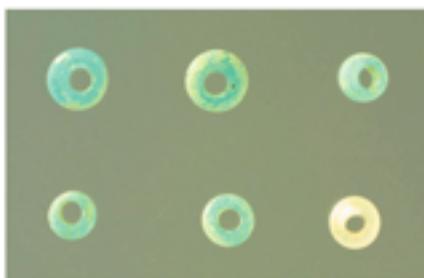
第40号墓地 第7号墓
(34-1~24)



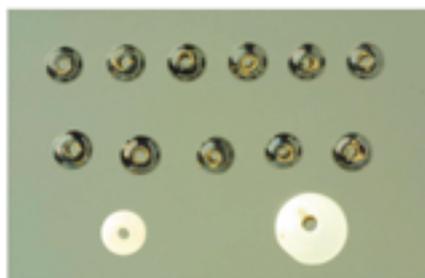
第40号墓地 第15号墓(35-1・2)



第40号墓地 第18号墓(35-5・6)



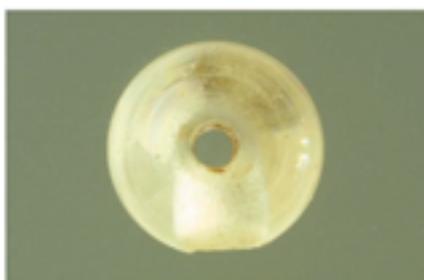
第40号墓地 第84号墓(72-9~14)



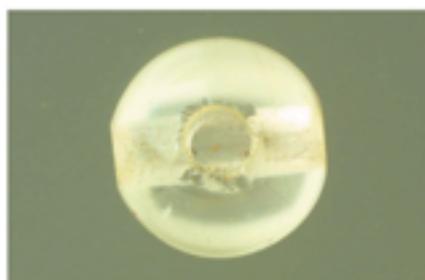
第41号墓地 第52号墓(96-3~15)



第40号墓地 第21号墓
(36-1~71)



第41号墓地 第59号墓(101-1)



第2号墓地 第4号墓(29-2~18)



第2号墓地 第5号墓(30-7~17)



第41号墓地 第60号墓(106-1~12)



第1号墓地第12号墓(8-3・4)



第1号墓地第23号墓(11-9・10)



第1号墓地第27号墓(12-3・4)



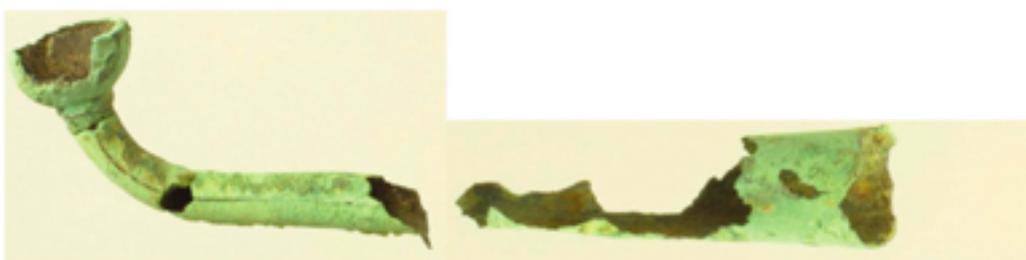
第1号墓地第31号墓(14-5・6)



第1号墓地第35号墓(18-1・2)



第1号墓地第41号墓(21-3・4)



第40号墓地第30号墓(46-1)



第40号墓地第84号墓(72-5・6)



第41号墓地第40号墓(91-1・2)



第41号墓地第24号墓(85-1・2)



第41号墓地第24号墓(85-3)



第41号墓地第78号墓(112-1・2)



第1号墓地第31号墓(14-2)



第1号墓地第33号墓(16-4)



第1号墓地第41号墓(21-2)



第40号墓地第36号墓(49-2・3)



第41号墓地第11号墓(82-2)



第41号墓地第58号墓(100-2)



第1号墓地表採(25-9)



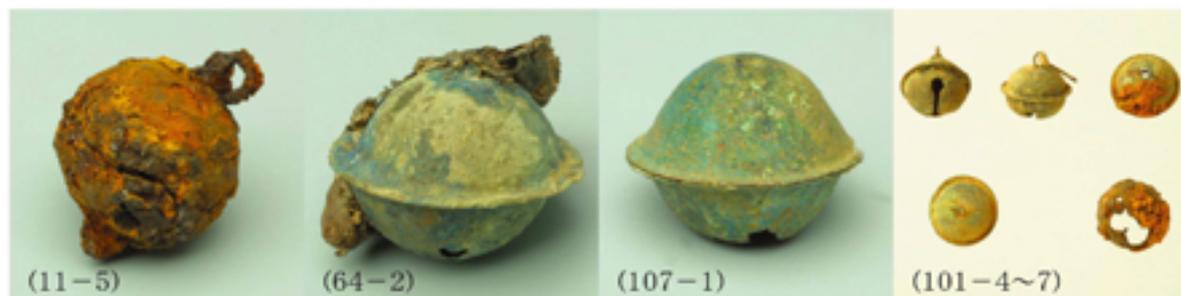
第1号墓地第2号墓(2-4)



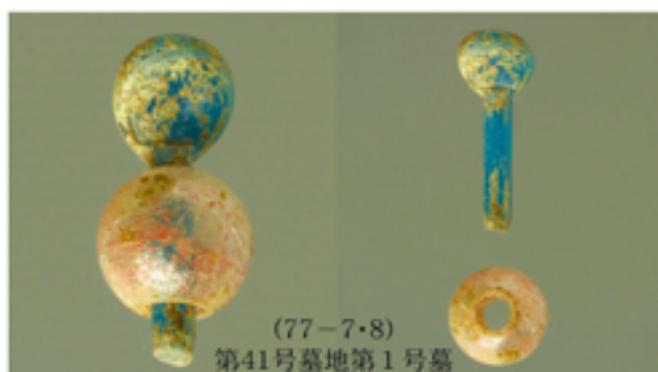
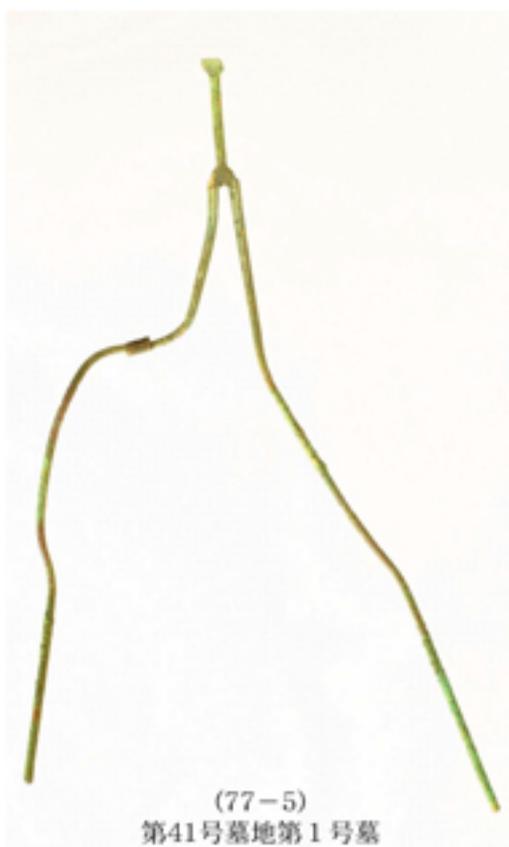
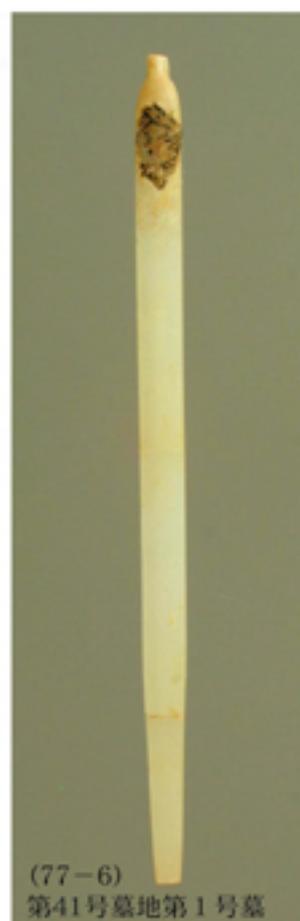
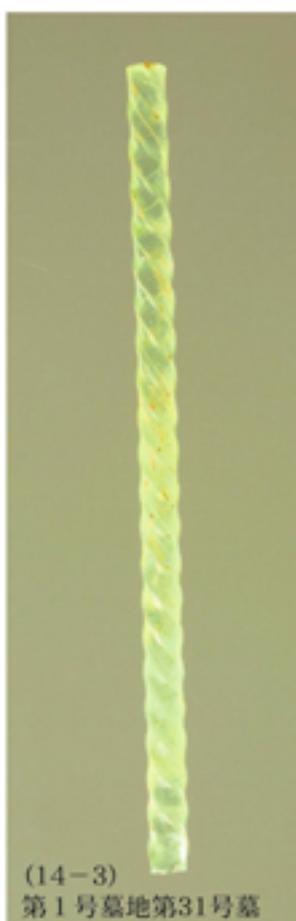
(3-1) 第1号墓地 第4号墓
 (5-1) 第1号墓地 第7号墓
 (29-1) 第2号墓地 第4号墓
 (38-1) 第40号墓地 第23号墓
 (45-1) 第40号墓地 第29号墓



(14-4) 第1号墓地 第31号墓
 (33-1) 第40号墓地 第2号墓
 (11-8) 第1号墓地 第23号墓
 (20-4) 第1号墓地 第39号墓



(11-5) 第1号墓地第23号墓
 (64-2) 第40号墓地第72号墓
 (107-1) 第41号墓地第61号墓
 (101-4~7) 第41号墓地第59号墓





第1号墓地 第9号墓(7-7)



第2号墓地 表採(32-2)



第2号墓地 表採(32-3)

図版27 原田第1・41号墓地 人形・おはじき・釦・ハゼ () 内数字は挿図番号



第41号墓地 第28号墓(87-3)



第41号墓地 第59号墓 (第102~104図)



第41号墓地 第12号墓 第1号墓地 第9号(7-8・9)

第1号墓地 第55号墓(22-7・6・2)



第41号墓地 第31号(88-7~9)

第1号墓地 第55号墓(22-4・3・5)



第1号墓地 第7号墓(5-2)



第1号墓地 第23号墓(11-6・7)



第1号墓地 第27号墓

第1号墓地 第27号墓

(図無し)



第1号墓地 第35号墓(18-4)

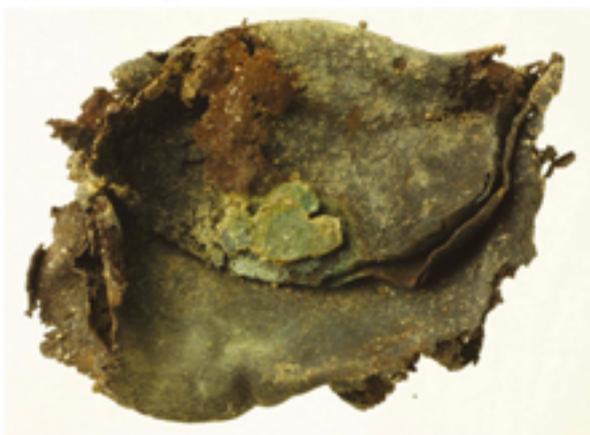


第1号墓地 第27号墓

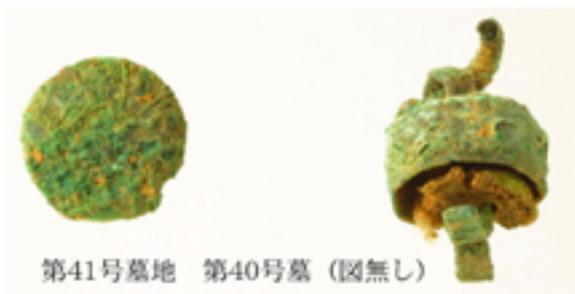
第1号墓地 第27号墓



第41号墓地 第78号墓 (図無し)



第1号墓地 第35号墓(18-3)



第41号墓地 第40号墓 (図無し)



第40号墓地 第84号墓

(72-7)



第41号墓地 第78号墓(112-3・4)



第41号墓地 第78号墓 (112-5)

図版29 原田第1・41号墓地 皮革製品・青銅製品・ゴム製品 ()内数字は挿図番号



第41号墓地 第69号墓



第41号墓地 第69号墓



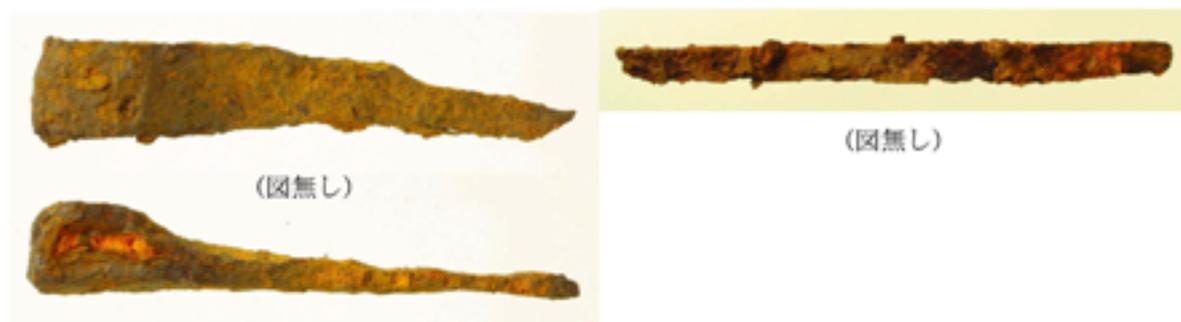
第1号墓地 第9号墓(7-3)



第1号墓地 第9号墓(7-4)



第1号墓地 第9号墓(7-5・6)



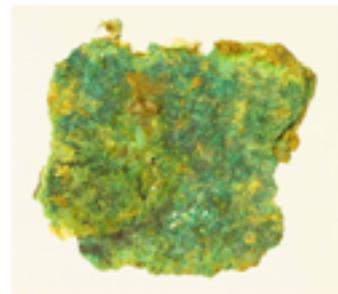
全て 第41号墓地 第59号墓



第40号墓地 第44号墓(55-4~11)



第40号墓地 第44号墓(55-3)



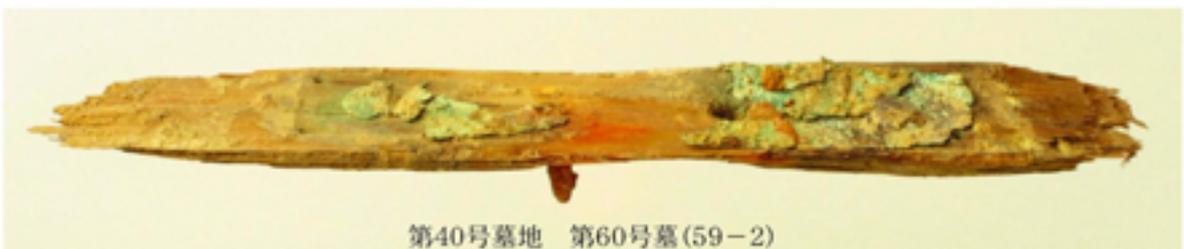
第40号墓地 第17号墓(35-4)



第40号墓地 第22号墓(37-7)



第40号墓地 第22号墓(37-8)

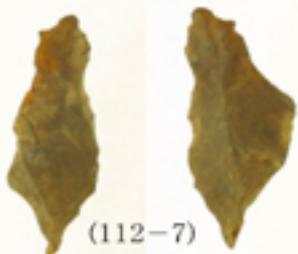


第40号墓地 第60号墓(59-2)

図版32 原田第1・40・41号墓地 火打ち金・石・ローソク・義歯・義眼・眼鏡レンズ
 第41号墓地 第78号墓(112-6)



第41号墓地 第78号墓



(112-7)

第41号墓地 第78号墓



(112-8)



(図無し) (88-4)

第41号墓地 第3・29号墓



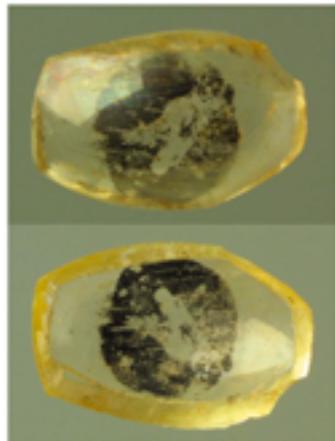
第1号墓地 第2号墓(2-2)



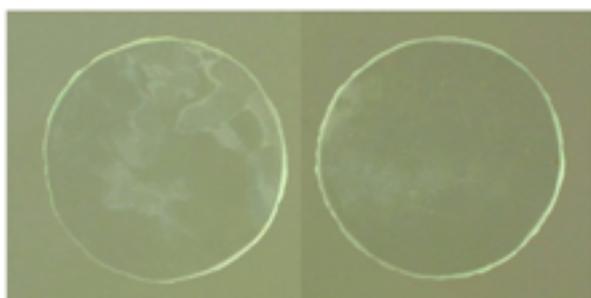
第1号墓地 第2号墓
(2-3)



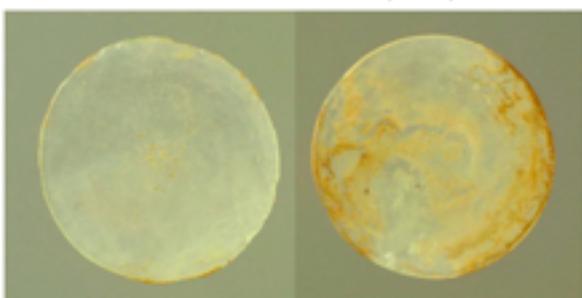
第41号墓地 第6号墓(79-2)



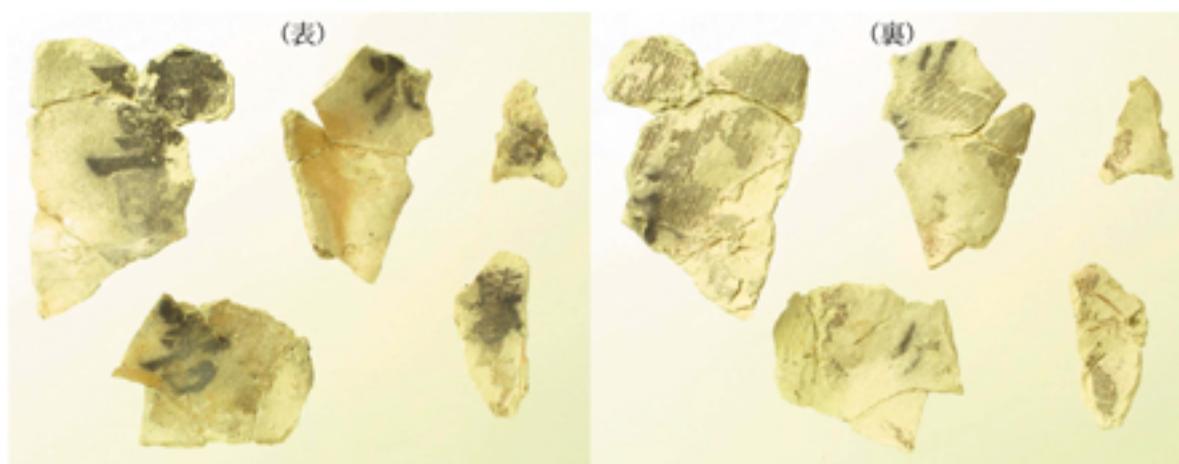
第1号墓地 第9号墓
(7-2)



第1号墓地 第6号墓(4-3・4)



第40号墓地 第75号墓(66-2・3)



第1号墓地 第1号藏骨器出土墨書(23-3~8)



第41号墓地 第8号墓出土墨書墓碑石 (図無し)

図版34 原田第41号墓地 文字資料
第41号墓地 第40号墓出土板片
() 内数字は挿図番号
(図無し)



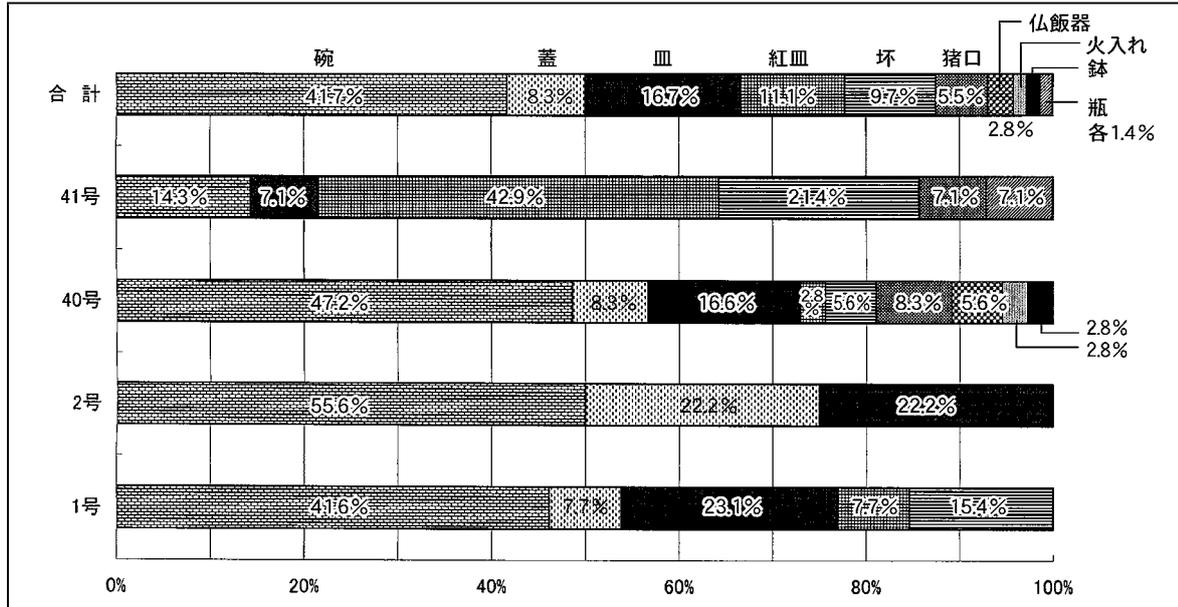
第Ⅲ章 原田第1・2・40・41号墓地の総括

第1節 陶磁器と漆器について (第118図、第16～19表)

原田第1・2・40・41号墓地からは、Ⅱ章で述べた通り多種多様の遺物が出土した。特に、棺に使用された甕や被葬者への副葬品として、また出産後の胞衣容器として転用された陶磁器類が多く出土している。また、漆器の漆膜も出土しており、ここでは副葬品としての陶磁器と漆器について考えてみたい。

第16表 副葬陶磁器内訳表 (数字のみは肥前産、○囲みは肥前系、アミはその他産)

墓地	墓	形	熊	陶	磁										合計	合計	時期区分(大橋編年)					備考					
					碗	碗	蓋	皿	紅皿	杯	猪口	仏飯	火入	鉢			瓶	計	I	II	III		IV	V	近		
1	1	正方形	甕棺						①							1	1									甕V期	
	22	正方形	正方形縦棺?		①		①									2	2									皿は関西系の可能性有	
	23	正方形	正方形縦棺		①		①									2	2									皿は肥前系の可能性有	
	27	正方形	正方形縦棺		①					1						2	2										
	33	正方形	甕棺		①		①									2	2										甕V期
	39	正方形	正方形縦棺		①		①			1						3	3										
41	正方形	正方形縦棺		①											1	1											
1号墓地 器種別合計				0	6	1	3	1	2	0	0	0	0	0	0	13	13									陶器0(0%) 磁器13(100%)	
2	2	長方形(短)	長方形横棺(短)		2	1										3	3									碗・蓋セット	
	3	正方形	正方形縦棺?		2	1	1									4	4									碗・蓋セット	
	5	長方形(短)	正方形縦棺		1		1									2	2									皿は有田産	
2号墓地 器種別合計				0	5	2	2	0	0	0	0	0	0	0	9	9										陶器0(0%) 磁器9(100%)	
40	19	長方形(短)	長方形横棺(短)				1									1	1										
	24	正方形	不明		1						1					2	2										
	25	正方形	正方形縦棺		①											1	1										
			1号壺棺													1	1										仏飯器は瀬戸・美濃系
	26	長方形(長)	長方形横棺(長)		①											1	1										
	27	正方形	正方形縦棺		①											1	1										
	28	正方形	正方形縦棺		1	①					1		1			4	4										猪口・火入れは破片
	32	正方形	不明						1							1	1										
	37	正方形	正方形縦棺		①						1					2	2										
	38	正方形	正方形縦棺			1										1	2										碗は関西系
	39	正方形	正方形縦棺		①	①							①			3	3										
	40	正方形	正方形縦棺		①											1	1										
	41	正方形	正方形縦棺		①		①									2	2										
	42	正方形	桶棺				1	1								2	2										
	44	正方形	正方形縦棺				1									1	1										皿は破片・波佐見産
	46	正方形	正方形縦棺		①		1									2	2										
	47	正方形	不明							①						1	1										
	67	正方形	正方形縦棺		1											0	1										碗は破片
	69	正方形	不明													0	1										碗は破片・関西系
	71	正方形	桶棺			②										2	2										
	72	正方形	桶棺?							1						1	1										
	73	正方形	正方形縦棺		1											0	1										
	76	正方形	甕棺					①								1	2										甕はV期、碗は小代産
	77	正方形	桶棺?			1										1	1										
78	正方形	桶棺			1										1	1										碗は破片	
81	正方形	不明			1										1	1											
84	正方形	正方形縦棺		①	1										2	2											
40号墓地 器種別合計				5	17	3	6	1	2	3	2	1	1	0	36	41										陶器5(12.2%) 磁器36(87.8%)	
41	1	正方形	甕棺						1	①						2	2									甕はV期	
	5	不整形正方形	桶棺													①	1	1									
	16	正方形	桶棺						①							1	1										
	17	正方形	桶棺						①							1	1										
	22	正方形	桶棺						①							1	1										
	27	正方形	甕棺						①	①						2	2									甕はV期	
	28	正方形	正方形縦棺						①		①					2	2									猪口は小猪口	
	30	正方形	桶棺													1	1										
	36	正方形	正方形縦棺		①											1	1										
	45	正方形	不明		①				①							2	2										
41号墓地 器種別合計				0	2	0	1	6	3	1	0	0	0	1	14	14										陶器0(0%) 磁器14(100%)	
1・2・40・41号墓地器種別合計				5	30	6	12	8	7	4	2	1	1	1	72	77										陶器5(6.5%) 磁器72(93.5%)	



第118図 副葬磁器器種比率グラフ

第16表は、陶磁器が副葬された墓と陶磁器の内訳を表わしたものである。取り扱う陶磁器の数は77点と少ないが、下記のことが確認できる。

- ① 陶器と磁器の区分では、陶器5点・磁器72点と圧倒的に磁器が多い。
- ② 陶器は、碗に限られ（5点）、全て第40号墓地出土である。
- ③ 第118図は、出土した磁器の器種の割合を墓地毎および全体で棒グラフにしたものである。磁器の内訳は、碗が全体の41.7%を占め最も多く、次に皿（16.7%）・紅皿（11.1%）と続く。特に碗と皿の組合せが目につき第1号墓地3例・第2号墓地2例・第40号墓地3例であるが、第41号墓地には無い。
- ④ 第41号墓地における紅皿の出土（副葬）率は、42.9%と著しく高い。
- ⑤ 蓋を伴う碗は、第2号墓地の白磁碗蓋2例に限られており、他の蓋は共伴の碗とはセットにならない。
- ⑥ 陶磁器の生産年代を大橋編年（註1）で見ると、第2号墓地のものが最も古くⅢ・Ⅳ期に限られる。次に、第40号墓地では一部明治期以降のものもあるが、Ⅳ・Ⅴ期のものが多い。これに対し、第1・41号墓地ではⅣ・Ⅴ期の両期のものがあるが、主体はⅤ期の磁器である。
- ⑦ 陶磁器の生産地については、第2号墓地のものは肥前産（9点）に限られている。第40号墓地では肥前産（20点）と肥前系（17点）が半々であり、他に関西系（2点）・瀬戸美濃系（1点）・熊本産（1点）が少数ながら出土している。これに対し、第1・41号墓地のものはほぼ全て肥前系の磁器で占められている。
- ⑧ ⑥・⑦から、各墓地における副葬陶磁器の生産年代と生産地がほぼ同じ様相であることは、Ⅲ・Ⅳ期の肥前産のみ→Ⅳ・Ⅴ期の肥前産・肥前系+外来系（産）→Ⅴ期の肥前系のみという流れを表している。この流れをそのまま原田宿における陶磁器の流入状況と直結させることには躊躇する。しかし、少なくとも原田宿で使用された陶磁器の供給元は、Ⅳ期を境に、それまでの肥前地域から他地域へも広がっていった傾向が窺うことができる。
次に、陶磁器と墓形態との関係をもてみたい。

- ⑨ 第17表は、陶磁器を副葬した土葬墓46基（註2）の墓壙と棺の形態を整理したものである。正方形墓壙の棺形態では正方形縦棺（21）・桶棺（10）・甕棺（5）の座棺が80%余りを占めるのに対し、寝棺である長方形横棺は長短合わせてもたったの3基であり陶磁器の副葬率が著しく低い。
- ⑩ 第18表は、調査した土葬墓218基の陶磁器副葬率を墓壙と棺形態ごとに表したものである。4ヶ所全体の副葬率は21.1%とやや低い感じを受け、正方形墓壙と長方形墓壙の副葬率の比較でも22.1%と14.28%と大差なく低い。しかし、墓地別にみると墓数は少ないが第2号墓地は42.85%と最も高く、次いで第40号墓地が30.95%と全体平均よりも高い副葬率を示している。特に第40号墓地においては、正方形墓壙の桶棺・甕棺・正方形縦棺のいずれも26～54%の副葬率を示すが、長方形墓壙の短い長方形横棺での副葬率は6.66%と著しく低い。
- ⑪ ⑨・⑩から、土葬墓における陶磁器副葬の開始時期は、埋葬形態が寝棺から座棺に変換する時期とほぼ重なると思う。

第17表 陶磁器副葬土葬墓内訳表

墓壙形態	棺 形 態	
正方形 42基 91.30%	甕 棺	5基 10.87%
	正方形縦棺	21基 45.65%
	桶 棺	10基 21.74%
	不 明	6基 13.04%
長方形 4基 8.70%	正方形縦棺	1基 2.17%
	長方形横型(長)	1基 2.17%
	長方形横型(短)	2基 4.36%
	不 明	0基 0%
墓壙合計 46基	棺 合 計	46基 100%

第18表 墓形態別陶磁器副葬率一覧表

墓壙形態	棺 形 態	4ヶ所全体		第1号墓地(52基)		第2号墓地(7基)		第40号墓地(84基)		第41号墓地(75基)	
正方形	甕 棺	42/190 22.10%	5/40 12.50%	7/51 13.72%	2/12 16.66%	1/3 100%	0/1 0%	24/62 38.70%	1/3 33.33%	10/74 13.50%	2/24 8.33%
	正方形縦棺		21/83 25.30%		5/29 17.24%		1/1 100%		13/24 54.17%		2/29 6.89%
	桶 棺		10/30 33.33%		0 —		0 —		5/19 26.32%		5/11 45.45%
	不 明		6/37 16.21%		0/1 0%		0/1 0%		5/16 31.25%		1/10 10%
長方形	正方形縦棺	4/28 14.28%	1/2 50%	0/1 0%	0 —	2/4 50%	1/1 100%	2/22 9.09%	0/1 0%	0/1 0%	0 —
	長方形横棺(長)		1/1 100%		0 —		0 —		1/1 100%		0 —
	長方形横棺(短)		2/17 11.76%		0/1 0%		1/1 100%		1/15 6.67%		0 —
	不 明		0/8 0%		0 —		0/2 0%		0/5 0%		0/1 0%
各 墓 地 比 率		46/218	7/52 13.46%	3/7	26/84	10/75 13.33%					

第1号甕棺は除く

ここで問題となるのが、陶磁器を副葬しない墓の副葬容器のことである。原田第1・2・40・41号墓地からは、陶磁器以外の容器として漆器が出土している。残存状態は著しく悪く、漆膜しか残っていないが、出土状況から漆器の副葬は確実である。第19表は、漆膜が出土した土葬墓16基の一覧表である。この表から下記の事が分かる。

- ⑫ 16基の棺形態の内訳は、正方形縦棺9基・桶棺5基・短い長方形横棺1基・不明1基であり、座棺に多く副葬されている。
- ⑬ 陶磁器と一緒に副葬されているのが6基あるが、他の10基は棺外の土師器皿を除けば漆器のみの副葬である。

第19表 漆膜出土土葬墓一覧表

墓地	墓	墓壙形態	棺形態	共伴遺物	備考	墓石・墓籍からの没年
1	4	正方形	正方形縦棺	銭10、毛抜き1、櫛1	最新銭は新寛永	
	7	長方形(短)	長方形横棺(短)	銭6、毛抜き1、リング1	最新銭は新寛永	
	29	正方形	正方形縦棺			
2	4	正方形	正方形縦棺	銭6、毛抜き1、木製数珠玉1	最新銭は新寛永	推定寛政11(1799)年
40	22	長方形(短)	正方形縦棺	銭6、板片、金具	最新銭は新寛永	延享1(1744)年
	23	正方形	正方形縦棺	銭6、毛抜き1	最新銭は鉄銭	
	28	正方形	正方形縦棺	銭6、磁器碗2、磁器猪口1、 青磁火入れ1、土師器皿2	最新銭は新寛永 最新陶磁器は18世紀代	
	29	正方形	桶棺	銭6、毛抜き1	最新銭は新寛永、不明銭1有	
	36	正方形	桶棺	銭6、櫛1、土師器皿1	最新銭は新寛永	寛政11(1799)年
	41	正方形	正方形縦棺	磁器碗1、白磁皿1	最新陶磁器は1820~60年代	
	45	正方形	桶棺	土師器皿片2		
	46	正方形	正方形縦棺	銭11 磁器碗1、磁器皿1	最新銭は新寛永 最新陶磁器は1800~40年代	
	57	正方形	桶棺			
	71	正方形	桶棺	銭6 磁器碗2、土師器皿片10	最新銭は鉄銭 最新陶磁器は1820~60年代	推定天明2(1782)年
41	45	正方形	—	磁器碗1、白磁紅皿1	最新銭は鉄銭	寛政6(1794)年
					最新陶磁器は18世紀前半	
					最新陶磁器は1780~1860年代	

- ⑭ 陶磁器以外の副葬品をみると、六道銭と毛抜きとの組合せが多い。特に、毛抜きは出土総数5点全てが漆器・六道銭と一緒に副葬されている。また、11基が六道銭と組み合わせられており、うち8基の最新銭種は新寛永であり、他の3基には、鉄銭が含まれている。
- ⑮ ⑫・⑬から、漆器は陶磁器同様、生前愛用していた日常容器を副葬品としたものと考えられる。寝棺にも座棺にも副葬例はあり、漆器のみの場合と陶磁器と共伴する場合とがあり、古くは漆器のみから、後に陶磁器と共伴し、新しくは陶磁器のみの副葬といった流れを考えたい。このことは、漆器は腐食して残りにくいことを考えると、副葬容器を出土していない短い長方形横棺に、漆器の副葬を想定するものである。
- ⑯ ⑭から、第19表の漆器は新寛永の初鋳年1697年を遡ることはなく、漆器のみの副葬は18世紀初め頃から鉄銭を含む18世紀中頃で、陶磁器と共伴するのはその陶磁器の生産年代から18世紀後半から19世紀後半と考え、漸次陶磁器へと変わっていくと考える。このことは、当然日常容器の変化と連動しているものと考えられる。

第2節 六道銭について (第119図、第20表)

原田第1・2・40・41号墓地から出土した六道銭についての報告は、既に櫻木晋一氏より詳しく行われている。(文2)ここでは、櫻木氏の報告内容に基づいて、六道銭の銭種の組合せと墓形態との対比を試みてみたい。

第20表は、銭種の内訳と墓形態を表したものである。六道銭が副葬されていた土葬墓67基から出土した銭貨の総数は366枚である。その内訳は、渡来銭3枚・古寛永(1637年初鋳)47枚・文銭(1668年初鋳)35枚・新寛永(1697年初鋳)187枚・寛永鉄銭(1739年初鋳)60枚・その他11枚および不明23枚である。新寛永が最も多く51%強を占め、次いで鉄銭(16.4%)・古寛永(12.8%)

第20表 六道銭の内訳と墓形態

墓地	遺構	総枚数	銭種						その他	不明	墓形態	
			渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永鉄銭	墓壇形態			棺形態	
第1号墓地	4号墓	10		1		9				方形	正方形縦棺?	
	7号墓	6		2	2	2				長方形	長方形横棺(短)	
	18号墓	6		1	1	2	2			方形	正方形縦棺	
	22号墓	6		1	1	4				方形	正方形縦棺?	
	23号墓	6				5	1			方形	正方形縦棺	
	27号墓	7		1		3	3			方形	正方形縦棺	
	33号墓	1				1				方形	甕棺	
	34号墓	4		1		1	2			方形	正方形縦棺	
	39号墓	5				5				方形	正方形縦棺	
第2号墓地	1号墓	6		2		2			2	方形	甕棺	
	2号墓	6		2	1	3				長方形	長方形横棺(短)	
	3号墓	6		1		5				方形	正方形縦棺?	
	4号墓	6		1		5				方形	正方形縦棺	
	5号墓	6		3		3				長方形	正方形縦棺	
	6号墓	5		2		3				長方形	?	
第40号墓地	2号墓	6			1	3			2	長方形	長方形横棺(短)	
	22号墓	6		2	2	2				長方形	正方形縦棺	
	23号墓	6		1	1	2	1		1	方形	正方形縦棺	
	25号墓	6				3	1		2	方形	正方形縦棺	
	27号墓	6		1		5				方形	正方形縦棺	
	28号墓	6			1	5				方形	正方形縦棺	
	29号墓	6		1		4			1	方形	桶棺	
	35号墓	6				2	1		3	方形	桶棺	
	36号墓	6			2	4						
	37号墓	4				3				仙台通宝1	方形	正方形縦棺
	38号墓	6		1	2	3					方形	正方形縦棺
	39号墓	1		1							方形	正方形縦棺
	40号墓	6					6				方形	正方形縦棺
	42号墓	1								文久永宝1	方形	桶棺
	43号墓	6		1	1	3	1				方形	?
	46号墓	11		3	5	3					方形	正方形縦棺
	55号墓	1			1						方形	正方形縦棺
	61号墓	6				4	2				方形	正方形縦棺
	64号墓	6			2	2	1			1	方形	正方形縦棺
	71号墓	6				5	1				方形	桶棺
	72号墓	6				1	5				方形	桶棺?
	73号墓	6			1	3	1			1	方形	正方形縦棺
	74号墓	6	永業通宝1	1	2	2					方形	桶棺
	75号墓	6		4	1					1	方形	甕棺
76号墓	1				1					方形	甕棺	
77号墓	3		1							方形	桶棺?	
78号墓	3				3					方形	桶棺	
79号墓	1				1					方形	正方形縦棺	
81号墓	6				6					方形	?	
82号墓	6		2		4					方形	桶棺?	
83号墓	6				2	4				方形	正方形縦棺	
84号墓	6				6					方形	正方形縦棺	
第41号墓地	2号墓	6					6			方形	正方形縦棺	
	7号墓	6		1	1	4				方形	甕棺	
	9号墓	6		1	1	3	1			方形	甕棺	
	20号墓	6				5				文久永宝1	方形	正方形縦棺
	26号墓	6					6				方形	?
	27号墓	6					3		3		方形	甕棺
	36号墓	5				3	2				方形	正方形縦棺
	37号墓	6				5	1				方形	正方形縦棺
	40号墓	6		1	1	4					方形	正方形縦棺
	44号墓	6		3		3					方形	正方形縦棺
	49号墓	6			1	5					方形	正方形縦棺
	51号墓	6							6		方形	甕棺
	53号墓	5				1				文久永宝3 天保通宝1	方形	正方形縦棺
	54号墓	6					6				方形	正方形縦棺
	55号墓	6	元豊通宝1		2	3					方形	正方形縦棺
	58号墓	2								一銭青銅貨1 五銭白銅貨1	方形	甕棺
59号墓	6		1	1	4					方形	正方形縦棺	
68号墓	6		2		4					方形	正方形縦棺	
69号墓	6	皇宗通宝1			5					方形	正方形縦棺	
78号墓	8		1	1	3	3				方形	正方形縦棺	
		366	3	47	35	187	60	11	23			

・文銭（9.6%）と続き、渡来銭は1%にも満たない。なお、不明銭は全て青銅貨である。

渡来銭の内訳は、皇宋通宝（1039年初鑄）1枚・元豊通宝（1078年初鑄）1枚・永樂通宝（1408年初鑄）1枚である。また、その他の銭の内訳は、文久永宝（1768年初鑄）7枚・仙台通宝（1784年初鑄）1枚・天保通宝（1835年初鑄）1枚・近代銭2枚である。なお、銭貨が出土した土葬墓67基のうち11基には不明銭が含まれており、また、1枚しか出土していないものも6基あるため、六道銭の銭種の組合せの検討としてはそれらを除いた50基を対象とした。（註3）

第20表の銭種の内訳を検討すると下記のことが認められる。

- ① 渡来銭・古寛永・文銭のいずれかを含むものは31組あるが、いずれも単一銭種のみのもではなく、また、その銭種が最新としてそれより古い銭種と組み合わせることはない。必ず新寛永以降の新しい銭種と組み合わせられている。
- ② ①のうち24組は、新寛永を最新銭種として組み合わせる六道銭であり、その時期的上限は新寛永の初鑄年である1697年に置くことができる。（A・B類）
- ③ また、新寛永のみでセットをなす六道銭が4組あり、その上限も②と同じであるが、②よりは新しい組合せであろう。（C類）
- ④ なお、②の24組のうち16組は、新寛永が組合せの主体をなしており（註4）、②から③への過渡的な位置付けができる。（B類）
- ⑤ 次に、鉄銭を最新銭種として組み合わせる六道銭が13組あり、その上限は鉄銭の初鑄年である1739年に置くことができる。（D～F類）
- ⑥ ⑤の13組の組合せの内訳の詳細をみると、鉄銭は渡来銭と合わさることは無い。古寛永+文銭+新寛永との組合せ（D類）が6組、新寛永との組合せ（E・F類）が7組あり、両者の間に時間差を感じる。
- ⑦ 鉄銭のみでセットをなす六道銭が4組あり、その上限も⑤と同じであるが、⑥よりは新しい組合せである。（G類）
- ⑧ さらに、新寛永と鉄銭との組合せ7組の枚数を比較した場合、新寛永に主体がある六道銭（E類）5組と、鉄銭に主体がある六道銭（F類）2組に分かれる。これは、⑥から⑦への漸次的位置付けと考える。
- ⑨ 文久永宝を最新銭として組み合わせる六道銭が4組（H～K類）あり、その時期的上限は文久永宝の初鑄年である1866年に置くことができる。特に4組のうち3組の組合せには、新寛永が含まれている。（I～K類）
- ⑩ 近代銭は、大正1～4年鑄造（註5）の青銅製一銭1枚と明治23年鑄造の白銅製五銭1枚であり、2枚だけで合計六銭とした六道銭である。（L類）

以上①～⑩から、原田第1・2・40・41号墓地の六道銭をその銭種の内訳からA～L類の12通りの組合せに分類した。第119図は、A～L類の推移と、各類の六道銭が出土した墓の番号と形態を表したものである。本図から下記のことが把握できる。

- ① 大きく、新寛永を最新銭種とする新寛永グループと鉄銭を最新銭種とする鉄銭グループおよび文久永宝を最新鉄種とするグループの3つに大別できる。
- ② 時間軸としては、上限を1697年に置く新寛永グループが古く、次に上限を1739年に置く鉄銭グループが続き、上限を1866年に置く文久永宝グループが新しい。また、新寛永グループではA→B→C、鉄銭グループではD→E→F→G、文久永宝グループではH→I

→ J → K と相対的な推移が考えられる。

- ③ 墓地毎に概観すると、第1号墓地は新寛永Aから鉄銭Eまで連続して認められるが、第2号墓地は新寛永A・Bに限られ、特にB類に集中している。第40号墓地は、新寛永Aから仙台通宝Jまで、第41号墓地は、新寛永Bから一銭Lまで認められ、両墓地とも長く営まれていたことが理解できる。
- ④ 墓形態と対比してみると、短い長方形墓壙と短い長方形横棺は新寛永A・Bに限られ、短い長方形墓壙に座葬用の正方形縦棺も新寛永Aに限られており、両者とも古い墓形態である。また、正方形墓壙に座葬用の正方形縦棺や桶棺にも古くは新寛永Aが認められ、甕棺も新寛永Bが認めることができる。
- ⑤ ③・④から、新寛永グループにおいて葬法の変化が認められ、A・B類段階は棺形態が寝棺から座棺への変革期であり、C類以降は座棺のみである。特に、第2号墓地は小規模ながら、この葬法の変革期に営まれた墓地であることがわかる。

以上、六道銭の組合わせと墓形態とを対比させてみた。得られた内容の時間軸はあくまでも最新銭の初鑄年を上限とするもので、その推移も銭種の新旧・枚数で整理したものであり、各墓の年代は絶対的なものではない。しかしながら、相対的な六道銭の組合せと推移からでも葬法の変化を把握できたのは、一定の収穫であった。

第3節 人骨調査について (第120図、第21表)

原田第1・2・40・41号墓地には174体の人骨が残っていた。人骨の調査については、九州大学医学部の多大な協力が得られ、現地における詳細な調査を実施することができた。具体的には、単に取り上げることはせず、人骨の出土状態(=葬位)の写真撮影を当教育委員会が行い、その後詳細な実測図の作成と(註6)人骨の取り上げを中橋孝博・土肥直美両氏が行なった。特に、中橋・土肥氏が行なった作業には専門的な観察力が伴っており、両氏によって作成された図面には細かい註記が残されていた。その中には考古学や形質人類学以外の問題として考えなければならない指摘もあった。ここでは、頭髪と母子埋葬の2点について考えてみたい。

1. 頭髪について

まず、頭髪は21基の土葬墓において人骨とともに残っていた。その内訳は第21表の通りである。21体の人骨出土状態実測図(S=1/5)には、髪が描かれていない図面3枚、髪が描かれている図面11枚、髪を描いて髪についての説明を記した図面7枚がある。特に、髪の説明を記したもののうち、第40号墓地の第6・60・68号墓人骨の3体の図面には、髪の出土位置から「髪は自然に抜け落ちたものではなく、あらかじめ切って置いたものとする」との観察文が記されている。この頭髪の不自然な出土状況については調査時にも指摘を受けたため、関連資料の調査を行なった。その結果、筑紫野市内の葬制の1つとして「妻は夫が死んだら後家髪にする。切った髪は紙に包んで棺に入れた」との民俗調査報告例が確認できた。(文3)特に第40号墓地第68号墓の被葬者は男性であったため、民俗例の検証が必要となった。

第21表 頭髪残存人骨一覧表

墓地	墓	棺形態	人 骨			毛 髪	
			埋葬姿勢	性別	年齢	血液型	図面の注記内容
1	33	甕棺	立膝座葬	女	熟年	BかAB型	図に表現あり
40	34	甕棺	立膝座葬	女	成年	B型	図に表現あり「頭蓋に多量の毛髪」
41	1	甕棺	立膝座葬	女	若年	AB型	図に表現あり
	3	甕棺	立膝座葬	男	熟年	A型	図に表現あり
	6	甕棺	立膝座葬	女	熟年	AB型	図に表現あり「マゲは、手骨・右前腕などの下に位置し、右肩骨の上ののっていたので頭から落ちたとは考え難く、最初から切って、腰のあたりに置いて埋葬したと考えられる」
	8	甕棺	立膝座葬	男	成年	O型?	なし
	11	甕棺	立膝座葬	女	若年	A型	図に表現あり
	18	正方形縦棺	立膝座葬	女	若年	B型	図に表現あり「右膝に髪」
	19	甕棺	立膝座葬	女	熟年	A型	図に表現あり
	21	正方形縦棺	立膝座葬	女	成年	A型	図に表現あり「毛髪は左上腕骨に接している」
	22	桶棺	立膝座葬	男	熟年	AB型	図に表現あり
	23	甕棺	立膝座葬	女	熟年	A型	図に表現あり
	44	正方形縦棺	立膝座葬	女	熟年	AB型	図に表現あり
	47	甕棺	立膝座葬	女	成年	BかAB型	図に表現あり「頭の下に大量の髪」
	52	甕棺	立膝座葬	男	老年	B型	なし
	54	正方形縦棺	立膝座葬	女	熟年	AB型	図に表現あり
	55	正方形縦棺	立膝座葬	女	熟年	B型	なし
	58	甕棺	立膝座葬	女	成年	O型	図に表現あり「髪とははなれて、右脇腹あたりからクシ」
60	正方形縦棺	立膝座葬	女	熟年	AB型	図に表現あり「毛髪左膝近くに残る 頭との位置関係からみて、自然に抜け落ちたとは考えにくく、あらかじめ切って置いたのでは?」	
62	正方形縦棺	立膝座葬	女	成年	B型	図に表現あり	
68	正方形縦棺	立膝座葬	男	成年	B型	図に表現あり「髪は左上腕の、頭から離れた位置にたばねた形で置かれていた。あらかじめ切ったものを置いたと考えるのが自然」	

このため、九州大学医学部を通して法医学教室永田武明氏と福岡県警察科学捜査研究所林葉康氏に頭髪の精密検査を依頼した。判断基準としては、髪が被葬者自身のもので死後自然に抜け落ちたものであれば毛根が残り、納棺時にあらかじめ断髪したものであれば切断痕が確認できるはずであった。しかしながら、現地での毛髪の取り上げ方やその後の保存方法に難があり、調査した頭髪の端部が乱れていて明確にできなかった。

また、頭髪については近縁関係検査のための血液検査も行ったが、限られた資料のため原田宿における近縁関係の検索とまではいかなかった。

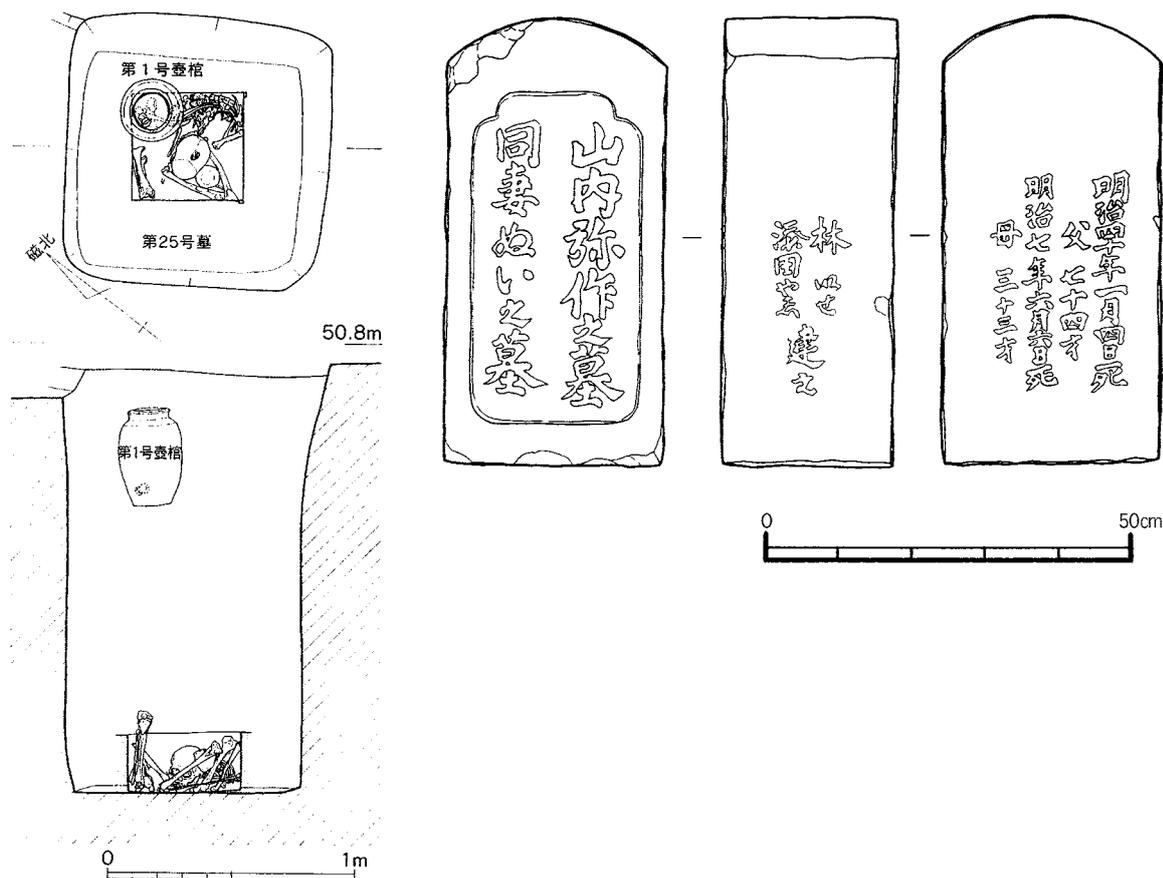
2. 母子埋葬について

原田第40号墓地において、1つの墓壙に2つの棺を埋葬している土葬墓を1基検出した（第120図左）。発掘当初は、単に重複した別墓と解していた。しかし残存した人骨の調査から、第25号墓の正方形縦棺の被葬者は成年女性であり、第1号壺棺の被葬者は性別不明の乳児であることがわかった。成年の年齢は20～39歳にあたるため、0～1歳の乳児との関係が問題となった（註7）。

墓石の調査から、第25号墓に伴う墓石は第14号墓石（第120図右）であり、その墓碑銘から第25号墓の被葬者は明治7年に33歳で死亡した山内ぬいと考えられる。墓籍・墓籍地図の検証でも、死亡年月日に違いはあるが（註9）、墓籍地図上の山内ヌイ（註10）の墓の位置は第25号墓および第14号墓石の位置とほぼ一致している。また、第14号墓石には、ぬいの夫である弥作の墓碑も刻まれており、夫婦墓の墓石である（註11）。墓石の裏面には「父」・「母」という表記があり、2人に子供がいたことが確認できる。墓石の建立者である林いせと添田や志も当然2人の子供であろう。

ここで想定されるのが、「33歳という若さで亡くなった山内ぬいにはいせとや志以外に子供がいたのではないか」、「その子は生まれて早くに亡くなったのではないか」、さらに、「母子の死亡は同日か相前後する近い時期ではないか」ということである。

この点については、先に行った『墓籍』の内容分析に（文4）において確認できた、出産前後の死者



第120図 原田第40号墓地第25号墓・1号壺棺実測図(S=1/30)・第14号墓石実測図(S=1/10)
(文献3第60・75図より改変転載)

の状況が参考になる。確認できた例は明治32年以降のものであるが、死産および出生後早い時期に死亡した子（児）20例が確認できた。このうち、母親が翌日に死亡した「死生子男子」と、母親と同日に死亡した「妊娠10ヶ月」児の記載があり、原田においても出産に伴って母子がほぼ同日あるいは相前後して死亡した事実は確認できる。

この母子の埋葬を第25号墓と第1号壺棺に関連付けるには、現段階では確証に乏しい。しかし、残された人骨の更なる科学的分析—DNA鑑定など—によって、少なくとも第25号墓人骨と第1号壺棺人骨との関係は明らかにされるだろう。また、もし母子である事が科学的に確認できるならば、出産時死亡の母子の埋葬事例として、第25号墓と第1号壺棺は貴重な調査事例となろう。

以上、確証のないままに頭髮と母子埋葬について何としてでも民俗例に結び付けようと試みた。結果、想像の域を出ることができなかった。しかし、取り上げられた骨を室内において分析するだけの従来の人骨調査から一歩踏み出すことはできた。専門知識を有した調査者が現地にいるだけで新たな問題を投げかけられ、形質人類学から別の分野への広がりを感じさせてくれる。

原田第1・2・40・41号墓地の調査については、現地における人骨調査の必要性を強く説かれた九州大学法文学部田中良之氏、調査指導員委員として多くの助言を頂いた故永井昌文氏、そして足かけ3年にわたって現地調査に入っただき本書に報告文を掲載していただいた中橋孝博・土肥直美両氏には、厚く感謝したい。

第4節 墓の被葬者と年代について (第22～30表)

墓地の調査において必ず問われるのは、「いつ亡くなった誰の墓か」という点である。

原田第1・2・40・41号墓地の調査においては、後世の改葬によってその大半が原位置を動いてはいたが、多くの墓石が墓地には残っていた。また、明治22年編纂の旧原田村の『墓籍地図』・『墓籍』が地元伯東寺に保存されていた。このため、「上巻」(文6)においては、第1・2・40・41号墓地の墓石・墓壙・墓籍の対比を試みた(註12)。しかしながら、墓石・墓籍と合致する墓壙は少なかった。

今回は、本書で報告した墓壙出土の副葬品と人骨の内容を参考にして、再度対比を試みるものである。その結果、確定・推定した被葬者と埋葬年代をまとめたものが第22・23表である。

第22表 被葬者・埋葬年代一覧表① (?は推定)

墓地	墓	被葬者	埋葬年代	墓地	墓	被葬者	埋葬年代	墓地	墓	被葬者	埋葬年代
第1号墓地	1	永川(久光)ツナ?	1897年?	第1号墓地	43	老年女性		第40号墓地	25	山内ぬい	1874年
	2	成人	1900年?		44	成人			1壺	乳児	近代
	3	成人			45	釈妙春信女?	1792年?		26	熟年女性	陶磁器V期
	4	熟年男性	1753年?		46	熟年女性	1782年?		27	山内勘次	1857年
	5	成人	1887年?		47	成人	1735年?		28	熟年女性	1818年?
	6	成人	1896年?		48	熟年男性?			29	熟年男性	1787年?
	7	老年男性	1753年?		49	永川升次郎?	1877年?		30	「山内姓成人	
	8	老年男性	1902年?		50	永川ツヤ?	1889年?		32		陶磁器IV期
	9	幼児	1816年?		52	釈妙綜信女?	1782年?		33	熟年女性	
	10	成人			54	成人女性?	1902年?		34	成年女性	1882年?
	11	永川きん?	1887年?		55	熟年男性	1905年?		35	老年女性	1799年?
	12	熟年男性	1906年?		58	成人男性	1767年?		36	成年女性	1799年?
	13	熟年男性			59	成人			37	齡屋延長信女?	1802年
	14	成人女性	1889年?		1		棺篋17世紀		38	山内吉右門妻	1806年
	16	釈妙春信女?	1792年		2	成人	陶磁器IV期		39	熟年男性	1860年?
	17	永川利助?	1788年?		3	熟年男性	陶磁器IV期		40	山内熊吉?	1863年?
	18	熟年男性	1767年?		4	山内弥八	1762年?		41	熟年男性	陶磁器V期
	20		明治・大正		5	山内弥八妻				42	山内茂七?
	21	永川利作?	1814年?		6		新寛永(B類)		43	山内菊次郎?	1766年?
	22	幼児	1843年?	10	成人男性?		44		森内行七母	1787年	
	23	山内登良	1866年	1	熟年男性		46		成人	1858年?	
	24	山内武平妻	1839年	2	成年男性		47		山内弥市妻?	1860年?	
	25	若年	1885年?	4	熟年男性?		49		老年男性		
	26	若年		5	熟年男性	1779年?	50		幼児		
	27	松口和蔵	1857年	6	成人		52		熟年男性		
	28	熟年男性		8	成人男性		55		又次?	1785年?	
	29	山内文衛門?	1839年?	9	熟年女性	1762年?	57		森内ツ子?		
	30	帆足半右工門	1839年	10	老年男性?		58		清太母?	1786年?	
	31	松口和蔵長女	1867年	11	熟年男性		59		熟年男性	1787年?	
	32	成人	1900年?	13	熟年男性		61		熟年女性	鉄銭(E類)	
	33	松口和助後妻	1850年	14	熟年		62		森内平太?	1789年?	
	34	熟年男性	1821年?	15	未成人		64		成年女性		
	35	熟年男性	1804年?	16	熟年女性		65		仲次?	1795年?	
	36	成年男性		17	熟年男性		66		成年女性?		
	37	永川利助妻?	1769年?	18	熟年男性		67			陶磁器IV期	
	38	永川利助母?	1768年?	19	熟年女性	陶磁器IV期	69			陶磁器V期	
	39	熟年女性	1857年?	21	法名釈妙祐位?	1717年?	70		成年		
	40	成年男性	1850年?	22	山内吉次郎	1744年	71		老年男性	1782年?	
	41	山内ウメ	1852年	23	熟年男性	1748年?	72		乳～幼児	1878年?	
	42	永川善九郎?	1733年?	24	山内弥八妻?	1766年?	73		熟年女性?	1794年?	

第23表 被葬者・埋葬年代一覧表②（?は推定）

墓地	墓	被葬者	埋葬年代	墓地	墓	被葬者	埋葬年代	墓地	墓	被葬者	埋葬年代
第40号墓地	74	熟年男性	1860年?	第41号墓地	19	熟年女性	棺蓋19世紀	第41号墓地	48	成年男性	棺蓋19世紀
	75	老年男性	1782年?		20	老年男性	1885年?		49	山内弥平妻	1836年
	76		棺蓋19世紀		21	成年女性	1874年?		51	熟～老年男性	1882年?
	77		明治		22	熟年男性	1870年?		52	老年男性	1903年?
	78	幼児(女子?)	1798年?		23	熟年女性	1900年?		53	熟～老年男性	文久永宝(K類)
	79	成人	1881年?		24	熟年男性			54	山内イセ?	1917年?
	80	山内シヲ?	1886年?		26	小児	1857年?		55	熟年女性	1846年?
	81	山内サト?	1874年?		27	小児	1833年?		56	成人男性	棺蓋19世紀
	82	山内ミツ?	1802年?		28	成人	陶磁器V期		57	成年男性	1899年?
	83	山内利吉	1787年		29	草野作八?	1896年?		58	山内信子?	1918年?
84	老年女性	1825年?	30		陶磁器V期	59	幼児	明治以降			
第41号墓地	1	若年女性	1863年?	31	熟年男性	1899年?	60	熟年女性			
	2	老年女性	1883年?	33	老年男性	1888年?	61	幼児	1854年?		
	3	山内又右衛門	1855年	34	老年女性		62	成年女性			
	4	山内又作?	1873年?	35	熟年男性		63	熟年男性			
	5		陶磁器V期	36	老年女性	陶磁器V期	64	幼児?	1826年?		
	6	熟年女性	棺蓋19世紀	37	乳児	1863年?	66	山内又作?	1873年?		
	7	老年男性	1836年?	38	若年女性		68	成年男子	1863年?		
	8	山内喜七	1833年	39	老年女性	1816年?	69	平山才吉?	1896年?		
	9	山内又六妻	1835年	40	熟年男性	1886年?	70	平山安太郎?	1877年?		
	10	老年男性	1826年?	41	成年女性		73	乳児			
	11	若年女性	棺蓋19世紀	42	熟年女性		74	乳児			
	12	山内岩吉	1895年	43	成年女性	1885年?	75	熟年女性	1832年?		
	16	幼児	1877年?	44	山内カメ	1878年	76	熟年男性	棺蓋19世紀		
	17	幼児	1816年?	45	乳～幼児	1851年?	77	熟年男性			
	18	若年女性	1874年?	47	成年女性	棺蓋19世紀	78	熟年女性	鉄銭(D類)		

また、検討作業用に作成した対比表は第25～30表であり、被葬者と埋葬年代（註13）を推定する上で参考・根拠とした7つの項目を次に列記し、説明する。

- ① 墓形態は、ここではさほど重要ではないが、後に埋葬年代から墓形態の変遷をみるために列記した。
- ② 人骨は、被葬者本人である。本書第IV章において報告された人骨の性別・年齢は、1つの墓壙に複数の墓石・墓籍が比定された場合に被葬者を見極める重要な要素である。たとえ墓石と墓籍の死者名が一致したとしても、人骨の性別・年齢と一致しなければ、墓石と墓籍の一致は意味をなさない。被葬者名が推定・確定できない場合は、人骨の年齢・性別で表記した。
- ③ 墓石は、墓に密着して被葬者名と死亡年月日を銘記した一等資料である。特に死亡時の年齢である行年が記されていれば、人骨年齢との対比に有効である。原位置をとどめて墓壙上に建った状態の墓石であれば、その墓石だけで被葬者・埋葬年代を確定できる。しかし改葬時に倒され、動かされたものが多く、墓石だけで確定するものは少ない。
- ④ 『墓籍地図』・『墓籍』は、各墓地における墓標（木・石標）の配置図とその台帳である。特に、『墓籍地図』は改葬されていない明治22年以前の墓標の配置を記録した図面であり、検出した墓壙の『墓籍』比定に大きな役割を担った。ただし、『墓籍地図』の縮尺率は任意であるため、検出した墓壙との対比は描かれた墓地の形状と確実な墓石の配置を基準に行なった。また、『墓籍地図』に対応して記録された『墓籍』の死者姓名と死亡年月日には読み違えて記録されたものも含まれており、『墓籍地図』・『墓籍』だけで確定することはできないが、推定資料としては重要な資料である。

- ⑤ 陶磁器は、墓石・墓籍との対比ができない墓壙の年代を考えるための資料とするが、参考のため漆器も表記した。陶磁器の年代については、本章第1節において使用した肥前陶磁器の時期区分の年代であり、埋葬年代の比定として使用するにはやや年代幅がある。しかし、副葬陶磁器が生前愛用の日常器であるとの前提に立てば、埋葬年代は副葬陶磁器の生産年代から著しく下るとは考えにくい。
- ⑥ 六道銭は、銭種の組み合わせでおおよその埋葬年代を推定するための参考資料である。本章第2節で12分類した組み合わせは年代的推移も把握できたが、最新銭の初鑄年を上限とする六道銭では埋葬年代を推定するには大略的である。
- ⑦ その他は、墓石以外の墓壙出土の墓碑である。1つは第41号墓地第8号墓出土の墨書銘石であり、もう1つは第41号墓地第3号蔵骨器の墓碑銘プレートである。いずれも確実な資料である。
- ⑧ 備考には、被葬者と埋葬年代を確定・推定した理由を述べた。

しかし、墓碑を伴った2例や、人骨・墓石・墓籍が全て一致した墓壙は、その被葬者と埋葬年代は確定できるが、墓石・墓籍が比定できても人骨と一致しないか不明であれば墓石・墓籍の内容から推定せざるを得ないのが実情であった。次節の棺形態の変遷を検討するための埋葬年代を多く得るために、あえて推定という形をとらざるを得なかった。第24表に示すとおり、被葬者と埋葬年代の両方が確定できたのは229基中19基（8.3%弱）と少ない。このため、第22・23表の内容、特に被葬者に関しては推定の域を出ないものと理解していただきたい。

第24表 被葬者・埋葬年代組合せ内訳表

被 葬 者		埋 葬 年 代	第1号墓地	第2号墓地	第40号墓地	第41号墓地	計
本名・法戒名・親族関係	確 定	確 定	7		6	6	19
		推 定		2			2
	推 定	確 定	1		1		2
		推 定	12		13	7	32
		陶磁器・六道銭の年代から推定					0
		不 明			2		2
人骨	年齢+性別 年齢のみ 性別のみ	推 定	22		19	28	69
		陶磁器・六道銭の年代から推定		2	5	12	19
		不 明	10	1	20	12	43
不 明	陶磁器・六道銭の年代から推定	1	2	5	2	10	
	不 明	1	3	19	8	31	
検 討 し た 墓 数			54	10	90	75	229

第25表 墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表①

墓地	墓形態		人骨		墓石		墓籍・墓籍地図					
	墓塚	棺	性別	年齢	番号	被葬者名	死亡年月日	番号	死者姓名	死亡年月日		
第1号墓	1	正方形	壘棺			18	永川岩(武六後妻) 47歳	明治33年2月16日	59	不詳	宝暦3年8月26日	
						19	永川ツナ 25歳	明治30年1月12日	76	久光ツナ	明治30年2月13日	
						34	釈屋宗口	宝暦3年8月26日	77	永川トリ	明治33年4月13日	
	2	正方形	壘棺	?	成人		18	永川岩(武六後妻) 47歳	明治33年2月16日	59	不詳	宝暦3年8月26日
							19	永川ツナ 25歳	明治30年1月12日	76	久光ツナ	明治30年2月13日
							34	釈屋宗口	宝暦3年8月26日	77	永川トリ	明治33年4月13日
										78	永川イワ	明治33年3月15日
	3	正方形	—		火葬骨(成人)							
	4	正方形	正方形縦棺?	男	熟年							
	5	正方形	壘棺	?	成人		18	永川岩(武六後妻) 47歳	明治33年2月16日	58	永川弥吉	明治20年3月9日
							19	永川ツナ 25歳	明治30年1月12日	59	不詳	宝暦3年8月26日
							34	釈屋宗口	宝暦3年8月26日	75	永川與平	明治29年11月20日
										76	久光ツナ	明治30年2月13日
	6	正方形	壘棺	?	成人		21	永川口(里) 75歳	明治32年3月5日	56	永川弥吉	明治20年3月9日
							36	永川(與)平 5(5)歳	明治29年(10)月29日	59	不詳	宝暦3年8月26日
										75	永川與平	明治29年11月20日
										76	久光ツナ	明治30年2月13日
	7	正方形	壘棺	?	成人		22	永川弥吉 68歳	明治20年3月9日	75	永川與平	明治29年11月20日
							37	釈浄(龍)霊	明和4年6月17日	76	久光ツナ	明治30年2月13日
										81	永川弥八	明治38年10月24日
										60	不詳	宝暦3年8月16日
	8	正方形	正方形縦棺	男	老年					51	永川善六	天保14年7月11日
										79	永川 定	明治35年3月25日
										80	永川末松	明治35年5月6日
										50	永川為次	文化13年6月6日
9	正方形	壘棺	?	幼児					74	城山ユヒ	明治29年3月2日	
									79	永川 定	明治35年3月25日	
									45	永川セシ	享保20年9月29日	
									47	永川弥吉妻	天保15年6月5日	
10	正方形	正方形縦棺	?	成人					48	永川與平妻	元治2年4月19日	
									74	城山ユヒ	明治29年3月2日	
									38	不詳	不明	
									39	永川キン	明治20年1月7日	
11	正方形	壘棺				33	永川ツヤ(與平妻) 70歳	元治2年4月19日	38	不詳	不明	
						43	永川ルイ 20歳	天保15年6月(5)日	39	永川キン	明治20年1月7日	
						44	永川きん(武六妻) 36歳	明治20年1月7日	72	永川ツヤ	明治22年10月28日	
						45	永川ツヤ(武六次女) 6歳	明治22年10月6日	82	永川武六	明治39年5月3日	
12	正方形	壘棺	男	熟年		46	永川(升)次郎 11歳	明治10年4月7日				
						33	永川ツヤ(與平妻) 70歳	元治2年4月19日	38	不詳	不明	
						43	永川ルイ 20歳	天保15年6月(5)日	39	永川キン	明治20年1月7日	
						44	永川きん(武六妻) 36歳	明治20年1月7日	72	永川ツヤ	明治22年10月28日	
13	正方形	正方形縦棺	男	熟年		45	永川ツヤ(武六次女) 6歳	明治22年10月6日	82	永川武六	明治39年5月3日	
						46	永川(升)次郎 11歳	明治10年4月7日				
						33	永川ツヤ(與平妻) 70歳	元治2年4月19日	38	不詳	不明	
						43	永川ルイ 20歳	天保15年6月(5)日	41	不詳	寛政4年7月9日	
14	正方形	正方形縦棺	女	成人		44	永川きん(武六妻) 36歳	明治20年1月7日	72	永川ツヤ	明治22年10月28日	
						45	永川ツヤ(武六次女) 6歳	明治22年10月6日				
						46	永川(升)次郎 11歳	明治10年4月7日				
						33	永川ツヤ(與平妻) 70歳	元治2年4月19日	38	不詳	不明	
15	正方形	—										
16	正方形	正方形縦棺	?	成人		40	釈妙春信女	寛政4年7月9日	41	不詳	寛政4年7月9日	
17	正方形	—				28	法號釈教仙(霊)	天明8年3月19日	42	永川利助	天明8年3月10日	
						29	利助妻	明和6年7月20日				
						40	釈妙春信女	寛政4年7月9日				
18	正方形	正方形縦棺	男	熟年		38	釈妙蓮(尼)	明和5年4月22日	55	不詳	享保10年9月8日	
									56	永川善九郎妻	享保18年7月29日	
									57	永川善六	明和4年6月27日	
20	長方形(短)	蓋付壘		火葬骨								
21	正方形	壘棺	?	成人		39	永川利作	文化11年3月14日	51	永川善六	天保14年7月11日	
									52	永川利作	文化11年3月14日	
									28	松口瀧次	天保14年8月13日	
22	正方形	正方形縦棺?	?	幼児								
23	正方形	正方形縦棺	女	老年		1	山内登良 73歳	慶応2年2月29日	23	山内登良	慶応2年2月9日	
24	正方形	正方形縦棺	女	老年		5	山内武平妻	天保10年7月5日	27	山内武平	天保10年7月5日	
25	正方形	正方形縦棺	?	老年					35	松口ウメ	明治18年2月19日	

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
V期 棺槨19世紀			墓籍地図76が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ銘の墓石19が近くから出土している。 死亡年も出土陶磁器に矛盾しない。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓籍76の死亡年月日は「明治30年正月12日」の誤り。
棺槨19世紀			墓石と墓籍の候補が複数あり、人骨の性別も不明のため、死者名の特定はできない。被葬者は人骨から「成人」とする。 墓石と墓籍の死亡年が明治30年代に集中し、棺槨の時期と矛盾しないため、埋葬年代を1900年前後と推定。
漆器	新寛永-B		改葬塚の可能性あり。被葬者は火葬骨から「成人」とする。埋葬年代不明。 墓籍地図59が墓塚の位置と概略合い、墓籍59と同じ内容の墓石34が近くから出土している。 墓石34・墓籍59の被葬者が不確定なため、人骨と対比できない。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代は、墓石34・墓籍59から推定。 死亡年も出土漆器および六道銭と矛盾しない。
棺槨19世紀			墓籍地図58が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別も不明のため、被葬者は「成人」とする。 墓籍58の死亡年は棺槨の時期と矛盾しないため、埋葬年代を1887年と推定。
棺槨19世紀			墓籍地図75が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別も不明のため、被葬者は「成人」とする。 墓籍75の死亡年は棺槨の時期と矛盾しないため、埋葬年代を1896年と推定。
漆器	新寛永-A		墓籍地図60が墓塚の位置と概略合うが、死者姓名不明。被葬者は、人骨から「老年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍60から推定。その死亡年は出土漆器・六道銭と矛盾しない。
			墓籍地図80が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石が無いため、被葬者は人骨の「老年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍80から推定。
棺槨19世紀			墓籍地図50が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別も不明のため、被葬者は「幼児」とする。 墓籍50の死亡年は棺槨の時期と矛盾しないため、埋葬年代を1816年と推定。
			墓籍には複数の女性が候補としてあるが、対応する墓石が無く、人骨の性別も不明のため、被葬者は「成人」とする。 埋葬年代は不明。
棺槨19世紀			墓籍地図39が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ銘の墓石44が近くから出土している。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓石・墓籍の死亡年は棺槨の時期と矛盾しないため、埋葬年代は1887年と推定。 墓籍72の死亡年月日は「明治22年10月6日」の誤り。
棺槨19世紀			墓石・墓籍の複数の候補の中で、人骨の性別・年齢に対応できるのは墓籍82だけである。ただし、年齢が対比できない。 墓石と人骨の年齢が一致しない。被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代は、墓籍82から推定。 墓籍72の死亡年月日は「明治22年10月6日」の誤り。
			墓籍地図38が墓塚の位置と概略合うが、死亡者・死亡年月日不詳。墓石46は人骨の性別と一致するが、年齢が異なる。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代不明。 墓籍72の死亡年月日は「明治22年10月6日」の誤り。
			墓籍地図72が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ銘の墓石45が近くから出土しているが、人骨年齢と合わない。 墓石33は墓籍72の死亡者名と同じであり、人骨とも一致するが、死亡年が異なる。 被葬者は人骨から「成人女性」とする。埋葬年代は、墓石45・墓籍72から推定。 墓籍72の死亡年月日は「明治22年10月6日」の誤り。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍41と同じ死亡年月日の墓石40が近くから出土している。人骨の性別不明。 被葬者は、墓石40から推定。埋葬年代は、墓石40・墓籍41から確定。
			墓籍地図42が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ銘の墓石28が近くから出土している。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓籍42の死亡年月日は「天明8年3月19日」の誤り。
	鉄銭-D		墓籍地図56が墓塚の位置と概略合うが、墓石の死亡年および性別と合わない。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、六道銭から死亡年を「明和」とする墓籍57から推定。
明治後半～大正 棺槨19世紀			第1号蔵骨器
			墓籍地図52が墓塚の位置と概略合い、墓籍52と同じ内容の第39号墓石が出土している。死者は、人骨の性別と一致しない。 被葬者・埋葬年代は、墓石39と墓籍52から推定。死亡年も棺槨の年代と矛盾しない。
V期	新寛永-B		対応する墓石は無いが、墓籍地図28が墓塚の位置と合う。人骨の性別不明のため、被葬者は「幼児」とする。 墓籍28の死亡年は陶磁器の時期と矛盾しないため、埋葬年代は墓籍28から推定。
V期	鉄銭-E		墓石・墓籍・人骨とが一致し、被葬者・埋葬年代とも確定。副葬された陶磁器・六道銭の時期とも矛盾しない。 第5号墓石は建った状態。墓石5の年齢不明であるが、ほぼ墓石・墓籍・人骨とが一致し、確定。墓籍27の死者姓名は「山内武平妻」の誤り。 墓籍地図35が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別不明のため、被葬者は「若年」とする。埋葬年代は、墓籍35から推定。

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
			墓籍地図37が墓塚の位置と概略合うが、32の可能性もあるため、埋葬年代不確定。 さらに対応する墓石も無く、人骨の性別不明のため、被葬者は「若年」とする。
IV・V期	鉄銭-D		墓石・墓籍・人骨とが一致し、確定。 副葬された陶磁器・六道銭の時期とも矛盾しない。
漆器			墓籍地図30が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別も異なる。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代不明。 墓石4・墓籍26が一致するが、人骨の性別不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓籍26の死亡年月日は「天保10年9月29日」の誤り
棺蓋19世紀			墓籍地図29が墓塚の位置と概略合うが、第6号墓石は墓塚の上に建っており、墓石6の内容を採用して確定。
棺蓋19世紀			第7号墓石は建った状態。 墓石・墓籍・人骨とが一致し、確定。 棺蓋の時期とも矛盾しない。 墓籍地図77が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別不明のため、被葬者は「成人」とする。 墓石37および墓籍59の死亡年は棺蓋の時期より古いため、あり得ない。 埋葬年代は、墓籍77から推定。
V期 棺蓋19世紀	鉄銭-D		墓籍地図34が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ内容の墓石9が近くから出土している。 墓石・墓籍・人骨とが一致し、確定。 副葬された陶磁器・棺蓋の時期とも矛盾しない。 墓籍地図25が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 墓籍25は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍25から推定。
			墓籍地図32が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍32から推定。
			人骨以外の対比資料無し。 被葬者は人骨から「成年男性」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍地図54が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍54から推定。
			墓籍地図53が墓塚の位置と概略合い、墓籍53と同じ死亡年月日の墓石38が近くから出土している。 人骨の性別不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。
IV・V期	新寛永-C		墓籍地図36が墓塚の位置と概略合い、人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍36から推定。 墓籍36の死亡年は、陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。
			墓籍地図24が墓塚の位置と概略合い、墓籍24と同じ死亡年月日の第3号墓石が建っていた。 墓石3は人骨の性別と一致するが、人骨の年齢と一致しない。 被葬者は、人骨から「成年男子」とする。 埋葬年代は、墓石3・墓籍24から推定。 墓籍24の死者姓名は「山内武平」の誤り。
V期			第2号墓石は建った状態。 墓石・墓籍・人骨とが一致し、確定。 陶磁器の時期とも矛盾しない。 墓籍地図49が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍49から推定。
			墓籍24の死者姓名は「山内武平」の誤り。 墓籍の複数の被葬者はいずれも男性であり、人骨の性別と一致しない。 被葬者は、人骨から「老年女性」とする。 埋葬年代不明。
			墓塚は、第41号墓塚と重複。 墓石2と墓籍22は墓塚41で確定済み。 第2号墓石は建った状態。墓石・墓籍が一致するが、人骨の年齢と一致しない。 被葬者は人骨から「成人」とし、埋葬年代は不明。 第29号墓石は第17・45号墓の改葬塚から第45号墓墓塚にかけて出土。 横(覆)棺ではない。 対比資料は無いが、第40号墓石は第16・17号墓の間の第45号墓墓塚内出土。 被葬者・埋葬年代はとりえず墓石40から推定。
			墓籍地図44が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 墓石42と墓籍46の死亡年月日が一致し、人骨の性別とも一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、墓石42・墓籍46から推定。 墓籍43の死亡年月日は「天明4年正月21日」の誤り。
			墓籍地図45が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別不明のため、被葬者は「成人」とする。 埋葬年代は、墓塚45で推定。
			墓籍地図46が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別不確定のため、被葬者は「熟年男性?」とする。 埋葬年代不明。
			複数の墓石のうち、墓石46が人骨の年齢に近いが、性別不明。 複数の墓籍のうち、墓籍40が墓石46と一致する。 被葬者・埋葬年代は、墓石46・墓籍40から推定。 墓籍40の死者姓名は「永川升次郎」の誤り? 墓籍72の死亡年月日は「明治22年10月6日」の誤り。
			複数の墓石のうち、墓石45が人骨の年齢と一致するが、性別不明。 複数の墓籍のうち、墓籍72が墓石45と一致する。 被葬者・埋葬年代は、墓石45・墓籍72から推定。
			改葬塚の可能性あり。被葬者・埋葬年代は墓石42から推定。
			複数の墓籍のうち、墓籍79が人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「成人女性?」とする。 埋葬年代は、墓籍79から推定。
棺蓋19世紀			墓籍地図58が墓塚の位置と概略合い、墓籍内容と同じ銘の墓石22が近くから出土しているが、人骨の年齢と一致しない。 人骨の男性・熟年と一致する墓石は墓石23の「永川弥八52歳」であり、墓籍81である。 第23号墓石は改葬後の「永川家」の寄せ墓であり、墓籍81も厳密に墓籍地図に対応しない。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石23・墓籍81から推定。

第27表 墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表③

墓地	墓形態		人骨		墓石		墓籍・墓籍地図				
	墓	墳	性別	年齢	番号	被葬者名	死亡年月日	番号	死者姓名	死亡年月日	
第1号墓地	58	正方形	正方形縦棺	男	成人	21	永川口(里) 75歳	明治32年3月5日	57	永川善六	明和4年6月27日
						22	永川弥吉 68歳	明治20年3月9日	58	永川弥吉	明治20年3月9日
						36	永川(與)平 5(5)歳	明治29年(10)月29日	81	永川弥八	明治38年10月24日
					37	釈浄龍靈	明和4年6月17日				
59	正方形	—	火葬骨(成人)								
第2号墓地	1	正方形	壘棺	?	?						
	2	長方形(短)	長方形横棺(短)	?	成人						
	3	正方形	正方形縦棺?	男	熟年						
	4	正方形	正方形縦棺	男	熟年	5	心誉浄安信士 久月壽(求)信女	□□1(1)年10月15日	1	山内弥八 山内弥八妻	宝永11年10月15日 宝永11年7月8日
	5	長方形(短)	正方形縦棺	女	熟年						
	6	長方形(短)	—								
	7	略楕円形	—								
	8	円形	—								
	9	長方形(短)	—								
	10	長方形(短)	長方形横棺(短)?	男?	成人						
第40号墓地	1	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	熟年	39	—	—	36	不詳	不明
	2	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	成年	21	—	—	37	不詳	不明
	3	正方形	桶棺			68	—	—	40	不詳	不明
	4	正方形	桶棺	男?	熟年	26	釈妙光	宝暦12年8月27日	41	不詳	不明
	5	正方形	桶棺	男	熟年	27	山内十工門	(安)永8年12月12日	46	山内甚助	文永8年12月12日
						34	—	—			
	6	長方形(短)	長方形横棺(短)	?	成人	35	—	—	48	不詳	不明
	7	長方形(短)	長方形横棺(短)			37	—	—	51	不詳	不明
	8	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	成人	45	—	—	49	不詳	不明
	9	正方形	桶棺	女	熟年	26	釈妙光	宝暦12年8月27日	44	不詳	不明
					27	山内十工門	(安)永8年12月12日				
					28	—	—				
	10	長方形(短)	長方形横棺(短)	男?	老年	71	—	—	38	不詳	不明
	11	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	熟年	56	—	—	52	不詳	不明
	12	円形	—			31	—	—	56	不詳	不明
	13	正方形	正方形縦棺	男	熟年	36	梵字「」(キリーク)	—	50	不詳	不明
	14	長方形(短)	長方形横棺(短)	?		19	—	—	36	不詳	不明
	15	長方形(短)	—		未成人	41	—	—			
	16	長方形(短)	長方形横棺(短)	女	熟年						
	17	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	熟年				35	不詳	不明
	18	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	熟年	40	—	—	65	不詳	不明
	19	長方形(短)	長方形横棺(短)	女	熟年	24	—	—	59	不詳	不明
	20	不整長方形	—			43	—	—	55	不詳	不明
									58	不詳	不明
	21	長方形(短)	長方形横棺(短)			33	法名釈妙祐位	享保2年11月28日	45	不詳	享保2年11月28日
	22	長方形(短)	正方形縦棺	男	成年	17	山内吉次郎	延享1年10月14日	34	山内吉次郎	延享1年3月10日
	23	正方形	正方形縦棺	男	熟年	16	山内弥八	寛延1年12月12日	33	山内弥八	寛政1年12月2日
	24	正方形	—			15	山内弥八妻	明和3年5月15日	32	山内弥八妻	明和3年5月15日
	25	正方形	正方形縦棺 第1号壘棺	女?	成年 乳児	14	山内ぬい・山内弥作	明治7年6月6日・40年1月4日	30	山内ヌイ	明治10年4月22日
	26	長方形(長)	長方形横棺(長)	女	熟年	63	—	—	24	山内太助	安政3年11月13日
	27	正方形	正方形縦棺	男	熟年	8	山内勘次	安政4年2月3日	23	山内勘次	安政4年2月3日
	28	正方形	正方形縦棺	女	熟年				17	不詳	不明
									18	山内勘次母	文政1年5月14日
	29	正方形	桶棺	男	熟年				22	山内弥作	天明7年10月14日
	30	正方形	—	?	成人	32	山(内)口口	—	57	不詳	不明
	31	長方形(短)	—						53	不詳	不明
	32	正方形	—			44	—	—	54	不詳	不明
									55	不詳	不明
	33	長方形(短)	長方形横棺(短)	女	熟年				43	不詳	不明
	34	正方形	壘棺	女	成年				29	山内イシ	明治15年5月9日
35	正方形	桶棺	女	老年				16	山内ヨシ	寛政11年10月23日	
36	正方形	桶棺	女	成年	7	山内吉工門口 (智願恵柳信女靈)	寛政11年10月23日	19	不詳	寛政11年10月23日	
37	正方形	正方形縦棺	?	成人	6	齢屋延長信女	享和2年10月19日	14	不詳	享和2年10月9日	
38	正方形	正方形縦棺	女	成年	5	山内吉右門妻	文化3年11月1日	13	不詳	文化3年11月1日	
39	正方形	正方形縦棺	男	熟年	4	山内弥平	安政7年3月3日	39	不詳	不明	
40	正方形	正方形縦棺			2	弥平妻	安政7年2月28日	9	山内熊吉	文久3年3月24日	

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
			墓籍地図57が墓塚の位置と概略合い、墓籍57と同じ死亡年月日の墓石37が近くから出土している。 墓石57・墓籍37とも人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「成人男性」とする。 埋葬年代は、墓石57・墓籍37から推定。
			改葬塚の可能性あり。 被葬者は火葬骨から「成人」とする。 埋葬年代不明。
棺蓋17世紀			
III・IV期	新寛永-B		対比する墓石・墓籍なし。 被葬者は人骨から「成人」とする。 埋葬年代は陶磁器の時期から。
III・IV期	新寛永-B		対比する墓石・墓籍なし。 被葬者は人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、陶磁器の時期から。
漆器	新寛永-B		墓石5・墓籍1の死亡年月日がほぼ同じであり、夫婦墓と考える。 被葬者は、墓籍1から確定。 埋葬年代は、墓籍1から推定。
IV期	新寛永-A		墓籍の死亡年月日は「宝暦12年」の誤り？(副葬品の年代から)
	新寛永-B		対比する墓石・墓籍なし。 埋葬年代は、六道銭の時期から。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			対比資料は人骨のみで、被葬者は人骨から「成人男性？」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍地図36が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳である。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
			第21号墓石は根石と基礎石。 墓籍の内容不詳のため、被葬者は人骨から「成年男性」とする。 埋葬年代不明。
			第68号墓石は根石2個。 墓石68・墓籍40の内容不詳のため、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図41が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳である。 墓石26は、人骨の性別と合わない。 被葬者は、人骨から「熟年男性？」とする。
			墓籍地図46が墓塚の位置と概略合い、墓籍46と同じと考える死亡年月日の墓石27が近くから出土している。 墓籍46の死者姓名は「山内十工門」の誤り、死亡年月日は「安永8年12月12日」の誤り？ 墓石・墓籍とも被葬者名・埋葬年代が不確定。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石27・墓籍46から推定。
			第35号墓石は根石。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「成人」とする。 埋葬年代不明。
			第37号墓石は根石。 墓石37・墓籍51の内容不詳のため、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			第45号墓石は根石。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「成人男性」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍地図44が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳である。 墓石26は、墓塚4と9の間に倒れた状態。 墓石26が人骨の性別と合うが年齢不明のため、被葬者は人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、墓石26から推定。
			第71号墓石は倒れた状態。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「老年男性？」とする。 埋葬年代不明。
			第56号墓石は根石1個。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
			第31号墓石は建った状態。 墓石31・墓籍56の内容不詳のため、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			第36号墓石は倒れた状態。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
			第19号墓石は根石と基礎石。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年」とする。 埋葬年代不明。
			第41号墓石は基礎石？。 対比資料は人骨のみで、被葬者は人骨から「未成人」とする。 埋葬年代不明。
			墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍地図35が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
			第40号墓石は基礎石？。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
IV期			第24号墓石は建った状態。 墓石・墓籍とも内容不詳のため、被葬者は人骨から「熟年女性」とする。 陶磁器は1690～1730年代の皿片。
			第43号墓石は建った状態。 墓石43・墓籍55・58の内容不詳のため、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図45が墓塚の位置と概略合い、墓籍45と同じ死亡年月日の墓石33が倒れた状態で出土している。 人骨不明のため、推定とする。
漆器	新寛永-A		第17号墓石は建った状態。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。 墓籍34の死亡年月日は「延享1年10月14日」の誤り。
漆器			人骨・墓石・墓籍がほぼ一致するが、第16号墓石は倒れた状態。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石16・墓籍33から推定。 墓籍33の死亡年月日は「寛延1年12月12日」の誤り。
IV期			墓籍地図32が墓塚の位置と概略合い、墓籍32と同じ死亡年月日の墓石15が倒れた状態で出土している。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 死亡年は、陶磁器の時期と矛盾しない。
V期			第14号墓石は第25・70号墓の間に、建った状態。 墓籍30の死亡年月日は「明治7年6月6日」の誤り。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。
V期・近代			第1号霊棺は第25号墓と同じ墓塚内。 対比資料は人骨だけであり、被葬者は人骨から「乳児」とする。 埋葬年代は、陶磁器から。
V期			墓籍地図24が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別も一致しない。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 第63号墓石は根石1個。 埋葬年代は、陶磁器から。 陶磁器は1820～60年代の碗
V期	新寛永-B		第8号墓石は建った状態。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。 死亡年も陶磁器の時期と矛盾しない。
IV・V期	新寛永-B		墓石は無い。墓籍の候補のうち墓籍18が人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍18から推定。死亡年は、陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。
漆器			墓籍地図22が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 墓籍22は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」を推定。 埋葬年代は、墓籍22から推定。
			墓籍地図35が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対応する墓石32は建った状態。 被葬者は、墓石と人骨から。 埋葬年代不明。
			墓籍地図53が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
IV期			第44号墓石は基礎石？。 墓籍の候補はいずれも内容不詳。 被葬者は、不明。 埋葬年代は、陶磁器から。
			墓籍地図43が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳である。 被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代不明。
棺蓋19世紀			墓籍地図29が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 墓籍29は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「成年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍29から推定。
			墓籍地図16が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無い。 墓籍16は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「老年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍16から推定。
漆器	新寛永-B		墓籍地図19が墓塚の位置と概略合い、墓籍19と同じ死亡年月日の墓石7が建っていた。 墓石7は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「成年女性」とする。 埋葬年代は、墓石19・墓籍7から推定。 死亡年も六道銭の時期と矛盾しない。
IV・V期	文久永宝-J		墓籍地図14が墓塚の位置と概略合い、墓籍14と同じ死亡年月日の墓石6が建っていた。 人骨の性別不明のため、被葬者は推定。 埋葬年代は、墓石6・墓籍14で確定。 墓籍14の死亡年月日は「享和2年10月19日」の誤り。
IV期	新寛永-B		墓籍地図13が墓塚の位置と概略合い、墓籍13と同じ死亡年月日の墓石5が建っていた。墓石5は人骨の性別と一致し、年齢とも一致すると思われる。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。 死亡年も陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。
IV・V期			墓籍地図53が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 倒れた状態の墓石4は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石4から推定。 死亡年も陶磁器の時期と矛盾しない。
V期	鉄銭-G		墓籍地図9が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍9から推定。 墓籍9の死亡年は、陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。

第28表 墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表④

墓地	墓 形 態		人 骨		墓 石		墓 籍 ・ 墓 籍 地 図				
	墓 塚	棺	性別	年 齢	番 号	被 葬 者 名	死 亡 年 月 日	番 号	死 者 姓 名	死 亡 年 月 日	
第 40 号 墓 地	41	正方形	正方形縦棺	男	熟年	2	弥平妻	安政7年2月28日	5	不詳	不詳
	42	正方形	桶棺			2	弥平妻	安政7年2月28日	6	山内茂七	弘化4年8月10日
	43	正方形	—			2	弥平妻	安政7年2月28日	3	山内菊次郎	明和3年5月15日
	44	正方形	正方形縦棺	女	熟年～	49	行七母	天明(7)年6月20日	73	森内行七母	天明7年6月20日
	45	正方形	桶棺						69	不詳	不明
	46	正方形	正方形縦棺	?	成人	2	弥平妻	安政7年2月28日	8	山内ハマ	安政5年12月10日
	47	正方形	—						11	山内弥市妻	安政7年2月28日
	48	正方形	—			69 70	— —	— —	39 42 60	不詳 不詳 不詳	不明 不明 不明
	49	長方形(短)	長方形横棺(短)	男	老年	22	—	—	62	不詳	不明
	50	正方形	—	?	幼児	66	—	—	63 64	不詳 不詳	不明 不明
	52	正方形	正方形縦棺	男	熟年	38	—	—	66	不詳	不明
	53	正方形	桶棺								
	54	正方形	桶棺			52	—	—	67	不詳	不明
	55	正方形	正方形縦棺			55	又次	天明5年2月12日	68	不詳	不明
	56	正方形	桶棺			51	—	—	70	不詳	不明
	57	正方形	桶棺						72	森内ツ子	不詳
	58	正方形	—			47	清太母	天明6年7月(1)9日	74	不詳	天明6年7月29日
	59	正方形	正方形縦棺	男	熟年	48	又三	天明7年11月15日	76	不詳	天明7年11月15日
	60	正方形	正方形縦棺			57	—	—	75	不詳	不詳
	61	正方形	正方形縦棺	女	熟年				77	不詳	不詳
	62	正方形	桶棺			46	平太	天明9年2月2日	79	森内平太	天明9年3月2日
	63	長方形(短)	—						80	不詳	不詳
	64	正方形	正方形縦棺	女	成年				78	不詳	不詳
	65	正方形	正方形縦棺			50 58	仲次 —	寛政7年7月14日 —	71	不詳	寛政7年7月14日
	66	正方形	桶棺	女?	成年				77	不詳	不詳
	67	正方形	正方形縦棺						78	不詳	不詳
	68	長方形(短)	—								
	69	正方形	—								
	70	略円形	—	火葬骨(成年)		14	山内ぬい・山内弥作	明治7年6月6日・40年1月4日			
	71	正方形	桶棺	男	老年	13	山内弥六郎	天明2年5月1日	31	山内弥六郎	天明2年5月1日
	72	正方形	桶棺?	?	乳～幼児				28	山内イト	明治11年8月10日
	73	正方形	正方形縦棺	女?	熟年	10	口即是相信女	寛政6年6月(30)日	26	不詳	寛政6年6月20日
	74	正方形	桶棺	男	熟年				25	山内亀吉	万延1年7月3日
	75	正方形	甕棺	男	老年				15	山内吉右工門	天明2年5月1日
	76	正方形	甕棺			2	弥平妻	安政7年2月28日	7	不詳	不詳
	77	正方形	桶棺?			1	—	—			
	78	正方形	桶棺	?	幼児	9	口口童女	—	21	不詳	寛政10年9月20日
	79	正方形	正方形縦棺	?	成人				12	山内弥市	明治14年7月14日
	80	正方形	正方形縦棺?						4-1	山内シヲ	明治19年8月18日
	81	正方形	—			2	弥平妻	安政7年2月28日	4-2	山内サト	明治7年7月11日
	82	正方形	桶棺?			2	弥平妻	安政7年2月28日	2	山内ミツ	享和2年10月19日
	83	正方形	正方形縦棺	男	若年	12	山内利吉 (女標了覺童男)	天明7年11月24日	27	不詳	天明7年8月14日
	84	正方形	正方形縦棺	女	老年				20	山内勘次妹	文政8年9月10日
	85	正方形	—								
	86	不整楕円形	—			18	—	—			
	87	正方形	—								
	88	正方形	—			29	—	—			
	89	不整楕円形	—						61	不詳	不明

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
V期 漆器			墓籍地図5が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 墓石2は、人骨の性別と一致しない。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、陶磁器から。
V期			墓籍地図6が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍6から推定。 死亡年は、陶磁器と矛盾しない。
	鉄銭－D		墓籍地図3が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍3から推定。 死亡年は、六道銭と矛盾しない。
IV・V期			第49号墓石は倒れた状態。「行七母」の年齢は人骨年齢「熟年～」と考えられ、人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。 死亡年も陶磁器の時期と矛盾しない。
漆器			墓籍地図69が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
V期 漆器	新寛永－A		墓籍地図8が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明のため、被葬者は人骨から「成人」とする。 死亡年は陶磁器・六道銭と矛盾しないため、埋葬年代は墓籍8から推定。
V期			墓籍地図11が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍11から推定。 墓籍11の死亡年は「万延1年」と同じ。 死亡年は、陶磁器と矛盾しない。
			第69・70号墓石は根石。 墓籍の候補は全て内容不詳であり、人骨・墓石も不明。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図62が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 建った状態の墓石22は内容不明、被葬者は、人骨から「老年男性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍の候補は全て内容不詳であり、倒れた状態墓石66も内容不明。 被葬者は、人骨から「幼児」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍66は内容不詳であり、倒れた状態の墓石38も内容不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍67は内容不詳であり、倒れた状態の墓石52も内容不明。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			第55号墓石は、墓塚上に倒れた状態であり、被葬者・埋葬年代を推定。
漆器			墓籍地図70が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 第51号墓石は根石と基礎石。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図72が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨不明のため、被葬者は墓籍72から推定。
			墓籍地図74が墓塚の位置と概略合い、墓籍74と同じ死亡年月日の墓石47が倒れていた。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓籍74の死亡年月日は「天明6年7月19日」の誤り？
			墓籍地図76が墓塚の位置と概略合い、墓籍76と同じ死亡年月日の墓石48が倒れていた。 墓石48は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石48・墓籍76から推定。
			墓籍地図75が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 第57号墓石は根石。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
	鉄銭－E		墓籍地図77が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対応する墓石は無し。 被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、六道銭から。 墓籍地図79が墓塚の位置と概略合い、墓籍79と同じ内容の墓石46が倒れていた。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。 墓籍79の死亡年月日は「天明9年2月2日」の誤り
			墓籍地図80が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図78が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対応する墓石は無し。 被葬者は、人骨から「成年女性」とする。 埋葬年代不明。 墓籍地図71が墓塚の位置と概略合い、墓籍71と同じ死亡年月日の墓石48が倒れていた。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は推定。
			墓籍地図77が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対応する墓石は無し。 被葬者は、人骨から「成年女性？」とする。 埋葬年代不明。
IV期			墓籍地図78が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 対応する墓石は無し。 人骨無く、被葬者不明。 埋葬年代は陶磁器の時期から。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
V期			人骨・墓石・墓籍の資料なく、被葬者は不明。 埋葬年代は陶磁器の時期から。
V期 漆器	鉄銭－E		第14号墓石は第25・70号墓の間に、建った状態。 被葬者は火葬墓から「成人」とする。 埋葬年代不明。
V期	鉄銭－F		墓石13・墓籍31は被葬者・死亡年月日が一致するが、年齢不明。 第13号墓石は、墓塚上に倒れた状態。 被葬者は、人骨から「老年男性」とする。 埋葬年代は、墓石13・墓籍31から推定。 死亡年は、陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。
IV期 漆器			墓籍地図28が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨の性別不明のため、被葬者は人骨から「乳～幼児」とする。 埋葬年代は、墓籍28から推定。 死亡年は六道銭の時期と矛盾しないが、陶磁器の時期(1820～60年代)よりも古く矛盾する。 墓籍地図26が墓塚の位置と概略合い、墓籍26と同じ死亡年月日の墓石10が建っていた。墓籍26の死亡年月日は「寛政6年6月30日」の誤り？ 墓石10は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年女性？」とする。 埋葬年代は、墓石10・墓籍26から推定。 死亡年は陶磁器の時期と矛盾しない。
	新寛永－A		墓籍地図25が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍25は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍25から推定。 死亡年は、六道銭の時期と矛盾しない。
棺壔19世紀			墓籍地図15が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍15は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「老年男性」とする。 埋葬年代は、墓籍15から推定。 死亡年は、棺壔の時期より古く、矛盾する。
V期 棺壔19世紀			第2号墓石は第40～43・46・76・81・82号墓の間から、第3号墓石とともに出土しているため、不確定。 墓籍地図7が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 人骨無く、被葬者不明。 埋葬年代は、棺壔の時期から。
明治	文久永宝－H		倒れた状態の墓石1は、内容不詳。 人骨無く、被葬者不明。 埋葬年代は、陶磁器の時期から
IV・V期	新寛永－C		墓籍地図21が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。墓石9の戒名が人骨の年齢と一致するため、被葬者は「幼児女子」と推定。 埋葬年代は、墓籍21から推定。 死亡年は、陶磁器・六道銭の時期と矛盾しない。
			墓籍地図12が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨の性別不明のため、被葬者は「成人」とする。 埋葬年代は、墓籍12から推定。
明治	新寛永－C		墓籍地図4－1が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍4－1から推定。 墓籍地図4－2が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓石2は、陶磁器の時期に矛盾する。 人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍4－1から推定。
	新寛永－B		墓籍地図2が墓塚の位置と概略合うが、墓石2とは合わない。人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍2から推定。 死亡年は、六道銭の時期と矛盾しない。 第2号墓石は第40～43・46・76・81・82号墓の間から、第3号墓石とともに出土。
	鉄銭－F		墓籍地図27が墓塚の位置と概略合い、墓籍27と同じ死亡年月日の墓石12が建っていた。 墓籍27の死亡年月日は「天明7年11月24日」の誤り。 墓石12は人骨の性別と一致し、年齢も一致する可能性高い。 人骨・墓石・墓籍が一致し確定。 死亡年は六道銭の時期と矛盾しない。
明治	新寛永－C		墓籍地図20が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍20は人骨の性別と一致するが、年齢にやや疑問がある。 被葬者は、人骨から「老年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍20から推定。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			第18号墓石は根石と基礎石。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			建った状態の墓石29は、内容不明。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図61が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 对比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。

第29表 墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表⑤

墓地	墓	墓形態		人骨		墓石		墓籍・墓籍地図			
		墓 塚	桶 棺	性別	年 齢	番 号	被 葬 者 名	死 亡 年 月 日	番 号	死 者 姓 名	死 亡 年 月 日
第 41 号 墓 地	1	正方形	甕棺	女	若年	15 61	— 山内又作母 61歳	— 慶応4年12月27日	27	山内ハナ	文久3年3月14日
	2	正方形	正方形縦棺	女	老年	15 61	— 山内又作母 61歳	— 慶応4年12月27日	26	山内久良	明治16年1月9日
	3	正方形	甕棺	男	熟年	3	山内又右衛門 49歳	安政2年12月7日	2	山内又右工門	安政3年12月7日
	4	正方形	甕棺						1	山内又作	明治6年1月9日
	5	不整形	桶棺								
	6	正方形	甕棺	女	熟年				71	山内コマ	明治30年7月13日
	7	正方形	甕棺	男	老年	4 5	— 草野作八 55歳	— 明治29年10月27日	3	山内又六	天保7年3月24日
	8	正方形	甕棺	男	成年	不16	釈了順信士	天保4年8月17日	26	山内喜七	天保4年8月14日
	9	正方形	甕棺	女	熟年	14 61 不16	— 山内又作母 61歳 山内又六女房 50歳	— 慶応4年12月27日 天保6年8月19日	24	山内又六妻	天保6年8月19日
	10	正方形	甕棺	男	老年	5 6	草野作八 55歳 —	明治29年10月27日 —	4	山内久次	文政9年3月2日
	11	正方形	甕棺	女	若年				71	山内コマ	明治30年7月13日
	12	正方形	正方形縦棺	男	成年	不3	山内岩吉 34歳	明治28年3月20日	68	山内岩吉	明治28年4月13日
	13	正方形	桶棺			1	—	—			
	14	正方形	桶棺			1	—	—			
	15	正方形	—			1	—	—			
	16	正方形	桶棺	?	幼児				6	山内久太郎	明治10年4月8日
	17	正方形	桶棺	?	幼児				14	平山卯一	文化13年10月20日
	18	正方形	正方形縦棺	女	若年	60	—	—	15	山内キン	明治7年8月15日
	19	正方形	甕棺	女	熟年	7 60	釈妙諦信女 —	天保3年7月16日 —	16	不詳	不明
	20	正方形	正方形縦棺	男	老年	2 63	— 山内又七	— 明治18年8月11日	7	山内又七	不詳
	21	正方形	正方形縦棺	女	成年	62	山内きん	明治7年7月12日	9	山内又七女子	不詳
	22	正方形	桶棺	男	熟年	62	山内きん	明治7年7月12日	10 10 12	平山善市 平山善市 平山ヲソ	明治3年12月17日 明治3年12月17日 明治15年3月2日
	23	正方形	甕棺	女	熟年	不10	平山ヒサ女	明治33年2月24日	74	岡藤ヒサ	明治33年3月24日
	24	正方形	正方形縦棺	男	熟年	64	平山善市	明治3年12月17日	12 13	平山ヲソ 平山マツ	明治15年3月2日 安政4年2月12日
	26	正方形	—	?	小児	64	平山善市	明治3年12月17日	13	平山マツ	安政4年2月12日
	27	正方形	甕棺	?	幼児	39	—	—	17	山内キク	天保4年10月19日
	28	正方形	正方形縦棺	?	成人	41 不5	山内又七 山内又作女子志き 1歳	? 万延1年9月29日	19	山内又作女子	万延1年9月19日
	29	正方形	甕棺	男	熟年～	5 13	草野作八 55歳 —	明治29年10月27日 —			
	30	正方形	桶棺						22	不詳	不詳
	31	正方形	甕棺	男	熟年	8	平山兵吉	明治32年10月11日	73	岡藤兵吉	明治32年11月13日
	33	正方形	正方形縦棺	男	老年				36	松口卯七	明治21年4月10日
	34	正方形	正方形縦棺	女	老年	49	—	—	37	松口林平	不詳
	35	正方形	正方形縦棺	男	熟年	48	—	—	35	松口イ子	嘉永7年4月7日
	36	正方形	正方形縦棺	女	老年				34	松口善五郎	安永6年4月5日
	37	正方形	正方形縦棺	?	乳児	50	—	—	38	松口トリ	文久3年12月26日
	38	正方形	正方形縦棺	女	若年				41	不詳	不詳
	39	正方形	正方形縦棺	女	老年	36 41	法名釈尼妙隣信女 山内又七	文化13年8月12日 ?	21	山内久次妻	文化13年8月12日

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
IV・V期 棺葬19世紀			墓籍地図27が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍27は、人骨の性別と一致するが、年齢不明。墓石61は、人骨の年齢と合わない。被葬者は、人骨から「若年女性」とする。埋葬年代は、墓籍27から推定。死亡年は、陶磁器の時期に矛盾しない。
	鉄銭-G		墓籍地図26が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍26は人骨の性別と一致するが、年齢不明。墓石61は人骨の性別・年齢に一致するが、動いており確定できない。 被葬者は、人骨から「老年女性」とする。埋葬年代は、墓籍26から推定。 死亡年は六道銭の時期と矛盾しない。
棺葬19世紀			第3号墓石は建った状態。墓籍2の死亡年月日は「安政2年12月7日」の誤り。人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。 死亡年は、棺葬の時期と矛盾しない。
棺葬19世紀			墓籍地図1が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨不明のため、被葬者・埋葬年代は墓籍1から推定。死亡年は、棺葬の時期と矛盾しない。 第66号墓と重複する。
V期			人骨・墓石・墓籍無く、被葬者不明。 埋葬年代は、陶磁器から推定。
棺葬19世紀			墓籍地図71が墓塚の位置と概略合い、墓籍71は人骨の性別と一致するが、墓塚11との対比も可能であり、確定できない。対応する墓石は無く、被葬者は人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、棺葬の時期から。
棺葬19世紀	新寛永-B		墓籍地図3が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍3は人骨の性別と一致するが、年齢不明。墓石5は人骨の性別と一致するが、年齢とは合わない。 被葬者は、人骨から「老年男性」とする。埋葬年代は、墓籍3から推定。 死亡年は棺葬・六道銭の時期と矛盾しない。
棺葬19世紀		墨書銘	棺蓋の押え石の下面に「天保4年 巳8月17日 俗名善七 行年23才」の墨書銘。 人骨・墓石・墓籍・墨書銘が一致し、確定。墓籍28の死亡年月日は「天保4年8月17日」の誤り。
棺葬19世紀	鉄銭-D		墓籍地図24が墓塚の位置と概略合い、墓籍24は人骨の性別と一致する。不明墓石16は墓籍24と一致し、人骨の年齢とも一致する。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。
棺葬19世紀			墓籍地図4が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。墓籍4は人骨の性別と一致するが、年齢不明。墓石5は人骨の性別と一致するが、年齢とは合わない。 被葬者は、人骨から「老年男性」とする。埋葬年代は、墓籍4から推定。 死亡年は棺葬の時期と矛盾しない。
棺葬19世紀			墓籍地図71が墓塚の位置と概略合い、墓籍71は人骨の性別と一致するが、墓塚6との対比も可能であり、確定できない。対応する墓石は無く、被葬者は人骨から「若年女性」とする。 埋葬年代は、棺葬の時期から。
			墓籍地図68が墓塚の位置と概略合い、墓籍68は人骨の性別と一致する。不明墓石3が墓籍68と一致し、人骨の性別・年齢とも一致する。 人骨・墓石・墓籍が一致し、確定。墓籍88の死亡年月日は「明治28年3月20日」の誤り？
			第1号墓石は納骨のための安藤・山内家の寄せ墓。 人骨無く、対比できずに、被葬者・埋葬年代不明。
			第1号墓石は納骨のための安藤・山内家の寄せ墓。 人骨無く、対比できずに、被葬者・埋葬年代不明。
			第1号墓石は納骨のための安藤・山内家の寄せ墓。 人骨無く、対比できずに、被葬者・埋葬年代不明。
V期			墓籍地図6が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「幼児」とする。埋葬年代は、墓籍6から推定。死亡年は、陶磁器の時期に矛盾しない。
V期			墓籍地図14が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「幼児」とする。埋葬年代は、墓籍14から推定。 死亡年は、陶磁器の時期に矛盾しない。
			墓籍地図15が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍15は人骨の性別と一致するが、年齢の対比ができない。被葬者は、人骨から「若年女性」とする。 埋葬年代は、墓籍15から推定。
棺葬19世紀			墓籍地図16が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 墓石7は人骨の性別と一致するが、動いており不確定。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。 埋葬年代は、棺葬の時期から。 第7号墓石は第19・74・75号墓の改葬塚から出土。
	文久永宝-I		墓籍地図7が墓塚の位置と概略合い、墓籍7と同じ死者名の墓石63が近くから出土。 墓石63・墓籍7は人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「老年男性」とする。 埋葬年代は、墓石63から推定。 第63号墓石は改葬塚(第25号墓塚)から出土
			墓籍地図9が墓塚の位置と概略合うが、死亡年月日が不詳。墓籍9は本墓塚内出土の墓石62と性別が一致するが、名前が対比できない。墓石62・墓籍9はいずれも人骨の性別と一致しているが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「成年女子」とする。 埋葬年代は、墓石62から推定。
V期			墓籍地図10が墓塚の位置と概略合う。墓籍10は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代は、墓籍10から推定。 死亡年は、陶磁器の時期に矛盾しない。
			墓籍地図74が墓塚の位置と概略合い、不明墓石10は姓は異なるが墓籍74と一致する。 不明墓石10は、出土地点確定不可能。不明墓石10と墓籍74は人骨の性別と一致するが、年齢不明。 被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代は、不明墓石10・墓籍74から推定。 墓籍74の死亡年月日は「明治33年2月24日」の誤り。
			墓籍地図12が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別とも一致しない。墓塚70から出土した墓石64は人骨の性別と一致しているが、動いており不確定。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
	鉄銭-G		墓籍地図13が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「小児」とする。埋葬年代は、墓籍13から推定。 死亡年は、六道銭の時期に矛盾しない。 墓石64は他墓塚との対比もあり、不確定。
V期			墓籍地図17が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「小児」とする。埋葬年代は、墓籍17から推定。 死亡年は、陶磁器の時期に矛盾しない。 墓籍17の死亡年月日は「万延1年9月29日」の誤り。
V期			墓籍地図19が墓塚の位置と概略合い、出土地点不明の墓石不5と一致するが、人骨の年齢と合わない。被葬者は、人骨から「成人」とする。 埋葬年代は、陶磁器の時期から。
棺葬19世紀			第7・10・29号墓の間の改葬塚から出土した墓石5は人骨の性別・年齢と一致するが、墓塚上に建っておらず、確定できない。被葬者・埋葬年代は、墓石5から推定。 死亡年は、棺葬の時期に矛盾しない。
V期			墓籍地図22が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 人骨・墓石もなく、被葬者不明。 埋葬年代は、陶磁器の時期から。
棺葬19世紀	鉄銭-E		墓籍地図73が墓塚の位置と概略合い、墓石8は姓は異なるが墓籍73と一致する。 墓石8と墓籍73は人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代は、墓石8・墓籍73から推定。死亡年は、棺葬・六道銭の時期に矛盾しない。墓籍73の死亡年月日は「明治32年10月11日」の誤り。
			墓籍地図36が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 墓籍36は人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「老年男性」とする。 埋葬年代は墓籍36から推定。
			墓籍地図37が墓塚の位置と概略合うが、人骨の性別と一致しない。墓石49は内容不詳。被葬者は、人骨から「老年女性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図35が墓塚の位置と概略合うが、人骨の性別と一致しない。 被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。 埋葬年代不明。
V期			墓籍地図34が墓塚の位置と概略合うが、人骨の性別と一致しない。 被葬者は、人骨から「老年女性」とする。埋葬年代は、陶磁器の時期から。
			墓籍地図38が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。 人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「乳児」とする。埋葬年代は、墓籍38から推定。
			墓籍地図41が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。 被葬者は、人骨から「若年女性」とする。 埋葬年代不明。
			墓籍地図21が墓塚の位置と概略合い、墓籍21と同じ死亡年月日の墓石38が近くから出土。 いずれも人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「老年女性」とする。 埋葬年代は、墓石38・墓籍21から推定。

第30表 墓形態・人骨・墓石・墓籍・陶磁器・六道銭対比表⑥

墓地	墓 形 態		人 骨		墓 石		墓 籍 ・ 墓 籍 地 図				
	墓 塚	棺	性別	年 齢	番 号	被 葬 者 名	死 亡 年 月 日	番 号	死 者 姓 名	死 亡 年 月 日	
第 41 号 墓 地	40	正方形	正方形縦棺	男	熟年	18 不2	— 山内又三郎 27歳	— 明治19年11月3日	33	山内又三郎	明治19年11月3日
	41	正方形	正方形縦棺	女	成年				44	松口久五	安政3年4月11日
	42	正方形	正方形縦棺	女	熟年	56	—	—			
	43	正方形	桶棺	女	成年				42	松口善七	天保17年4月7日
	44	正方形	正方形縦棺	女	熟年	27	山内カメ 80歳	明治11年7月28日	43	松口ハル	明治18年1月18日
	45	正方形	—	?	乳~幼児	44	—	—	47	山内又三郎祖母	明治11年7月28日
	46	正方形	—						63	山内弥太郎	嘉永4年1月6日
	47	正方形	—								
	48	正方形	—	女	成年				64	不詳	不明
	49	正方形	正方形縦棺	男	成年				65	不詳	不明
	50	正方形	—						45	山内弥平妻	天保7年7月26日
	51	正方形	—	女	熟年	28	山内弥平妻	天保7年7月26日			
	52	正方形	—								
	53	正方形	—	男	熟~老年	34 42 65	— — 幸治郎後妻	— — 文久3年10月29日	60	山内幸次郎	明治15年10月4日
	54	正方形	—	男	老年	35 42 65	— — 幸治郎後妻	— — 文久3年10月29日	61 75	山内幸次郎後妻 山内弥吉	文久3年7月29日 明治36年9月7日
	55	正方形	正方形縦棺	男	熟~老年				59	山内利作	嘉永5年1月5日
	56	正方形	正方形縦棺	女	熟年	43	山内イセ 77歳	大正6年3月8日			
	57	正方形	正方形縦棺	女	熟年	43 不6	山内イセ 77歳 治平母	大正6年3月8日 弘化3年7月8日	62	不詳	弘化3年10月8日
	58	正方形	—	男	成人	47	山内半次郎 66歳	明治32年11月8日	66	—	—
	59	正方形	—	男	成年?	46 47	— 山内半次郎 66歳	— 明治32年11月8日	72	山内十平	明治32年11月8日
	60	正方形	—	女	成年	36 45	— 山内信子 47歳	— 大正7年1月6日	67	山内善吉	安政10年6月4日
	61	正方形	正方形縦棺	?	幼児				69	永川ハツ	明治28年10月22日
	62	正方形	正方形縦棺	女	熟年				69	永川ハツ	明治28年10月22日
	63	正方形	桶棺	?	幼児	59	—	—	46	山内ツル	嘉永7年6月27日
	64	正方形	正方形縦棺	女	成年				40	不詳	不詳
	65	正方形	桶棺	男	熟年				39	松口スキ	天明7年3月2日
	66	正方形	—	?	幼児?	11	—	—	18	不詳	文政9年4月5日
	67	正方形	—			1	—	—			
68	正方形	—						1	山内又作	明治6年1月9日	
69	正方形	正方形縦棺	男	成年	45 不12	山内信子 47歳 釈善吉	大正7年1月6日 安政6年6月7日	67	山内善吉	安政10年6月4日	
70	正方形	正方形縦棺	男?	成人	9 40 64	平安安太郎 20歳 平山才吉 平山善市	明治10年2月20日 明治29年6月29日 明治3年12月17日	70	岡藤才蔵	明治29年8月8日	
71	正方形	正方形縦棺	?	若年	9 40 64	平安安太郎 20歳 平山才吉 平山善市	明治10年2月20日 明治29年6月29日 明治3年12月17日	11	平安安太郎	明治10年2月20日	
72	正方形	—			60	—	—	16	不詳	不明	
73	正方形	—			10	—	—	16	不詳	不明	
74	正方形	—	?	乳児				5	山内又六妻	天保3年7月16日	
75	長方形(短)	—	?	乳児	7	釈妙諦信女	天保3年7月16日	5	山内又六妻	天保3年7月16日	
76	正方形	—	女	熟年	7	釈妙諦信女	天保3年7月16日	5	山内又六妻	天保3年7月16日	
77	正方形	—	男	熟年	12 41	— 山内又七	— ?	23	山内ツカ	文化2年10月19日	
78	正方形	—	男	熟年				25	山内ミ子ヲ	明治18年1月30日	
79	正方形	正方形縦棺	女	熟年	18	—	—	33	山内又三郎	明治19年11月3日	
		第3号蔵骨器		火葬骨							

総括－墓の被葬者と年代について－

陶磁器 大橋編年	六道銭 組合せ	その他	備 考
	新寛永－B		墓籍地図33が墓塚の位置と概略合い、墓籍33と同じ内容の不明墓石2が出土。不明墓石2は、出土地点の特定不可能。不明墓石2は人骨の性別と一致するが、年齢が一致しない。死亡年は、六道銭に矛盾しない。被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代は、不明墓石2・墓籍33から推定。
			墓籍地図44が墓塚の位置と概略合うが、人骨の性別とも一致しない。被葬者は、人骨から「成年女性」とする。埋葬年代不明。
			第56号墓石は根石。墓石・墓籍無く、被葬者は人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図の候補のうち、墓籍43が人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「成年女性」とする。埋葬年代は墓籍43から推定。
	新寛永－B		墓籍地図47が墓塚の位置と概略合い、墓籍47と同じ死亡年月日の墓石27が本墓塚上に建っていた。墓石27と人骨の年齢にやや疑問があるが、人骨・墓石・墓籍一致し、確定。死亡年は、六道銭に矛盾しない。
V期 漆器			墓籍地図63が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「乳～幼児」とする。埋葬年代は、墓籍63から推定。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
棺槨19世紀			墓籍地図64が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。被葬者は、人骨から「成年女性」とする。埋葬年代は、棺槨の時期から。
棺槨19世紀			墓籍地図65が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。被葬者は、人骨から「成年男性」とする。埋葬年代は、棺槨の時期から。
	新寛永－B		墓籍地図45が墓塚の位置と概略合い、墓籍45と同じ内容の墓石28が本墓塚上に建っていた。墓石28・墓籍45の年齢不明であるが、墓石28は建っていたものであり、確定。
			対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
棺槨19世紀			墓籍地図60が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。墓籍60は人骨の性別と一致するが、年齢不明。墓石65は、人骨の性別と一致しない。被葬者は、人骨から「熟～老年男性」とする。埋葬年代は、墓籍60から推定。死亡年は、棺槨に矛盾しない。第65号墓石は第51・52号墓の間の改葬塚から第51号墓墓域内に落し込まれた状態。
棺槨19世紀			墓籍の候補のうち、墓籍75が人骨の性別と一致するが、年齢不明。対応する墓石はない。被葬者は、人骨から「老年男性」とする。埋葬年代は、墓籍75から推定。死亡年は、棺槨に矛盾しない。
			第65号墓石は第51・52号墓の間の改葬塚から第51号墓墓域内に落し込まれた状態
	文久永宝－K		墓籍地図59が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。墓籍59は人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「熟～老年男性」とする。
			六道銭に文久永宝(1863年以降铸造)が含まれており、墓籍59の死亡年に矛盾するため、埋葬年代は六道銭から。
	鉄銭－G		墓石43は、隣の墓塚55の改葬塚から出土しているが、墓塚55の墓石は不明墓石6に確定できるので、本墓塚の墓石と考える。墓石43は、人骨の年齢にやや疑問があるが、性別が一致するため、被葬者・埋葬年代は墓石43から推定。死亡年は、六道銭に矛盾しない。
	新寛永－B		墓籍地図62が墓塚の位置と概略合い、墓籍62と同じ死亡年月日の不明墓石6が出土。不明墓石6は、出土地点の特定不可能。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代は、不明墓石6・墓籍62から推定。
棺槨19世紀			墓籍62の死亡年月日は「弘化3年7月8日」の誤り。死亡年は、六道銭に矛盾しない。
			墓籍地図66が墓塚の位置と概略合うが、墓籍の記載なし。墓石47は人骨の性別と一致するが、隣の墓塚57に伴う。被葬者は、人骨から「成人男性」とする。埋葬年代は、棺槨から。
棺槨19世紀			墓籍地図72が墓塚の位置と概略合い、死者名は異なるが、墓籍72と同じ死亡年月日の墓石47が近くから出土。墓石47・墓籍72は性別が一致するが、墓石47と人骨の年齢にやや疑問はある。
			被葬者は、人骨から「成年男性」とする。被葬者は、墓石47・墓籍72から推定。死亡年は、棺槨に矛盾しない。
棺槨19世紀	大正期一銭		墓籍地図67が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無く、人骨の性別とも一致しない。墓石45の死亡年は、六道銭と矛盾しない。近くから出土した墓石45は、年齢にやや疑問があるが、人骨の性別と一致する。被葬者・埋葬年代は、墓石45から推定。
	新寛永－B		墓籍地図69は、墓塚59・60のいずれかであるが、確定できない。被葬者は、人骨から「幼児」とする。埋葬年代は、副葬品から。
			墓籍地図69は、墓塚59・60のいずれかであるが、確定できない。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図46が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨の性別不明であり、被葬者は人骨から「幼児」とする。埋葬年代は、墓籍46から推定。墓籍46の「嘉永7年」は、「安政1年」。
			墓籍地図40が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳で、対応する墓石も無し。被葬者は、人骨から「成年女性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図39が墓塚の位置と概略合うが、人骨の性別と一致しない。被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図18が墓塚の位置と概略合うが、死者名不詳である。被葬者は、人骨から「幼児?」とする。埋葬年代は、墓籍18から推定。
			第1号墓石は納骨のための安藤・山内家の寄せ墓。人骨無く、対比できずに、被葬者・埋葬年代不明。
棺槨19世紀			墓籍地図1が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。人骨も無く、被葬者・埋葬年代は墓籍1から推定。第4号墓と重複する。
	新寛永－B		墓籍地図67が墓塚の位置と概略合い、墓籍67と同じ内容の不明墓石12が出土。不明墓石12の出土地点特定不可能。墓籍の死亡年月日は「安政6年6月7日」の誤り。不明墓石12と墓籍67は、人骨の性別と一致するが、年齢不明。
			被葬者は、人骨から「成年男子」とする。埋葬年代は、不明墓石12・墓籍67から推定。死亡年は、六道銭に矛盾しない。
	新寛永－B		墓籍地図70が墓塚の位置と概略合うが、対応する墓石は無し。ただし、墓籍70が誤読であれば墓石40との対比ができる。墓石40は、本墓塚横に倒れており、本墓塚に伴う可能性高い。墓石・墓籍の候補は全て人骨の性別と一致する。
			被葬者・埋葬年代は、墓石40から推定。死亡年は、六道銭に矛盾しない。
			墓籍地図11が墓塚の位置と概略合い、墓籍11と同じ内容の墓石9が近くに倒れていた。第9号墓石は倒れた状態。墓石9の年齢は人骨の年齢にほぼ一致するが、人骨の性別不明。
			被葬者・埋葬年代は、墓石9・墓籍11から推定。
			墓籍地図16が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。倒れた状態の墓石60も内容不詳。人骨も無く、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図16が墓塚の位置と概略合うが、内容不詳。墓石10は、根石。人骨も無く、対比資料無く、被葬者・埋葬年代不明。
			墓籍地図5が墓塚の位置と概略合うが、人骨と合わない。被葬者は、人骨から「乳児」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図5が墓塚の位置と概略合い、同じ死亡年月日の墓石7が出土しているが、人骨と合わない。
棺槨19世紀			被葬者は、人骨から「乳児」とする。埋葬年代不明。
			墓籍地図5が墓塚の位置と概略合い、同じ死亡年月日の墓石7が出土している。墓石7・墓籍5は人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代は、墓石7・墓籍5から推定。死亡年は、棺槨に矛盾しない。
棺槨19世紀			墓籍地図23が墓塚の位置と概略合うが、人骨と合わない。第28・39・76号墓の間に倒れていた墓石41は、人骨の性別と一致するが、年齢不明。被葬者は、人骨から「熟年男性」。埋葬年代は、棺槨の時期から。
			墓籍地図25が墓塚の位置と概略合うが、人骨と合わない。被葬者は、人骨から「熟年男性」とする。埋葬年代不明。
	鉄銭－D	墓碑板	墓籍地図33が墓塚の位置と概略合うが、人骨と合わない。被葬者は、人骨から「熟年女性」とする。埋葬年代は、六道銭から。
			蔵骨器のプレートに「YUKIO YAMAUTI 1896---1946」の銘有り。 伯東過去帳に「山内幸男 昭和21年5月28日 米国ニテ病死」の記載有り。享年50歳。

第5節 墓形態の変遷について (第121・122図)

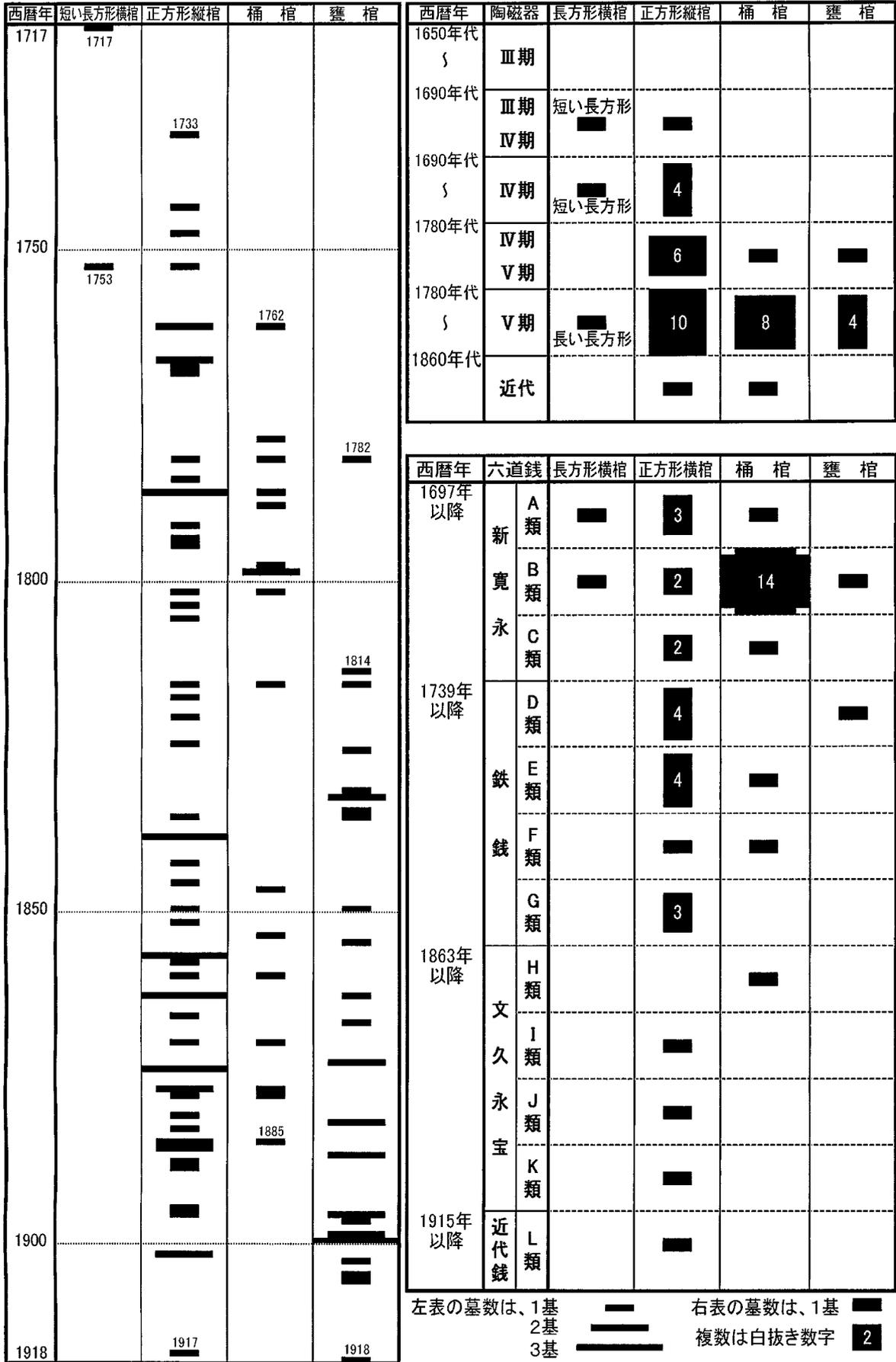
本節では、本章第4節において確定・推定した埋葬年代から墓形態の変遷を概観してみたい。

第121図は、第1・2・40・41号墓地全体の棺形態消長図である。左側の図は、死亡年（西暦年）毎に棺形態別の墓数を表示したものである。検討するには資料数が少ないため、参考として右側上に陶磁器の時期区分毎に、また、右側下に六道銭の分類毎に棺形態別の墓数を表示した。3つの図を対比すると次のことがわかる。

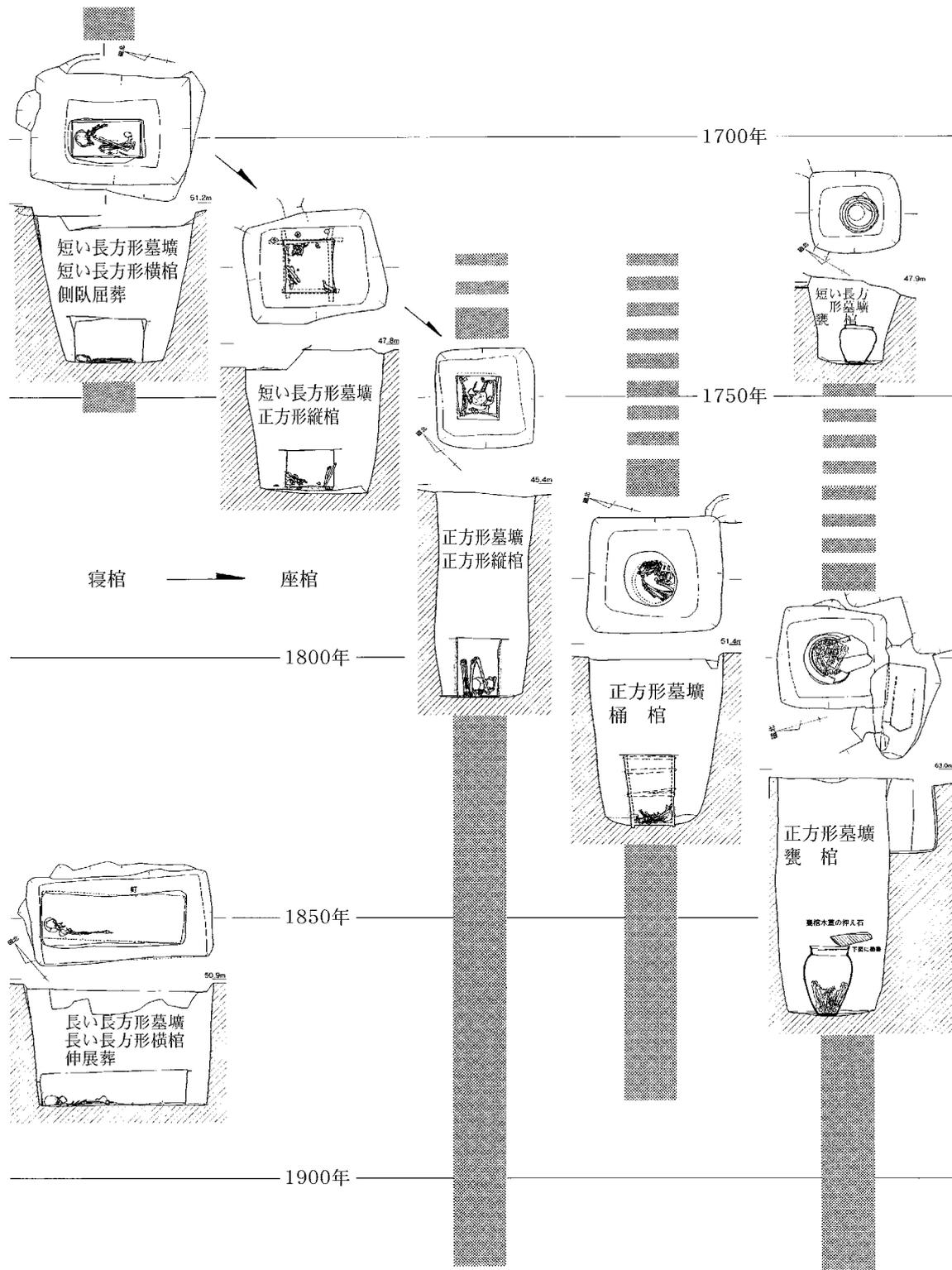
- ① 資料数は少ないが、短い長方形横棺は3つの図とも最も古く位置付けでき、存続期間も短い。年代としては、下限は1750年代、陶磁器の時期区分でみると1780年代である。
- ② 長い長方形横棺は、第40号墓地第26号1基だけである。副葬された陶磁器の時期区分はV期であり、短い長方形横棺とは連続性はない。
- ③ 正方形縦棺は、3つの図とも最も資料数が多く、存続期間も最も長い。最古の年代は1733年であり、短い長方形横棺と併存する期間がある。短い長方形横棺が無くなってから、数量が増えている。
- ④ 桶棺は、死亡年と陶磁器の時期区分でみると短い長方形横棺が無くなってから出現しているが、六道銭の分類では最も古いA類にも認められ2番目に古いB類に最も多く集中している。このことは一件矛盾してみえるが、桶棺の副葬状況をみると、古い段階では六道銭のみで陶磁器の副葬はなく、新しい段階では六道銭と共に陶磁器の副葬が多くなされている。その副葬品の変革期は、六道銭の分類から1739年以降で、陶磁器の時期区分から1780年までの間に考えたい。また、下限は3つの図から幕末～近代までである。
- ⑤ 甕棺には、大きく2種類がある。1つは、いわゆる「ハンズーガメ」と呼ばれる18～19世紀生産の肥前産陶器の大甕であり、第1・40・41号墓地の甕棺の全てである。ハンズーガメの棺の使用は18世紀第4四半期以降であり、正方形縦棺同様、近代まで存続している。他の1つの甕は、今回埋葬年代の検討から除外しているが、第2号墓地第1号墓の棺甕である。1630年代～17世紀末の肥前産陶器甕であり、ハンズーガメとは趣を異にし、円形浮文・波状文沈線などの装飾を施した甕である。不明銭2枚を含む六道銭が副葬されているが、おそらく新寛永を主体とするB類と考える。ハンズーガメの甕棺との間にやや年代差があり両者の連続性は断言できず、この1点だけで甕棺主体の上限を17世紀まで遡らせることはできない。六道銭の分類からして、短い長方形横棺と併存する正方形縦棺や桶棺よりも著しく古いとは考えにくい。

以上①～⑤を整理し、墓壙を含めた墓形態の変遷を図にしたのが第122図であり、下記のことがわかる。

- ① 人骨の出土状態から、短い長方形横棺は側臥屈葬、長い長方形横棺は伸展葬であり、両者とも寝棺の棺形態であるが、両者の間に連続性は認められない。
- ② 人骨の出土状態から、正方形縦棺・桶棺・甕棺における葬位はいずれも立膝座葬であり、座棺の棺形態である。
- ③ 短い長方形横棺が最も古い棺形態であり、上限は不明であるが、下限は18世紀第3四半期頃と考える。



第121図 死亡年・陶磁器・六道銭による棺形態消長図



第122図 原田第1・2・40・41号墓地墓形態変遷図 (縮尺任意)

- ④ 次に、正方形縦棺と桶棺が18世紀第2四半期頃出現し、しばらく短い長方形横棺と併存し、短い長方形横棺の消失後は長い間使用されている。特に、正方形横棺が主流である。
- ⑤ 甕棺は、一部18世紀代に使用されているが、主体は19世紀代のハンズーガメであり、長く使用されている。
- ⑥ ①～⑤の棺形態の消長は、墓壇形態も含めて、長方形（屈葬の寝棺）から正方形（座棺）への埋葬形態の変化を意味している。
- ⑦ 両方の埋葬形態は18世紀第2～3四半期に併存しており、18世紀中頃を横位から縦位に変化する葬位の変革期と位置付けできる。
- ⑧ 短い長方形墓壇に座棺を埋納した墓は中間的な埋葬形態であり、変革期における過渡的状況を示していると考えられる。

注 釈

- 1 陶磁器は佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の鑑定によるものであり、時期区分は同氏編年（文1）を引用した。

区 分	年 代	区 分	年 代
I 期	1580～1600	IV期	1690～1780
II期	1600～1650	V期	1780～1860
III期	1650～1690		

- 2 第40号墓地第1号壺棺は、墓壇形態不明のため除く。
- 3 本来六道銭としての完全セットの6枚組のものだけで検討すべきであろうが、6枚組のもので検討できるものは37基と少ないため、2枚以上のものは全て検討対象とした。
- 4 6枚組の場合、A3枚+B2枚+C1枚はAを主体とするものとし、A3枚+B3枚ではA・Bどちらにも主体はないものとした。
- 5 鑄造年は「大」しか判読できず、同一銭は大正5年に改正されたため、ここでは大正1～4年と考えた。
- 6 大雨で原位置を動いた人骨は、凶化しなかった。
- 7 人骨の年齢は、形質人類学上の表示であり、文5の例言に従った。

表 示	年 齢	表 示	年 齢
新生児		成 年	20～39歳
乳 児	0～1歳	成年～熟年	40歳前後
幼 児	1～6歳	熟 年	40～59歳
小 児	6～12歳	熟年～老年	60歳前後
若 年	12～19歳	老 年	60歳以上
若年～成年	20歳前後	成 人	20歳以上

- 8 副葬陶磁器の生産年代からも、第25号墓棺内副葬の染付磁器碗は1820～60年代で、第1号壺棺内副葬の磁器瑠璃釉仏飯器は幕末～明治であり、肯首できる。
- 9 墓籍では死亡年を明治10年4月22日と記載されている。
- 10 第14号墓石の山内ぬいは、墓籍には山内ヌイとカタカナで記載されている。
- 11 墓籍・墓籍地図では、山内弥作の墓は別の位置に離れて配されているが、墓石だけを夫婦一緒に建立している。
- 12 文6の第2・4・6・8表参照。
- 13 「死亡年」とすべきであるが、中には副葬品だけの推定年代もあるため、「埋葬年代」とした。

文 献

- 1 大橋康二 「肥前陶磁」48頁 『考古学ライブラリー 55』 ニューサイエンス社 1989
- 2 櫻木晋一 「原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭」『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』第3節 筑紫野市文化財調査報告書 第79集 2004
- 3 西南学院大学民俗学研究会「福岡県筑紫野市」『西南学院大学民俗調査報告』第3輯 122頁 1984
- 4 森山栄一 「旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について」『原田第1・2・40・41号墓地 下巻』第6節 筑紫野市文化財調査報告書 第79集 2004
- 5 九州大学医学部解剖学第二講座編「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成」『日本民族・文化の生成』 六興出版 1988
- 6 筑紫野市教育委員会『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』筑紫野市文化財調査報告書 第77集 2003

第IV章 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨

はじめに

われわれ日本人は過去の生い立ちにおいて、弥生時代はもとより歴史時代においてもかなり激しい変化を遂げてきたことが、これまでの人類学的な諸研究によって明らかにされている。とりわけ長頭性や歯槽性突顎を強める中世人の特異な時代特性や、その後の近世期から現代にかけての全身各所に及ぶ激しい変化など、その要因解析を求められる人類学上の課題が山積している。

こうした変化の要因を考察する上で重要な一つの問題点として、都市生活の影響とすることがこれまでに指摘されている。歴史時代、とりわけ中世以降、各地で形成されつつあった都市での生活が、その住民に具体的にどのような影響を与えたのか、過去において都市とそれ以外の住人との間にどのような違いがあり、それが時代とともにどう変化してきたのか、そうした点は、現在まで続いている急激な形質変化の要因を考察する上で、研究上の一つのステップとしてまず明らかにしておくべき懸案になってこよう。

北部九州でも、先年、商都・港町として永い歴史を持つ博多から大量の江戸時代人骨が出土し、その分析の結果、周辺域の現代人よりさらに面長で鼻筋の通った顔つきに変化していることが明らかになった。そうした変化の背景を探るためにも、同じ江戸時代の、当地方の都市部以外の資料と比較する必要性が痛感されたが、今回、福岡県南部の筑紫野市からようやく資料としてまとまった江戸時代人骨が出土した。これまで、都市部以外の近世人骨の調査例はごく限られているのが現状であり、当遺跡出土の人骨群は貴重な比較資料になるものと考えられる。以下にはまず、遺跡の概要と、頭蓋骨および四肢骨についての分析結果を報告する。

第1節 遺跡と資料の概要 (第1・2表、第34～67図、図版3～29)

筑紫野市は福岡県の南部、太宰府市の南に隣接しており、かつての筑前、筑後、肥前の三国が境を接する地域にあたる。江戸時代は、長崎と豊前小倉を結ぶ九州内の幹線道路であった長崎街道がこの地を通っており、当遺跡はその街道筋にあった宿場町の住人が営む墓地である。この地にいつごろ宿場ができたのかは明確ではないが、1638年、寛永15年に勃発した島原の乱を鎮圧するために派遣された松平信綱の軍勢がこの原田宿に宿営した記録が残されており、遅くともその時点では当地が宿場としての機能を果たしていたことが伺える。

遺跡はこの宿場町の外れ、20メートル足らずの小高い丘の頂上とその麓に築築されており、そこから250基近い墓が検出された。時代は墓石に記された年代で見ると、1584年を最古として、ほとんどが18世紀以降の江戸時代後半から終末、一部は明治時代のもので占められている。文1)

出土人骨を第1表に一覧した。男性66体、女性54体、性不明49体で、総个体数は計169体を数える。やや男性が多いが、緻密質の薄い女性人骨は男性より土質の影響による腐食を受けやすく、その点を考慮すればこの男女差は特に不自然とは言い難い。ただ、そうした腐食による消失を考慮してもなお、未成人の比率(29体、17.2%)は不自然に低く(第2表)、特に乳児死亡者が全死亡者

原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨

第1表 原田第1・2・40・41号墓地出土人骨

墓地	墓番号	性別	年齢	棺形態	埋葬姿勢	方位	改葬	備考		
第1号墓地	2	?	成人	壘	立膝座葬					
	3	?	成人				有	火葬骨		
	4	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬					
	5	?	成人	壘	立膝座葬		有			
	6	?	成人	壘	立膝座葬		有			
	7	男性	老年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
	8	男性	老年	正方形縦棺	立膝座葬					
	9	?	幼児	正方形縦棺	立膝座葬		有			
	10	?	成人	正方形縦棺	立膝座葬					
	12	男性	熟年	壘	立膝座葬		有			
	13	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬					
	14	女性	成人	正方形縦棺	立膝座葬		有			
	16	?	成人	正方形縦棺	立膝座葬		有			
	18	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬		有			
	21	?	成人	壘	立膝座葬		有			
	22	?	幼児		立膝座葬			5歳位		
	23	女性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	西向				
	24	女性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	25	?	若年	正方形縦棺	立膝座葬	南南西向				
	26	?	若年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	27	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	28	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	29	?	小児	正方形縦棺	立膝座葬	南西向		7~8歳		
	30	男性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	31	女性	熟年	壘	立膝座葬	南南西向				
	32	?	成人	壘	立膝座葬	南西向	有			
	33	女性	熟年	壘	立膝座葬		有	頭髮(BかAB型)		
	34	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	35	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬					
	36	男性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	37	?	?	正方形縦棺			有			
	38	?	成人?	正方形縦棺			有			
	39	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向				
	40	男性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
	41	女性	熟~老年	正方形縦棺	立膝座葬	西向				
	43	女性	老年		立膝座葬					
	44	?	成人				有?			
	45	?	?	長方形横棺			有			
	46	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬		有			
	47	?	成人				有	火葬骨		
	48	男性?	熟年							
	49	?	若年		立膝座葬		有			
	50	?	小児	正方形縦棺	立膝座葬		有	8~11歳		
	54	女性?	成人	正方形縦棺	立膝座葬					
	55	男性	熟年	壘	立膝座葬	南西向				
	58	男性	成人	正方形縦棺	立膝座葬	西向				
	59	?	成人					火葬骨		
	第2号墓地	1	?	?	壘					
		2	?	成人	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向			
		3	男性	熟年	立膝座葬	立膝座葬	南西向			
		4	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向			
		5	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向			
		10	男性?	成人		側臥屈葬				
		第40号墓地	1	男性	熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向		
			2	男性	成年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向		
			4	男性?	熟年	桶	立膝座葬	南西向		
			5	男性	熟年	桶	立膝座葬	南西向		
	6		?	成人	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向			
	8		男性	成人	長方形横棺	右側臥屈葬				
9	女性		熟年	桶	立膝座葬	南西向				
10	男性?		老年	長方形横棺	右側臥屈葬	北西頭南西向				
11	男性		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
13	男性		熟年	正方形縦棺	立膝座葬	やや北西向				
14	?		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北西頭南西向				
15	?		未成人							
16	女性		熟年	長方形横棺	仰臥屈葬	北頭				
17	男性		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
18	男性		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
19	女性		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
22	男性		成年	正方形縦棺	立膝座葬	北西向				
23	男性		熟年	正方形縦棺	立膝座葬	北西向				
25	女性		成年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
1号壘棺	?		乳児	壘						
26	女性		熟年	長方形横棺	仰臥伸葬					
27	男性		熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向				
28	女性		熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向	有?			
29	男性		熟年	桶	立膝座葬	西向				
30	?		成人	正方形縦棺	立膝座葬	西向?				
33	女性		熟年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向				
34	女性		成年	壘	立膝座葬	南西向		頭髮(B型)		
35	女性		老年	桶	立膝座葬	南西向				
36	女性		成年	桶	立膝座葬	西向	有?			
37	?	成人	正方形縦棺							
38	女性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向					
39	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向					

墓地	墓番号	性別	年齢	棺形態	埋葬姿勢	方位	改葬	備考
第40号墓地	41	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		有
	44	女性	熟年~	正方形縦棺				
	46	?	成人	桶				有
	49	男性	老年	長方形横棺	右側臥屈葬	北頭西向		
	50	?	幼児	正方形縦棺				
	52	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		
	59	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬			
	61	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬			
	64	女性	成年	正方形縦棺	右側臥屈葬			有?
	66	女性?	成年	桶				有?
	70	?	成年					火葬骨
	71	男性	老年	桶	立膝座葬			
	72	?	乳~幼児					
	73	女性?	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向		
	74	男性	熟年	桶	立膝座葬	南西向		
	75	男性	老年	壘	立膝座葬			
	78	?	幼児	桶				有?
	79	?	成人	正方形縦棺				
	83	男性	若年	正方形縦棺	立膝座葬	北西向		
	84	女性	老年	桶		南西向		
第41号墓地	1	女性	若年	壘	立膝座葬	南西向	有	頭髮(A型)・頭なし
	2	女性	老年	桶	立膝座葬	南西向	有?	
	3	男性	熟年	壘	立膝座葬	西向		頭髮(A型)・頭なし
	6	女性	熟年	壘	立膝座葬	北西向	有	頭髮(A型)・頭なし
	7	男性	老年	壘	立膝座葬	西向		
	8	男性	成年	壘	立膝座葬	北西向	有	頭髮(O型)?・頭なし
	9	女性	熟年	壘	立膝座葬	西向	有	頭なし
	10	男性	老年	壘	立膝座葬	北西向		
	11	女性	若年	壘	立膝座葬	西向	有	頭髮(A型)・頭なし
	12	男性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	北西向	有	頭なし
	16	?	幼児	桶	立膝座葬		有?	3~4歳
	17	?	幼児	桶	立膝座葬	西向		5~6歳
	18	女性	若年	桶	立膝座葬	西向	有	頭髮(B型)・15~16歳
	19	女性	熟年	壘	立膝座葬	西向		頭髮(A型)
	20	男性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	
	21	女性	成年		立膝座葬	西向	有	頭髮(A型)・頭なし
	22	男性	熟年	桶	立膝座葬	西向		頭髮(AB型)
	23	女性	熟年	壘	立膝座葬	北西向	有	頭髮(A型)・頭なし
	24	男性	熟年	桶	立膝座葬	西向		
	26	?	小児	桶	立膝座葬			6~7歳
	27	?	幼児	壘		南西向	有	4~5歳
	28	?	成人	正方形縦棺	立膝座葬		有	
	29	男性	熟年~	壘	立膝座葬	北西向	有	頭なし
	31	男性	熟年	壘	立膝座葬	西向	有	頭なし
	33	男性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		
	34	女性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	南西向		
	35	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	北西西向		
	36	女性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		
	37	?	乳児	正方形縦棺				
	38	女性	若年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		
	39	女性	老年	正方形縦棺	立膝座葬	北西向		
	40	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	頭なし
	41	女性	成年		立膝座葬			
	42	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		
	43	女性	成年	桶	立膝座葬	南向		
	44	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	頭髮(AB型)・頭なし
	45	?	乳~幼児					
	47	女性	成年	壘	立膝座葬	西向		頭髮(BかAB型)
	48	男性	成年	壘	立膝座葬	西向		
	49	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	
	51-A	男性	熟~老年	壘	立膝座葬	西向	有	頭なし
	-B	?	乳児					
	52	男性	老年	壘	立膝座葬		有	頭髮(B型)
	53	男性	熟~老年	桶	立膝座葬	西向	有	
	54	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	頭髮(AB型)
	55	女性	熟年		立膝座葬	南西向		頭髮(B型)
	56	男性	成人	壘	立膝座葬		有	頭なし
	57	男性	成年?	壘	立膝座葬		有	頭なし
58	女性	成年	壘	立膝座葬	西向	有	頭髮(O型)	
59	?	幼児	正方形縦棺	立膝座葬	西向		3~4歳	
60	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		頭髮(AB型)	
61	?	幼児	桶			有		
62	女性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	西向		頭髮(B型)	
63	男性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向			
64	?	乳児?				有		
68	男性	成年	正方形縦棺	立膝座葬	西向	有	頭髮(B型)	
69	男性?	成人		立膝座葬	西向	有	頭なし	
70	?	若年		立膝座葬	西向		頭なし	
73	?	乳児	桶		西向	有?		
74	?	乳児			西向			
75	女性	熟年	壘	立膝座葬	西向			
76	男性	熟年	壘	立膝座葬	北西向	有	頭なし	
77	男性	熟年				有		
78	女性	熟年	正方形縦棺	立膝座葬	西向			

第2表 性・年齢構成

原田1号墓地	乳児	幼児	小児	若年	成年	熟年	老年	成人	不明	計
男性	0	0	0	0	3	10	2	1	0	16
女性	0	0	0	0	0	4	4	2	0	10
不明	0	2	2	3	0	0	0	12	2	21
計	0	2	2	3	3	14	6	15	2	47
原田2号墓地										
男性	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
女性	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
不明	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
計	0	0	0	0	0	3	0	2	1	6
原田40号墓地										
男性	0	0	0	1	2	15	4	1	0	23
女性	0	0	0	0	6	9	2	0	0	17
不明	2	2	0	0	1	1	0	5	1	12
計	2	2	0	1	9	25	6	6	1	52
原田41号墓地										
男性	0	0	0	0	5	11	6	2	0	24
女性	0	0	0	4	6	12	3	1	0	26
不明	6	5	1	1	0	0	0	1	0	14
計	6	5	1	5	11	23	9	4	0	64
総計	8	9	3	9	23	65	21	27	4	169

の5パーセントに満たない状況は通常の死亡状況とは考えがたい(鬼頭、1983)文2)。何らかの社会的、人為的な要因が作用した結果であろう。未成人の中でも生まれて間もない乳児期は、時代や地域を問わず最も死亡率が高い時期であり、乳児死亡者が未成人死亡者の半数前後を占めるのが普通である。乳児死亡者、特に産後まもなく死亡した嬰兒については、地域、時代によって通常の埋葬行為から除外する例が多いが、この原田墓地を残した人々もそうした行為を行っていた可能性が高いと考える。

また出土状況図(第34～67図、図版3～29)にも示したように、遺体の多くは立膝座葬、もしくは西方に顔を向けた右側臥屈肢といった、ある特定の埋葬姿勢、頭位に集中する傾向があり、かなりの規則性が認められる。副葬品としては、六文銭の他、櫛や煙管、あるいは入れ歯など多種に渉る。なお、一部では、頭髪も人骨とともに回収された。

なお、墓地の一部は改葬作業によって攪乱を受けており、その影響によって頭蓋など人骨の一部が抜き取られていた。それ以外は、骨の保存状態はおおむね良好である。

第2節 頭蓋骨の調査(第3～5表、第1～13図)

計測は主に Martin-Saller(1957)文3)に従い、頭蓋についてはその他 W.W.Howells(1973)文4)、鼻根部については鈴木(1963)文5)の方法を用いた。また、顔面の平坦度は Yamaguchi(1973)文6)の方法を用いた。なお、性判定には著者らの算出した方法(Nakahashi&Nagai, 1986文7);中橋(1988文8))を援用した。

頭蓋骨の計測結果を第3表に示し、また、主な項目についての比較結果を第4・5表に示した。

1. 形態的特徴

脳頭蓋(第1・2図)

強度の長頭性と高頭傾向が認められる。特に男性の頭長幅示数は73.6(第3表)と、比較群中で

第3表 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人頭蓋骨の計測結果

Martin	No.		男 性			女 性		
			n	M	S. D.	n	M	S. D.
M	1	頭最大長	25	185.3	6.00	26	172.8	5.95
M	8	頭最大幅	26	135.9	5.46	26	131.1	4.82
M	17	Ba-Br高	20	138.4	4.88	23	131.3	3.61
M	8/1	頭長幅示数	25	73.6	3.45	24	75.5	3.27
M	17/1	頭長高示数	19	75.0	2.54	22	76.1	1.98
M	17/8	頭幅高示数	19	101.0	4.30	20	100.9	3.66
M	5	頭基底長	20	104.1	4.32	21	97.1	3.52
M	9	最小前頭幅	24	95.7	4.22	25	91.1	3.64
M	23	頭蓋水平周	21	523.5	12.08	21	490.6	11.71
M	24	横弧長	23	310.9	11.21	21	297.7	9.26
M	25	正中矢状弧長	16	377.0	14.95	16	362.7	9.90
M	40	顔長	12	102.1	3.60	12	95.3	5.21
M	45	頬骨弓幅	19	136.1	4.14	19	123.7	3.22
M	46	中顔幅	18	99.5	3.29	19	94.5	4.23
M	47	顔高	11	121.6	7.31	13	112.2	5.38
M	48	上顔高	17	72.8	4.51	16	67.1	2.92
M	47/45	顔示数(K)	10	89.6	6.63	10	92.0	3.73
M	47/46	顔示数(V)	9	122.5	6.43	8	118.1	7.28
M	48/45	上顔示数(K)	14	53.3	3.65	12	54.6	2.04
M	48/46	上顔示数(V)	11	73.4	4.66	11	71.6	4.46
M	51	眼窩幅(左)	24	42.2	1.59	19	40.4	1.61
M	52	眼窩高(左)	24	35.0	1.77	17	33.9	2.00
M	52/51(L)	眼窩示数(左)	24	83.0	4.71	17	84.2	5.18
M	54	鼻幅	23	25.6	1.70	24	25.0	2.10
M	55	鼻高	25	51.2	3.53	25	47.2	1.98
M	54/55	鼻示数	23	50.0	5.07	24	53.0	4.52
M	50	前眼窩間幅	22	19.1	1.88	25	17.0	2.39
M	F	鼻根横弧長	22	21.9	2.12	24	19.1	2.25
M	50/F	鼻根彎曲示数	22	87.3	4.60	24	89.0	6.15
M	57	鼻骨最小幅	26	8.2	1.94	25	7.5	1.84
M	72	全側面角	6	85.0	4.05	12	83.0	2.66
M	73	鼻側面角	6	88.7	3.01	12	88.1	2.57
M	74	齒槽側面角	6	72.5	7.29	12	68.6	7.23
M	65	下顎頭間幅	11	123.4	6.98	9	117.8	6.87
M	66	下顎角幅	10	103.3	4.72	8	93.6	4.44
M	68	下顎体長	11	70.7	5.31	9	71.1	3.59
M	68-1	下顎骨最大投影長	11	104.0	4.90	8	102.0	3.51
M	69	オトガイ高	8	37.6	3.46	10	33.4	2.67
M	69-3	下顎体厚	13	13.5	1.51	13	12.0	1.83
M	70	下顎枝高	7	61.7	8.48	7	55.3	5.38
M	70a	下顎頭高	7	52.0	3.46	7	46.9	7.47
M	71	下顎枝幅	10	34.7	3.20	8	32.3	3.77
M	71a	最小下顎枝幅	10	34.5	3.03	9	32.3	3.54
M	79	下顎枝角	6	131.5	8.02	6	130.2	6.43
M	71/70	下顎枝示数	7	55.6	9.44	6	56.0	4.47
		前頭骨平坦示数	13	15.7	2.01	15	15.1	1.85
		鼻骨平坦示数	16	33.6	8.95	17	25.2	7.97
		頬骨平坦示数	6	24.5	0.38	7	23.1	1.97

最も低く(第4表)、一般的に長頭傾向が指摘されている中世の吉母浜(中橋・永井, 1985)文9)と比較してもなお強度の長頭性を示している。ただ、女性ではそれほど顕著ではなく、男女間でもや差が大きい。土圧による変形をきたしている個体は計測対象から外しているが、側臥屈葬が多い

第4表 主要頭蓋計測値の比較（男性）

	原田 (近世)		筵田青木 ¹⁾ (近世)		天福寺 ²⁾ (近世)		桑島 ³⁾ (近世)		湯島 ⁴⁾ (近世)		吉母浜 ⁵⁾ (中世)		西南日本 ⁶⁾ (現代)		
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
1	頭蓋最大長	25	185.3	32	181.0	38	182.6	13	180.1	92	183.5	16	181.8	108	181.4
8	頭蓋最大幅	26	135.9	32	139.4	38	138.6	13	131.0	92	141.1	17	136.2	108	139.3
17	Ba-Br高	20	138.4	29	138.1	33	139.2	11	135.9	91	138.5	17	139.4	108	139.3
8/1	頭長幅示数	25	73.6	32	75.6	37	76.0	13	72.7	92	77.0	16	74.9	108	76.6
17/1	頭長高示数	19	75.0	29	74.9	33	76.2	11	75.5	91	75.6	16	76.8	108	76.9
17/8	頭幅高示数	19	101.0	29	102.7	33	100.8	11	104.6	91	98.2	17	102.5	108	100.1
45	頬骨弓幅	19	136.1	31	137.8	25	136.4	5	126.3	81	136.4	18	135.2	106	134.5
46	中顔幅	18	99.5	28	101.6	24	101.8	7	101.1	91	101.6	19	100.3	107	99.9
47	顔高	11	121.6	22	122.5	14	126.9	4	122.4	4	123.5	11	117.3	66	122.2
48	上顔高	17	72.8	27	72.4	18	74.5	7	70.5	65	71.8	16	69.8	92	71.8
47/45	顔示数(K)	10	89.6	19	89.4	13	93.2	2	93.7	4	91.7	11	86.4	64	91.4
47/46	顔示数(V)	9	122.5	20	120.4	13	123.9	3	115.8	-	-	11	116.5	65	122.2
48/45	上顔示数(K)	14	53.3	23	53.0	17	54.4	5	55.4	56	53.0	16	51.7	90	53.5
48/46	上顔示数(V)	11	73.4	23	71.6	17	73.1	7	70.2	64	70.9	16	69.8	91	71.8
51	眼窩幅(左)	24	42.2	29	42.4	24	42.6	7	40.9	95	43.3	18	42.0	108	43.0
52	眼窩高(左)	24	35.0	29	33.7	24	34.1	8	34.4	95	35.1	18	34.4	108	34.4
52/51	眼窩示数(左)	24	83.0	29	79.4	23	80.9	6	83.6	95	81.6	18	82.1	108	80.2
54	鼻幅	23	25.6	30	26.8	24	26.5	8	25.9	93	25.1	17	26.0	108	25.9
55	鼻高	25	51.2	33	50.9	24	52.9	8	50.5	93	53.6	16	51.4	108	52.2
54/55	鼻示数	23	50.0	30	52.9	24	50.1	8	51.3	91	48.7	16	50.5	108	49.8
72	全側面角	6	85.0	18	84.2	16	83.2	7	80.4	71	85.1	15	82.5	92	83.8
74	齒槽側面角	6	72.5	17	71.3	16	67.0	8	64.5	71	68.4	14	65.2	107	70.7

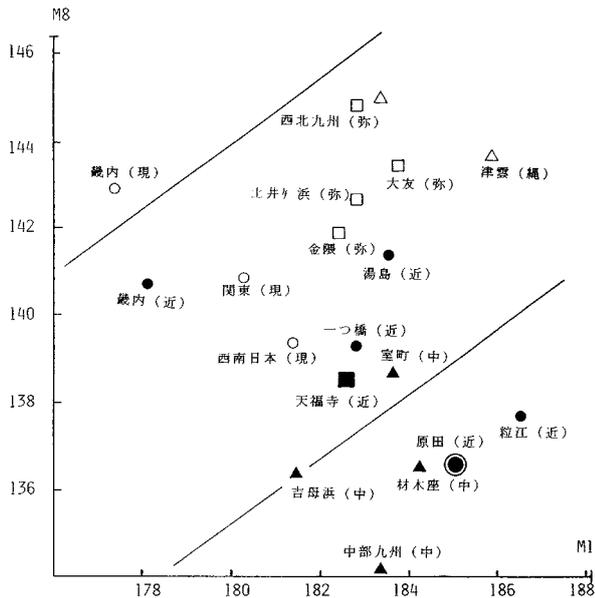
1)中橋(1993) 2)中橋(1987) 3)脇(1959) 4)森田・河越(1960) 5)中橋・永井(1985) 6)原田(1954)

第5表 主要頭蓋計測値の比較（女性）

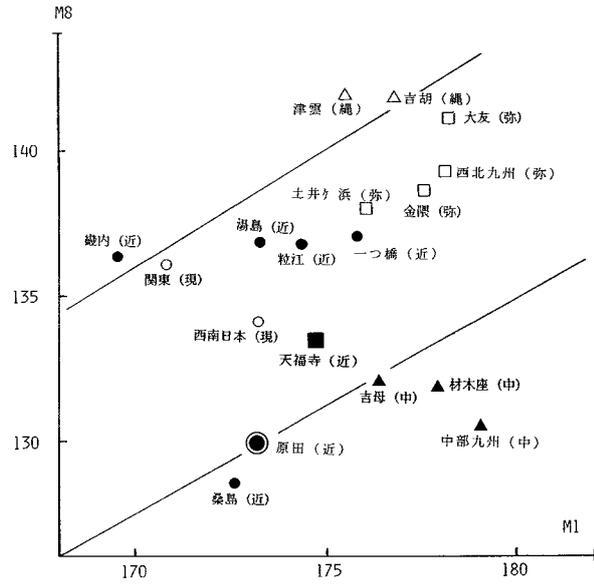
	原田 (近世)		筵田青木 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		湯島 (近世)		吉原 (近世)		吉母浜 (中世)		西南日本 (現代)		
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
1	頭蓋最大長	26	172.8	26	176.9	38	174.7	4	172.6	60	173.2	13	169.5	26	176.4	42	172.8
8	頭蓋最大幅	26	131.1	28	133.0	38	133.5	4	128.5	60	136.8	16	136.3	26	132.0	42	133.8
17	Ba-Br高	23	131.3	24	132.4	35	132.7	4	132.0	59	134.1	10	132.8	25	133.0	42	131.5
8/1	頭長幅示数	24	75.5	25	75.1	38	76.5	4	74.4	60	79.0	13	81.1	26	74.9	42	77.5
17/1	頭長高示数	22	76.1	23	75.1	35	76.1	4	76.5	59	77.5	9	77.9	25	75.4	42	76.2
17/8	頭幅高示数	20	100.9	23	100.6	35	99.4	4	102.9	59	98.1	9	97.0	25	100.7	42	98.4
45	頬骨弓幅	19	123.7	23	128.4	30	126.5	-	-	44	125.9	-	-	26	128.3	42	124.3
46	中顔幅	19	94.5	20	95.8	25	95.5	2	91.6	54	95.1	-	-	27	98.6	42	93.6
47	顔高	13	112.2	12	114.9	15	115.9	2	117.7	3	119.0	-	-	18	111.5	10	113.0
48	上顔高	16	67.1	14	67.6	22	68.8	2	71.4	38	68.3	-	-	19	65.5	48	68.6
47/45	顔示数(K)	10	92.0	11	89.8	15	91.1	-	-	-	-	-	-	18	86.3	10	90.5
47/46	顔示数(V)	8	118.1	12	120.9	15	120.9	2	128.6	-	-	-	-	18	111.5	10	118.3
48/45	上顔示数(K)	12	54.6	11	52.8	22	54.3	-	-	32	54.5	-	-	22	51.6	40	55.1
48/46	上顔示数(V)	11	71.6	12	71.0	22	71.8	2	78.0	35	72.3	-	-	22	66.5	40	73.2
51	眼窩幅(左)	19	40.4	19	41.3	30	40.5	2	39.8	54	41.7	9	39.8	25	41.1	42	40.7
52	眼窩高(左)	17	33.9	19	33.6	30	34.3	2	34.7	54	35.3	9	33.0	25	33.9	42	34.0
52/51	眼窩示数(左)	17	84.2	19	81.5	29	84.8	2	87.3	54	84.7	9	83.1	26	82.7	42	83.7
54	鼻幅	24	25.0	25	25.8	26	25.3	2	24.2	52	24.6	7	25.4	125	25.9	42	25.2
55	鼻高	25	47.2	24	52.8	28	49.9	2	49.9	52	50.4	7	48.3	125	48.6	42	48.7
54/55	鼻示数	24	53.0	24	52.8	26	51.0	2	48.4	50	49.2	7	53.2	125	53.5	42	51.9
72	全側面角	12	83.0	10	84.7	18	82.5	2	76.9	46	83.7	-	-	22	82.8	40	82.8
74	齒槽側面角	12	68.6	10	68.5	17	65.0	2	63.7	46	67.1	-	-	22	61.8	40	67.1

埋葬姿勢が一部影響した結果である危惧も完全には除去出来ず、この点については同地域での追加資料をまって評価すべきかもしれない。ただ、いずれにしろ男女とも、同じ時代ながら都市部の博多天福寺近世人(中橋、1987)文10)よりは長頭傾向が強い点は明らかである。

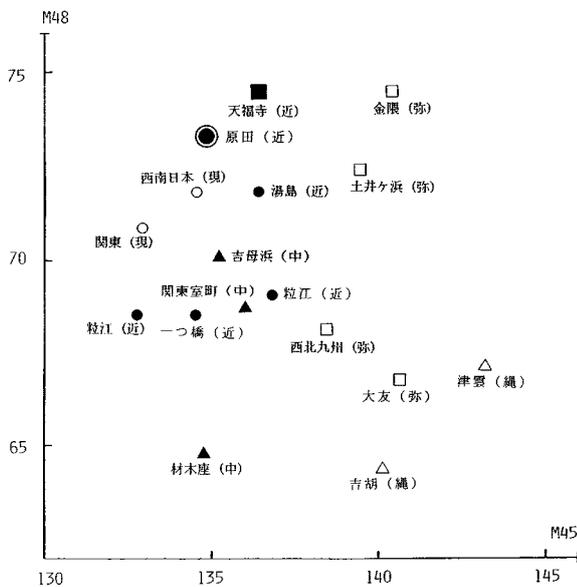
頭高については、女性の平均値が比較群よりやや下回っているが大差はなく、男性ではどの比較



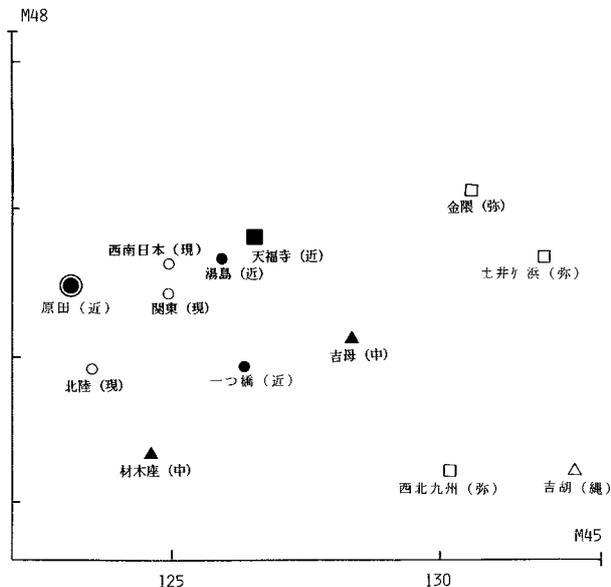
第1図 頭長幅示数の比較 (男)



第2図 頭長幅示数の比較 (女)



第3図 上顔高 (M48) と頬骨弓幅 (M45) (男)



第4図 上顔高 (M48) と頬骨弓幅 (M45) (女)

集団との間にも確差は見られない。長高、及び幅高示数で見た場合も、男女とも中世、近世の他集団と同様に高頭傾向を明らかにしている。

顔面部 (第3～5図)

男女ともかなり大きな個体変異が見られるが、概ね高・狭顔で、扁平な鼻根部という近世人的な特徴を共有している。

頬骨弓幅など顔幅については、原田男性の平均値は熊本県の桑島(脇、1959)文11)を除く他地域の近世人や西日本現代人(原田、1954)文12)とは大差ない(第4表)が、女性の頬骨弓幅は比較群中

最小となっている。これは110mm代の強度の狭顔個体が数体含まれることが影響した結果であるが、比較群中では博多近郊の蓆田青木近世人（中橋、1993）文13）との差が特に顕著で、吉母浜中世人とも格差が見られるものの、西南日本現代人とは大差ない。

一方、上顔高では、男性では博多の天福寺には及ばないものの、西南日本現代人を上回っており、吉母浜中世人とは格差が見られる。女性ではそれほど顕著ではないものの、天福寺よりは低く、吉母浜よりは高いという比較関係では男性と共通している。

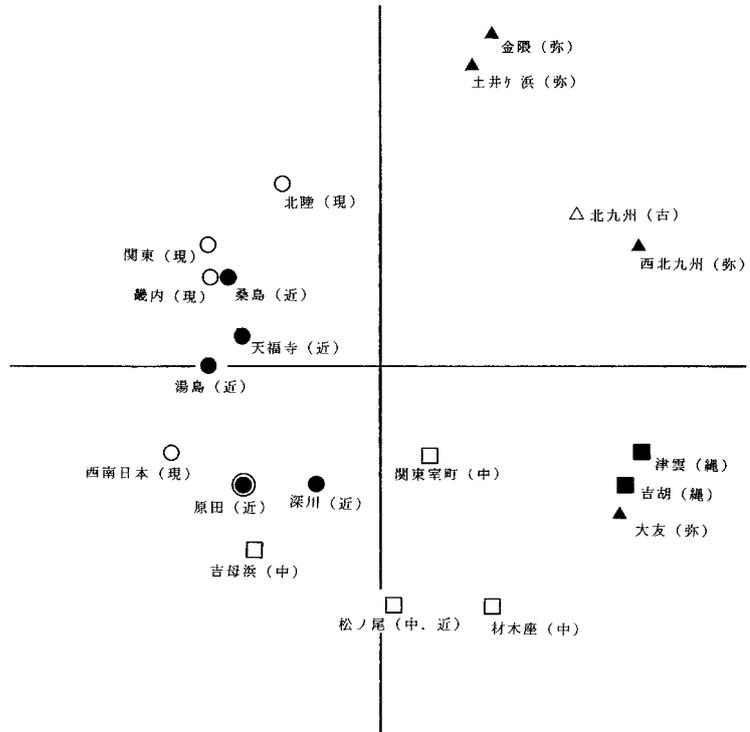
眼窩では男女ともかなりの高眼窩傾向が見られ、示数で見ると男性では天福寺を上回っている。また、男性の鼻型は現代人と同程度の狭鼻傾向を見せるが、女性ではやや広鼻傾向が見られ、その示数の平均値は吉母浜中世人を除く他の比較集団を上回っている。

鼻根部は第3表にその平均値を示したようにかなり扁平であり、前頭部や頬上顎部にも同傾向が認められる。天福寺近世人（前頭骨平坦示数：男性16.2、女性15.1、鼻骨平坦示数：男性38.1、女性28.5、頬骨平坦示数：男性24.9、女性23.6）と比較した場合は、各示数いずれも下回っていてより平坦性が強いが、吉母浜中世人ほど強度のものではない。

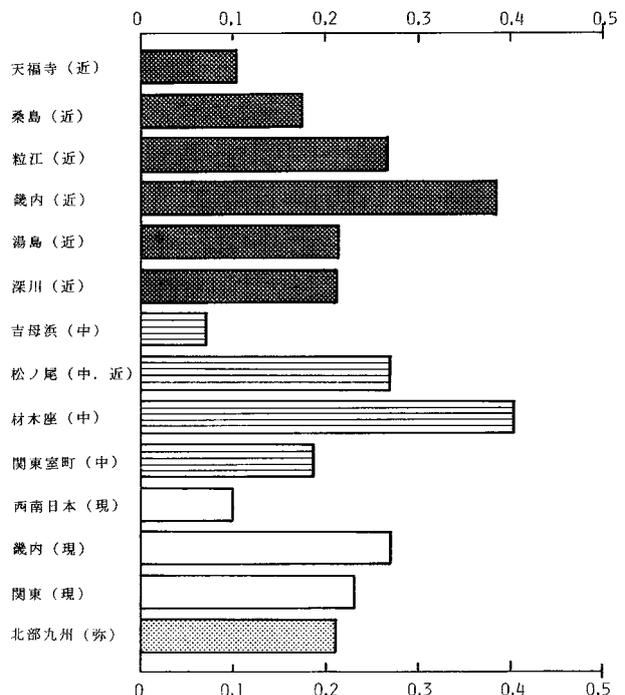
なお、中世人に顕著な歯槽性の突顎は原田では認められず、また、下顎は現代人に比べてやや頑丈ではあるが、その差は顕著ではない。

2. 比較分析（第5～13図）

まず、原田近世人頭蓋の特徴について、各地域、時代の諸集団とのおおよその比較関係をみるために、頭蓋9項目を用いてQモード相関係数を算出し、数量化IV類で二次元展開した結果を第5図に示した。原田は他の中～現代人に近く位置し、その時代性を示しているが、その中でもやや中世人に近い位置を採



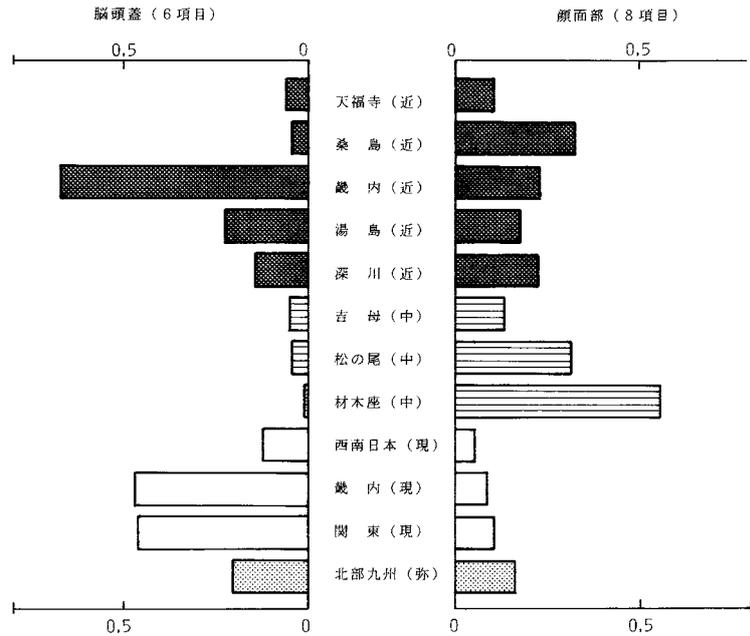
第5図 頭蓋9項目によるQモード相関係数（男）



第6図 Penrose の形態距離（男性頭蓋・9項目）

っている。

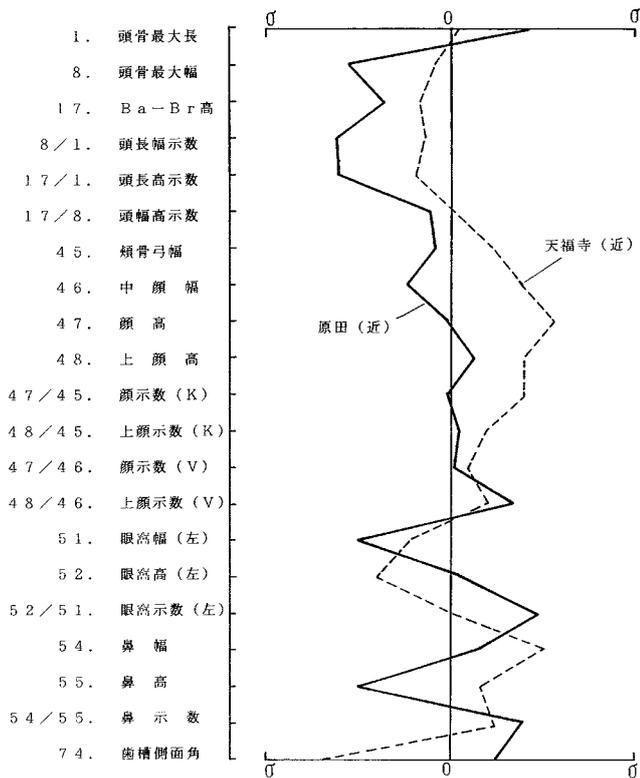
さらにペンローズ形態距離（第6図）でもう少し詳しく見ると、原田は山口県の吉母浜中世人に最も近く、西南日本人や天福寺など同地域の集団とも類似して、かなり明確な地域性が示されている。同時にまた、畿内近世人（欠田、1959）文14）や材木座中世人（鈴木尚、1956）文15）とは形態的にやや遠い関係も見て取れよう。しかし、これを脳頭蓋と顔面部にわけて計算し直すと（第7図）少し様相が異なり、こうした地域性には長頭性の程度が一部影響しているようで、短頭性の強い畿内近



第7図 Penrose の形態距離

世人との差は主に脳頭蓋の違いに帰因すること、一方、材木座中性人との差は主に顔面部の違いに因ることが示されている。畿内の短頭傾向は中世では確認出来ないものの、遅くとも近世に入ると北部九州との間で頭型に関する大きな地域差が生まれる点は、今後、長頭化・短頭化の要因解明の議論の中で注目すべき論点となろう。さらに地理的に遠い関東とはすでに弥生時代から高顔性に地域差が見られるが、その傾向は中世段階でも確認されており文9)、中世から近世へとやや高顔化が進む北部九州近世人と比較した場合、よりその差が明確になるのはいわば当然であろう。関東でも江戸の近世人の中には、湯島（森田・川越、1960）文16）のように高顔化を明確にする資料も現れ、この点での両地域の差は時代とともに減少していくものと考えられる。

次に、先の分析（第5図）で見られた近隣の博多天福寺近世人との差についてももう少し詳しく見ておきたい。第8図は現代西南日本人を基準線にした偏差折線で比較したものであるが、原田は天福寺に比べてより長頭で、やや低顔に傾き、この図には示していないが、鼻根部を始めとする顔面の平坦性がより強い傾向が認められる。さらに第9図は顔面8項目を用いた主成分分析の結果であるが、天福寺は顔面高径のみ



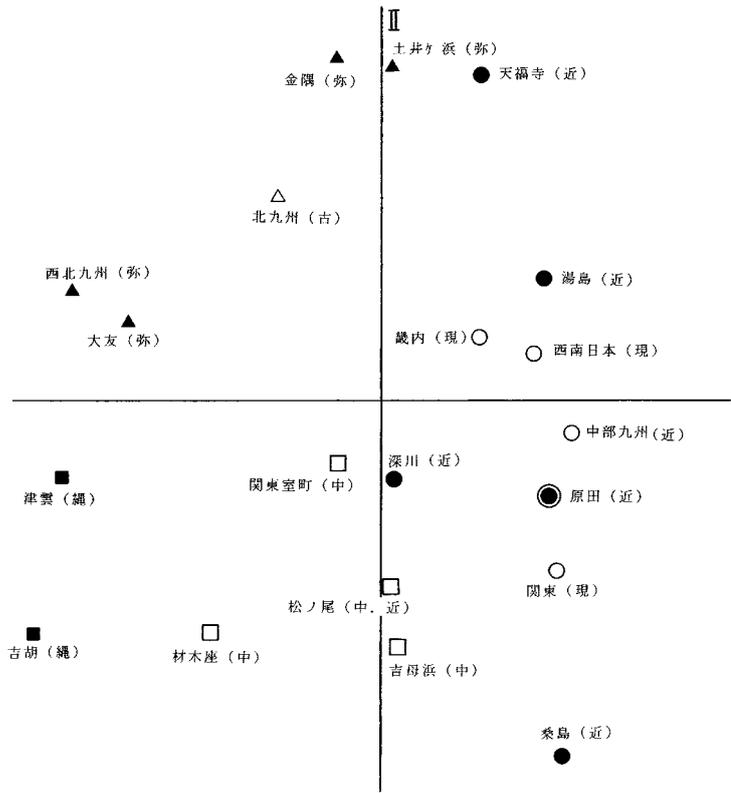
第8図 現代西南日本人骨を基準にした偏差折線（男性）

ならず幅もやや広く、金隈弥生人(中橋・土肥・永井、1985)文17)などと比べても遜色ない顔面サイズを持つが、原田にはそのような傾向は認められない。むしろ吉母浜など中世人にも比較的近い位置をとっており、上記の分析結果と合わせて、古くから港町、商都して栄えた博多の同時代人よりは中世的傾向を幾分残した集団と言えよう。

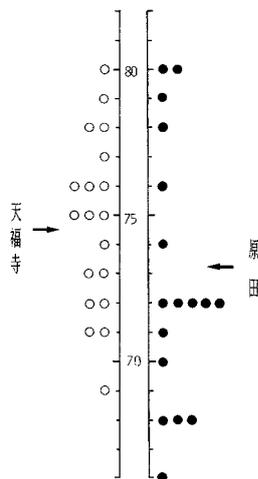
ただし、原田近世人の中には上でも触れたようにかなりの個体変異が見られ、例えば各個体の上顔高の分布を天福寺と比較してみると、第10図のように原田は著しい個体差を示し、この図を見る限りは一集団が見せる分布パターンとしては不自然な観すらあろう。この傾向は上顔高だけではなく頭蓋9項目を用いた主成分分析の結果

(第11図)でも確認できる。女性にはこうした著しい変異は見られず、おそらくはこの差も影響して、原田では性差がやや大きい傾向も見られた(第12図)。

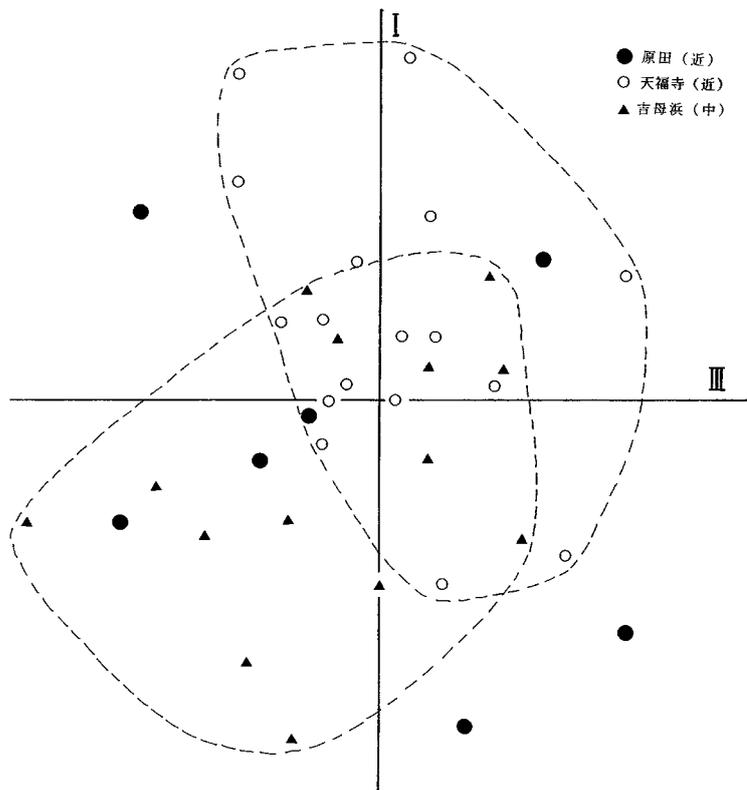
こうした傾向の要因は明確ではないが、その考察で一つ注目されるのは、原田が江戸時代の宿場町であったことがあげられる。女性



第9図 主成分分析 (男性・顔面8項目)



第10図 上顔高

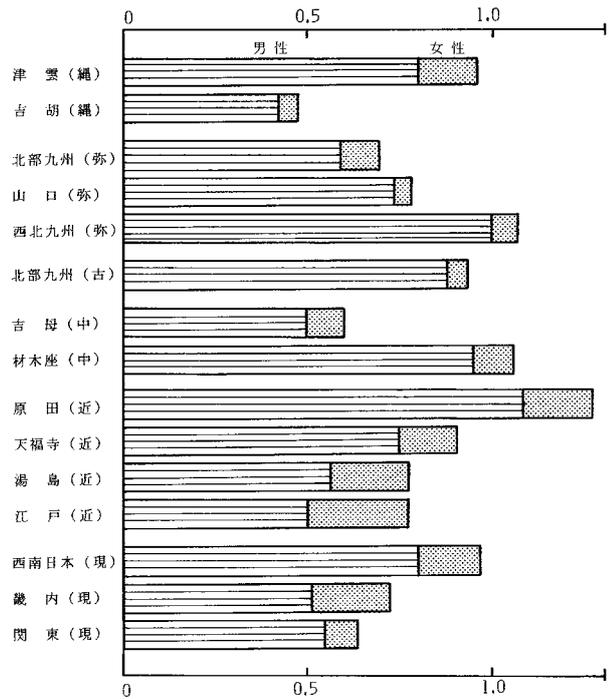


第11図 主成分分析 (男性・頭蓋9項目)

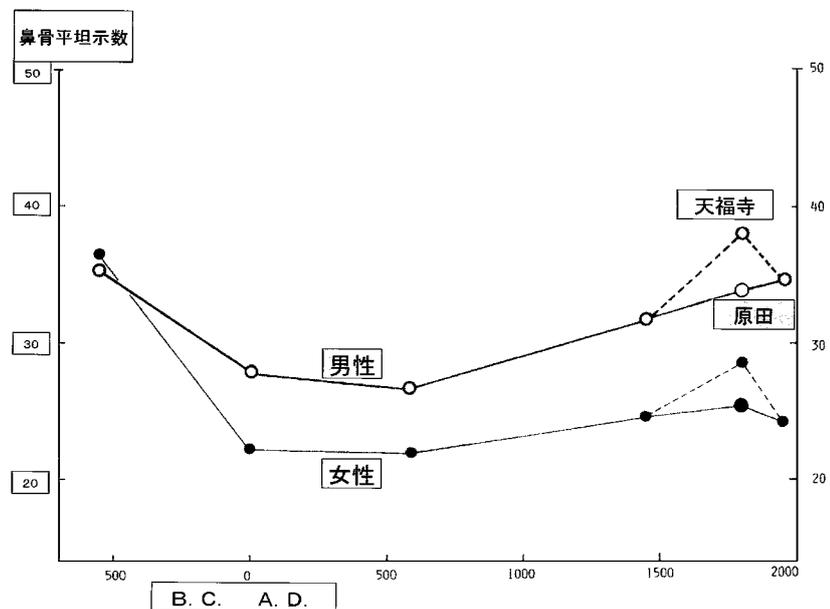
より男性に変異が大きい点は、他地域の、それもおそらくは主に男性が行き交うこの集団の特異な状況が影響した結果と考えるても不合理では無かろう。全国的にも原田のような宿場町の江戸時代人について研究した例は見あたらず、この点は今後の類例を持って検証を加えたいと考える。

また、原田との関係でも浮かび上がってきた天福寺近世人のやや特異な形質については、やはり、博多という都市環境の影響は無視出来ないであろう。都市環境と言っても食生活や住環境などその具体的な内容は多岐にわたり、まだ特定するには至っていないが、天福寺が同じ都会の住人であった江戸の湯島近世人と比較的近い傾向を示す点は興味深い。ちなみに第13図は鼻骨平坦示数の時代変化を示したものであるが、原田に比べて天福寺は時代的な変化傾向の中でやや異質な傾向を見せており、その特徴が当時においてはやや特異なものであったことを窺わせている。

いずれにしても、原田近世人は否都市部の、しかも宿場町という、全国的にも殆ど類例のない条件を備えた近世人集団であり、今後、短頭化現象やいわゆる都市効果など、人の特徴に大きな変化をもたらした要因の解明に貴重な考察資料になるものと考えられる。



第12図 ペンロースの距離でみた性差(頭蓋9項目)



第13図 鼻骨平坦示数の時代変化

第3節 四肢骨の調査 (第6～23表、第14～33図)

1. 調査の方法

計測は Knussman (1988) 文18) と馬場 (1991) 文19) に従った。資料は第1・2・40・41号墓地から出土しているが、これらは同一地域内にあり別集団とする根拠はないと思われるので、集計および分析の際には一括して取り扱った。また、比較資料として用いた集団は、福岡市天福寺の江戸時代人 文20)、関東江戸時代人 文21)、九州現代人 文22～25)、関東現代人 文26～30)、津雲縄文人 文31・32)、金隈弥生人 文17) である。

2. 上肢骨

上肢骨の計測結果を第6表に示す。また、各部位ごとの概要を以下に記す。

第6表 上肢骨計測値

(mm)

			男 性					女 性					
			N	M	S.D.	MAX	MIN	N	M	S.D.	MAX	MIN	
上腕骨	1	最大長	r	17	295.2	16.11	330	271	9	267.0	10.00	285	252
			l	15	294.4	15.77	327	272	8	260.4	10.56	276	243
	2	全 長	r	14	290.1	15.36	320	267	6	263.3	11.25	279	249
			l	15	290.3	15.27	321	269	5	258.6	7.37	267	251
	3	上 幅	r	10	46.0	2.45	50	41	4	42.3	2.06	45	40
			l	8	44.6	2.62	49	40	5	41.2	3.11	46	38
	4	下端幅	r	14	57.0	3.84	62	49	6	51.8	3.49	57	49
			l	15	57.3	3.87	63	49	5	51.0	3.54	57	48
	5	中央最大幅	r	26	22.8	1.29	25	20	13	19.4	1.04	21	18
			l	22	22.8	1.57	26	20	10	19.0	0.94	20	17
	6	中央最小幅	r	26	17.6	1.33	20	15	13	14.8	1.09	16	13
			l	22	17.8	1.44	20	15	10	14.8	0.92	16	13
	7	最小周	r	42	63.6	4.08	75	53	23	54.1	3.18	60	47
			l	28	63.5	4.44	69	52	14	52.9	2.30	57	48
7a	中央周	r	26	67.8	3.43	73	58	13	57.8	3.44	63	52	
		l	22	67.8	3.49	74	60	10	56.3	3.06	60	52	
8	頭周径	r	10	134.0	8.46	146	113	5	118.6	3.91	125	115	
		l	7	129.4	10.64	145	115	5	119.4	3.78	125	115	
9	頭横径	r	10	41.0	2.75	45	35	5	36.4	1.52	39	35	
		l	10	39.7	3.59	45	35	5	37.6	1.82	40	35	
10	頭高径	r	10	43.7	2.79	47	37	5	38.8	1.92	42	37	
		l	7	41.4	3.31	46	36	5	38.8	1.92	42	37	
6/5	体断面示数	r	26	77.1	4.19	86.4	69.6	13	76.2	3.85	84.2	68.4	
		l	22	78.4	5.43	90.9	65.4	10	78.0	5.52	88.2	70.0	
7/1	長厚示数	r	17	21.4	1.61	24.3	18.9	9	20.2	1.57	22.3	18.0	
		l	15	21.4	1.54	24.7	19.4	7	20.2	1.19	21.6	18.8	
尺骨	1	最大長	r	15	240.7	13.79	262	215	6	219.2	7.83	226	207
			l	10	247.8	16.67	269	220	9	215.1	10.37	231	198
	2	生理長	r	19	212.5	12.30	233	188	6	193.5	7.40	201	183
			l	14	216.7	14.22	239	194	12	191.5	7.79	207	182
	3	最小周	r	28	40.7	3.02	47	34	15	34.7	2.69	39	30
			l	24	40.9	3.28	47	34	16	36.2	2.93	42	32
	11	体矢状径	r	38	12.9	1.19	16	10	25	10.7	0.85	13	9
			l	38	12.8	1.33	15	10	18	11.1	0.96	13	10
	12	体横径	r	38	17.4	1.06	21	15	25	14.4	1.19	16	12
			l	37	17.0	1.22	19	13	18	14.4	1.04	16	12
	3/2	長厚示数	r	19	19.4	1.31	22.6	17.6	6	18.3	0.92	19.4	17.0
			l	14	18.7	1.84	22.9	16.3	11	18.5	1.44	21.0	16.8
11/12	体断面示数	r	38	73.8	5.20	86.7	62.5	25	74.4	5.22	83.3	62.5	
		l	37	75.5	7.71	87.5	61.1	18	77.2	7.88	91.7	62.5	
橈骨	1	最大長	r	16	223.7	14.79	254	193	8	199.5	9.62	208	182
			l	14	225.8	11.62	250	206	10	196.4	8.62	208	180
	2	生理長	r	18	211.3	12.96	237	185	11	187.8	15.37	204	150
			l	17	211.8	11.26	238	195	12	185.2	12.66	196	149
	3	最小周	r	32	43.9	4.46	62	36	21	37.2	2.54	42	33
			l	30	43.6	3.06	49	34	16	37.8	3.85	49	33
	4	体横径	r	35	17.1	1.46	21	15	21	14.8	1.14	17	13
			l	32	17.1	1.53	20	14	18	14.4	1.42	17	12
	4a	中央横径	r	19	15.8	1.34	19	14	10	13.7	1.42	16	12
			l	18	15.8	1.38	19	14	9	13.6	1.33	16	12
	5	体矢状径	r	35	12.3	1.09	16	10	21	10.1	0.65	11	9
			l	32	12.2	0.97	14	10	18	9.8	0.62	11	9
	5a	中央矢状径	r	19	12.3	1.16	14	10	10	10.0	0.67	11	9
			l	18	12.4	0.86	14	11	9	10.0	0.87	12	9
	5(6)	下端幅	r	9	33.2	2.22	38	30	7	28.0	1.63	31	26
			l	13	32.1	2.10	36	27	9	28.1	1.62	32	27
	3/2	長厚示数	r	17	20.4	1.29	22.3	17.8	10	19.8	1.31	22.0	18.0
			l	16	20.5	1.05	22.5	19.1	9	20.0	1.28	22.1	18.4
	5/4	体断面示数	r	35	72.1	6.94	88.9	60.0	21	68.9	4.20	76.9	62.5
			l	32	71.7	6.78	86.7	60.0	18	68.8	6.38	83.3	56.3
5a/4a	中央断面示数	r	19	78.1	8.25	93.3	64.7	10	73.4	5.48	83.3	64.3	
		l	18	79.1	7.82	92.9	61.1	9	73.9	3.45	76.9	66.7	

1) 上腕骨

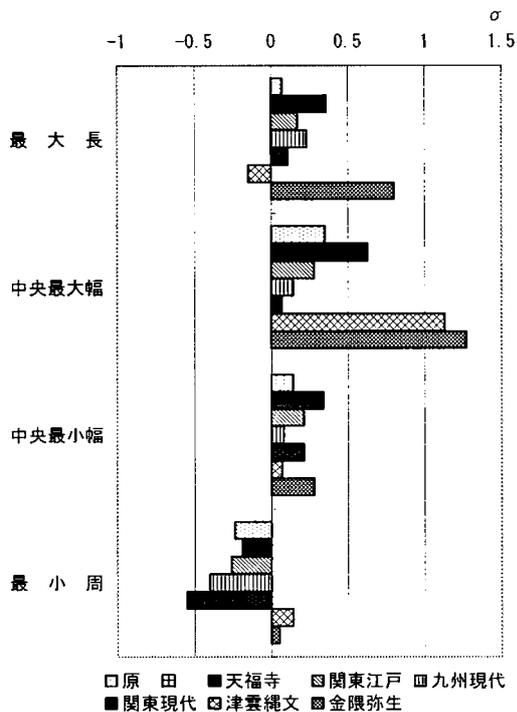
上腕骨の計測結果を比較群の平均値とともに第7・8表に示す。また、第14・15図は畿内現代人(文33)を基準として、その差を標準偏差単位で示したものである。長径については、男女とも高身長 of 渡来系集団である金隈弥生人が最も大きな値を示し、金隈弥生人以外は全体に小さい傾向を示している。原田は男女とも津雲縄文人に次いで長径が小さい。幅径、周径は津雲縄文人と金隈弥生人が大きく頑丈である。原田は他の江戸時代人とともにやや華奢である。

第7表 上腕骨計測値の比較 (男性)

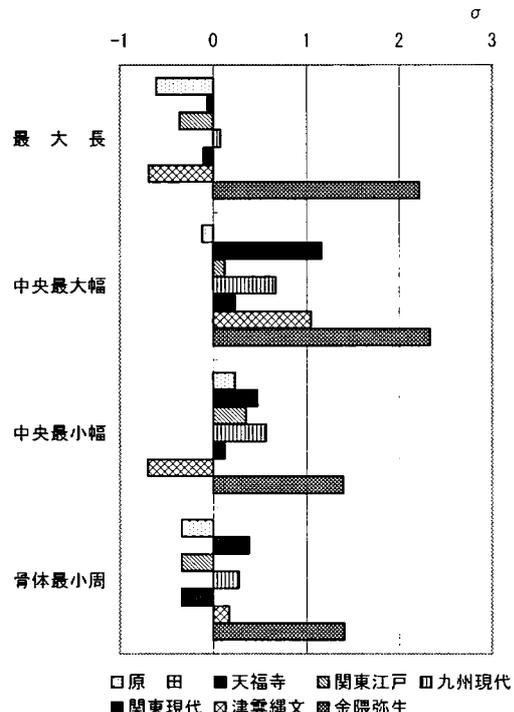
		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
1	最大長	17	295.2	16.11	299.6	296.8	297.7	295.9	292.0	306.2
2	全長	14	290.1	15.36	295.6	292.8	292.5	290.4	286.2	303.2
3	上幅	10	46.0	2.45	47.6	48.8	46.1	48.3	49.1	50.0
4	下端幅	14	57.0	3.84	59.6	59.6	57.1	59.0	58.4	58.5
5	中央最大幅	26	22.8	1.29	23.2	22.7	22.5	22.4	23.9	24.1
6	中央最小幅	26	17.6	1.33	17.9	17.7	17.5	17.7	17.5	17.8
7	骨体最小周	42	63.6	4.08	63.8	63.5	62.9	62.3	65.2	64.8
7a	中央周	26	67.8	3.43	67.0	69.4	64.8	66.2	69.7	70.2
7/1	長厚示数	17	21.4	1.61	21.1	21.4	21.1	21.1	22.8	21.6
6/5	体断面示数	26	77.1	4.19	77.4	78.3	78.1	79.6	72.7	74.0

第8表 上腕骨計測値の比較 (女性)

		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
1	最大長	9	267.0	10.00	272.9	269.7	274.4	272.4	266.2	297.0
2	全長	6	263.3	11.25	268.8	266.0	270.3	268.4	262.4	292.5
3	上幅	4	42.3	2.06	42.0	42.8	41.5	42.2	42.1	44.5
4	下端幅	6	51.8	3.49	50.8	50.8	50.3	49.9	50.7	50.0
5	中央最大幅	13	19.4	1.04	20.5	19.6	20.1	19.7	20.4	21.5
6	中央最小幅	13	14.8	1.09	15.0	14.9	15.1	14.7	14.0	15.8
7	骨体最小周	23	54.1	3.18	55.8	54.1	55.5	54.1	55.3	58.2
7a	中央周	13	57.8	3.44	59.0	56.9	57.5	57.3	58.6	61.8
7/1	長厚示数	9	20.2	1.57	20.4	20.1	20.2	19.9	20.5	19.5
6/5	断面示数	13	76.2	3.85	73.3	76.6	75.3	75.1	69.1	73.8



第14図 上腕骨計測値の比較 (男性)



第15図 上腕骨計測値の比較 (女性)

2) 尺骨

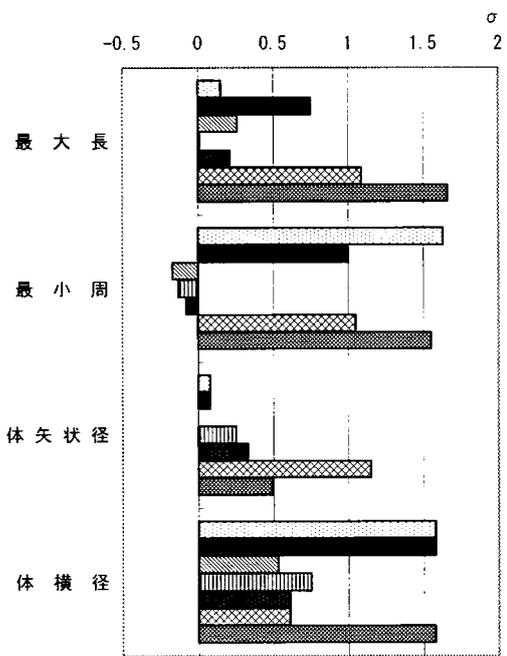
尺骨の計測結果を比較群の平均値とともに第9・10表に示す。また、第16・17図には上腕骨と同様に、畿内現代人(文33)との差を偏差グラフで示している。長径は上腕骨と同様に金隈弥生人が大きい。津雲縄文人の長径も大きい点で上腕骨とは違う傾向が認められる。原田の長径は他の集団とともに小さい。周径は津雲縄文人と金隈弥生人が大きく、全体に頑丈であるが、原田と天福寺江戸時代人も比較的大きい値を示している。また、骨体横径は金隈弥生人の女性が他と比べて大きい傾向を示し、原田、天福寺の江戸時代人も比較的大きい。骨体横径は前腕の屈筋群の発達を示す尺骨骨間縁の発達程度と関連しており(文34)、生業との関係を考える上で非常に興味深い結果と思われる。

第9表 尺骨計測値の比較 (男性)

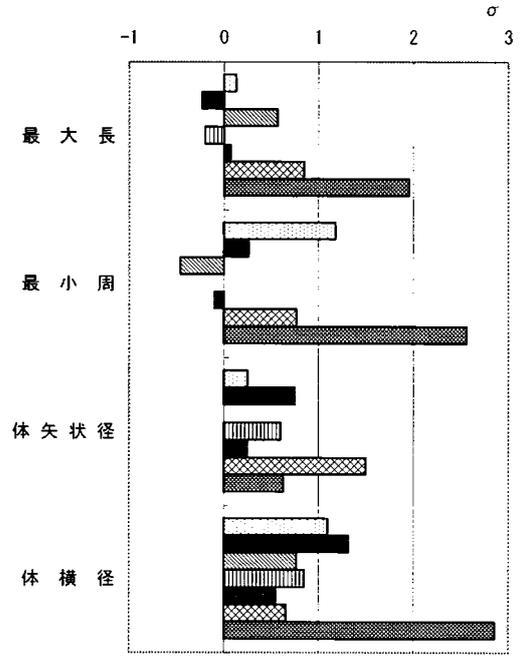
		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
尺骨1	最大長	15	240.7	13.79	248.3	242.1	238.9	241.5	252.5	259.8
2	生理長	19	212.5	12.30	217.1	211.2	210.9	210.7	222.3	227.7
3	最小周	28	40.7	3.02	39.2	36.4	36.5	36.6	39.3	40.5
11	体矢状径	38	12.9	1.19	12.9	12.8	13.1	13.2	14.2	13.4
12	体横径	38	17.4	1.06	17.4	16.2	16.5	16.3	16.3	17.4
3/2	長厚示数	19	19.4	1.31	17.9	17.2	17.3	17.5	17.8	17.4
11/12	体断面示数	38	73.8	5.20	75.0	79.0	79.5	80.9	87.3	77.1

第10表 尺骨計測値の比較 (女性)

		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
尺骨1	最大長	6	219.2	7.83	215.8	223.4	216.2	218.7	226	236.5
2	生理長	6	193.5	7.40	188.7	195.7	190.8	191.1	201.4	211.2
3	最小周	15	34.7	2.69	32.9	31.5	32.4	32.2	33.9	37.4
11	体矢状径	25	10.7	0.85	11.1	10.5	11.0	10.7	11.7	11
12	体横径	25	14.4	1.19	14.6	14.1	14.2	13.9	14.0	16
3/2	長厚示数	6	18.3	0.92	17.6	16.1	16.7	16.8	16.7	17.5
11/12	体断面示数	25	74.4	5.22	76.6	75.1	77.4	76.9	84.5	68.9



第16図 尺骨計測値の比較 (男性)



第17図 尺骨計測値の比較 (女性)

3) 橈骨

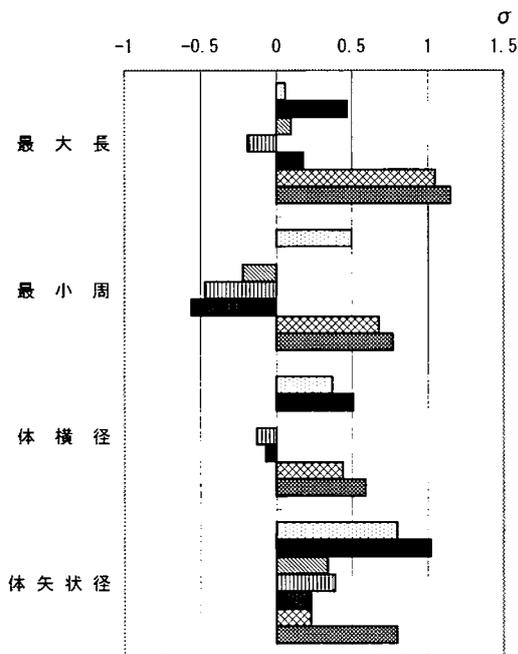
橈骨の計測結果を比較群の平均値とともに第11・12表に示す。第18・19図には畿内現代人文³⁴⁾を基準とした偏差グラフを示している。橈骨の計測値も基本的には尺骨と似た傾向を示しており、長径は男女とも金隈弥生人と津雲縄文人が長く、他は全体的に短い。周径も津雲縄文人と金隈弥生人が大きく、原田と天福寺の江戸時代人も比較的大きい点などは尺骨の所見と同様である。骨体部の横径、矢状径も上記4集団で大きく、前腕が比較的頑丈だったことがうかがえる。

第11表 橈骨計測値の比較 (男性)

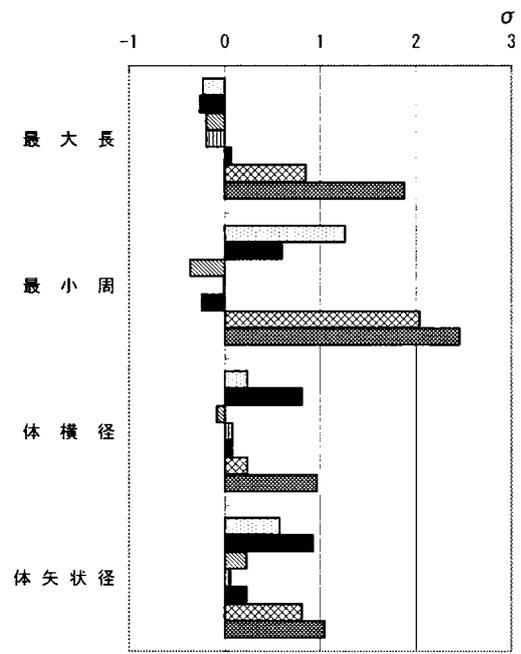
		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
橈骨1	最大長	16	223.7	14.79	228.4	224.2	220.8	225.1	235.2	236.3
2	生理長	18	211.3	12.96	212.3	210.8	209.0	208.2	220.2	222.7
3	最小周	32	43.9	4.46	42.3	41.6	40.8	40.5	44.5	44.8
4	体横径	35	17.1	1.46	17.3	16.6	16.4	16.5	17.2	17.4
5	体矢状径	35	12.3	1.09	12.5	11.9	11.9	11.8	11.8	12.3
3/2	長厚示数	17	20.4	1.29	19.8	19.8	20.7	19.6	20.5	19.8
5/4	体断面示数	35	72.1	6.94	72.2	71.8	71.5	71.8	69.2	70.8

第12表 橈骨計測値の比較 (女性)

		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
橈骨1	最大長	8	199.5	9.62	199.2	199.8	199.8	202.1	209	218
2	生理長	11	187.8	15.37	185.1	188.9	187.3	188.1	197.2	207.7
3	最小周	21	37.2	2.54	36.1	34.5	35.1	34.7	38.5	39.2
4	体横径	21	14.8	1.14	15.5	14.4	14.6	14.6	14.8	15.7
5	体矢状径	21	10.1	0.65	10.4	9.8	9.7	9.8	10.3	10.5
3/2	長厚示数	10	19.8	1.31	19.7	18.3	17.4	18.5	19.2	18.9
5/4	体断面示数	21	68.9	4.20	67.8	68.4	66.0	67.4	70.3	66.9



第18図 橈骨計測値の比較 (男性)



第19図 橈骨計測値の比較 (女性)

3. 下肢骨

下肢骨の計測結果を第13表に示す。また、各部位ごとの概要を以下に記す。

第13表 下肢骨計測値

		男 性					女 性					
		N	M	S.D.	MAX	MIN	N	M	S.D.	MAX	MIN	
大腿骨	1 最大長	r	24	420.2	21.20	459	380	15	380.2	15.84	403	338
		l	19	420.5	19.69	454	375	12	382.8	13.21	405	360
	2 全長	r	17	415.5	19.95	448	377	12	378.8	10.83	396	365
		l	13	415.1	21.34	450	373	8	378.8	14.26	396	359
	6 体中央矢状径	r	43	28.2	1.83	32	23	28	23.8	2.00	28	20
		l	36	28.3	2.14	32	24	27	24.1	1.43	27	22
	7 体中央横径	r	43	26.6	2.21	32	21	28	24.1	1.61	28	21
		l	36	26.5	2.27	31	22	27	24.3	2.05	30	21
	8 体中央周径	r	43	86.4	5.13	96	74	27	75.8	4.27	84	68
		l	36	86.4	5.24	95	75	27	75.7	4.82	86	67
	9 体上横径	r	42	31.6	2.50	37	27	29	29.2	1.72	33	27
		l	39	31.7	2.34	37	27	31	28.8	1.80	33	26
	10 体上矢状径	r	42	25.6	2.17	31	20	29	22.3	1.49	26	19
		l	39	25.8	2.19	30	20	31	22.4	1.58	25	19
	13 上端長	r	19	89.0	4.45	98	81	16	79.4	4.24	86	70
		l	10	89.7	5.87	97	81	10	80.0	2.94	85	76
	18 頭垂直径	r	14	46.7	3.05	51	41	10	40.2	2.35	45	38
		l	10	46.9	2.85	51	42	9	39.6	2.55	44	37
	19 頭矢状径	r	15	46.3	2.91	51	42	10	39.9	2.60	44	37
		l	10	47.0	2.79	51	42	8	39.5	2.67	43	36
20 頭周径	r	13	148.5	7.45	161	136	10	127.1	7.74	140	117	
	l	9	148.6	8.65	160	135	7	126.3	8.94	139	116	
21 上顎幅	r	11	76.8	5.29	84	69	9	68.2	3.96	74	61	
	l	9	76.2	4.49	83	69	4	70.3	2.63	74	68	
8/2 長厚示数	r	17	20.9	0.89	22.8	19.4	11	20.1	0.94	22.2	19.0	
	l	13	20.8	1.26	22.7	18.9	7	20.6	0.87	22.0	19.4	
6/7 体中央断面示数	r	43	106.3	8.63	125.0	84.4	28	99.1	6.72	116.7	87.5	
	l	36	107.4	8.45	124.0	92.3	27	99.7	5.98	109.1	86.7	
10/9 体上断面示数	r	42	81.5	6.85	100.0	68.6	29	76.5	6.21	88.9	63.6	
	l	39	81.4	4.54	92.9	70.3	31	78.0	6.01	92.3	68.8	
脛骨	1 全長	r	20	334.2	15.93	357	303	14	305.6	12.09	321	284
		l	19	331.7	16.59	363	303	13	304.8	10.93	325	284
	1a 最大長	r	21	339.0	15.98	363	309	20	309.8	11.31	324	288
		l	19	338.4	16.26	368	308	18	306.4	14.26	326	266
	3 最大上端幅	r	11	68.1	13.26	78	30	7	63.6	4.08	69	57
		l	13	67.8	11.30	77	33	7	62.4	3.31	67	58
	6 最大下端幅	r	14	49.5	2.18	53	47	15	44.3	2.89	50	39
		l	13	49.3	2.78	53	45	13	43.2	2.44	47	40
	8 中央最大径	r	25	28.7	1.93	32	26	19	24.6	1.30	27	22
		l	20	28.8	2.00	33	25	15	24.5	1.81	28	22
	8a 栄養孔位最大径	r	39	33.2	2.10	38	28	26	27.9	2.14	32	22
		l	35	33.3	2.34	38	28	24	28.0	1.83	31	23
	9 中央横径	r	25	22.5	1.36	25	19	19	19.2	1.42	22	17
		l	20	22.3	1.17	24	20	16	19.0	1.59	23	17
	9a 栄養孔位横径	r	39	24.7	2.09	29	20	26	21.3	2.12	26	18
		l	35	24.1	2.20	28	19	23	20.7	1.87	25	17
	10 骨体周	r	25	80.9	4.13	88	71	18	69.7	3.75	78	62
		l	20	81.0	3.89	87	74	15	69.5	4.00	80	65
	10a 栄養孔位周	r	39	91.5	5.33	102	78	26	78.3	4.97	87	67
		l	35	90.7	5.29	100	78	22	77.8	4.32	88	67
10b 最小周	r	41	72.3	4.39	80	59	27	63.0	4.16	76	54	
	l	35	71.8	4.48	79	58	24	62.3	3.86	76	56	
9/8 中央断面示数	r	25	78.7	5.13	92.6	71.9	19	78.1	5.88	87.5	65.4	
	l	20	77.8	5.61	92.3	66.7	15	78.2	7.12	95.7	65.4	
9a/8a 栄養孔位断面示数	r	39	74.6	6.03	90.3	60.0	26	76.7	6.03	89.7	66.7	
	l	35	72.8	6.81	90.3	55.9	23	74.3	6.59	88.9	63.3	
10b/1 長厚示数	r	20	21.7	1.23	23.9	19.0	14	20.6	1.04	22.0	18.6	
	l	19	21.8	1.11	24.0	20.1	11	20.4	0.96	22.2	19.4	
腓骨	1 最大長	r	8	331.8	19.14	362	304	10	302.3	11.18	320	281
		l	10	327.6	19.95	360	296	9	301.4	11.24	323	282
	2 中央最大径	r	17	15.1	1.30	18	13	14	13.0	1.24	15	11
		l	17	14.6	1.42	17	13	11	12.2	0.75	13	11
	3 中央最小径	r	17	11.2	0.97	13	10	14	9.7	0.99	12	8
		l	17	10.9	1.25	13	9	11	9.5	0.52	10	9
	4 中央周径	r	17	43.6	2.81	48	40	13	39.0	2.00	43	37
		l	17	42.7	3.22	48	38	11	37.1	1.30	39	35
	4a 上端下最小周径	r	26	37.3	3.26	41	32	16	35.4	2.31	39	32
		l	28	37.9	3.55	44	31	15	33.9	2.26	37	30
	3/2 中央断面示数	r	17	75.0	8.17	92.3	61.1	14	75.4	10.43	90.9	61.5
		l	17	75.2	7.23	86.7	64.7	11	77.8	5.71	90.9	69.2
	4a/1 長厚示数	r	8	11.2	1.30	12.8	9.5	9	11.5	0.80	13.2	10.4
		l	10	11.7	1.47	13.8	9.0	8	11.0	0.61	12.0	10.3

1) 大腿骨

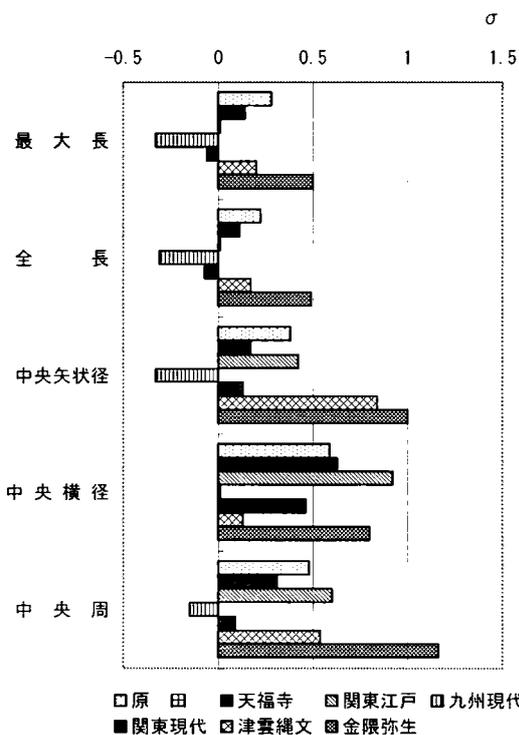
大腿骨の計測結果を比較群の平均値とともに第14・15表に示す。また、上肢と同様に、畿内現代人文36)からの差を第20・21図に偏差グラフで示している。長径は上肢骨同様、男女とも金隈弥生人が最も長い。原田は天福寺、津雲縄文人とともに金隈に次いで長い。幅径、周径も津雲縄文人と金隈弥生人が大きく頑丈である。原田や他の江戸時代人も比較的大きい幅径、周径を有しているが、

第14表 大腿骨計測値の比較 (男性)

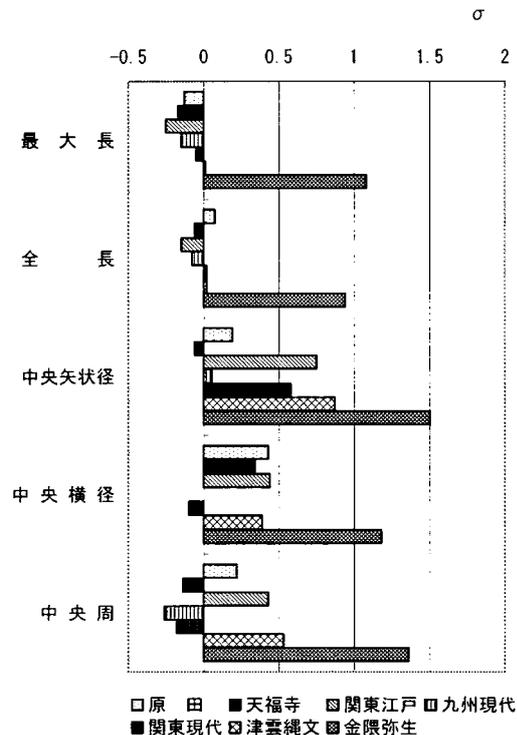
		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
大腿骨1	最大長	24	420.2	21.20	416.9	413.8	405.7	412.1	418.2	425.3
2	全長	17	415.5	19.95	412.8	410.3	402.5	408.4	414.2	421.8
6	骨体中央矢状径	43	28.2	1.83	27.7	28.3	26.5	27.6	29.3	29.7
7	骨体中央横径	43	26.6	2.21	26.7	27.4	25.2	26.3	25.5	27.1
8	骨体中央周	43	86.4	5.13	85.2	87.2	82.1	83.7	86.8	91.0
9	骨体上横径	42	31.6	2.50	30.2	30.7	29.2	31.0	30.5	33.1
10	骨体上矢状径	42	25.6	2.17	26.2	27.8	24.2	25.6	24.2	26.0
8/2	長厚示数	17	20.9	0.89	20.6	21.3	20.3	20.4	21.1	21.9
6/7	体中央断面示数	43	106.3	8.63	103.4	103.9	105.8	105.4	114.6	109.9
10/9	体上断面示数	42	81.5	6.85	87.3	91.2	83.0	82.2	79.5	78.6

第15表 大腿骨計測値の比較 (女性)

		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
大腿骨1	最大長	15	380.2	15.84	379.4	377.9	379.8	381.8	382.9	404.3
2	全長	12	378.8	10.83	376.2	374.4	375.9	377.7	377.8	395.7
6	骨体中央矢状径	28	23.8	2.00	23.4	24.8	23.6	24.5	25.0	26.1
7	骨体中央横径	28	24.1	1.61	23.9	24.1	23.2	23.0	24.0	25.6
8	骨体中央周	27	75.8	4.27	74.0	76.9	73.4	73.8	77.4	81.6
9	骨体上横径	29	29.2	1.72	27.3	26.5	26.6	27.9	28.3	30.4
10	骨体上矢状径	29	22.3	1.49	22.9	25.5	21.2	22.4	21.6	23.4
8/2	長厚示数	11	20.1	0.94	19.7	20.5	19.6	19.6	20.5	21.6
6/7	体中央断面示数	28	99.1	6.72	98.1	103.1	101.1	107.3	103.9	102.3
10/9	体上断面示数	29	76.5	6.21	81.8	97.3	80.3	80.9	76.6	74.2

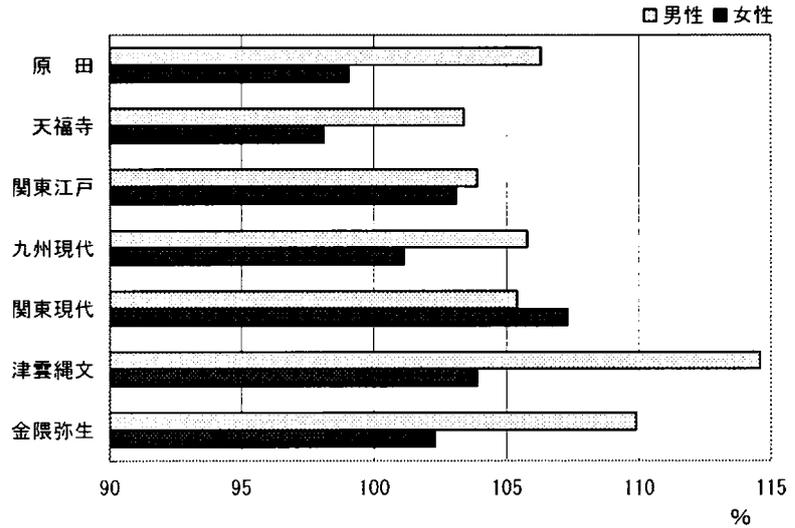


第20図 大腿骨計測値の比較 (男性)



第21図 大腿骨計測値の比較 (女性)

現代人集団はいずれも小さく全体に華奢である。また、第22図に示すように、骨体部の柱状性は津雲縄文人男性で顕著であるが、原田を含め他の集団の柱状傾向は弱い。女性では縄文人も含めて全体に柱状傾向は弱いようである。



第22図 大腿骨体中央断面示数

2) 脛骨

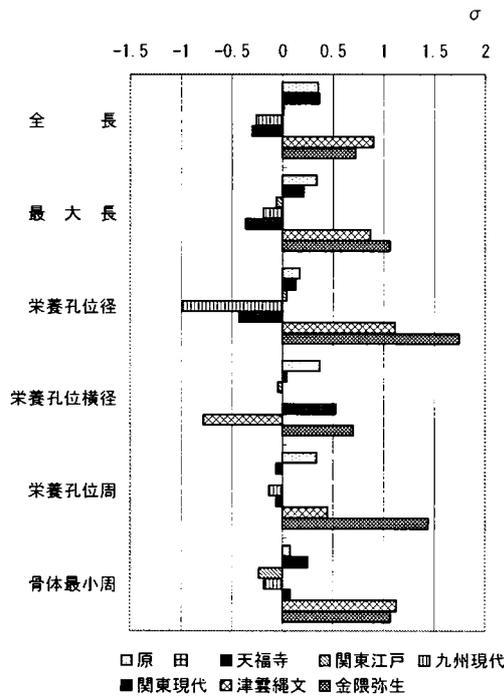
脛骨の計測結果を比較群の平均値とともに第16・17表に示す。第23・24図には畿内現代人文36)を基準とした偏差グラフを示している。脛骨の長径も男女とも金隈弥生人が大きい。津雲縄文人の脛骨長径も大きい点で前腕と同様の傾向を示している。原田は天福寺とともにこれらに次いで大きい。幅径、周径は男女でやや傾向が違っているようである。男性では津雲縄文人と金隈弥生人の周径と栄養孔位最大径が大きく頑丈であるが、他は小さい。一方、女性では集団間の差が小さく、

第16表 脛骨計測値の比較 (男性)

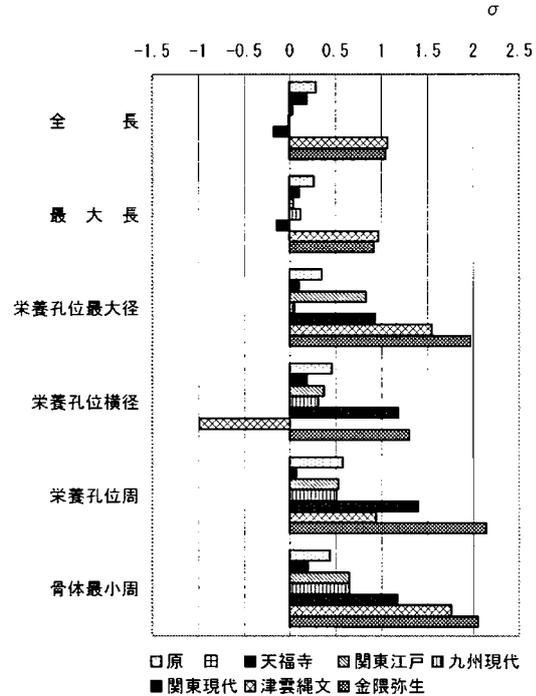
		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
脛骨 1	全長	20	334.2	15.93	334.5	327.1	321.3	320.4	345.9	342.0
1a	最大長	21	339.0	15.98	336.5	331.2	328.5	325.3	349.5	353.1
8	中央最大径	25	28.7	1.93	29.6	28.9	27.4	28.7	32.1	31.7
8a	栄養孔位最大径	39	33.2	2.10	33.1	32.9	30.5	31.8	35.4	36.9
9	中央横径	25	22.5	1.36	22.0	21.6	21.0	22.8	19.6	22.9
9a	栄養孔位横径	39	24.7	2.09	23.9	23.7	23.8	25.1	21.9	25.5
10	骨体周	25	80.9	4.13	79.5	79.4	78.0	79.0	83.8	86.3
10a	栄養孔位周	39	91.5	5.33	88.9	89.3	88.5	88.9	92.2	98.5
10b	骨体最小周	41	72.3	4.39	73.1	70.8	71.0	72.3	77.4	77.1
9/8	中央断面示数	25	78.7	5.13	74.5	74.9	77.1	78.7	61.5	72.4
9a/8a	栄養孔位断面示数	39	74.6	6.03	72.3	72.2	78.3	78.3	62.2	69.3
10b/1	長厚示数	20	21.7	1.23	22.6	21.7	22.2	22.7	22.4	22.9

第17表 脛骨計測値の比較 (女性)

		(mm)								
		N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M
脛骨 1	全長	14	305.6	12.09	304.1	301.5	300.9	298.3	318.1	317.7
1a	最大長	20	309.8	11.31	306.9	305.8	307.2	302.4	322.7	321.9
8	中央最大径	19	24.6	1.30	24.0	25.3	24.5	25.7	26.8	26.5
8a	栄養孔位最大径	26	27.9	2.14	27.4	28.8	27.3	29.0	30.2	31.0
9	中央横径	19	19.2	1.42	18.5	18.9	19.2	20.3	17.7	20.1
9a	栄養孔位横径	26	21.3	2.12	20.9	21.2	21.1	22.5	19.0	22.7
10	骨体周	18	69.7	3.75	67.4	70.0	69.3	70.3	72.3	74.5
10a	栄養孔位周	26	78.3	4.97	76.1	78.1	78.0	81.9	79.9	85.1
10b	骨体最小周	27	63.0	4.16	62.3	63.7	63.7	65.3	67.1	68.0
9/8	中央断面示数	19	78.1	5.88	77.7	72.4	78.5	78.7	65.4	76.2
9a/8a	栄養孔位断面示数	26	76.7	6.03	77.1	73.6	77.4	77.3	62.8	73.2
10b/1	長厚示数	14	20.6	1.04	21.1	21.1	21.2	22.1	21.0	21.1

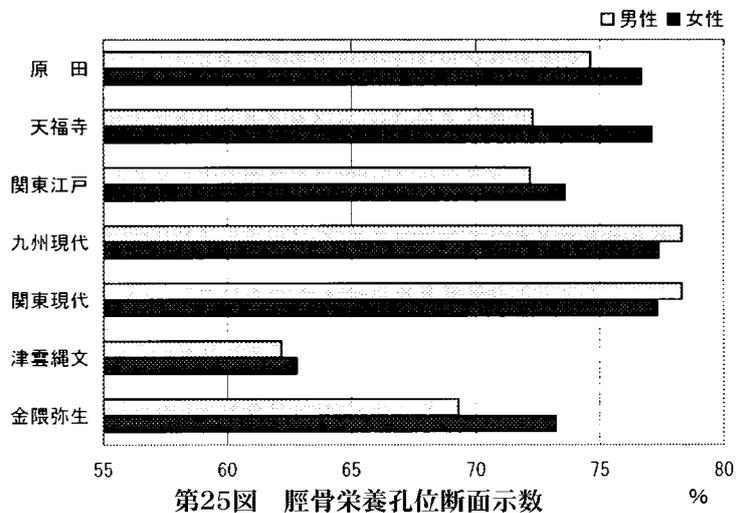


第23図 脛骨計測値の比較 (男性)



第24図 脛骨計測値の比較 (女性)

男性で見られたような顕著な傾向は認められない。また、津雲縄文人は栄養孔位横径が男女ともに小さいという特徴を示しているが、これは縄文人に見られる脛骨の扁平性を示すもので文36)、栄養孔位断面示数を他集団のそれと比較しても、傾向は明らかである(第25図)。



第25図 脛骨栄養孔位断面示数

3) 腓骨

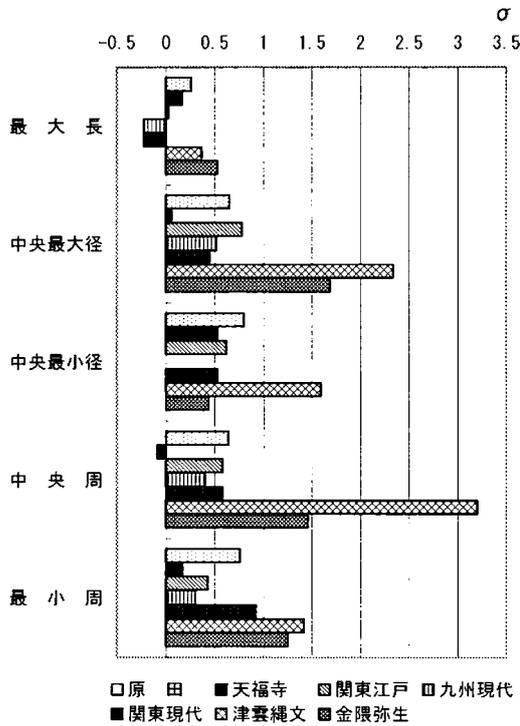
腓骨の計測結果を比較群の平均値とともに第18・19表に示す。また、畿内現代人文35)からの偏差を第26・27図に示す。男女とも長径、幅径、周径において津雲縄文人と金隈弥生人が大きく、腓骨も頑丈だったことを示している。

第18表 腓骨計測値の比較 (男性)

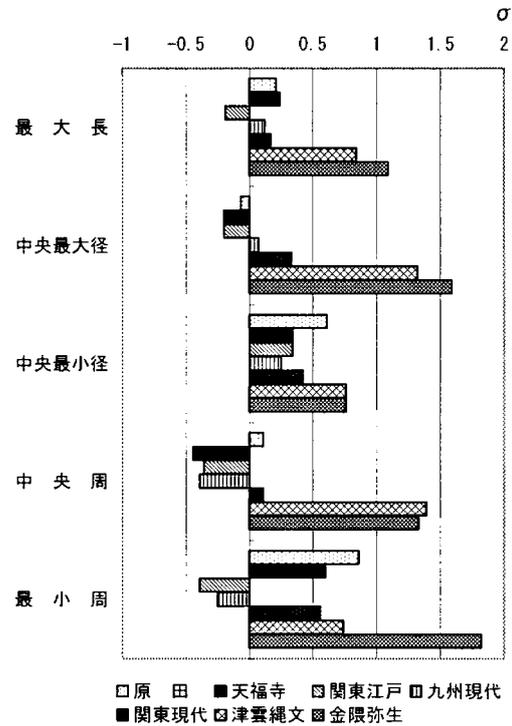
		(mm)								
		N	原田	S.D.	天福寺	関東江戸	九州現代	関東現代	津雲縄文	金隈弥生
			M		M	M	M	M	M	M
腓骨 1	最大長	8	331.8	19.14	330.0	327.2	322.3	322.4	334.0	337.3
2	中央最大径	17	15.1	1.30	14.2	15.3	14.9	14.8	17.7	16.7
3	中央最小径	17	11.2	0.97	10.9	11.0	10.3	10.9	12.1	10.8
4	中央周	17	43.6	2.81	41.2	43.4	42.8	43.4	52.0	46.3
4a	最小周	26	37.3	3.26	35.5	36.3	35.9	37.8	39.3	38.8
3/2	中央断面示数	17	75.0	8.17	77.1	72.1	69.8	73.4	69.0	65.4
4a/1	長厚示数	8	11.2	1.30	10.8	11.1	11.2	11.7	11.8	10.9

第19表 腓骨計測値の比較 (女性)

			(mm)							
	N	原田 M	S.D.	天福寺 M	関東江戸 M	九州現代 M	関東現代 M	津雲縄文 M	金隈弥生 M	
腓骨 1 最大長	10	302.3	11.18	302.8	296.1	300.8	301.7	312.1	316.0	
2 中央最大径	14	13.0	1.24	12.8	12.8	13.2	13.6	15.1	15.5	
3 中央最小径	14	9.7	0.99	9.4	9.4	9.3	9.5	9.9	9.9	
4 中央周	13	39.0	2.00	37.0	37.3	37.2	39.0	43.6	43.4	
4a 最小周	16	35.4	2.31	34.7	31.9	32.3	34.6	35.1	38.2	
3/2 中央断面示数	14	75.4	10.43	70.3	73.9	70.7	70.1	66.1	64.4	
4a/1 長厚示数	9	11.5	0.80	11.4	10.7	10.8	11.3	11.2	12.7	



第26図 腓骨計測値の比較 (男性)



第27図 腓骨計測値の比較 (女性)

4. 四肢骨のプロポーシオン

四肢骨については個々の部位における特徴の他に、全体のプロポーシオンが重要な意味をもつことが知られている(文36)。そこで、代表的な示数(第20・21表)を取り上げて、以下にその特徴を概観してみたい。

第20表 四肢骨示数の比較 (男性)

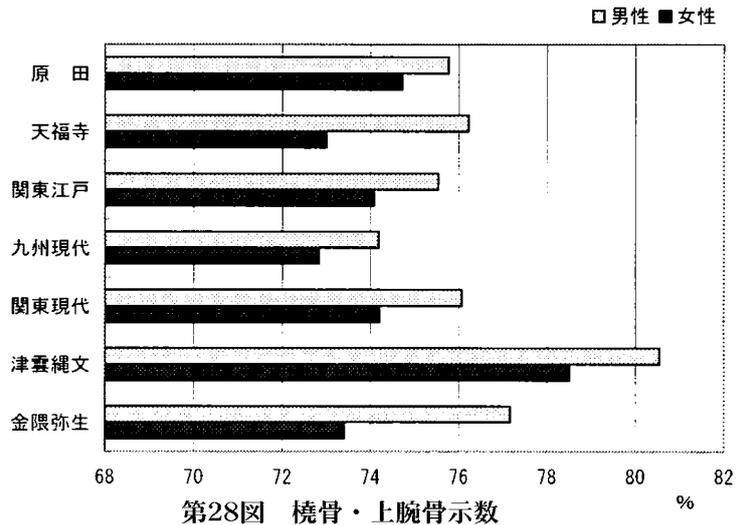
	原田	天福寺	関東江戸	九州現代	関東現代	津雲縄文	金隈弥生
橈骨・上腕骨示数	75.8	76.2	75.5	74.2	76.1	80.5	77.2
脛骨・大腿骨示数	79.5	80.2	79.0	79.2	77.7	82.7	80.4
上腕最小周・大腿中央周	73.6	74.9	72.8	76.6	74.4	75.1	71.2

第21表 四肢骨示数の比較 (女性)

	原田	天福寺	関東江戸	九州現代	関東現代	津雲縄文	金隈弥生
橈骨・上腕骨示数	74.7	73.0	74.1	72.8	74.2	78.5	73.4
脛骨・大腿骨示数	81.5	80.2	79.8	79.2	78.1	83.1	78.6
上腕最小周・大腿中央周	71.4	75.4	70.4	75.7	73.3	71.4	71.3

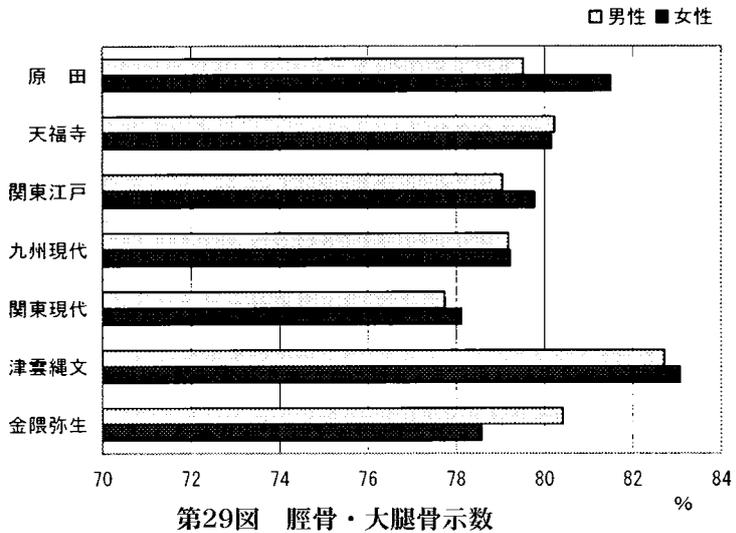
1) 橈骨・上腕骨示数

四肢の近位部に対する遠位部の長さの割合を示し、脛骨・大腿骨示数とともに、縄文人や南アジア系の集団で大きく、北アジア系集団で小さいと言われている。すなわち、北アジア系集団では四肢の末端に近い方が相対的に短いという傾向が認められる。第20・21表は便宜的にそれぞれの平均値から割合を求めたものである。また、第28図は橈骨・上腕骨示数を比較集団とともに図示したものである。南アジア系と考えられている縄文人では示数値が大きく、遠位部が長い傾向が認められるが、北アジア系とされる金隈弥生人および原田を含む江戸時代から現代の日本人では遠位部が相対的に短い傾向を示している。



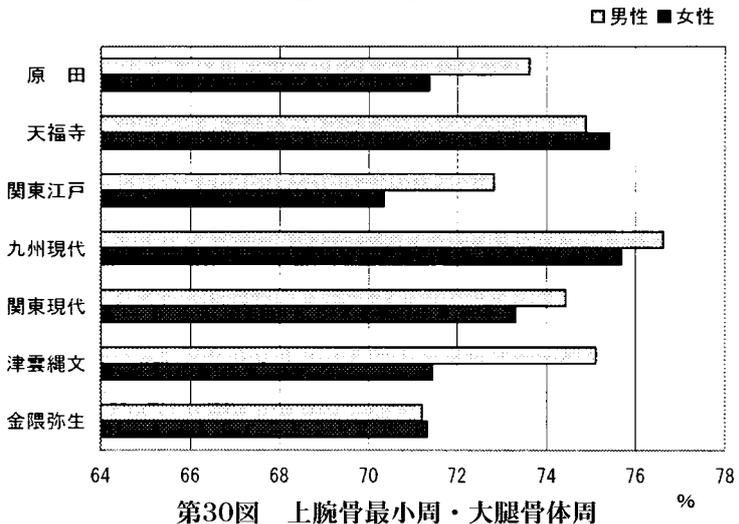
2) 脛骨・大腿骨示数

第20・21表の脛骨・大腿骨示数を比較集団とともに第29図に示す。上肢の橈骨・上腕骨示数と同様に、北アジア系とされる金隈弥生人および江戸時代から現代の日本人では下肢の遠位部が相対的に短い傾向が認められる。



3) 上肢骨と下肢骨の太さ

上半身と下半身の相対的な発達を知るための指標として、中橋他(1985)文17)を参考に、上腕骨最小周と大腿骨中央周の割合を求めた(第20・21表、第30図)。まず、津雲縄文人と金隈弥生人については、どちらも全体的な大きさそのものが大きく頑丈で



あるが、特に縄文人の男性の示数値が大きく、上半身が発達した身体つきだったことが分かる。金隈弥生人の示数値は小さいが、全体的には上肢骨も頑丈であり、上半身の発達が弱かったというよりも下半身がさらに頑丈だったと理解すべきであろう。現代人の示数値は大きく、一見、縄文人のように上半身が発達した体つきをしているようにみえるが、実際の計測値は小さく華奢であることを考慮すると、下半身の発達がさらに弱くなった結果と理解できる。原田や他の江戸時代集団は現代人ほど華奢ではないが、現代人と似た傾向を示している。

第22表 推定身長 (cm)

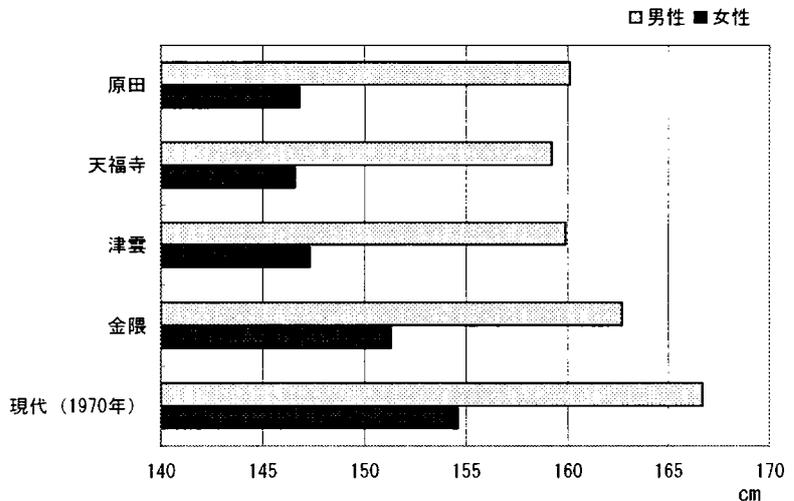
	N	M	S.D.	MAX	MIN
男性	30	160.1	3.96	167.6	151.8
女性	20	146.8	3.11	151.5	138.6

第23表 身長と比較 (cm)

	男	性	女	性
原田	30	160.1	20	146.8
天福寺	24	159.2	19	146.6
津雲	13	159.9	16	147.3
金隈	17	162.7	17	151.3
現代(1970年)	771	166.7	832	154.6

5. 身長 の 推 定

原田集団の身長をPearsonの式に従って推定した。結果を第22表に示す。男性の平均が160.1cm、女性が146.8cmである。これらを他の集団と比較すると(第23表、第31図)、原田、天福寺の江戸時代人は金隈弥生人より低く、縄文人と同程度の身長だったことがうかがえる。比較集団の値は中橋他(1985)文17)を参考にし、また、天福寺については新たに推定したものである。

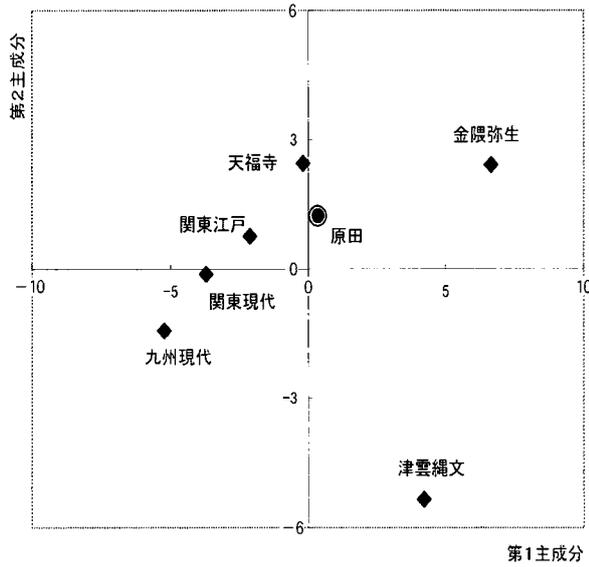


第31図 身長 の 比 較

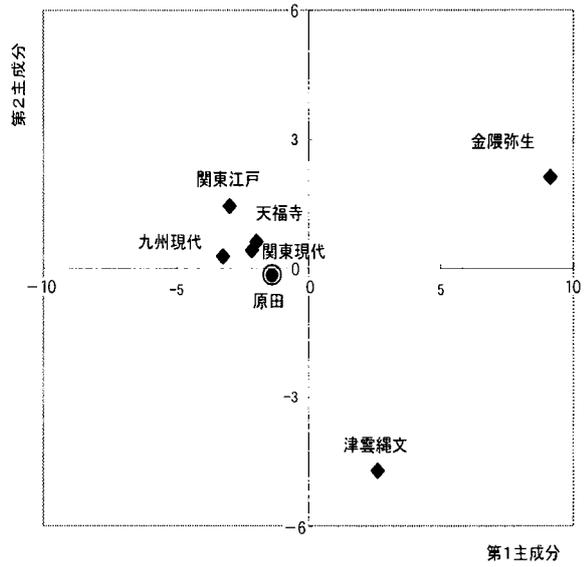
6. 原田集団四肢骨の特徴

四肢骨計測値の分析により、原田集団が津雲縄文人や金隈弥生人のような先史時代人ほど頑丈ではないが、現代人ほどに華奢でもないことが分かった。そこで、さらに、比較集団の中でどのように位置付けられるか、またどのように特徴づけられるかを知るために、四肢骨計測値27項目(上腕骨:1、5、6、7 尺骨:1、3、11、12 橈骨:1、3、4、5 大腿骨:1、6、7、8、9、10 脛骨:1a、8a、9a、10a、10b 腓骨:1、2、3、4)を用いて主成分分析を行った。

第1主成分と第2主成分について、その得点を散布図で示すと第32・33図のようになる。第1主成分(横軸)として抽出された特徴は、全部の項目がプラスに寄与することから大きさの成分である。横軸の右側ほど全体のサイズが大きいことを示している。第2主成分(縦軸)には形の成分が抽出されているが、項目ごとの固有ベクトルとその寄与率を総合的に検討した結果、上肢では上腕骨体部の扁平性(縦軸の下方が扁平)と尺骨体部の扁平性(縦軸の上方が扁平)、下肢では脛骨の扁



第32図 主成分分析 (男性)



第33図 主成分分析 (女性)

平性（縦軸の下方ほど扁平）が有効な成分として抽出されていることが分かった。男女ともほぼ同じ傾向である。

津雲縄文人は全体にサイズが大きく頑丈であるが、特に上腕骨と脛骨の扁平性で特徴づけられている。金隈弥生人も全体にサイズが大きく頑丈であるが、上腕骨や脛骨の扁平性は弱く、尺骨体部の扁平性が強いことが特徴的である。原田集団は他の江戸時代および現代人と同じグループを形成しており、全体として現代人ほどではないが、サイズが小さく華奢な傾向を持っていること、さらに、上腕骨や脛骨の扁平性も弱いことで特徴づけられるようである。四肢骨形態は生活形態や環境の影響を反映するものである。原田集団は基本的には農民であるにも拘わらず、墓籍帳には姓名が記されているなど、どちらかという恵まれた農民層だったと思われる。今後、さらに詳細な形態的分析を行い、また、ストレスマーカーなどの生活痕の分析を併せて行うことによって、生活と四肢骨形態に関する貴重な情報が得られると思われる。

7. まとめ

筑紫野市教育委員会による原田遺跡の発掘調査で出土した江戸時代人骨のうち、四肢骨について、形質的調査を行った。調査結果を要約すると以下のようになる。

1. 上肢骨について：長径は現代人と同程度に短い。上腕骨の扁平性は認められないが、尺骨体部は骨間縁の発達した金隈弥生人と同様に扁平傾向を示す。
2. 下肢骨について：下肢骨の長径も現代人ほどではないが短い傾向を示す。大腿骨の柱状性、脛骨の扁平性は認められない。
3. プロポーションについて：四肢の近位部と遠位部のプロポーションを示す橈骨・上腕骨示数および脛骨・大腿骨示数において、北アジア系とされる金隈弥生人と同様に、相対的に遠位部が短い傾向を示した。上肢と下肢の発達の程度を示す上腕骨最小周・大腿骨体周の示数は、相対的に上肢が発達していることを示したが、縄文人とは違って全体に華奢になっており、下肢がより華奢になった結果と思われる。

4. 身長について：Pearson の式から推定した身長は、男性で160.1cm（30例）、女性で146.8cm（20例）だった。
5. 四肢骨からみた集団の特徴：四肢骨計測値27項目（上腕骨：1、5、6、7 尺骨：1、3、11、12 橈骨：1、3、4、5 大腿骨：1、6、7、8、9、10 脛骨：1a、8a、9a、10a、10b 腓骨：1、2、3、4）を用いて主成分分析を行った結果、第1主成分に大きさの成分、第2主成分に形の成分（上肢では上腕骨体部と尺骨体部の扁平性、下肢では脛骨の扁平性）が抽出された。原田は他の江戸時代および現代人と同じグループを形成し、全体として現代人ほどではないが、サイズが小さく華奢な傾向を持っていること、さらに、上腕骨や脛骨の扁平性も弱いことで特徴づけられた。

文 献

1. 筑紫野市教育委員会（2003）『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 一原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告1一』 筑紫野市文化財調査報告書第77集
2. 鬼頭宏(1983)：「日本二千年の人口史」 PHP 研究所
3. Martin-Saller(1957)：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
4. Howelles,W.W.(1973)：Cranial variation in man. Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., Vol.67, Harvard Univ.
5. 鈴木尚(1963)：「日本人の骨」、岩波新書477
6. Yamaguchi,B.(1973)：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus. Series D, 6.
7. Nakahashi, T and M. Nagai(1986)：Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94
8. 中橋孝博(1988)：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版
9. 中橋孝博・永井昌文(1985)：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会
10. 中橋孝博(1987)：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95
11. 脇達也(1970)：「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究」、熊本医学会雑誌44
12. 原田忠昭(1954)：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究1
13. 中橋孝博(1993)：「福岡市蓆田青木遺跡出土の弥生・近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書356
14. 欠田早苗(1959)：「畿内人頭骨の人類学的研究」、人類学輯報
15. 鈴木尚(1956)：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」、岩波書店、東京
16. 森田茂・河越逸行(1960)：「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺」、人類学雑誌67
17. 中橋孝博・土肥直美・永井昌文(1985)：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書1 2 3
18. Knussman R. (1988) Martin/Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
19. 馬場悠男(1991) 人骨計測法、人類学講座別巻1－人体計測法Ⅱ、雄山閣、東京
20. 九州大学解剖学第2講座編（1988）日本民族・文化の生成2、九州大学解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版

21. 遠藤万理・北条輝幸・木村賛(1967) 徳川將軍および家族の遺体. VII. 四肢骨. 鈴木尚他編「増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体」、東大出版会、東京、pp.175-405.
22. 専頭時義(1957) 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究4 (1~4)、pp.273-301.
23. 溝口静(1957) 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究. 人類学研究4 (1~4)、pp.237-272.
24. 阿部英世(1955) 現代九州日本人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究2 (2~4)、pp.301-345.
25. 鋳鍋勝登(1955) 現代九州日本人下腿骨の人類学的研究. 人類学研究2 (1)、pp.1-41.
26. 西原四良(1953) 関東地方人上腕骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、第9輯
27. 蛭名忠次郎(1951) 日本人前腕骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、第5輯
28. 大場信次(1950) 関東地方人大腿骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集、第3輯
29. 鈴木信夫(1961) 関東地方人脛骨の人類学的研究. 計測篇 慈恵医大誌 75:2638-2678.
30. 福田 佐(1961) 関東地方人腓骨の人類学的研究. 計測篇 慈恵医大誌 76:1-21.
31. 清野謙次、平井隆(1928a) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第三部上肢骨の研究. 人類学雑誌 43 (3附)、pp.179-301.
32. 清野謙次、平井隆(1928b) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部下肢骨の研究. 人類学雑誌 43 (4附、5附)、pp.303-390.
33. 宮本博人(1952) 現代日本人骨の人類学的研究. 第2部 上肢骨の研究、人類学雑誌40 (6, 7, 8)
34. 土肥直美(1996) 生活パターンの変化と身体形質の変化. 片山一道編、人間史をたどる、朝倉書店、pp.201-205.
35. 平井隆・田端丈夫 (1928) 現代日本人骨の人類学的研究. 第4部 下肢骨の研究、人類学雑誌43 (1附、2附)
36. 山口 敏 (1982) 縄文人骨の特徴. 加藤晋平他編 縄文文化の研究1 縄文人とその環境、雄山閣、pp.27-54.

図版1 原田第41号墓地 男性 頭蓋上・正・側面



原田第41号墓地 第48号墓 (男性・成年)

原田第41号墓地 第68号墓 (男性・成年)

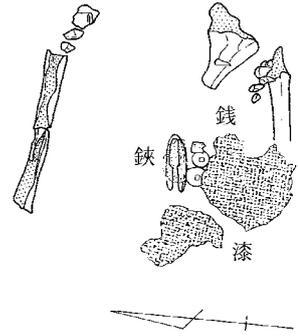
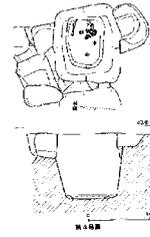
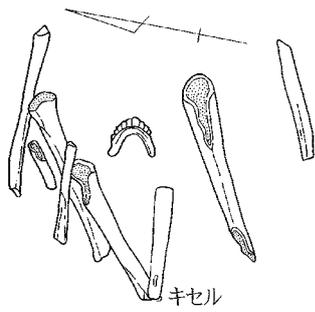
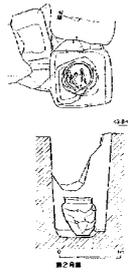
図版2 原田第41号墓地 女性 頭蓋上・正・側面



原田第41号墓地 第41号墓 (女性・成年)

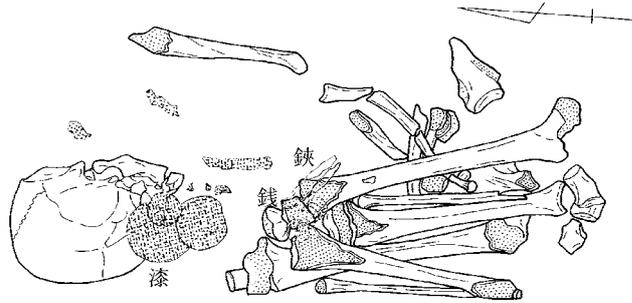


原田第41号墓地 第19号墓 (女性・熟年)

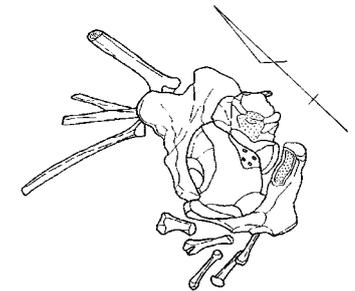
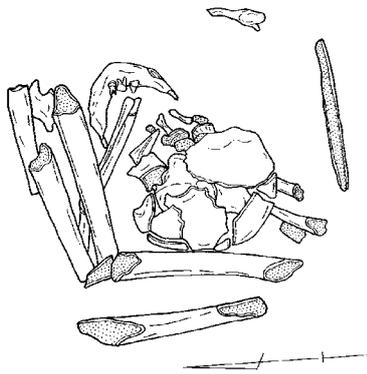


原田第1号墓地第2号墓人骨

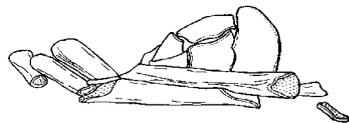
原田第1号墓地第4号墓人骨



原田第1号墓地第7号墓人骨



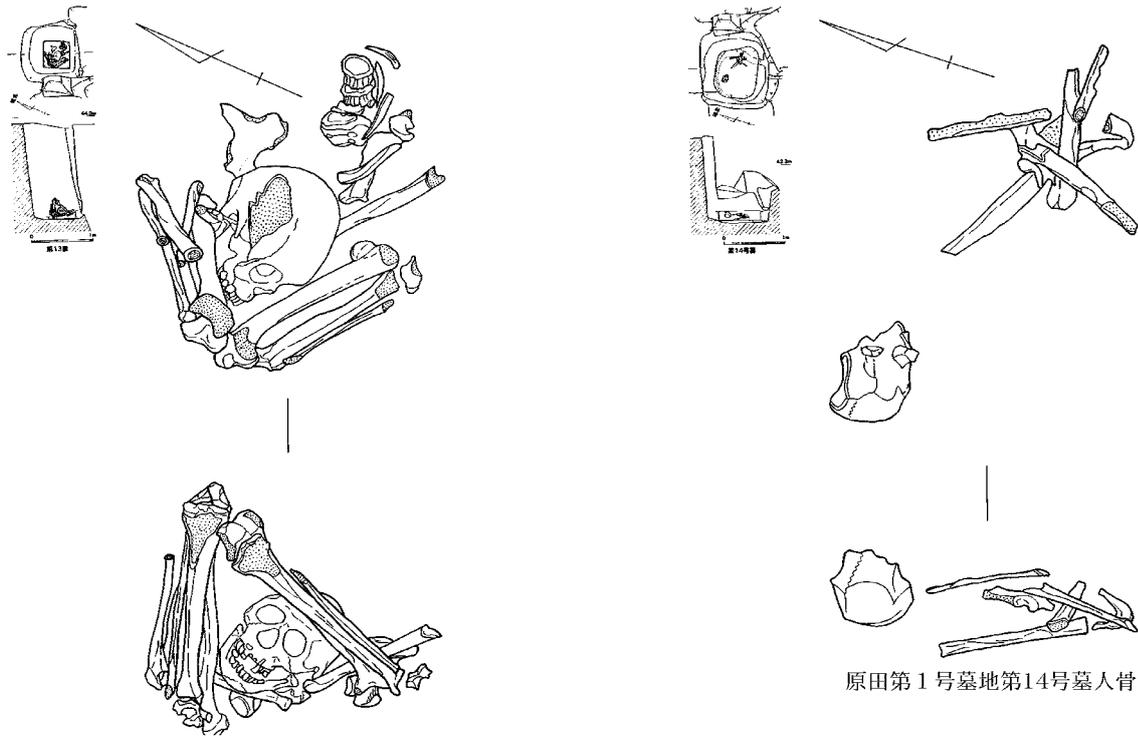
原田第1号墓地第11号墓人骨



原田第1号墓地第8号墓人骨

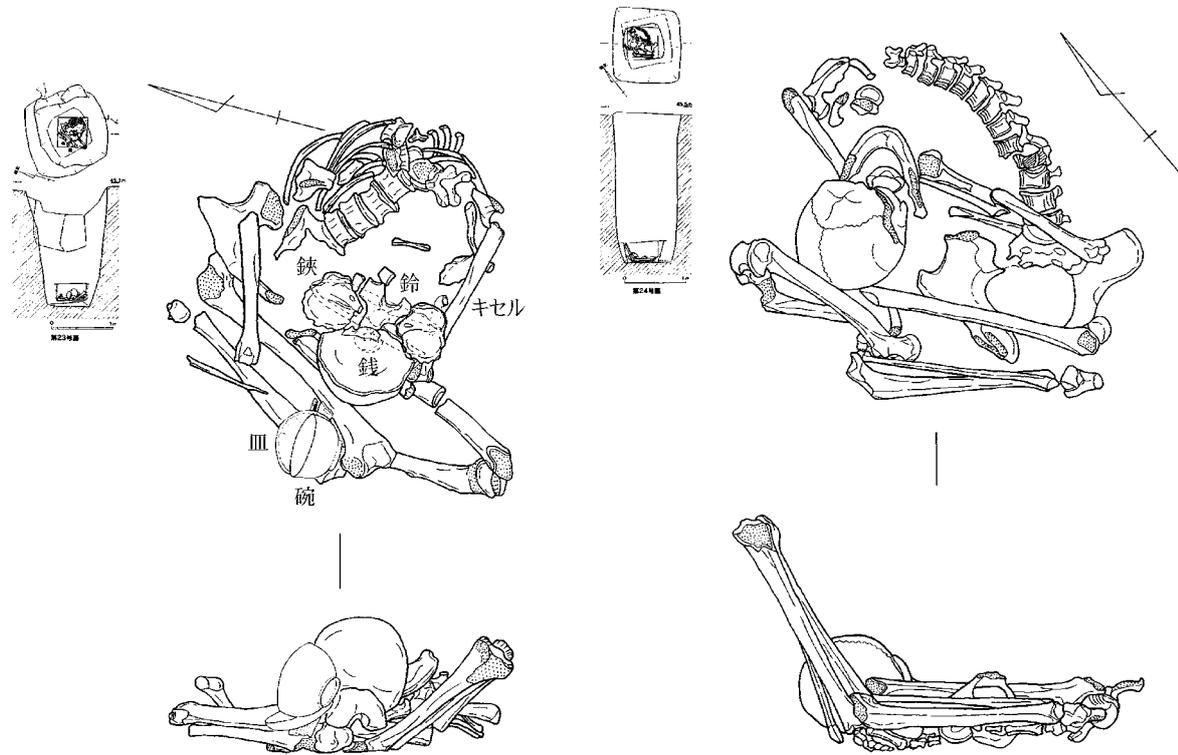


第34図 原田第1号墓地第2・4・7・8・11号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)



原田第1号墓地第13号墓人骨

原田第1号墓地第14号墓人骨

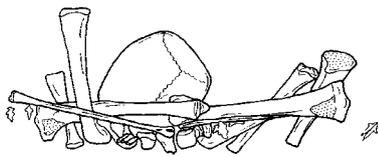
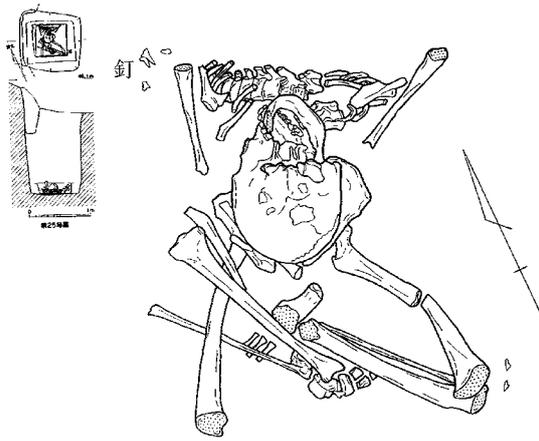


原田第1号墓地第23号墓人骨

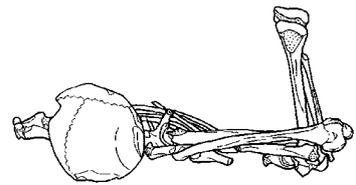
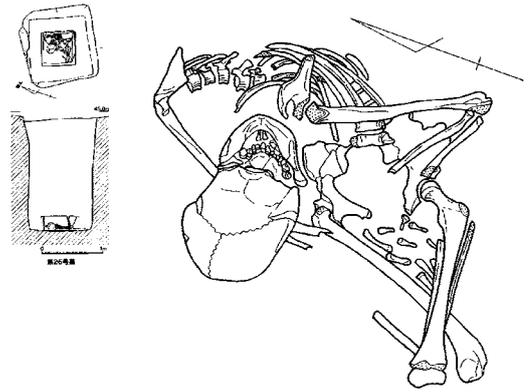
原田第1号墓地第24号墓人骨



第35图 原田第1号墓地第13・14・23・24号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

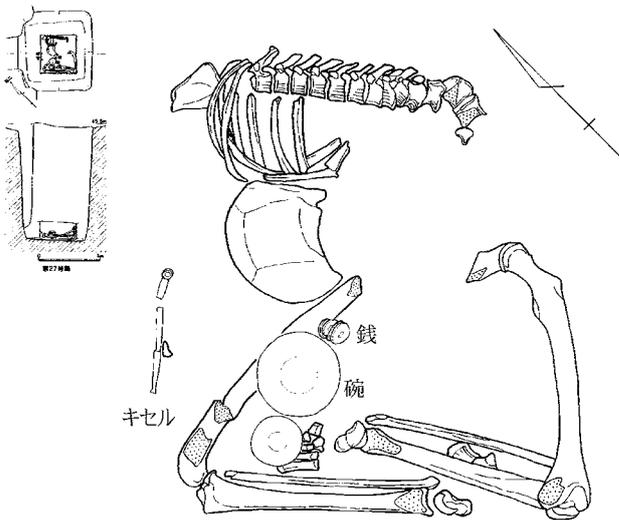


原田第1号墓地第25号墓人骨

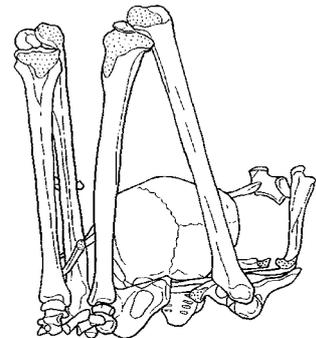
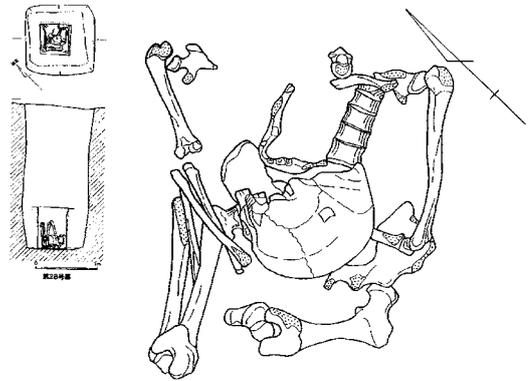


原田第1号墓地第26号墓人骨

0 50cm

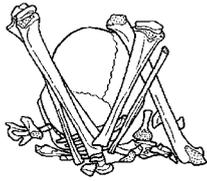
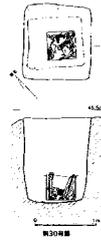
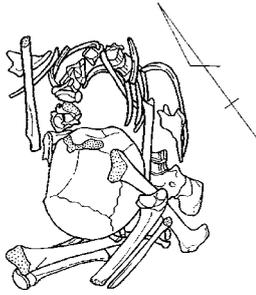
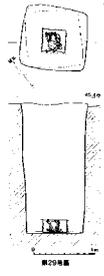


原田第1号墓地第27号墓人骨

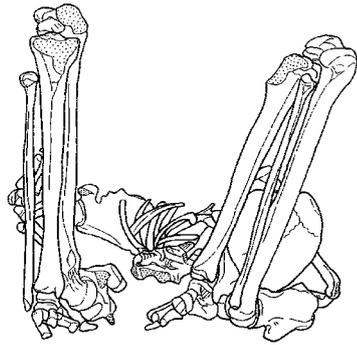


原田第1号墓地第28号墓人骨

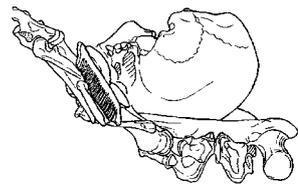
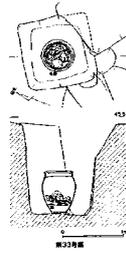
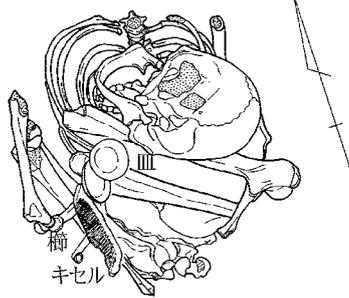
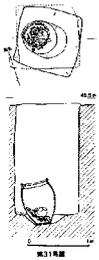
第36図 原田第1号墓地第25・26・27・28号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)



原田第1号墓地第29号墓人骨



原田第1号墓地第30号墓人骨

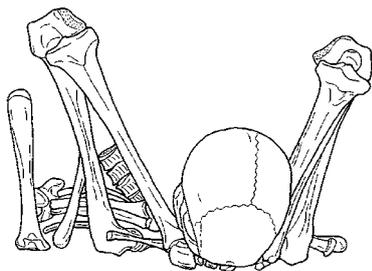
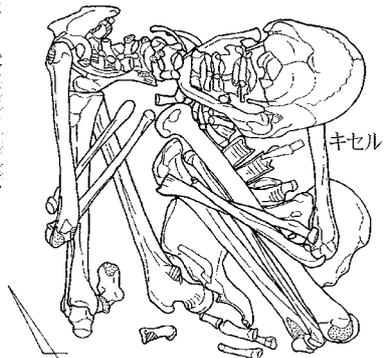
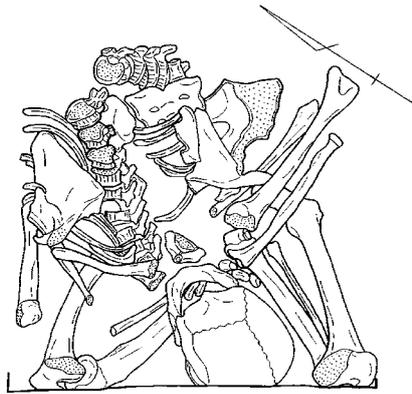
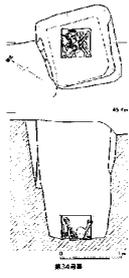


原田第1号墓地第31号墓人骨

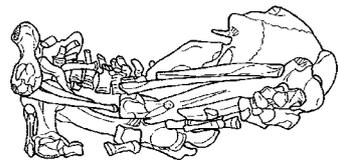


原田第1号墓地第33号墓人骨

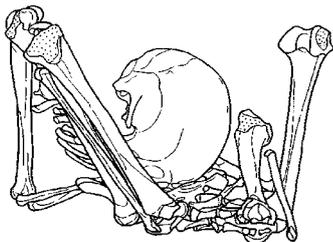
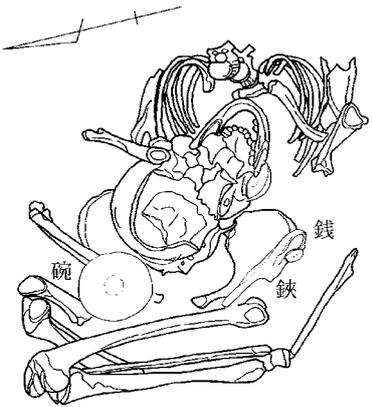
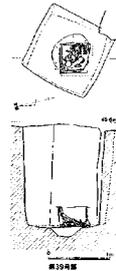
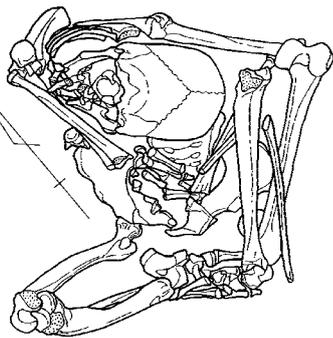
第37图 原田第1号墓地第29・30・31・33号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



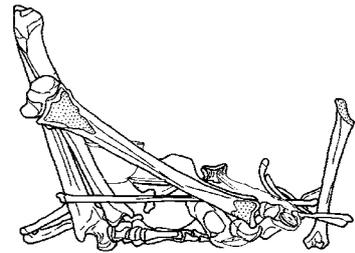
原田第1号墓地第34号墓人骨



原田第1号墓地第35号墓人骨

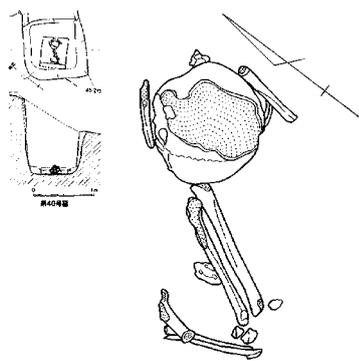


原田第1号墓地第36号墓人骨



原田第1号墓地第39号墓人骨

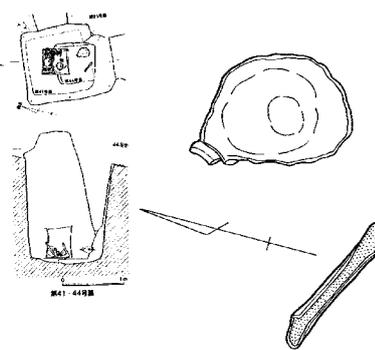
第38図 原田第1号墓地第34・35・36・39号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)



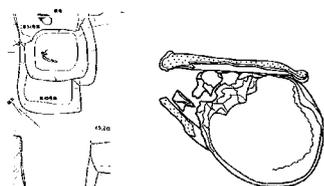
原田第1号墓地第40号墓人骨



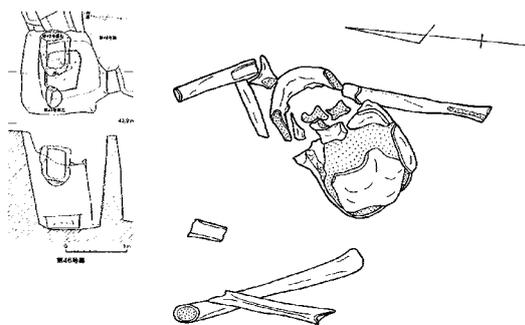
原田第1号墓地第41号墓人骨



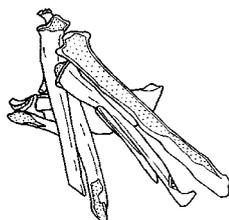
原田第1号墓地第44号墓人骨



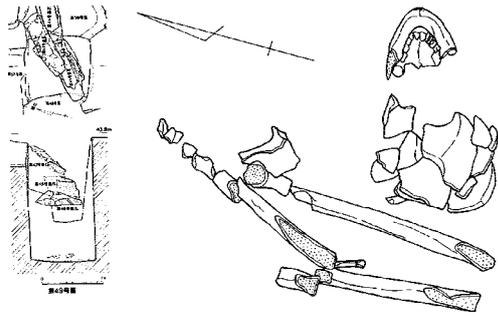
原田第1号墓地第43号墓人骨



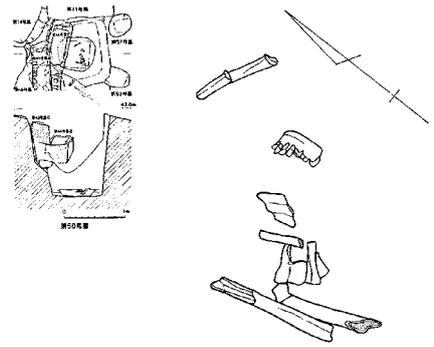
原田第1号墓地第46号墓人骨



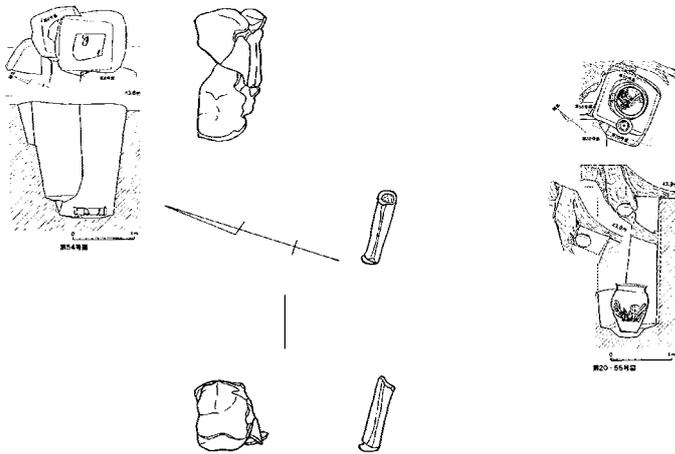
第39図 原田第1号墓地第40・41・43・44・46号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)



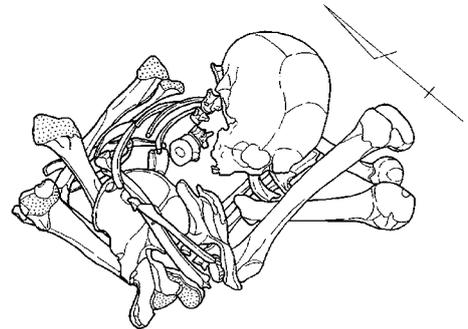
原田第1号墓地第49号墓人骨



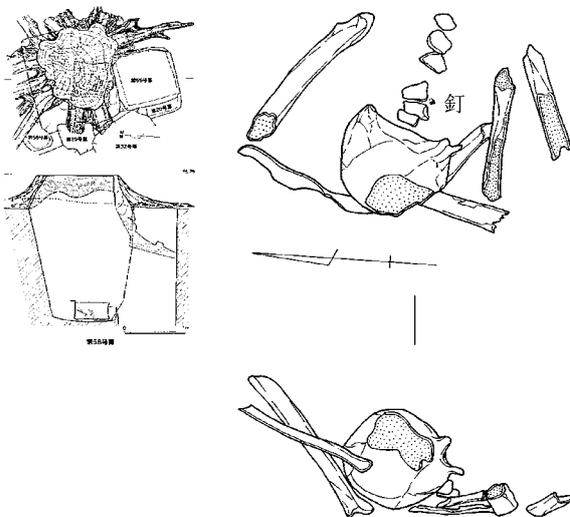
原田第1号墓地第50号墓人骨



原田第1号墓地第54号墓人骨



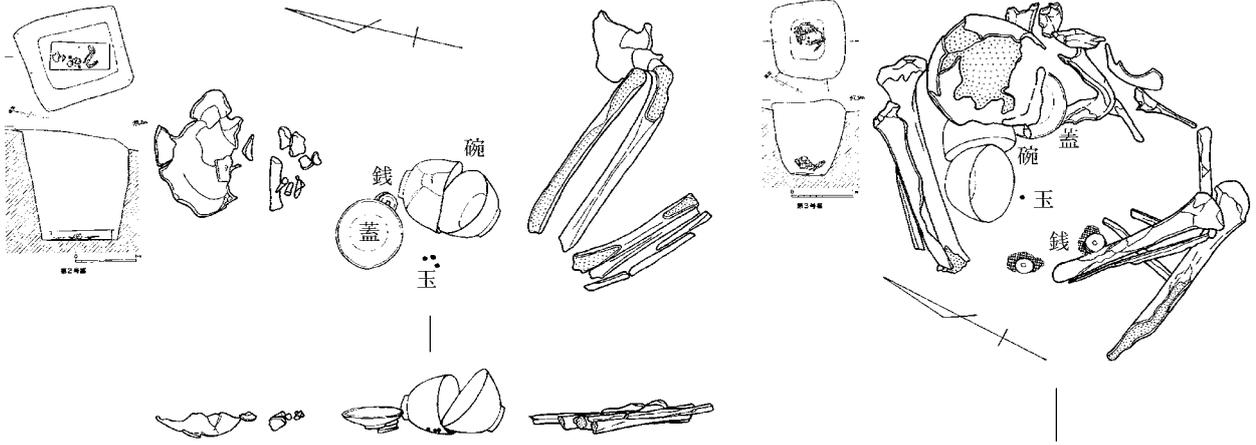
原田第1号墓地第55号墓人骨



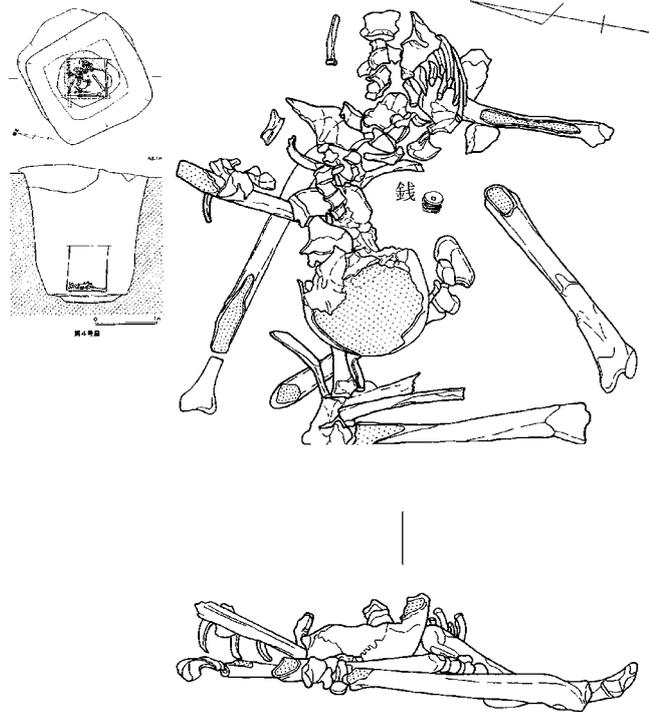
原田第1号墓地第58号墓人骨



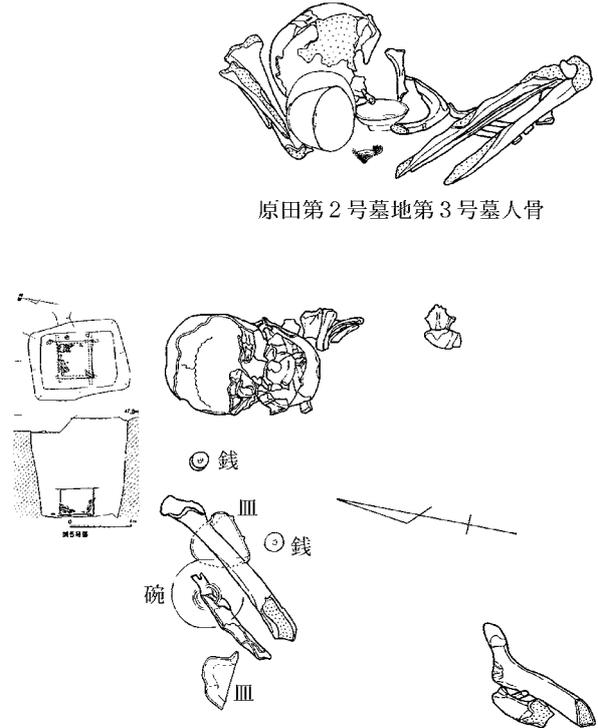
第40图 原田第1号墓地第49・50・54・55・58号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



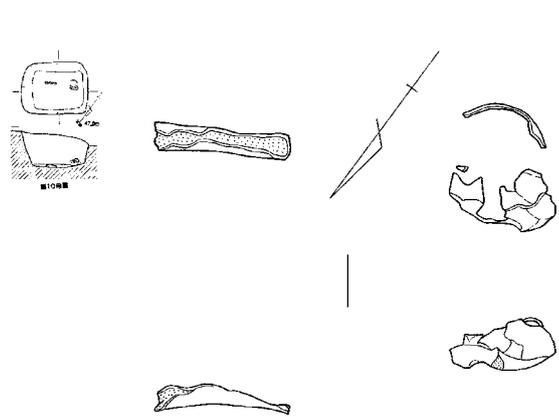
原田第2号墓地第2号墓人骨



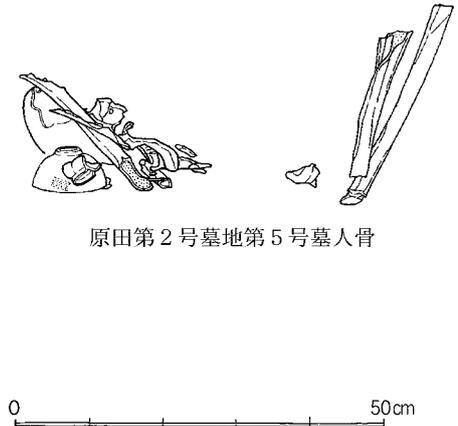
原田第2号墓地第4号墓人骨



原田第2号墓地第3号墓人骨



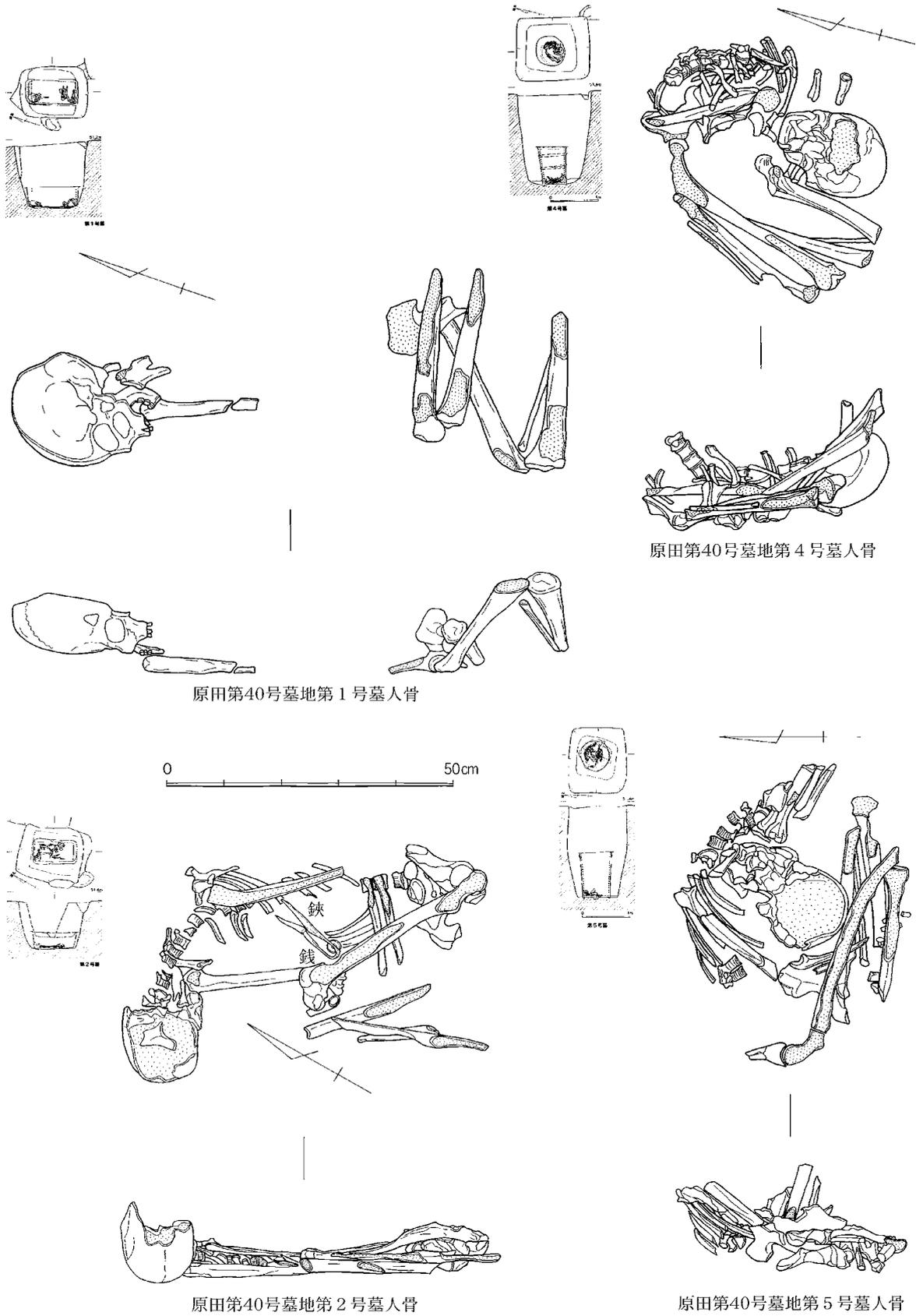
原田第2号墓地第10号墓人骨



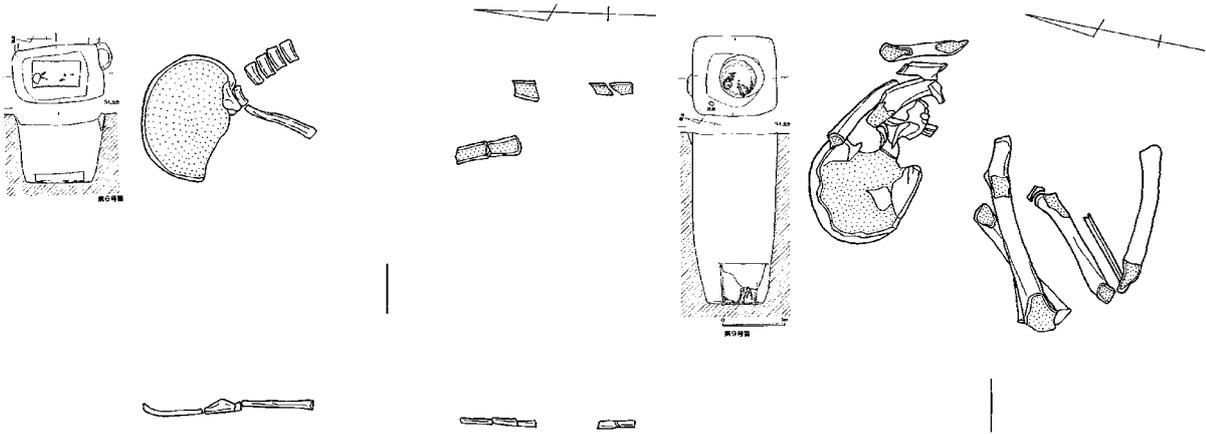
原田第2号墓地第5号墓人骨

0 50cm

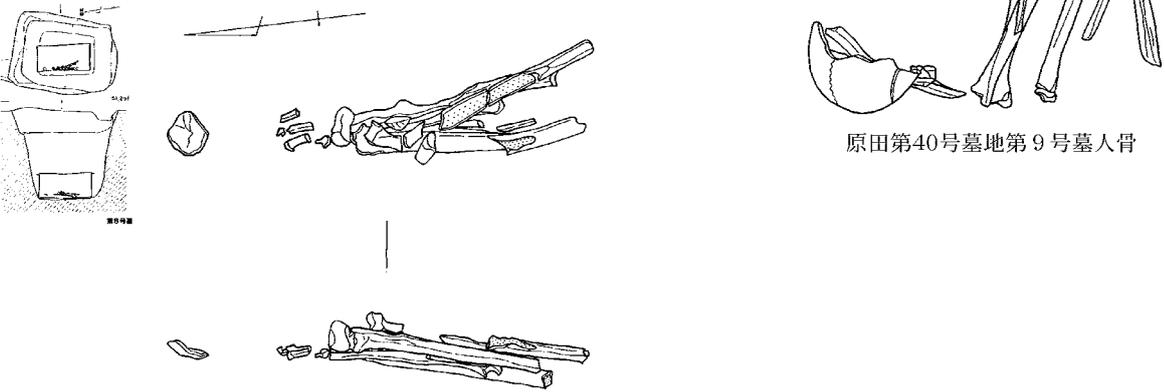
第41图 原田第2号墓地第2・3・4・5・10号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



第42图 原田第40号墓地第1・2・4・5号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



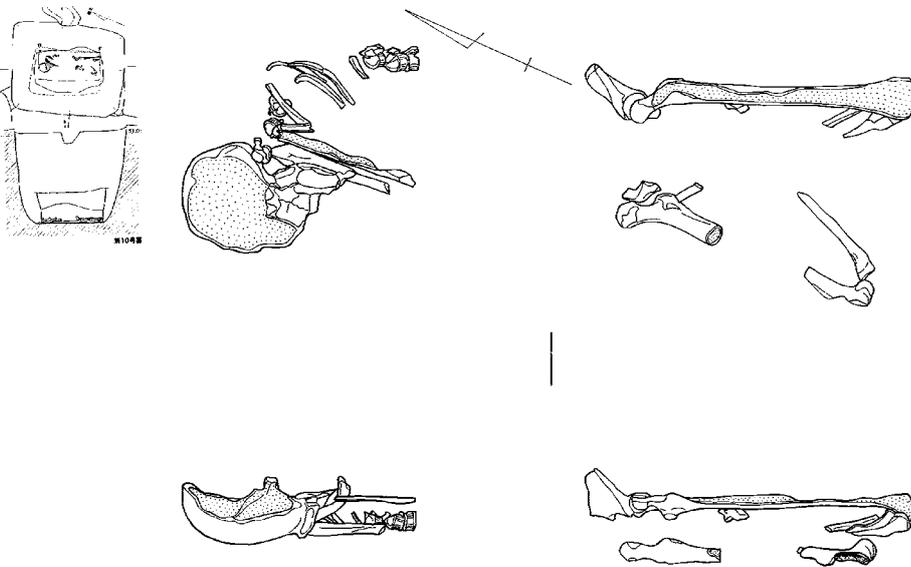
原田第40号墓地第6号墓人骨



原田第40号墓地第9号墓人骨

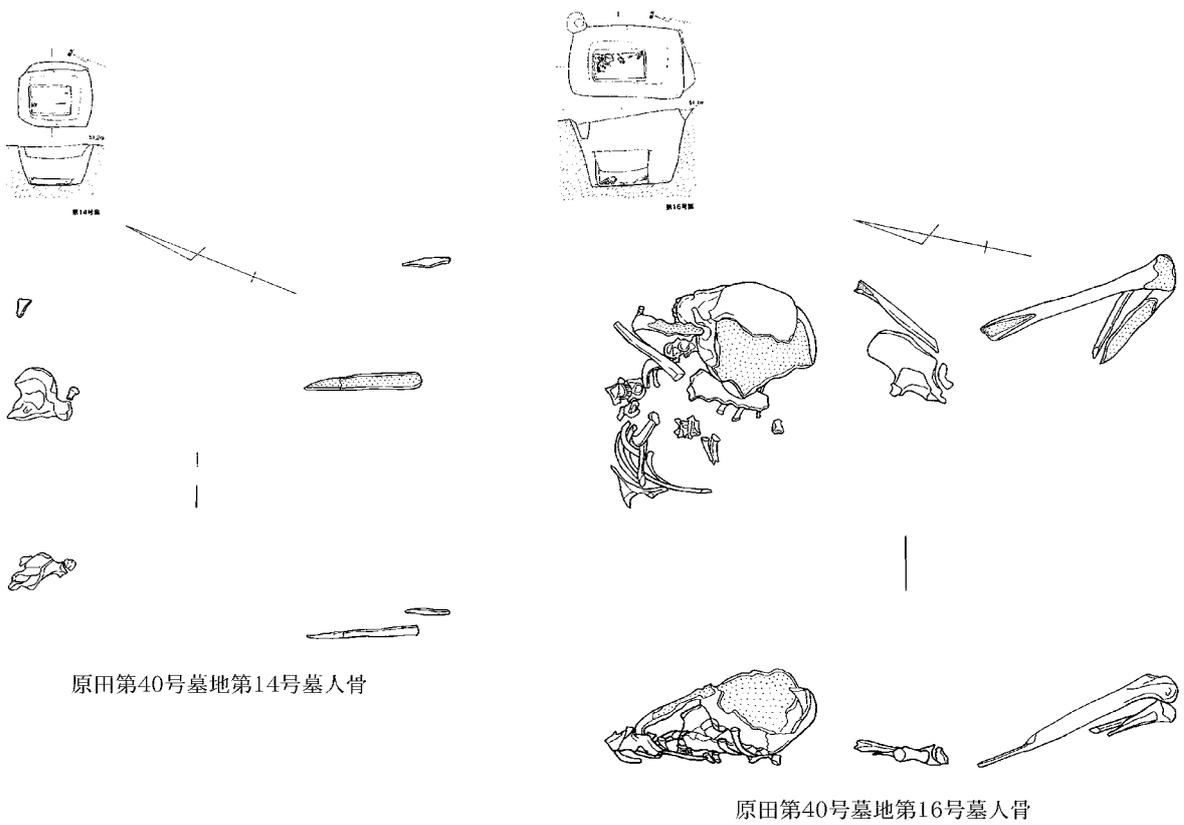
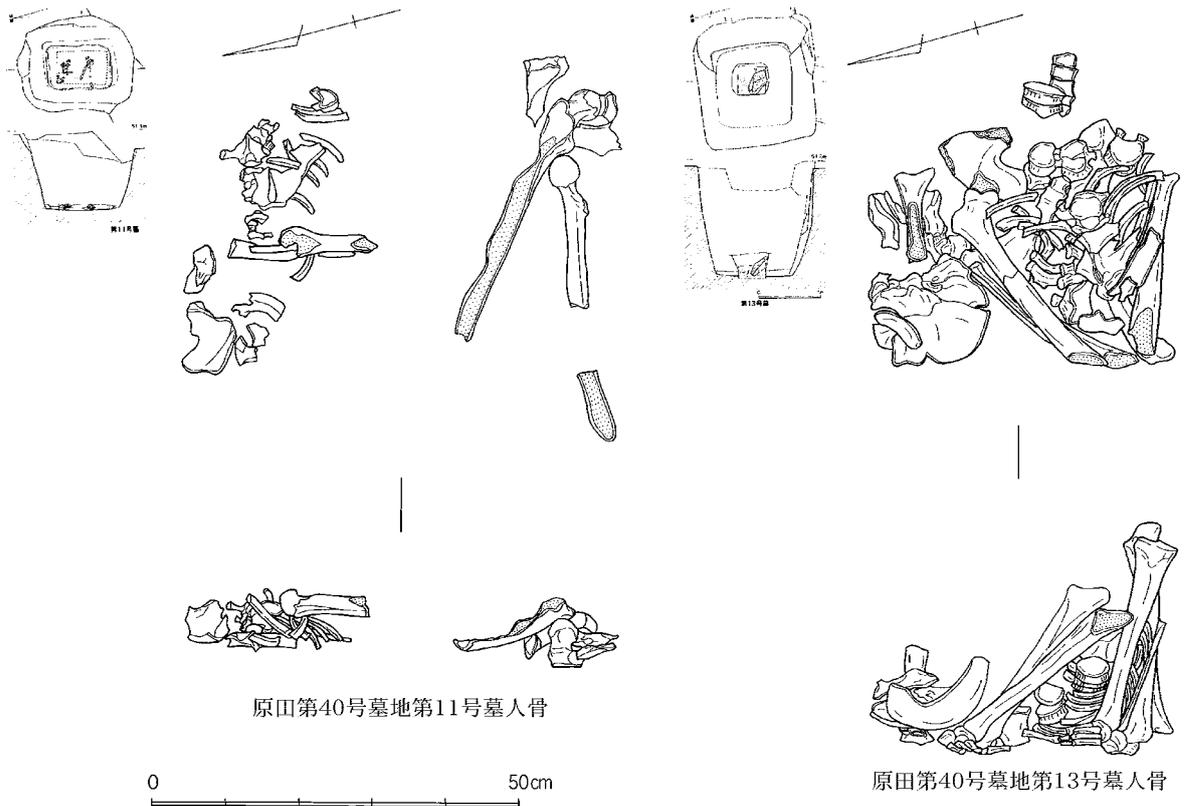
原田第40号墓地第8号墓人骨

0 50cm

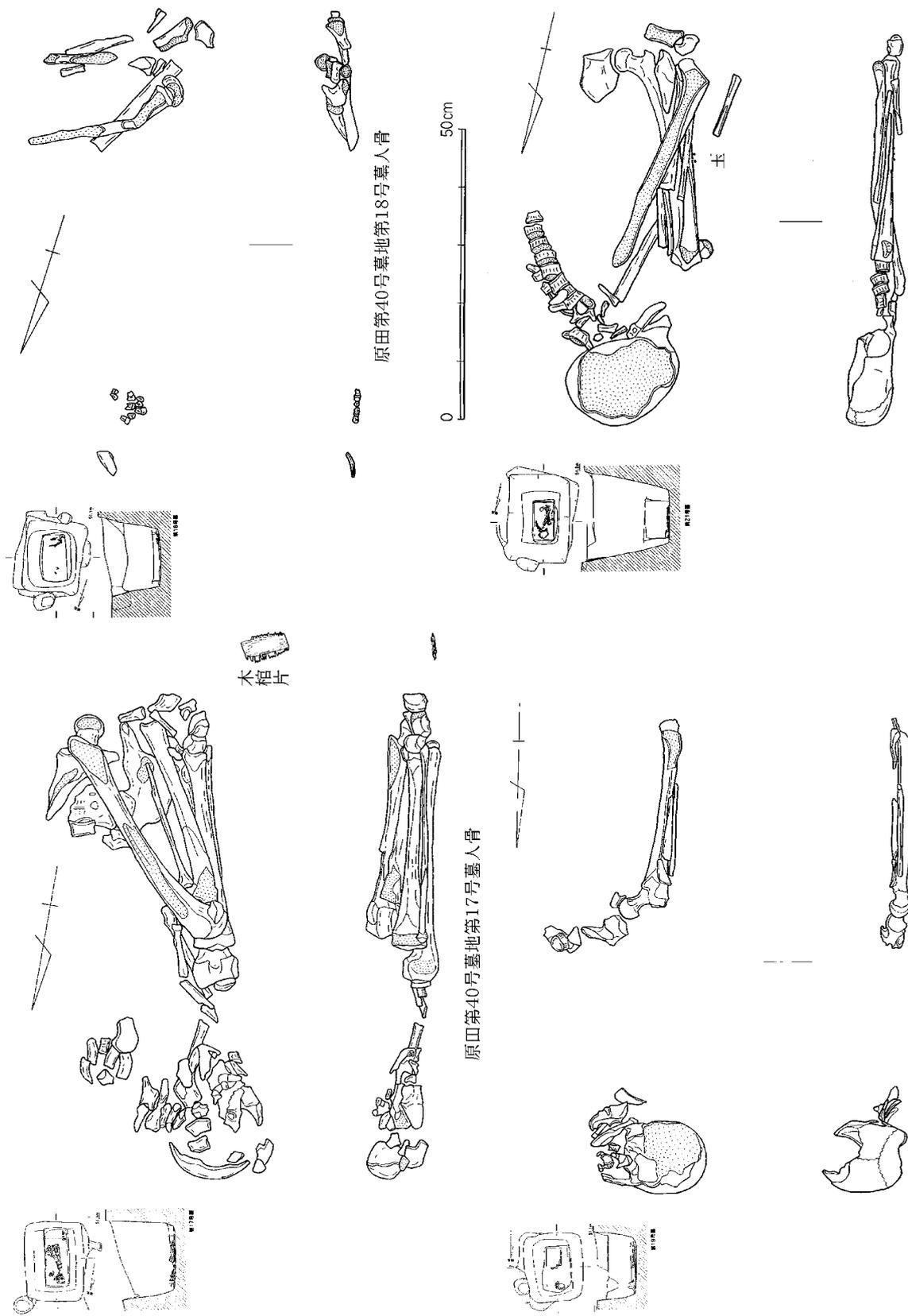


原田第40号墓地第10号墓人骨

第43图 原田第40号墓地第6・8・9・10号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



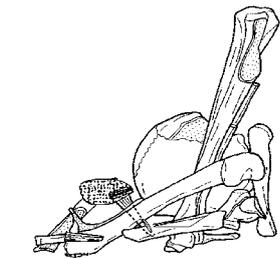
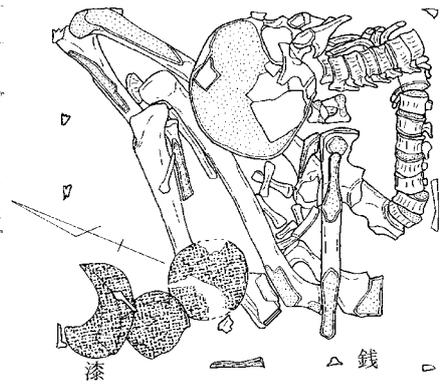
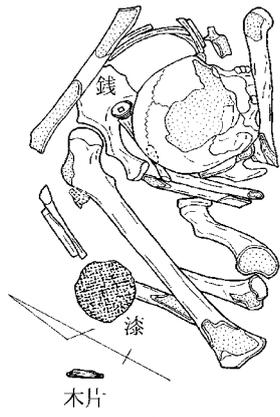
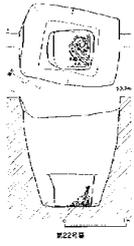
第44图 原田第40号墓地第11・13・14・16号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



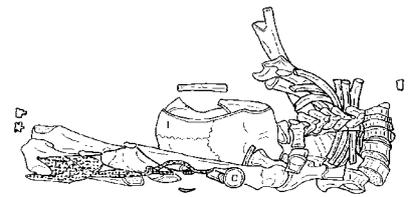
原田第40号墓地第21号墓人骨

原田第40号墓地第19号墓人骨

第45图 原田第40号墓地第17·18·19·21号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

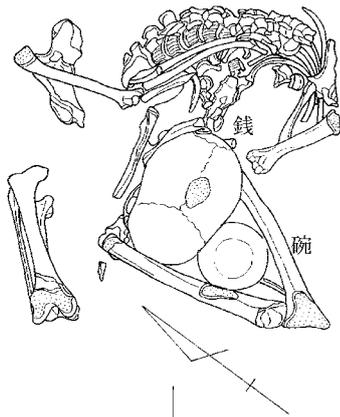
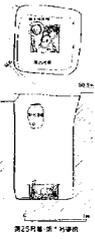


原田第40号墓地第22号墓人骨

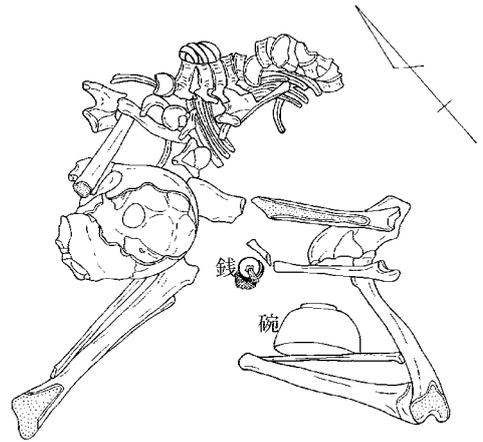


原田第40号墓地第23号墓人骨

0 50cm

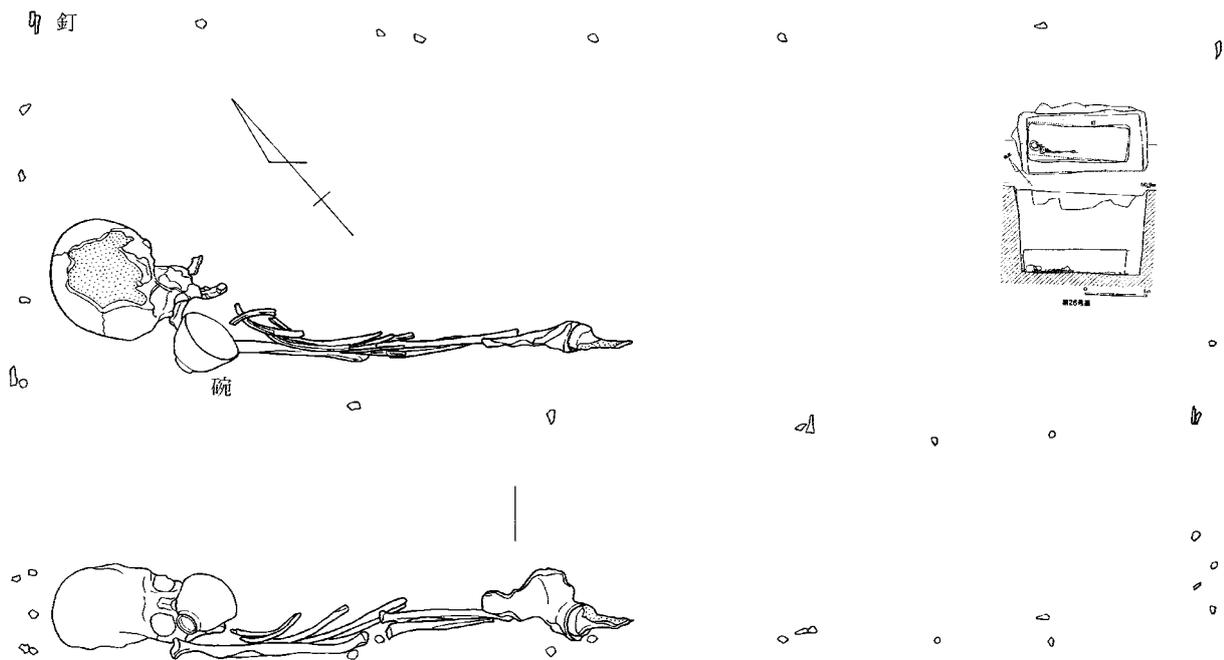


原田第40号墓地第25号墓人骨



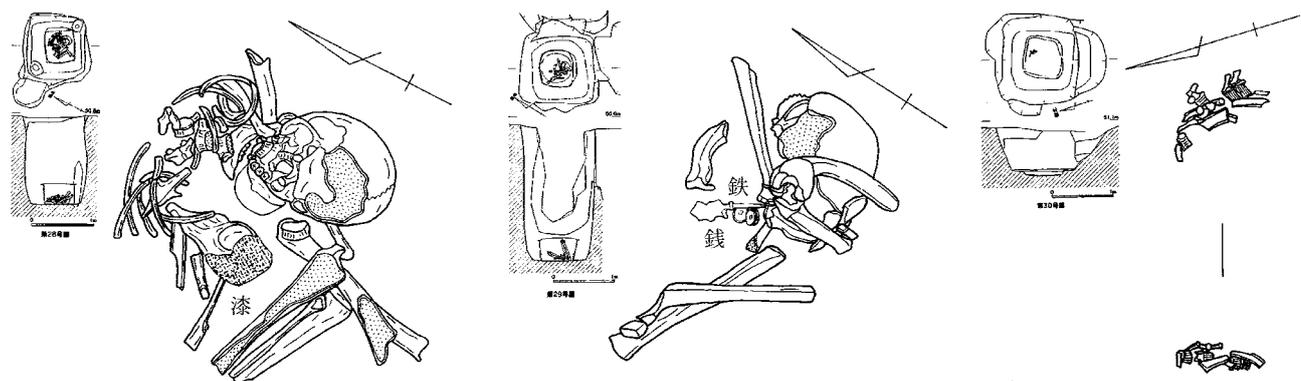
原田第40号墓地第27号墓人骨

第46图 原田第40号墓地第22·23·25·27号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

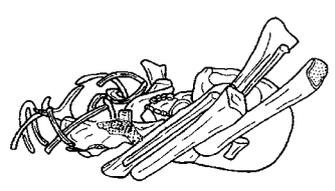


原田第40号墓地第26号墓人骨

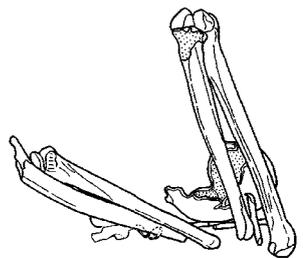
0 50cm



原田第40号墓地第30号墓人骨

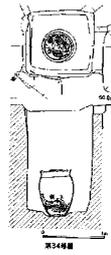
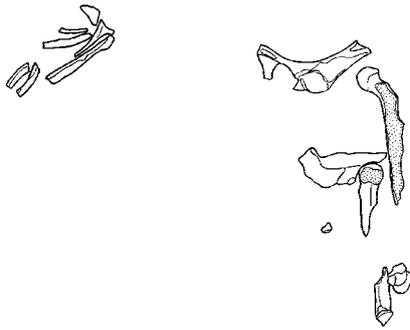
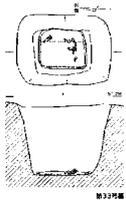


原田第40号墓地第28号墓人骨

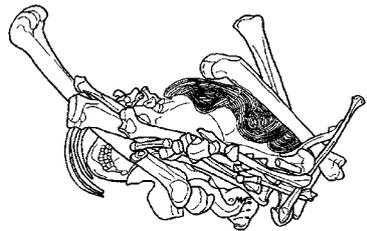


原田第40号墓地第29号墓人骨

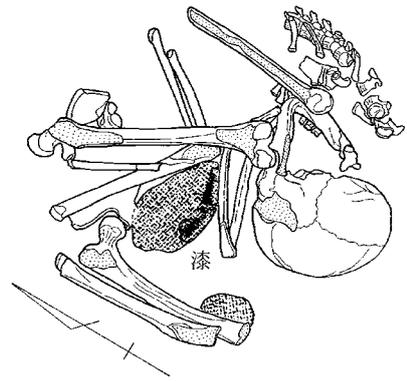
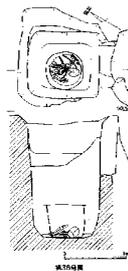
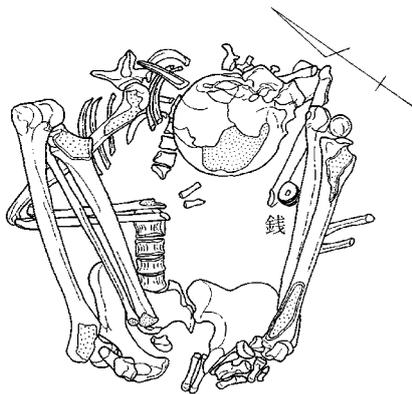
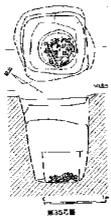
第47图 原田第40号墓地第26·28·29·30号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



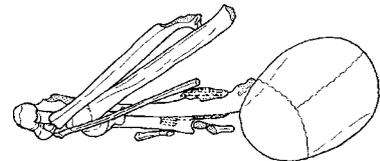
原田第40号墓地第33号墓人骨



原田第40号墓地第34号墓人骨

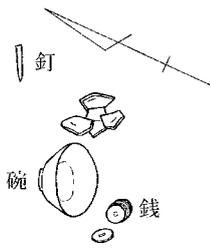
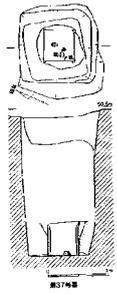


原田第40号墓地第35号墓人骨

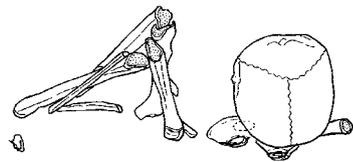
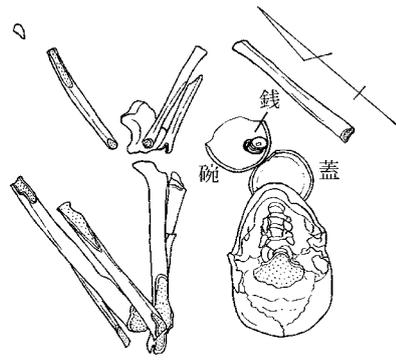
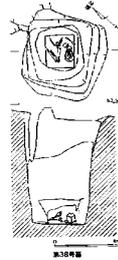


原田第40号墓地第36号墓人骨

第48图 原田第40号墓地第33・34・35・36号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

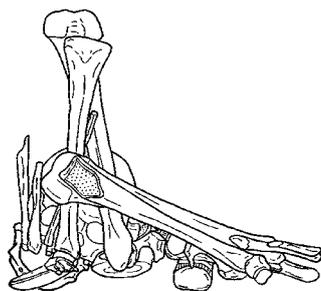
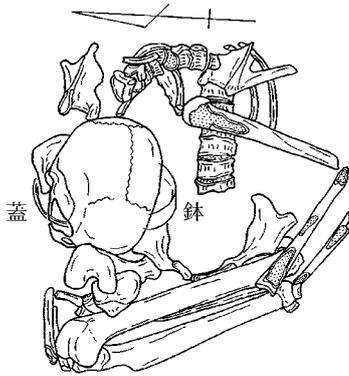
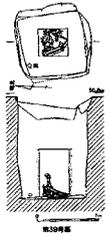


原田第40号墓地第37号墓人骨

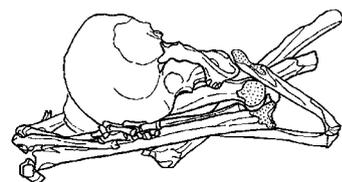
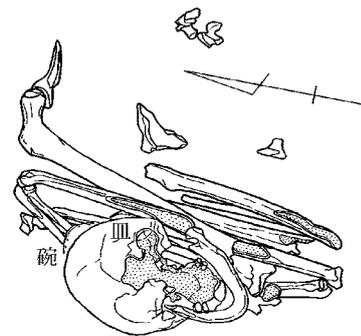


原田第40号墓地第38号墓人骨

0 50cm

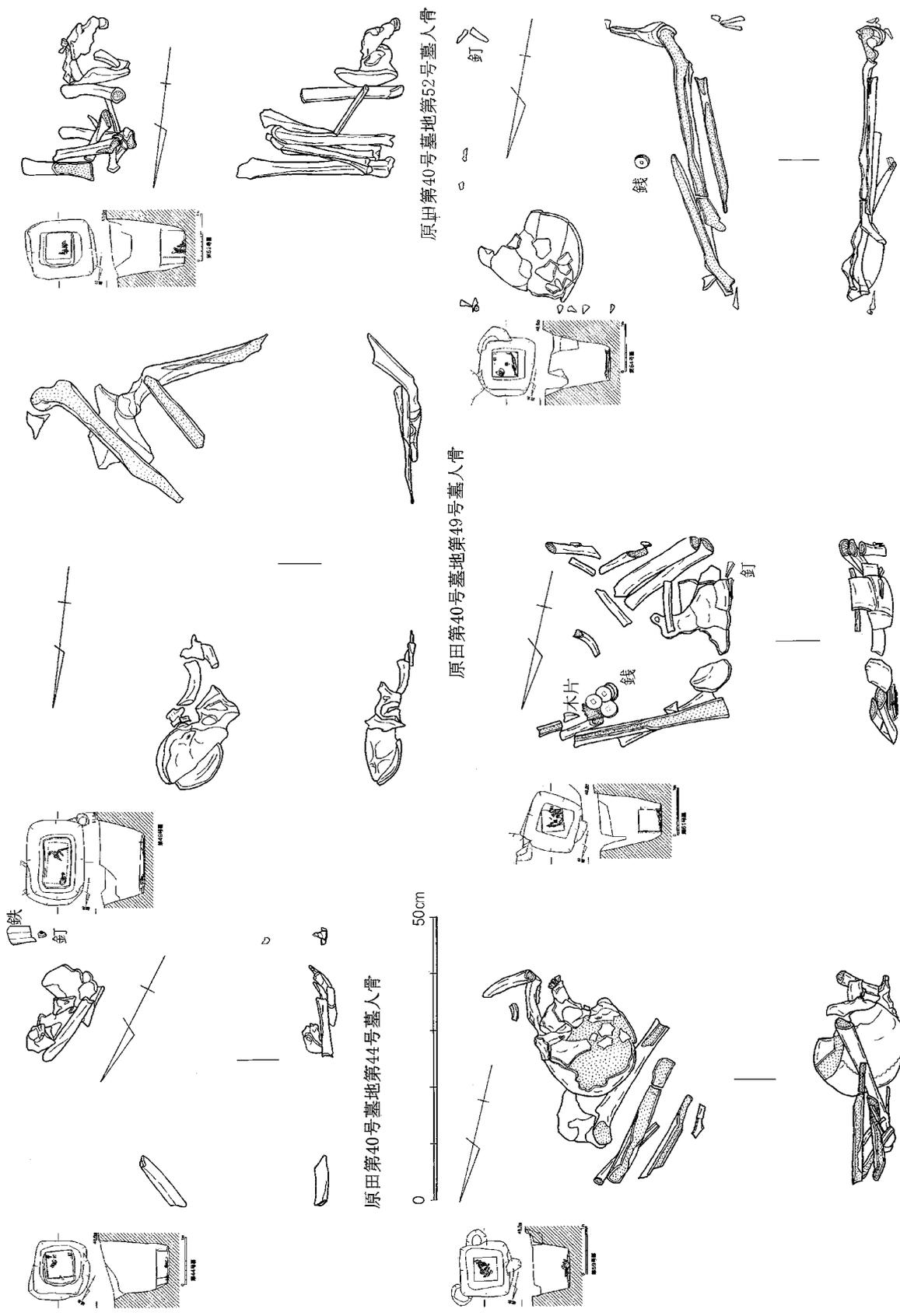


原田第40号墓地第39号墓人骨

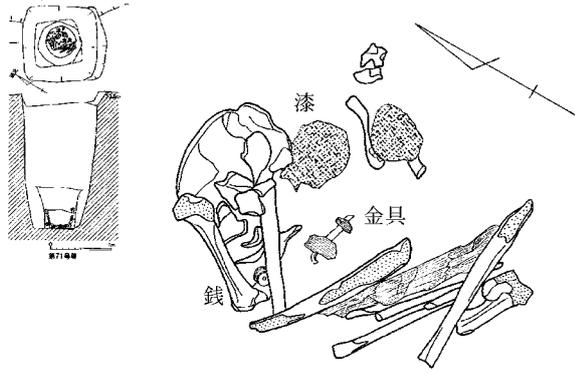


原田第40号墓地第41号墓人骨

第49图 原田第40号墓地第37·38·39·41号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



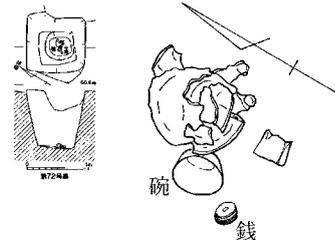
第50图 原田第40号墓地第44・49・52・59・61・64号墓人骨出土状态美测图 (S=1/10)



钱

漆

金具

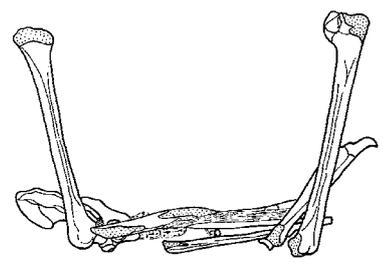


碗

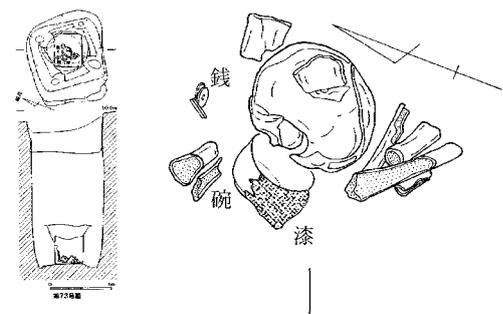
钱



原田第40号墓地第72号墓人骨



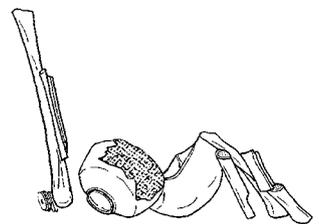
原田第40号墓地第71号墓人骨



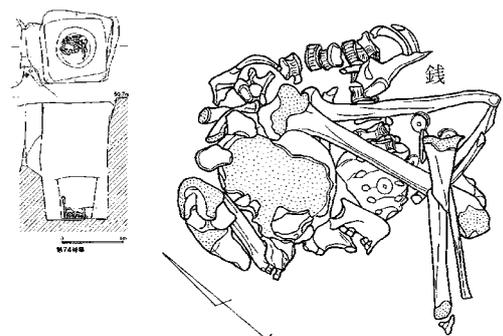
钱

碗

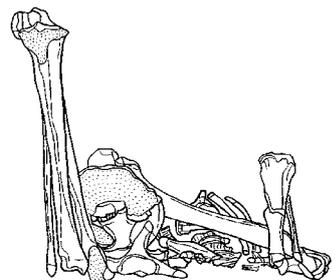
漆



原田第40号墓地第73号墓人骨

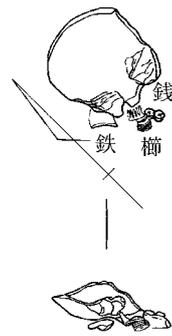
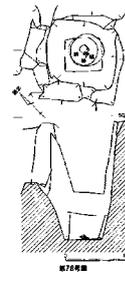
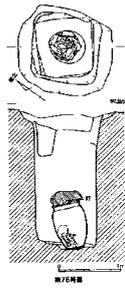


钱

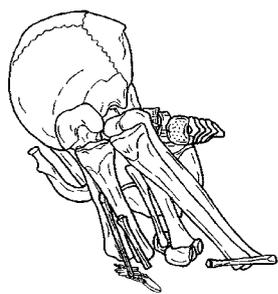


原田第40号墓地第74号墓人骨

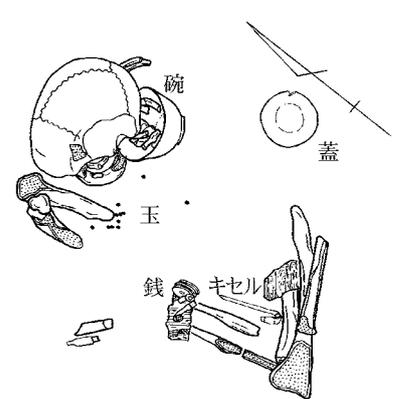
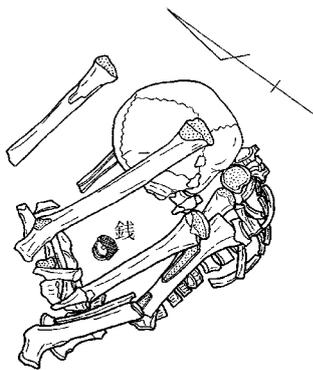
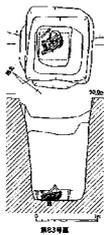
第51图 原田第40号墓地第71·72·73·74号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



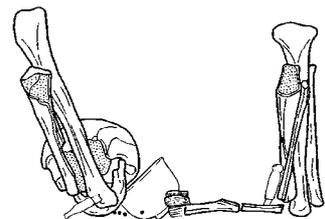
原田第40号墓地第78号墓人骨



原田第40号墓地第75号墓人骨

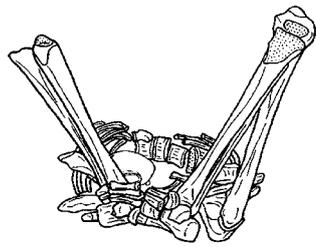
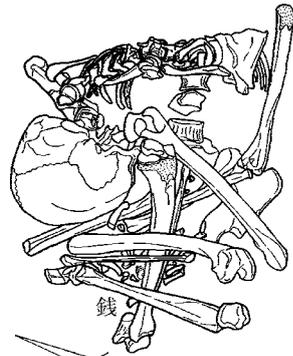
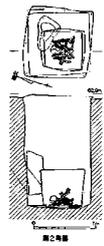
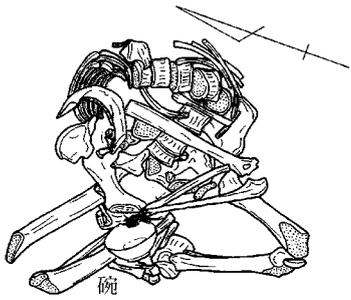
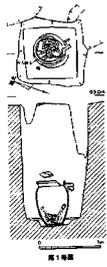


原田第40号墓地第83号墓人骨

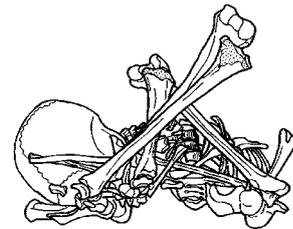


原田第40号墓地第84号墓人骨

第52図 原田第40号墓地第75・78・83・84号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)

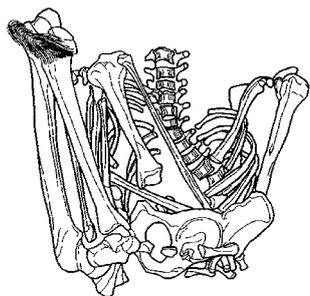
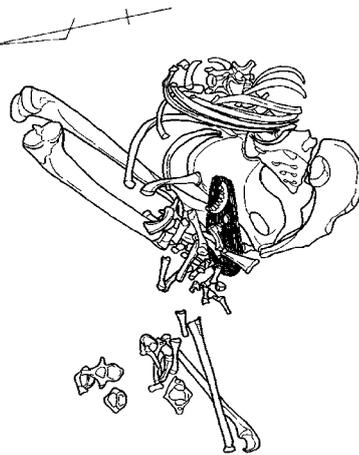
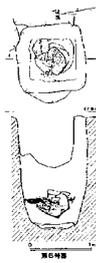
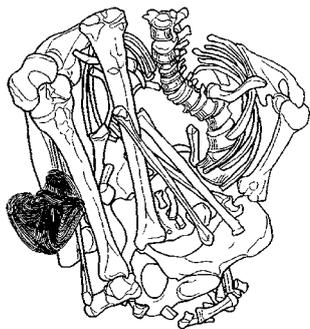
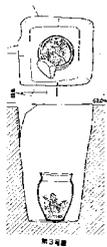


原田第41号墓地第1号墓人骨

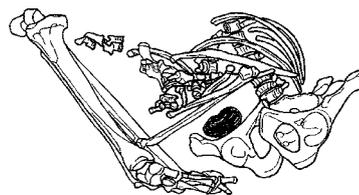


原田第41号墓地第2号墓人骨

0 50cm

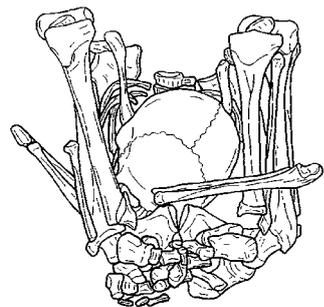
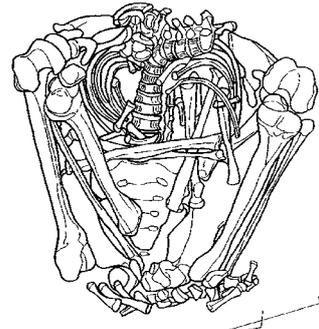
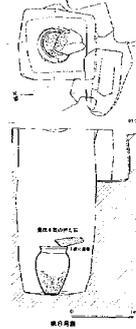
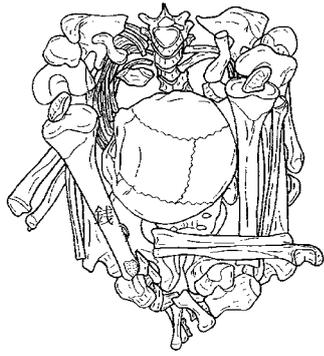
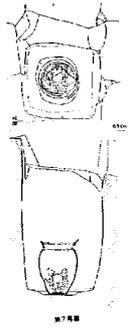


原田第41号墓地第3号墓人骨

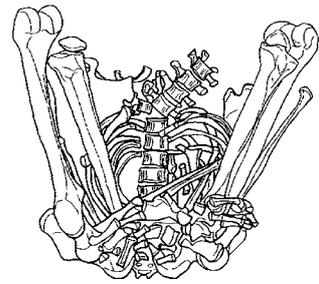


原田第41号墓地第6号墓人骨

第53图 原田第41号墓地第1・2・3・6号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

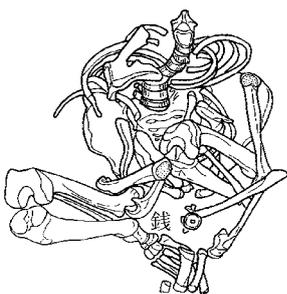


原田第41号墓地第7号墓人骨

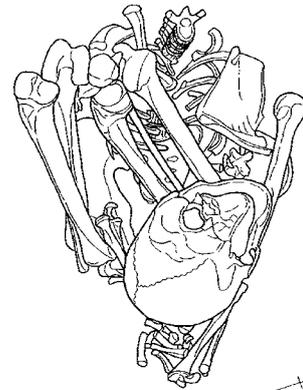


原田第41号墓地第8号墓人骨

0 50cm

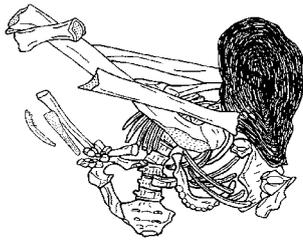
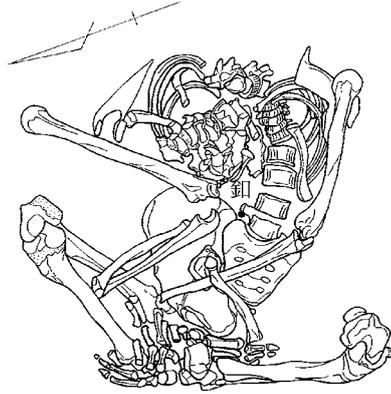
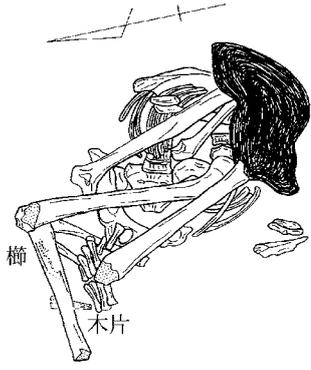
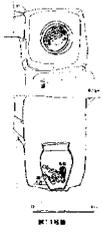


原田第41号墓地第9号墓人骨

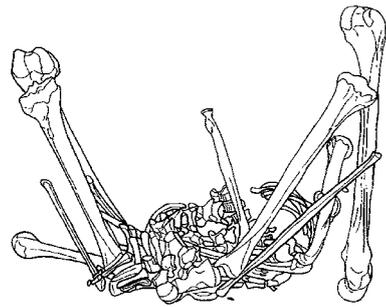


原田第41号墓地第10号墓人骨

第54图 原田第41号墓地第7・8・9・10号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

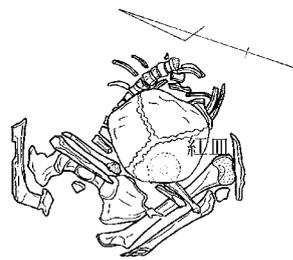
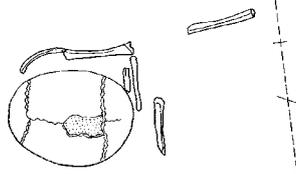


原田第41号墓地第11号墓人骨



原田第41号墓地第12号墓人骨

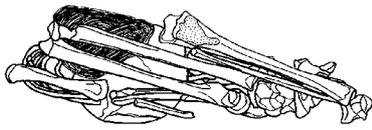
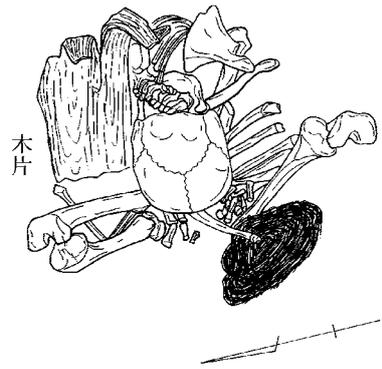
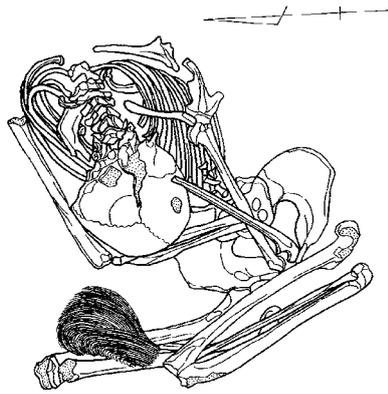
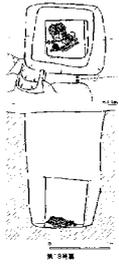
0 50cm



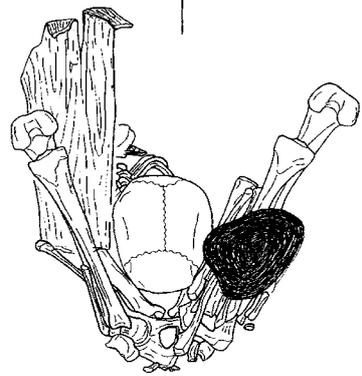
原田第41号墓地第16号墓人骨

原田第41号墓地第17号墓人骨

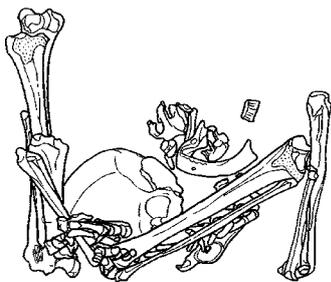
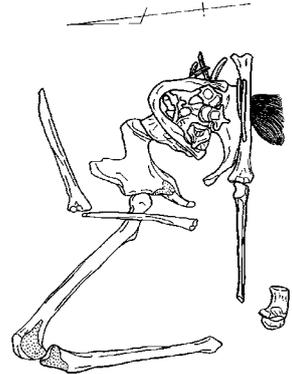
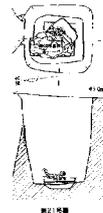
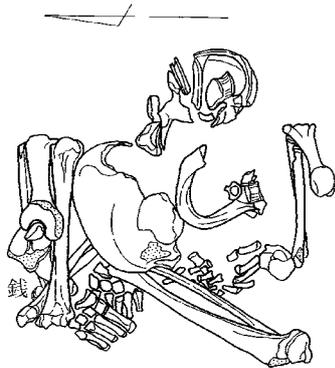
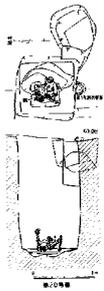
第55图 原田第41号墓地第11・12・16・17号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



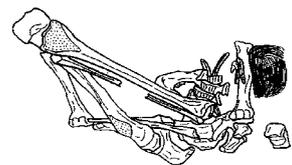
原田第41号墓地第18号墓人骨



原田第41号墓地第19号墓人骨

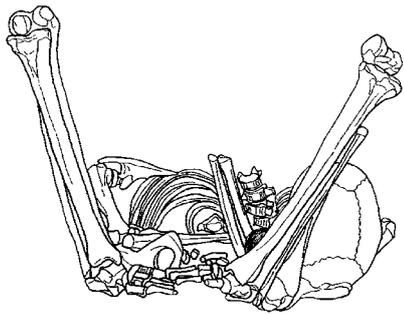
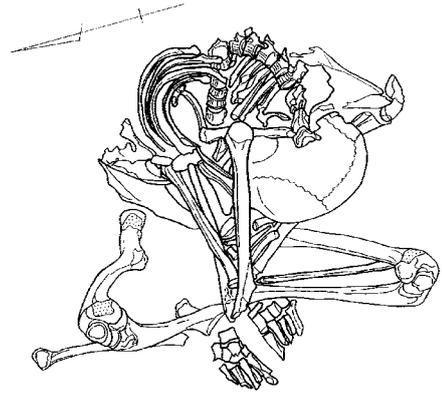
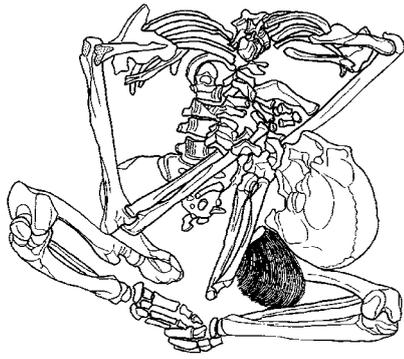
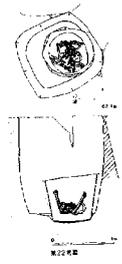


原田第41号墓地第20号墓人骨

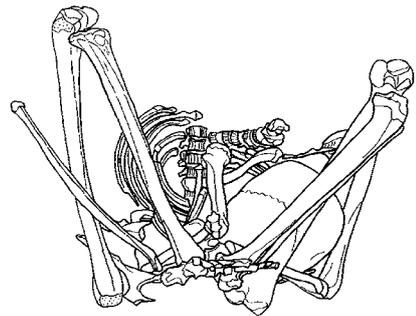


原田第41号墓地第21号墓人骨

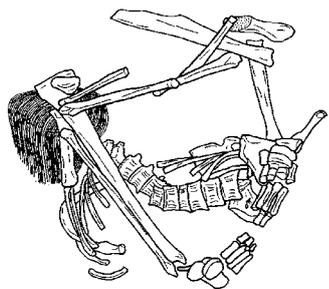
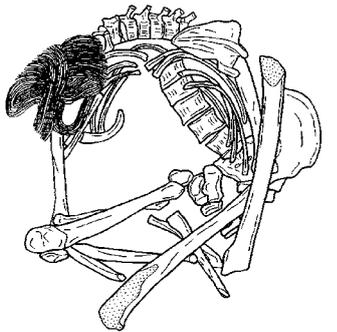
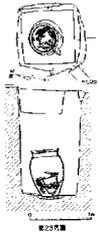
第56图 原田第41号墓地第18・19・20・21号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



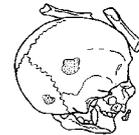
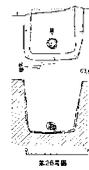
原田第41号墓地第22号墓人骨



原田第41号墓地第24号墓人骨



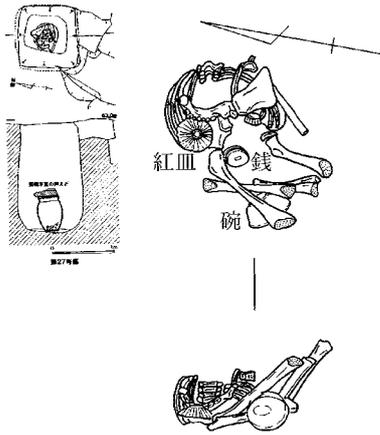
原田第41号墓地第23号墓人骨



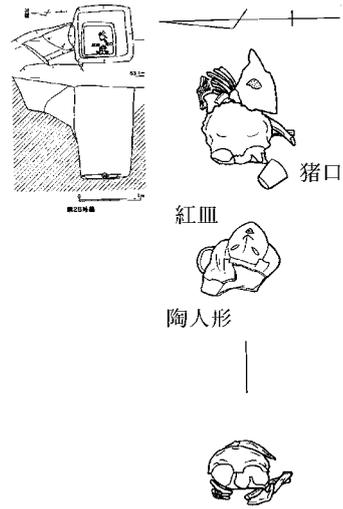
原田第41号墓地第26号墓人骨

0 50cm

第57图 原田第41号墓地第22・23・24・26号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

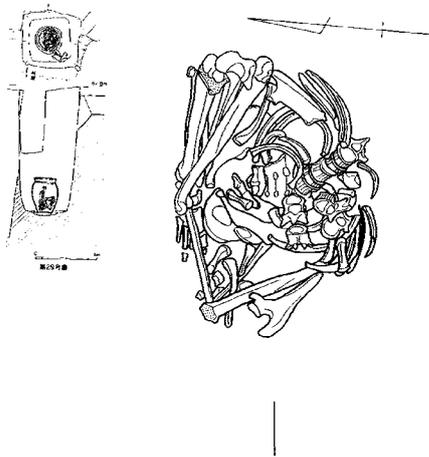


原田第41号墓地第27号墓人骨

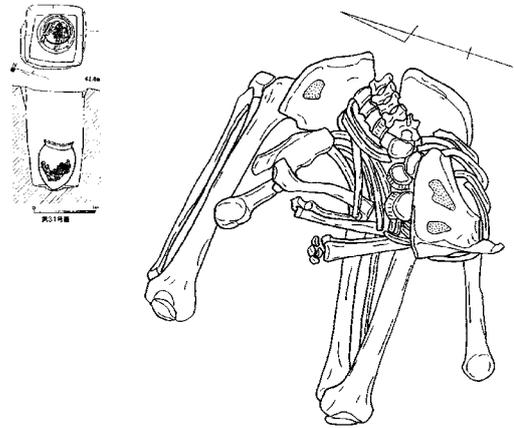


原田第41号墓地第28号墓人骨

0 50cm

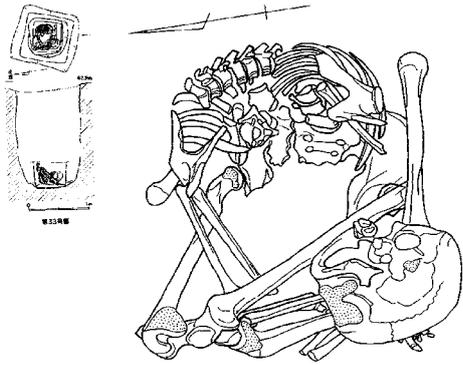


原田第41号墓地第29号墓人骨

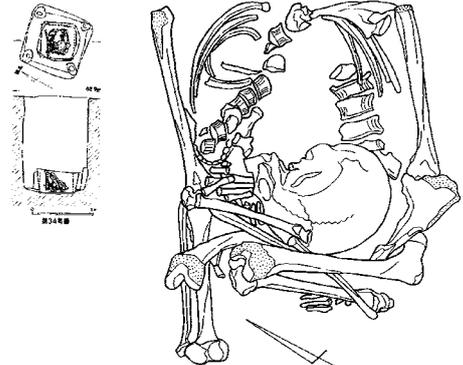


原田第41号墓地第31号墓人骨

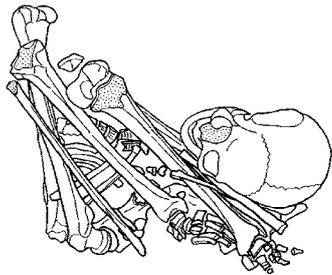
第58图 原田第41号墓地第27·28·29·31号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



原田第41号墓地第33号墓人骨

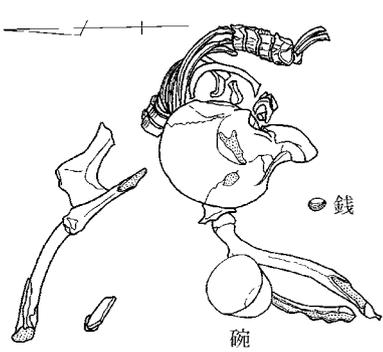
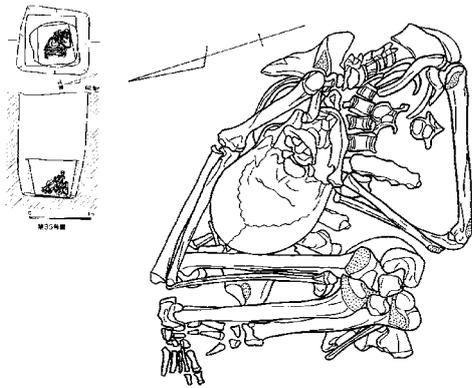


原田第41号墓地第34号墓人骨

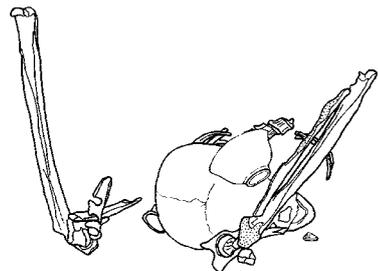
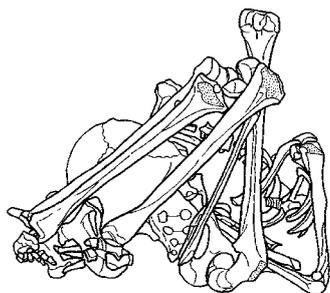


原田第41号墓地第35号墓人骨

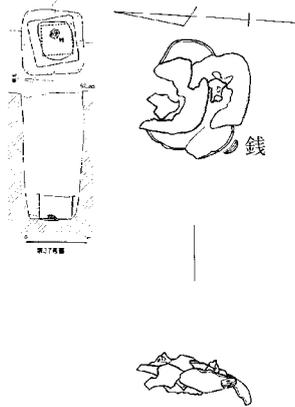
0 50cm



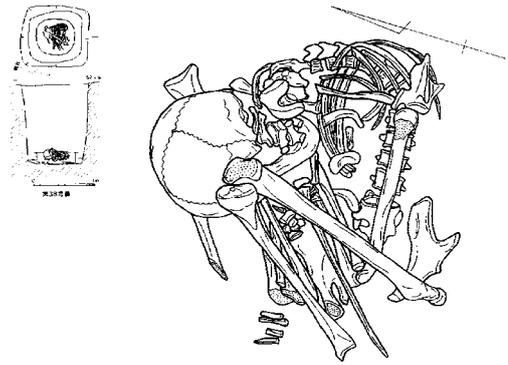
原田第41号墓地第36号墓人骨



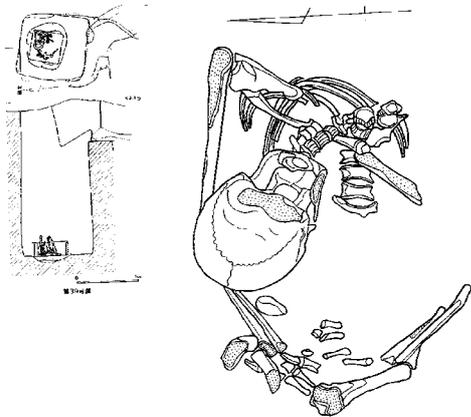
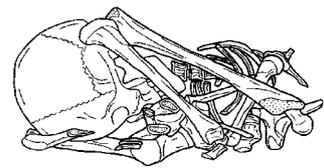
第59图 原田第41号墓地第33・34・35・36号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



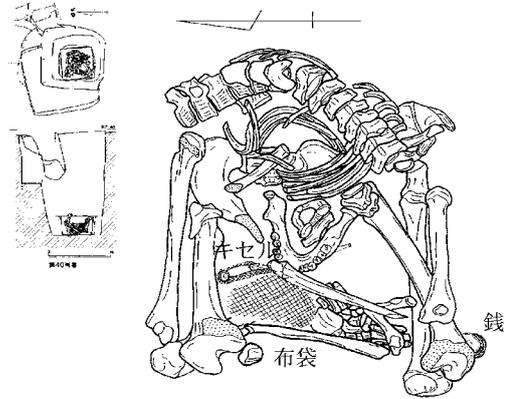
原田第41号墓地第37号墓人骨



原田第41号墓地第38号墓人骨

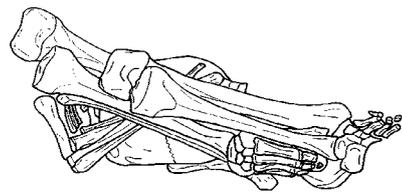
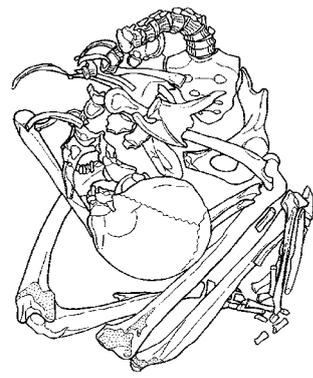
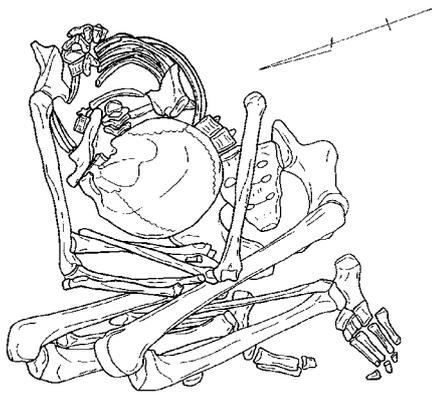


原田第41号墓地第39号墓人骨

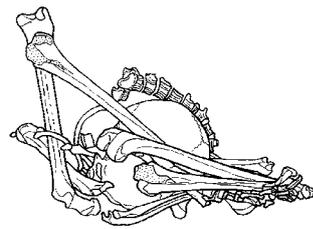


原田第41号墓地第40号墓人骨

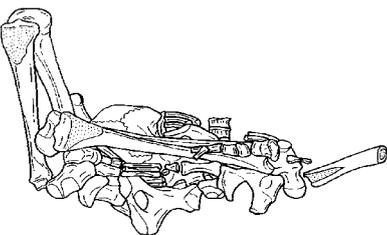
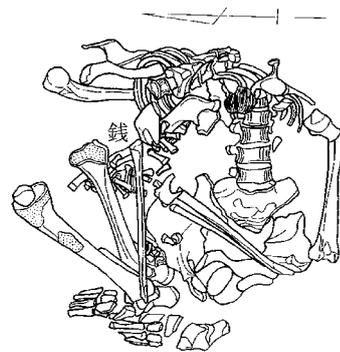
第60图 原田第41号墓地第37・38・39・40号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



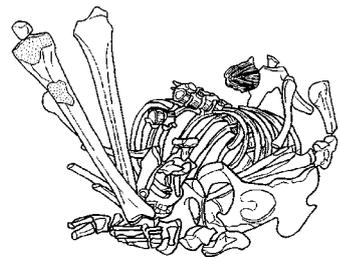
原田第41号墓地第41号墓人骨



原田第41号墓地第42号墓人骨

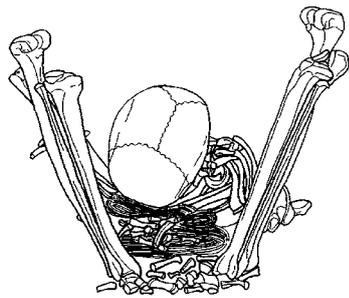
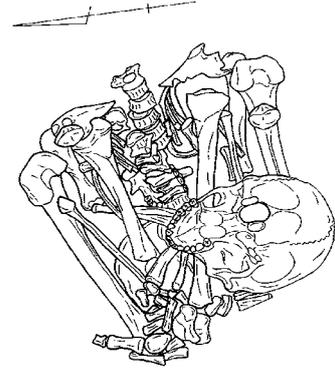
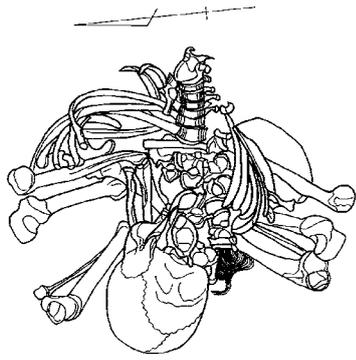
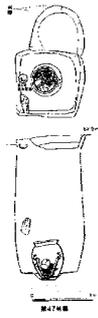


原田第41号墓地第43号墓人骨

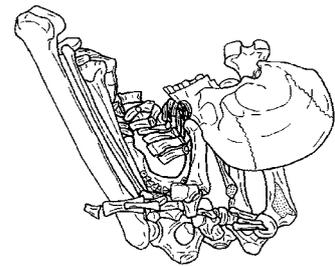


原田第41号墓地第44号墓人骨

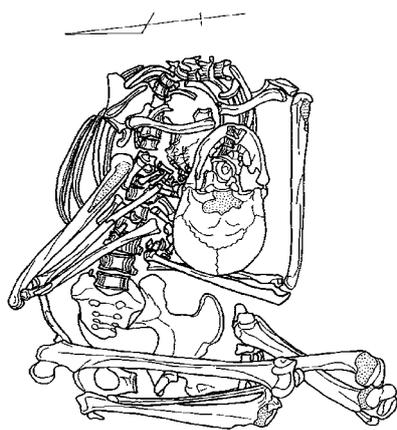
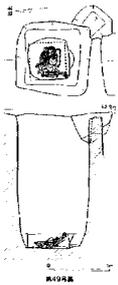
第61图 原田第41号墓地第41・42・43・44号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



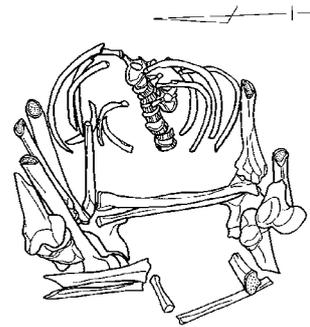
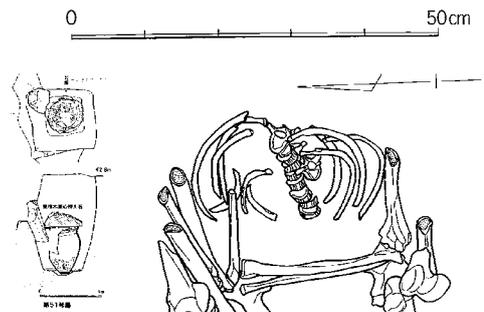
原田第41号墓地第47号墓人骨



原田第41号墓地第48号墓人骨

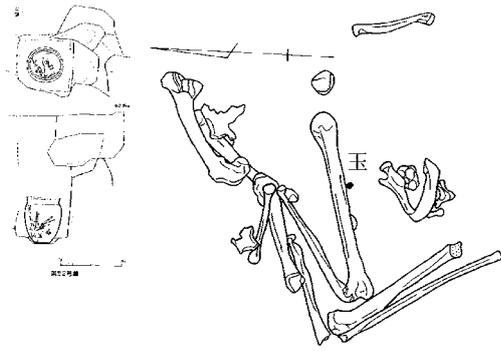


原田第41号墓地第49号墓人骨

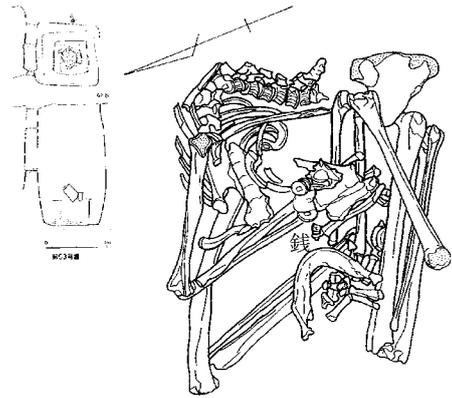


原田第41号墓地第51号墓人骨

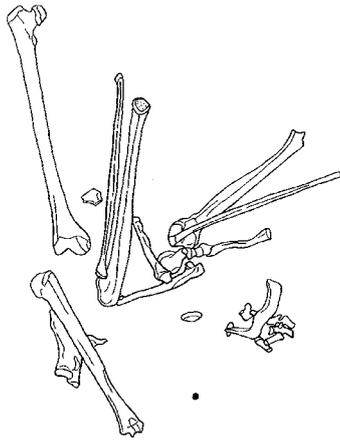
第62图 原田第41号墓地第47·48·49·51号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



原田第41号墓地第52号墓人骨

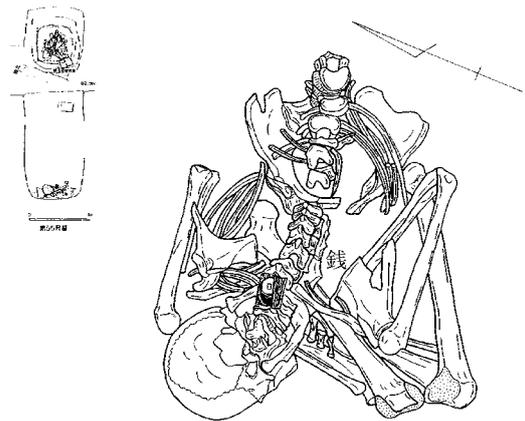
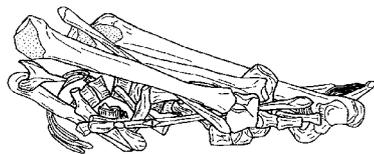
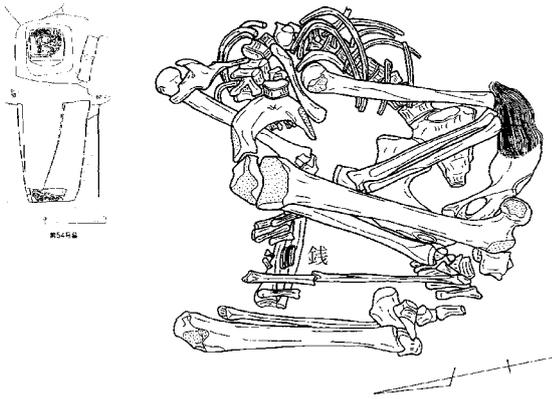


原田第41号墓地第53号墓人骨



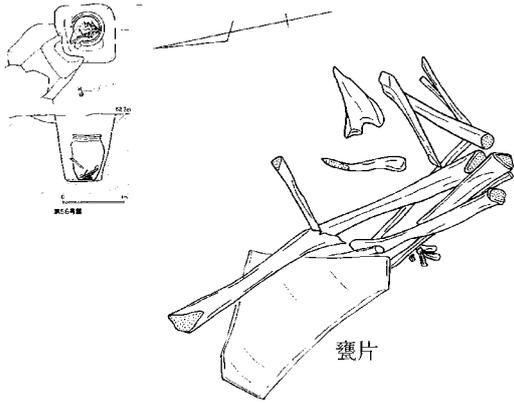
原田第41号墓地第54号墓人骨

0 50cm

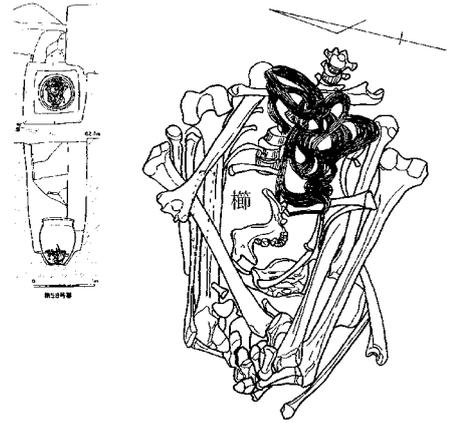


原田第41号墓地第55号墓人骨

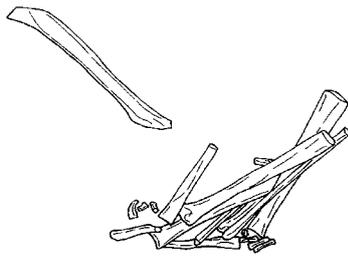
第63图 原田第41号墓地第52・53・54・55号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)



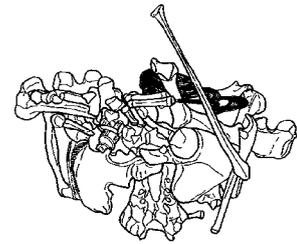
原田第41号墓地第56号墓人骨



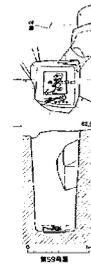
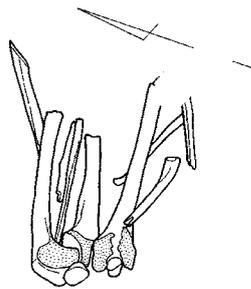
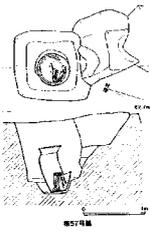
原田第41号墓地第58号墓人骨



原田第41号墓地第57号墓人骨

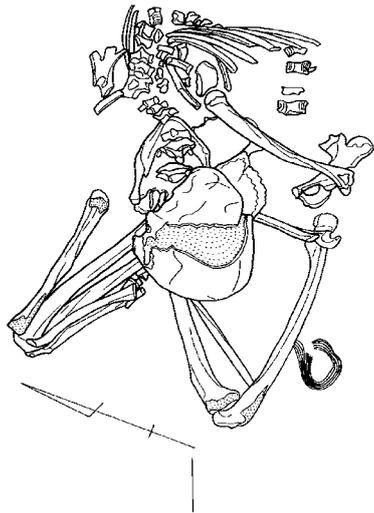


原田第41号墓地第59号墓人骨

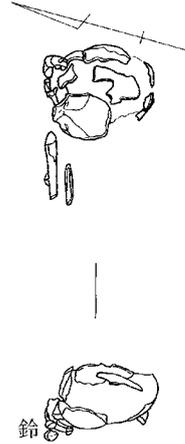


0 50cm

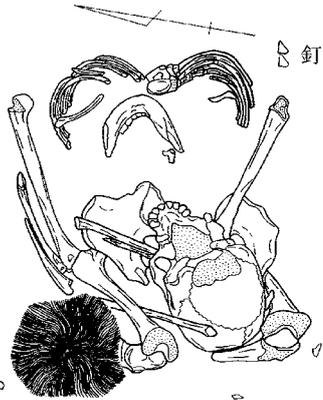
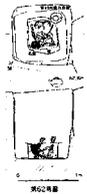
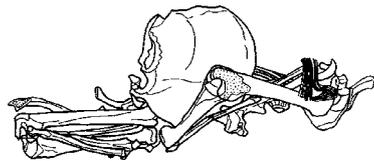
第64図 原田第41号墓地第56・57・58・59号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)



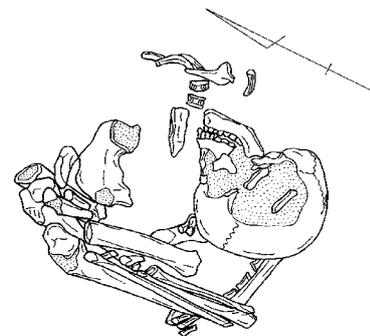
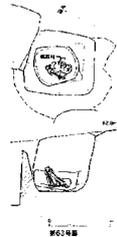
原田第41号墓地第60号墓人骨



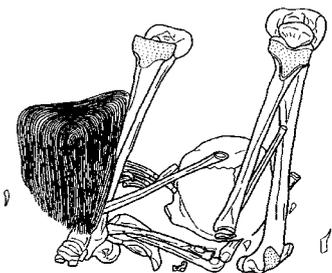
原田第41号墓地第61号墓人骨



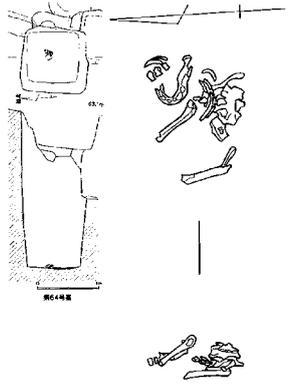
原田第41号墓地第62号墓人骨



原田第41号墓地第63号墓人骨



第65图 原田第41号墓地第60・61・62・63号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

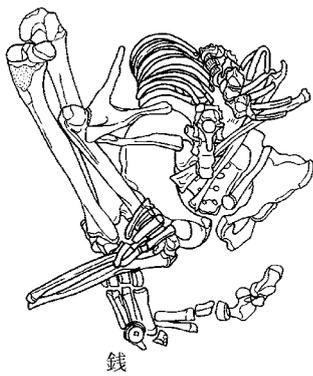
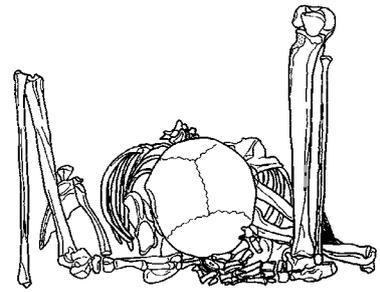


原田第41号墓地第64号墓人骨

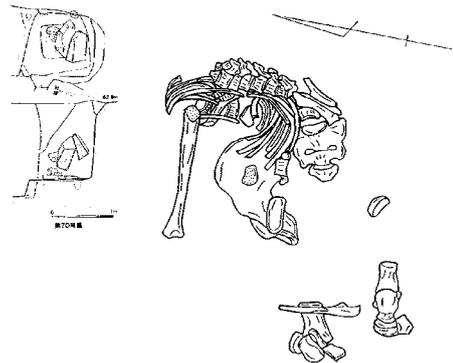


原田第41号墓地第68号墓人骨

0 50cm

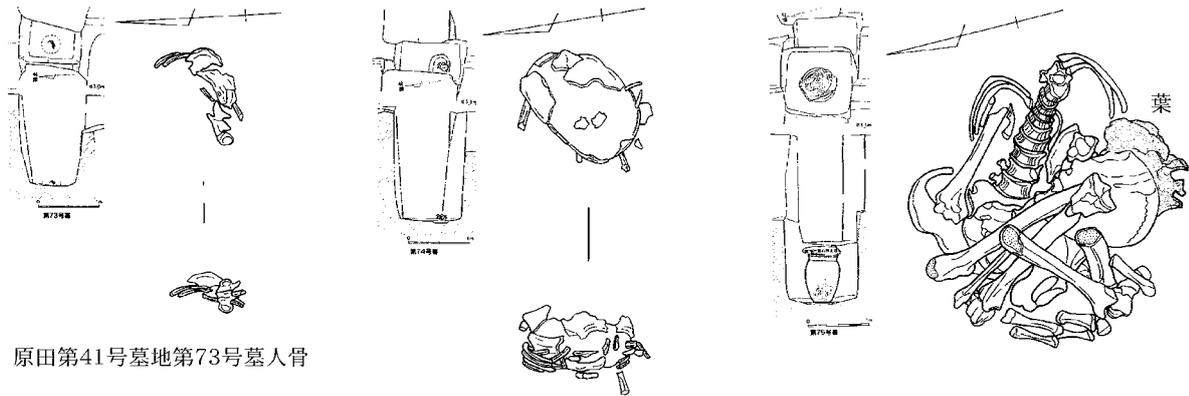


原田第41号墓地第69号墓人骨



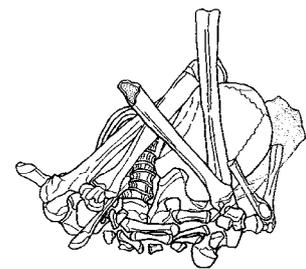
原田第41号墓地第70号墓人骨

第66图 原田第41号墓地第64・68・69・70号墓人骨出土状态实测图 (S=1/10)

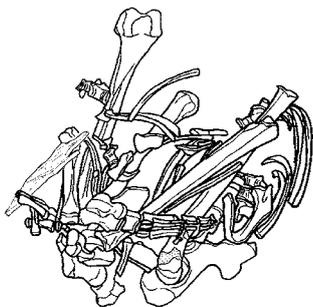
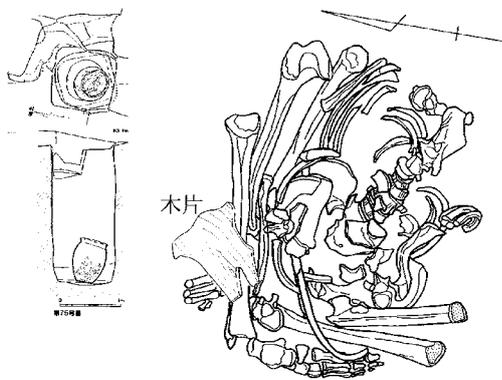


原田第41号墓地第73号墓人骨

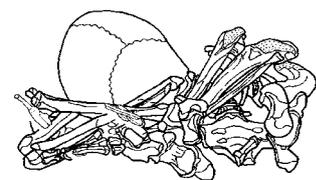
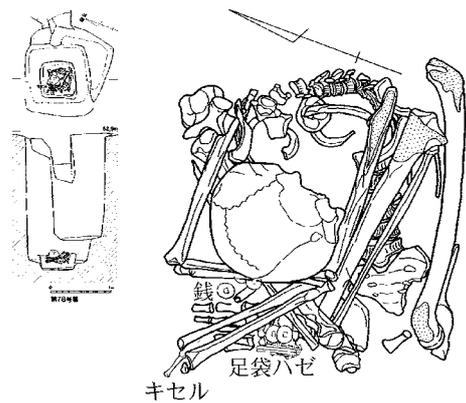
原田第41号墓地第74号墓人骨



原田第41号墓地第75号墓人骨



原田第41号墓地第76号墓人骨



原田第41号墓地第78号墓人骨

第67図 原田第41号墓地第73・74・75・76・78号墓人骨出土状態実測図 (S=1/10)

図版3 原田第1号墓地 人骨出土状態 ①



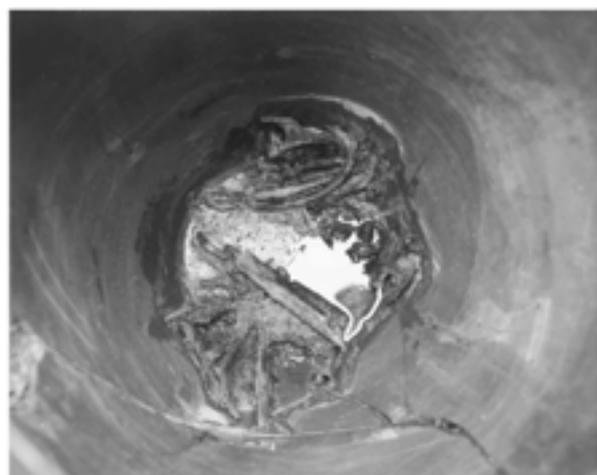
第1号墓 人骨出土状態 (南西から)



第2号墓 人骨出土状態 (西から)



第4号墓 人骨出土状態 (西から)



第5号墓 人骨出土状態 (南西から)



第6号墓 人骨出土状態 (南西から)

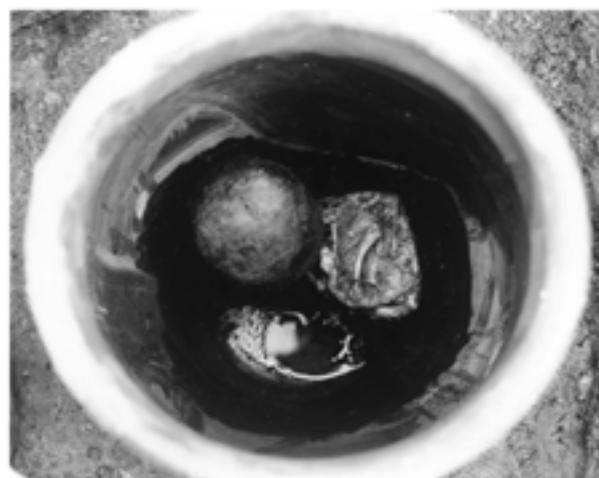


第7号墓 人骨出土状態 (西から)

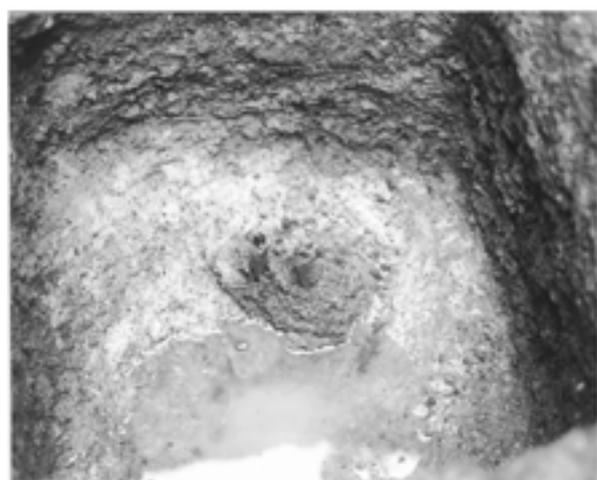
図版4 原田第1号墓地 人骨出土状態 ②



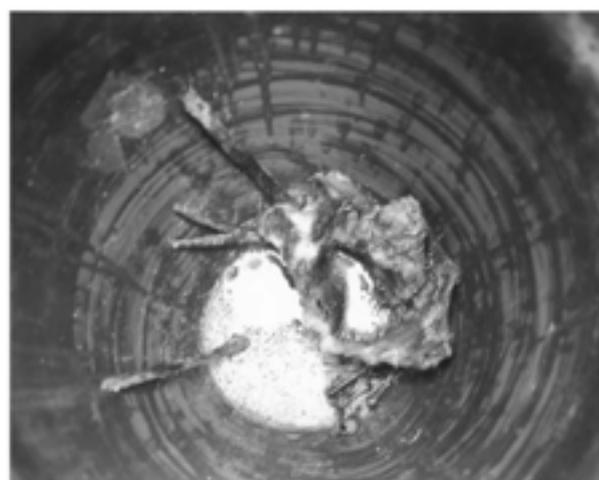
第8号墓 人骨出土状態 (西から)



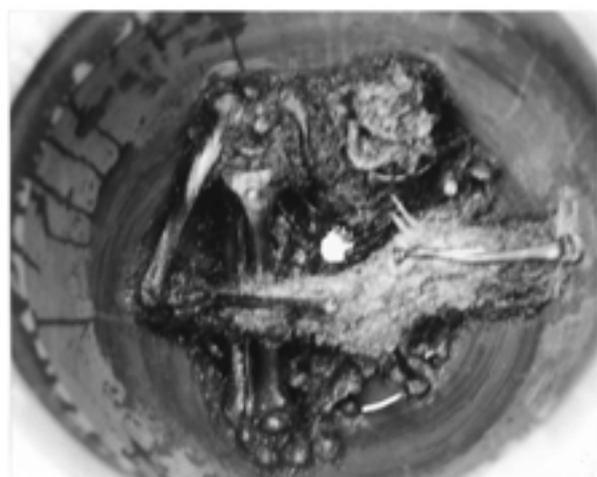
第9号墓 人骨出土状態 (南西から)



第10号墓 人骨出土状態 (南西から)



第11号墓 人骨出土状態 (南西から)



第12号墓 人骨出土状態 (南西から)



第13号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版5 原田第1号墓地 人骨出土状態 ③



第14号墓 人骨出土状態 (南から)



第16号墓 人骨出土状態 (西から)



第18号墓 人骨出土状態 (南西から)



第21号墓 人骨出土状態 (西から)



第23号墓 人骨出土状態 (北東からを天地
逆にしたもの)



第24号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版6 原田第1号墓地 人骨出土状態 ④



第25号墓 人骨出土状態 (南西から)



第26号墓 人骨出土状態 (南西から)



第27号墓 人骨出土状態 (南西から)



第28号墓 人骨出土状態 (南西から)



第29号墓 人骨出土状態 (南西から)

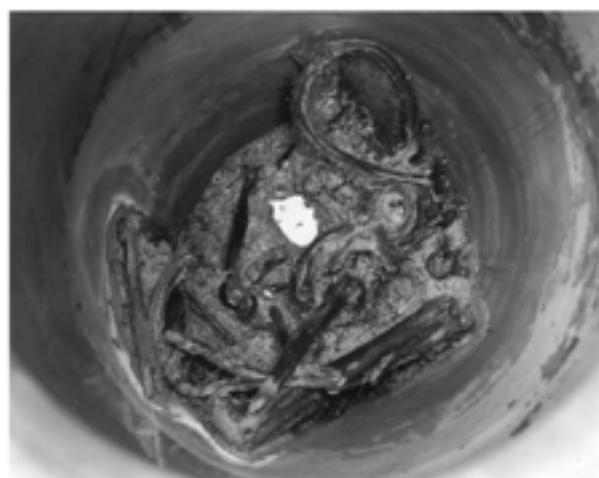


第30号墓 人骨出土状態 (南西から)

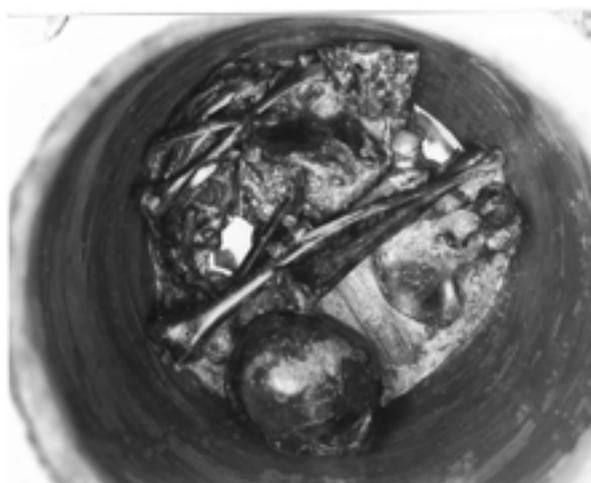
図版7 原田第1号墓地 人骨出土状態 ⑤



第31号墓 人骨出土状態 (南西から)



第32号墓 人骨出土状態 (南西から)



第33号墓 人骨出土状態 (南西からを天地逆にしたもの)



第34号墓 人骨出土状態 (南西から)



第35号墓 人骨出土状態 (北東からを天地逆にしたもの)



第36号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版8 原田第1号墓地 人骨出土状態 ⑥



第39号墓 人骨出土状態 (西から)



第40号墓 人骨出土状態 (南東から)



第41号墓 人骨出土状態 (西から)



第42号墓 人骨出土状態 (西から)



第43号墓 人骨(一部)出土状態 (北東から)



第44号墓 人骨出土状態 (西から)

図版9 原田第1号墓地 人骨出土状態 ⑦



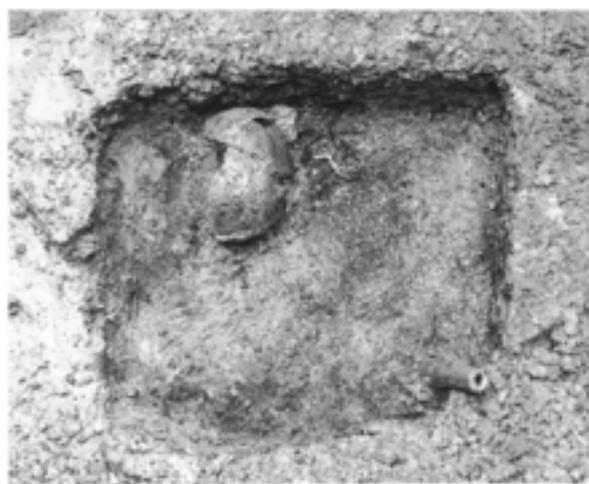
第46号墓 人骨出土状態 (西から)



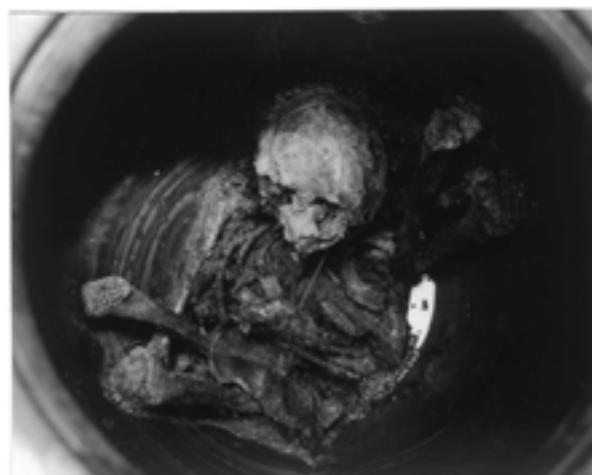
第49号墓 人骨出土状態 (南西から)



第50号墓 人骨出土状態 (南西から)



第54号墓 人骨出土状態 (南西から)



第55号墓 人骨出土状態 (南西から)



第58号墓 人骨出土状態 (西から)

図版10 原田第2号墓地 人骨出土状態



第2号墓 人骨出土状態 (西から)



第3号墓 人骨出土状態 (南西から)



第4号墓 人骨出土状態 (西から)



第5号墓 人骨出土状態 (西から)



第10号墓 人骨出土状態 (北西から)

図版11 原田第40号墓地 人骨出土状態 ①



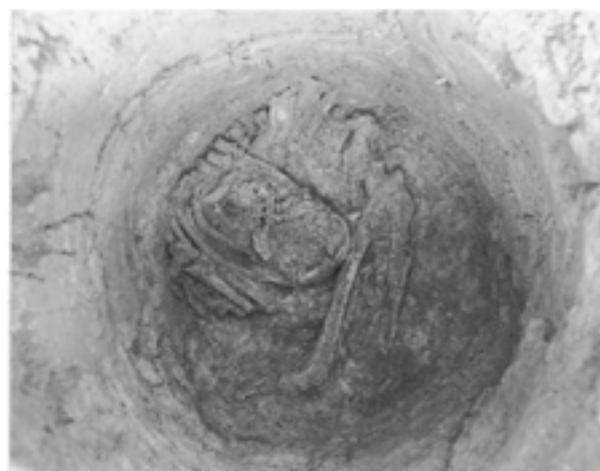
第1号墓 人骨出土状態 (南西から)



第2号墓 人骨出土状態 (南西から)



第4号墓 人骨出土状態 (南西から)



第5号墓 人骨出土状態 (西から)



第6号墓 人骨出土状態 (西から)



第8号墓 人骨出土状態 (西から)

図版12 原田第40号墓地 人骨出土状態 ②



第9号墓 人骨出土状態 (西から)



第10号墓 人骨出土状態 (南西から)



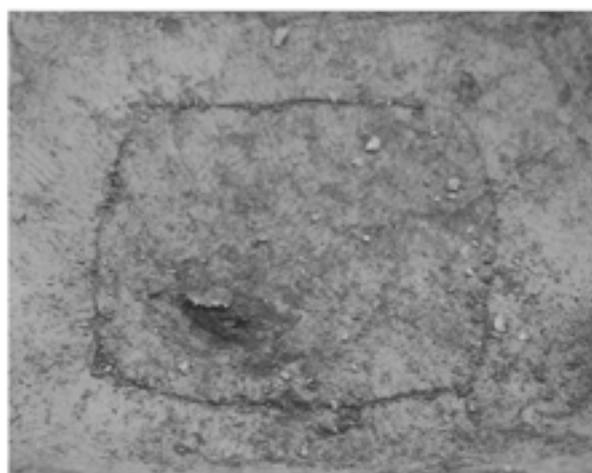
第11号墓 人骨出土状態 (西から)



第13号墓 人骨出土状態 (東から)



第14号墓 人骨出土状態 (南西から)



第15号墓 人骨出土状態 (西から)

図版13 原田第40号墓地 人骨出土状態 ③



第16号墓 人骨出土状態 (西から)



第17号墓 人骨出土状態 (西から)



第18号墓 人骨出土状態 (西から)



第19号墓 人骨出土状態 (西から)



第21号墓 人骨出土状態 (西から)



第22号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版14 原田第40号墓地 人骨出土状態 ④



第23号墓 人骨出土状態 (南西から)



第25号墓 人骨出土状態 (南西から)



第25号墓内の第1号壺棺 人骨出土状態 (南西から)



第26号墓 人骨出土状態 (西から)



第26号墓 人骨出土状態 (南から)

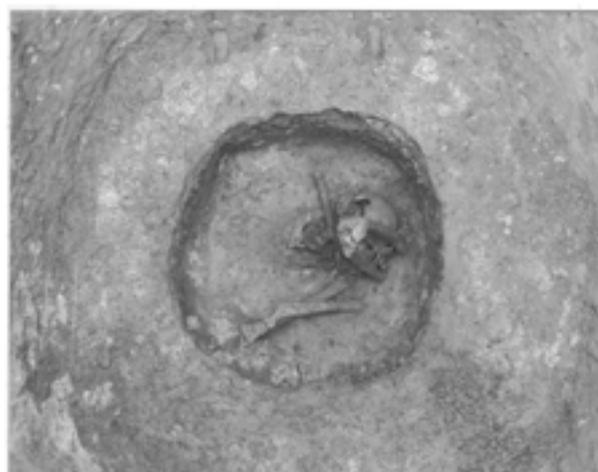


第27号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版15 原田第40号墓地 人骨出土状態 ⑤



第28号墓 人骨出土状態 (南西から)



第29号墓 人骨出土状態 (南西から)



第30号墓 人骨出土状態 (西から)



第33号墓 人骨出土状態 (西から)



第34号墓 人骨出土状態 (南西から)



第35号墓 人骨出土状態 (西から)

図版16 原田第40号墓地 人骨出土状態 ⑥



第36号墓 人骨出土状態 (南西から)



第38号墓 人骨出土状態 (北西から)



第39号墓 人骨出土状態 (西から)



第41号墓 人骨出土状態 (西から)

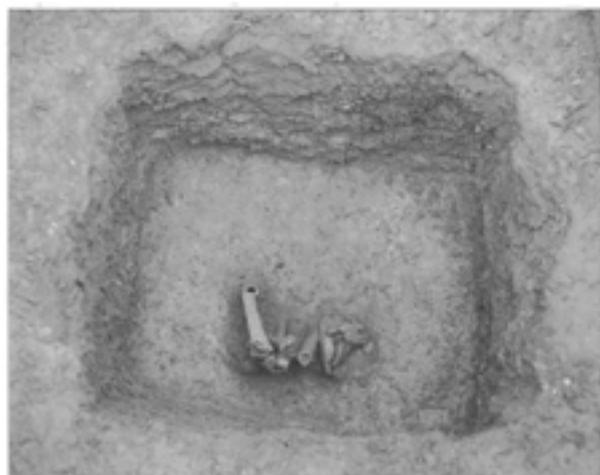


第44号墓 人骨出土状態 (南西から)



第49号墓 人骨出土状態 (西から)

図版17 原田第40号墓地 人骨出土状態 ⑦



第52号墓 人骨出土状態 (西から)



第59号墓 人骨出土状態 (南西から)



第61号墓 人骨出土状態 (南西から)



第64号墓 人骨出土状態 (西から)



第71号墓 人骨出土状態 (南西から)



第72号墓 人骨出土状態 (南西から)

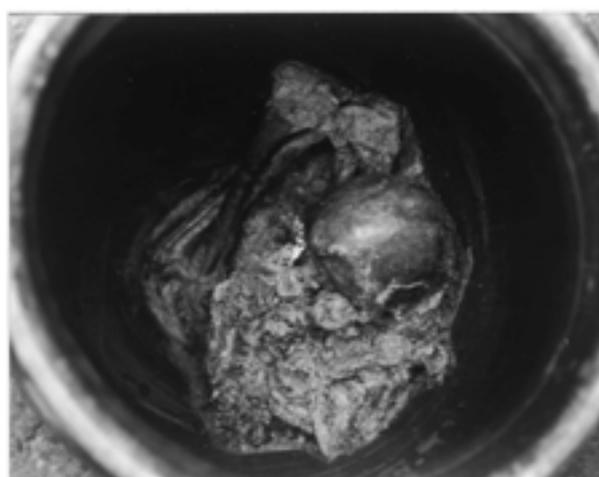
図版18 原田第40号墓地 人骨出土状態 ⑧



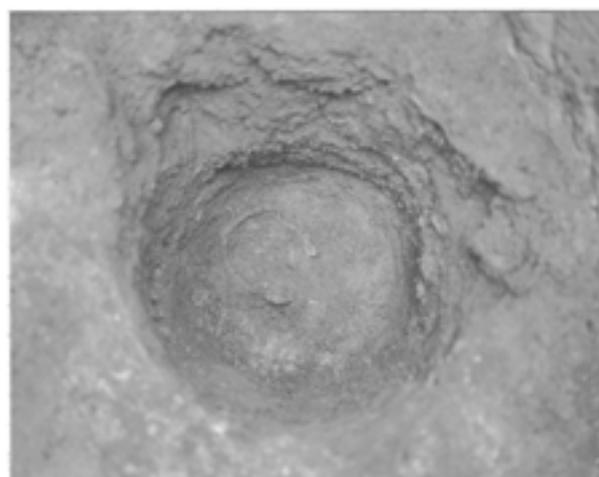
第73号墓 人骨出土状態 (南西から)



第74号墓 人骨出土状態 (南西から)



第75号墓 人骨出土状態 (南西から)



第78号墓 人骨出土状態 (南西から)

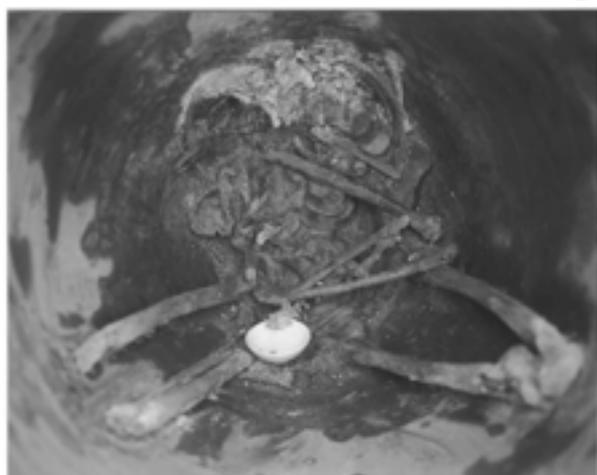


第83号墓 人骨出土状態 (東西から)



第84号墓 人骨出土状態 (南西から)

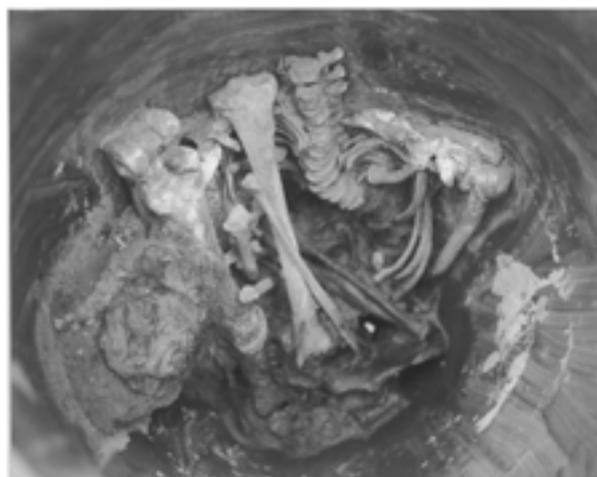
図版19 原田第41号墓地 人骨出土状態 ①



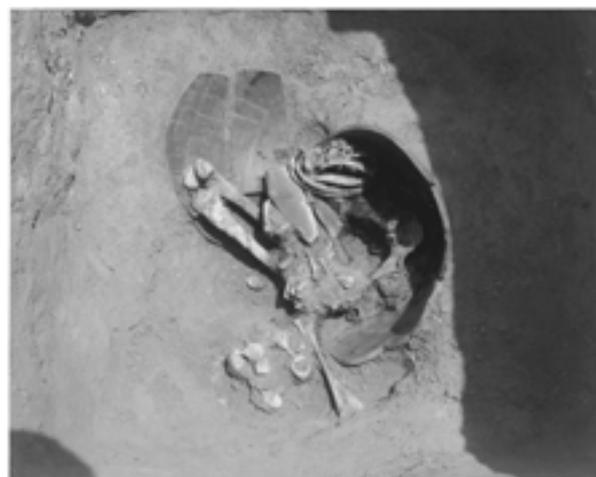
第1号墓 人骨出土状態 (南西から)



第2号墓 人骨出土状態 (南西から)



第3号墓 人骨出土状態 (西から)



第6号墓 人骨出土状態 (西から)



第7号墓 人骨出土状態 (西から)

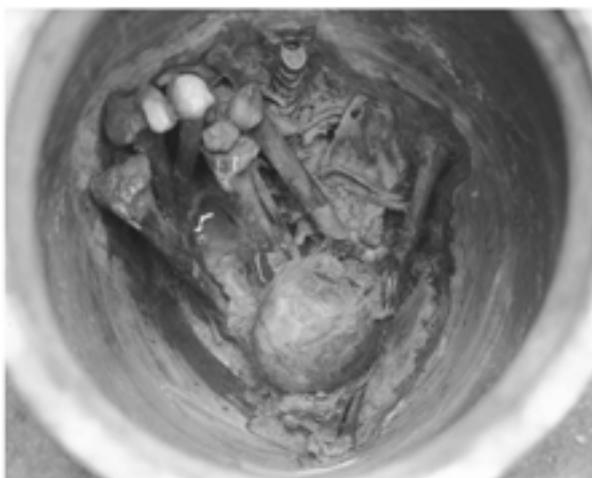


第8号墓 人骨出土状態 (西から)

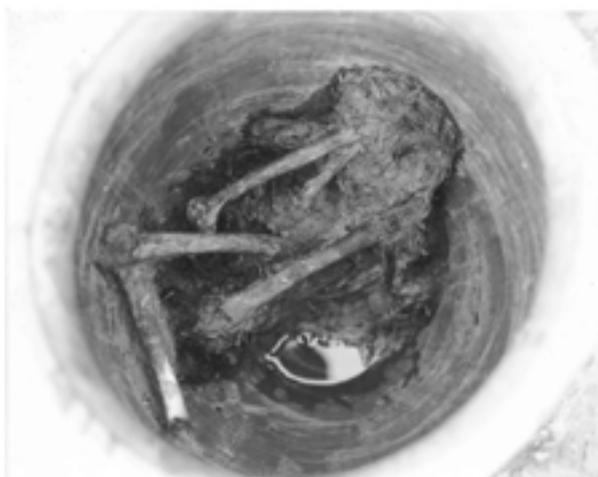
図版20 原田第41号墓地 人骨出土状態 ②



第9号墓 人骨出土状態 (西から)



第10号墓 人骨出土状態 (西から)



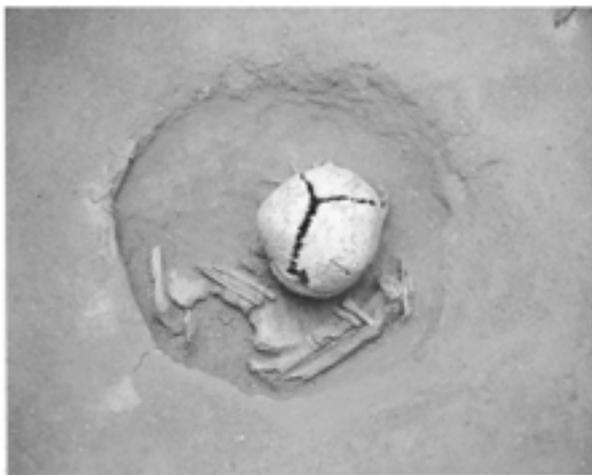
第11号墓 人骨出土状態 (西から)



第12号墓 人骨出土状態 (北西から)



第16号墓 人骨出土状態 (西から)

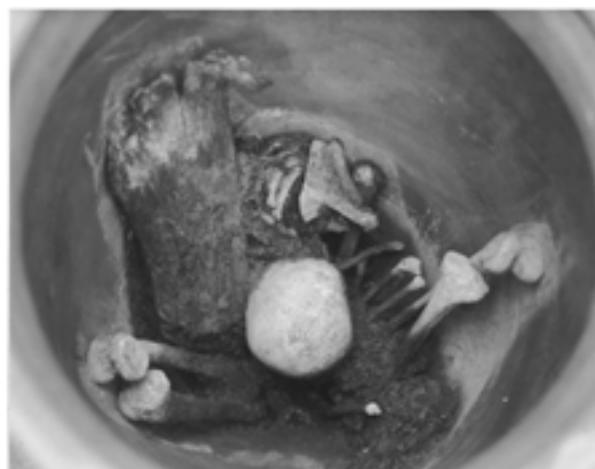


第17号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版21 原田第41号墓地 人骨出土状態 ③



第18号墓 人骨出土状態 (西から)



第19号墓 人骨出土状態 (西から)



第20号墓 人骨出土状態 (西から)



第21号墓 人骨出土状態 (西から)



第22号墓 人骨出土状態 (西から)



第23号墓 人骨出土状態 (西から)

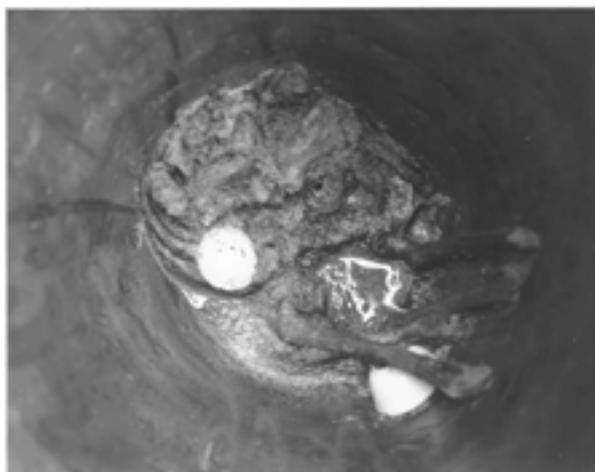
図版22 原田第41号墓地 人骨出土状態 ④



第24号墓 人骨出土状態 (西から)



第26号墓 人骨出土状態 (西から)



第27号墓 人骨出土状態 (西から)



第28号墓 人骨出土状態 (東から)



第29号墓 人骨出土状態 (西から)



第31号墓 人骨出土状態 (北東から)

図版23 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑤



第33号墓 人骨出土状態（西から）



第34号墓 人骨出土状態（南西から）



第35号墓 人骨出土状態（北西から）



第36号墓 人骨出土状態（西から）

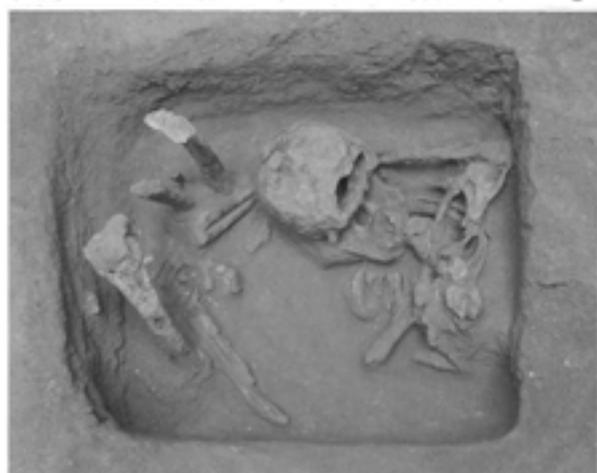


第37号墓 人骨出土状態（西から）



第38号墓 人骨出土状態（西から）

図版24 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑥



第39号墓 人骨出土状態 (南から)



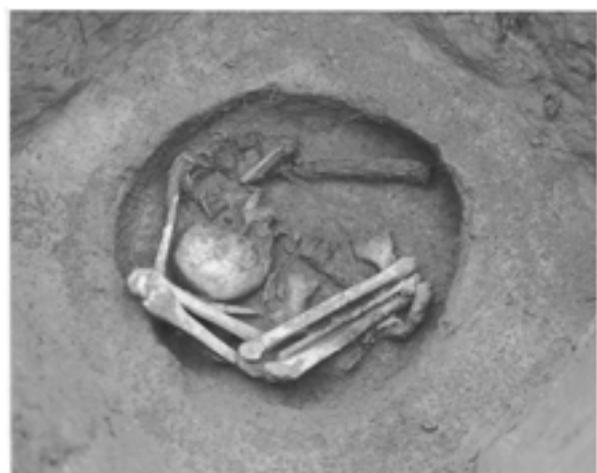
第40号墓 人骨出土状態 (西から)



第41号墓 人骨出土状態 (南東から)



第42号墓 人骨出土状態 (西から)



第43号墓 人骨出土状態 (北西から)



第44号墓 人骨出土状態 (西から)

図版25 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑦



第47号墓 人骨出土状態 (西から)



第48号墓 人骨出土状態 (東から)



第49号墓 人骨出土状態 (西から)



第51号墓 人骨出土状態 (東から)



第52号墓 人骨出土状態 (東から)



第53号墓 人骨出土状態 (北西から)

図版26 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑧



第54号墓 人骨出土状態 (西から)



第55号墓 人骨出土状態 (北東から)



第56号墓 人骨出土状態 (東から)



第57号墓 人骨出土状態 (北東から)



第58号墓 人骨出土状態 (南から)



第59号墓 人骨出土状態 (西から)

図版27 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑨



第60号墓 人骨出土状態 (南東から)



第61号墓 人骨出土状態 (北から)



第62号墓 人骨出土状態 (西から)



第63号墓 人骨出土状態 (北東から)



第64号墓 人骨出土状態 (西から)



第68号墓 人骨出土状態 (北東から)

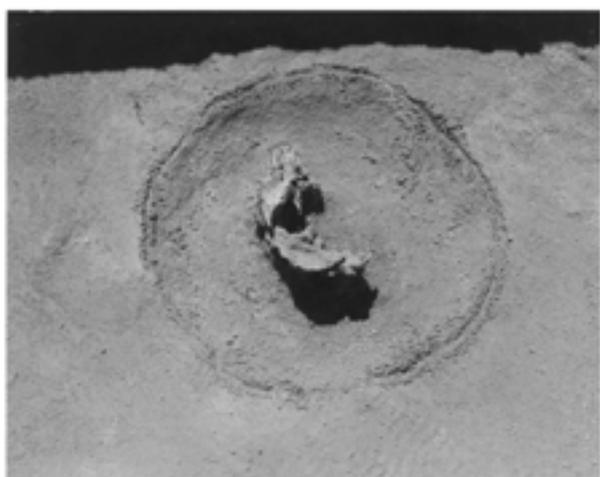
図版28 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑩



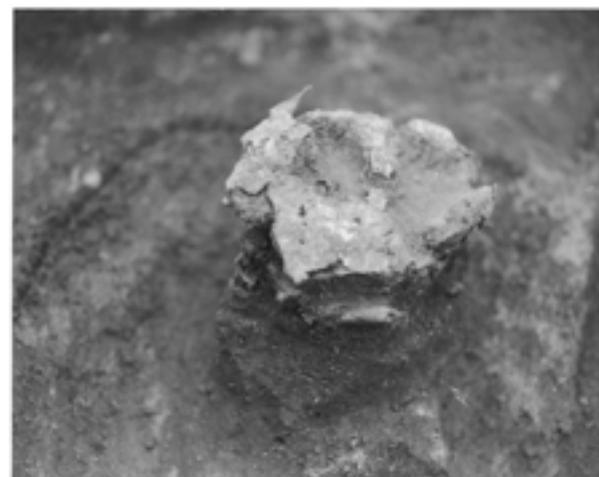
第69号墓 人骨出土状態 (西から)



第70号墓 人骨出土状態 (西から)



第73号墓 人骨出土状態 (東から)



第74号墓 人骨出土状態 (北から)



第75号墓 人骨出土状態 (西から)



第76号墓 人骨出土状態 (南西から)

図版29 原田第41号墓地 人骨出土状態 ⑩



第78号墓 人骨出土状態（南西から）



中橋孝博氏人骨調査作業風景



土肥直美氏人骨調査作業風景



報告書抄録

ふりがな	はるだだい1・2・40・41ごうぼち げかん							
書名	原田第1・2・40・41号墓地 下巻							
副書名	原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	3							
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名	中橋孝博・土肥直美・森山栄一							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号							
発行年月日	平成18年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はるだだい1ごうぼち 原田第1号墓地	福岡県 筑紫野市 大字原田	402176		33° 27' 18"	130° 32' 39"	1989. 2~1991. 7	148	原田駅前 土地区画 整理事業
はるだだい2ごうぼち 原田第2号墓地	大字原田			33° 27' 18"	130° 32' 37"	1989. 2~1990. 12	67	
はるだだい40ごうぼち 原田第40号墓地	40番地			33° 27' 23"	130° 32' 23"	1988. 11~1989. 10	403	
はるだだい41ごうぼち 原田第41号墓地	42番地			33° 27' 22"	130° 32' 21"	1988. 12~1989. 10	349	
	2615番地							
	2628番地							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
原田第1号墓地 原田第2号墓地 原田第40号墓地 原田第41号墓地	墓地	江戸 明治	墓石 土葬墓	陶磁器 銭貨 煙管 数珠玉 かんざし 他	人骨 169体 義歯 3 義眼 1 頭髮 21 (中巻の抄録訂正)			

原田第1・2・40・41号墓地 下巻

—原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告3—

筑紫野市文化財調査報告書 第90集

平成18年12月28日

発行 筑紫野市教育委員会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号

印刷 協業組合 クローバー工業写真センター

〒812-0016 福岡市博多区博多駅南1丁目11-18

